

# カーク・ターナーの憂鬱

ノーマン（移住）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

物語の始まりは宇宙暦720年。

自由惑星同盟の田舎も田舎、惑星エコニアから始まります。

本来なら大規模な緑化が行われるはずだったエコニアですが、軍備増強のために予算が削減され、惑星の大部分は荒野のまま。お詫びかのように捕虜収容所が新設されましたが、緑化を前提に入植した住人たちは、自分たちの将来に前向きにはなれずにいます。

そんな惑星エコニア唯一の都市、エコニアポリスに数える程しかない商店のひとつで働く少年。カーク・ターナー。彼にはあいまいなながらもある島国で宰相にまで上り詰めた記憶がありました。

原作で自由惑星同盟の敗戦が確定したバーラトの和約が成立する80年前。

彼の人生の歩みは宇宙の歴史にどんな影響を及ぼすのか？

楽しんで頂ければ幸いです。

転生者の前世の人物像に関して予備知識は、ウィキと、某元都知事が執筆した『天才』を読んだレベルです。もしかしたらこの作品の読者の中に、生前お世話になった方もおられるかもしれませんが。作者としてはすごい方だと認識しての人選ですので、にわかファンの至らぬ点に関しては笑って頂ければ幸いです。

この小説はらいとすたっふるルール2015年改訂版に従って作成しています。

※2020/6/16 12:00〜第一話公開予定です。ランチ

のお供にどうぞ！

※告知の意図もあつて第一章を曉さんでも公開しています。

# 目次

立志 宇宙暦720年〜729年

第1話 田舎も田舎 | 1

第2話 今世も今世 | 6

第3話 別れ | 12

第4話 オーナーの悩み | 17

第5話 出立 | 22

第6話 イーセンブルク校 | 28

第7話 友人 | 33

第8話 雇用主と宇宙 | 39

第9話 商売の都 | 44

第10話 ドラクールでの再会 | 50

第11話 緊張の商談 | 56

第12話 苦渋の決断 | 62

第13話 その頃 トーマス・ミラー | 67

第14話 その頃 フレデリック・ジャスパール | 72

第15話 テルヌーゼン | 77

第16話 値踏み | 82

第17話 値付け | 88

第18話 中の上の志 | 94

第19話 青春 | 99

第20話 合格発表 | 106

第21話 シミュレーター | 113

第22話 その頃 船長とオーナー | 119

第23話 ダンスパーティー | 124

第24話 夢見た漢

第25話 現実を知る漢

第26話 隠される真実

第27話 新しい夢

第一章 登場人物

融和と排除 宇宙暦730〜736年

第28話 守るべき存在

第29話 誘因

第30話 初陣

第31話 有効活用

第32話 ある代議士のボヤキ

第33話 ある老夫婦の涙

第34話 ある捕虜の選択

第35話 役得

第36話 叱責される者たち

第37話 年貢の納め時

第38話 贖罪

第39話 年貢の取り立て

第40話 後始末

第41話 進む融和

第42話 団らん

第43話 捨てた者、残った者

第44話 老提督との邂逅：黒幕

第二章 登場人物

漸減戦 宇宙暦736〜738年

第45話	タイロンの志	267
第46話	複雑なバスケス	273
第47話	ダゴンでの年末	278
第48話	サラブレッド	283
第49話	ひとつ一つ	289
第50話	生餌	294
第51話	不良品の処理	300
第52話	バスケスのやけ酒	305
第53話	参謀長	310
第54話	母親孝行	315
第55話	焦燥（ファイアザード会戦）	321
第56話	格差（ファイアザード会戦）	326
第57話	審判（ファイアザード会戦）	332
第58話	結末（ファイアザード会戦）	338
第59話	老提督との邂逅：僚友（前編）	344
第三章	登場人物	350
前哨戦	宇宙暦738～742年	
第60話	正規艦隊司令たち	361
第61話	防衛体制	367
第62話	鬼門	373
第63話	動き出す悪意	379
第64話	人事異動（同盟）	384
第65話	人事異動（帝国）	389
第66話	キャリア	395
第67話	青年たち	402

第68話	名門の暴走	408
第69話	謀略	414
第70話	英雄の従卒	421
第71話	杖と車椅子	426
第72話	覚悟	431
第73話	始まり(ドラゴニア会戦)	436
第74話	戦場へ(ドラゴニア会戦)	442
第75話	斜線陣(ドラゴニア会戦)	449
第76話	鬼教官の講義(ドラゴニア会戦)	455
第77話	老提督との邂逅：僚友(後編)	461
第四章	登場人物	469
決戦	宇宙暦742～745年	
第78話	ターナー邸とタイロン	482
第79話	新たな懸念	488
第80話	掃除の始まり	494
第81話	続・青年たち	500
第82話	つかの間の後方	505
第83話	メテオライト	510
第84話	コーヒーと紅茶	517
第85話	候補生とマニア	523
第86話	動き出す帝国	528
第87話	動き続ける同盟	534
第88話	休息地	542
第89話	燃やす者 くべる者	548
第90話	老提督との邂逅：予定外のキャリア	554

第91話	老提督との邂逅：歴史講師の見解	560
第92話	マフィアの流儀（第二次ティアマト会戦）	565
第93話	帝国の意地（第二次ティアマト会戦）	571
第94話	窮地（第二次ティアマト会戦）	577
第95話	決壊（第二次ティアマト会戦）	582
第96話	老提督との邂逅：呪縛	591
第97話	老提督との邂逅：十字架	597
第五章	登場人物	604
最終章	日はまた昇る 宇宙暦745～804年	
第98話	老提督との邂逅：旅立ち	621
第99話	老大佐との邂逅：拝命	630
第100話	老大佐との邂逅：出会い	635
第101話	老大佐との邂逅：心残り	641
第102話	生還者の義務	646
第103話	因果	653
第104話	応報	661
第105話	策謀の報い	667
第106話	害虫処理	672
第107話	経済危機	679
第108話	内乱の始まり	687
第109話	帝国領侵攻	692
第110話	和平	700
第111話	それから（最終話）	706



立志 宇宙暦720年〜729年  
第1話 田舎も田舎

宇宙暦720年 帝国暦411年 4月上旬

惑星エコニア 捕虜収容所

カーク・ターナー

「坊主、相変わらず頑張ってるな。感心感心」

「そういうなら、帰りに何か買っていつてよ。今日はうまそうなりンゴが入荷してたし。おっちゃん、リンゴが好物だっただろ？」

「坊主にはかなわねえな。この荷下ろしが終われば、今日の予定は終わりだ。帰りの楽しみにしようか。それにしても坊主は大したもんだ。将来が楽しみだな」

「毎度あり！って、同盟の中でも田舎も田舎だよ。惑星エコニアはさ。正直、俺の家より収容所の方が小きれいな位だし。この星から出ないことには、明るい将来なんてねえ」

「違いないな。そういう意味では俺たち捕虜とあんまり変わらないのかもしれない」

少し悲しげな表情をしながら俺の頭をなでるおっちゃんと、同じような表情で頷く周囲の大人たちは、捕虜を表す同じ色の作業着を着ている。彼らは、惑星エコニアが属している自由惑星同盟と戦争中である銀河帝国の軍人たちだ。もともと、彼らは彼らで色々大変らしい。

望郷の念はあるようだが捕虜となった以上、帰国したら帰国したで最悪処罰される可能性があるらしい。貴族様ならともかく、ここに収容されているのは佐官以下の軍人だ。大した後ろ盾も持たない彼らからすると、帝国では叛徒とされている自由惑星同盟に降伏したこと自体、下手すると処罰の対象らしい。

俺からすると、部下をそんな状況に追いやった上司の責任だと思うけど、自分の責任を部下に被せる上司というのは、どんな組織にもいるらしい。そんな彼らにとって、まだ10歳ながら商店で働く俺は帝国に置いてきた息子だったり、弟だったりを想起する存在のようだ。

学ぶだけなら帝国語は通信教育のカリキュラムで用意されている。ただ実践の場として帝国語を交わし、時に冗談なども教えてくれたのは彼らだ。同盟軍内部では、捕虜の扱いは自軍の二等兵よりはマシななんて言われたりするらしい。

本来予定されていた大規模な緑化事業が中止された惑星エコニアには、目立った産業がない。捕虜とはいえ、作業の対価として多少の金銭を支給されている彼らは、大事なお客様でもある。軍という巨大組織のスタート地点である二等兵より、確かに扱いは良いのかもしれない。なかった。

「カーク。お疲れ様。受け取り伝票だ。ちゃんと確認するように。それにしても、お前、帝国語が上達したなあ」

そんなことを考えながら、捕虜のおちちゃん達と話していると、収容所内の売店を任されているトーマスが中身の入った瓶と一緒に伝票を差し出してきた。

「働き出してから、同盟語より帝国語の方が話す時間が長いからね。頂きます！」

照れ隠し半分で伝票を受け取りつつ、差し入れのミルクでのどを潤す。俺より4歳年上のトーマスは、商店勤めを始めて以来の仲だ。仕事を一から教えてくれた彼は、俺にとって母以外では数少ない頭の上がない人物だ。もつともまだ14歳とは言え、誠実で偉ぶるところがなく、年下の俺を一人前として扱ってくれる。

あやふやな前世の記憶も合わせると、初等教育の教師をすれば、さぞかし好かれるだろうと思わせる人物だった。あいまいながらも前世の記憶がある俺にとって、何かと心から称賛してくれる彼との時間は、気恥ずかしいものになることが多かった。

「将来かあ。カークはまだ10歳なんだから……。とも言ってられないか。学費が用意できないとなると、身を立てるには見習いとして商船に乗るか、軍に志願するしかない。人文系の奨学金はほぼ下りないし、理工系の枠は、ハイネセン系でほぼ独占状態だしね」

経済的には首都星系であるバークトと比較するまでもない地方星系の多くは、戦争を理由に大した開発援助も受けられず、弱者のまま

据え置かれている。地方星系の若者が世に出ようと思つたら商船にのるか軍に志願するくらいしか道がないのが実情だ。

「捕虜がアドバイスするのも何だが、軍はあんまりお勧めしないぜ。坊主はともかく、店長はなあ。誠実すぎるから、あほな上司にでも当たつたら使いつぶされちゃうんじゃないか？もつとも、帝国みたいにお貴族様がない分、そういうことも少ないのかもしれないが」

「誉め言葉として受け取っておきますよ。良さそうなりンゴが入ったんです。帰りに見ていってください」

積み下ろしが終わった頃合いで、飲み終わったミルクの瓶をトーマスに渡し、運転してきた配達車に乗り込む。トーマスとおっちゃん達が手を振るのに応えながら、ハンドルをこの惑星唯一の都市、エコニアポリスへ向けた。

荒涼とした荒地地を、土埃を上げながら進む。緑化計画が実行されていけば、幹線道路としてしっかり舗装されていた未来もあっただろうが、実際は土壌硬化剤で簡易舗装されただけだ。これがそれなりの星系なら自動運転システム用のセンサーを埋め込み、最低でも2車線の幹線道路になっているだろう。

「もつとも、ろくに投資もされないからこそ、俺みたいな子供にも仕事があるんだろうけど」

思考が漏れるように独り言をつぶやいてしまった。幸い今は車内に一人きり。自動車特有のエンジン音だけが返事をするかのように響く。

「インフラ整備が追い付かないせいで、星間国家の時代にも関わらず、内燃機関だもんなあ」

個人的には、前世で聞きなれたエンジン音を気に入っていたし、前世では夢の施設だった核融合発電所も実用化されているとはいえ、入植が開始されたばかりの惑星では、そんな莫大な電力ニーズがあるわけもない。適正規模の投資だと言われればそれまでだが、電力需給に大きな余剰がない以上、大規模資本の投資先に選ばれることもない。「身を立てる為には、商船に乗るか、志願するかしかないのが現実なんだよなあ」

そんな結論をつぶやいた頃合いで、車はエコニアポリスのメインストリートを進み始めた。捕虜収容所がもう少し埋まるようになれば変わるのかもしれないが、ポリスというよりタウンという印象の街並みが目に入る。

しばらくすると勤め先である井上商会の看板が目に入る。ウインカーのスイッチを入れつつ減速し、店舗の脇道を通して、店舗裏の倉庫近くに停車する。エンジンにロックをかけて伝票を片手に倉庫へ向かうと

「おう！オレンジ。お疲れさん」

「オレンジことターナー。ただいま戻りました」

明日の出荷作業をしている井上オーナーが笑顔で声をかけてきた。オーナーに伝票を渡せば、今日の仕事は終了だ。オーナーはいつも俺をオレンジと呼ぶが、それも彼の一家言によるものらしい。というのも、社会で成功する第一歩は、覚えてもらうこと！という信条があるらしく、星間国家でも珍しいオレンジの髪にエメラルド色の瞳という、自分では最近やつと見慣れ出した俺の容姿を、褒める意味で、こう呼んでくれているとの事だ。

「収容所がもう少し埋まってくれば、良い商売になるんだがなあ。まあ、おいしい商売はそうは転がってないからなあ。オレンジ、訳あり品を詰めといたから、おつかさんにもって帰ってやんな」

前世で見慣れた黒髪・黒瞳のオーナーが指をさす先には、自転車の荷台にくくれる位のかごがある。

「いつもありがとうございます。母さんも喜びます」

「遠慮することはないぜ。こつちも貰う物もらってんだからよ」

そう言いながら、オーナーは倉庫の奥へ戻って行った。かごを手にとると倉庫わきの自転車にかごを括り付け、家路につく。うちはもともと緑化事業を見越して農場をやるつもりだったので、エコニアポリスの郊外にあるが、それでも自転車で15分もかからない。

自転車を漕ぎながら、俺は井上商会を選んで正解だったと改めて思っていた。井上オーナーは、前世の記憶でよく接していた人々と、よく似た資質を持っていた。うそや駆け引きが苦手な善良なのだ。

緑化事業の停止を受けて、それを見越して入植した家族にはいろいろな補助金が付けられている。俺を雇うと人件費の補助や法人税の減免措置があるので、勤めに出ようと思った時、エコニアポリスにある6個の商会からオファーがあった。

ただ、人件費の補助や法人税の減免の話を8歳の子供でも分かるように説明してくれたのは、井上オーナーだけだったし、給与はもつと良い商会もあったが、家計を助けたいという俺の動機に対して、月給だけじゃなく、商品の中で正規ルートでは販売が難しい、いわゆる訳あり品を無料で融通する提案をくれたのは彼だけだ。

商人としては甘いところもあるのかもしれないが、勤め先のオーナーとしては十分満足だった。それに、そういう話は、ある意味、小さなコミュニティであるエコニアポリスではすぐに広まる話だ。うまくごまかして格安で雇おうとしたある商会は、暗黙の不買運動を起こされ、廃業に追い込まれていたりもする。そういう意味では、小さなコミュニティの商会主としてはむしろ資質があるのかもしれない。なかつた。

そんなことを考えているうちに、今世の実家が近づいてくる。

玄関わきに自転車を止め、かごを片手に

「ただいま〜」

と帰宅の挨拶をした。

## 第2話 今世も今世

宇宙暦720年 帝国暦411年 4月上旬

惑星エコニア ターナー家

カーク・ターナー

「カーク、おかえりなさい。毎日済まないわね」

「良いんだよ母さん。エコニアじゃ、俺くらいからみんな働いてるんだから」

井上商会からの差し入れがまったかごを、アイランドに置きながら、今世の母親に伝える。俺のオレンジの髪は母さん譲りだ。でも長さは俺より少し長い程度。女性からするとショートカットってやつかな。こんな荒涼とした星じゃなければ、他の髪型も候補になるんだろうけど。それなりの土埃にさらされるエコニアの女性陣の髪は、基本短めだった。

「晩御飯まで少しかかるから、さっぱりして部屋でゆっくり待って頂戴。出来たら声をかけるから」

「そうするよ」

キッチンに向かう母の背中に声をかけながら、洗面所へ向かう。サックと来ていた服を脱いで、シャワールームへ。もう慣れてしまったが、入植が始まって間もないエコニアでは、湯船までは用意されていない。物心ついた時、日系を思わせる名前はあるのに、入浴の文化は無くなったのかと、絶望しかけた。

ただ、首都星系をはじめとした経済的に豊かな星系では、ちゃんと入浴の文化はあるらしい。エコニアを飛び出したいと思う要素の一つに、風呂に入りたいというのがあるのは、俺が前世の記憶持ちだからだろうか。

もつとも、風呂がないのも、エコニアへのインフラ投資が少ないことが影響している。ターナー家を含め、エコニアのほとんどの物件はオール電化でガスが引かれていない。シャワーから出てくるお湯も電気で温めたものだ。そこまで出来るなら湯船も用意してくれとも思うのだが、前世で言う追い炊き機能をメンテナンスフリーで実現す

るのが難しかったらしい。

自由惑星同盟はもともと帝国の収容所から脱出し、一万光年を旅した人々が建国した。建国時の人口はわずか16万。当然、国家としてのマンパワーは慢性的に不足していたから効率重視が基本だ。風呂のためにガスも引くくらいならオール電化で済ませるというのも、同盟らしいといえはらしかった。

さつさとシャワーで汗を流し、室内着に着替えて自室へ向かう。階段を上がって右手の手前のドアが、俺の部屋だ。右手奥の部屋は空室。俺の弟か妹が生まれれば、その住人になるかもしれない。左手のドアはメインの寝室。両親の部屋だ。

自室に入り、年相応の学習デスクに座ると、タブレットに充電コードを刺してから、昨晚の続きから通信教育の動画を見始める。このタブレットも、政府の補助金で支給されたものだ。

もつとも、経済的にまともな星系では、前世よろしく、年齢に応じた学校が用意されている。エコニアがもう少し経済発展すれば、初等学校くらいは設立されそうだが、前にも言った通り、世に出るために一定数以上の若年層はエコニアの外に活路を求めている。初等学校の設定が成るまでに、必要とされる時間は、想像以上に長いものになるかもしれない。

とは言え俺にとつては悪いことばかりではなかった。前述のとおり、経済規模に見合うインフラ投資のお陰で、若年層というより、子供と言っても良い年齢の俺でも働ける。建国当初は子供もマンパワーにせざるをえなかったから、自動車をはじめ、重機なども女性や子供でも扱えるように作られている。

通信教育が充実しているおかげで、自分の進捗に合わせて学習できるし、普通免許をこの年齢でとれたのも、通信教育のお陰だ。前世で関わったこともあり、重機の免許も取得済みだ。

最も、普通免許以外の資格で稼げるのは、満15歳を超えてからだ。もつと稼ぎたい俺からすると、面倒でしかない商習慣だが、確かに資格があるとしても、建設現場で子供が重機を扱うのは、作業員たちの心情的に不安があるだろう。そして、弁護士や会計士といった資格に

関しては、学習はできるものの、専門教育機関への在籍が資格取得の条件になっている。

そういう意味では、何とか自己学習を続けながら、15歳までにある程度資格を取り、それで身を立てる道も候補にはなりえる。ただ、この道を選んでもエコニアに留まるのは良い選択肢ではないだろう。

消費の面でもエコニア経済に大きく寄与するであろう捕虜収容所だが、軍という組織にいた捕虜の面々は、各分野のエキスパートでもある。つまり重機を扱える人材も当然いるだろうし、彼らを捕虜価格で使える以上、かなりシビアな商売になるだろう。

となると、16歳になるのを待つて軍に志願するか？ただ、士官学校を出ずに入隊すると二等兵からのスタートだ。冷戦状態ならともかく、自由惑星同盟は現在帝国と絶賛戦争中。士官学校卒ならともかく、二等兵として従軍すれば、上司運が悪ければ即戦死だろう。となると、何とか商船に潜り込んで仕送りするのが一番良い選択だろうか？

ただなあ、商船乗りにも暗黙の学閥みたいなものがある。同盟系の資本下ならハイネセン記念大学、フェザン系の資本下ならフェザン商科大を出ていないと、経済界では二流扱いされる。

「明文化された貴族はいないけど、経済的な格差で、貴族に近い階層はいるんだよなあ」

捕虜収容所でのおっちゃんたちとの会話を思い出し、俺は思わずつぶやいてしまう。

自由惑星同盟で身を立てるなら、軍人としては士官学校、官僚としては国立自治大学、経済界ならハイネセン記念大学を卒業しないと話にならない。ところが、この3校の入学者は、ほとんど首都星系であるバーラト出身者が占める。

続くのはシロンの出身者だが、あそこは帝国からの亡命者たちが、効率重視で嗜好品が少なすぎた同盟国内で、帝国流の嗜好品を生産し始めたバックボーンを持っている。経済的には恵まれていたが、40年ほど前に成立したフェザンが、帝国から嗜好品を輸入し始めたせいで、かなりの打撃を受けている。



勢力を伸長しつつあったシロンを中心とする亡命系の勢力を抑えるために、バーラト系の政治家が、率先してフェザーンの成立に関わった。なんて話もあるくらいだ。あらゆる業界でバーラト系とシロン系はよく言って冷戦状態らしい。

話を戻そう。結局、政治・行政・経済・軍の意思決定に影響力を持つる層は、ほとんどバーラト星系を軸にした閥に独占されている状況だ。そして物心つく頃から身体を動かしながら働いている地方星系から、いわゆるブルーワーカーとして若者が流出している。

そして軍だつたり商船だつたりの、死亡するリスクの大きい分野を担うわけだ。地方星系って不満を持たないんだろうか？前世の島国ならともかく、そこと安保を結んでいた当時の最強国家なら暴動ものだけだなあ。んで、少しでも自助努力で豊かになるうものなら潰されそうになる。これって、やつてゐることは歴史のカリキュラムに出ている崩壊した地球政府がシリウス政府にしていたことと変わらないよな。

「カークーご飯できたわよ〜」

そんなことを考えながら通信教育の動画を見てみると、母さんからお声がかかった。思考するのはこの辺にして、動画を停止し、階下に向かう。

ダイニングに入ると、料理の仕上げをしているのであろう母の背中が目にはいる。アイランドの右側下段の引き出しからランチョンマットを3枚取り出し、小脇に挟みながら冷蔵庫からお茶入りのガラスポットを取り出す。

ダイニングのいつもの定位置と、その間にランチョンマットを敷き、間に敷いたランチョンマットに冷えたガラスポットを置く。それが終わるとキッチンにとつて返し、グラス・ナイフ・フォークをそれぞれ2つ手に取り、ランチョンマットの上に整えた。

「ナイスタイミング〜 完成よ」

セットし終えた頃合いで、母さんの楽し気な声が響く。メインの盛りられた2枚の皿を運ぶ母さんを横目に、俺はトースターで温められたブレットを小さめのかごに盛り、母さんと俺の定位置の間に置かれた

ガラスポットの隣に置けば、夕食の準備完了だ。

「カーク。しっかりと食べてね」

「うん。いただきます」

そうして母と2人の夕食が始まったわけだが、俺には父親がいないわけではない。今は空席ではあるが、二人で囲んでいるこのテーブルにも、当然父親の定位置がある。母から見て左手、俺から見て右手の、いわゆるお誕生日席が、本来なら父の定位置だった。

「カーク？父さんにも色々事情があるのよ。あんまり悪く思わないでね」

無意識に視線が父の定位置に向いていたのだろうか？母が少し悲し気に話しかけてくる。俺が事情があるのはわかっていると応える

と

「ありがとう。カークにはお願いばかりでごめんなさいね」

と返してきた。前世の記憶持ちの俺からすれば、父が陥った事情も良く理解できている。ただ、母からするとあくまで10歳の少年だ。幼い我が子が家計の足しにすべく働いているのに、大黒柱であるはずの父が、働きもせず、ましてや団らんのあるはずの夕食にすら同席しないのは、心苦しいのだろう。もともと俺からすると、今世もかあという感想しかないのだが。

両親たちは、もともとはエコニアのようなド田舎ではなく、もう少しまともな経済状態の星系の出身だ。そんな二人の人生を狂わす出来事が起きたのは、俺が5歳の時。多産推奨の同盟において一人目も落ち着いたし、二人目も……。みたいな状況で、大規模緑化事業を前提としたエコニアへの入植話が舞い込んだのだ。

結婚の際に、将来は常に家族と一緒にいられる農場を持ちたいという母の夢を聞いていた父は、当時のターナー家の貯蓄と、両親の退職金をつぎ込む形でこの話に乗った。ところが、いざという段階になって、宇宙艦隊の増設案が浮上し、それにはじき出される形で緑化事業の予算は削られてしまった。

今まで積み上げてきた物を失った父は、そこで心が折れてしまったようだ。最も、心が折れてしまったのは父だけではない。トーマスの

父親もそんな感じだし、俺の父親世代は昼間から酒場にいる人が多い。母からしても自分の夢のために父がすべてをつぎ込んだこともあり、強く出れずにいるようだ。

とはいえ多少はバーラト系の政治家連中も良心があったらしい。緑化事業の中止をした代わりに、初期の入植家庭には開拓助成金を出している。幸か不幸か、そのせいで父親世代は働かなくても食べていけるだけの収入はあった。ただ、その助成金は父親の飲み代になるし、母は、助成金支給の最低条件を満たすために、よく言っても荒野の片隅を細々と耕しながら生活している。

入植第一陣である俺を雇用すると、様々な助成がつくのもそんな背景がある。ただなあ。父親からすれば、財産を吸い取ったうえでの棄民政策としか思えないだろう。

助成金がなければ破綻する経済状態に追い詰め、なんとか子供を育てたとしても、身を立てようと思えば、命の危険がある軍か商船乗りになるしかない。それなりの学があれば尚更、自分の状況に絶望してしまうのも無理はなかった。

でもさ、前世でも俺の父は事業に失敗して結構厳しい経済状況だったんだ。こんな所まで前世を踏襲するかねえ。もっとも、10歳の若造でも稼ぐ手段がある今世は、まだマシかもしれない。悪戦苦闘しながら生計をたてる母親を微力ながらも支えることができるのだから。

### 第3話 別れ

宇宙暦722年 帝国暦413年 9月末

惑星エコニア 捕虜収容所建設現場

カーク・ターナー

「おい坊主、もう少しクレーンを上げてくれ」

「了解、おっちゃん」

現場監督役のおっちゃんの指示を受けて、俺は操作を任されたクレーンの操作を慎重に進める。おっちゃんが右手で停止を指示する合図を出すと同時に、クレーンの動きを止める。釣りあげられた資材を定位置に固定する捕虜を表す同じ色の作業着を着た大人たちを横目に、俺はこの2年の事を思い返していた。

井上商会の捕虜収容所への配送を担当しているのは今でも変わらないが、今では捕虜収容所の建設に、フルタイムではないが重機のオペレーターとして参加していたりする。きっかけは捕虜たちのまとめ役でもあるおっちゃんが年齢制限にはひっつかかるが、俺が重機オペレーターの資格を持っている事を聞きつけたことだ。

おそらくネタ元は捕虜収容所内の売店の店長、トーマス・ミラーだろう。ただ、彼は善良な性格だし、俺の事を話したにしても、良かれと思つての事だろうから特に責めたりはしていない。

1デイナールでも稼ぎたい俺にとつてはありがたい話だったが、この状況も様々な偶然が生んだ産物だった。人の縁はまず覚えてもらうことから始まると言い募っていた井上オーナーのしたり顔が、少しうざかったが、彼も人生の先輩だ。これも人生の先達の教えが正しかったという一例なのかもしれない。

そもその大元は、軍が少しでも軍備増強に予算を割きたかった事に始まる。収容所の第一工期以降、軍は収容所の建設自体を、技能を持った捕虜を活用する形で進めた。とはいえ、捕虜全員が建設業界の技能を持っている訳ではないし、本来なら設営部隊が捕虜になる可能性は低い。

そして叛徒とみなしている以上、同盟語を必修科目にもしていない

かったので、通信教育で学ぶためには、まず同盟語の学習から始めなければならなかった。

そんな中で、白羽の矢が立ったのが俺だった。重機オペレーター資格の法定年齢である15歳に達していなかったのも、むしろプラスに働いた。というのも法定年齢に達していれば、最低賃金に関する法律も当然適用される。そうになると、捕虜の活用を前提とした予算計画では当然人件費がオーバーする訳だ。そういう状況を踏まえると法定年齢に達しておらず重機オペレーターの資格を持つ俺は、最適な人材だった。

俺としても、家計を助けるために1デイナールでも稼ぎたい背景があったので、捕虜基準とはいえ、報酬がもらえるのはありがたかった。そして、持つべきものは話の分かる上司だ。

井上オーナーの計らいもあり、去年から収容所への配達は朝一で行い、重機オペレーターとして夕方まで働いてから、当初持ち帰っていた納品伝票だけでなく、夕方に確認した在庫伝票も併せて持ち帰る形にしてくれた。

「これで収容所の売店の販売効率が多少は上がるからオレンジは気にするな！」

なんて井上オーナーは言ってくれたし、俺がおっちゃん達と作業することで売店の売り上げアップが見込めた事もあっただろう。でも変に恩に着せず、気持ちよく体制を整えてくれたオーナーには、いつか恩返しをしたいと思っている。

「よし、キリが良いし今日はここまでにしよう。オーナーの心意気で、今日は坊主がビールを多めに納品したそうだ。坊主の顔を立てる意味でも、自分へのご褒美って意味でも、一本位はビールを飲んで英気を養ってくれ。丁度、給料日でもあるしな」

監督役のおっちゃんが声を上げると、作業に参加していた大人たちがうれし気に応じた。収容所では3食提供されるが、嗜好品は別枠だ。酒ももちろん別枠だし、捕虜の中には収容所外の労働で蓄えを作り、実際に家庭をもった者も出てきている。

給与面や勤務体制の兼ね合いから、同盟軍の二等兵ではなかなか家

庭をもつことは出来ないだろう。そういう意味では、捕虜の待遇が二等兵よりマシという笑い話から実例が現れた形だ。この時点で、俺は何があるかと、同盟軍の二等兵にはなるまいと心に決めた。

もともと地方星系の生き血を吸うようなバーラト系には思うところがあつたし、戦時とはいえ、異を唱えない地方星系の住民たちにもイラ立ちを感じている。いくら戦時とはいえ、ここまで不平不満を我慢するとなると、民主主義を標榜しながら、その実、ファシズム化していたりするんだろうか？

「カーク、お疲れ様。カークのお陰で売店の売り上げも右肩上がりだよ。ハイ、袖の下」

そんなことを考えていると、收容所内の売店を任されているトーマスが、いつものように伝票とミルク入りの瓶を刺しだしてくる。

「ありがたく頂きますとも……。つて、やつとトーマスにもお返しができたと思ってるから、別に気にする必要はないと思うけど……。」

「気にする必要はないよ。もつと威厳なり人徳なりが僕にあれば、言葉だけでも足りるのかもしれない。でもそんなものは僕にはないからね。感謝を表すには言葉だけでなく行動を旨としているわけさ」

「それは良い心がけだね。もつともご利益を散々受けたうえで話だから、評価に対しての客観性は皆無に近いけど」

俺がそう返すと、トーマスはうれし気に笑みを浮かべた後、意を決した表情をした。

「カークは僕の弟分だし、先に話しておくね。実は軍に志願することに決めたんだ。今月でちょうど16歳になるしね」

「えっ。このまま井上商会に勤めるんじゃないの？しかも今更、志願したって二等兵からのスタートだろ？トーマスが二等兵なんて、人材の無駄使いだ。なんで……。」

「うん。実は弟か妹が出来たんだよ。僕の稼ぎを入れても、将来の学費を賄うのは難しい。それに、政府の方針で家系の存続の担保の為に、その世代で志願者がいれば、徴兵順位を下げてもらえるんだ。井上オーナーから航海士見習いの話も貰えたんだけど、仕送りできる金

額とか、僕が志願すれば徴兵順位を下げてもらえるとかさ。色々考えたら軍に志願するのが、今の家の状況だとベストなんだよ」

「やめた方が良いよ。トーマスは俺みたいなお子供にもちゃんと接しちゃうお人好しだし、井上オーナーなんてこんな片田舎の商会だから成立してるけど、首都星系なら一瞬で食い物にされる甘ちゃんだよ。軍に入隊したら無能な上官の命令も聞かなきやだし、トーマスは世渡り下手なんだから戦死しちゃうよ！」

「確かに僕は世渡り下手だからなあ。とは言えもう少し表現に気を使ってくれても良いんだよ？それにさ、どっちにしても、入植を理由に父さんが徴兵を免除されてる以上、弟が出来れば僕に徴兵令状がくる可能性は高いんだ。なら志願しといたほうが、メリツトもある。」

それに帝国語をちゃんと日常レベルで使えるしね。もしかしたら情報部だったり、フェザーン駐在武官の従卒になれるかもしれない。他の志願兵に比べたら、生き残れる可能性はあるさ。それにもう志願しちやったから、今更取り消すわけにもいかないよ」

自分に言い聞かせる様に話すトーマスから、覚悟みたいなものを感じてしまい。俺はそれ以上何も話せなかった。言いたいことは沢山あったが、もうトーマスが意を決した以上、俺から言えることは何もなかった。

でもさあトーマス。バート系のエリート達は、地方星系の若者の命なんて何とも思っていないよ。帝国語を日常会話レベルで話せるのも、やばい方向に働くかもしれない。階級が低い状況で帝国語に堪能なんて状況だと、最悪最前線の陸戦隊に配属されかねない。最終的な意思決定に関わる部門に地方星系の二等兵なんて加える訳がない。

あくまで現場レベルの情報収集で、帝国語が活きる陸戦隊に押し込まれる可能性が高い。所属部隊が勝ち続けられれば良いけど……。でも俺ですら理解している事なんだ。トーマスも全部理解したうえで志願したんだろう。お人好し過ぎるし、なんとか翻意させたいけど、俺が何を言っても無駄だろうな。

「簡単に戦死しちゃ嫌だぜ。トーマスには俺の兄貴分として結婚式でスピーチしてもらおう予定なんだからさ」

「うん。そんな将来があれば、きつと楽しいね」

そんな言葉を交わしながらトーマスと握手を交わしたが、彼がこの約束を守れないと思っっていることを感じていた。数年の付き合いだが、トーマスは約束をする時、約束を守ると必ず断言していた。

それをうやむやにする形にした以上、彼も生き残るのは難易度が高いと感じているのだろう。とは言え年下の俺の願いを誠実な彼は無下に断る事も出来ずに、こういう形にしたのだろう。

トーマスのような誠実な若者が、自分の将来を諦めざるを得ない状況に追い込む自由惑星同盟の有り様に、俺は憤りを禁じえなかつた。そしてただでさえ、ターナー家としても恨みがあるバーラト系に、改めて自分が立場を得た際には、ツケを払わせてやりたいとも思った。「疲れてるだろうに、こんな話を聞かせてごめんよ。ただ、カークには僕から話しておきたかったからね。オーナーに伝票を届けるまでが今日の仕事だよ。よろしくね」

トーマスから伝票を受け取り、配達車に乗り込む俺だったが、今までで初めて、トーマスが差し入れてくれたミルクを初めてその場で飲まずに持ち帰ることになる。この数日後に、入隊のためにエコニアを旅立つトーマスを簡易宇宙港まで見送りに行くのだが、誠実な俺の兄貴分とは、文字通りこれが最後の別れとなった。



## 第4話 オーナーの悩み

宇宙暦722年 帝国暦413年 12月末

惑星エコニア 井上商会 オーナー室

井上オーナー

「どうしたもんかねえ……」

年末の棚卸を終え、倉庫の戸締りを終えてから、店舗3階にあるオーナー室に戻ってきた彼は、自分のデスクに座ると、ため息を漏らしながらつぶやいた。もともと、彼の本業である商売の方は、進出の前提だった緑化事業が中止された時には、どうしたものかとも悩んだが、現在は順調だ。

彼が旨とする誠実な商売は、首都星系のような競争過多な地域ならともかく、入植開始時から文字通り市場と一緒に成長していく形になったエコニアでは、むしろ好評だった。雇用に際してもなるべくそれぞれの家庭状況に合わせて、臨機応変に変えてきた。

そのおかげで、首都星系の最低賃金と比較すると申し訳ない賃金ではあったが、従業員たちも頑張ってくれたし、それがまた評判となった。

そうして少しずつ資本蓄積を行い、新設された捕虜収容所もまもなく完工する段階になった。エコニアの市場は、あとは捕虜収容所の収容人員が満員になれば、余程のことがない限り、経済成長は頭打ちになるだろう。そういう時の為に資本蓄積してきたし、小規模資本なりに人材育成も進めてきたつもりだ。

彼の計画では、資本蓄積と人材育成がある程度進んだところで、同じタナトス星系内の惑星マスジツトに進出する腹積もりでいた。エコニア同様、大きな市場ではない。だからこそ、誠実に商売すれば、一定の評判を得られ、地域に必要とされるであろうと見込んでいた。

その際に任せようと思込んでいたのが、トーマス・ミラーだった。自分に似て誠実であり、後輩たちの面倒見も良かった。半ば失敗しても構わないと思って任せた収容所内の売店も、戦争相手国の捕虜にも、見下すことなく誠実に接したトーマスの人柄もあり、年々

売り上げは伸びていた。

マスジツト進出の際は陣頭指揮を任せ、自分も軌道に乗るまではマスジツトで後見役の真似事を行う。その後はエコニアに戻り、本店の方も任せられる人材を育てた頃合いで隠居し、あとはのんびり過ごせたら……。そんな将来を思い描いていたが、家庭の事情もあり、トーマスは軍に志願してしまった。

もし井上商會が大規模資本であり、首都星系に強いパイプでもあれば、多少は徴兵免除の働きかけも出来ただろうが、残念ながら田舎の小規模資本だ。帝国との戦線は遙か彼方ではあるが、自由惑星同盟は絶賛防衛戦を展開している。50年前のコルネリアス1世の大親征では、35人の元帥を戦死させ、何とか凌いだ。

ただ、同盟が被った損害もかなりの物で、それ以降、政策路線は軍備増強に振り切られたままだ。入植直後ということもありエコニアが属するタナトス星系では、今のところ入隊するには志願しかない。ただ、もう少し時間がたてば、徴兵の対象になる可能性は十分あった。「当初は本店の後継者。トーマスの事があってからはマスジツトの陣頭指揮を任せられたんだがなあ」

自由惑星同盟でも田舎も田舎な惑星エコニアではあったが、彼は惑星エコニアで商売を始めて心から喜んだ出来事が2回あった。一回目はトーマスが入社を決めてくれた事。そしてもうひとつが、彼がオレンジと呼んで可愛がっているカークが入社を決めてくれた事だ。

トーマスも彼から見て優秀な人材だったが、カークも同様だった。更に、オレンジの髪にエメラルドの瞳をもち何かといるだけで目立つ存在だ。そして不思議なことに、自分も含めて周囲の大人を後見役にしてしまうような、変な魅力があった。収容所の捕虜たちもなんやかんやとカークの面倒を見たがる。そして何より人の数倍勤勉だった。

もうすぐ13歳になるだろうが、普通免許だけでなく様々な資格を取っていた。少しでも家計を助けたいという想いもあるのだろうが、首都星系の同年代が遊びに夢中になる年頃から、ずっと努力している。トーマスの影響もあるのだろうが、後輩への指導もしっかりしたものだった。去年の年末には、いずれはトーマスとカークに両輪とし

て井上商会の未来を背負ってもらえれば……。そんな事を考えていた。

「しかしなあ。この話も正直不義理はしたくない。それに捕虜収容所も完工してしまうしなあ」

手元のタブレットに視線を送ると、一通のメールが目に入る。当初は苦渋の決断ながらもトーマスに話を持って行ったが、彼は家庭の事情もあって軍への入隊を決断してしまった。メールの主にも、話はしてみるが、あまり期待をしないで欲しい旨は伝えていたが、なかなか候補者が見つからない旨の追伸が、メールの内容だった。

「そもそもフェザンなんて認めちゃうからこうなるんだよ」

メールの送信主は、若い頃から商売を志し、いずれは独立商人になろうと切磋琢磨してきた親友だった。独立という意味では一歩先んじたが、独立を心から祝福してくれ、井上商会立ち上げ初期の連帯保証人にもなってくれたし、少なくとも餞別をくれた人物でもある。

そんな親友が自分の商船を持ち独立商人として独り立ちするとなれば、自分にできることなら最大限応援するつもりだった。それなりに人脈もあり優秀なはずの親友が困っているのが帝国語が話せる航海士見習いの確保だった。

コルネリアス1世の大親征を跳ね除け、軍備増強に政策を振り切った同盟は、30年前に行われたシャンダルーア星域の会戦では快勝した。それもあって、帝国からの亡命者は増加傾向にある。

当然、独立商人として商船を持つうえで、亡命者への対応が出来なければ2流扱いされる。そして亡命者の中にも未成年が含まれるので従士役を任せられる帝国語に堪能な若年者を備えて1流とされていた。

ところが、ここで同盟内のバーラト系と亡命系の確執が問題となる。シロンを中心とした亡命系はフェザンの成立で紅茶をはじめとした嗜好品の分野で打撃を受けていた。その上、彼らが保護していたヘルムート1世の庶子であったマンフレート2世を帝国に戻すという判断を下したのもバーラト系だ。

亡命系も当初は諸手を挙げて賛成した物の、マンフレート2世が在

位1年で暗殺されてしまうと、自分たちが保護していた帝室の血を使い潰されたと激怒した。それ以降、バーラト系と亡命系は冷戦状態なわけだ。

そして彼の親友はもともとバーラト系の資本に属する以上、本来なら帝国語が堪能な若年層を同盟内で一番抱えている亡命系からは、当然協力を得られない。フェザーン人は基本的に帝国語と同盟語のバインガルではあるが、自分の子弟をわざわざ独立したての零細外国資本に任せる理由もなかった。

「優秀なあいつが、同じ案件でメールしてくるんだ。よっぽどの事なんだろうが」

帝国語が堪能で、気難しい貴族にもそれなりの応対が出来る。貴族の坊ちゃん・お嬢ちゃんのお面倒もそつなくこなす。そんな人材は手元に一人しかいなかった。

「カークを出すのは正直痛い。ただ、井上商會を立ち上げられたのはあいつのお陰もある。カークを抱え込んで井上商會が大きくなって、あいつがしくじったら正直、心から喜べねえしなあ」

渋々ではあったが、カークに航海士見習いの話をするのを井上は決めた。

「それになあ。収容所が完工しちまったら、重機のバイトも無くなっちゃう。あいつがせめて15歳だったらなあ」

渋々の決断を自分に納得させるかのようにぼやいた。両親を除いて、ターナー家の状況を一番理解している彼は、カークの母親が妊娠したことも知っていた。新しい命が生まれる以上、1ディナールでもカークは稼ぎたいだろう。そして残念な事にエコニアにいる限り、しばらくは井上商會以外の稼ぎ口を見つけないのは難しいだろう。

もし15歳に達していてマスジットの陣頭指揮を任せる形にできれば、かなり待遇を上げることができた。ただ、さすがに13歳だ。いくら何でも若すぎるし、嫉妬もかなりされるだろう。2年待つという手も無くはなかったが、業務がさほど変わらないのに待遇に差がありすぎれば、それこそ嫉妬の対象になる。

「まあ、納まる所に納まったのかね」

ため息をつきながら親友からのメールに、もう一人の候補に話をしてみよう旨を返信し、オーナー室を後にする。兄貴分だったトーマスが、軍に志願してエコニアを後にして以来、どこか生き急ぐ雰囲気を出しているカーク。当然この話を断るはずもない事を理解していた彼は、家に着くまで10歩おきのため息をつく事になる。

## 第5話 出立

宇宙暦723年 帝国暦414年 2月初旬

惑星エコニア 簡易宇宙港 搭乗口

カーク・ターナー

「んじゃ、父さん、母さん。行ってくるね」

「カーク、くれぐれも身体に気を付けてね。無理しちやダメよ」

妊娠初期になり、少しおなかが目立ち始めた母さんが、別れを惜しむかのように抱きしめてくる。少し気恥かしいが、何事も無くても数年は会えない。下手したら最後の機会になるかもしれない以上、ことさらに逆らわず好きにさせた。父さんは、申し訳なきような表情で、俺と母さんに視線を向けている。

「父さん、遅かれ早かれ、俺はエコニアから飛び出していたよ。過ぎたことは気にしないで、母さんと弟妹を宜しくね。俺もガンガン仕送りするからさ」

俺がそういうと、父さんは頷きながら感極まったのか男泣きを始めた。まあ、父さんがもう少し早く立ち直ってくれていれば、俺も別の道を選んだ可能性もあった。ただ、遅かれ早かれエコニアを飛び出していたのは確かだろう。

今の同盟の在り方だと、地方星系は表現を選ばなければ搾取の対象だ。身を立てて、本当の意味で自分の意志で人生を決める為には、捕虜収容所以外、大した特徴もないこの惑星に留まる判断は、残念ながら出来なかった。

年始に井上オーナーから航海士見習いの話を聞いたとき、俺は2つ返事で受けることに決めた。もちろん年齢の問題から両親の承諾が必要だった。当然両親に相談したし、心が折れた父さんに代わって、母さんと二人三脚で家計を支えてきた俺を、二つ返事で航海士見習いにするのは、特に母さんにとって重たい判断だっただろう。

ただ、二人目の命が母さんのお腹に宿ったのをきっかけに、身重の妻だけを働かせるのはさすがに父さんの良心が許さなかったらしく、荒れ地の開墾を俺の目から見ても人並み以上にこなすようになった。

もし父さんの心が折れたままなら、身重の母さんの双肩に家計が押し掛かる。経済面はともかく、精神面で不安があったのも事実なので、何がきっかけになったとは言え、ターナー家にとって良い変化だと思っっている。

『14時発のシャトルに搭乗予定の方は、搭乗口までお急ぎください。まもなく出発時刻となります』

アナウンスをきっかけに、母さんが抱きしめるのをやめ、確かめるように俺の肩に触れた。

「んじゃ、行って参ります！」

両親の寂し気な視線を振り切るように別れの言葉を述べると、俺は搭乗口へ急いだ。名残は尽きないが、我が母星のエコニアは、この銀河でも有数のド田舎だ。シロン行きの便は月にわずか一本。今後の予定が詰まっている以上、一か月も時間をロスするわけにはいかない。

シャトルに搭乗し、窓際の指定席に座ってしばらくすると、定刻となり、シャトルは加速を始めた。前世で旅客機にのった経験はあるが、今世ではこれが初めてだ。両親を始め、井上商会のみんなや収容所の面々の顔が頭をよぎったが、それでも変な高揚を感じていた。

トーマスから半年遅れだが、俺はこの銀河の田舎代表のようなエコニアを、心のどこかでずつと飛び出したかったのかもしれない。トーマスはまだ基礎訓練中って所だろうか。どうせなら小さいとは言え、曲がりなりにも店舗の責任者だった経歴はあるんだ。うまく立ち回って補給部門にでも潜り込めればなあ。

だが、これからの俺にはあまり人の心配をしている時間はないかもしれない。これから亡命系の中心地であるシロンに向かい、亡命貴族が経営する社交マナーの塾に短期入学する。俺が航海士見習いにこんな若年でなれるのは帝国からの亡命者対応を引き受けるためだ。

さすがに公爵家や伯爵家クラスの亡命は少ないらしいが、亡命業務に関わる以上、帝国流の社交マナーも学んでおく必要がある。そんなもん通信教育にしとけとも思うが、立場なんかで口上も変わる。それに通信教育の教材にしないことで、亡命系の食い扶持を守る意味もあ

るんだろう。この分野は亡命系の独占市場だからな。さすがのバート系も手が出せないらしい。

まあ、よくよく考えれば、短期間とは言え学校に通うのは、カークとしての人生では初めてだ。エコニアでは後輩の面倒も見てきたけど、ほとんどの時間を大人と過ごしてきたし、同世代との接し方を学ぶ意味でも丁度良いかもしれない。

そんな事を考えているうちにシャトルは成層圏を抜け、文字通り惑星としてのエコニアが、シャトルの窓から見える。水に乏しいエコニアは、地球とは違って全体的に茶色い印象だった。

決して美しくはないし、パツともしない光景だ。でもそれでよかった。同盟圏内に多くあるであろう、こういうパツとしない星系を少しでもまともにしたいたい。それが俺の今世での志みたいなものになりつつあった。

しばらくすると軌道上に待機していた商船にシャトルがドツキングし、俺は小さめの客室に潜り込んだ。成人男性なら体格によつてはかなり狭く感じただろうが、幸いなことに俺はまだ13歳。シロンまでの船旅は快適な物になりそうだ。

そして何より、航海士見習いの話を承諾して、井上商会を退社した先月から、航海士見習いとしての給与も支給されている。衣食住に不便しない以上、今の俺には怖いものはないのだ。

宇宙暦723年 帝国暦414年 2月末

惑星シロン ジャスパー家

フレデリック・ジャスパー

「ふざけるな！なんで今更、俺が帝国の社交マナーなんてもんを学ぶ必要がある？」

「ではもう一度申し上げます。フリードリッヒ様は庶子とは言え、オルテンブルク家の直系に連なる方です。旦那様の戦死を機に、後を継がれたリーンハルト様の後見を旦那様がされる事となりました。オルテンブルク家内部は形式の面では整いました。

ただ、亡命系の雄であるオルテンブルク家が軍務で貢献できないと



なると外聞が悪うございます。フリードリッヒ様には、亡命系の名門に相応しい作法を身に着けた上で、士官学校への進学をするようにとの旨、大旦那様がお指図されました」

「間違えるな。俺の名はフレデリックだ。それも今更の話だな。侍女として勤めていた母に手を出した挙句、あの鬼婆がいびり出すのを見て見ぬふりをしておいて、よくも指図などできたものだ」

怒りを禁じえない俺の視線の先には、本家であるオルテンブルク家の従者が形式だけは恭しく控えている。彼らにとって主家は絶対的な存在だ。当然、その血を引いている俺にも形式的には敬意を払う。そうしなければ彼らの価値観にそぐわないからだ。ただ、内心では大旦那様のお指図に逆らう不屈き者とも思っているだろう。

亡命系とは言え、ここは自由惑星同盟だ。帝国での政争の落伍者たちが貴族ごっこをする分には、俺にとつては関係ない話だ。貴族宜しく侍女に手を出し、子まで産ませておきながら、派閥内の面子の為に後継ぎは本妻との子にしなければならぬ。

そんな事情から、本妻が母をいびるのを見て見ぬふりをし、やつとこき嫡男をなしたかと思えば戦死した父は、俺からすれば因果応報としか思わない。ただ、貴族ごっこのゴミみみたいな脚本の片隅に、俺が配役されるのはごめんだった。

「かしこまりました。私はあくまで大旦那様のお指図をお伝えに上がっただけでございます。お指図にフレデリック様がどうしても従わぬとの仰せであれば、その旨、ご報告するまでです。ただ、本当によろしいのですか？」

痛い所をつけてきやがる。オルテンブルク家の分家も分家のジャスパー家に所属する以上、奴らの貴族ごっこの有り様はよく知っている。フェザーンが成立して嗜好品メインで稼いでいた亡命系はかなりの打撃を受けた。そしてそれ以降、団結を強めてもいる。

俺の個人口座には、自分だけならいくらでも好きに身を立てる原資がある。ただ、オルテンブルク家の指示に逆らったとなれば、ジャスパー家は亡命系の中ではもう生きていけないだろう。貴族ごっこの中で生きてきた祖父母を、俺のわがままで全く違う世界に叩き込む決

断は、俺には出来なかった。

「わかった。指図通りマナーも身に着けるし、士官学校を目指そう。その代わり、俺に二度と関わるな。お前達が敬愛する大旦那様の面目が立つように最大限努めよう。その代わり、その邪魔をするな。俺はお前たちのように貴族ごっこに興じる趣味はないからな」

「承知いたしました。大旦那様には家名を汚さぬよう精いっぱい務める為、静かに見守って頂きたいとでも申し上げましょう。私としても、頂いたお役目が不本意な形にならず、安心いたしました。では失礼いたします」

本家の従士は、形だけは恭しく一礼をしてから、部屋を辞していった。亡命系の会合があり、祖父母が留守のタイミングを狙ってきたのも、もしかしたらあの従士の配慮なのかもしれない。コルネリアス1世の大親征を同盟が跳ね返して以来、政争に敗れた帝国貴族を中心に亡命者は増えている。

貴族にとって血は可能性だ。政争に敗れたとはいえ、大逆罪でもなければ族滅される事はほとんどない。持ち運び可能な資産を持たせ、亡命させるのが主流だ。その最たるものが、亡命帝と呼称されるマンフリート2世だろう。

とは言え、コルネリアス1世の親征は、当時の同盟軍に大きな被害をもたらした。亡命者たちが帝国から持ち出した資産の一部も、同盟の軍備増強に用いられている。

またバーラト系の強硬派が、持ちこまれた資産を絞り取るかのよう な動きをしたのも確かだ。結果、自衛のために亡命系はシロンを中心に入植し、同化することなく、帝国領内のような疑似貴族制を維持して体制を整えた。

敵国である帝国の、ましてや貴族ともなれば、亡命を受け入れてやるのだから全財産を没収しろと、短絡的に考えた当時の同盟強硬派の気持ちもわからなくはない。彼らのルーツであるハイネセンを始めとした人々は流刑惑星で農奴として強制労働に従事していた。建国の父たちの苦渋を返さんとする気持ちもわかる。だが、そのせいで国内に派閥抗争を呼び込んでしまったとしたら、その責任はバーラト系

と亡命系のどちらかに帰するのだろうか？

「いっそすべて捨ててしまえば……。などと言うのは贅沢だろうな」

先ほどの従者を乗せた本家の地上車が遠ざかっていくのを窓から見ながら、俺は内心を吐露していた。

## 第6話 イーセンブルク校

宇宙暦723年 帝国暦414年 3月末

惑星シロン 宇宙港

カーク・ターナー

「ふう、やっとこさ到着か。まあ、同盟流のマナー講座の予習は終わったし、暇ではなかったけど船室で缶詰だったからなあ」

宇宙港で入屋手続きを終え、エントランスを出た所で、俺は船室生活の閉塞感を吹き飛ばすかのように大きく伸びをした。人目がなければラジオ体操の第一でもしたかもしれない。着替えの入った13歳の身体には少し大きめのシヨルダーバックを抱えて、タクシー乗り場まで向かう。

これが所謂バーラト系の惑星なら、自動運転対応のレンタカーシステムがあるらしいが、亡命系の惑星では何でもかんでも自動化するのは下賤という価値観の下、インフラ整備が行われているらしい。船内で学んだ予備知識だが、銀河帝国の建国者であるルドルフ大帝の『自動化できる事を敢えて人力で行う事がむしろ貴族的』

と言う価値観の下、詳細まではわからないが、帝室が置かれている新無憂宮は文字通り星間国家が成立しているこの時代ですら、人力で運営されているらしい。それをバーラト風の価値観の下、愚かな無駄だとか、圧政の象徴みたいに考える連中の気持ちも判らないではない。

ただ、貴族社会にも当然落伍者はいるわけで、新無憂宮のような大規模施設を人力で運営するにはかなりの雇用が生まれる。皇帝の住まいに平民を置くようなことはないだろう。貴族階級に属する者限定のセーフティネットのような役割を果たしているのかもしれない。

「おっちゃん、イーセンブルク校までよろしく！」

「あいよ。お若いのに帝国語が堪能だね。大したもんだ」

タクシーにバックを抱えながら乗り込み、運転手のおっちゃんに行き先を告げる。收容所仕込みの帝国語はちゃんと通じるようだ。若

しくは、宇宙港を起点にするタクシー運転手たちにとって半分ご挨拶なのかもしれない。

俺が着ている服は安物とは言え完全に同盟風だが、シロンを始めとした亡命系の惑星では、帝国風の服を着るのがスタンダードだ。おっちゃんからすれば、俺が行き先を告げた時点で、大体の事情を理解できたのだろう。

そして、タクシーを始めとした日常生活を支えるサービスを自動化しないのも、亡命系ならではの理由がある。亡命の際に多額の資産を持ち込み、シロンを中心に同盟ではそれまで乏しかった貴族風の嗜好品の生産で経済力をつけた亡命系だが、彼らの社会はある意味、完全な階級社会だ。

亡命するにあたって、当然庭師などの専門職を連れてきた者もいたが、専門職の枠は当然限られる。そこで敢えて自動化を進めず、就職先を担保する政策でもあったりする。実際増加傾向の亡命者だが、平民などの高等教育を受けていない層は、自動化の進んだ星系では就職が困難だ。

意図通りなのかは不明だが、亡命後もある意味貴族的価値観の下、庶民の生活にも配慮している訳だ。ただ、これもバート系からすると軍備増強に振り切った政策を進める中で、消極的な非協力に映り、論点にもなっている。もともと、亡命初期に強硬派の暴走があったのも事実で、強く出られずにいるようだ。

そんなこと考えながら、帝国風の街並みに目を向ける。帝国本土の映像は同盟内に出回ってはいない。ただ、亡命系はここでも故国風を貫いたようだ。前世で言う欧州風の街並みが続く。前世でも海外視察で何か国も訪問したが、飯は和食が一番だ。ただ、この街並みを見る限り、和食はなさそうだな。そうこうしているうちに目的地であるイーセンブルク校にタクシーが到着する。

俺は銀行口座とリンクした身分証をリーダーにかざし、料金を支払う。

「そういえばおっちゃん、亡命系ではチップ制ってあるの？」

「大丈夫だ。平民の間でチップのやり取りはねえ。もともと貴族様に

はお抱えの運転手がいるからな。通常はそつちを使うし、緊急で人手がいる時に要請が来たりするんだ。そういう時は多めにお足を頂けたりするけどな」

「なるほどね。勉強になったよ。ありがとう」

俺の返事に、おつちゃんにはやりと笑うと、ドアを閉めて走り去っていった。走り去るタクシーを横目に、俺は受付に向かい、メイド見習いであろう受付嬢に来校の旨を伝えた。

「カーク・ターナー様ですね。当校への短期入校との旨、受け賜っております。担当講師が参りますので、あちらのお席でお待ちください」形式だけなら満点だが、どこか一線を置く雰囲気です。受付嬢の対応を受けると、俺は指示された通り待合用のソファに腰かけた。おお、さすが亡命系。待合室のソファも結構いいものだ。どうせなら寮もこんな感じなら……。なんてことを考えながら担当講師とやらの到着を待つことにした。

受付嬢の態度に関しては特に言うつもりはない。彼女たちはあくまで帝国風の階級社会に生きているんだ。平民の若造に心からの敬意を払うのはそもそも無理だろうし、そういう部分を見透かされるレベルだから、メイド見習いなんだから。

宇宙暦723年 帝国暦414年 3月末

惑星シロン イーセンブルク校

マナー講師 フラウベツカー

「分かりました。待合室に迎えに参りますので、そちらで待たせるように。対応感謝します」

受付から私が担当する短期入学者、カーク・ターナーが到着した旨の連絡に回答し、講師陣に与えられた控室からエントランスへ向かう。ここで短慮な講師なら嫌がらせで待たせたりするのだろうけど、亡命系の立ち位置も踏まえ、対応に配慮してほしい旨のご指示を頂いていた事もあり、足早に待合室に向かった。

「はあ。厄介な事にならないければ良いけど……」

年に数名、このイーセンブルク校にもマナー学習の為に短期入学者

が訪れる。そして大抵爵位持ちの貴族の子弟と何かしら揉め事が起こるのがマナー講師の悩みの種でもある。問題が起こるなら亡命系以外の生徒の受け入れを止めてしまえば良いとも思うのだが、亡命派の置かれた政治的な事情から、そうも言っていられない。

と言うのも、同盟に帝国からの亡命者が増えることは、すなわち我々亡命派の増加につながる。本来なら亡命者の受け入れ対応に全面的に協力すべきなのだろう。ただ、亡命初期にいわゆるバーラト系の強硬派が暴走した事。仲介窓口となるフェザンが商売敵であること。そして何より、シロンを始めとした亡命系の商会は同盟内への賄賂を維持するので精いっぱい、フェザンを仲介した帝国との貿易に割ける輸送船が捻出できていない。

結果として亡命者の受け入れに関しては、その多くがフェザン系とバーラト系の商船が担っている。ならせめて人材面での協力をしても良いのだろうが、そもそもフェザン系はバイリンガルなので助力を必要とせず、バーラト系にはよく言って冷戦という関係から、亡命系の人材は就職先として希望しなかった。

とは言え、亡命系が全く寄与しないと言うのは、メンツの面でも道理の面でもあり得ないことだ。なので、亡命受け入れに関わる人材限定で、帝国でのマナーを講義している教育機関が短期入校を受け入れていると言うのが妥協点だった。

帝国風の階級社会で育ってきた子供たちにとって、短期入学者は異物でしかないし、同盟風の社会で育った子供にとって、短期間とは言え育ってきた環境とは全く違う環境に置かれる。揉め事が起こるのはむしろ当然だろう。

最も、亡命派の子供たちにもメリットはある。一部を除けば、将来、同盟の価値観で育った人材と接点を持つことになるのだ。その際に、事前にそういうことを認識しているかで、だいぶ関係性は変わる。亡命系の子弟が同盟軍の士官学校に入学し始めた時代には、決闘騒ぎも起こっていたと聞く。

「色々とわきまえてくれている子なら良いけど、13歳じゃ思春期真っただ中だものねえ」

待合室が近づき、私は覚悟を決めるように気持ち切り替えた。部屋を中心に置いてあるソファーには、オレンジの髪とエメラルドの瞳をもった少年が、タブレットを片手に深く腰掛けて、寛いでいるのが目に入った。良くも悪くも存在感がある。揉め事が起こる将来を確信した私は、不躰とはわかりつつも小さくため息をついた。



## 第7話 友人

宇宙暦723年 帝国暦414年 4月末

イーセンブルク校 図書館

カーク・ターナー

「この図書館には、我らが保存してきた貴重な書籍が多数あるというのに」

「まったくだ。その貴重さも理解できぬ平民が、身の程を弁えずに当然の様に触れるとは」

やっと来たか。まあ、事前に担任のフラウベツカーからも話を聞いていたし、正直、いつ来るかと期待していた部分もある。ここはキッチンに馴染せてもらうか。ただなあ、貴族感覚の子弟を躱ける一貫とは言え、異文化圏からの留学生は、接し方次第でシンパにもできると言うのに。

バーラト系とのいざこざが遠因なんだろうが、ここでマナーを修めた連中は、亡命受け入れに関わるんだ。アンチ亡命派にするのは百害あって一利なし……。なはずなんだが、まあ、亡命派が最終的に損をしようが得をしようが、俺の知ったことじゃない。しっかり与えられた役割を果たしますか。

「勉強になりますねえ。同盟の田舎ですら図書室では静かにすると、子供ですら理解しております。亡命系ではむしろ騒ぐようですね。これは大変勉強になります。感謝せねば。お名前をうかがえますか？」

「貴様！我らを愚弄するのか！」

「下賤の者に名乗る名などない。この礼儀知らずめ」

まあ、案の定だ。少し煽っただけで噛みついて来た。なんだかんだ言ってるが、こいつらには名乗れない事情がある。そもそもイーセンブルク校を始めとした亡命派の教育機関への受け入れは、亡命派の首脳部が決めた政策でもある。

貴族社会風の環境で育った彼らにとって、異分子である俺を気に入らない、排除したいとしても、それを公的な場で主張すれば、当主や

寄り親の意向に反する事になる。それは彼らの育った環境ではタブーな事だし、それをやれば、彼らが維持している貴族風の社会自体の否定につながる。

だからこそ、やれる事は精々聞こえるように嫌味を言うくらいだ。まあ、かわいいもんだよな。

「左様ですか。亡命系では名を名乗らぬ場合があるのですね。ちなみに同盟では、治安組織に名を聞かれて名を名乗らないと後ろ暗い所があると判断されます。お互いの価値観の相違を学べましたな。それは何より」

フムフムと勉強になったかのような所作をしつつ、小馬鹿にしたような表情でさらに煽る。子供相手に大人げない気もするが、実はこれもフラウベツカーから事前に『ちゃんと対応する様に』と言われた結果だ。

俺が短期入学しているイーセンブルク校は、設立したのが伯爵家だし、その寄り親のオルテンブルク家はもともと侯爵家だ。当然、亡命系の貴族でも貴意が高い連中が集まっている。ただし、講師陣は貴族階級とは限らない。

なので、生徒同士の争いに講師陣は基本関与しない。それでも、決闘などは禁止されているし、これを破ればイーセンブルク家だけでなくオルテンブルク家の面目をつぶす事になる。

で、話を戻すが、生涯を通じて亡命派としか接点を持たない人材もちろんいるが、中には士官学校を始め同盟圏内に進路を取る者もいる。なので、俺のような短期入学者は、あくまで同盟の価値観で行動して良い旨を伝えられている。

そして争いに関しても、実力行使ではなく口論レベルなら許可されていた。まあ、上層部からすれば、同盟内で使える人材育成のために同盟の価値観にも触れさせようってトコなんだろうが俺から言わせれば、こつちに丸投げしてくるな！とも思う。

「おのれ！我らを愚弄するか！」

「貴様！」

って、こいつら煽り耐性低すぎだろ。しかも帯剣してる短刀に手を

かけやがった。フラウベツカー、実力行使は禁止されてるんじゃないの？話が違うじゃん。どうするかなあ。一応、収容所流の護身術はおっちゃん達に習ったけど、さすがに実力行使しても良いもんかね。抜かれちゃうと、こつちも手加減できない。とは言う物の、こつちも学ばせてもらってる身だし、部外者だ。さすがに実力行使まで行くと、厄介な事になりそうだなあ。フラウベツカーにお説教を食らうのは避けたい事態だ。

「その辺にしておいたらどうだ？非武装の相手に二人掛り。おまけに抜けもしない短刀をちらつかせるとは見るに堪えねえな。それともいっそ抜いてみるかい？俺の目の前でさ」

声の主の方へ振り返ると、浅黒い肌に黒髪の男が、俺に突つかかって来た二人組に鋭い視線を向けていた。

「ちっ」

「庶子のくせに生意気な」

俺の耳には聞こえたが、黒髪には聞こえるかどうかの音量で捨て台詞を吐くと、二人組はそそくさと図書室から出て行った。典型的な三下の行動だが、自分の目の前で繰り広げられる事になるとは思わなかった。

「おい、オレンジ。お前も甘いな。俺が奴らの仲間だったらどうする？実力行使は禁止されているが、奴らがやる気だったら、俺に視線を向けた時点でかなりの不利を背負うとこだぜ」

三下のお芝居に対してか？甘ちゃんな俺の行動に対してか？黒髪はニヤニヤしながら俺に声をかけてきた。

「オレンジでも良いが、俺はカーク・ターナーだ。お礼を言うべきだな。助かったよ」

「フレデリック・ジャスパーだ。まあ、庶子とは言え俺もオルテンブルク家の者だ。俺の在学中に問題があればこつちにも文句が来るかもしれないからな。わが身可愛さの行動だからそこまで気にしなくて良い」

やれやれと絵にかいたような所作をするジャスパーは、どこかコミカルで思わず笑ってしまった。笑っている俺をジャスパーは一瞬想

定外な表情で見たが、自分でも感じる所があったのだろう。俺に誘われる様に笑い始めた。これ以降、短期留学中はなんだかんだとつるむ仲になる。お互い認めないだろうが、もしかしたら初めての同い年の友人だったのかもしれない。

宇宙暦723年 帝国暦414年 6月末

惑星シロン 宇宙港

フレデリック・ジャスパール

「ジャスパール。簡単にくたばるなよ」

「お前こそな」

同盟の若年層で流行っていると言うお互いの拳をくつつける挨拶を交わすと

「またな」

と言いつつ残して、この2カ月、毎日のようにつるんでいたターナーは、搭乗口へ進んでいった。チェックインをすませ、ゲートをくぐると、こちらを振り返り、手を振ってからシャトルへ消えていく。

奴のオレンジの髪は人が多い搭乗口でもよく目立った。俺も応えるように手を振る。やけに寂しく感じるのは、あのオレンジの髪が目立つせいかな？それとも、唯一の俺の理解者が旅立ってしまうからだろうか。

俺は、搭乗口から離れるように屋上へつながる階段へ歩みを進める。思い返せば面白い奴だった。オレンジの髪にエメラルドの瞳。それだけでも目立つのに妙に存在感がある奴だった。イーセンブルク校の同年代の子女が、騒ぐのも無理はなかった。

当然面白くない連中が絡むのも時間の問題だったが、学習意欲の高いやつだったから空き時間はほとんど図書室だ。あいつは性悪だから、もしかしたら人目があり、反撃の口上を作りやすい図書室で待ち構えていたとしても、俺は驚かない。

社交ダンスも初めからうまかった。社交ダンスは未経験者ならともかく、経験者ならリードする男性の力量がかなり重要だと知っている。力量がそこそこのなら勿論、自分の力量に自信がある子女も、力量

の低いパートナーを選べば、無様な有様になる可能性もある。

妙に存在感のあるターナーは、ダンスの授業では引く手あまただった。その段階では、俺とつるむ仲間になっていたからイザコザは無かったが、俺の存在が無ければ一悶着起こっただろう。

階段を上り、ドアを開ける。強めの風に髪がなびく。安全対策で備え付けられたであろうフェンス近くのベンチに座ると、エンジン音を響かせながら滑走路に向かうシャトルが目に入る。

「五分と五分か……。そんな感覚は知らなかったな」

庶子とは言ってもオルテンブルク家は侯爵家だ。外食すれば支払いを持つのは当然だったし、その代わりに周囲の連中はおもねって来るわけだ。

「仕送りを減らせないから安い店にしてくれ。奢り返し出来ないよ、俺たちは五分じゃなくなる。子分になるつもりはないからな」

それまで通っていた貴族向けのレストランから、労働者向けの居酒屋に場を変えたのも奴の影響だ。最も、お高く止まった貴族向けのレストランより、好みに合ったのも事実だ。大皿に盛られた料理を、気心の知れた仲間とつまむのは、予想以上に楽しかった。

「情勢を考えれば、士官学校に行くのはむしろ正解だ。俺も経済面が何とかなれば士官学校を志望してたよ」

やれやれと言った所作をしながら、あいつはボヤいていた。今のところ、防衛戦争は優位に進んでいる。ただ、帝国の侵攻を元から断てない以上、いずれ亡命系へも徴兵要項が拡大される。どうせ従軍するなら、アホな上官に使い潰されないように士官学校を出て、最低限の立場を確保した方がマシだと……。身も蓋もないやつだ。思い出しても笑える。

シャトルが定位置に着いたんだろう。轟音を上げながら視界の片隅にあったシャトルが加速を始める。

「取りあえず士官学校を卒業して、10年勤めれば良い。そうすりゃ年金支給の対象になる。どんなに資産持ちでも収入がないのは精神的に良くないしな。ジャスパーの容姿なら役者も務まるだろう。別に自分のバックボーンを全否定しなくても良いんだ。帝国風のレス

トランをハイネセンの一等地に出すのも面白いかもな」

あいつの発想は国名宜しく自由だった。俺が役者？そんなこと考えたこともなかった。思い出しても笑っちゃまう。

「それによ。士官学校の道を検討できるだけで、自由惑星同盟のお貴族様なんだけ」

あれは、いたずらで奴が好きなおレンジジュースにウオツカを混ぜた時だったか。酔いつぶれたあいつも面白かったが、酔いでもしないとあんな話はしなかっただろう。あいつが8歳で働き始めた勤め先の兄貴分の話をもらした。ターナー自身も優秀だが、その兄貴分も十分優秀と言えるレベルだろう。

そんな彼が、経済的に厳しい辺境星域生まれと言うだけで、世に出るために二等兵として入隊する道しかなかった。そして自分に先駆けて星を飛びだして行った兄貴分に置いて行かれたと引け目に感じていることも吐露していた。

「余計なことを言ったな。忘れてくれればありがたい」

翌日の朝食の場で、照れくさそうにあいつは声をかけてきた。でも、あれが辺境出身者の本音なんだろう。轟音を上げながら成層圏を突き抜けていくシャトルに視線を向ける。ああ、あいつも兄貴分のシャトルを見送りながらこんな思いを感じたんだろうか。

「亡命派幹部の庶子、お前からしたら良い生まれかもしれない。でもな、俺もあの時のお前と一緒だ。おいて行かれた気持ちだぜ。いつか出世して、お前の商会にでかい案件を発注してやるよ。何が五分だ。俺を置いて行ったんだからな。これ位のお返しは当然だろ」

見えなくなるシャトルを横目に、俺はイーセンプルク校へ歩みを進める。一刻も早くお返しするためにも、士官学校に少しでも良い席次で入学しないとな。押し付けられた進路も、今では前向きに進めそうな気がした。

## 第8話 雇用主と宇宙

宇宙暦723年 帝国暦414年 6月末

惑星シロン 静止軌道 エンブレム号

カーク・ターナー

「やっと会えたな、ターナー君。キャプテン佐三だ。エンブレム号への乗船を歓迎する」

「キャプテン佐三、カーク・ターナーです。諸々のご手配ありがとうございます」

ジャスパーに見送られてシャトルに乗り込んだ俺は、静止軌道上に打ち上げられ、待機していたエンブレム号に乗り込んでいた。航海士見習いとなる俺の雇い主、キャプテン佐三と涙の……。という訳ではないが、対面を果たしている。彼の氏名は井上オーナー同様、姓が先に来るE式だ。前世で言うと、彼のフルネームは出光佐三、乗船するのはエンブレム号、これも和訳の仕方によっては日章号だ。

井上オーナーがつかないでくれた縁だが、少なくとも名前だけなら成功につながる気がする。船長は某巨大石油会社の創業者、乗船するのも日章丸とほぼ同じ名前のフネ。別にキャプテン佐三が大儲けしてもボーナスがもらえる位だろう。ただ、どんな組織であれ、大きな成果を出せば組織全体が前向きに進むし、ポジションも増える。航海士見習いとして歩みを始めるには、良い職場に当たったのかもしれない。井上オーナー、感謝です。

「エンブレム号には、首都星系産の機械部品とシロン産の嗜好品を積み込んだ。これからフェザーンへ向かう。亡命関連の案件があるかは、行ってみないと分からない。ただ、貴族子弟の対応は君に任せることになる。大丈夫そうか？」

「はい。短期間ですが学費を出していただきました。マナーに関しては『優』評価を頂きました。皇族でもなければ無難に対応できるだろうと、評価も頂いております」

「それは何より。この船の亡命案件の主任つとこだね。井上からも学習意欲が高いって聞いている。君を雇ったのはあくまで亡命子弟の

対応のためだ。航海士としてもキャリアを積めるように、しっかりと励むようになる」

俺の肩をポンポンと叩きながら、キャプテン佐三が笑顔を向けてくる。そんなこと言われるまでもない。一日も早く航海士になって、仕送りを増やすのが俺の直近の目標だからね。割り当てられた部屋は、思った以上に良い部屋だった。

自動化が進んだこの時代の商船は少人数での運用が可能だ。亡命案件の対応もするからエンブレム号も客室を用意しているが、わざわざ航海士見習いの為に、航海士用からグレードを落とした部屋を用意する方がむしろ無駄だ。そういう訳で分不相応な航海士用の部屋を俺も貰えるという訳だ。

「まあ、まずは機関部門からだな」

割り当てられた部屋の衣装棚にカバンに納まっていた私服をしまいながら俺はつぶやいた。航空分野に関しては艦橋に船長・副長・航海長がいる以上、俺の出る幕はない。一方で機関部門は自動化が進んでいるとはいえ、メンテナンスを含めて必要な作業はそれなりにある。

経済を支える商船乗りが徴兵される可能性は低い。ただ、万が一徴兵されたとしても、機関士としての知識があれば、最前線の陸戦隊に配属されるリスクは低くなる。まあ、処世術の一環だな。

全く予想外の展開だったが、航海士見習いの中でもホワイトカラー志向が強いのか、艦橋勤務の業務を学びたがる奴が多いらしい。初めに機関業務を希望する航海士見習いは皆無に近いらしく、そんな中で機関士一筋30年の機関長は、機関業務を第一希望にした俺を、それだけでかなり気に入ってくれたようだ。

俺は経験したことがないが、希望者の少ない部活ほど、入部希望者がかわいいような感覚なのだろうか。とにかく、航海士見習いとしての俺のキャリアは、思った以上に良い環境でスタートした。仕送りもちゃんと出来るし、この好待遇に応えるべく、俺はしっかりと務めるだけだ。



宇宙暦723年 帝国暦414年 7月末

惑星ウルヴァシー 静止軌道上 エンブレム号

キャプテン佐三

「素人の私から見ても、この惑星はかなり有望そうですが、開発計画は無かったのでしょうか？」

「計画自体はあったそうだが、艦隊拡張予算の為に予算を取られて計画は白紙になったそうだ。あとは有望すぎるってものあるかもな。水資源も豊富だし、フェザーンからも近い。本当は亡命系が入植したがったそうだが、ここはバーラト星系とフェザーンの主要航路を押さえる星系でもある。亡命系に任せるには惜しいしリスクもある。とは言え、艦隊拡張があるから開発予算を割けない。結果放置されたままってわけだな」

「そうなんです。私の出身地のエコニアよりもかなり環境が良さそうですね。放置されているなんて勿体ないと思ひまして」

そう言いながら、首都星ハイネセン並に青い惑星ウルヴァシーが映るモニターに視線を向ける新入りのターナー。井上も良い人材を紹介してくれた。ビジネスの場で身を立って来た俺から見ても、将来が楽しみな奴だ。

「機関長から話は聞いている。素の話し方をしても良いんだぜ？」

「さすがに雇い主との関係はちゃんとしておきませんか？……」

少し困った表情をしながらターナーは答えた。確かに同僚と言えなくもない機関長と同じように気安く接するにはまだ接した時間が少ないか。機関長がつきつきりで機関業務を叩き込んでいるから、ターナーは艦橋にいる時間が少ないんだよな。商船乗りは万が一の時は命を預けあう仲だ。本当なら艦橋詰めの連中とももう少し絆を深めてもらいたい所だが……。

「では、機関室に戻ります」

ターナーが一礼すると、艦橋から退出していった。そのタイミングでモニターから着信音が響く。通話ボタンを押すと機関長がモニターに映った。

「船長、補給完了だ。悔しいところだが、フェザーン系は質も良いし価格

も良心的。本国にももう少し考えてもらいたいですぞ」

「そういうな。エネルギー系は生活必需品だ。多少課税しても売れ行きが鈍らないからな。だがそのせいで俺達もだが、なるべくフェザン系で補給する流れが出来てる。軍を除けば商船はエネルギー系の最大消費者だ。俺達に負担を押し付けるような政策は、本来悪手なんだがなあ」

「例の噂、本当なんでしょうね。情報交通委員会と経済開発委員会にフェザン系から賄賂が流れてるってやつ。奴らの懐に入る金額の何百倍も同盟からフェザンに資本流出してるってのに」

「政界の中心はバーラト系の中でも政治家の家系の独壇場だからな。同盟全体の利益より、自派の利益優先になっちまってるんだろ。うな。もつとも、それを理解しつつもそれに乗っかって経費削減してる俺達も同じ穴のムジナなんだろうが」

示し合わせたかのように俺と機関長が同時にため息をつく。視線を向けると航海長もやれやれと言った表情だ。まあ、政治家を敵に回したら同盟で商売するのは難しくなる。俺たちにできるのは与えられた環境で精いっぱい儲けるだけだ。

「それとな、ターナーを気に入ったのはわかるが、あいつが一人前の航海士になるには、艦橋業務も覚えねえといけねえんだ。抱え込むのもほどほどにな」

「分かってまさあ。ただ、ほとんどの見習いは機関業務なんて触り位しか学ばねえんだ。なかなかある事じゃねえんだから、多少は大目に見てくれよ」

逃げるように機関長が通信を切る。まあ、もうしばらくはそつとしておくか。惑星ウルヴァシーに関しては、俺は別の事情もあると考えている。惑星自体の資源の有望性に留まらず、銀河の資本の中心になりつつあるフェザンにも近すぎるのだ。今は良いかもしれないが、いずれ経済成長が進めばバーラト系に匹敵する可能性がある。同盟の中心はあくまでバーラト系で良い。自分たちに成り代わる存在など認めるはずがない。

モニターには静止軌道上にある宇宙ステーションが映る。建設し

たのはフェザン系の資本だ。最新の施設で運営効率も高い。その上、補給物資の質も高く、価格も安い。このままフェザン資本の流入が続けば、同盟のエネルギー業界はフェザンに牛耳られる。そうなれば宇宙のこっち側の商船は、フェザンの意向を無視できなくなっちまうんだが。

「そうしてフェザンが肥太るわけか。全くどうしたもんかね。商船一隻の駆け出し零細資本じゃ、わかってたって出来ることはほとんどないんだよな。んでわかっちゃいても資本蓄積の為にはフェザンに行かない訳にもいかないというね」

ぼやきながら最終チェックの開始を始める。個人的に面識があるフェザン系の独立商人達は、腹黒な所を除けば良いやつなんだがなあ。なにより亡命業務は美味しいし、エンブレム号が業界で認められるためにも外せないビジネスだ。零細資本でビジネスを立ち上げたばかりの俺達に儲け話を無視する余裕はない。

「んで、それなりに成功したらしたで、お偉いさんに絡めとられちまうんかね」

艦橋を出ていったターナーの年頃では、いつか自分の商船を持つんだって夢に向けて、俺はただただ前を向いていた。ただ、あの時の夢をかなえた時、その先にあるものがどんよりとした物だったとはな。とは言えやつとかなえた夢の続きだ。後悔しないように歩みを進めるしかない。

「よし、フェザンへ向けて出発しよう」

暗い方へ進んだ思考を止める様に、俺は出発の指示を出した。願わくば、このもやもやを拭うほどの儲け話に出会えることを望むぜ。小さくなつていく惑星ウルヴァシーをモニター越しに眺めながら、俺はそんなことを考えていた。

## 第9話 商売の都

宇宙暦723年 帝国暦414年 8月末

惑星フェザン 軌道エレベーター 駐船区画

カーク・ターナー

「前世でもそうだったが、金つてのはある所にはあるもんだなあ」

うろ覚えな前世の記憶の中でも、地球と言う惑星を飛び出した宇宙船からの映像も見たことがあった。それに最寄りとは言え、月面着陸の記憶もある。同盟で経験した出来事は、星間国家と言う前世でいう未来世界でありながらも、ある意味、想像の延長にある光景だった。「軌道エレベーターなんて、小説の世界だろ。まさか自分の目で見れるとはなあ。エコニアにいたら映像で見れたかどうかの光景だな」

肉体に引つ張られているのか？軌道エレベーターの巨大さに引きずられているのが？妙にワクワクしている自分がいた。総工費っていくらぐらいなんだろうか？列島改造論で考えた高速道路と新幹線の総工費なんて比にならない金額になるだろう。ただ、星間国家なら資源は前世の数千倍のスケールで用意できる。案外、俺が考えるよりは安上がりなのかもしれないなかつた。

「おーいターナー。ちゃんと下船準備してるか？」

俺が浮かれ半分で思考していると船内通信でキャプテン佐三が声をかけて来た。俺が乗船しているエンブレム号はフェザン本星に到着し、軌道エレベーターの一区画に入港した所だ。本来なら航海士見習いは下船しないで乗船待機する。ただ、亡命業務を担当するので、フェザンでは下船する人員に含まれていた。

「船長、もちろん準備できてます。もともと荷物も少ないですから」  
取りつくりう様に俺は応答する。わざわざ船長が俺に声をかけたきたのも、おそらく亡命案件があるからだろう。フェザンに近づいた段階で、積み荷の売却先はシステム上で決めているはずだ。

すでに船倉からの搬出作業は始まっている。積み荷の代金の入金が確認できた時点で、事前に予約していた発注を確定し、今度は搬入作業が始まるだろう。実務だけならわざわざ下船する必要もない

だが、馴染みの独立商人との顔つなぎや情報収集の為に地上に降りるわけだ。

「初めてのフェザーンだ。浮かれるのも分かるが、地上には帝国人もいるからな。浮かれすぎないように気をつけろよ？」

ニヤニヤしながら船長が注意点を伝えてくる。今更のようにも思うが、航海士はそこそこ高給取りの部類だし、航路によっては数カ月船内で過ごすことになる。初めてのフェザーンで羽目を外しすぎてしまい、数か月分の給与を使い果たして文無しになる航海士の話は、同盟系の商船ではよく聞く話だった。

「笑い話の先例をなぞる趣味はありませんよ。仕送りを減らすわけにもいきませんからね。今日の自由行動では、帝国弁務官府とフェザーン自治領主府、あとは商科大を見て回るつもりです。明日は船長に同行するんですよ？」

「ああ、状況によっては亡命案件の話になるし、そうでなくても酒場ドラクールに新人を連れていくのが、船長の流儀みたいになっていてな。お前が行く予定の商科大を作ったのはオヒギンス氏だが、彼の生涯の盟友だったのがバランティン・カウフ氏だ。そのカウフ氏が起死回生の商機を掴んだのが酒場ドラクールなんだ。縁起を担いで新人を船長がドラクールに連れて行くのが、流儀みたいになっているのさ」

「同盟系の私たちはそもそも候補じゃないですが、『今年のシンドバット賞』を何度も受賞した方ですよ？縁起の良い酒場に連れてって頂けるなんて嬉しいです。船長、ご馳走様です！」

「ご馳走様の時だけは二段階くらい良い挨拶になるな。まあ、年相応で結構だ。俺も新人の時に船長にご馳走して貰ったんだ。俺が独立して最初にドラクールに連れていくのがターナーだからな。まあ、期待してくれ」

そう言って船長は通信を終えた。下船して軌道エレベーターで地上に降りるまでは、一緒に行動する予定だから確認の意味もあったんだろう。カウフ氏とオヒギンス氏に関しては、好みが別れる部分かもしれない。前世で言う西郷さんと大久保さんの関係だろうか？

バルンタイン・カウフは連帯保証人になっていたオヒギンス氏を破産から救うために保険金目的の自殺を考えるまで追い詰められた後、酒場ドラクールで掴んだ商機をきっかけに商売の面では大成功を収めた。だが、現在では商才までは引き継がなかった子孫たちが喰い潰してしまいカウフ財閥は実質一代で泡沫のように消えつつある。

一方で、終生カウフの理解者であり、支援者でもあったオヒギンス氏は、カウフのお陰で手に入った予想外の収入で、フェザン商科大を設立した。商業立国のフェザンに必要な独立商人・経済学者・経済官僚を今でも輩出し続けていることを考えれば、俺はカウフよりオヒギンス氏にあやかりたい。もつとも時間があれば商科大の図書館に行きたいのが本音だ。ただ、大して時間も無い以上、商科大にあるというオヒギンス氏の肖像画くらいは見ておきたかった。

それに、そんな内心を上機嫌でご馳走するつもりでいる雇い主に漏らす程、俺は世間知らずじゃない。カウフ氏の成功に彩られた半生は、確かに商船乗りにとって輝かしいものだ。カウフ氏に習って、後進達が成功しますように！という想いを込めて先輩方がドラクールに連れていく以上、そこには善意しかないんだからわざわざ水を差す様なことを言う方が、むしろ野暮ってものさ。

フェザンの名所マップをタブレットにダウンロードし終えたのを確認して、俺は割り当てられた自室を後にした。シロンでは勉強重視の日々だったし、自由に観光できるのはこれが初めてだ。そういえばジャスパーは元気だろうか？亡命系では水の代わりにワインを飲むらしいが、飲んだくれていれば士官学校への合格はさすがに厳しいだろう。丁度良い。オヒギンス氏の肖像画の写真を添えて、一報入れてやるか。

俺はそんなことを考えながら、下船タラップを降り始める。静止軌道上から高速で下るエレベーターから見える光景に心を奪われるのだが、それはまた別の話だ。

宇宙暦723年 帝国暦414年 8月末

フェザン商科大付近の路地

クリステイン・フォン・ウーラント

「姉さま、もう足が疲れたよ。少し休もうよ」

「わかったわユルゲン。でもあんまりのんびりできないわよ？もうすぐ日暮れだもの」

「うん」

座り込む弟のユルゲンを横目に、夕方の様相をしつつある空を見ながら私は途方に暮れていた。事の始まりは、帝国騎士であるウーラント家が政争に巻き込まれ、親族の支援をうけてフェザーンに亡命した事に始まる。

政争に敗れたというより巻き込まれた形のウーラント家に、帝国政府も同情したのか、それなりの資産を持ち出せたとし、親族から同盟では資産価値が高いらしい絵画なども渡されていた。

フェザーンに到着して2週間。当主であるお父様は、方針を定めるべく連日のように出かけていたが、情報が錯綜しているのか？お悩みのご様子だった。そしてさすがに2週間もホテルの一室に閉じこもっているのは、私はともかく弟のユルゲンには堪える物だった。

お母さまが幼少のみぎりに亡くなって以来。ユルゲンの母親代わりを自認していた私は、気晴らしになればと、弟と一緒に部屋から抜け出し、フェザーンの散策に乗り出した。その結果が今の状況だ。

「ホテルの周りを少し見て回るだけのつもりだったのに」

ため息とともに本音が漏れる。帝国とは違った街並みが珍しかった事と、ホテルに閉じこもっていた反動もあったのか？私たちは興味が惹かれるままにフェザーンの街をうろろし、結果として道に迷ってしまった。そうして右往左往するうちに、10歳の弟ユルゲンの体力が限界に達してしまっただ。

「治安維持組織に身分を明かしたらどうなるかわからないし……」

座り込んでしまったユルゲンを横目に、どうしたものかと考える。これが帝国なら、警察官に声をかければホテルまでエスコートしてもらえただろう。でも、ここはフェザーンだ。対外的には帝国の自治領である以上、亡命したばかりのウーラント家の者が名乗れば、不測の事態になるかもしれない。

「よう！お困りごとかい？」

そんなことを考えていたら、帝国語で声をかけられた。視線を向けると私と同年代のオレンジ色の髪の少年がこちらを見ている。悪印象はないが、状況が状況なので正直警戒した。

「あく。困ってないなら俺は消えるよ。ただ、オルテンブルク家が後援されているイーセンブルク校でお世話になったんだ。亡命者が困っているなら無視するのも気分が悪いからな。声をかけたままでだ」  
そう言いながら敵意がないことを示すようにオレンジの髪の少年は両手を上げた。なんとなくだが、信じてても良いように感じた。

「道に迷ったの。ホテル・シャングリラまで戻りたいのです。私は……」

「あく。名乗らなくてよいよ。俺は同盟人だから、名前を聞いちゃうとそれはそれで厄介な事になるかもしれないからな。ホテル・シャングリラか、少し距離があるな」

そう言いながら手元のタブレットを操作する少年。すると私たちがいた路地に、自動運転タクシーが停車した。

「君はともかく、弟君が歩くには少し距離があるからね。乗った乗った」

そういうと私たちを後部座席に乗せ、彼は運転席に乗り込んだ。

「出身は同盟の中でもド田舎だね。自動運転システムがなかったから、運転席に乗らないと落ち着かないんだ」

そんな会話をしているうちにタクシーが動き出す。その後も、フェザーンか同盟で生活するなら情報端末が必須になると教えながら、彼は自身のタブレットを渡してくれた。

「画面の中心が現在地、そして赤い矢印がホテル・シャングリラだよ。他にもいろんな機能があるけど、情報端末があれば、道に迷うことなんてなかった。フェザーンで過ごすか同盟で過ごすかでメーカーが代わるからね。そういう事が決まったら、購入することをお勧めするよ」

そんな話をしているうちにホテル・シャングリラに到着した。

「ありがとうございます。助かりました」



「良いんだ。亡命系には多少の恩があるからね。それよりも弟君。亡命して色々大変だろうけど、帝国でも同盟でも、男性は女性を守れて習う。ご両親からそういうことは言われない？」

「うん。お母さまは亡くなっちゃったけど、お父様からはそう言われるよ。今日はできなかったけど」

お母さまの事があったから会話を遮ろうと思ったけど、ユルゲンは素直に答えていた。

「そうか、だったら尚更、お姉さんを守れるようにならないとな。約束の挨拶だ」

そういつてオレンジの髪の少年が拳を差し出す。戸惑うユルゲンに

「同じように拳を出してぶつけて。同盟流の挨拶だよ」

そう言われたユルゲンが恐る恐る拳をぶつけると、オレンジの髪の少年は『男同士の約束だ』と言いながら笑顔でユルゲンの頭を撫でた。どこかユルゲンも嬉しげだった。

「んじゃ、またどこかで」

そう言い残すと少年はタクシーに乗り込み走り去ってしまった。何だろう。変に胸がドキドキする。

「姉さま、お腹すいたよ」

そんなユルゲンの声で現実にもどり、私たちはホテル・シャングリラのロビーに向かった。部屋を抜け出していた私たちを探していたお父様に、大目玉を食らうのも、ユルゲンと毎晩していたお休みの挨拶が、この日から頭を撫でるのでは無く、拳を合わせる同盟流の挨拶？になるのはまた別の話だ。

そして一緒に過ごした時間は一時間も無いのに、やけに強い印象を残したオレンジの髪の少年との再会は、意外なほどすぐ訪れることとなる。

## 第10話 ドラクールでの再会

宇宙暦723年 帝国暦414年 8月末

酒場ドラクール 防音個室

グスタフ・フォン・ウーラント

「父上」

嫡男であるユルゲンが右の拳を差し出してくる。我が息子ながら小さな拳だ。優しく右の拳を合わせると、何が楽しいのか？笑顔になった。昨日覚えた同盟流の挨拶らしいが、だいぶ気に入ったらしい。朝から何度も拳を差し出してくるが、ユルゲンの小さな手を見るたびに、何とかこの拳が一人前の大きさになるまでは、守ってやらねばと感じていた。

「それにしてもお父様、私たちも同席して宜しかったのでしようか？」  
「大丈夫だ。書類上の亡命は既に終わったからな。これからは、同盟に向かうにあたって乗船する商船主との商談になる。それに出かけておる間に抜け出すのではないかと気に病むくらいなら、同席させた方が気が楽だ」

「まあ、お父様。もう抜け出すような事は致しませんわ」

フェザーンに到着して以来、亡命申請や情報収集で多忙だった儂は、仕方のない事ではあるが、滞在先のホテルに2人を残して駆け回っていた。ただ、落ち着いて考えれば、ホテルの一室に閉じこもったままと言うのも、慣れないフェザーンという事を加味すれば、それなりに負担だったのだろう。

戻ってみればもぬけの殻の部屋に唾然とし、どうしたものかとロビーに向かうと、ちょうど二人が入ってくる所に出くわした。フェザーンは自治を認められているとは言え、名目上は帝国領だ。最悪の事も想定したし、つい取り乱してしまい、長めに説教をしてみました。「分かっておる。ただ、部屋におるのが気づまりなのも確かであろう？同席しても構わぬことなら一緒にいた方が、ユルゲンの為にも良からう」

ユルゲンの為と言うと、クリステインは納得したのか、外出の際に

するすまし顔に戻った。クリステインも13歳となり、どんどん亡き妻に似てきたがまだまだ子供っぽさが抜けぬ。儂だけなら同盟なりフェザンなりの場末で朽ち果てても構わぬ。

だが、妻が残してくれた2人の事を考えれば、なんとかウーラント家が同盟で根を張れるようにしたい。その思いが、尚更今後の方針を決めるにあたって儂の決断を鈍らせていた。

「でもお父様。亡命が受け入れられた以上、どの商船で向かって同じではなくて？」

紅茶でのどを潤したクリステインが疑問を口にする。ユルゲンはだいぶ気に入ったのだろう。アップル・フリーズを嬉しそうに飲んでいる。この酒場ドラクールは商人たちにとって縁起の良い場所だと聞いた。先行きが読めない状況だが、少しでも良縁に恵まれてほしいと言う思いで、子供にも飲めるカクテルをと頼んで用意してもらった。もともとリンゴジュースは好物であったのも良かったのだろう。

「うむ。向かう予定の同盟もな、必ずしも一枚岩ではないようだ。例を挙げるとすればブラウンシュヴァイク公、リヒテンラーデ侯、ケルトリング伯。どなたを頼るか？という感覚が近いかもしれぬ。どの閥につながる商船で入国するかで、ウーラント家が属する閥が決まるのが暗黙のルールになっておるらしい」

「先に亡命されたお家の方々を頼りませんか？昨日、私たちを助けてくださった方もオルテンブルク家が後援する学校でマナーを習ったと言っておられました」

「それなのだがな。今から向かう同盟では本来は階級のない社会なのだ。オルテンブルク家を始め、亡命された方々を取りまとめる為に帝国のような貴族制を布いている惑星もある。ただ大部分はそうではないのだ。それにフェザンが出来たことで、亡命系と呼ばれる方々は経済的にもダメージを受けているらしい。我らが頼ったところでどこまでご支援いただけるか分らないのだ」

どこまで理解できたのか分からんがクリステインが頷きながら紅茶のカップを手に取った。これはあまり解っておらんのだろうな。ただ、帝国騎士であったウーラント家で、貴族社会における一般教養

はともかく、政治的な視点での分析は分不相応だ。分からぬのも無理はないか。

「それにな。わざわざ苦勞して同盟に向かうのだ。ユルゲンが身を立てる上でも、帝国風の価値観に敢えて染まるのがよいのか？同盟で身を立てるなら、価値観も同盟に染まった方が良いのではないかと悩んでおるのだ」

「そうですね。あの方も同盟の方でしたが、困った私たちを無償で助けてくれました。精神的には騎士に通じる部分がありましたし、ユルゲンの将来を広く考えるのも良いかもしれせんわね」

あの方が……。道に迷った所を助けてもらったらしいが、敢えてお互い名乗らずに済ませたらしい。確かに道に迷う貴族子弟など、フェザーンでは厄介事ではないだろう。こちらはまだ方針が決まらぬ以上、身元を明かしたときにどうなるか分からん。とはいえ、助けてもらったのも事実。いつか正式に礼をすべきだろうが、フェザーンを発つてしまえば、それも適うまいが。

亡命貴族と言つても、ウーラント家は帝国騎士の家だ。政争に巻き込まれたとは言え、難なく亡命できたのは逆に言えば帝国騎士の一人や二人、どこに行こうが構わないという判断もあつたはずだ。亡命系に属せば、ユルゲンの才覚に関係なく、閥の中でも下位に処されるだろう。敢えてわざわざそこに飛び込むべきか？

クリステインも我が子ながら美しく育っている。亡命系に属せばせいぜい侍女になり、仕えたお家のどなたかのお手付きになるのが関の山だ。亡き妻が残してくれた儂の宝に、亡命してまでそんな将来を用意するのは嫌だった。

「それでな。今から会うのは同盟でもバーラト系に属している商船の船長だ。平民ながらゼロから商船を持つまでになり、それなりにやり手だとも聞いておる。方針を決めるにあたって、判断材料を集める意味でも話を聞いておいて損はないと考えていてな」

「承知しました。ユルゲンの将来の為に、お話を色々とお聞きいたしましょう。私も至らないなりに、励みますわ」

状況をすべては理解してはいないだろう。ただ、分からないなりに

励もうとするクリステインを儂は誇らしく思った。確かに亡命する以上、あらゆる事を学びなおす必要があるだろう。亡命するにあたって大切なことを、こんな歳になつて娘に教えられるとは……。儂もまだまだよな。

宇宙暦723年 帝国暦414年 8月末

酒場ドラクール 防音個室

クリステイン・フォン・ウーラント

部屋を抜け出して小さな冒険を終えた私とユルゲンでしたが、部屋を抜け出したことが発覚してしまい、お父様から久しぶりにお説教を受けました。ただ、部屋に閉じこもっているのも確かに良くないとお考えになり、翌日から出かける際には私たちも同席させる判断をされました。家族そろつての外出など久しぶりです。

それだけでも嬉しいのに、昨日見たフェザーンの街並みは、今日も私には新鮮に映ります。帝都とはどこが違うのか？疑問に思いました。確かに帝都では禁止されている高層建築もそうですが、一番の違いは、街を行きかう人々の活気でしょうか？皆様笑顔で、それだけで感じる印象も明るくなります。

「たまには二人で歩くのも良からう」

お父様に続くように、ユルゲンと手をつなぎながら歩みを進めます。往來を整理する標識が赤になると、立ち止まることになるのですが、その度にユルゲンはお父様に右こぶしを差し出して、あの方が教えてくれた同盟流の挨拶をせがみます。余程気に入ったのでしよう。

まだ小さなユルゲンですが、私を守るようになると目の前で約束してくれました。嬉しい気持ちもありましたが、母を亡くして以来、ユルゲンの母親代わりを自認している私としては、ユルゲンが誓いを守るように支えていこうと心に決めています。

「うむ、ここだな」

目的地に着いたのでしよう。お父様は重厚なドアを開けると、私たちに入る様に促します。店内に入ると、活気があつた店外とは別世界のようにでした。静かな店内はさりげなく帝国の物とは違う音楽が流

れ、従士のような制服を着た男性が、カウンターの向こう側でグラスを磨いています。その立ち姿がなんとも様になっています。

抑えられた照明を磨き上げられたグラスが反射し、まるで星空のようでした。もっとも初めて宇宙を体験した時は、とにかく急がねばならず、どこか不安が付きまとい、冷静に振り返れば美しかった光景も、楽しむことはできませんでした。

父に促されるようにカウンターから先に進み、がっしりとした造りのマホガニーの円卓に、同じく造りの良い黒革のソファアが備え付けられた個室に腰を落ちつけます。

「折角だ。カクテルを試してみるか？」

お父様が問いかけてきますが、どこか心が浮ついていたのを見透かされたようで気恥ずかしい。それで私は紅茶をお願いしました。ユルゲンはノンアルコールカクテルを頼んでいましたが、円卓の中央にともされた蝋燭の灯も相まって、すごく美しく見えます。次のオーダーでは私もカクテルと頼もうと思います。

この場の雰囲気がそうさせるのか？お父様はウーラント家の先行きに関してお悩みな事を、吐露されました。すべては分かりませんが、亡命してまで貴族社会の端である帝国騎士にこだわるべきなのか？これから向かう自由惑星同盟では、才覚次第で平民でも商船持ちにもなれる社会です。

姉バカかもしれませんが、ユルゲンは天才ではないかもしれませんが、勉強も良くでき、何より優しい心持ちです。時に同僚と貶めあう事もある貴族社会には正直向いているとは思えません。

ただ、帝国で貴族制に慣れ親しんだ私たちにとって、階級が存在しない社会と言うのは未知も相まって不安が残ります。先に亡命された方々が、帝国のような貴族制を踏まえた社会をつくられたのも、ある意味、その不安が無視できなかつたのでしよう。

「お寛ぎの所失礼します。お約束を頂いておりましたキャプテン佐三でございます」

「お世話を担当しております。カーク・ターナーでございます」

お父様と色々と話していると、男性の声が響きます。視線を向ける

とお父様がお話していた商船の船長と見覚えのあるオレンジ色の髪の少年が、入口に控えていました。

「ウーラント・フォン・グスタフだ。今日はよろしく頼む」

「長女のクリステインと申します」

「嫡男のユルゲンと申します」

お父様が応じるのに合わせて名乗りながら改めて確認する。間違いない、あの方だ。ユルゲンも気づいたのだろう。さりげなくターナー様に手を振っている。小声でお父様にターナー様が昨日お助け下さった方だと伝え、視線をもどす。何か不都合があつたのかしら？ターナー様はユルゲンがいたずらが発覚した時によくする表情に似た表情を浮かべておられた。

でも、ウーラント家はきつと大丈夫。親切にして下さったターナー様ならきつと良いアドバイスを下さるはず。それまで感じていたもやもやした不安が晴れていくような気がした。視線を向けるとユルゲンがさりげなく右こぶしを差し出そうとしている。さすがにこの場ではまずいでしょう。さりげなくユルゲンの手を制して、私たちは席に着きました。

## 第11話 緊張の商談

宇宙暦723年 帝国暦414年 8月末

酒場ドラクール 防音個室

カーク・ターナー

「船長、見間違いじゃなければ、昨日助けた貴族子弟がいるんだけど」「お前さんは縁に恵まれてるんだなあ」

亡命案件の商談になるため、キャプテンについてきた訳だが、商談相手のウーラント家が指定した個室に向かうと、どうみても昨日ホテル・シャングリラに送り届けた貴族の姉弟が席についている。

「別に非難されることはしてないんだ。堂々としとけ」

ウーラント家の当主であろう中年の男性に、船長と俺は名乗り、頭を下げて控える。亡命者相手におかしな気もするが、フェザーンはあくまで帝国の自治領。同盟領域に入らない限り、身分に一定の配慮をするのがマナーだ。亡命派の領域に行く判断をすれば、そのまま爵位がまかり通る価値観の社会に行く訳で、わざわざ同盟では皆平民だと、敢えて波風を立てる必要はない。

「グスタフ・フォン・ウーラントだ。今日はよろしく頼む」

「長女のクリステインと申します」

「嫡男のユルゲンと申します」

ご当主の名乗りが続いて、姉弟もこの場では名乗ってくれた。個室に入り末席に着くが、距離が近くなって再確認したけど、やっぱり昨日の姉弟だ。金色の手入れの行き届いた髪に、青い瞳。貴族つて感じの容姿だが、姉の方は昨日とは違って好奇心に満ちた視線を向けてくる一方、弟の方はさつきはさりげなく手を振って来るし、しまいには右こぶしを差し出す素振りをしてきた。さすがに察したのか、姉のクリステインが自然に手を押さえて席に着く。ありがとうクリステイン。

『情けは人のためならず』とはよく言ったものだ。前世でも助けになれるなら援助は喜んでしていたし、それを恩に着せることは絶対にしなかった。援助したことや金を融通した事は翌日には忘れる。こち



らが恩に着せないからこそ、相手も出来る限り恩を返そうと思うものだ。

とは言え、若気の至りではないが、昨日の一件は自分でも少しかつこつけすぎた感覚があった。異国の地でちよつとした事件のちよつとした思い出話になれば……。くらしいの感覚だったのに翌日に再会となるとどうも様にならない。クリステインとユルゲンが俺に笑顔を向けてくるが、気恥ずかしかった。

「ウーラント卿はご承知かもしれませんが、ここは商船乗りにとつて聖地みたいなものです。ここでご縁を得た方にドリンクを奢ると幸運に恵まれる……。なんて話もございます。失礼ながら私の盃を受けて頂けますか？」

「もちろんだ。キャプテンは船を持たれて初めてのフェザンだと聞く。そのような記憶に残る節目での配慮だ。喜んで受けさせてもらおう。ただ、貰つてばかりでも心苦しい。ウーラント家の未来に幸がある様に、2杯目は嫡男ユルゲンから、盃をお返ししたい」

そんなやり取りから商談はスタートした。丁度時刻は3時。午前中に並んで用意したフェザンでも評判の店のバームクーヘンを、ウーラント卿の許可を得て添える様に出してもらおう。バームクーヘンの断面の様子が木の年輪のように見え、繁栄、長寿、幸せ重ねる、を連想させるから縁起の良いものとされている。フラウベツカーから習ったんだよな。先生の教え、さっそく生きてます。

初対面での贈り物は、目上の立場からならともかく、目下の者からの贈り物は高価なものは逆に失礼とされる。目下の物は予算が少ないなりに気遣いと足を使って好意を示すのが良いとされるのだ。

「うむ。バームクーヘンは良縁にもつながるし、たいそう美味じゃ」  
ウーラント卿も喜んでくれたようだし、クリステインとユルゲンも笑顔で食べてくれている。俺もご相伴に与ったが、朝から並んだことを差し引いてもかなり美味だった。フェザンの印象など、当たり障りのない話をしながら、1杯目を飲み終わり、ユルゲン名義の返杯となる2杯目がテーブルに並んだ所で、船長が本題に入った。

「ウーラント卿、今回バーラト系に属している私どもにお声がけ頂け

たのは、視野を広くもって判断材料を集められたいのではと愚考いたしました。同席いたしましたターナーは、同盟でも辺境星域の出身で、亡命系の教育機関にも短期入学しております。

ひいき目なし……とは申しませんが、忌憚なく同盟の現状をご説明できるでしょう。その上でのご判断が私共がお役に立てる物であれば、是非お力にならせていただきたく存じます。そのような形で進めさせていただいても宜しいでしょうか？」

ウーラント卿が同意するのを受けて、船長が俺に視線を向ける。

「では、非才ながら不肖ターナーがご説明させていただきます」

俺は船長から預かった大き目のタブレットに一枚にまとめた概要図を表示してウーラント卿の手元に置く。また同じものを表示した私物のタブレットを、クリステインとユルゲンの間に置いた。

「概要図をご覧ください。現在の同盟では大きく分けて5個の属性に分けられます。このうちの一つである辺境星域に関しては、満足なインフラ投資を受けられずぎりぎりの生活を余儀なくされています。亡命後の居住候補としては厳しいので除外いたします」

ユルゲンの反応はイマイチだが、ウーラント卿とクリステインは頷いている。それなりの資産を持ち込んでいるのに、わざわざ辺境の未開拓エリアに移住するのは、かなりの物好きか脛に傷がある奴位だろう。

「まず経済的に一番大きな派閥であるバーラト系です。中心は同盟の建国者たちの子孫です。同盟の富裕層の多くが、ここに該当します。バーラト系でも亡命者の扱いで大きく原理派と融和派に分かれています。勢力は防衛戦争が優勢なこともあり、融和派が少し優勢です」

原理派はある意味もつとも主張がはっきりした派閥だ。帝国の打倒のために軍備拡張政策を押ししている。そして亡命者に関しては自由惑星同盟に暮らす以上、疑似的なものとはいえ階級社会も認めないし、財産の持ち込みに関しても一定額上はかなり高い税金を課すべきだと主張している。

一方で融和派は、自分たちの政体の有り様をどんな形にするか？は地域住民が決めればよいと考え、さすがに独裁制は許さないが、疑似

的な貴族制も議論の上で意思決定するなら受容すべきと判断している。財産の持ち込みに関しても、最終的に同盟の国力増強につながるかと判断して、基本的には非課税だ。

「原理派はブルー、融和派はグリーンで色分けしてございます。補足ながらエンブレム号は融和派の資本に属しています。次に亡命派です。亡命派もある意味同様に、原理派と融和派に分かれております。フェザーンの設立による経済的な打撃と、マンフレート2世陛下の暗殺を機に、バーラト系が高貴な血を使い潰したという疑惑が浮上いたしました。8割程度が原理派でバーラト系とはある意味冷戦状態です」

原理派は文字通り疑似的な貴族制を維持しつつ、防衛戦争にも最低限の協力で済ませようという主張だ。都合が良すぎる様にも思えるが、亡命者が大量流入した際に、バーラト系の原理派が財産の没収や徴兵名簿に不当に亡命者を入れようとした背景もあり、自衛せざるを得ないという所か？

亡命系融和派は俺の知り合いならジャスパーが当てはまる。貴族制を布いているとはいえ、生活の中で同盟の情報に触れる機会も多い。雁字搦めの亡命系社会に閉塞感を感じ、積極的にバーラト系に協力してしつかりとした立場を得ようという主張だ。嗜好品の多くは売れなければ意味がない。そういう意味でも実際に生産や流通にかかわる層も、上層部の気持ちは分かるが現実をみてくるところだろうか。

「ふむ。候補となるのはバーラト系・亡命系の融和派になりそうだな。バーラト系の原理派はそもそも候補から外れるし、亡命系の原理派に与してもウーラント家は所詮は帝国騎士。何かと資本提供を迫られるのがおちだろう」

「はい。私も亡命系の中心、シロンに滞在しましたが、良くも悪くもキツチリした階級社会でした。失礼ながら帝国騎士と言う階級で、新参ともなれば何かと財産をむしり取られはしても厚遇されるかは疑問でございます」

「ターナーの申す通りであろうな」

ウーラント卿も色々想定されていたのだろう。予想の一つではあったが、当たってほしくない予測だった印象だ。少し悲しげな表情をされている。

「残念ながら亡命系融和派はそこまで力を持っておりません。その観点から見ても、バーラト系の融和派をお選びになるのがよろしいかと愚考します」

もう少し理解が遅かったり迷うようなら言うつもりはなかった。ただ、帝国騎士のウーラント家がちゃんと同盟に根を張るには、消去法でバーラト系融和派につながるしかないのも確かだ。とは言え具体的な成功イメージが持てないと不安は消えない。分かっているけど決断するのは難しいだろうな。

「ここからは私見なのですが、もし私がウーラント卿のお立場なら、どうビジネスを立ち上げるかを考えてみました。お話してもよろしいでしょうか？」

船長に指示されたのは概要の作成までだ。でもさ、一応商會に勤務してたしそれなりの資本を持ってビジネスを始められるのって恵まれてるんだ。多くの平民は会社勤めをしながら資本と人脈をつくって独立するんだから。俺にそんな幸運は訪れないだろうけど、尚更だからこそ考えてみたかった。ウーラント卿の了承を得て、話を進める。

「亡命系融和派との伝手を活かしながら、バーラト系融和派のエリアで入り込む隙のあるビジネスと言うと、それなりの経済レベルの消費者がいるエリアでの、帝国風の食材の生産が良いと考えました。最有力はバーラト星系の惑星テルヌーゼン。士官学校を始めとした軍教育施設が集中し、バーラト系だけでなく少数とは言え辺境系・亡命系も生活する惑星です」

俺は念のために用意していた資料に切り替えて説明を続ける。

「惑星テルヌーゼンの不動産業界の雄、ウォーリック商會の会長は、帝国の美術品の収集家でもあります。失礼ながら持ち込まれた美術品のうち、価値の高いものを交換材料に郊外の広めの農場を手に入れます。そこで農作をしつつ、牧畜・酒造も行い、亡命系融和派の家業を

継げなかった若者たちに帝国風の食材と地ビールを生産させます。比較的軍人の多いエリアですから、戦争中の相手国の食材を食らう、酒を飲み干すという行為は、士気を高める意味でも好まれるでしょう」

ウーラント卿の反応も上々だ。別に帝国風の料理を出す必要はない。使われている食材や酒が帝国に関する物。ビジネス界や政界ではそこまでニーズはないかもしれない。でも軍人にはニーズはあるだろう。軍人が顧客に多いテルヌーゼンなら、ビジネスとして成立する可能性は高かった。

「うむ。そこまで青写真を用意されて決断できねばウーラント家の名誉に関わる。亡命の件はエンブレム号をお願いすることでしょう。少し細部を相談したい。キャプテン佐三、カウンターに付き合ってもらえるかな？ターナー君はクリステインたちの相手をお願いできれば幸いだ」

そうだよな。選択肢は限られていてもその先が見えなければ決断は厳しいよ。本職から見ればつたないかもしれないが、自分なりに考えて良かった。カウンターへ向かうウーラント卿と船長の道を開ける様に、俺は椅子から立ちあがる。二人が部屋から出て行ったあとは、昨日フェザーン観光をした際に撮った写真を交えながら、クリステイン・ユルゲンの三人で、フェザーンの印象や商船での生活の話をして過ごした。

二人が戻るまで相談と言うには長めの時間があり、戻ってきたときウーラント卿は少しホツとした様子で、船長の表情が少し曇っていたのが意外だった。やばい、俺やりすぎたかな。

## 第12話 苦渋の決断

宇宙暦723年 帝国暦414年 8月末

酒場ドラクール カウンター席

キャプテン佐三

商談をしていた個室から、ウーラント卿に促されてカウンター席に移動した。亡命してからのビジネスプランをターナーがプレゼンした時は、正直そこまで踏み込んで失礼にならないか心配した。結果としてウーラント卿の決断を促すことになったが、個室を出てカウンターに向かうウーラント卿の後ろ姿には、どこか思いつめた雰囲気がある。

「ジンバックを二杯頼む」

カウンターに座ったウーラント卿がマスターにオーダーをする。はあ、よりによってジンバックか。カクテル言葉は『正しい心』。思いつめた表情にこのカクテル言葉。確かにな、同盟に亡命してからのビジネスプランは用意されても、実際にそれを実現する人材が必要だ。クリスティン嬢は確か13歳。ユルゲン坊ちゃんは10歳。帝国でそれなりに教育を受けていたとしても頭数に入れるのは厳しい。

そしてウーラント卿は初老とは言わないが40代半ばだ。ユルゲン坊ちゃんも成人する10年後まで、一人で亡命先でビジネスを立ち上げなければならぬ。そもそも宮仕えの経験はあっても、ビジネスに関わった経験はないだろう。ターナー、俺に何とか仕事を取らせなかったんだろうが、さすがに能力を見せすぎたかもしれないぞ。

「亡命の件はよろしく頼む。それにしてもターナー君は優秀だな。昨日は子供たちを助けて貰った。フェザーンに来た時は不安もあったが、良き縁に恵まれたようだ」

「ウーラント卿の言葉を聞けば、あいつも喜びましょう」

そんな会話をしながら、グラスを合わせる。しばらく無言の時間が流れた後、ウーラント卿は無言で俺に頭を下げた。

「そのような事はおやめください」

「いや、これから話す事を考えれば、頭を下げるのが筋だ」

肩に手を添えて、頭を上げる様に促す。ウーラント卿は手を添えてもしばらく頭を下げたままだった。商船乗りとしての格を上げるために亡命業務を担う準備をした。今回も半分はターナーの存在があつてお任せ頂けたとも言える。

ただなあ、井上から預かつたターナーをいきなり手放すのはそもそも不義理だ。それにうちの航海士たちもなんやかんやターナーを可愛がつている。機関長が意気消沈する様子が目に浮かんだ。

「同盟の若者がどの程度優秀なのかは分からん。だが、ターナー君は私の目から見てもかなり優秀だ。子供たちとも不思議な縁があるし、クリステインも気に入っている様だ。同盟でウーラント家が根を張る道は確かに見えた。だが私だけで歩き切るのは無理がある。それに万が一の時のことも考えねばならん。クリステインの相手として、優秀で信頼できる者を置いておきたい。帝国なら寄り親に後見を頼めただろうが、同盟では頼れる存在もない」

「確かに良くてできたプランです。成功の見込みも高いですが、失礼ながらウーラント卿はビジネスの場でのご経験はあまりないでしょう。そういう意味でもターナーのような人材は必要でしょう。なんとなく、表情からお察ししておりました」

お互いジンバックを口に含む。ここのジンバックは確かに美味しいんだが、今回ばかりは美味しくは感じなかった。俺にとっても苦渋の決断だが、ウーラント卿は更に悩んだことだろう。

そこまで考えて、帝国騎士という階級に思い至った。彼らはあくまで仕えている主君なり上役達の決断に従って動く存在なのだ。爵位持ちの当主なら、これくらいの判断は顔色を変えずに行うだろう。そして経験がないだけでなくウーラント卿ご自身が、もしかしたら誠実すぎるのかもしれない。なかった。

「ならば、私が考えたこともお見通しだろうな。ただ、こんな都合の良い話を考えることが許されるのだろうか。ユルゲンは見た目も悪くない。誠実な性格だし才覚もそれなりにあるだろう。だが、軍人としての適性は残念ながらあるまい。命の奪い合いをするには心根が優しすぎる。ウーラント家の為にビジネスの立ち上げをさせた上に、嫡

男を守るために軍に志願させる……」

そこまで言うと、ウーラント卿はグラスを手に取り、ジンバックを一気に飲み干した。

「帝国でならお家の為でまかり通る。だが同盟の価値観ではどうなのか？お家の為に自分の夫を軍に捧げる。しかも憎からず思ってもおろう。それを知った時、クリステインがどう思うか……」

「それは状況次第でしょう。ビジネスがうまく立ち上がり、ターナーも軍で功績を上げて昇進する。そんな未来ならクリステイン嬢もご不満には思われないのでは無いですか？そんな未来を掴めるかは、ウーラント卿ご自身と見込んだターナー次第ではありません。それに、このまま航海士の道を進んだとしても、徴兵のリスクはあるのです。」

入植を理由にターナーの父親は徴兵免除となつていますから、徴兵される可能性はむしろ高かった。航海士を目指していたのも、半分は徴兵時に戦死しやすい陸戦隊を避ける意図もあったでしょうから」

そう言いながら俺もジンバックを飲み干す。いつの間にかやらターナーを引き抜かれる事を受け入れている自分がいた。俺みたいな独立商人に頭を下げ、悩みを吐露するウーラント卿にほだされた訳じゃない。実際ターナーにとつても大きなチャンスだ。初期投資の原資が準備されていて自分で考えたビジネスプランを実際に立ち上げる。大商人の家にでも生まれないと、こんなチャンスは得られない。

「であれば、テルヌーゼンに着いた段階で、婚約させてしまった方が良いだらう。ビジネスを立ちあげる段階ではこちらが交渉も不利であらう？婿入りや嫁にと交渉材料を出されるのは避けたい所ではある」  
「そうされるのがよろしいでしょう。同盟には身分がないとは言え、バーラト系の富裕層はエリート意識のようなものがございます。そういう面でもターナーは良くも悪くも辺境星域の出身者ですから、誠心を尽くしてくれるでしょう」

ウーラント卿はターナーを迎え入れられる道が見えたからか、ホツとした表情をしている。クリステイン嬢は確かに貴族然とした容姿だ。交渉相手次第で婚姻を求められる可能性もあるだろう。だが、そ



れでは亡命系で爵位持ちに仕えさせるのとあまり変わらない。

そういう意味でもウーラント卿は誠実ではあるが、非情な決断は出来ない方だ。世渡りも決してうまくない。ターナーを迎え入れたいと思われたのも、ご自身の力量を把握しておられるのもあるのだろう。スポンサーとしては、むしろ適性がある。変に口を挟まないだろうから、実務担当になるターナーはやりやすいはずだ。

「そうになると、テルヌーゼンまでの航海の合間に、ターナーにビジネス界の予備知識を、私からも仕込みましょう。零細資本の商船乗りですが、多少はバーラト系融和派の商会にも顔つなぎが出来ます。微力ながら後進の門出を応援させて頂きます。それに士官学校対策もおいおい考える必要もございましょう?」

「勿論だ。クリステインの婿を兵卒で送り出すわけにはいかん。そうか、同盟の士官学校と言えば名門であろうしな。支援は惜しまぬつもりだ」

すべき事が見えて、ウーラント卿の表情は晴れやかだ。それに比べて俺はなあ。無理を聞いてくれたであろう井上に詫びもしくちやいけないし、航海士たちにも事情を説明しなきゃならない。しばらくはウーラント家のビジネス立ち上げを支援する事になるだろうが、亡命業務担当もまた探さなきゃならない。

だがうまくいけばウーラント商会との濃いつながりができるし、亡命系融和派とのつながりも持てるだろう。そうなればうちにもメリットはある。その為にはターナーに頑張ってもらってしっかり立ち上げをしてもらわないとな。

「おお、忘れておった。ターナーも信頼できる年上の相談相手が必要であろう。キャプテンさえ良ければ、ターナーの後見人になってもらいたい。もちろんクリステインとの婚約の後で正式に依頼するつもりでいる」

笑顔のウーラント卿が、俺の肩に触れながら話しかけてくる。成功すればこっちも見返りが大きい。それにターナーを放り出すような真似は出来ないし、関わった亡命者がちゃんと同盟で成功しているとかなれば、エンブレム号の評判も良くなる。もちろん二つ返事でお受

けた。

ん、ちよつと待てよ。クリスティン嬢とターナーの気持ちはどうなんだろうか？まあクリスティン嬢はターナーに好意を持っている感じはあったが、家族の為に仕送りするのが楽しみのターナーは、自分が結婚することなんて考えたことがあるんだろうか？

でもなあ、亡命者とは言え帝国騎士から婚約を望まれたら断れないよな。それによくよく考えたらクリスティン嬢も美少女だ。身を固めるには少し早い気もするが良い相手だろう。

まあ、なんでもそつなくこなすターナーがどんな反応をするか楽しみではあるよな。これからの対応で頭を悩ませていたが、見込まれたと言えば聞こえは良いものの、苦勞をしい込むターナーの事を考えると、少し気持ちが軽くなった。まあ、ほんの少しだがな。

## 第13話 その頃 トーマス・ミラー

宇宙暦723年 帝国暦414年 9月末

惑星エルファシル 軍事宇宙港

トーマス・ミラー

「よし、第552陸戦大隊、本部付は集まれ！」

本部付き小隊を取りまとめる軍曹の掛け声に合わせ、大隊本部付き小隊が軍曹の前に整列する。軍曹の指導は厳しいものだったが、ちゃんとメリハリを付けてくれる。先輩のクランク上等兵に言わせると、上官としては当たりの部類に入るらしい。

惑星エコニアで軍に志願してから、10か月の新兵訓練カリキュラムを終えた僕は、第552陸戦大隊の本部付きを拝命した。本隊は僕が新兵訓練に参加した頃から、ダゴン星域に属する惑星カプチエランに派遣されている。ダゴン星域と言えばリン・パオ、ユースフ・トパウル両元帥が帝国軍を撃滅したダゴン星域の会戦が有名だ。ただ、コルネリアス帝の大親征の際に惑星カプチエランは帝国軍に占拠された。

豊富な天然資源を有しつつも、極寒の惑星である惑星カプチエラン力。大親征を跳ね返した同盟軍ではあったが、極寒の惑星は一年の半分は猛吹雪であらゆる軍事的活動を拒絶する。コルネリアス帝の功績を失うわけにはいかない帝国と、同じく建国以来、初めて帝国軍を撃破した会戦の場であるダゴンを失うわけにはいかない同盟は、猛吹雪の合間を縫うように地上軍に補給をしながら、血で血を洗う陸戦を繰り広げている。

「喜べ、大隊長であるシャープ大佐から軍資金を預かった。エルファシルでの補給が終われば、我々はダゴン星域に向かう。エルファシルですっかり充電する様にとのことだ。小隊はこれより歓楽街へ侵攻する！任務はとにかく楽しめだ。ついてこい！」

軍曹を先頭に小隊が動き出す。僕たちは補充兵扱いだ。今は本部付きだけど、慣れた所で各小隊に配属される事になる。もつとも軍曹からは帝国語が話せる事と、在庫管理業務が出来る事から大隊付きの

ままになる可能性が高いと言われていた。

「やったなミラー。命の洗濯だ。すっかり楽しもうぜ」

クラーク上等兵が上機嫌で肩を組んでくる。もつとも僕を含め小隊全員が惑星カプチェランカが最前線の激戦区である事は理解している。新兵である僕を氣遣って上等兵も敢えて明るく振舞ってくれているのだとなんとなく感じた。おそらく軍曹の馴染みであろう居酒屋に入り、飲み会が始まる。

「カンパニー！」

皆でジョッキをぶつけ合い、エルファシルで生産されている地ビールを飲む。僕は17歳になったばかりで、本当は飲酒が出来ない年齢だけど、誰も細かいことは言わなかった。大皿に盛られた料理がどんどん出てくる。両親や生まれて間もない弟にも、分けてやりたいなんて事を思った。それに弟分のターナーともこんな場で一緒に過ごせば良いなとも思う。

新兵訓練中は実家も含めて個人的な連絡は禁止されていた。訓練を終えた頃合いでタブレットを開くと、両親から弟が生まれた旨の連絡と、ターナーからフェザン商科大に飾られているオヒギンス氏の肖像画の写真が添付されたメールが届いていた。井上オーナーからも、僕とターナーがエコニアから旅立ってしまった為、半分愚痴のようなメールが来ていた。なんとなく心が温かくなった。

「ミラー、大佐の奢りなんだ。ジャンジャン飲もうぜ！」

クラーク上等兵が新しいジョッキを2つもって僕の隣に座る。一つを僕の手元に置くと、グツとジョッキを傾けた。僕はお酒はあまり飲みなれていない。正直、上等兵の様に飲み干せるかは分からなかったけど、彼の心遣いを無下にするのも気がとがめた。続くようにジョッキを手に取り、一気に飲み干す。

「おっ！ミラーはいける口だな。お姉さん、お代わり2つよろしく！」

そう言いながら大皿から料理を取り分け、ガンガンかきこむ。

「ガンガン食って、ガンガン飲んでけよ？ミラー。俺たちは身体が資本だからよ」

そう言われたら食べない訳にもいかない。僕も大皿から料理を取

り分け、口にかきこむ。母さんの味付けより少し濃いめの料理は、不思議とのどの渴きを誘う。お代わりのジヨツキが運ばれてくると同時に手に取り、のどを潤した。最前線へ行く以上、この中の何人かには、これが最後の晩餐になるのかもしれないなかった。

ベテラン兵も含めて不安を吹き飛ばすかのように今を楽しむ光景は、どこか矛盾を感じつつも、軍曹を含めてみんながただの人間なんだと思える光景だ。そう考えると最前線へ行く不安も不思議と薄まっていた。

「よし、ちゃんと楽しんだようだな、ここからは自由時間だ。集合時刻は明日1300とする。羽目を外しすぎて警察のお世話になるような事が無いようにな」

古参兵たちは2次会に行くようだ。クラーク上等兵が誘ってくれたけど、僕は夜風に当たりながら酔いを醒ましたかった。ほろ酔いのまま、歓楽街を抜け、軍事宇宙港沿いの道を歩く。そよ風が不思議と心地よかった。しばらく歩くと緑地公園が見えてくる。僕はベンチに座り、視線を空に向けた。星空が不思議と心にしみる。

「あら、先客がいたみたいね。こんばんは」

「こんばんは」

声の主に視線を向けると、黒髪黒瞳の女性が、こちらを見ていた。「近くで働いているんだけど、まっすぐ家に帰るのは寂しいから、この公園でしばらく過ごすの。隣良いかしら？」

そういうと女性は僕の隣に腰を下ろした。かすかに香る香水の香りがすごく印象的だった。

「新兵さんかしら？古参の皆さんは二次会に繰り出したってとこね。なんとなくわかるの。エルファシルの歓楽街は最前線に向かう兵隊さんたちの最後の癒しの場だしね」

そう言いながら、彼女はタバコを胸ポケットから取り出し、口にくわえた。こんな時にも日常習慣は抜けないんだろうか？軍曹のタバコに火をつけるために、クラーク上等兵がくれたジッポを取り出し、彼女のタバコに火をつけた。

「紳士なのね。ありがとう。ヤン・シーハンよ」

「トーマス・ミラーです」

自然に名乗られたが、僕の自己紹介がどこかおかしかったのか？彼女は僕の自己紹介を聞くと笑い声をあげた。その笑い声は変な嫌味が無くて、僕も思わず笑ってしまった。それからとりとめもない話を、彼女がタバコを吸い終わるまで続ける。

「ねえ、今日は自由行動でしょ？家で飲み直さない？今夜はひとりで飲みたくないの」

そう言いながら彼女は俺と腕を組み、歩き始めた。断るのは気が引けたし、もう少しだけ彼女と一緒に居たい気持ちもあった。それから彼女が暮らしているフラットに向かい、色んな話をした。彼女には将来を誓い合ったトーマスという恋人がいたらしい。帰宅前のひと時を過ごすあの公園で、同名の僕に会って、縁みたいなものを感じもう少し話したかったらしい。

しみりした話はそれだけで、彼女はエルファシルの話を色々してくれた。エルファシルと比べられないけど、僕もエコニアの話をした。志願して以来、こんなに楽しい時間はなかったけど、初対面のシーハンとそういう時間を過ごせることが不思議だった。

「泊って行ってトーマス。年上のいう事は聞くものよ」

そろそろ帰隊すべきかと考え始めた頃合いで、彼女はそう言いながら唇を合わせてきた。そのまま手をつなぎベッドルームに向かう。そこで僕はシーハンと一夜を共にした。初めての経験だったけど、彼女の体温は温かく、肌を合わせれば合わせるほど、愛おしい気持ち溢れる。夢中になってしまったけど、負担になっていないだろうか？

いつの間にか抱き合ったまま眠ってしまい、朝を二人で迎えた。シーハンが作ってくれた朝食をゆっくり二人で食べ、別れ際に長めのキスをして、僕は原隊復帰すべく軍事宇宙港に向かった。外泊しても問題は無いのだけど、なんとなく気恥ずかしい。原隊復帰すると

「お、ちゃんと癒しを得たようだな。首元に男の勲章がついてるぜ」

とクラーク上等兵に言われた。急いで鏡に向かうと首元にキスマークがついていた。本当なら恥ずかしがるべきなのかもしれないが、あの夢のような一夜が夢でない証のような気がして、僕は嬉し

かった。もし生きて帰れたら、もう一度シーハンに逢いたい。それに万が一のこともある。僕はターナーに表現を選んでシーハンの事を伝え、もしもの時は彼女に連絡してほしい旨をメールした。

エルファシルを出れば作戦行動に入る。次に連絡できる機会が何時になるか分からないから。でも出来たらもう一度シーハンに逢いたい。そんな思いに浸りつつも、いつの間にか乗船している輸送艦はエルファシルを離れ、ダゴン星域に進路をとった。小さくなつていくエルファシルを見ながら、僕は今まで感じたのとは少し違う寂しさを感じていた。

## 第14話 その頃 フレデリック・ジャスパー

宇宙暦723年 帝国暦414年 9月末

惑星シロン 平民街

フレデリック・ジャスパー

「うむ。お家の事が何とかなるなら、むしろ行動を早めるべきだろうな」

「ああ。何とかじい様は説得できた。とは言え婆様が無言で悲しそうな表情をするから敗戦しかけたが」

「貴族も平民もそういう所は変らんか。俺も母さんの涙はどうしようもなかったが、何とか受け入れてもらったよ」

ターナーの財布が許す範囲でという事で出入りを始めた平民街のボールで、飯を食いながら俺は友人とお互いの戦況を報告しあっていた。俺の対面で豪快にソーセージに食らいついている男は、ヴィットリオ。がっしりとした骨太の体格で、一見クマのような印象を受けるが、話してみると優しい男だ。

彼の実家であるベルティーニ家は大規模な農園を運営しており、シロン名産の紅茶を始め、様々な作物を生産している。年の割にがっしりとした体形は、もしかしたら農園を幼い頃から手伝った成果なのかもしれないかった。

「ベルティーニ家でも俺は3男だ。抱え込んでも農園の経営者が増えるだけだし、今は原理派が強い。とは言え、うちは紅茶が売れなきや話にならない。一人くらいバーラト系と誼を通じる意味で、士官学校に行かせる判断はするだろうし、俺自身もこのまま農園主になるのは詰まん。ある意味渡りに船だったが、ジャスパー家はフレデリックに何かあれば断絶だろう？本当に良いのか？」

ソーセージを噛み下したと思ったら、急に顔を寄せてきて小声で話しかけてきた。豪快なのか繊細なのか？若しくは周囲の平民に聞かせる話でもないと思っただのか？ターナーとは違った意味で、俺の周囲には今までいなかったタイプだし、俺はこいつを好ましく思っている。



「まあ、死ぬと決まったわけじゃない。それにな、ジャスパー家はもともとオルテンブルク家の従士の家柄に過ぎん。変に俺がシロンに留まり、血脈を広げてしまおうとそれはそれで邪魔なのさ。そういう意味で士官学校に行かせる判断は、俺を守る意味でも正しい」

「それはそうだが、オルテンブルク家は亡命原理派の雄だろうか？士官学校を経て任官しても、戦死の可能性が高い前線に配属されるのか？昇進も多少は優遇されるだろうか？」

ヴィットリオは相変わらず小声だ。どこかで既視感があるなと思つたら、最近フェザーン系の配信会社が始めたクマのアニメーションだ。蜂蜜を夢中で食べるシーンによく似ている。丁度ここに来る前に通りかかった広場のモニターで映っていたシーンだ。

「そういう考え方もあるが、どうせやるなら俺は自分の力を試したい。俺達が功績を上げて成功するほど、亡命融和派も増えるだろうし、後続く連中も増えるだろう。バーラト系融和派も、さすがに血筋だけじゃ重視してくれない。そういう意味でも功績は必要だ」

「そうだな。バーラト系融和派とすっかりしたパイプを作りたい。そういう意味でも、俺達の責任は重大だ。せっかくやるなら自分の力を試すというのは良いな。せっかくの人生だ。どうせ目指すなら同盟軍将星列伝に名が残るくらいにならねばな」

納得したのか。ヴィットリオはまた豪快に料理を食べ始めた。シロンを始めとする亡命系のメイン商材は、紅茶を軸にした嗜好品だ。フェザーンが成立したことで、帝国から本場の嗜好品を輸入することも可能だ。もつとも同じ帝国とは言え、敵対派閥の領地で作られたものは嫌厭される。逆にシロンから輸出される流れもあるのだ。ただ、亡命原理派は正直あぐらをかいていると思う。

嗜好品だからこそ、良いものなら愛されるし高値で取引される。だが、逆に言えば無くても死ぬものではない。効率重視だった同盟で遅れた分野だったからこそ珍重されているが、やろうと思えば重税を課して業界をつぶす事も出来るのだ。実際、同盟国内で最大の組織である同盟軍では、備品にしているのはコーヒーで、紅茶は項目に入っていない。

もちろん予算の関係もあるのだろうが、バーラト系が本気になればいつでも潰せる砂上の楼閣の上に、今の亡命系の経済は成り立っている。ベルティーニ家を始め、経済界の現場を担う層が、疑似的な貴族制の中で上層部の意向を踏まえつつも融和を図るのも、この実情を肌で感じているからだろう。

「俺達が活躍すれば、同盟軍でも紅茶を備品にできるかもしれない。実際、旧世紀の地球では、もともとは紅茶を飲んでいた層が、反感から紅茶を消費しないためにコーヒーを愛飲し始めた実例があるらしい。親父も苦い顔をしていた」

「だろうな。亡命系の経済基盤は思ったより盤石じゃない。まあ、その辺はバーラト系に移動してから、ターナーに連絡してみても良いかもな。あいつはバーラト系融和派の商船に乗っているから、伝手も多少はあるだろう。フェザーン観光もしたらしい。何かしら助言はもらえるはずだ」

「あのオレンジ頭か。フレデリックといるのを見た時は、従士かなんかだと思っただが、妙に存在感があるから変に思っていたんだ。あの年で航海士見習いとして働いているなんて大した奴だよ。俺も子供のころから農園で手伝いをさせられていたからな。じっくり話し合う機会があれば馬が合いそうだ」

嬉しそうに話すヴィットリオ。彼とターナーの関係は顔見知りつて所だ。俺の身分に配慮して、ターナーと一緒にいるときは周囲に気を配っていたし、常連連中とも踏み込んだ関係になろうとはしなかった。それが亡命業務に関わるターナーなりの気遣いだったのは、あいつがシロンを発つてから気づいた。実際ヴィットリオも何度か話しかけようとしたらしいが、なんとなく気が引けていたそうさ。

「そうだな。ターナーは気難しい奴じゃない。辺境出身だが、収容所で捕虜と一緒に土木作業をしていたこともあるらしいし、本当に気が合うかもな。良くも悪くも率直な表現を好む奴だったし」

奴に突っかかって来た連中の事を、『縄張りをマーキングする犬』呼ばわりしてたからな。あれには笑わせてもらった。それに短期間だったが、他の生徒たちにも強い印象を残している。まあ、女性陣は

社交ダンスのパートナーとしてかもしれないが、『優秀な問題児はいなくなると寂しいですね』とフラウベツカーがこぼしているのを耳にした。

「投資先に関しても相談しても良いかもな。後進達の面倒を見るには、資産も必要だ。ジャスパー家だけが食べていくには困らないが、亡命融和派への支援を考えれば、資産はいくらあっても困らない」

「そこまで負担をかけるのもどうかと思うが……。伝手が無いのも事実だし、投資がきつかけでパイプが出来るかもしれん。俺も親父に相談してみよう。もつとも、士官学校対策をちゃんとしろと怒られそうだが」

そう苦笑しながら料理を食べ終わってコップの水を飲み干すヴィットリオ。俺も水を飲み干し、一緒にボールを後にする。こいつは2皿喰うからどうしても少し待つ事になるが、豪快な喰いっぷりは見ていて気持ちが良い。待ち時間を不満に思ったことは不思議となかった。ワインが欲しい所だが、士官学校を出るまで断つ誓約を、俺達は立てた。些細な事だが、そんな事すら、自分で人生を進めているようで楽しかった。

ボールを出てヴィットリオと別れ、家に向かう。

玄関を抜けてリビングに入ると、祖母が思いつめた表情でソファアに座っていた。

「フレデリック、ローザス家からお返事が届きました。数人なら受け入れて頂けるとのことですよ」

そう言いながら書簡を手渡される。早速内容を確認すると、お願いしていた士官学校対策のために、バーラト系の教育機関への転入手続が終わった旨とローザス邸への滞在を了承する旨が記載されていた。「フレデリック、私はもう何も言いません。ジャスパー家の事は気にせず、貴方の道を進んでください。ただ、くれぐれも身体に気を付けてね」

「分かっています。戦死なんてしません。それにジャスパーの名を轟かせてみせますよ！」

右手のハンカチで目元を押さええながら語りかけてくる祖母を安心

させようと、俺は右手で肩に触れながら敢えて明るく応じた。このままシロンで過ごす未来も確かにあったのかもしれないし、少なくとも祖母はそれを望んでいたのは確かだ。期待に応えられない以上、せめて不安くらいは解消したかった。

「ローザス家のアルフレッド殿は貴方と同じ年だそうですね。士官学校を希望されているとの事でしたから、きっと良き縁になるでしょう」  
そう言うと、祖母は自室に戻っていった。涙をこらえきれず、それを孫に見せるのははしらないと思ったのだろう。ローザス家は亡命貴族を祖とする家だが、亡命した以上は、同化すべきと判断してバルト星系に居を構えた。一部の亡命原理派の中には『裏切り者』呼ばわりする連中もいる。拒絶される可能性もあったが、受け入れて頂けたのは朗報だ。

「ターナー、すぐに追いついてやるからな」

祖母の涙は胸に来るものがあつたが、もう道は定まった。自分を鼓舞するかのように俺は声を上げると、この朗報をヴィットリオに知らせるべく、ダブルットを手を取った。もちろんターナーにも一報入れておくつもりだ。投資先の相談もいずれ頼むと添えておこう。

## 第15話 テルヌーゼン

宇宙暦723年 帝国暦414年 9月末

惑星テルヌーゼン 宇宙港

カーク・ターナー

「吉報をお待ちしております。ターナー様ならきつと成し遂げられますわ。ご武運を！」

シャトルのタラップを下り、テルヌーゼンの地表を踏みしめる。初めての大商いに緊張しているのか？一度目をつむるとハイネセンのホテルユーフォニアにいる婚約者、クリスティンが、戦地に夫を送り出すかの如く、俺を見送る際にかけて来た言葉が頭に流れた。

出会いの際に、ある意味騎士の様に現れ、彼女目線では危機から救った俺を、無条件に信じている所がある。同じくその場にいたウーラント家の嫡男、ユルゲンにも多少の差はあれ、そんな傾向がある。

そしてウーラント家の現当主であるグスタフ様。まあ、俺の義理の父になる人だが、彼は帝国騎士としての生き方しか知らない。誠実であり好ましい人物だが、ビジネスの場で活躍できる素養は無かった。

必然的にウーラント家の未来は俺の双肩にかかっている。実際にテルヌーゼンで立ち上げる事業計画を立てたのは俺だし、その事業計画が義父の意思決定を最後に後押しした以上、その実現に向けて資産を預けられては、最善を尽くすのが義務だろう。

タラップを降りて、宇宙港ターミナルへ向かう。階段を上り、リーダーに身分証を通してチェックアウトすると、エントランスへ足を進める。テクテク歩きながら、俺はフェザンからテルヌーゼンまでの旅路を思い返していた。この3か月は前世を含めても、多忙で事の多い日々だった。

ウーラント家の亡命業務を請け負い、フェザンを発った日から、俺はキャプテンに付きつきりで同盟流のビジネスの進め方を仕込まれた。機関長が寂しがっていたが、首都星ハイネセンにいたら俺はクリスティンと婚約し、自分がプレゼンしたビジネスプランを、ウーラント家の代理人として実現すると言われれば、時間は足りない位

だ。本来なら辺境星域出身の若造が得ることができないチャンスに恵まれた事は理解していた。キャプテンが厳しくなるのも無理はなかった。

往路で取った最短ルートではなく、ランテマリオ、ガンダルヴァ、バミリオン、ローフォートン、リオベルデと、大回りしたのも、実務経験をさせる為だろう。資料では認識していたが、各星系で不足しているものを売り、特産品を買い入れていく経験は、金では買えない学びがたくさんあった。交渉の場にも同席したし、キャプテン自身も、俺が考えたビジネスプランが成功するために投資してくれているのだと思った。

『またのぐ利用をお待ちしております』

そんなアナウンスを聞きながら、エントランスを抜けて、宇宙港に併設された乗車場へ向かう。手元にはキャスター付きの美術品運搬ジュラルミンケースがひとつ。それを引きながら歩みを進める。首都星ハイネセンに向かう中、兄貴分のトーマスや、シロンで世話になったジャスパールから連絡を受けた。

あのトーマスが、一目ぼれしたのは正直意外だった。もしかしたらエルファシルで新兵訓練を受け、その間に恋仲になった可能性もあるが、教練施設はバート星系に集中している。任地に移動する過程でエルファシルを訪れ、その際に情を交わす。誠実で奥手だったトーマスの印象からすると意外だったが、前線に赴く前ともなれば、そういう事もあるのかもしれない。

万が一の時は……。なんて事を書いて来たので、言霊の話をしてそういうことは言うなど連絡しつつ、トーマスへのメールにCCでお相手のヤン・シーハンの宛先を入れ、シーハン嬢へのメールにCCでトーマスを入れた。シーハン嬢へのメールは、まあ当たり障りがないと言うか、トーマスの弟分で航海士見習いをしている事、トーマスは弟分の俺から見てもお人好しの甘ちゃんなので、愛想が尽きない程度に迷惑でなければ付き合ってほしい旨を連絡した。

シーハン嬢は看護師をしており、軍人の相手は慣れていらしい。トーマスの無事を祈るとともに、無事ならまた会いたい旨を綴ってい

た。ちやんと恋愛をしているトーマスが、妙に羨ましかった。俺はいきなり婚約して、しかも家の浮沈にも責任ありだ。無いものねだりなのはわかってはいるが、責任の重さを理解している俺にとって、普通の恋愛が自分にはもう望めない物であるからなのか？妙に羨ましかった。

「ウーラント家のターナー様ですね？ウオーリック商会のオルグレンと申します。お迎えに上がりました」

乗車場に近づくと、ダークスーツに身を固めたビジネスマン風の男性が声をかけてくる。彼にジュラルミンケースを預け、トランクにしまわれるのを横目に後部座席に乗り込む。ウオーリック商会はテルヌーゼンを代表する商会の一つだし、キャプテン佐三と井上オーナーの出身商会でもある。

彼らの弟子と言っても良い俺は、ウオーリック商会からすると孫弟子ってところか？ただ、俺への対応と、荷物への配慮を見ると、それなりに評価しているのかもしれない。出だしはぼちぼちってとこか？

車窓を流れていくテルヌーゼンの街並みを横目に、俺はタブレットに視線を向ける。ジャスパールとおそらくあのバールの常連のクマ、ベルティーニは士官学校対策のために、テルヌーゼンのローザス家に転がり込んだらしい。バート系融和派とのパイプを作りたい旨や、亡命融和派を支援するために、投資先の相談に乗ってほしい旨の打診を受けていた。

俺のビジネスプランには亡命融和派とのパイプが必須だ。とは言えこちらの体制が固まる前に、希望的観測を前提で金が絡む話をするのは揉め事の素だ。お互い落ち着いたら、一度会おうと返信していた。

車が速度を落とし、ある邸宅の門の前で停車する。オルグレンの姿を確認したのだろう。門が開き、車は邸宅の敷地内へ進み始めた。さすがはウオーリック商会の本宅だ。整えられた庭園は貴族もかくやと言う感じだった。近づく大物との会見の機会に緊張は高まるかとも思ったが、思った以上に落ち着いていた。それもそうだろう。前世

でもそれなりの修羅場はくぐったが、まあ、それを含めてもしんどの場面を、主役として経験したばかりだ。

ハイネセンのホテル・ユーフォニアに腰を落ち着けた俺を含めたウーラント一家は、そのまま併設されたレストランの一間を貸し切り、キャプテンを立会人にして俺とクリステインの婚約の場とした。クリステインは普段はお転婆な所があるのにやけにしおらしいし、ユルゲンは婚約の意味が解っていないんだろうが、嬉し気で、上司兼義父になるウーラント卿は、ホツとしたの半分、娘を取られるむしゃくしや半分の、なんとも表現しがたい表情をしていた。

嬉し気な表情をしなければクリステインとユルゲンが悲しむ。とは言え嬉し気にしすぎれば義父が気を悪くする。あんな修羅場はそうそうないだろう。そういう意味ではビジネスの場に飛び込む前に、良い経験が出来たのかもしれない。ウーラント家の嫡男であるユルゲンを守る意味で、俺はビジネスを立ち上げながら士官学校も目指す必要があるが、俺が士官学校を卒業して任官すれば、ユルゲンだけじゃなく、エコニアで生まれるであろう弟妹の徴兵リストの順位も下がる。

もともと陸戦隊を避ける意味で、航海士見習いになり、徴兵された際は艦船勤務になる様に画策していた。予備校に通うかは未定だが、士官学校へ入学するための支援も約束されており、ウーラント家には感謝しなかった。縁のあるジャスパパーやヴィットリオが同期になる可能性が高いことも、むしろ嬉しかった。

車は屋敷のロータリーで止まり、オルグレンがトランクからジュラルミンケースを取り出してから後部座席のドアを開けた。俺はジュラルミンケースを受け取り、先導するオルグレンに続く。見るからに重厚なドアをオルグレンが押し上げ、宅内にいざなう。

「本日はウォーリック商会の会長グレッグが対応いたします。応接間へどうぞ」

オルグレンに続くが、まあ内装には金がかかっている。ただ、変な成金趣味ではなく、シックにまとめられた内装には好感が持てた。そして所々に飾られた出元が帝国であろう絵画が、商談相手にウォーリッ



ク商会选择んだことが正解であることを示していた。あとはしくじらなければ大丈夫。自分に言い聞かせる俺の頭には、不思議と笑顔で送り出してくれたクリステインの姿が浮かんでいた。

## 第16話 値踏み

宇宙暦723年 帝国暦414年 9月末

惑星テルヌーゼン ウォーリック邸

グレッグ・ウォーリック

「年甲斐もなくソワソワしちゃって。そんな貴方を見るのは久しぶりだわ」

「分かるかい？イネツサ。まあ、君の前では僕もまだまだいたずら少年だからね」

朝食を終え、妻と二人でテラスに備え付けたテーブルセットに腰かけ、まだ朝の涼やかな風を感じながら、シロン産の最高級茶葉を夫婦で楽しむ。結婚してもう少して半世紀だが、ずっと続けてきた習慣だ。舵取りを誤ればウォーリック商会がつぶれるような判断も何度もここでしてきた。

会長職に退き、経営を息子に委ねてからはそういうことは減ったが、設立以来、人材育成に注力し、独立支援も積極的に行った。そうして巣立っていった人材とのパイプが、新たな商機となり、ウォーリック商会の拡大にもつながった。

フェザーンが成立した40年前。当時はまだ商会の一事業部を任されていた時代だが、商会から巣立った人材たちが様々な情報を集め、それを元に連携して対策をとり、結果として多くのパイプを更に持つことができた。亡命業務にいち早く参入を決めたのも、今になって考えれば当たりだった。当時は今以上にバーラト原理派の勢いが強く、潰されるリスクもあった。その判断をしたのも、この場所だ。父に上申する覚悟を決める際は、イネツサが背中を押してくれた。「うちは設立以来、ずっと独立を支援した人材とのパイプが力になっているものね。井上が見つけて、出光が世に出した人材だもの。きつと良い縁を紡いでくれるわね。それに調査部も動かしたんでしょ？貴方？」

「それもお見通しかい？まあ、井上はともかく、佐三は商船持ちになっただけだからね。部下を信じて任せるのも大事だが、手拔かりが無

いようにするのも上司の役割だよ」

「そうね。でも、今更あなたの直名で調査部を動かしたら、それだけで現役の子たちは意識してしまうわ。ご隠居様はご隠居様らしく、もう少し隠密行動した方が良かったわね」

嬉し気にこちらを見るイネツサに、私はいたずらが見つかって気まぐずい悪ガキの様な表情をしていたらう。ただ、こんな事も久しくなかった事だ。現役の時のような気持ちになっているのは、私だけじゃないだろう。こんなに嬉しそうなイネツサも久しぶりなのだから。

「それで、調査の結果も踏まえて、貴方がワクワクしているって事はそういう事よね？私も同席しようかしら？」

「それこそターナー君が注目されてしまうよ。注目どころか嫉妬されかねない。何しろ、私以上にうちの子達は君に頭が上がらないんだからね。良き縁にはなるだろうし、亡命系とのパイプも太くできる可能性があるね」

妻同伴のイベントごとでもない限り、イネツサが商談に同席する事はなかった。それを今更14歳のギリギリ青年と言える若者との商談に同席したとなれば、マイナスに働く可能性もある。既に調査部が取りまとめた商談相手の資料は確認している。

経歴だけを見れば、もつと苦労した同世代は過去にいた。今では防衛戦争は優勢だが、建国から同盟はずっといつか起こるであろう帝国との戦争に備えて来た。文字通り『臥薪嘗胆』。効率重視で、いろんな事を切り捨て国家を運営してきた。

経歴を見る限り、独立商人流の表現をするなら一人前の苦労はしていると言った所か？ただ、その経歴で結んだ縁が素晴らしかった。亡命原理派の雄、オルテンブルク家の庶子に、初めて関わった亡命業務でクライアントに見込まれて婚約者になる。出身地のエコニアから飛び出してわずか一年。あまりにも良縁に恵まれすぎている。それに働いていた収容所でも、接していた捕虜たちからだいたいぶ可愛がられていたようだ。接した年長者を引き付ける魅力も持っている。

ビジネスに於いてキーマンとなる人物のほとんどは年長者だ。いくら能力があっても、年長者に認められなければ成果を出すのは難し

い。そういう意味で年長者に好かれるという特性も、ビジネスで成功する為にプラスに働くだろう。彼が14歳という事を踏まえれば、尚更だった。

「それに誠実で、手ばかりがないように身内には甘いんだ」

「あら、誰かさんみたいね」

「身内に甘いのは、私だけじゃないだろ？」

独立支援も社是のひとつである以上、私も積極的だったのは事実だ。一時はやりすぎな所もあったかもしれないが、それもあって軌道に乗った部下たちは恩に感じてくれ、今では大きな取引になっている所もある。一方でイネツサは、独立していった部下たちとも季節折々に連絡をとり、困ったことがあれば相談に乗り、時に独立した部下同士を仲介したりもした。

私が現役だったころの独立支援は、表の担当は私で、裏の担当がイネツサだったのだ。私の時代に独立した連中のほとんどが、私同様にイネツサに頭が上がらない事も知っていた。

もちろん、もう少しでここを訪れる商談相手が、縁を持った貴族の若様から投資案件の相談を打診されている事。シロンでも有数の農園のオーナーの3男が、その若様と行動を共にしている事。前線に向かった彼の兄貴分から、エルファシルで関係をもった女性を気にかけてほしいと打診された事。そしてその女性が最近産婦人科を受診した事も……。

まあ、ビジネス面での孫みたいな存在だ。手厳しくするつもりはなかった。

「まもなく到着するとのこと。応接間にお通しして宜しいでしょうか？」

「ああ、よろしく頼むよ」

秘書の一人が彼の到着を報告してくる。指示を出して私はティーカップを手に取り、残っていた紅茶を飲み干すと席を立った。

「良き縁を」

イネツサの声に答えながら、私は応接間へ向かう前に身支度を整えるために自室へ向かった。

宇宙暦723年 帝国暦414年 9月末

惑星テルヌーゼン ウォーリック邸

カーク・ターナー

「大旦那様はまもなくお見えになります。しばらくお待ちください」

そう言っ、先導役のオルグレンは応接間の扉を閉めた。俺はジュラルミンケースを開け、ベルベットにくるまれた絵画を取りだす。その為に用意されたであろうイーゼルに絵画を飾り、ベルベットで覆いをする。前世で言うF25号つて所だろうか？そこまで作業を進めた時点で、俺も緊張していたのか？応接間に意識が向く。

玄関から応接間までの通路同様シツクに纏められた応接間。ソファもイーセンブルク校にも設置されていた帝国式の高級品だ。右手に大きくとられた窓は、上半分がステンドグラスになっており、晴天もあつて部屋の雰囲気は温かく、和やかなものになっていた。

『コンコン』

ノックとともにウォーリック会長であろう初老の男性が部屋に入ってくる。事前に確認した写真は彼の現役時代のものだ。もう70歳近いはずだが、背筋はピシッと伸びていてあまり老いは感じなかった。

「お待ちせしたね。会長のグレッグ・ウォーリックだ」

「ウォラント家の代理人として参りました。カーク・ターナーと申します」

グレッグ会長は自然に笑顔で右手を差しだしてくる。俺も彼に倣うように右手を差し出し、握手を交わした。彼の手は分厚く、そして温かかった。

「まあ、かけてくれ。最近妻にしか入れる機会がない。すこし待ってくれるかね」

そう言いながら、置かれていたティーセットを手元に引き寄せ、素人の俺目線でも見事な手さばきで紅茶を用意していく。イーセンブルク校のフラウベツカーにも勝るとも劣らない手並みだ。

ドラクールのマスターもそうだったが、回数を積み重ねた先にある

職人技のような手並みは、観ていて飽きないものだ。あつという間に、2つのティーカップに紅茶が注がれ、一つが俺の手元に置かれた。カップから登る湯気から、紅茶特有の良い香りが広がる。

「頂戴します」

会長にお礼の気持ちを込めて少し頭を下げ、ソーサーを左手で持ち上げ、カップを手を取った。香りを少し楽しんだ後で、一口、紅茶を口に含む。少し濃いめだが、好みに近かった。

「砂糖は必要ないかな？妻は私の好みだと少し濃いみたいでね。いつも砂糖を少し入れるんだ」

「砂糖は大丈夫です。私はこの位の濃さの方が好みですね。もっとも紅茶に接したのは、シロンのイーセンブルク校が初めてでしたから、好みをうんぬん出来るほど、飲みなれてもないのですが……」

苦笑する俺を見て、会長は少し嬉しそうだった。

「ターナー君は正直で良い。安定したビジネスには安定した関係性が必要だ。物になりそうなプランを考えられる人材はそれなりにいる。ただ、自分の適性に合ったものを考えられる者は少ない。そうだなあ……。君の雇い主だった井上がそうだった。もう少し山っ気を出しても良い気もしたが、誠実で人を押しつけるのが苦手な彼には、入植に伴って商會を立ち上げるのは適性に合ったプランだった」

「そうですね。井上オーナーには良くして頂きました。入社の際は良い条件を出してくれたと嬉しく思いました。ただ、社員になってからは、お人好し過ぎて、商売が傾かないかと心配しました。後輩たちもそうでしたし、お客様もそうでした。商會をつぶすわけにはいかないかと社員は励みましたし、お客様もなんだかんだと足を運んでくださいました。人徳と言うのはこういう事なのかと驚いた記憶があります」

井上オーナーの話を、会長は嬉しそうに聞いてくれた。彼にとつて井上オーナーは弟子みたいなものだ。共通の知人でもあるし、話題としても最適だろう。その後も世間話をしばらく続けた。会長も話題は豊富だったし、イーセンブルク校の話は、入学経験者にしか語れない笑い話でもある。10時から始まった商談は、本題に入ることなく一時間余りが経過していた。

「すべてとは言わないが、ターナー君がどんな人物なのか感じることはできた。では、見せてもらっても良いかな？」

俺が了承すると、会長は応接セットの脇に置かれたイーゼルに近づき、ベルベットの覆いを慎重にめくった。

「うむ。このお姿は正に陛下だ。良く描けている」

絵画に視線を向けたまま、じつと佇む会長の雰囲気は、どこか声をかけにくいものがあつた。永遠にこのままという事もないだろうし、商品をしつくり見てもらっていると思えば、急かす必要もない。気のすむまで待とうと、俺は心に決めた。

## 第17話 値付け

宇宙暦723年 帝国暦414年 9月末

惑星テルヌーゼン ウォーリック邸

カーク・ターナー

「あちらでは亡命帝と呼ばれるそうだが、陛下に思いを馳せる時、私は歴史に『もし』はない……。』と思いつつも、どうしてもそれを考えてしまう。これは戴冠式直後だろうか？陛下には十分皇帝という地位が務まる能力はあった。隠された話だが、陛下はハイネセン記念大学に合格されていた。

もつとも取り巻きになるはずだった自称爵位持ちの子弟たちの多くが不合格だね。周囲の強引な勧めもあつて亡命系の大学に進学されたが、ハイネセン記念大学で過ごされていればバーラト系にも太いパイプが出来た。バーラト系と亡命系の確執はもつと薄まっていただろう。

いや、あの時代ならバーラト原理派も負い目を感じていたはずだ。陛下の旗振りの下、亡命系が融和政策を行えば、現在の確執はもつと違ったものになっただろうな」

視線は絵画に向けたまま、俺に解説するかのように会長は話をしていく。確かに、亡命系の上層部を上層部足らしめているのは、疑似的な貴族制だ。融和政策に舵を取ることは、自分のバックボーンを否定する事に近い。

とは言え皇室に連なる者の指示に逆らうことは、それ自体が彼らの立つところの否定につながる。彼が帝国に戻ることなく亡命派の指導者になっていけば……。亡命派の同化政策はもつと進んでいただろうし、バーラト原理派も、そんな政局ではそこまで強硬な政策は唱えなかっただろう。

「それに、陛下の治世がもつと長いものなら、陛下を守り育てた亡命派の多くも、帝国に帰還し、要職についたはずだ。そうなれば、同盟への対応も友好的なものになっただろう。短期間では無理だろうが、20年も治世が続いていたら。同盟と帝国の和平が実現していたかも



しれない。今頃私も妻と一緒に、帝都に観光旅行をしていたかもしれない。帝国歌劇場でオペラを見ながら、取引先の侯爵様と談笑していたかもしれない」

そこまで言って、会長はため息をこぼした。帝国に戻り、マンフレート2世は在位一年足らずで暗殺されてしまう。彼の治世が20年続いていたら……。自国で育った皇子が帝国の皇帝となる。同盟市民達からすれば半分身内みたいなものだ。多少の譲歩も黙認しただろう。

和平まで進めたかは分からないが、休戦は十分可能性はあった。だが会長の言う通り、歴史に『もし』はない。彼が暗殺された事で、後継者は対同盟強硬路線に戻らざるを得ず、両国の戦争は継続される事となった。

「今も思い返してしまう。帝国に戻るのを止めるべきだったのではないかとね。ご自分が帝国に戻るにあたって、すぐに亡命派を呼び寄せる事は難しいと考えた陛下は、所有されていた美術品の多くを、同盟の資産家に下賜する代わりに献金を求められたのだ。ご自分が帝国に戻ってからの亡命派の生活を心配されてね。その頃からバーラト系融和派が一気に増加した。この屋敷にある絵画のいくつかは、その時陛下に下賜頂いたものでもある」

そこまで話を聞くと、俺も歴史の『もし』を考えてしまう。彼が帝国に戻ったことで、同盟の国力は亡命者が流入したことで帝国に迫った物の、内部対立を解消できずにいる。

彼の治世が長いものになっていけば、帝国との和平が成立し、エコニアでも緑化事業が行われていただろう。経済発展を続けるエコニアで、俺は井上商会に在籍したままキャリアを積んでいただろう。少なくとも、こんな風に会長と会うこともなかっただろう。

「そんな存在だからこそ、バーラト系融和派に属するウォリック商会にとっては手に入れたい絵画だ。私個人の想いは除いても、亡命派にも応接室に飾るだけで友好を示せる。バーラト系原理派も、批判できない唯一の皇帝陛下でもある。さすがに帝国の芸術品が素晴らしきとは言え、ルドルフ大帝の肖像画を飾る気持ちは、私も持てないが

ね」

自分の冗談を気に入ったのか、会長は少し笑った。俺も正直笑ってしまった。建国の父ハイネセンを正義の英雄だとしたら、帝国を建国したルドルフ大帝は悪の権化と言うのが同盟の価値観だ。会長がもうすこし悪人面なら想定もできる。ただ、紳士然とした容貌の会長には、正直合わないだろう。

「冗談はあまり言わないからね。笑ってもらえて何よりだ」

そう言いながら会長はソファーに戻り、自分のティーカップにお代わりを注ぐ。それに続くようにソファーに座り、紅茶でのどを潤すとお代わりを求めた。会長の歴史講座、すでに晩年を意識している会長にとつて、マンフレート2世陛下の事は、心の片隅にシミのように張り付く後悔なのだろう。

マンフレート2世陛下が暗殺されなかったら？そんな本が出版されても、俺は読まなかったと思う。でも、実際に接した会長の熱みたいなものも相まって、歴史の『もし』に思いを馳せずにはいられなかった。

「さて、隠居人の歴史講座はこの辺にして、本題に戻ろうか？ウォーリック商会としてオフアーできるのはこの条件だ。ゆっくり確認してくれ。備考欄も併せて確認してほしい」

そう言いながら数枚の資料が応接セットのテーブルに置かれる。一枚目にはテルヌーゼン郊外にある農場の評価格と運転資金に使えるであろう現金。そして株式会社化した際の持ち株比率に関する事。2枚目以降は農場に導入されている設備、テルヌーゼン都心部の大きな邸宅の詳細が記載されていた。

「会長、青写真しかない段階で、出資を募るのはどうなんでしょうか？軌道に乗ってからの方が、失礼にならないのでは……。とも思っていたのですが」

「設備投資がさほど必要ないプランなら、実際に動き出してから株式会社にするのも良いだろう。だが、君のプランはバート系融和派と亡命系融和派、双方の協力が必要だろう。なら、先に出資を求めてしまった方が良いだろう。出資以外の協力も得やすくなるし、協力が得

られれば、優遇もしやすくなるだろう」

株式会社化のタイミングは俺も迷っていた。別に上場する必要はない。ただ継続的な利益配分が、協力関係の維持につながる以上、早めに株式会社化したいが、事業計画しかない段階で出資を募る事が失礼になるのではないかと不安に思っていた。俺がカウフみたいに既に大成功をおさめていたのならともかく、今の俺は亡命貴族の使用人でしかないのだから。

「では20%引き受けて頂く代わりに、1000万ディナール投資していただきたく存じます」

「なるほど、残りの配分は？」

「ウーラント家が50%。私の取り分として、婚約者のクリステインが10%。実質的には亡命融和派ですが、立場上亡命原理派のジャスパー家に10%、亡命融和派のベルティ―二家に10%と考えております」

会長は視線を俺に向けつつも、この割合の意図を考えられているようだった。外形的には亡命系の資本が80%。これなら、上層部の意向を無視しづらい亡命融和派も出資しやすい。また名目上は亡命原理派のジャスパー家が出資していれば、協力もしやすいだろう。そして割り当ては20%とは言え、創業家を除けば、バーラト系融和派のウオーリック商会を上位に置く。バーラト系融和派の意向も、無視はできないという事だ。

「なるほどね。クリステイン嬢名義ではなく、君個人の名義ならもう少し交渉しただろうが、そう来るなら首を縦に振ろう。それにしてもターナー君は思ったより欲がないんだね」

「そうではありません。嫡男のユルゲン様を徴兵名簿から外す意味で、いずれ士官学校に入学し、任官するつもりです。戦死の可能性もあるのですから、わざわざ相続税を支払う形にするのが惜しいだけです」

「そうだね。それにこのプランでは、直系のだれかが従軍しないと成功は難しい。そういう意味でも君が身体を張るってわけだね」

会長は俺の思惑を見透かしたのだろう。仕方のないやつだ……。

とでも言うかのように苦笑している。ただ、俺からすれば初対面のガキんちよのビジネスプランに、お家の将来をかけてくれたんだ。この話が無ければ、高確率で徴兵されて、良くて薄給で10年機関担当の下っ端。下手すりゃ戦死って未来だった。それに比べたら輝きに満ちた将来への道を、俺は歩んでいる。身体を張るくらい、むしろ当然だった。

「20%引き受けられれば、関連会社として扱える。設立業務はウォーリック商会の法務部で行おう。法人向けの口座も必要だな。北極星銀行の頭取とアポを取っておこう。同席してもらいたい。それと亡命系の金融機関にも口座を作った方が良いな。その辺はジャスパー家かベルティ―二家と相談するとよい」

「ありがとうございます。でしたら甘えてばかりで恐縮なのですが、食品業界に精通した営業職と、企業立ち上げに関わった人事職でこれとは言う方がおられましたら、出向をお願いできれば幸いです」

「分かった。ただ、ウォーリック商会は独立を推奨している。長くても勤めるのは10年と思ってもらいたい」

どうせ協力を頼むならトコトンかじり倒せばよい。その分、恩を返せるときに返せばよいのだ。俺の意図に気づいた会長は苦笑していたが、商談の締め握手を交わすときには笑顔だった。これで何とかウーラント家がテルヌーゼンに根を張る前提は整った。後は走るだけだ。なんとかウーラント卿に良い報告が出来る。そう思うと、不思議とクリステインの笑顔が頭をよぎった。

ちなみにこの数日後に頭取とのアポイントで北極星銀行に会長のお供で行くのだが、その帰りのランチの際に、シーハン嬢の妊娠の可能性を知らされた。軍のDNAデータベースで血縁関係の確認をシーハン嬢にお願いしながら、ミラー家にどう伝えたものかと悩まされるのはまた別の話だ。

シーハン嬢は看護師だから経済力もあったし、トーマスが戻るまで伝えるつもりはなかった。ただ、トーマスが志願兵である以上、その子弟は徴兵リストの下位になる。前線にいるトーマスの負担になりたくないと言え、トーマスが会長との商談より大変

だったかもしれない。

## 第18話 中の上の志

宇宙暦724年 帝国暦415年 2月末

惑星テルヌーゼン メープルヒル校

アルフレッド・ローザス

「アルフレッド君、また揉め事みたいよ？今度はウォーリック君達とだつて」

「またか、分かった。ありがとうカトリナ」

幼馴染のカトリナが、心配げな視線をこちらに向けている。視線に気づきながらもタブレットで、彼に一報を入れる。視線を戻してもカトリナは心配そうだ。カトリナが心配するのも無理はない。僕は本当なら学内の騒ぎを仲裁するような存在じゃないからだ。

生まれたローザス家は元々のルーツは帝国貴族だ。ただ、亡命する以上は心から同化すべきと判断し、首都星ハイネセンに近いテルヌーゼンに居を構えた。それから数世代は経っているけど、正直、亡命系というルーツはぬぐえずにいます、僕は感じていた。それは本当に細かいことで、僕の考えすぎなのかもしれないし、幼い頃からバート原理派に接する機会が多かった事も影響しているのかもしれない。

「俺の家は長征一万年をハイネセンと供に成し遂げた」

「盲目になったグエン・キム・ホアを支えたのが家の祖先だ」

そんな事を周囲に聞こえる様に言い募る光景をよく見て来た。僕から見たら、敵国である帝国の門閥貴族たちが言いそうなセリフでしかなかった。

「俺の家は銀河帝国の建国をルドルフ大帝ともに成し遂げた」

『大帝亡き後、ジギスムント1世陛下を支えたのが家の祖先だ』

ほらね。固有名詞を変えただけで、ドラマに出てくる敵役の門閥貴族のセリフに早変わりだ。そんな冷めた目線で見ればなんとなく相手にも伝わるんだろう。クラスの多数派を占めるそういう連中とは馴染めなかった。もともと成績も平均より少し上と言ったレベル。運動もそこまで得意じゃない。クラスの少数派で、そこまで目立

たない存在。友人も、幼馴染のカトリナを除けば多くはない。良く言えば平和に、悪く言えば平凡な学生生活を過ごすことになると思っていた。

そして、この変な感覚から逃れる為にも、士官学校に進路を希望していた。いずれは任官してちゃんと勤めを果たしたと胸を張れるようになれば、少しは生きやすくなるだろう。と考えての事だ。

士官学校は同盟でも難関校の一つだ。日々コツコツと目立たないながらも努力を続ける。子供らしく英雄にも憧れていたから、ダゴン星域会戦の英雄、リン・パオ、ユースフ・トパロウル両提督の書籍も何度も読んでいた。このまま行けば、首席になることはないだろうが、平均より少し上の席次で士官学校に入学する。そんな未来に向けて歩んでいた僕の静かな人生は、去年の年末から大きく変化した。

「誉めてやろう。口だけの連中が多かったからな」

「さすがウォリスだ。ただお前の爺様になつてはいても、手は抜かんぞ！」

黒髪長身の青年が、腕組みをしながら楽し気に声を上げた。遠目で見ると熊にも見えなくない青年がそれに続くようにシャドーボクシングをしながら声を上げる。

「それはこちらのセリフだ。祖父様に泣きついてても無駄だぞ！」

とうとうバーラト融和派も出張ってきたか。さすがにまずい事だ。それにウォリスは、僕の雇い主のビジネスパートナーの孫だ。ああ、早く来てくれないだろうか。首都星ハイネセンならともかく、テルヌーゼンではバーラト系の融和派も多い。メープルヒル校でも同様で、声ばかりが大きい原理派が名目の表番ではあったが、彼らは文字通り、ローザス家が身元引受人となり、編入した2人の亡命派に、数を頼んで突つかかって、文字通り粉碎された。

黒髪長身のジャスパーは、好みがはつきりしており、竹を割ったような性格だ。細かいことは気にしないし、整った顔立ちで、帝国風の所作も優雅。転入当初から女子たちの話題だった。その上、フライングボール部に入り、瞬く間にエース選手になった。女子たちの熱い視線はさらに増え、ごく一部の男性陣からも似たような視線を浴びてい

る。

シャドーボクシングをしているのはベルティニーニ。ジャスパールと同じく、ローザス家が身元引受人だ。ジャスパールと身長はあまり変わらないのに、熊のように見えるのは、彼の体躯が筋肉に覆われているからだ。ボクシング部に入ったベルティニーニは人気のヘビー級の代表となり、年始の大会で優勝した。

それに、見た目に反して女子や後輩にはすごく優しい。見た目も相まって『森のくまさん』などと呼ばれ、一部の女子の熱い視線と、後輩の尊敬を集めている。僕から見ても二人は目立ちすぎたし、バーラト系の男子学生が動き出すのも仕方がなかった。

雇い主からは流血沙汰にはさせない。バーラト融和派が出張ってきたら一報を入れる。その代わりに、彼が運営するウーラント商会のレストランの支払いを彼が持つ。そういう契約だった。バーラト系に囲まれて育ってきた僕にとって、自分のルーツを確認しているように帝国風の料理を食べるのは楽しかった。それに、時折、雇い主と共に同席するクリステイン嬢とユルゲン君から帝国の事を聞くのも新鮮だった。

そして内心だが、雇い主を始め、僕から見ても目立つジャスパールやベルティニーニを英雄を見るかのような視線で見つめ、続けとばかりに励むユルゲン君に、変な親近感を感じていた。ユルゲン君も本当は彼らと話したいんだろうが、気が引けるのか、一番話しかけてくるのは僕だ。急に弟が出来たようで、うれしく思ってもいる。

ああ、雇い主から避けろと言われた事態に陥るまでのカウントダウンが僕の頭で始まっていた。現実逃避している間は、このカウントダウンが止まってくれないだろうか……。原理派のやつらは、まあ口だけだから、ジャスパールとベルティニーニがいれば、負けることはない。あくまで学生同士の揉め事で治まった。

でもウォリスはかなりの実力者だ。刃物は使わないだろうが、それでも事故が起こるかもしれない。もう割って入って身体を張って時間を稼ぐしかないか……。そんなことを考え始めた所で、見慣れたウーラント商会の社用車が、裏門前に停車し、オレンジ色の髪をした



青年が、こちらに向かってくる。

「へえ、ジャスパー、ベルティーニ。楽しそうだな。任官後、簡単に戦死しないようにとにかく励むって約束したよな？ありや嘘か？」

その一言で、さつきまでの覇気はどこに行ったのか？二人は急におとなしくなった。営業をしていたのであろうターナーは、スーツ姿だ。同い年なのにどこか有無を言わせぬ雰囲気があった。

「おい、ウォリス、どこ行くんだ？お前、俺が車を止めたあたりから逃げようとしたよな？」

ターナーの発言を機にウォリスに視線を向けると、先ほどまでいた場所からかなり校舎に近い位置に移動していた。ジャスパーとベルティーニは裏門に背を向けていたから、気づくのが遅れたけど、ウォリスは先に気づいていたんだらう。

「会長が亡命派との関係改善のために、わざわざお前がいるメープルヒル校に、この悪ガキどもを編入させたのはわかってるよな？どういうつもりか会長も聞きたいそうだな。一緒に来い」

そういうとウォリスの襟首をつかんで文字通り連行しだした。

「アルフレッド、ウォリスは早退だ。伝えておいてくれ。それと所詮こいつらなんて悪ガキだ。腕つぶしで勝てないなら口で勝て。ユルゲン様や会長に報告するとも言え、おとなしくなるんだから」

右手は誰かさんの襟首をつかんでいたの、左手で僕の肩をポンポンと叩くと、車に向かい、後部座席にウォリスを押し込んだ。

「ジャスパー、ベルティーニ、お前々からも後で話を聞くからな！」

そう言うと、車は走り去って行った。なんだろう、嵐が来るかと思っていたら、隕石が落ちてきて嵐なんてどうでもよくなった感じだろうか？

「ねえ、さつきのつてターナー君でしょ？ウォーリック君、大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だと思うけど、あんなに怒っているのは初めて見たよ」心配そうにカトリナが声をかけてくるが、あんなに感情をあらわにするターナーを見たのは初めてで、僕も戸惑っていた。翌日からはいつも通り、昼間は忙しくウーラント商会の仕事をしているのに、疲れ

た素振りもみせず、夜にはローザス邸で僕たちと士官学校対策に励む。『新しいメニューが出来た。女性の意見も聞きたいからカトリナ嬢と都合が良い時にレストランに行ってくれ』と笑顔で勧める彼に戻っていた。

数日後、この出来事を聞いたクリスティン嬢から謝罪と共に事情を伝えられた。兄貴分と慕っていたトーマスさんの戦死の報に、この事件の前日に接していたらしい。彼の部屋から時折泣き声がしていたとの事だ。思い返せば、あの日も目が赤かったと思う。

それを知った悪ガキ3人衆も、これ以降は揉め事を起こさなくなった。もしかしたらウォリック商会のボディガード陣との訓練の成果かもしれない。でも僕たちはターナーを通じてトーマスさんの話を聞いていた。志願し前線で戦う彼を尊敬もしていた。そんな彼の戦死を知って案外簡単に戦死するんだと肌で感じたことも大きかったと思う。

この頃に、僕は初めて自分なりに志みたいなものを立てた。同盟中の英才があつまると士官学校なら、メープルヒル校よりもっと優秀な学生が集まり、当然ぶつかるだろう。僕は主役にはなれない。でも主役になれる人材がぶつかり合って良さをお互い潰さないように、緩衝材のような人材になろうと思ったのだ。お人好しで後輩の面倒見も良かったトーマスさんが、もし士官学校に行っていれば、きっとそんな存在になっただろうから。

## 第19話 青春

宇宙暦724年 帝国暦415年 10月末

惑星テルヌーゼン ウーラント農場

カーク・ターナー

「社長、収穫の報も問題なく。牧場の方も順調です。帝国風の加工食品の売れ行きも順調ですから、事業としては一先ず、軌道に乗ったと言えるでしょう」

「予定よりも早く黒字化できそうで良かった。ボルスキーさんにも多方面で色々と動いて頂きましたし、カネツティさんも営業に駆けずり回ってくれました。本当に感謝しています」

「事業の立ち上げ経験は、それだけで経歴に箔が尽きます。動き出して1年で黒字化ともなれば、いざと言うときに出資して頂きやすくなります。お礼を言いたいのはこちらの方で」

人事部門担当のボルスキーさんが嬉しそうに声をかけてくる。人事部門担当と言っても、実質事務系のすべてを担当している形だ。採用に関しても、亡命系から人材を受け入れる必要もあって、慣れないことが多かったと思う。でもそれすら楽しむかのようにサクサクと業務をこなし、体制を整えてくれた。同盟語での会話が厳しいウーラント卿に、財務系の業務をレクチャーしてくれているのも彼だ。

俺はウォーリック商会との折衝や、ベルティー二家への事業説明、帝国風の食材職人の紹介をお願いする傍ら、営業責任者のカネツティさんと、毎日14時には、帝国風の食材に興味を持ちそうな『ここぞ』という店舗に、遅めのランチ兼商談で回った。カネツティさんはテルヌーゼン市内の飲食店をほとんど把握しており、名物料理が重ならないように手配してくれた。

ランチがうまい店は、ダイナーももちろんうまい。週末にウーラント家としての来店を予約すると、向こうも少量とは言え、帝国風の食材を使った料理を出してくれる。そうなれば、良さも分かってもらえるというものだ。売れ行きは順調に伸びたし、テルヌーゼンに友人の少ないウーラント家にとっては数少ない外出。毎回違う店舗で味も

良いという事で、クリスティンとユルゲンの中で俺の株はまた上がっているようだ。

「今日の燻製も出来が良いそうです。見繕ってくれたそうなので、ローザ様にお持ちください」

そう言いながら俺のデスクにバスケットを置き、自分のデスクに戻っていく。もうそんな時間か。俺はバスケットを手にとり、駐車場の社用車に乗り込み、ローザス邸に向かう。駐車場には少ない車が止まっている。併設したレストランは今日も繁盛している様だ。

当初は帝国風の食材を試食してもらおう場として考えていたが、付き合いが出来た料理店の若手から帝国風のレストランをやってみたいという声があがり、亡命系の伝統料理とバーラト系の料理をうまくアレンジしたメニューを出している。俺も試食しているが、かなり旨い。今ではテルヌーゼンの自称食通たちに言わせると、注目の店舗のひとつだそうだ。

レストランの灯りを横目に、車はローザス邸に向けて進んでいく。カネツティさんは今頃、少量ながら生産が始まった帝国風の黒ビールを売り込むべく、歓楽街で汗をかいているはずだ。不思議なことに、仕事も趣味も食べ飲み歩きのカネツティさんは、かなり細身だ。その体格のどこに入るのかと不思議な位、うまそうに飲み食いする。

一方で、ボルススキーさんは、平均より少食だし、酒も強くはないのに小太りだ。歓楽街の主と言っても良いカネツティさんはモテると思うが独身。一方で、オフィスに閉じこもっているボルススキーさんは妻子持ちだ。人間って本当に色々だと思う。

「それにしてもトーマス。あんたは早すぎたよ」

車は幹線道路を進み、住宅街に入る。もう少し進むとローザス邸があるメープルヒルになる辺りで、俺はため息をついた。兄貴分のトーマスがウーラント商会にいてくれれば、俺はもつと楽が出来ただろう。誠実で人当たりが良いトーマスなら、亡命系の社員もすぐに心を開いただろう。営業面でも成人していたから、夜の歓楽街への営業もできたはずだ。

ウーラント商会でなくても良い、あのまま井上商会にいれば、誠実

で面倒見の良いトーマスは、それなりの成功をおさめていたはずだ。周囲が気にするので飲み込んだ態をしているが、調べれば調べるほど、俺の兄貴分の戦死が意味のないことに思えてならない。

彼が散った戦場はダゴン星域の惑星カプチェランカ。年の半分はブリザードが吹き荒れる極寒の惑星だ。戦略的に価値がないかと言えはそうとも言い切れない。希少鉱石の鉱山が確かにある。

ただ、そんなものは他の辺境星域でも採掘可能だ。極寒の気象条件、シャトルの発着も年に半分はままならない事を考えると、採算をとるのは正直厳しいだろう。同盟が初めて帝国に大勝利をおさめたダゴン星域を放棄はできない。そんな面子もあるのかもしれない。

もしそうなら猶更、地上戦に付き合う必要はない。艦隊を派遣して制宙権を奪う。そして補給線を断ち切ってしまう。半年もすれば、地上の帝国軍は戦闘力を失うだろう。それから降伏勧告をするなりすれば、こちらの損害はないのだ。陸戦部門の存在感を示すために地上戦が行われているとすれば、尚更無駄な事だ。

制宙権の有無が重要な以上、陸戦部門は主役足りえない。そして主役である宇宙艦隊の戦力が、帝国に比して劣っている以上、無駄にマンパワーを消費する地上戦を行うなど、そもそも愚の骨頂でしかない。士官学校を卒業すらしていない素人が言っても仕方がないかもしれないが……。

トーマスの遺族年金はシーハン嬢にも受け取る権利があったが、彼女は固辞した。でもミラー家もまたそうですかと全額受け取りはしなかった。何とか間を取り持つて、シーハン嬢には俺から多少だが養育費みたいな物を出させてもらっている。いずれはエルファシルにも進出して、シーハン嬢にも事業に関わって貰えれば、彼女の変な呵責も落ち着くだろう。

こういうことはちゃんとしたほうが良いと思ったので、雇い主兼、将来の義父のウーラント卿に、きちんと説明した。持つべきものは誠実で善良な義父だ。二つ返事で、『出来る事はしてあげなさい』と言ってくれた。

たださ、隣にいたクリステインは少し黙ったまま、変に迫力がある

視線をこつちに向けて来た。面白く思わないのは分かる。ただな、シーハン嬢とは会ったこともないんだ。忙しくしていてあまり時間が取れずにいるのも分かっているけど、浮気を疑うなよ。あの時は正直少し怖かった。

ローザス邸が見えてきた。あいつらも俺がイラついていると変に気にするし、せっかくの士官学校対策の時間が、効率の悪いものになるのも不本意だ。そろそろ気を静めるか。敷地内にある駐車場に車を止め、助手席に置いておいたバスケットを手に取り、玄関に向かう。これから数時間は勉強に集中だ。余計なことは考えないようにしよう。

宇宙暦724年 帝国暦415年 10月末

惑星テルヌーゼン ローザス邸

グイットリオ・デイ・ベルティニー

「こんばんは、フラウローザス。つまらないものですが、ご賞味いただければ幸いです」

「あら、ターナー君。いつもありがとう。夫も最近はウーラント商会のベーコンの大ファンなの。ゆっくりして行ってね」

挨拶を交わす声が玄関の方から聞こえてくる。しばらくすると足音が、俺達の学習室に近づいてきてターナーが入って来た。俺達は昼間はメープルヒル校に通っているが、こいつはウーラント商会で働いている。それなのに疲れた素振りを見せたことがない。それだけでも大した奴だが、同じ年にも関わらず、ウーラント商会のトップで、婚約者のクリステイン嬢の実家、ウーラント家の将来も背負っている。

もともと顔見知りだった事と、俺がジャスパールと親しいこともあって、ウーラント商会への出資話にも参加する事が出来た。亡命派上層部の意向もあって、バート系とのパイプが作れずにいた親父からすると、ウォーリック商会という大資本につながりが持て、飼い殺し状態だった職人たちの就職先が増えるウーラント商会からの投資話は渡りに船だったようだ。何かと貴族様方に献金を求められる事もあり、金にうるさい親父が、ポンつと500万ディナール出した事にも

驚いた。

ジャスパー家も出資した兼ね合いで、フレデリックと一緒に、投資話の解説を聞くこともできた。フレデリックはあれ以来、経済誌にも目を通してしている。士官学校に入学して、立場を作ることも勿論だが、亡命融和派を支援する意味で、資金も必要だし、事業に参画する事も必要だ。目指すべき姿が明確になったのか、ジャスパーの表情も明るい。

「やってるな。アルフレッド、今日も差し入れを持ってきた。また感想を聞かせてくれ」

そう言いながらいつもの定位置に座ると、タブレットを取り出し、俺達に続くように学習を始めた。こいつは要点を押さえるのがうまい。学習時間は明らかに俺達より少ないはずなのに、直近の模試で合格判定はA。むらつけのあるフレデリックは不得意科目があるし、俺は身体系は強いが、教養系はそこそこ。合格はできるだろうが、まだまだ励まないといけないだろう。

「いつもありがとう。ターナー。そういえばウォリスもこの勉強会に参加したいみたいんだけど良いかな?」

「ん?ウォリスの成績なら合格するだろう?ただ、会長には恩があるからな。ローザス家が良いなら、俺も賛成だ。あいつはなんだかんだ出来るやつだ。刺激になるだろうしな」

ウォリス達とはあの一件以来、変な信頼関係が生まれ、友人関係になっっている。ウォリスの取り巻きも含め、ウォーリック商会のボディーガード陣を相手に訓練を倒れるまでさせられた。それだけならもしかしたらターナーを恨む奴もいたかもしれない。ただ、奴も訓練に同席したし、ヘロヘロになってぶっ倒れる俺達を横目に、次の予定があるからと、当たり前前の事のように仕事に戻って行った。正直かなわないとみんなが思ったはずだ。

手打ちの儀式じゃないが、数日後にウォリスたちと飯を食べた。言うべきか迷ったが、トーマスさんの話をウォリス達にもした。俺達はガキみたいに英雄たちの活躍に憧れて士官学校に行くかもしれないが、輝かしい英雄の話の裏で、どの位の戦死者がいるか?俺達は油断

すれば案外簡単に戦死するって。今更だけど、つまらない揉め事をしている時間はない。そんなことをしていれば簡単に戦死するって、あの場にいた連中は思ったんだ。

「ジャスパー、ベルティニー、今期から黒字になりそうだ。やつと良い話ができホツとした。ベルティニー、親父さんへは最終決算まで話すのは待ってけると助かる」

「ターナー。そんなに簡単に黒字になるものなのか？亡命融和派を支援する意味でも資産はほしい。もっと投資すべきだろうか？」

「ジャスパー。テルヌーゼンの顔役みたいなウォリック商会に資本参加してもらって、優秀な若手を出してもらった。ベルティニー家からも腕の確かな職人を紹介してもらってる。こんな恵まれた状況はそうそうないんだ。統計的には、起業して一年以内に90%が廃業する。余計なことは考えないで、今は士官学校対策に集中しておけ。投資はそんなに甘いもんじゃない」

フレデリックは悩まし気だった。経済誌の特集で投資で成功した人物の記事を見たせいだろう。焦る気持ちも分かるが、俺もターナーと同意見だ。バーラト融和派のウォリック商会が亡命派とのパイプを作りたいという意向もあったから、俺達はターナーから投資話をもられた。

ただ、やろうと思えば亡命系の資本を受け入れなくても、多少の面倒事はあつただろうが、このビジネスプランは動かせたと思う。色々な偶然が重なって、当たりの話をたまたま掴めただけだ。

とは言えフレデリックはお調子者でもある。変な投資話につかまって、大損でもしたら、俺までターナーにキレられる。キレたこいつは、本気でやりあつたら負けるとは思わないが、後が怖い。一度キレられて以来、ターナーを怒らせないのが、俺とフレデリックの暗黙のルールだ。

「ベルティニー、ユルゲン様にボクシングを教えてくれたそうだな。だいぶお喜びだった。さすがに収容所仕込みの護身術を教える訳にもいないからな。またよろしく頼む」

「気にするな。少しは恩返ししないとな。誰かさんとの約束があるか



ら、まずは自分の身位、守れるようになりたいそうだ」

ターナーの婚約者であるクリステイン嬢の弟、ユルゲン殿は、ウーラント家の跡取りだ。優秀な義兄の取り巻きとしてだろうが、俺にも尊敬の視線を向けてくれる。多少はそれに応えるのが、男つてもんだ。

そんな話をしながら各々勉強を進めていく、不得意科目の対策をしてくれるのは大抵ターナーだ。参考書と睨めっこしていても解決しない問題が、こいつの解説を聞くだけですんなり頭に入る。

フラウローザが夜食としてウーラント商会製の厚切りベーコンが添えられたカルボナーラを差し入れてくれるのは、もう少ししてからの事だ。あのままシロンにいたらこんなに楽しい日々はなかっただろう。たとえそれが士官学校という戦死の可能性が高い商売の入り口へ向かう道だとしてもだ。

## 第20話 合格発表

宇宙暦726年 帝国暦417年 1月末

惑星テルヌーゼン 同盟軍士官学校

アルフレッド・ローザス

「それにしてもこんな日くらいは休んでも良いだろうに。カークも付き合いが悪い」

「まあな。親父もさすがにこんな日くらいは文句はないだろうが……」

僕に並んで歩く、同い年の親友たちは、もう一人の親友がこの場に入らないことをボヤクように話をしている。ある意味、僕たちの勉強会の講師役もしてくれたカークと、一緒に合格発表を見たいという気持ちもわからなくはない。

ただ、ローザス家はともかく、ボヤいている二人の家は、カークが経営しているウーラント商会に出資している立場だ。利益を求める立場のはずが、休む事を求めるのもどこか面白かった。

「入学したら自由時間が減るからね。それにクリスティン嬢の合格発表も今日だから。お昼にウーラント家で見に行ってくて話だよ。夕食は一緒にとる約束だし、我慢しときなよ」

僕がそう言うと、

「婚約者か、立場的に亡命系からは迎えたくないし、かといってちゃんと立場を立てるまでは婚約するのもなあ」

「うちもそうだな。兄貴たちは亡命系と結婚して、子供もいる。バルト融和派と結ぶなら俺しか枠がないし、そんな状況で変に恋愛するのもなあ。まあ、アルフレッドにはそういう心配はないだろうが」

ニヤニヤしながらこちらを見てくる二人。矛先が僕に来た。帝国にルーツを持ちながら、同盟の中心地で育ってきた僕にとって、ウーラント商会がオープンした帝国風の料理店は、自分のルーツに触れるようにお気に入り場所だった。

ビジネスで忙しいカークに代わって、悪ガキ2人のお目付け役をやる代わりに御代を無料にしてくれた。とは言え一人で行くには敷居

が高いので、よく幼馴染のカトリナを誘っていた。そう勧めてくれたのもカークだ。

そして去年のクリスマスに、幼馴染だったカトリナとは、恋人という関係になった。それ以来、『婚約者と恋人』は同席可というルールが出来、今ではクリステイン嬢とカトリナは大の仲良しだ。もちろん、僕たちの弟分のユルゲン君も良く同席する。

僕たちと同じく、メーブルヒル校に入学し、ハイネセン記念大学を目指している。僕はともかく、フライングボール部のエースとボクシング部のキャプテンの弟分ともなれば、亡命者とは言えいじめられる事もないだろう。

「2人も早くそういう人を連れてきてくれたらとは思うけど、ウォリスみたいなのも困るしね」

「まあ恋愛は自由だからな。他のやつがやると嫌味だが、あいつには変な華がある。ああいうのは様になる奴がやらないと見ていて痛々しいからな。そういう意味でも貴重な人材だ」

「士官学校対策も一緒に励んだ仲だしな。距離を置いてみている分には楽しめる」

そう言いながら笑う二人。僕も一緒に笑ったけど、誰にも言っていないことがある。付き合って1か月記念に、サプライズで手品をしたんだ。カトリナは喜んでくれたけど、『アルフレッドに手品は似合わないから、私以外には見せないで』って言われた。みんなの前で何か披露するとしても、手品以外になるだろう。

「おつ、貴様らも来たのか。あれだけ励んだんだ。ちゃんと足を運ぶのが流儀だろうしな」

噂をすれば……。じゃないけど、向こうからウォリスが声をかけてくる。

「おう、ウォリス。お前が一人とは珍しいな」

「まあな、取り巻き連中は全員が合格圏だった訳じゃない。俺は合格だろうが、不合格者にわざわざ足を運ばせるのも気分が良くないし、カタリーナとは別れたんだ。あいつ、俺の監視の為に音楽学校に行くとか言いだしてな。無関心なのも寂しいが、束縛されすぎるのものな。」

情熱的なのは良いが、こうなると大喧嘩だ。しばらくひとりでおとなしくするさ」

珍しく気落ちしたウォリスが、僕たちに並んで歩み始めた。カタリーナとはお似合いだったし、相思相愛だと思っていたけど、恋愛って難しい。暖かそうなカシミアのマフラーを巻いた首元に、赤い3本の線が見えた。ウォリック家で猫は飼っていないなかったはずだから、そういう事なんだろうな。

カトリナの家は、テルヌーゼンでもそれなりに資産家だ。嫁入り修行もかねて音大に進むんだろうと思っていたけど、僕の監視の為だったりするんだろうか？うーん。それはないだろう。

いま肩を並べている3人は、メープルヒル校の女性陣の人気を集めていて、女性陣には『3銃士』って呼ばれていた。そして本人には伝えていないけど、この3人を一喝で従えたカークは『キング』って呼ばれているらしい。これはカトリナが小声で教えてくれたことだ。

既に婚約しているのを知っていたから断ったけど、何回か紹介してほしいって言われたこともある。そんな彼らから比べたら、僕は目立つ存在じゃないし、考えすぎだな。それに士官学校に入学したら、なかなかメープルヒルに帰ってくるのは難しい。音大なら敷地も隣接しているし、ランチも一緒に取れるかもしれない。僕自身は、カトリナの音大進学をむしろ歓迎していた。

そのまま、士官学校の校門を抜け、合格者の番号が張り出された掲示板に向かう。

「4431番は……。あつたー！」

「おお！合格おめでとう!!」

自分の受験番号を見つけて思わず声を上げると、在校生が駆け寄ってきて胴上げをしてくれた。気恥しかったけど嬉しかった。胴上げが終わって気を落ち着けて周囲を見ると、少し距離を置いて3人がこちらを見ている。そちらに向かうと

「アルフレッド、胴上げの様子を動画に撮っておいたぞ。あとでご両親に見せてやれ」

「席次も見てきたが、お前は93位だ。駆け込みで上位入学だな」

フレデリックとヴィットリオが嬉しそうに声をかけてくるが、ウオリスは渋い表情をしていた。えっ、僕が受かってウオリスが不合格なんて……。

「考えている事は何となくわかるが、俺も合格しているぞ。俺が3位、フレデリックが4位、ヴィットリオが9位だ」

「すごいじゃないか。ならなんでそんな表情何だい？」

合格圏だった3人は、自分の受験番号じゃなく、合格順位の方に足を運んでいたようだ。ほらねカトリナ。僕と『三銃士』を一緒にするのはおかしいよ。不機嫌そうなウオリスを横目にフレデリックがやれやれと言うジェスチャーをする。

「我らが講師役殿が2位だったからな。席次で抜かして一泡吹かせたかったウオリス坊っちゃん計画が狂ってご機嫌斜めらしい」

「それだけじゃない。あいつが首席ならまだ納得できる。ただそれ以上がいるというのも、どうも面白くはないだろ？」

うーん。まあ、ウオリスは何だかんだカークに頭が上がらないし、気持ちも判らなくはない。でもウーラント商会の仕事もしながら士官学校対策をしてきたカークが次席って本当にすごい事なんじゃないのかな？ そうウオリスに言うと、『そういう考えもあるが気持ちの問題』との事だ。

「さすがにランチには早い。カフェにでも行くか？ メープルヒル校に合格報告に行くにも、時間が早すぎるしな」

「男だけでカフェか。まあ、しばらくは大人しくするつもりだし、よろう」

そんな話を話しながら士官学校を後にする。肩を並べて進んでいく3人の背中を見て、僕は嬉しく思うと共に、寂しくも思った。士官学校の4年間は、カークも含めてこんな時間が続くだろう。でも任官したらそれぞれ場で任務に励むことになる。この数年は僕の人生で予想外の変化が起きたけど、意外とこの変化が自分の大切なものになっているのだと気づいた。

勿論、カークにも合格していた事を報告した。彼が次席だった事、僕が93位だった事も添えて。彼からの返信は『悪ガキどもは自己責

任だが、フラウローザスには恩がある。アルフレッドが不合格だと俺も責任を感じただろう。朗報をありがとう。詳しくは夕食でな』という物だった。『キング』に『三銃士』以上に気にかけてもらっていた事実を知り、僕は変な喜びを感じるのだが、それはまた別の話となる。

宇宙暦726年 帝国暦417年 1月末

惑星テルヌーゼン 市立経済大学

クリステイン・ウーラント

「ふう。アルフレッドも合格だったそうだ。これでフラウローザスに不義理をしないですね」

「それは良かったですね。でもアルフレッドさんも十分合格圏でしたのでは？」

私が受験した市立経大の合格発表を、ターナー様と弟のユルゲンと三人で見に行き、私の受験番号を見つけて、周囲にいた先輩方からも祝辞を頂いたりした後、名所と言われる櫛の並木道を三人で手をつなぎながら歩いていると、婚約者であるターナー様がタブレットを取り出し、メッセージを確認するとホッとしたようにつぶやきました。

「なんて言うかなあ。普段一緒にいる連中が、良くも悪くも目立つ連中だ。隣の芝生は良く見える……。じゃないけど、ちゃんと良さを持っているのに、それに気づいていない生徒をみているようだったから。これで少しは自信をもってくればなあ」

「カトリナさんもおられますし、きっと大丈夫ですわ」

それもそうだな……。と苦笑すると、視線を戻して歩き始める。私たちの間で両手を繋いでいたユルゲンも嬉しそうだ。ユルゲンはアルフレッドさんに良くして頂いている。自分の事のように思っているのだろう。

「ちなみに次席だったそうだ。言った通り不合格の心配はなかったよ」

からかうような表情で伝えてくる婚約者に、『おめでとうございませ』と返す。今日は士官学校の合格発表の日でもあった。そちらに行くべきではと伝えたのだが、私の合格発表を優先して下さった。嬉し

い反面、婚約者だからと言って、自分を犠牲にされているのではない  
と思う。ウーラント商会の事が無ければ首席も取れたのではないだろ  
うか……。

「クリスティン。何を考えているか分かるが、気にするな。ウーラン  
ト家に見込まれなければ、あのまま航海士になり、良くて下士官待遇  
で徴兵されていた。それに比べれば俺の人生はだいぶ拓けたものにな  
っているよ。少なくとも知り合いの子弟の誕生日にシルバーカト  
ラリーを贈れる身分ではなかったさ」

微笑みながら声をかけてくる未来の夫。兄貴分のトーマスさんが  
遺されたタイロンさんの一歳の誕生日をきっかけに、ウーラント家は  
知り合いのご子弟にシルバーカトラリーをお贈りすることになった。

帝国風の贈り物で正直良いのかとも思ったが、誕生日ごとに一組の  
カトラリーと手紙を添える風習をターナー様が気に入り、この形にな  
った。エルファシルのタイロンさん宛だけでなく、エコニアの義  
妹、そしてトーマスさんの弟君にも、私と連名でお贈りしている。

ウーラント家が同盟で根を張るための起業も、そしてユルゲンが徴  
兵を避けるための士官学校入学も背負ってくれた。その負担を少し  
でも減らせればと、本当は士官学校に隣接した音大に行きたいけど、  
市立経大に進路を決めた。お父様も会話はまだまだだが、同盟語の読  
み書きを覚え、財務経理事務を担うようになっていく。

亡命を決めた時に見えたウーラント家の将来像は、良い方向に大き  
く舵を取り、順調に進んでいる。そして帝国風の価値観も良いと判断  
すれば受け入れて頂ける。お父様が良い意味で帝国騎士としての矜  
持を保っていられるのもターナー様のおかげだ。

「もう、そんなことではありませんわ。いつか私たちの子供と、こうし  
て手を繋いで歩きたいと思ったのです」

そんな事は考えていなかったが、いつも私を気遣ってくれる婚約者  
を困らせたくて、思わず言ってしまった。淑女としては、はしたない  
事なのかもしれないと恥ずかしくなった時には、もう言葉を吐き出し  
た後だった。

「大丈夫さ、その時は三人でまた歩こう。その頃にはもしかしたらユ

ルゲン様にも良いお相手がいるかもしれない。タイロンも大きくなっているだろう。皆でピクニックをするのも楽しいかもしれない」

そんな言葉を笑顔で返されては、頬が熱くなり何も言えなかった。「カーク兄さん、僕の良いお相手って誰？」

「そうだな、そういう人が出来たら自然とわかるんだ。そういう人が出来たら教えてくれるかい？」

ユルゲンは『うん』と応じた後、ターナー様と繋いでいた右手を離し、拳を作って差し出した。『約束！』お互いにそう言って、拳をくつつける。

「入学したらお互い忙しくなる。今は穏やかなこの時間を楽しもう」

ユルゲンと手をつなぎ直すと、ゆっくりと歩き始める。まだ冬のテルヌーゼンの気温は低く、寒いはずだったが、ゆっくりと3人で並木道を歩くひとは、どこか温かかった。夕食はいつもの7人だけでなく、ウォーリック家のウォリスさんも同席された。

元旦の際には見事な手品を披露して下さったのだが、首元に遺る3本の赤い線が気になって、この日は集中できなかつた。話題にするのは失礼だと思つて控えたが、途中で離席したフレデリックさんが、首元に口紅で3本の線を描いて戻ってきたとき、はしたないとは分かつていたけど笑ってしまいました。



## 第21話 シミュレーター

宇宙暦726年 帝国暦417年 10月末

同盟軍士官学校 戦術シミュレーター棟

ファン・チューリン

「く、また見透かされたか……」

私はシミュレーターのコンソールを叩きながらぼやく。士官学校特有の講義である戦術シミュレーター。既に対戦がはじまって一時間。稀にみる長期戦の様相を呈していたが、じりじりと私は戦力を削られている。

私の誘いには徹底して乗らず、誘いとは違うポイントをかすめる様に攻撃し、出血を強いてくる。ボクシングで言えば、ジャブを打ち合っているが、相手のジャブばかり当たると言った感じだろうか。

「彼が相手の土俵に合わせてくることは分かっていた。こうなったらトコトン粘ってみるか」

こちらの誘いが全て見透かされる以上、下手な事はしない方が良い。相手が上手ならトコトン守勢に徹してやる。そう決心してからさらに一時間。時間切れで判定負けとはなったが、必死に食らいつくだけの時間は、妙に楽しい時間だった。

「良く集中力が続いたな。ファン、お疲れ」

戦術シミュレーターを出て、一息ついているとウーロン茶を差し出しながら対戦相手が声をかけて来た。オレンジの髪とエメラルドの瞳が特徴的な同期のターナー。士官学校に入校してまだ半年だが、同期の中では話題の人物だ。

戦術シミュレーターの対戦で、相手の得意な戦術と同じ戦術で戦い、楽しめたなら対戦相手の好みのドリンクを差し入れる。彼からドリンクをもらえれば教官も及第点は付けるなんて話まで出ていた。

「ありがたく頂く」

短く礼を言い、ウーロン茶で喉を潤す。彼に視線を向けるとお馴染みのストレートティーを飲んでいた。いつか彼にストレートティーを胸を張って奢りたい。それが今の私の小さな目標だった。

「フアンの粘りはすごいな。シミュレーターで2時間、実戦なら48時間か。48時間あれば戦場以外の要素が動くはずだ。防衛戦としては十分だな」

「というところ？」

彼の意図が掴みかねて、私は短く応じる。本来なら素直に教えを乞うべきなのは分かっていた。ただ、私はコミュニケーションが苦手だ。同年代の友人も少なく、同期の中でも話をするのは少数だ。直すべきだとも思うが、こればかりは性分なのか、自分なりの努力は実を結んでいなかった。

「そうだなあ。対帝国との戦争で、同盟は基本的に防衛側だ。帝国の連中はご苦労なことにオーデインからイゼルローン回廊を抜けてくる。追加の戦力を呼ぶにも、補給を受けるにも、こちらの数倍の労力が必要だ。負けない戦いをされるのは、向こうさんにとっては嫌だと思うぞ？」

確かにそうだ。帝国の首都星オーデインからイゼルローン回廊を抜けるのに40〜50日、輸送船を伴っていたとしても、戦力の維持には限界がある。戦術シミュレーターで大敗は無いが大勝もなく、惜敗と辛勝を重ねている事は、私の密かな悩みだった。でも一歩引いてみれば、我が軍は勝つ必要はないのだ。負けなければ、帝国は引き返すしかない。

「まあ、目立つ連中は攻勢型が多い。戦争って意味では、国民の為に勝利は必要だろうが、勝ちに行くって事はリスクを負うってことだろ？それも必要なんだろうが、リスクを抑えて負けない戦いが出来るフアンは、きつと必要とされるよ。司令官の立場で考えたらわかるだろう？」

「確かに。部下全員がジャスパードだったら、安心して良いのか不安に思うべきなのか悩むな」

ボソツと漏れた私の本心は、思った以上に彼の笑いのツボにフィットしたらしい。『笑える表現だ』と言いなながら、彼は私の肩を叩いてきた。ジョークを言ったつもりはないのだが。

「やってみて思ったが、守勢に徹するのは精神力が問われるな、何度も

攻勢に出たいと思った。実戦でここまで粘れるかは、正直疑問だな。良い勉強になったよ。自分の性に合う戦術を探しているんだが、なかなか」

彼はそう言いながら肩をすくめた。対戦相手の得意戦術に合わせていたのはそういう意図もあったのか。名前が出たジャスパーとの対戦では、お互い大攻勢をかけあい、わずかな損耗率の差で勝敗がついた。対戦時間はわずか15分。

首席のアッシュビーとは定石から外れた艦隊軌道をお互いに取り、最終的に本拠地を数秒の差で陥落させた事で、勝負がついた。教官たちもどう評価をすべきか頭を悩ませたという話が、士官学校のニュースに疎い私にも漏れ聞こえている。

「なんとなくだが、ファンの気持ちも判った気がするよ。ほら、俺も辺境星域出身だからさ」

悲し気に話す彼が意外だった。別にハイネセンを始め、人口密集地帯の住民たちが冷たいなどと言うつもりはない。ただ、入植し開拓を住人一丸となって進める辺境星域では、町全体が家族みたいなものだ。戦死の報に触れれば、町全体で悲しむ。

血はつながっていないなくても、兄弟姉妹みたいな感覚で成長して行くのだ。自分では把握できていなかったが、なるべくリスクを抑えて、損害を減らす戦い方を好むのは、私のそんなバックボーンも影響しているのかもしれない。

「だいぶ時間を取らせたな。まあ、嫌じゃ無ければランチも付き合ってくれ」

そう言い残すと、ターナーはストレートティーが入っていたカップをゴミ箱に投げ入れ、戦術シミュレーター棟を後にした。ランチの誘いはうれしいが、同期の中でも目立っている彼の周囲には、ジャスパーやベルティーニと言った攻勢系の同期だけじゃなく、何かと芝居がかかったウォーリックなど、私が苦手とする連中もいる。ただ、それも良いかと思った。少しでもコミュニケーションの面で改善できるかもしれない。

それにあの連中がいる所にはローザスがいる。同期の間での揉め

事を仲裁するのは、首席のアッシュビーでも次席のターナーでもなくローザスだ。彼がいれば、大きな問題にはならないだろう。迷惑をかけることになるのは不本意だが、どうせ毎日ランチは食べるのだ。一度くらいは同席してみるのも悪くないかもしれない。私もウーロン茶を飲み干してカップをゴミ箱に投げ入れる。今までに感じた事が無い楽しさを感じた。

宇宙暦726年 帝国暦417年 10月末

同盟軍士官学校 戦術シミュレーター観戦室

ジョン・ドリンカー・コープ

「手堅いファンと2時間の長期戦か。ジョン、どう思う?」

「そうだな。良くも悪くもあいつには得意戦術がないってトコかな? 戦術目標によって手を変えるのは俺に似たタイプだが、あちらさんが2枚上手って感じだな。ファンがすっかり準備して手堅い手を打ってくるのは分かっていたはずだ。同じ土俵に乗ってどこまで出来るか試した……。って可能性もあるかな?」

「敢えて相手の得意分野で勝負する。余程の自信があるのか? それとも結果にはあまり興味がないのか?」

ブルースは戦術モニターに視線を向けたまま、あごに手を当てて考えこんでいる。ハインセンの中等学校でクラスメートになって以来の仲だが、ブルースはずっと首席だった。同年代で適う奴はいなかったが、さすがに士官学校まで首席で入学しちまうとは思わなかった。ただ、やはり世間は広い。こいつが意識する存在が両手で足りる程度でも現れたのだ。

「相手の土俵に立って勝てば、力関係を明確に出来るが……。いや、奴はそういうタイプでもないしな」

士官学校に入学して半年。ブルースが一番意識しているのが、次席で入学したターナーだ。首席のブルースからしたら一番のライバルのはずが、あちらさんはそこまで意識してこない。

それだけでもブルースからすると肩透かしを食った感じなんだろうが、戦術シミュレーターで僅差で負けてから、更に意識するように

なった。俺からすればターナーは単純に戦術シミュレーターを楽しんでいるだけのような気もするが、それを伝えても納得はしないだろう。

ターナーに僅差で負けた以外は、大勝する事が多い事もあって、戦術評価ではブルースの方が評価点は高い。ただ、敢えて評価を気にしないかのようなターナーの振る舞いが、ブルースには理解できないんだろう。

黙ってはいるが、マーキングをして縄張りを主張している狼が、我関せずで縄張りの上を飛ぶカラスを気にする感じだろうか？マーキングし、遠吠えをしてみても、興味深そうに木の上から見ているカラスに、どうしたもんかと悩んでいる感じだ。

もつとも、ブルースが言った通りターナーは学生同士の力関係を気にするタイプじゃない。むしろ教官以上に、接点をもった学生の良さを示している感じだ。弟を励ます兄貴みたいな感じだろうか？そういう意味でもブルースとはかみ合わないだろうな。常に首席だったブルースにとって、同期は自分の下位者でしかなかった。下手したら教師陣すら相手にしていなかった事も踏まえれば、そもそも励まされる経験も皆無に等しいだろう。

「一人で考えても仕方ないんじゃないか？どうせならランチでも一緒に食べてみたらどうだ？それとも派閥が気になるか？」

「派閥の事はどうでもいい。ただ奴に負けたような気になるから決心がつかないだけだ」

まあ、ブルースの考えもなんとなく解る。自分が目的は何であれ、ランチを一緒にしたいと思う存在も今までいなかったんだろう。誘われる側であり、質問される側であり、羨望の視線を向けられる側だった。例年は俺達が属するバーラト原理派の学生が上位を占めるが、今年はそうでもない。ターナーとファンは辺境出身、ジャスパールとベルティーニは亡命系、ウォーリックは融和派の雄であるウォーリック商会の出身だ。バーラト原理派に囲まれて育ってきた俺たちにとって、よく言えば新鮮、悪く言えば慣れない環境とも言える。

それに良くも悪くも唯我独尊な所があるブルースは、先輩や同期か

ら必ずしも好まれていない。優秀なだけに一目置かれているが、学年を跨ぐ問題はまずターナーの所に行くし、同期の問題は世話好きで温和なローザスの所に行く。人数が多いバート原理派のリーダー的な存在ではあるが、今までのような文字通り『主役』という立場にはなっていない。本人も気づいていないのかもしれないが、妙なやりにくさを感じているんだろう。

「あちらさんは勝ったなんて思わないとは思うがなあ」

「それも分かっているが、気持ちの問題だからな……」

そう言いながら、空になった紙カップを握りつぶすブルース。仕方ない、俺が一肌脱くとするか。ローザス辺りに相談すればうまく事を運んでくれるだろう。優秀な奴だし、いずれは同盟軍を背負う人材だ。多少はおせっかいを焼くのも、将来の同盟軍の為だからな。

俺達はカップをゴミ箱に投げ入れ、観戦室を後にした。そう言えば、ターナーとの対戦も近い。さすがに2時間シミュレーターに籠るのは骨が折れる。ファンの時同様、手堅い手の打ち合いになるであろう対戦を考え、俺は小さくため息をついた。

## 第22話 その頃 船長とオーナー

宇宙暦727年 帝国暦418年 3月末

エルゴン―エルファシル航路上

キャプテン佐三

「この航海が副長として最後の航海だと思うと、なんだか変な気持ちでさあ」

「ハイネセンに戻れば、船長になるんだ。雇われとはいえ、責任重大だぞ？頼むぜ」

苦笑する副長を横目に、エンブレム号はエルファシルへの航路を順調に進んでいた。ターナーのお陰で亡命融和派とのパイプも太くなり、帝国語に堪能な航海士見習いも確保できた。ウーラント商会の案件もまずお声が掛かるのはうちだし、ウオーリック商会からも前以上に声をかけてもらえるようになった。

引き合いが多いのは嬉しいが、一隻でこなせる案件数でもない。そこで関係各所に出資をお願いして、中古ながら2隻目の商船を購入し、一部システムのアップグレードと、メンテナンスを進めている。エルファシルからシロン経由でハイネセンに戻る頃には、運用可能になる予定だ。

「為せば成るとは言わねえが、副長歴もそれなりにあるんだ。フェザン方面を任せるんだからよ。頑張つて稼いでくれよな。あつちはエコニアの案件もあるし、面白い事になるはずだ。きっと良い経験になる」

そう俺が笑顔で言うと、副長は安心したようだ。ただ、1週間おきに不安げにしゃがる。こいつも手が焼けるぜ。とは言え気持ちも判る。俺もウオーリック商会で雇われ船長になった時は、身が引き締まる思いがした。

その分、独立して商船持ちになった時は業務面では心配はなかったが、今度は資金繰りっていう悩みが増えた。商船持ちになるのは夢だったが、創業期の資金繰りに悩む俺を横目で見ていた副長は、独立までは考えていないかもしれなかった。

「そういう意味では、ウォーリック商会はやっぱりすごいわな」

船長席の前に据え付けられたモニターに視線を向けつつ、俺は改めてお世話になったウォーリック商会の独立支援の手厚さに舌を巻いた。零細資本から脱皮しつつある出光商会には、まだそこまでの余力はない。ただ、今関わっている案件が成功し、モデルケースになれば、時間はかかるだろうが中堅資本くらいにはなれるだろうし、独立支援を行う余裕も出てくるはずだ。

「これもターナーがつかないでくれた縁か。こんな案件に関われるとは思わなかったなあ」

エンブレム号の船倉には、シロンで積み込んだ帝国風の食材と最新式の醸造設備、農業機械を積んでいる。テルヌーゼンで成功したビジネスモデルを、前線へ行く前に同盟軍が寄航するエルファシルでいよいよ始めるからだ。

エルファシルの人口は200万人を超え、小さいながらも駐屯地もある。十分成功は見込めた。今後の計画では、エンブレム号はハイネセン―シロン―エルファシル間をメインに運航予定だ。そして新しく購入した商船は、ハイネセン―シロン―エコニア―フェザンを軸に運航する。

同盟の中でも田舎に属するエコニアを加えるのは、現段階では採算が厳しいのも確かだ。ただウォーリック商会の働き掛けもあり、既存の人造湖の倍くらいの人造湖を新設する予算が下りた。フェザンからの帰路に惑星ウルヴァシーに寄港し、船倉の合間に淡水を積み込んでエコニアで下ろす。今は余剰穀物くらいしか商材がないが、いずれは加工肉や酒も商材になるはずだ。そうならば十分採算がとれる航路になるだろう。

「井上にも少しは借りを返したいしな」

親友でもある井上はエコニアで商店を経営しているが、採算がとりにくい航路は諸々の発送もあと回しにされがちだ。入植時に持ち込んだ農業機械がメンテナンス時期を迎え、エコニア経済からすれば大規模開発が行われるともなれば、メンテナンス部品だけでなく、新規で農業機械の購入も検討されているだろうし、醸造設備も必要になる



だろう。

住民に寄り添う商売をしている井上商会は、住民たちにヒアリングを行って事前にニーズを取りまとめ、出光商会に発注してくれた。普通に発注したら半年以上かかる物も、事前に取りまとめてもらえれば用意可能だ。

それでも数週間かかるが、今までと比べれば劇的な改善だろう。そしてエコニアがモデルケースになれば、最低減のインフラ投資がされた後、放置されている辺境星域が採算の取れる市場になる。自分たちを介して、星系が発展する。そうなる事で美味しい市場になり、ますます発展する。建国期の商船乗りたちが感じていたやりがいや誇りを、感じられる新興エリアが出来るかもしれない。

「士官学校を卒業したら任官だろ。まだ当分里帰りはしないだろうし、どうせならエコニアが発展しすぎてびっくりさせてやりてえな」  
「船長、内心が漏れてますぜ」

そう指摘してきた航海長もどこか嬉し気だ。もともと独立して数年の零細商会在、商船を追加できるほど好調なのが誰のおかげかはみんな知っている。恩返しじゃないが、エコニアを発展させてびっくりさせたなんて考えているのは、俺だけじゃなかった。

良縁を結んでくれたオレンジ頭の元航海士見習いからは、彼の兄貴分の子供であるタイロン宛の誕生日プレゼントと手紙を預かっている。誕生日プレゼントを届けるのに手ぶらじゃ行けねえ。俺は独立商人風に、情操教育に良さそうなおもちゃを用意してる。

トーマスは俺の船に乗る可能性もあったんだ。半分身内みたいなものだ。出来る事はしてやりたかった。前に会ったのは半年前だが、赤ん坊の成長は早い。成長しているであろうタイロンに会うのが楽しみだった。

宇宙暦727年 帝国暦418年 4月末

惑星エコニア 井上商会

井上オーナー

「発注して一か月足らずで納品されるとはなあ。井上オーナーは魔法

でも使ったのかい？」

「ありがとうございます。いやあ、航海士になったターナー家の、そうそうあのオレンジ頭の縁で、ある商會がエコニア経由の定期便を運航してくれましたね。そのお陰もありまして」

「そうかい。そういえばあのオレンジ坊やが、士官学校に入学したんだもんなあ。エコニアも捨てたもんじゃないね。これで第二人造湖が出来ればもっとエコニアは良くなる。子供はともかく孫世代には首都星系の大学に行く人も増えるかもしれない。夢みちやうねえ」

農業用機械とメンテナンス部品を受け取りに来た常連の中年男性が嬉しそうに話しかけてくる。世間話をするのはいつもの事だが、人造湖の新設が動き出してから、明るい話題が増えた。

人造湖が完工したらそのまま灌漑設備と道路の整備。そして増産した穀物で酪農業と酒造業が動き出すだろう。そうなれば、寄航する商船もさらに増えるはずだ。常連は夢と言ったが、孫世代にはハイネセン記念大学や、国立自治大学に進学するのも、そこまで難しい事ではなくなるかもしれない。

「ありがとうございます。またお願いします」

嬉し気に農業機械を輸送用トラックに積み込み、手を振ってからトラックに乗り込む常連を頭を下げながら送り出す。お客の景気が良けりや、こちらも自然と明るくなるってもんだ。今までは半年待ちでやっと入荷した商品を、更に価格交渉されることが多かった。

お互い知らない仲じゃない。懐事情も分かっているから無下にもできなかったが、景気が良くなった事もあって、そういう事も無くなった。隣のマスジツトに出店する為にしていた資本蓄積を使って、エコニアの倉庫を大幅に拡充し、冷凍冷蔵用の倉庫も新設した。降つてわいた好景気に対応できたのは、井上商會だけだった。

「オーナー、戻りました。収容所の皆さん、喜んでましたよ。でもせつかく入荷した帝国風の食材を差し入れちまうなんて……。なんか勿体ないような気がしちやいます」

「気持ちに分かるがな。これも投資よ。懐かしい帝国風の食材を食べれば、連中も頑張つて働こう！って思うだろう？それに、何人かが、エ

「コニアに骨をうずめても良いって考えるかもしれないねえ。收容所はここだけじゃねえんだ。捕虜のまんまじゃ定員があるが、住人になつちまえば定員はないからな」

「確かに住人になつてももらえたら嬉しいですね。俺ももつと愛想よくします！」

そう応じると、配送役の新入りが伝票を置いて裏口から倉庫に戻つていく、次の配送に向かうんだろう。收容所内の売店を経営していたし、第二人造湖開発事業の主幹になっている事もあつて、捕虜と接する事も多かった。

一括りに捕虜と言っても、中には業界の専門職のような技能を持っている人材もいるし、多くの人材は、農業や酪農の経験者だ。事業計画の太枠は首都星系から降りてきたが、実際に現地調査と設計図の細かい調整を行ったのも、收容所の捕虜たちだった。首都星系では高給取りに属する人材が眠っていることに、今更ながら気づいたわけだ。「捕虜のまんまじゃ、敵国人のまままだ。帝国を捨てて、エコニアに住もうって思つてもらつて初めて真の勝利よ！オレンジ、俺は俺で、戦争してるぜ。おめえさんも頑張れよ！」

遠い首都星系で、士官学校で励んでいるであろう元従業員に思いを馳せながら、独り言をつぶやく。経済成長が進めば、首都星系の開発支援事業が無くても、惑星独自に開発予算を捻出できるようになる。大規模緑化事業が中止され、エコニアの地表の多くは荒れ地のままだった。でも自分たちの頑張り次第で、エコニアを緑溢れる惑星にできるかもしれない。

そう思っているのは俺だけじゃないはずだ。捕虜の同化政策がうまくいけば、エコニアに優先的に捕虜が收容されるようになる。帝国風の食材の差し入れは、決して安くはない投資だが、エコニアの将来に必ずプラスになると信じていた。

## 第23話 ダンスパーティー

宇宙暦727年 帝国暦418年 12月末

惑星テルヌーゼン ダンスパーティー会場

ジョン・ドリンカー・コープ

「コープ。もう食わんのか？それにしてもノンアルコールとはなあ。パーティーに酒はつきものだろうに」

「俺はお前ほど大食漢じゃない。それに未成年の男女が集まる場だからな。間違いがないようにって配慮だろ？もつとも俺は酒は受け付けないから、どちらでもよいが」

壁に背を預けている俺に、傍のテーブルに腰をおろしてターキーを頬張りながらベルティーニが声をかけてくる。ボクシング部に所属している奴は、今日もトレーニングをしていたはずだ。ダンスパーティーの日ぐらい頭を切り替えても良いとは思うんだが、それが強さの理由でもあるんだろう。

ただ、今日の分のたんぱく質が足りていないとか抜かして、ダンスパーティーに来ているのにターキーにパクつくのは如何なものか……。まあ、こいつらしいからとやかく言うつもりはない。

俺自身も踊れなくはないが、ダンスはそこまで好きじゃない。半分ブルースに付き合っただけで参加したようなものだから、テーブルに陣取ってターキーを食べるベルティーニの相手をするのは都合が良かった。

「それにしても、見事な流れが出来ているな。傍目で見ていると面白い」

「ん？流れ？」

こいつは冬眠明けの熊よろしく、ターキーに夢中だったようだ。俺の視線に気づいたのか？ダンスホールに視線を向ける。

「ああ、ターナーの事か。まあ、もともとフレデリックが去年のパーティーで口を滑らせたのがきっかけだからな。うんうん、ファンも楽しめている様だし良い事だ」

そう返したと思ったら、また視線を皿に向ける。そろそろ食べ切りそうな状況だが、まさかまたお代わりはしないよな。そんなことを思

いながら、ダンスホールに視線を向ける。ファンが音大生の一人と嬉しそうに踊ってるのが目に入る。少しでもファンの事を知っていれば、驚愕の光景だろう。事の始まりは、同じくダンスホールで踊っているジャスパーが口を滑らしたことに始まる。

前期試験の成績で、ブルースを初めて主席の座から引き摺り下ろしたターナーだったが、それまでも次席だったし容姿も含めて目立つ存在だ。もちろん音大でも話題にはなっていただろう。

もつとも当人は婚約者の存在を理由に、去年のダンスパーティーに参加しなかった。このダンスパーティーで出会って結婚するカップルもいるから、婚約者持ちが欠席するのは道理だ。ただ、お調子者でターナー好きのジャスパーが

『あいつの社交ダンスはパートナーを引き立てる。イーセンブルク校の授業では、亡命派の淑女があいつをパートナーにする為に並んでいた』

と漏らしたことから事態が動き始める。思い出の1ページに一度パートナーになってみたい。そう考えた音大生たちが動き始めた。女性陣の情報網を持つてすれば、ターナーと同期で親しいローザスと言う候補生の恋人であるカトリナ嬢が、音大に在籍している事はすぐに判明しただろう。

お願いと言う名の圧力が、カトリナ嬢にかけられる。恋人からの依頼を、もともとお人好しのローザスが無視出来るはずもない。ターナーからしても、なにかと同期間の問題を処理しているローザスを無下には出来なかった。

ただ、ターナーとしても、ダンス講師役をする為だけにわざわざ時間を割くつもりはなかった。コミュニケーションに難ありのファンの改善の場にしようと考えたのだ。ダンスがそこそこのレベルで、男性側が話題を提供しなくても大丈夫な、気の優しいパートナーを紹介することを交換条件とした。

これだけならファンにとっては余計なお世話だったかもしれない。ただ、放課後にターナーが女性役を務めてダンスの特訓をしたのだから、大したものだ。その成果もあって、ファンはこのパーティーを楽

しめている。

そしてその特訓の光景を笑ったジャスパーに怒ったターナーは、謝罪の条件に『女性役でベルティーニと踊る事』を条件にした。士官学校の一室は笑い声に包まれたし、なんでも器用にこなすウォーリックが、面白がつて隠し撮りをした。その一枚は、二人の容貌もあいまって少数の男性と多数の音大生にとって垂涎の品になっていているらしい。それを知った時のジャスパーの顔は、思い出しただけで今でも笑える。

って話がそれだな。ダンスホールの流れの件だ。女性陣の多くはまずターナーと踊り、そのあと3つの流れに分かれる。ターナーで調子を上げた女性陣の多くは、ブルース、ジャスパー、ウォーリックの3人と踊る流れが出来ていた。

あの3人はタイプは違うがダンスはうまい。ただなあ、この流れだとターナーは来年はまた欠席するんじゃないだろうか。担当が誰になるのかは分らんが、ご機嫌を取る必要はあるだろうな。

「そのターキーは私も焼き上げるのを手伝ったんです。そこまで気に入って頂けると頑張った甲斐があります」

「そうなのか。このターキーは絶品だ。いくらでも食べられそうだな」俺がダンスホールに視線を向けているうちに、最寄りのテーブルでも戦況に変化があったらしい。テーブルの上にはターキーを載せた皿が追加され、小柄な女性が嬉しそうにターキーを頬張る熊を見つめていた。

俺の位置から引いてみると、ペットの熊に少女が餌付けしているようにも見える。ただ、ここで声をかけるのも無粋だろう。俺は候補生がたむろしている一角へ足を向けた。少なくともベルティーニにお節介は必要なさそうだからな。

宇宙暦727年 帝国暦418年 12月末

惑星テルヌーゼン ダンスパーティー会場

カトリナ・アルザス

「カトリナ、お疲れ様。良い演奏だったよ」

「ありがとう、アルフレッド。それにしても予想通りと言うべきかしら……」

私たちが目線を向ける先はダンスホールだ。音大主催のダンスパーティーらしく、ダンスの演奏も音大生が担当する。私の担当は開始から1時間。そのあとアルフレッドとパーティーを楽しむつもりだったが、私が演奏している時から、ずっと入れ替わり立ちかわりでパートナーを求められるターナー君が目に入り、正直罪悪感を感じていた。

彼のダンスは確かにパートナーを引き立てる。ガサツな所がある。ジャスパール君の発言だから、正直疑っていたけど、ダンスに関しては彼の言は正鵠を得ていた。だからこそ申し訳ない。

ターナー君と踊って、ある意味予行練習を終えてから、本命の所へ行く流れが出来ていた。ターナー君が怒ると怖いのは私も良く知っている。圧力に負けてアルフレッドをお願いしたけど、彼の怒りの矛先が自分の恋人に向いたら……

「大丈夫だと思うよ？ 今回のお詫びに来年からクリステイン嬢と同伴するみたいだし、招待状はカトリナが何とかするんでしょ？」

「うん。そっちは何とかなるけど、ここまであからさまだとなあ。来年、婚約者が同伴するってなったら、簡単にはパートナーをお願いできないだろうし、それはそれでいろいろ言われるかも……」

「音大も色々大変だね」

そう言いながら近くのテーブルの椅子を引いてくれるアルフレッド。席に座ってシンデレラでのどを潤す。アルフレッドはサラトガクローラー。会場に用意されたバーコーナーで予め頼んでくれたんだらう。キレイに取り分けられたオードブルに手を伸ばして、空腹を和らげる。こういう細かい仕事は、本当に得意なのよね。アルフレッドは。

「ターナーに関してはそこまで気にしなくても大丈夫だよ。ほら、男性は女性の3倍練習しないと上達しないっていうしね。本命と公式の場で踊る前に練習できてよかったって流してくれると思うよ？ さすがに来年の事は、音大で対処してほしいけど」

「そうよね。さすがに婚約者同伴ならみんな我慢してくれるわよね。クリステインには私からも状況を連絡したの。結構複雑な心境だったし、何か埋め合わせしないと……」

ボヤク私を慰める様に、アルフレッドが肩に優しく触れる。内緒にしているが、風貌も優しい気なアルフレッドも実は音大で人気だ。演奏している間、アルフレッドはずっと演奏に意識を向けていたけど、私の存在が無ければ、パートナの依頼は彼にも来ていただろう。ターナー君の婚約者のクリステインとは私も友達だ。そしてクリステインにとって、なんでも話せる同級生の女友達は私くらい。

ターナー君にダンスパーティーに参加してほしいとお願いする前に、クリステインにも事情を説明した。帝国風に言うと、自分の夫や婚約者がダンスの名手と見込まれるのはむしろ名誉な事だし、よく言ってベタばれの相手が、他の女性の目に映るのもまあ無理はないって考えるらしい。

ただ、当然嫉妬もするんだけど、そう言うのは淑女として『はしたない事』ともされているから、複雑だと吐露していた。ターナー君、音大生の私が言うのもあれだけど、見た目だけの性悪も結構いるの。お願いだからクリステインが悲しむような事態にはしないでね……。今の状況なら大丈夫そうだけど……。

そんな事を思いながら一息ついて、アルフレッドとダンスホールに向かおうかと言う頃合いで、事件が起きた。アッシュビー君と談笑していた女性が、ターナー君の傍に行き、パートナーに誘ったのだ。

「よりによって、アデレードじゃない……」

「ん？アデレード？」

「話したじゃない、アッシュビー君を狙ってて、見栄えもいいし性格もまずまずだけど、目的の為に手段を選ばない。自分の恋人は紹介したくないタイプって」

アルフレッドとの肩を強めに叩きながら、視線はダンスホールから外さない。曲が流れ始めたが、やけに密着してる。あっ、アデレードが耳元でターナー君になにかささやいてる。駄目よ！ターナー君。クリステインを泣かせちゃダメ！



「アデレードって娘が、カトリナの言つてた通りの子なら、きっと心配はないよ。カークのあの表情は本気で困つてるし、たぶんよそ見をしてるブルースへの当てつけじゃないかな？カークから貰つた男女の機微つて本に、そのまま書いてあつた気がする」

横から何か聞き逃せないセリフが聞こえたけど、何年も私の気持ちに気づかなかつた鈍ちんの意見は参考になるんだろうか？それとも人の事なら良く分かるの？それはそれでなんか納得できない。曲が終わるとまたアデレードはターナー君の耳元でささやいて、アツシユビー君の方にゆつくり戻つて行つた。

アツシユビー君もおそらく嫉妬しているんだろう。不機嫌な表情だし、ターナー君も困つた表情で、候補生たちの一団に混ざつて行つた。こんなことするから、『自分の恋人を紹介したくない女』って言われるのよ。来年、クリステインとアデレードが同じ場になると思うと、正直頭が痛い。

「まあ、なるようになるよ。そろそろ僕たちもいこうか？」

そう言いながら笑顔で手を差し出してくるアルフレッドに応えて、ホールに向かったけど、気が晴れるまで3曲も必要だった。自室に戻り、部屋着に着替えた頃合いで、男女の機微つて本についてアルフレッドを問い詰める必要がある事に気づくのだが、それは別の話だ。

## 第24話 夢見た漢

宇宙暦727年 帝国暦418年 12月末

惑星オーデイン ミヒヤールゼン男爵邸

クリストフ・フォン・ミヒヤールゼン

「いよいよ実行する機会が参りましたな。決行されるおつもりですか？」

「そのつもりでいる。こちら側は貴殿がいれば大丈夫だろう。それに私の旗艦にも数名同志が配属されている。戦況にもよるが、シャトルで艦隊を離脱するのはそこまで困難ではないはずだ」

「それにしてもフォルセテイですか。軍首脳部は叛徒ども以外は帝室に忠誠を誓うものだと思っておられないよう。まあ、おめでたい限りです」

「そう言うな、侯爵様、伯爵様と崇められて育つのだ。せいぜい経験するのは貴族同士のじゃれ合い位であろう？ 同盟が防衛主体で戦争を進める以上、彼らにとっては自領の反抗的な領民を殴りつける感覚なのだ。だからこそ、我々の組織もうまく動けると言うものだ」

お互いにグラスを掲げ、乾杯をしてワインを流し込む。目の前に座る一回り以上年上のジークマイスター大将に声をかけられ、スパイ網を作り始めてどれ位の時間がたっただろうか？ 社会秩序維持局の目を掻い潜りながら拡大していく組織は、俺に暗い喜びをもたらしてくれた。同志ひとり一人の動機までは深くは聞いていない。

私の場合は、親族との財産争いがきつかけだった。権利を声高に主張し、後ろ盾の意向を傘に着て、財産をむしり取ろうとする。何が貴族だ。選ばれし者などと鼻にかけてはいるが、法的根拠の有無はあれど、やっている事は強盗に等しい。そう考えたら、疑うことなく帝室への忠誠を叫び、叛徒の討伐など容易だと叫びながらしたたかな反撃を受ける連中を見ていて気分が良かった。

鼻につく連中を叩きのめし躡け直す。時には挫折すらさせてくれる同盟はむしろ私の味方だった。国内に諜報網を作り、情報を同盟に流せばもっと奴らを痛めつけてくれるだろう。多かれ少なかれ同志

たちは似たような理不尽や貴族社会の醜さに触れ、暗い喜びを感じながら、せつせつせつと帝国の足元に泥沼を作ろうとしてきた。

「フォルセティ星系が帝国軍の手に落ちれば、同盟とフェザーンの交易に支障が出るでしょう。メイン航路から数星系の所に敵軍がいれば、商船の航行などおぼつきません。軍首脳部からすれば同盟の経済に打撃を与えるつもりなのでしょうが、フェザーンとしても交易は命綱。何かしら動くでしょうが、こちらからも情報を流すようにいたします」

「そうだな。大敗しては私が戦死しかねんから、適度に頼むぞ。退路はイゼルローンしかないからな。パランティア辺りで艦隊を離脱し、アスターテまでいけば同盟の哨戒網に引っかかるだろう。まあ、世の中には知らない方が良い事もある。彼らはそれを知らず、我々はそれを知っている。それだけの事だろう」

やや遠い目をしながら話す、ジークマイスター大将を見ていて、私は今まで聞かなかった事を聞いてみたいと思った。男爵家の分家とは言え帝国騎士の身分もある。46歳で大将ともなれば、帝国では成功したと言えるキャリアだ。それを放り捨てる動機は一体なんなのか？亡命が成功すれば、もう会って話す機会もない。そうした状況も、背中を押したのかもしれない。

「動機か……。言葉にするには難しいが、父親への反抗心と、共和主義の理想社会を見てみたいという2点に尽きるかもしれない。父は社会秩序維持局の職員でな、職務に精励し何度も表彰されたが、家庭では暴君だった。幼いなりに私は共和主義者どもが父の鼻を明かして、逃げおおせてしまえと思った記憶がある。暴君の父から逃げたいと考えていた自分と重なったのかもしれない。

物心つく頃には、自然と同志のように思っていた共和主義者に関心を持った。幸い、我が家には共和主義者から没収した発禁書が多数存在したからな。理解するのにそう苦労はなかった。帝国は貴族制の膿に犯されている。何とかしたいと思っっているうちに同志のような存在が増え、ここまですな。マンフレート2世陛下の治世が長くなっていれば、我々もこんな苦しみから解放されていたかもしれない

が……」

「マンフレート2世陛下ですか。同盟で成人され開明的なお考えをお持ちだったと聞いております。まだ成人前でしたが、お噂は聞いておりました」

空になった2つのグラスにワインを注ぎ、献杯をする。陛下の治世が長いものになっていけば、もしかしたら貴族社会の膿のような醜さは排除され、もっと生きやすい帝国になっていたのだろうか？

「そのような陛下を育てた社会だ。それだけでも死ぬ前に見ておきたい。手土産も用意できたし、我々が協力すれば、同盟に十分貢献できるはずだ」

「確かに。敗戦が続けば鼻持ちならない貴族層が軍から減り、下級貴族や平民を実力主義の下、抜擢することもできるでしょう。そうなれば彼らの発言力も増します。爵位が無視される事は難しいでしょうが、爵位だけが重視される今の有り様も変わるでしょう。閣下の動きは、帝国にとっても無駄にはなりませんまい」

その後も様々な話をしたが、お互いに貴族社会の不条理や組織の話はしなかった。そうした物に触れることのない社会をつくる。そんな思いをお互いに察していたのかもしれない。ジークマイスター大將は年明け早々に出征されたが、私は見送りには行かなかった。もう送別の儀は済ませている。願わくば、亡命が成功することを……私の日課に、成功を祈る時間が追加されるのは、もうしばらく後の事になる。

宇宙暦728年 帝国暦418年 4月末

アスターテ星域 外縁部

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

『所属不明艦へ、動力を停止し所属を明らかにせよ。さもなければ攻撃する。繰り返す、動力を停止し所属を明らかにせよ。さもなければ攻撃する。』

『動力を停止する。攻撃は控えられたし。繰り返す、動力を停止する。攻撃は控えられたし。こちらは帝国軍ジークマイスター艦隊旗艦所

属のシャトルです。貴国への亡命を希望します』

パランティア星域で口実を設けて旗艦をシャトルで立ち、そのままアスターテ星域へ向かって10日あまり、なんとか同盟軍の哨戒網に入る事が出来たようだ。

「閣下、事は成りました。おめでとうございます」

「うむ。短いようで長い10日間だった。君たちの尽力に感謝する」  
そういつて敬礼すると、感極まったのか、副操縦士は涙を浮かべた。視線を向けるとこちらを見ていた操縦士も、涙を浮かべている。彼らにとつても、理想の国家への10日間の旅路は、緊張に満ちたものだったようだ。同志たちを代表して、私を送り届けるという意味では、もしかしたら私以上にプレッシャーを感じていたのかもしれない。なかった。

キャビン前部の操縦席越しに見える同盟軍の駆逐艦の艦影が大きくなるのを横目に、今後の事を考えていた。私が同盟へ亡命した事は、おそらく帝国軍には気づかれていないはずだった。

艦隊を率いて参加したフォルセティ星域での会戦は、出征軍首脳部にとつては予想外に、有力な敵との遭遇で始まった。ミヒヤールゼンも情報を流しただろうし、交易に支障が出る状況をフェザーンが許すはずもない。私にとつては想定内だ。

出征軍の分艦隊司令の多くが、士官教育も受けていない爵位持ちの貴族の子弟、私たちは『名ばかり少将』と呼んでいたが、そういう人材が多数を占めていたのも私にとつてはうまく働いた。

領民を殴りつける感覚で同盟軍に突撃しようとする旗下の彼らを、敢えて好きなようにさせたのだ。そうなれば他の艦隊の名ばかり少将達も動き出す。舐めてかかった素人の突撃を、本職の同盟軍はきれいに粉碎してくれた。

戦力的に劣勢になった帝国軍は撤退を開始する。艦列を立て直し、パランティア星系に入ったあたりで、出征軍総旗艦での会議を具申した。爵位持ちの子弟を戦死させたとなつては善後策を検討しなければならぬ。後は同志とシャトルに乗り込み、ちようど艦隊と艦隊の間に入ったあたりで、用意していた時限爆弾をハッチから放出し、慣

性航行に移行する。

観測班が分析すれば、おそらく私たちのシャトルが何らかの事故で爆発したように見えるだろう。撤退中の敵国領域で、救援を出すのも困難なはずだ。慣性航行を24時間続け、その後進路をアスターテ星域に向けた。あれから10日間。思い返せば人生で一番長い10日間だったかもしれない。

「私は亡命が受け入れられれば、同盟軍に協力する予定だ。だが、夢見た理想の国に我々はいかに到着した。願わくば貴官らの協力が欲しい所だが、理想の国で新しい人生を歩みたい気持ちもあるだろう。亡命受け入れに際して、調査も受けるはずだ。素直に応じるとともに、貴官らの素直な気持ちを私も尊重するつもりだ。我々の新しい門出に」

そう言つて敬礼すると、二人も敬礼した。そのタイミングでドッキングが完了したのだろう。ガタンとエアロックから音が響いた。帝国軍大将の亡命ともなれば、情報部でもそれなりの役職者が対応するはずだ。対応を間違わなければ分室のひとつも任せてもらえるだろう。同盟の実情を理解する意味でも、情報機関に所属しておきたい。「とは言え、ちゃんと通じるだろうか……」

帝国では、密かに同盟語を学習してきた。ただ、実際に話したことはない。何から露見するか分からなかった以上、私は用心に用心を重ねて来た。やっと学習教材の音源以外の人物と同盟語を話せる機会が来たと思うと、それはそれで感慨深いものがあった。

## 第25話 現実を知る漢

宇宙暦728年 帝国暦419年 8月末

同盟軍士官学校 戦術シミュレーター棟

ファン・チューリン

「帝国軍も大したことはないな。これでは負ける為に出てきたようなものだ。検討しても学ぶべきところがあるとは思えんな」

「捕虜の数もかなりの数だと聞く。フェザンとの航路を断つという観点ではアスターテ辺りに直進してくるより工夫したとは思いますが、補給線が伸びすぎてリスクも大きい。投機的作戦だったのだろうか？」

呆れた様子で辛めの評価をくださったアッシュビー。それでは議論が進まない。私はあえて論点になりそうな部分を指摘したが、検討するにはどうもちぐはぐだ。まるで帝国軍に勝つ気がなかったかのようを感じるのは、同席している面々も同じだろう。

「帝国軍の首脳部は、もしかしたら自国の経済を理解していないのかもしれないな」

そんなターナーの言葉に、同席しているメンバーの視線が集まった。この場にいるのはアッシュビーを始め、ターナー、ジャスパール、ウォーリック、ベルティニーニ、コープ、ローザス、そして私の8名だ。

なんだかんだランチを一緒にしたり、戦術シミュレーターで切磋琢磨したり、ダンスパーティーで羽目を外したりする中で、一年目はそうでもなかったが、自然につるむ事が多くなった面々だ。フォルセティ星域の戦闘詳報がデータベースに上げられたのを機に、検討会をしようと言う話になり、現在に至る。

「ふう。どうやらこちら側の自称未来の艦隊司令達も把握していないようだな」

そう呟きながら、ターナーがフェザンを中心とした交易の内容を簡単に解説し始めた。

「金額ベースで言えば、帝国からは各種嗜好・工芸品や希少鉱石。同盟からは民需用の消耗品・各種機械製品が主力なんだ。ただ、重量ベースで置き換えると、同盟の主力輸出品は穀物になる。フェザンにて

も行けばもつと詳細な分析ができるだろうが、貴族領では鉱山開発は積極的でも、農業は後回しなんだろう。不作に備えて政府備蓄に輸入された穀物が周り、最悪餓死するような事が無いようにしているんだろうな」

「ならフェザーンに穀物を供給している同盟との航路が遮断されれば、むしろ帝国が困る事になる。なぜこんな作戦が実行されたのだろう」

「その点には心当たりがあるぞ。帝国には軍部・政府・在地領主の3派閥に分かれている。余程の事でなければ、それぞれの領分に口出しはしないからな。それに粗が目立つ作戦案だ。実施しても失敗の可能性が高いと判断して無視した可能性もあり得る」

誰もが思う疑問を提起した私に、貴族に詳しいジャスパーが答えた。

「言われてみれば、同盟も似た所があるだろう？派閥の件じゃないぞ？国防委員会と財務委員会は毎年予算のせめぎ合いをしている。必要性は理解するが、国防費が膨大過ぎると面識のある財務委員が漏らしていたからな」

アッシュビーが不愉快そうに続ける。彼の父上は軍需産業の役員だし、母上は代議員だ。政治家との面識もあるのだろう。年々要求額が増える国防費は国庫にとって大きな負担になっている。

国防族と財務族の関係は、不倶戴天の敵と言っても過言ではないだろう。帝国でも似たような状況なのだろうか？それでも、国民を危険にさらし、リスクを承知しながら無謀な作戦案を実施させることなどあり得るのだろうか？

「まあ、同盟も一定の時期に出兵する事が多いからな。あまりよそ様の事は言えないかな。それに今の皇帝陛下は大の女好きなんだ。俺がフェザーンに行った5年前でも数千人を後宮に納めさせていたらしい。そのお相手が忙しくて、統制がとれていないのもあるんだろうな」

ターナーが揶揄する様に続けた。確かに選挙が近くなると支持率向上のために出兵案が出されるのは事実だろう。それにしても数千



人？私はファネツサひとりに四苦八苦しているのにすごいものだ。敵国の頭目とは言え、畏敬を感じてしまう。いや、頭を切り替えよう。「ターナー。という事は出来る皇帝が即位すれば危険だということか？」

「ああ、実際コルネリアス1世の例もある。元帥杖を乱発するおちやめな所を除けば、十分に同盟を追い詰めただろ？そもそも計算してみたが、俺達の時代に帝国との戦争で勝つのは不可能だ。同盟軍全将兵がブルースレベルに優秀なら可能性があるかもしれないが……」

「全将兵がブルース？それこそ悪夢だな。命令を聞かんから軍組織が崩壊しかねんぞ」

ウオーリックが冗談で返すが、ターナーの発言は笑って流せる内容ではなかった。

「そんな怖い顔で見つめるなよ。同盟の戦力は8個艦隊、今期の予算で艦隊整備費が計上されたから来期には9個艦隊。各種星間警備隊をかき集めれば2個艦隊はできる。つまり持ち駒は11個艦隊だ。ここまでは良いか？」

反応を確かめながらターナーは話を続ける。

「一方で、帝国は正規艦隊が18個艦隊、貴族の私兵や各種星間警備隊を含めれば25艦隊は持ち駒にできる。2倍以上の戦力を持つてるのに押し切れないのはなぜだと思う？俺たちは士官候補生なんだから、士気の差とか司令官たちの能力とか、そういう兵卒みたいな答えは言うなよ」

「距離の防壁か？グエン・キム・ホアの言葉だったな」

「そうだブルース。補給線が短くて済む分、同盟は補給を含めた再戦力化が早くできる。言ってみればイゼルローンとフェザーンの両回廊を挟んでそれぞれ要塞を攻め合っている感じだな。拠点攻撃の基本は攻勢3倍論だ。現状の同盟の戦力から、帝国が攻め込んで勝ちきるには33個艦隊必要だ。だから一時的に押されることはあっても俺達は押し返してる」

「それを逆にはめれば、戦争に勝ちきるには、75個艦隊必要なことになる。とてもじゃないが今の同盟にそんな経済力はないな」

「それだけじゃないぞ。帝国の250億近い人口のうち、半分はまともな教育を受けていないだろう。同盟の戦争の勝利条件は皇帝の首を取ってお仕舞じゃない。彼らが経済的に自立するまで援助し、教育を施し、地方自治組織を立ち上げ少なくとも星系単位で民主制の運営が出来るようにすることだろう？」

計算しなくても天文学的な予算が必要になるのはイメージできる。今の同盟の財布じゃとても無理だ。最低でも同盟の人口が500億、贅沢を言えば800億は欲しいな。そこまでいけば現実的な侵攻計画が立てられるはずだ」

静まり返った部屋に誰かが生唾を飲んだのだろう音が『ゴクリ』と響いた。またもに教育を受けていない民衆を地方自治が可能な所まで支援する。それこそ数十年単位で継続的な支援が必要になるだろう。ターナー風に言えば、採算が何時とれるか分からない案件だ。経済的には検討の土台にすら上がらない案件だろう。

「俺が任官10年で退役してビジネスに力を入れたがる気持ちもわかっただろ？戦争に勝つには同盟の財布を少しでも大きくしないと無理だ。しいて言うなら、帝国から50億人くらい生産人口が亡命してくれたらとかも考えたが、そこまで行くと夢想のレベルだしなあ……」

義弟の徴兵リスト順位を下げる為に任官したと公言して憚らないターナーに思う所がある候補生も少なからずいた。ただ、確かに戦争に勝ちきるには、それこそ数世紀単位で同盟が発展しないと難しそうだ。

「話し過ぎたかな？ただ、軍のお偉いさんになるんだからこれ位は認識しておかないとな。んじゃ、ターナーの経済講座はここままで。そろそろ失礼するぞ？」

肩をすくめる所作をした後、ターナーは席を立てて廊下につながる通路に向かう。

「ターナー。軍にはお前のような人材が必要だ。退役は40歳にして。それまでに俺は宇宙艦隊司令長官になる。俺の職権の及ぶ範囲でウーラント商會を優遇してやる。どうだ？」

部屋を出ていくターナーの背中に向かってアッシュビーが言い放った。

「うーん。俺の10年で軍の利権が買えるなら安いもんだ。期待しないで待つておくとするか。頼むぜ、アッシュビー司令長官殿」

そう言つて、敬礼するとターナーは部屋を出て行つた。ターナーもターナーだが、アッシュビーもアッシュビーだ。ターナーが出て行つた扉に視線を向けたまま満更でもない表情のアッシュビーを横目に、私を含めたほかの面々はなんとなく肩をすくめるしかできなかった。

宇宙暦728年 帝国暦419年 8月末

惑星ハイネセン 統合作戦本部

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

「閣下は中将待遇で、情報部の分室をお任せする事となります。亡命が帝国に露見する事を防ぐため、統合作戦本部の特命班と言う扱いになります。情報部部长は少将を当てることに事になっており、お互いにやりにくいだろうとの判断がありました。それだけ軍上層部も期待をしているという事でしょう。ご理解頂ければ幸いです」

「ありがたいことだ。もちろん私達の亡命に当たつて、大佐の尽力があつた事は忘れていない。今後の私に期待される役割も踏まえれば、亡命の事実もなるべく秘匿されるべきだ。当然私の生存を知る者は少ない方が良好だろう。情報部への報告は大佐に窓口をお願いできればと思うが。どうか？」

「ありがとうございます。そうしたお気遣いを頂ければ、情報部も色々とお役に立てるでしょう。人員の方も、統合作戦本部と情報部から身元の確かな者を、少数ではありますが提供できるでしょう。予算も機密費から出せます。今後もよろしく願います」

そう言つて敬礼すると、大佐は私に割り当てられた分室を後にした。亡命時に提出した旗艦から情報を抜き出した光ディスクも彼の功績になつてはいるはずだ。近いうちに昇進し准将になるだろう。情報部長が少将であるなら、彼の情報部内の影響力もかなりの物になるはずだ。お互い良い関係が続ける価値はあるだろう。

地下駐車場からセキュリティゲートを通り、情報部専用のエレベーターを使い、さらに情報部独自のセキュリティゲートを通過した先に、この分室は存在する。中将待遇で予算もついた。同盟の期待の表れと言ってもよいだろう。

「ふう」

待遇面では不満はないが、大佐の気配が消えると同時にため息をついた。光ディスクの存在もあり、亡命希望者として保護されてから、同盟の情報には簡単に触れることが出来た。

正直、私が思い描いていた理想の国とは残念ながら言えないだろう。ダゴン星域会戦の同盟軍の勝利をきっかけに流入した帝国からの亡命者は、必ずしも同化しているとは言えない。帝国の軍部系と政府系貴族の争いを見るようだった。

建国の地であるバーラト星系は、全人口の30%に満たないにも関わらず、税負担額を理由に代議士の議席枠の過半数を押さえている。結果として、増え続ける国防費を差し引いた予算の多くは、バーラト系のインフラ維持に費やされ、地方星系の平均収入は、ギリギリ貧困層とは言えないレベルだ。

これも既視感を覚えた。予算を理由に、帝国でも辺境星域の開発を切り捨てていた。役者は違うが同じ劇を見ているようで、私の中の理想の国への憧憬は、既に色褪せつつあった。

「何のことはない。知らなくてよいことを更に知ってしまっただけか」

シロン産の紅茶を飲みながら、私はまたため息をつく。自分の中で勝手に理想国家を夢見、夢が覚めれば現実に引き戻される。既に経験済みの事だった。とは言え、組織の同志の為にも、自身の役目を投げ出す訳にはいかないだろう。必須なのはミヒヤールゼン達との連絡手段の確立だが、それは既に動き出している。

一緒に亡命した二名の同志は、少佐待遇で特命担当となり、フェザーンにむかっている。こちらは待ちの状況だ。既に同盟には幻滅しつつある。ただ、今更情報の流し役に徹するのもしつまらなかった。情報部を通じて提供された詳細なデータを閲覧していく。機密アク

セス権を得た事もあり、閲覧できるデータは膨大だ。

「ん？これはどういうことだ？」

紅茶を片手に数日かけて諸々のデータを閲覧する中で、私が引っかけたのは捕虜収容所のデータだった。数ある収容所の中で、惑星エコーニアの収容所だけが捕虜から住人になる傾向が高かった。

よくよく詳細を確認すると、エコーニアには、少額ながら開発支援金が付き、インフラ開発を捕虜たちが主導して行っている様だ。感謝の気持ちもあるのか？開発の主幹をする井上商会はわざわざ帝国風の食材を差し入れていた。

捕虜となつてまで帝国に尽くす元同胞達への哀れみや、負け戦に引き込んだ元部下たちへの謝罪の念もあったのだろうか？フォルセティ星域会戦で捕虜となった10万人の捕虜の収容先をエコーニアにし、収容所を15万人規模にする旨を上申した。『部下たちも一刻も早く帝国の悪夢から解放したい』と添えれば、同意を得るのは簡単だった。

情報部が所有する亡命系資本に偽装したダミー会社を通じて、帝国風の食材を井上商会に提供する事も始めるのだが、それは数週間先の話になる。帝国と言えば貴族的な文化が代表的だが、帝国の平民と同盟の開拓者たちが融合した、新しい文化が花開く可能性も考えた。もつとも私の存命の間には難しい事だろう。

だからこそ、結果を知らずに済む新しい夢が見つかったようで、私は妙な喜びを感じていた。もつと大きな夢を私は見つける事になるのだが、そうなるまでにはもう少し時間が必要となる。

## 第26話 隠される真実

宇宙暦729年 帝国暦420年 10月末

同盟軍士官学校 校長室

カーク・ターナー

「ターナー候補生。君の卒業論文は確かに見るべきものが多かった。表現の自由・思想の自由も同盟憲章で保障されている。なので卒業論文として受け付けるし、評価も公正に行う。ただし、あの論文を広く公開する訳にもいかない。第三種機密指定とし、アクセス権のある人物以外の閲覧は出来ない形とする」

「済まない候補生、担当教官として、貴官の論文は見るべきものがある」と個人的には判断した。評価も当然高いものになるだろう。ただ、任官後の事を考えると、あの内容を公表するのは、貴官に取っても好ましくはないと校長は判断された。優秀な貴官なら、理解できると思うが……」

悩まし気な表情の校長と、困り切った表情の教官が俺に視線を向けている。そりゃ730年度次席卒業見込みの候補生が急にあんな論文をぶち上げたら、そうなるか。将来を囑望された優秀な候補生が『数世紀耐えないと戦争には勝てない』なんて、言い出したんだからな。

「はっ。本来なら決定事項として伝達で済ませるべき所、ご配慮いただけた事、感謝いたします。また論文が公開された場合、校長や教官のような現実を知る方だけではなく、見たいものしか見ていない方や、悪意の下、曲解する方もおられるでしょう。ご心配はごもつともですし、任官前に、踏まえるべきことをお教えいただけました事、感謝いたします」

俺がそう応じると、二人は安心した様子だった。彼らからしたら、ここで俺が騒ぎ出す未来もあった。同盟憲章は表現の自由・思想の自由を保障している。民主制を取る上でそれは欠かせないものだし、悪辣なる独裁制国家、銀河帝国の打倒の口実のひとつにもなっている。

それを否定するような事を軍組織が行えば、防衛戦争の大義を自ら

汚すようなものだ。年相応の青臭い候補生なら、機密指定にされれば反抗する可能性もあった。安心するのも無理はないだろう。

「うむ。候補生、話は以上だ。あくまで個人的な見解だが、同盟軍の末席に所属するものとして、あの論文の機密指定が解かれ、議論の材料になるような将来が来てほしいと、私は思っている。ご苦労だった」

校長の言葉に応じる様に敬礼をして、校長室を後にする。廊下に出ると、卒論を書くにあたって色々議論した連中が、気もそぞろに集まっていた。校長と教官がホツとしていたのも、俺だけじゃなく、この連中も一緒に騒ぐ可能性があったからだろう。

今まで切磋琢磨していた成績上位者が、一気に問題児軍団になったようなものだ。相当悩んだだろうから、久しぶりに安眠できるのかもしれないなかった。

「どうだった？」

「高評価はするが、機密指定になるそうさ。お前らも、あの論文に関しては思う所があるだろうが、堪えてほしい。少し自分の立場を忘れてはしやぎすぎたな……」

「そんなことはない。あれは知っておくべき事だ。どうする？お袋に掛け合って国防委員会を動かしても良い。バート原理派に借りを作りたいくないなら、ウォリックの所に動いてもらっても良いと思うが？」

代表なのか、ブルースが声をかけてくる。ウォリスに視線を向けると、同意する様に頷いた。ただなあ、校長たちの言う組織の理屈にも一理あるんだよ。お前らと話してる間に、年甲斐もなく楽しくなってしまうが、確かにはしやぎすぎたな。

「俺としては校長たちの誠意にむしろ感謝している。本当なら教官が握りつぶして別のテーマで論文を書かせても良かった。でもそうしなかったのは、問題になると判っていても、表現の自由・思想の自由を尊重してくれたんだ。あれが公表されれば、兵力や補給より、精神論を重視する連中がどう出るか？それを書いたのが辺境出身で、亡命者の婚約者ともなれば、大体想像がつくだろう？」

「残念な事実だが、その可能性はある」

ファンが応じ、亡命系であるフレデリックとヴィットリオも納得したように頷いた。ウオリスは肩を落とし、それを見たブルースとジョンは気まずそうだ。

「それに、あれを士官学校が公表するという事は、軍の公式見解と受け取られかねない。歳出の大半を占める国防費の事を考えれば、『数世紀我々は戦争に勝利できません』なんて言えないだろ？俺もまだまだ甘ちゃんだな。考えればすぐわかる事だ。ただ、お前らとの議論が予想以上に楽しかったからな。子供みたいにはしゃいでしまった訳だ」

俺が冗談交じりに応じ、肩をすくめると少しは落ち着いたようだ。思う所はあるだろうが、組織として言えないこともある。優秀なこいつらなら、理解できるはずだった。

「それに第三種機密指定だ。アクセス権があるのはそれなりに権限を持った連中だろう？あれを踏まえておくべき立場のお偉方の目に止まる可能性はむしろ高い。そういう意味でも校長たちは配慮してくれたのさ」

「カーク？そこまで読んでいたとかはさすがにないよな？」

「当たり前だろう？結果としては予想以上じゃないか？もうこの件はお仕舞にしようや。任官すれば下っ端に逆戻りだ。偉そうに後輩を指導できるのも今の内だけだし、卒業の後は結婚式のラッシュだろう？アデレードに結婚をせがまれるブルースの困り顔を楽しめるのも今のうちだ。任官すれば気軽に出来なくなるだろうからな」

「おい・ターナー。アデレードの事は言うな。この間なんてハイネセンで人気の式場にデートで連れて行かれそうになったんだ。俺はまだ身を固めるつもりはないぞー」

「大丈夫か？未来の宇宙艦隊司令長官殿が戦死ではなく、アデレード嬢に背中を刺されるような事になりそうだが」

「ウオリス、お前が言うな！」

そんなやり取りを見て、俺達は笑い声をあげた。ウオリスは恋愛もうまくこなしていて、深くなりすぎないように立ち回っている様だが、ブルースのお相手のアデレードは、良くも悪くも情熱的で、都合の良い相手になるつもりはないだろう。そういう意味で、ウオリスの



予言は十分に実現する可能性もあった。

「ウォリスはなんでもそつなくこなすが、とうとう予言まで始めるのか？」

「違うぞジョン。むしろ事実だ。予言なんて大げさな物じゃない」

ブルースがドキリとした表情をするとまた笑い声上がる。まあ、もうすぐ妻帯者になる連中からしたら、返済期限が粛々と迫っている事を認めようとしないうブルースの姿は、普段の奴が出来る事もあって、ここ最近の笑い話のひとつになっている。

クリスティンと婚約していた俺と、もともとカトリナ嬢と付き合い合っていたアルフレッドを除けば、この面々はあるダンスパーティーを通じてお相手と知り合った。任官する以上、万が一のこともある。俺が卒業と同時に結婚することをクリスティンから聞いたカトリナ嬢が話を広め、結果としてウォリスとブルース以外は妻帯者になる。俺としては人間関係に難ありだったファンがそこまで関係を育んでいたことが嬉しかった。

「まあ、式を早めに上げられるのは幸いかもな。それなりに昇進してみろ。お互い任務で簡単に参列出来無いだろうし、式の席次も大変だぞ？ 格式も求められるだろうしな。ブルース、最悪の場合は結婚式に軍の上層部を呼びつけられるように昇進するからそれまで待て！とでも言ったらどうだ？」

フレデリックが茶化すように続ける。フレデリックがあのままシロンにいたら、まあ、その手の事に悩みながら式を挙げることになっただろう。妙な説得力があつて、また笑いを誘った。

クリスティンとは、18歳の時に一時的に首席になった際に、そういう関係になった。もちろん避妊はしていたが、子供が早くほしいとも言われている。変に俺に気を使うクリスティンの事だから、そういう事はまだ気にしないでほしいと頼んだ。ただ、よくよく聞くと、ウーラント卿の意向もあるようだ。

士官学校を卒業し、任官すれば万が一の事もある。本来は俺の取り分としても良いウーラント商会の株10%もクリスティン名義にしている事もあり、俺達の間の子供がいなければ、ウーラント家の為に

使い潰した様にも見える。そうしない為にも子供を早く作ってほしかったらしく、クリステインをせつついていたようだ。

もつとも、戦地に赴いた夫を、一人で待つのは苦しい事だとも考えの事だから、俺も強くは言えなかった。市立経大を卒業すればウーラント商会で働くことになるクリステインだが、子育ても合わされば俺が戦地に行くことになっても、だいぶ気がまぎれるだろう。20歳で結婚して子持ちか。前世と比較しても今世はだいぶ生き急ぐ人生になりそうだ。

「んじゃ、残り僅かとなった学生生活を可愛い後輩の為に使うとするか」

そう言いながらヴィットリオが不敵な笑顔でシャドーボクシングをしながら部活棟の方へ足を向ける。それをきっかけに、皆それぞれ部室へ足を向けた。よく言って鍛錬バカのヴィットリオに可愛がられるボクシング部の連中には、同情するが、それを言う俺が鍛錬に付き合う羽目になる。

どうせ任官すれば、上司運次第では、もつと理不尽な状況にもなるだろう。俺は彼らの無事を祈りながら、控えめに言っても張り切っているヴィットリオの背中を見送った。

卒業前に後輩の鼻っ柱を折って自信を無くされても面倒だ。俺は戦術研究部に向かいながら、今日の戦術シミュレーター戦は少し手心を加えようと思った。あくまで少しだけだがな。

## 第27話 新しい夢

宇宙暦729年 帝国暦420年 12月末

惑星テルヌーゼン 帝国亭（ウーラント商会のレストラン）

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

「うむ。確かに帝国風だが、貴族的な価値観とはまた違う形で洗練されている。懐かしくもあり、初めての味でもある。まさか亡命してこんな体験をすることになるとはな……」

亡命以来、統合作戦本部ビルに籠る生活をしていた私だが、貸しがある情報部の准将の力添えもあり、佐官の軍服に着替え統合作戦本部ビルを抜け出し、情報部のセーフハウスのひとつでビジネススーツに着替え、護衛2名と共に、隣接するテルヌーゼンのレストランに足を運んだ。

帝国風の食材をメインにしながら、同盟風のアレンジが加えられた料理の数々。一皿一皿が私の哀愁を刺激し、また勝手に夢見ているエコーニアで将来生まれる食文化を先取りしているようにも思え、希望を感じさせる物でもあった。

「本部ビルの食事も悪くはないが、たまには工作人員の真似事も悪くはないか」

予め情報部を通じて経営者である候補生に連絡を取り、ランチには少し遅い14時に来店し、料理を楽しんだ。通された個室は広々とスペースを使い、正面は大きく一枚ガラスで光量が確保され、左右の壁には、ウーラント家が持ち込んだのであろう帝国の絵画と、同盟の近代絵画が並んで飾られている。本来あるべき同盟の姿を表しているようでもあり、一人で美味を食すこの時間は、私の感性を刺激するものだった。

『お約束を頂いておりました。ターナーでございます。』

ノックと共に室外から声が掛かる。手元の腕時計を見るともう15時だ。もう少しこの部屋で紅茶を飲んでいたい気持ちもあったが、本来の目的はこれからの面談だ。すぐに入室を許可する。

「失礼します」

そう言つて入室してきたオレンジ色の髪をした青年は、一礼してから頭を上げる。着席を促すように指し示すと、優雅な所作で私の対面に座る。エメラルドの瞳は生氣に満ちていて、それだけでも、彼が何かを成し遂げる人物だと感じた。

「情報部の方にクリーニングをして頂けるとは光栄です。帝国亭もここまで来たかと嬉しく存じました。もともと公言出来ないのが残念ですが……」

そう言いながらテーブルに用意されていたティーセットを引き寄せ、優雅に紅茶の用意を進める。お茶の用意をする間は雑談の間でもある。

「そう言えばイーセンブルク校にも短期入学の経験があつたのだな。見事なものだ」

「新鮮な経験でしたが、おかげでマナーには困らなくなりました。階級社会に触れたのもあれが初めての経験でした。良くも悪くも、貴族の方々に良心と矜持があつた時代は、帝国の暮らしとはこんな感じだつたのかと、幼いながらに思った記憶がございます。平民と申しましても、私の出身地の生活よりは十分豊かな生活をシロンの皆さまは、されていましたから」

そう言いながらテキパキとお茶の用意を進める青年の様子を私は不思議に思った。自分たちより亡命者が豊かな生活をしている。それを不満に思わなかつたのだろうか？

「8歳の頃から、家計を助けるために働き出したのですが、仕事柄、捕虜の方々と接する事が多かつたのです。日によつては同盟語より帝国語を話す時間の方が長い有様で、それが回りまわつて亡命者のフィアンセを持つ事につながるのですから、縁とはどうつながるか分からない物で……」

それからウーラント商会を立ち上げるまでの彼の人生の歩みを、簡単ながらも面白く語ってくれた。彼の歩みはある意味良縁に満ちている。士官学校を次席で卒業見込みである事を踏まえれば、彼の優秀さ・勤勉さが良縁を引き寄せたともいえる。ただ、辺境星域の一人の少年が、商会を立ち上げ、士官学校を次席で卒業する。まるで物語の

主人公かのような成功談だ。

特徴的なのは、一方的な良縁になっていない事だ。彼を航海士見習いに推薦した井上商会は、現在では惑星エコニアのトップ商会で、中堅資本と言えなくもない規模になっている。航海士見習いとして雇った出光商会は、独立して10年も経たずに5隻の商船を運用するまでに成長した。彼を見込んで婚約者とし商会を立ち上げさせたウーラント家は言うまでもない。経済的な成功はもちろん、嫡男のユルゲン殿もハイネセン記念大学に合格し、控えめに言っても順風満帆だろう。

私自身も、第三種機密指定された彼の卒業論文と、彼が井上商会に在籍していたことの二つが重ならなければ、リスクを冒してまで面会を望まなかっただろう。この面会もお互いにとつて良縁になるだろうか？

そんな事を考えながら、用意された紅茶を一口二口と飲みながら雑談に興じる。秀才にありがちな才をひけらかす所もない。今までも多くの大人たちが、彼の面倒を見たがっただろう。私もその気になりつつある。

「君のように冷静に現状を把握できる人材がなぜあんな事を？」

「士官である以上、認識しておくべき事だと判断しました。特に同期連中は優秀です。躓かなければ将来軍上層部を担うことになります。部下に見せたい現状を見せる才も必要ですが、本気で精神論を唱えるタイプにはしたくありませんでした」

「実現を早めるには何が必要かな？」

「現実性を度外視すると、生産人口が50億人、欲を言えば70億人帝国から亡命する事です。それでも、現実的な侵攻案が立てられるのは私の孫世代になるでしょう。いろいろな歯車がかみ合えばと言う条件が付きますが」

「では、必要条件は？」

「強いリーダーの存在です。同盟は独裁化を懸念するあまり大統領制ではなく、間接民主制を採りました。結果として派閥に配慮し極端な政策を取りにくい状況です。国防体制の確立を通じて、国民的な英雄

を作り出す。そして政界に送り込むしか手段はないでしょう」

「候補者は？」

「今の所3名です。本命でブルース・アッシュビー、対抗でフレデリック・ジャスパール、ウオリス・ウォーリツクの2名。アッシュビーに政権を取らせ、亡命派の融和政策と地方星系へのインフラ投資を進めさせる形が理想です」

「最後の質問だ。ターナー君、君がリーダーになろうとは考えないのかな？私が見る限り、君も十分本命足りえると思うのだが……」

「閣下、彼らを私の理想を実現すべく引き込んだのです。たとえ国民的な英雄になったとしても、反対派は生まれるでしょう。時には手段を選ばずに足を引っ張る者も。一歩下がって彼らの背中を守る、時には泥をかぶる存在も必要でしょう。それが私の役割ではないかと……」

「君がそう考えるなら、無理強いはいしない。ただ、不測の事態は起こるものだ。亡命者を妻とし、辺境出身の君は、言うまでもない事だが、一定の支持を集めやすい身の上だ。そうなる必要が出てきた時の為に、準備しておく事を薦めておこう」

「その後は私の話をする番だった。暴君だった父、同志のように感じていた共和主義者。帝国の膿となっている貴族達の醜さ、それに絶望した同志たち。息子のような年齢の彼に、私は赤裸々に自分のことを語った。思い返せば気恥かしいが、自然に話せたのは彼が聞き上手だったこともあるかもしれない。

「理想の国を夢見て亡命したが、残念ながら同盟の現状はそれには程遠いものだった。このまま情報の伝達役として、鬱屈としながら伝書鳩の真似事をするしかないと思っていたが、君の卒論を読んで思ったのだ。自分が生きている間に結果は出ないだろうが、大きな夢をもう一度見られるのではないかとね」

彼は黙って話を聞いていた。私が入り込んで来た様子を、彼も人となりを見極めていたのだろう。私の独白が終わり、お互いに紅茶のカップを口元に運びのどを潤す。

「同盟での閣下の最初の同志が私という事になりますね。もう失望す

る事が無いように勤めさせて頂ければ幸いです」

「どうやら認めてもらえたようだ。彼が頭を下げる。」

「君の任官先は私の分室になるだろう。接した情報を使って同期たちの栄達を支援すればよい。彼らが功績を上げれば、君の功績にもなるだろう。それに少なくない予算もある。常識的に考えれば君たちが軍上層になるまでに20年はかかるだろう。」

それまで手をこまねいている必要はない。同盟の財布を大きくするために出来る限りのことをしてみたまえ。その中で君と縁のある商会に多少の利益を流しても構わん。それ位は駄賃として出す位の器量はあるからな。少なくとも10万人規模の収容所を作る位の権限は持っている」

「あの件は閣下のお力添えでしたか。私からお礼を申し上げるのも筋が違うかもしれませんがありがとうございます。井上オーナーには何かとお世話になりました。少しでも恩返しできればと気にしておりますので」

カップを手に取り、口元に寄せるが、そこで空なこと気づいた。どうやら思った以上に話に夢中になっていたようだ。自然にお代わりを注ぐ彼に視線を向けると、窓から夕陽が差し込んでいる事に気が付いた。

「だいぶ長居をしてしまったな。今日は最後のダンスパーティーの予定だろう？私はもう少しゆっくりさせてもらうから、婚約者殿の所へ行ってあげなさい。参考にするかは別にして、パーティーの前には、淑女はパートナーに何かと意見を求めるものだ」

私がそう言うと、彼は苦笑してから配慮に感謝する旨を述べ、部屋を辞していった。この日の夕陽を私は忘れることはないだろう。もう50年近く生きて来た。夕日が沈むまでのひと時は私の余命の様でもある。大きな夢が朝日のように現れる姿を見ることはないだろう。

だが朝日の到来を信じて人生を終えることは出来そうだ。不思議と亡命以来色褪せた様に感じていた日々に鮮やかさが戻った。そして月に一度、帝国亭で食事をすることが、私の数少ない習慣のひとつ

となる。



## 第一章 登場人物

### 第一章登場人物

カーク・ターナー

今作の主人公。おぼろげながらある島国の宰相として上り詰めた記憶を持つ（前世は田中角栄さん）惑星エコニアの入植者を両親に持つが、予定されていた大規模緑化事業が中止された為、家計を助けるために8歳から井上商会に働きに出ていた。オレンジの髪とエメラルドの瞳を持つ。外見は石黒版のポプラン似。

### ■家族と友人

両親

惑星エコニアの開発計画の話を聞いて、全財産をはたいてそれに応じた。緑化事業の中止を受けて父親は心が折れ、母親は荒地地で細々と農作をしていた。母のお腹に新しい命が宿ったことをきっかけに、カークは航海士見習いへの道を選んだ。

父親も感じる部分があったのか、カークがエコニアを発つ時には再び働くようになっていた。第一章終了時では妹といつの間にか弟が生まれている。ちなみに4人とも名前は明らかになっていない。

グスタフ・フォン・ウーラント

仕えていた貴族の政争に巻き込まれ、娘と息子を連れて同盟への亡命を決断した帝国騎士。子供たちの将来の為に同盟的な価値観であるバーラト系に移住を決めた。

同盟語が不得手、企業の経験が皆無であることを踏まえ、ターナーを見込んで娘であるクリステインの婚約者とし、ウーラント商会の立ち上げを任せた。本人も亡命後に財務部門の業務を学び、商会の経営に一役買っている。

クリステイン・フォン・ウーラント

今作のヒロイン。亡命中のフェザンでカークに助けられた事から好意を持っていた。ウーラント家の亡命に当たり、ウーラント商会の起業と弟であるユルゲンの徴兵順位を下げる為にカークが士官学校に行くことになり、一家の将来を背負わせたと罪悪感のようなもの

を感じている。商会の経営を助ける為にテルヌーゼン市立経済大に進学した。

ユルゲン・フォン・ウーラント

ウーラント家の嫡男。カークの義弟。優しい性格で才覚もあるそうだが、軍人には向かないと父親は判断していた。カークを始め、周囲のできる兄貴分たちを尊敬し、また可愛がられた。ハイネセン記念大学を目指してメープルヒル校で勉学に励む。

トーマス・ミラー

カークの4歳年上で、兄貴分。井上商会が捕虜収容所内に出店していた売店を任されていた。年の近いカークに井上商会の業務を教えただのも彼。母の妊娠を機に家計を助ける為に志願した。

新兵訓練を終え、任地であるカプチェランカの途上であるエルファシルで、ヤン・シーハンと出会い、恋に落ちる。任地であるカプチェランカの基地が帝国軍の大規模攻勢を受け、戦死した。

ヤン・シーハン

エルファシル在住の看護師。幼馴染で恋人だったトーマス（ミラーとは別）が戦死して以来、思い出の場所である公園で、勤務明けに一服する習慣があった。思い出の公園で、同名のトーマスと出会い、恋に落ちた。共にいたのは一夜だが、お腹に命が宿る事となる。命名はタイロン。

ヤン・タイロン

カークの兄貴分であるトーマスとシーハンの子供。銀英伝原作読者なら知らないはずはないある人物の父親でもある。原作比で7年早めの登場

カトリナ・アルザス

アルフレッド・ローザスの幼馴染。もともとアルフレッドに思いを寄せていたが告白できずにいた。カークとの約束で帝国亭で食事をとるようになったアルフレッドに誘われて帝国亭に一緒に行くようになり、恋人となる。進路は士官学校に隣接する音楽学校。カーク達の会食にも参加しており、クリステインとも友人である。

アデレード

ブルース・アッシュビーの恋人のひとり。よそ見をしがちなブルースの気を引くために、一時的に首席となったターナーにわざとダンスパーティーで密着するなど、ブルースの嫉妬を煽る手段に出た。

音大では中心人物的な存在だったが、手段を選ばない所があるため、自分の彼氏を紹介したくない存在と認定された。背景はどうであれ婚約者持ちにアプローチをかけた様に見えるため、彼女の行動でその評価をさらに高める結果となる。

フアンエツサ

カークがダンスパーティーに参加する代わりにフアンのダンスパートナーになった音大生。コミュニケーションが苦手なフアンに合わせて楽しい時間を過ごせる。ある意味逸材。

■ビジネス界

井上オーナー

誠実な商売を心掛けるウォーリック商会から独立した商人。惑星エコニアで食品を軸に商会を経営している。エコニアに新設された捕虜収容所内に売店を出店していた。

主人公のカークとその兄貴分であるトーマスを将来の幹部候補と考えていた。もつともトーマスは軍に志願し、カークは航海士見習いになった為、彼の目論見はついでた。

キャプテン佐三（出光佐三）

井上オーナーと同じく、ウォーリック商会から独立した商人。商船の船長も勤める。亡命事業に参入する為、帝国語が堪能な若者を探していた。井上オーナーからの紹介でターナーを航海士見習いとして雇った。

グレック会長 イネツサ夫人（ウォーリック商会）

ウォーリック商会の先代。現在は息子達に経営を任せている。バート系融和派の雄であり、亡命帝であるマンフレート2世とも面識があり、帝国の美術品にも造詣が深い。

■軍関係

【帝国軍】

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

帝国からの亡命軍人。統合作戦本部分室所属で中将待遇軍属。帝国軍時代は艦隊司令で大将。帝国騎士。46歳の時に突如、同盟へと亡命する。家庭では暴君だった父親への反発で、押収品として自宅にあった発禁書に触れ、共和主義思想に目覚める。

同志を募り、対帝国の諜報網を作り上げ、理想の国を自分の目で見たいという思いから亡命した。だが、同盟は理想国家ではなく、希望を失っていた。ターナーが書いた卒論に触れ、自分が生きている内は結果が出ない打倒帝国の夢を新しい希望とし、ターナーを支援する事にした。

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

男爵（伯爵家次男）。親族との財産争いなどから貴族社会に不信を持ち、また自身の手腕を発揮できる場として進んでスパイ網の構築・維持に取り組んでいた。ジークマイスターが同盟に亡命した後は、帝国に於けるスパイ網のトップのような立場となっている。

〔730年マファイア〕

ブルース・アッシュビー

士官学校開校以来の秀才と謳われる。身長186センチという均整のとれた長身に鋭気をみなぎらせた端整な美丈夫という容姿で欠点がなく、少尉の身である無名時代から大佐より偉そうに見えたという逸話が残る。正にこの時代の同盟版ラインハルト。

今作でも優秀ではあるが、多角的な視点を持つターナーには一目置いており、30歳で退役してビジネス界に戻るというターナーを、自分が宇宙艦隊司令長官に40歳までになり、ウーラント商會を優遇する代わりに軍に残る様に遺留した。

アルフレッド・ローザス

沈着で公正な良識人。優秀な同期達に称賛を感じつつも、劣等感を感じていたが、それを昇華し優秀な同期達の潤滑油足らんと志を立てた。幼馴染のカトリナと恋仲でもある。

フレデリック・ジャスパール

とかく派手な用兵を好む。亡命系原理派の雄、オルテンブルク侯爵家の庶子。彼自身は亡命してすら疑似的な貴族制を取る亡命系原理

派に息苦しさを感じていた。

帝国式のマナーを学びに来たターナーと知己となり、育ちは全く違うが、不思議と馬が合った。同盟内の融和を進める為にバーラト系とのパイプを作るため、士官学校に進む。ターナーとは同期であり、ビジネスパートナーの一人でもある。

ヴィットリオ・デイ・ベルティーニ

ヘビー級ボクサーのような体躯に、無数の小さな戦傷にいろどられた赤銅色の顔と剛い頬髯という見た目。用兵も攻勢を好むが、女性や子供には優しく、『森の熊さん』などと呼ばれる。

シロンで大規模な農場を運営するベルティーニ家の三男。ジャスパーと同じくバーラト系との融和の為のパイプ作りの為に士官学校に進んだ。ベルティーニ家もターナーのビジネスパートナー。体躯は全く正反対の小柄な音大生と恋仲になる。

ウォリス・ウォーリック

常に容姿・言動がキザで芝居がかっており「男爵」と揶揄されたが、むしろ本人が気に入って自ら名乗るほどだった。バーラト系融和派の雄であるウォーリック商会の直系の3男。末孫だったため、祖父であるグレックにかなり甘やかされた。帝国の物も含めて美術品や粋な事に通じている。

ファン・チューリン

この時代では少ない地方星系出身の候補生。個人としては気難しく、堅苦しい性格で、冗談を解さない性格だった。人間関係の構築が不得手だったが、ターナーと関わった事で改善傾向に。ダンスパートナーとなったファネツサとも恋仲となり、原作からかなり改変された人物の一人。

ジョン・ドリンカー・コープ

ドリンカーというミドルネームだが酒は一滴も飲めず、勝利の祝杯もアップルジュースで済ました。バーラト系原理派出身でブルースとは幼馴染。ファンがターナーと関わって優遇された分、出番が減った人物。ブルースのお目付け役的な存在だったが、そちらは生きる潤滑油、アルフレッドに役目を奪われつつある。

## 融和と排除 宇宙暦730〜736年 第28話 守るべき存在

宇宙暦730年 帝国暦421年 6月末

惑星ハイネセン ホテルユーフォニア

カーク・ターナー

「紅茶のお代わりは如何ですか？ターナー様」

「お願いしようかなメアリー。いつもありがとう」

手元のティーカップを横に滑らせると、メアリーがティーポットから紅茶を注いでくれる。お礼も込めて会釈し、カップを引き寄せながら視線を経済紙に戻す。任官して以来、ホテルユーフォニアでお世話になっている俺は、朝食を取りながら経済紙に目を通すのが日課だ。

早番担当のメアリーとは、もう馴染みの仲だ。まあ、コーヒー派が多いこのホテルで、少数派の紅茶派だった事もあり、顔を覚えてもらえたようだ。変な勘繰りは無しだぞ？メアリーとは長期宿泊者と従業員の関係だ。

士官学校を卒業した俺は、クリステインと結婚式を挙げ、ハネムーンがてら惑星エコニアに6年ぶりに帰省した。捕虜収容所が増設され、地方星系の中では経済的に一頭が抜け出たエコニアだが、ハネムーンの行き先としては正直微妙だ。

俺としては、他の面々が候補にしていた景勝地や、バカンスの定番を薦めた。ただ、クリステインとしては、俺の両親や義理の妹弟にもきちんと会っておきたいという意向が強かった。

クリステインに押し切られた形での帰省だったが、今では押し切ってくれた事に感謝している。久しぶりのエコニアは、数字では理解していたが、実際に見てみると、俺が暮らしていたエコニアとは比較にならない程、発展していた。

ターナー家が所有していた荒地地は、第二人造湖が造成されたことで有望な農地となり、父さんは別人のように楽し気に働いていた。7歳の妹と6歳の弟は初対面という事もあったが、何かと写真を見せて

いたらしく、早々に懐いてくれた。

クリステインも混ざって、農作業をしたのも良い思い出だ。俺は早々に井上商会に働きに出たから、ターナー家の農地を耕した経験がほとんどなかったからな。

やつれた姿を見せまいとしている印象が強かった母さんも、明るい表情を見せていて安心できた。俺の仕送りの一部を活用して、牧畜業も始めるとの事だった。

このままいけば、妹弟達はエコニアで身を立てる事が十分可能だろう。帝国風の食材の生産も、捕虜たちの協力を得ながら始まっている、思った以上にクリステインも楽しめたと思う。

「ただねえ、まさか孫と同年代の子供が出来ちゃうなんて……」

終始笑顔だったクリステインが反応に困っていたのが母さんのお腹に4人目の命が宿っていた事だ。同盟は多産を奨励しているから、高齢出産にも医療機関は対応している。

まあ、俺も20歳で結婚と、同盟でも早めに身を固めた事もあるが、あれからクリステインの懐妊熱は高まったと思う。別に俺のすることとは変わらないんだが、あんまり義務感ではしたくないのも本音だ。

井上商会にももちろん顔を出した。7年前は髪も黒々としていたオーナーが、白髪交じりになっている事に、時の流れを感じた。ただ、井上商会は今ではエコニアを代表する商会になっている。世話好きで甘い所がある彼が、ちゃんと成功したことは、自分の事のように嬉しかった。

捕虜たちもエコニアの開発に協力的らしいが、発展著しいエコニアは慢性的な人手不足らしい。妹弟にも人材として目を付けている様だが、自前の広大な農地に、牧畜にも手を広げるとなると、むしろ作業員として捕虜を雇う側になるだろう。

収容所の規模が一気に3倍になったことで、惑星エコニアの男女比が男性寄りになっているのも事実だ。出光商会を通じて、集団就職の募集を亡命系に依頼することを提案した。この辺に関しては、ウーラント商会の社長と言う立場もあるが、同盟軍の少尉という立場もある。

亡命者と結婚した俺は、良くも悪くも亡命派寄りに見られる。そういう意味で、捕虜の同化政策のモデルケースでもあるエコニアにあまり口出しすると、逆に変な目で見られかねない。表立って動けないのが心苦しかった。

エコニアを後にして、テルヌーゼンに戻り、ハイネセンのシルバールイツジにある尉官向けの官舎への引越し手配を始めた辺りで、クリステインに妊娠の兆候があった。彼女本人は、予定通りシルバールイツジでの同居を望んでいたが、軍人と言う商売は艦隊勤務にでもなければ半年単位で家を留守にする事もある。新婚の妻が一人きりで子育てをするのも厳しいだろうと判断し、俺は単身赴任をすることにした。

独り身で官舎を整えるのも無駄なので、ホテルユーフォニアに転がり込んだ訳だ。同期連中もシルバールイツジの官舎で新婚生活を始めるし、そこまで心配する必要もなかったかもしれない。ただ、市立経大の同窓生もテルヌーゼンに多くいるし、義弟であるユルゲンがハイネセン記念大学に進学した以上、ウーラント邸には義父一人になってしまう。ビジネス面でもクリステインはテルヌーゼンにいる方が都合が良かった。

「メアリー、ご馳走様」

空になったティーカップを横目に、俺はメアリーに声をかけて、ロビーを抜け、ロータリーに停車している自動運転タクシーに乗り込み、統合作戦本部ビルへ向かう。

「任官式を危うく欠席する所だったが、無理をして会っておいてよかったな」

タブレットには、エコニアで撮影した両親と妹弟の写真のほかに、エルファシルにいるシーハン嬢とタイロン少年の写真もある。このタイミングを逃すと厳しいという事で、スケジュールはタイトだったが、エルファシルにも足を運んだ。

トーマス譲りの優しい気な顔立ちと、シーハン嬢から黒髪黒瞳を受け継いだタイロン君は、どこかどっしりした所があり、初対面の俺にも物怖じしなかった。エルファシルでのウーラント商会の事業立ち上



げで、幼い頃から大人と接する機会が多かった。それにプレゼントを託していたキャプテン佐三も顔をちよくちよく出していたらしく、人見知りしない子に育ったようだ。

「そんな気がしていたが、これはこれで良かったんだろうな」

手元のタブレットをスライドすると、3人の写真が表示される。タキシードで身を固めたキャプテン佐三、ウエディングドレスに身を包んだシーハン嬢。そして子供用の礼服を着たタイロン君。

もともと俺が支援していた事もあり、キャプテン佐三としては本心を明かすか迷ったようだが、シーハン嬢とタイロン少年と過ごす時間は、ビジネスにかまけて来たキャプテンにとつて安らぎの時間になっていたようだ。俺のエルファシル訪問に合わせて、シロンから到着したキャプテン佐三から、シーハン嬢への想いが打ち明けられた。

トーマスへの想いもあったようだが、シーハン嬢もまだ30歳だ。一人でタイロン君を育てるのも大変だし、相思相愛なら俺から言う事はないと思った。タイロン君の父親代わりのような存在になっていたキャプテン佐三に、シーハン嬢も感じる所があったようで、急遽、入籍する事となった。

立会人はなぜか俺だったが、悪い気はしなかった。エンブレム号の乗組員や、ウーラント商会のエルファシル支社の面々も急遽集まり、教会で式を挙げた。久しぶりに会うエンブレム号の乗組員は、機関長以外は、初対面だった。

今では5隻の商船を運用する出光商会は、中堅資本と言えなくもない所まで急成長している。副長も、航海長も、今では船長として活躍している以上、予想できる事だった。

「まあ、納まる所に納まったな」

どうやら周囲もどこか感じる所があったようだ。久しぶりに会った機関長がそんなことをつぶやいていた。キャプテンもまだ40代に入ったばかりだ。ターナー家の事例を考えるとタイロンの弟か妹の誕生は十分期待できるだろう。

エコニアを飛び出してたった7年足らずで、知己が増え、家族も増え、そして後進達も増えていく。国防の末端を担う者としても、任官

前にちやんとそれに気づけて良かったと思う。

『目的地に到着します。ご利用ありがとうございました』

到着を告げるシステム音声が、俺を現実に戻した。クレジットカード機能も兼ねた身分証をリーダーに通し、タクシーを降りると、地下駐車場の降車場だ。首にかけたセキュリティカードをゲートに通し、情報部専用のエレベーターに乗り込む。意外なことに、俺を含めた同期連中はまとめて参謀本部勤務を命ぜられた。

今の俺は参謀本部勤務で特命中と言う扱いで、ジークマイスター分室にデスクを持っている。参謀本部という組織はある意味とても便利で、各艦隊や基地に参謀役を派遣できる事から、軍組織全体を触りだけでも経験させるには都合がよい組織だ。ブルースを始め、同期の面々を軍としても、将来の上層部にすべく、育成するつもりなのが分かる。

俺との情報交換をする為に、参謀本部付きを拝命して最初の任務が、機密情報アクセス権取得者検定だった事には、正直笑った。ただ、それだけ室長の分室が期待されているという事でもあるだろう。

エレベーターを降り、情報部独自のセキュリティゲートを通過すると、いよいよ我らの分室だ。リーダーにセキュリティカードを通し、ドアロックを解除して席に向かう。荷物をデスクそばに置いて、まずはお茶の準備だ。

機密保持の観点からこの分室には従卒は入れない。ジークマイスター室長以外に、この部屋に出入りしているのは俺ともう一名だけだ。紅茶を帝国流に入れられるのは俺だけなので、新人少尉の業務の一環として受け入れている。

もつとも、室長は月に一回は帝国亭で食事をされるのだが、その際に必ず御供にしているもので、メリットが無い訳ではない。統合作戦本部や参謀本部に呼ばれる事もあるから、もう一人の少尉と共に、上位者の目を気にする事なく、伸び伸びと勤務できている。

「おはよう。ターナー。今日も早いな」

「おはようファン。俺も今来たところだ」

もう一人の少尉で、俺の同期でもあるファンが部屋に入室してき

た。結婚したことも影響しているのか？初めて会った時から比較するとだいぶ柔らかくなった。

新婚生活もうまくいくか心配していたが、この分室勤務になって以来、少し照れながら昼食に愛妻弁当を頼張るファンを見る限り、俺の心配は杞憂に終わりそうだ。ファンはこの分室と参謀本部の連絡役として着任している。冷静沈着で手堅い仕事をするファンを当ててきた辺り、参謀本部も適性を理解している様だ。

「昨日までで、あらかたの分析は終了した。概要図にまとめたものを添付しておいたが、もう確認済みだろうか？」

「ああ、ちょうどPCを起動して確認していた所だ。どう思う？連中も最前線に食物プラントを持ち込むまでには至っていない。あちらさんもゴタゴタしてはいるだろうが、そろそろ動き出すだろう？手始めにダゴンで試してみたい。あそこなら想定以上の戦力が出張ってきてても、アステロイドベルトの多さで撤収も容易だろう？」

「そうだな。同意する。それに同盟軍はダゴンに強い思い入れもある。そういう意味でも上申した案が採用されやすいだろう。では、作戦案の大枠の作成を進める事で良いかな？」

「そうだな。上の連中が介在する余地もあった方が良いでしょう。んじや善は急げだ。取り掛かるとしよう」

ファンと業務割り振りを確認して、俺達は上申案の作成を始めた。室長の予定を確認すると、こちらには午後から来るようだ。それまでに概要はまとめておいて、相談のうえで最終案を煮詰めれば問題ないだろう。

## 第29話 誘因

宇宙暦730年 帝国暦421年 6月末

統合作戦本部ビル ジークマイスター分室

ファン・チューリン

「うむ。ダゴン星域に狙いを定めた意図は？」

「はい。室長が持ち込まれた光ディスクの情報とすり合わせましたが、補給のタイミングには変化がありませんでした。また、ダゴン唯一の惑星、カプチエランカは極寒の惑星です。補給切れとなれば陸戦隊は餓死するか、降伏するかでしょう。玉砕覚悟で我が軍の基地に乗り込んでも、撤収済みですから、以前のような手も使えません」

13時過ぎにジークマイスター室長が分室に到着されると、ターナーは紅茶の用意をし、一息ついたのを見計らってこの数カ月、私達を取りまとめた上申書の概要の相談を始めた。

「なるほど。では、陸戦隊を一時的にとは言え撤収させる理由は？」  
「室長、ターナー少尉に倣うわけではありませんが、惑星カプチエランカには確かに希少金属の鉱山があります。ただ、特有の気候と最前線である事から採算ベースには乗りません。地方星域にそれなりの開発予算を投じれば、同等以上の産出量を、確保できます。」

陸戦隊が血で血を洗う地上戦を行ってまで確保する価値は残念ながら無いでしょう。星系を維持すると言う観点では、ダゴン星域に多数存在するアステロイドベルトの中から、比較的安定したものを選び、艦隊駐留拠点を作る方が制宙権の観点ではむしろ有効でもありません」

ターナーがこちらに視線を向け、それに応じる様に室長の質問に答える。報告する際は、必ず2人揃って行う。発言も交互にするのだが、これも上官とのコミュニケーションの練習を私にさせる意味もあった。

亡命者である室長とターナーは気が合う所があり、効率を考えると彼が全てを担当したほうが良い。ある意味、非効率な手法を取っているのは、私がこの分室に配属されて以来、2人の仕事の成果は2人で

報告するという約束をターナーと交わしたためだ。

「ふむ。前線指揮官たちの心情を無視すれば、まあそれで通るだろうな」

「室長、惑星カプチェランカに派遣された陸戦隊は、摩耗を続けております。部隊の立て直しをエルファシルで行うという事で、話を通せないでしょうか？前回の二の舞になるのは、こちらも避けたいのです。人員によっては3年近く現地に派遣されたままの将兵もおります。陸戦隊の撤収が完了すれば、降伏勧告に応じない場合、軌道上からの攻撃も視野に入ります」

「うーむ。戦死した部下への想いと、部下を生きて返すという義務。命令があれば義務を選ぶ理由もできるか……」

「はい。それに同盟側が撤収したとなれば、帝国側は撤収しようにもできないでしょう。新帝が即位したばかりです。軍としても早々に失点をしたくはないと判断しました」

「分かった。では、私の方から統合作戦本部に上申しよう。両名は参謀本部に話を通すとともに、想定される交戦パターンの作成に入れ。修正の余地は多少は残すようにな」

「承知しました。フェザーンの件もあります。戦力秘匿の件は、どこまで触れるべきでしょうか？」

「宇宙艦隊も第9艦隊の戦力化を終えた所だ。そろそろ戦いたがるかもしれない。あくまで提案に留めて、あちらの判断に委ねた方が良いでしょう。大規模な艦隊派遣があれば情報は入るだろうからな」

「ありがとうございます。それと、この案が成功した暁には、高等弁務官府の人員をバーラト系融和派にすることを、ご提案頂けないでしょうか？どうも今の職員はバーラト原理派の色合いが強く、亡命希望者に不信感を持たれているようです。亡命時に同化政策に失敗すればどうなるかは既に実例があります」

「分かった。分かった。どうせその資料も連名で作成してあるので、どう？原案で良いから一度確認させてくれ」

揃って敬礼をし、お互いのデスクに戻る。これで任官以来2カ月近く費やした案件が上申される事になる。ホッとすると共に、予測が外

れたらという恐怖も感じた。

「やったなファン。俺はお茶を入れ直したら食堂へ行ってくる。手短かに済ませてくるからしばらく頼む」

そう言うとお茶の用意をして室長のカップに紅茶を注ぐと分室を出て行った。気にしなくても良いと言ったのだが、フアネッサが作ってくれたお弁当をデスクで食す私に気を使って、12時から13時は私が昼食を、ターナーは13時過ぎから食堂で昼食をとる形になっている。

上官にも同期にも世話好きで気を配る所は、見習いたい点ではあるが、私が苦手とする部分でもある。ただ、一度身内認定した存在への思いの強さは正直気にかかった。

私はPCを操作し、二人で纏め上げた資料のファイルを立ち上げる。私たちの提案は、纏めるとダゴン星域の地上部隊を撤収しつつ、帝国軍の定期補給艦隊を撃滅し、さらに追加で現れるであろう救援部隊も撃破。惑星カプチェランカの帝国軍地上部隊に降伏勧告を行い。応じない場合は軌道上からの攻撃を行うというものだ。

正規艦隊を派遣するとフェザーンが帝国に到達する恐れがあるため、正規艦隊は定期補給艦隊の撃滅を確認してから出撃する事を推奨する形にした。定期補給艦隊の撃滅を担当する3個分艦隊程度の戦力には、参謀本部から私の同期連中の何人かが、臨時で派遣されることになるだろう。

この作戦案が生まれた切っ掛けは、思いつめた様子でターナーが惑星カプチェランカの戦線動向の分析結果の再確認を依頼してきたことに始まる。戦線動向や帝国軍の補給実績を考えると、6年前に実施された帝国軍の大規模攻勢は、物資が乏しくなった帝国軍が、物資があるであろう同盟軍の基地を文字通り玉砕覚悟で攻め、猛吹雪に油断していた基地は文字通り蹂躪されたという分析になる。物資の乏しい帝国軍は、捕虜を取らなかつた。

もし、情報部が惑星カプチェランカへの補給に着目し統計を取っていれば、警告も出せただろうし、基地が陥落することもなかつた可能性が高い。上層部の怠慢で出た被害とも言えた。既にその結論に

至っていたターナーは、敢えて予備知識のない私に再確認を頼んだのだろう。別の事情を知らなかった私は、その分析結果に賛同してしまった。

「兄貴分のミラー氏か。ジャスパーム、友人の過去を語るのは不謹慎だろう」

モニターに視線を向けたまま、私はため息をついた。激務の合間を縫って食事を共にする様にも心掛けていたが、ターナーの兄貴分が戦死した話を、ジャスパームが漏らしたのは、その一件の数日後だ。ミラー氏が戦死したのが6年前。

まさかとは思ったが、基地に所属していた部隊員を調べると、トーマス・ミラー伍長（二階級特進）の名があった。この作戦案は、ターナーのミラー氏への想いが発端になっている。良い作戦案なのは事実だが、ターナーは根本的に破壊を担う軍人ではなく、創造を担う経済界にいるべき人材だったのでないかと気にかかっている。彼自身も、経済界への想いを口にしていた。

「ため息か……。ファン少尉、悩みごとかね？」

「失礼しました。少し考え事をしておりまして……」

「ターナー少尉の事だろうか？ 彼は今まで大きな挫折を経験していない。苦労はしただろうがね。そして兄貴分の死にどこか責任を感じている。人としては美点かもしれないが、軍人としては甘いかもしれない。多数を生かす為に少数を犠牲にせざるを得ない状況で、厳しい判断はするかもしれないが、自分自身も犠牲にしようとするだろう……」

どこか悲し気な室長の表情が印象的だった。

「少尉の同期連中の事は私も自分で確認させてもらった。その上で、ファン少尉、君をターナー少尉と組ませたのは私だ。冷静沈着で手堅い仕事するのはもちろんだが、感情面を抜いて、シビアな決断が出来る人材だと思ったからだ。アッシュビー少尉の鋭さをローザ少尉が和らげているように、ターナー少尉の至らない部分を君が補ってあげてほしい。君はターナー少尉をまぶしく見ている様だが、私からすれば君も十分にまぶしい人材だ。では、事前の根回しにでも行くしよ

う」

そう言つて、室長は分室を出て行かれた。私は敬礼して見送つたのだが、視界がなぜが霞んでいた。涙を流している事に気づき、ターナーが戻るまでに何とか平静な自分を取り戻すために四苦八苦することになる。なんとかターナーが戻る前に心を落ち着けたのだが、室長とのやり取りもあり、入室してきたターナーを思わず見つめてしまった。

「どうした？何かあったのか？」

「いや、フェザーンの事が気になつてな……」

「そうだな。まあ、エルファシルに2個艦隊規模の駐留基地と補給基地の大幅な拡張が出来れば、奴らの事を気にしなくて済むんだが、予算がなあ……」

そう言いながら、上申書の作成を始める彼の背中を見ながら、この作戦が成功し、ミラー氏への想いが整理できるように。そして、苦しい決断をするような状況にならずに済むようにと、祈らずにはいられなかつた。



### 第30話 初陣

宇宙暦730年 帝国暦421年 9月末

ダゴン星域 アステロイドベルト

アルフレッド・ローザス

「アルフレッド。この一文、どう思う？ 奴がこんな命令を許すとは思えんが……」

「ブルース。出元はおそらく防衛部あたりだろう。基地を破棄させ、敵討ちの機会も奪った。なら一応の慈悲を示す機会は与えるが、それ以上の譲歩を認めない……。という所だろう。私達には地上戦の経験はない。彼らの価値観を理解するのは難しいだろう」

「そうだな。言い分は分かる。気持ちも判るつもりだ。願わくば帝国の連中が降伏勧告を受け入れてくれることを期待したいな」

イゼルローン回廊を抜け、ダゴン星域へこれまで通りに到着し、惑星カプチェランカへ補給を行おうとしていた定期補給艦隊を蹂躪した私達、臨時特務艦隊8000隻は、拿捕した輸送艦をエルファシルに回送したごく一部の部隊を除いて、アステロイドベルトの中に紛れ込み、おそらく来るであろう救援艦隊を待ち構えていた。今頃はハイネセンから帝国へ通報してくれとばかりに大々的に出撃した2個艦隊が、パランディア星系へ向けて進軍を開始しているだろう。

帝国の首都星オーディンからイゼルローン回廊までにかかる期間は40日。カプチェランカの帝国軍には、そこまで持ちこたえる物資がない。帝国軍は前線に遊弋している独立艦隊を糾合して救援艦隊を編成することが想定されている。

糾合した戦力を分散させる意味で、イゼルローン回廊出口からみて丁度ダゴン星域と三角形が出来るパランティア星系に念を入れて広報までして進軍している。ダゴンを救えばパランティアを放棄することになる。地表のレーダー施設ではアステロイドベルトに潜伏している艦隊を見つける事は困難な一方、パランティア星域には2個艦隊が向かっている事が確実なため糾合された艦隊はおそらく二分され、かなりの割合がパランティア星系に向けられる想定がされている。

た。

『カプチェランカに駐留する帝国地上部隊への降伏勧告は一回のみとせよ。勧告が受け入れられない場合、軌道上から地上施設を破壊すべし』

作戦要項の最後に書かれた一文が、輸送艦隊の撃滅を喜ぶべき臨時特務艦隊に一抹の影をもたらししていた。ブルースを始め、バーラト系原理派の若手士官の顔色が冴えないのは、この命令の大元が自派から出ている事をなんとなく察しているのもあると思う。

バーラト系融和派の勢力拡大、亡命系の態度の軟化、そして辺境では捕虜の同化政策が進む一方で、バーラト系原理派は確実に自分たちが少数派になりつつあることを理解している。

カプチェランカは何年にも渡って地上戦が繰り返り広げられ、猛吹雪だけじゃなく血しぶきと憎悪が吹き荒れた場所だ。意図的に捕虜を取らない皆殺しも行われた過去がある。そのような戦場を経験した捕虜が、同化政策になびくかと言われれば、私も懐疑的にならざるを得ない。無条件に慈悲を与える事は許さない……。そんな意思表明を兼ねているのだろう。

そうまでしたいなら自分たちの手を汚して欲しい。そう言いたい所だが、そんな心情を漏らせばブルースを傷つけるだけだ。私は内心、少しでも救援艦隊の到着が遅れる様に、そして地上部隊の指揮官が、憎悪に囚われずに素直に勧告に応じる様にと祈っていた。

カプチェランカからの打電を鵜呑みにしたのか？ 戦力はパランティア方面に集中していると判断したのか？ ダゴン星域に現れた帝国軍の救援艦隊は、アステロイドベルトを警戒することなく、私達に背面をさらした。戦力も4000隻程度。これで撃破できない訳がない。

なんとなくだが、皆予想していたのだろう。拿捕した輸送船に、やけに救助活動を丁寧にして収容した捕虜をのせ、エルファシルに送り出すまで降伏勧告は行われなかった。

命令で降伏勧告の機会を制限されていなければ別の未来もあったのだろうか？ 最初に最後の降伏勧告が無視された時、司令官は帝国軍

からの通信をシャットアウトさせた。

静止軌道から艦砲によって地上施設を蹂躪し、帰路に就く。暗黙の内に誰も指摘しなかったが、惑星カプチエランカは極寒の地だ。基地を破壊され、屋外で過ごさざるを得ない状況でどうなるか？司令官は自分が全てを引き受けるつもりだったのかもしれないが、残念ながらその思いは無に帰した。そこまで想像力がない人間の方が、珍しいだろう。

もしかしたら私達はトーマスさんの仇をとったのかもしれない。でも、オレンジ頭の親友に、胸を張ってそれを言う気にはなれなかった。落ち込んだ様子のブルースを慰める言葉も見つからなかった。カークならうまく励ませたのだろうか？

ハイネセンに帰還した時、どこかホツとし、しばらくはこの話をしない事にする決めた。いずれ経験すると覚悟していたはずの初陣は、私達の心をえぐり、自分たちの手が血濡れた物になった事ばかりが記憶に残るものとなった。

宇宙暦730年 帝国暦421年 10月末

パランディア星域 外縁部 同盟軍第5艦隊

ジョン・ドリンカー・コープ

「何はともあれ、多くの兵士たちが無事に伴侶なり恋人なりの元に帰れる。それだけが朗報だな」

「ああ、それに戻る頃には、ターナーの所の予定日だ。慶事が続くな。またジンジャエールで祝杯を挙げるとするか」

「まったく、風貌は精悍なのにワイン一杯も受け付けんとはな。ヴィットリオと足して割ればちょうどいい。あいつは底なしだからな。良いワインを水みたいに飲みやがるから、奴との食事は高くつくんだ」

そう言いながら、気づかずに感謝するかの様に肩を叩くと、ジャスパーは視線をモニターに戻す。俺達は帝国軍の戦艦から抜き出した戦術データの分析をしていた。データ自体はすべてエルファシル辺りまで戻ったタイミングで、同盟軍のデータベースにアップロードさ

れる。

情報部はそれを元に捕虜対応をするだろう。ただ、俺達は参謀本部から第五艦隊に参謀の一人として配置されたが、ジークマイスター分室への報告も任務に含まれる。フェザーンでの情報の受け渡しに軸足を置く分室は、分析担当は俺達の同期2名だけだ。少しでも負担を減らす意味で、事前分析は必要な事だった。

「予測のひとつだったけど、結局正規艦隊は出てこなかった。独立艦隊がわらわらと来たわけだが、フェザーンが知らせなかったと思うか？」

「その点は判断できないが、おそらく知らせたと俺なら判断するな。正規艦隊は出てこなかったが、5つの独立艦隊が出てきている。ダゴン星域に行ったのも含めれば34000隻近い。こちらが2個艦隊を出したという情報が無ければ、対応策としての確過ぎるな」

「そうだな。俺もそう思う。フォルセティ会戦で貴族出身の『名ばかり少将』が多数戦死した。そのゴタゴタが落ち着いたかと思えば、ハーレム帝が死去。600人近い庶子がばらまかれ、後を継いだオットー・ハインツ2世は、方々に気を使わないといけない。軍にもまた『名ばかり少将』が増えただろうしな」

俺の意見に賛同しながらも、ジャスパーはどこか悲し気だ。彼の父親はオルテンブルク家の直系だ。俺の出身であるバーラト系原理派からすると許しがたい事に、疑似的な貴族制を取る亡命派。オルテンブルク家はその雄の一人だ。

ただ、冷静に見れば派閥の雄としての責務は果たしている。亡命派が飢える事が無いように仕事も確保している。そして徴兵に関して、最低限の負担には応じるが、不公平な話はすべて突っぱねている。そんな彼から見れば、帝国の連中が貴族の責任を放棄したようにも映り、思う所があるのだろう。

「ジャスパー。俺達は同盟軍だ。帝国には帝国の事情があるんだろう。あまり気に病むな」

「分かっちゃいるんだがな。為政者としてはある意味正解さ。下手をしたら反乱の神輿になる存在や、実績も無いのに声だけはでかい連中

を同盟にぶつけて処分する。勝利できればそれはそれで良し。治世は始まったばかりだ。処分の機会はまだまだある。分かっちゃいるんだ。ただ、それに付き合わされる下級貴族や平民の事を思うとな。亡命者も案外増えるかもしれん」

パランディア星域に進出した第5艦隊と第7艦隊に対応してきた独立艦隊は、連携も不十分で安易な突撃をしてくるし、こちらの誘いにもホイホイ乗ってきた。指揮官に軍事的な教養があったとは思えない。

ジャスパアの言う通り、『名ばかり少将』達の艦隊だったんだろう。先帝の庶子という事で中将もいたかもしれない。そんな連中に階級を投げ与え、300万人を超える兵士たちが戦地に送られる。任官したばかりとは言え、俺も軍人の端くれだ。気分の良い話じゃなかった。

「あっちじゃ、案外ウォリスの方が憤懣を抱えているかもな。あいつはこういう話に一番目くじらを立てるからな。ヴィットリオも苦勞してそうだ」

ジャスパアの言う通りかもしれない。なんでもそつ無くこなすウォーリックは、変な所で高潔だ。ベルティーニは口下手とは言わないが、勝敗の事ならともかく、こういう事情をうまくいなせる奴でもない。

熊みたいな体躯でしょんぼりしている奴を思うと、それはそれで面白かった。本当なら、その風貌から粗野だと思われがちなベルティーニを抑える意味でウォーリックと組ませたんだろうが……。

そういう意味では、幼い頃から何だかんだと一緒にいたブルースと組めなかったのは残念だが、ジャスパアも気持ちの良い男だ。分析も本能的に要旨を掴む所があるが、逆に細かいところを無視するから、補う意味で自分の役割も明確だった。

お互いの妻同士も仲が良い。アデレードから逃げ回るせいで、同期連中の新婚家庭からも距離を置きがちなブルースの事を考えると、ジャスパアと家族ぐるみの時間を過ごすことが増えそうだった。

「それで、ターナーの所には何を贈るんだ？ 実用性を考えたらオムツ

券とかになるが？」

「馬鹿を言うな。シルバーカトラリーを贈るに決まっているだろう。ターナーも用意するだろうし、実家のウーラント家からも送られるだろうが、あれは何セットあっても良いんだ。贈られる数が多いほど祝福された証になる。使う機会が少ないかもしれないが、婚約の機会なんかの身内の会食なんかで使えるしな。様式を確認して、揃いの物を贈るんだ。一度頼めば毎年手配をしてくれるからな。プレゼントに悩む必要もない。貴族趣味だと思うかもしれないが、案外道理に適っているんだぜ」

そう聞いてみれば、案外道理に適っている。シルバーカトラリーが並ぶ中でオムツ券と言うのも様にはならない。あまりに破格だと困るが、毎年プレゼントに悩まずに済むならそれも良いかもしれない。結局、俺達はお互いの子弟にシルバーカトラリーを贈り合うことになる。

贈り合うカトラリーのクラスも合わせたから、子沢山の方が勝ちだななんて話になり、既婚者たちは子づくりに励む事になる。誕生を知らされる度にアデレードに結婚を迫られるブルースが笑い話の種になるのだが、それはもう少し後の話だ。

### 第31話 有効活用

宇宙暦731年 帝国暦422年 2月末

惑星テルヌーゼン ウォーリック邸

クリステイン・ターナー

「本日はわざわざ足を運んでもらって済まないね。シュテファン君も元気そうで何よりだ」

「会長、良い名前を頂きありがとうございます。義父も良き名を頂けたと喜んでおります」

「はい。父も同盟の地に来てまで帝国風の慣習に配慮すべきか悩んでいたようですが、会長のお陰を持ちまして良き形になったとホツとしておりました」

夫が任官する前にと考えていた私のお腹に、命が宿って1年。名付け親になって頂いたウォーリック会長に、シュテファンの顔を見て頂こうと、夫婦でご挨拶に伺いました。帝国の芸術にお詳しい会長は、名付けの慣習についてもご存じで、快く引き受けて頂きました。

本来なら寄親にお願いするのですが、お世話になった恩人にも願います。父としても初孫に慣習に応じて名付け親を……。と考えていたのですが、ウーラント商会で既に多大なご支援を頂いている以上、さらに甘えて良いものかとお悩みでした。

「貴方たちに似て、きつと優秀な子になるわね。物怖じしないし、美形になりそう。シュテファン、ウォリスみたいな女性泣かせになってはダメよ?」

「イネツサ。あれは末孫だから私も少し甘やかし過ぎた。幼い頃から良い芸術に触れたおかげで、趣味は悪くないんだがな。まあ今はあだが、やると決めたらやる子だ。そのうちあいつも曾孫を連れてくるさ。どれどれ、私にも抱かせておくれ」

そう言っ、あやして下さっていたイネツサ様からシュテファンを受け取り、抱きながらあやして下さる。男子ばかりとは言え3人もお育てになられ、既にウォリスさんの兄君方はお子様もいらっしやる。

手慣れた抱き方にシュテファンも上機嫌だ。物怖じしないシュテ

フアンは夜泣きもあまりしない。泣き出す可能性は少ないと思っていたが、上機嫌に過ごしてくれてホツとした。

シュテフアンは夫の友人、私の友人を始め、多くの方に抱いて頂けている。帝国ではより多くの方に抱いてもらえれば、それだけ縁も多くなると言われている。シュテフアンが成人する頃には、ウーラント家も同盟に根が張れたと、言える日が来るのだろうか？

「イネツサ様、シュテフアンは既にウオリスにも抱いてもらいました。私はウオリスのなんでも器用にこなす部分は、是非シュテフアンにも見習ってほしいと思っております。お二人の温かい薫陶があつたからでもありましよう？恋愛も器用にこなしていますが、相手を泣かせような事はしていません。最も、私もシュテフアンが恋愛に器用になり過ぎるのは困りますが……」

「まあ、ターナー君はお上手ね。それに友人思いだわ。そうそう、遅ればせながら昇進おめでとう。ウオリスのお友達たちも揃って昇進でしょ？任官一年以内に功績を立てられれば、万歳昇進とは差がつくものね。おめでとう」

「ありがとうございます。ウオリスを含めて皆優秀です。運もありましたが、昇進に値すると評価頂ける結果を出せた事は嬉しく思っております」

詳しくは機密という事で教えて頂けませんでしたが、お知り合いの面々は無事に帰還され、昇進されました。作戦立案に関わっておられた夫とフアンさんも中尉になりました。

軍人の妻として昇進は喜ぶべき事なのでしょうが、多くの方は前線で功績を上げられました。万が一の事があつたらと、不安に思うのが妻としての本音です。そしてそれを見せまいと明るく務めるのも役目でしょう。

ただ、任務に向かう夫たちが留守の間は、無事を祈りながら過ごしているのもまた事実。私は運よく授かる事が出来ましたが、多くの方々は、夫に英気を養ってもらいながら、お互いの愛の結晶を求める事になるでしょう。

「それじゃあ、クリステインさん、テラスにお茶の用意をしてあるわ。



一緒に行きましょう。男性陣はビジネスのお話もあるようですから…… シュテファン、さあ、いらつしやい」

イネツサ様は、グレック会長からシュテファンを受け取り抱き上げると、あやしなから応接室を後にされる。会長に会釈をしてからイネツサ様に続いて部屋を後にする。大きくとられた窓のお陰で明るい雰囲気の下を、イネツサ様に続いて歩く。

シツクにまとまった内装に、アクセントのように飾られた帝国風の美術品は、上級貴族家もかくやと言う雰囲気で、不思議と居心地が良かった。大奥様に先導されてテラスに出て、テラスの一角に用意されたテーブルに腰を下ろします。

「クリステイン？出来る男を夫に持つと大変でしょ？私もそうだった。あんなこと言ってるけど、結婚する前はグレッグも相当モテたよ。ウオリスの兄たちは商会に関わっていたから、早めに婚約させたから良かったものの、そうじゃ無かったらウオリスが3人になっていたと思うわ」

「カークさんもダンスパーティーではかなり人気者でした。淑女としてはしたくない事ですが、嫉妬しなかったと言ったら嘘になります。殿方は、やはり妻がいてもよそ見をしてしまうものなのでしょうか？」

「まあ、ターナー君はそっちの方は器用じゃなさそうね。ただ、ちゃんと話し合う事が大事ね。シュテファンの事もそうだけど、貴女は商会の経営にも関わっている。もう少しすれば、ユルゲン君も卒業するでしょ？相談事の話は尽きないはずよ？抱え込まないで、うまく頼るの。貴方はどちらかと言うと抱え込むタイプじゃない？むしろそういうのは要注意よ？」

シュテファンをあやしながらなんでもない事のように話して下さい。イネツサ様は、夫婦としてだけでなくビジネスの面でもパートナーだったと聞く。私も妻としてだけでなく、ビジネスの面でもパートナーになれるだろうか？いえ、なると決めるのです。クリステイン。ビジネスでも軍でも夫は結果を出してくれました。次は私の番。うじうじ悩んでいるよりよっぽど生産的でしょう。

名付け親になって頂いたお礼に伺ったにも関わらず、心まで晴れや

かにして頂くなんて。シュテファンにもお二人へのご恩を聞かせておきましょう。それから、淑女同士の会話を楽しみながらお茶を頂きました。もしおばあ様が存命ならこんな話を交わしたのかもしれない。そう思うと、どこか温かい気持ちになりました。この日から、ウーラント商会で励む傍ら年長のお茶会仲間と温かい時間を過ごす事が、私の新しい楽しみとなります。

宇宙暦731年 帝国暦422年 2月末

惑星テルヌーゼン ウォーリック邸

カーク・ターナー

「ウォリスから事前に聞いている例の件の事だろうか？君が結ぶ縁は、本当にすごいな。亡命系だけじゃない。バーラト系原理派にもいつの間にかすごいパイプが出来ている。全く大したものだ」

「その縁の始まりは、会長とのご縁です。ウーラント商会が立ち上がっていないければ、亡命系とのつながりはここまで強くはなりませんでした。今回の件も、私はあくまできつかけに過ぎません。それに、この案を動かすにはバーラト融和派の会長に動いて頂かないと始まりませんから……。次男か長女かはわかりませんが、誼を通じる意味で、次の名付け親は亡命系にお願いするつもりです。名付け親同士、太くはないかもしれませんが、お役に立てるか」と

今回の事業プランは、地方星系の開発と増加傾向の捕虜の有効活用を狙ったプランだ。切っ掛けは帝国軍の戦闘艦が、大気圏突入能力を持つている事に始まる。同盟軍の戦闘艦は、生産効率の兼ね合いから大気圏突入能力を備えていない。つまり、帝国軍の戦闘艦から武装を取り外して輸送艦に改修すれば、インフラ投資が不足した地方星系にも効率よく輸送できる訳だ。

「うん。ウォーリック商会を立ててくれたのは理解しているつもりだ。事業計画も読ませてもらった。鹵獲した帝国の戦闘艦を武装解除し、捕虜たちに運航させる。ウルヴァシーの水資源をインフラ投資が未熟な星系に輸送し開発を促進する。そして余りがちな穀物を搬入し、ウルヴァシーに新設した倉庫群に集積し、輸出効率も上げる。

悪くはない案だ」

「はい。同化政策の最大のネックは、収容所を作った惑星の男女比です。今のままでもインフラ開発に寄与してくれてはいますが、圧倒的に女性不足です。地方惑星を行き来する事で、出会いの機会も少しは増えるでしょう」

「そうだな。帝国軍人は男性ばかりだ。同化政策のお手本のエコニアは適齢期の女性はほとんど既婚者になりつつある。かといって女性だけを移住させる訳にもいかない。そういう意味でも政策としても見るべき点がある」

そう。収容所にいる限り衣食住は事足りる。最近では、収容所の近辺の商店では帝国風の食材も取り扱いが増えた。低賃金だが、適度に働けば嗜好品も買えてしまう。つまり、帰化して家庭をもちたいと思う切っ掛け、恋人が必要なのだ。

「発起人は会長に。既に出資に関してはバーラト系原理派からアツシユビー家、コープ家。亡命系からはベルティーニ家、そしてジャスパー家を通じてオルテンブルク家も内々に参加する旨を回答頂いております」

「そうだな。そろそろバーラト系原理派にも利益配分を始めるべきか。勢力も減少傾向だ。さすがに門外漢にしておくのも、それはそれで問題だと思っていたからな……」

出資比率は同盟政府・バーラト系原理派・バーラト系融和派・亡命派、そして辺境系で20%ずつで話がついている。ウーラント商会は辺境枠で出資する予定だ。もちろん井上商会と出光商会にも辺境枠で出資してもらおう。

短期的に見ればこの事業の受益者は地方星系だ。だから利権として噛ませる。長期的には経済成長すればバーラト系の民需用の消耗品・各種機械製品、亡命系の各種嗜好品の購買層になるだろう。ただ、一見すれば捕虜優遇策に過ぎるといふ主張も当然出てくる訳で、黙らせる意味でも利益配分をしておく必要がある。

「後は、艦船を強奪して帝国に向かうような事が無いようにしなければならぬ点だが……」

「ワープシステムの機能に一部ロックをかければ宜しいでしょう。後は事前通知です。武装解除したとは言え、フェザン回廊に戦艦艦隊向かえば、政治問題に発展します。帝国がそのまま受け入れれば、フェザン回廊の非武装中立が破られる事にもなりますから。我が軍の哨戒網を潜り抜けてイゼルローン回廊を抜けられれば、それこそあつぱれと言うしかないでしょう」

「そうか。そこまで考えているなら話を進める事にしよう」  
「よろしくお願いします」

これで地方星系の開発がさらに促進される。派閥の融和も少しは促進できるだろう。防衛体制を確立するまでは国防費の削減は正直難しい。なら予算を割けないなりに、今から手を打つしかない。

それに、万が一、艦船を強奪してフェザンに向かうなら、それはそれで同盟には問題がない。非武装中立が破られたという前提が出来れば、帝国がフェザン回廊を使用する可能性も生まれる。そうなればフェザン回廊に対する防衛体制も検討する口実になるのだから。

おぼろげながら記憶にある第二次世界大戦。武力に乏しい中立地帯は大国の都合で蹂躪される。永世中立なんて、前世のスイスくらいしかまともに成立していないが、あそこは国民皆兵を採っていた。

住民が皆兵士という事は、攻め込んでも荒れ果てた山地が手に入るだけ、だから永世中立が成り立った。宇宙の交易の中心地であるフェザンに、残念ながらそれは当てはまらない。

### 第32話 ある代議士のボヤキ

宇宙暦731年 帝国暦422年 3月末

惑星ハイネセン 公用車内

ナタリー・アッシュビー

「代議員、先ほど財務委員長の秘書官から連絡がございました。例の法案は無事に通過。予算案にも盛り込まれたとのことですよ」

「ありがとう。戻ったら財務委員長にお礼の連絡をしなければならぬいわね」

そう返しながら、第一秘書が開けているドアをくぐり、公用車の後部座席に乗り込む。午前中に公務を終え、午後から支援団体の会合に出席。最後に支持者の一人である軍需産業のお偉方との会食を終えたばかり。肉体的にも疲労を感じていたし、脂ぎったガマガエルのような風貌の財務委員長の顔を見るには、一休みが必要だった。

こんな時はタバコを一服したい所だが、喫煙者と言うだけで政策如何に関わらず投票しない有権者の存在もあり、代議員に立候補してから禁煙を始めていた。そして一服が欲しくなる度に、『タバコを止める事すらできない喫煙者はリーダーに相応しくない』と主張する、健康をお題目にしたNPOの連中を腹立たしく思うのが、通例行事だ。「手数をかけるけど、ブルースにさっきの件、連絡しておいてもらえませんかしら?」

「承知しました」

ヘッドライトがともり、自宅へ進み始めた公用車の運転座席に座る第一秘書が了承の旨を伝えてくる。事故の発生確率はほぼゼロだが、万が一の事もある。自動運転システムが自宅まで運転してくれるが、SPなり秘書なりを運転席に座らせるのが、公用車を使う上での慣習だった。

繁華街を抜け、第二環状線に入った車は、速度を上げていく。良い時間だが、まだハイネセンのビジネス界には眠らない人々もいるらしい。車窓から見えるオフィス街の窓は、半数以上が灯ったままだった。

軍需産業の一社で役員を勤めている夫は、まだオフィスだろうか？それとも取り巻き連中と歓楽街に繰り出してゐるか？はたまた愛人の所か？3人の子供が独り立ちし、家事の張り合いも無くなった。バーラト系原理派から立候補の誘いが掛かったのは、そんな頃合いだった。

父は帝国との戦争で戦死し、夫は軍需産業で役員だ。若い頃からそれなりに容姿も評価されてきた。選挙区に割り当てられた2枠の議席枠のひとつに滑り込み、それ以来、国防委員会に所属してきた。末っ子が士官学校に首席合格した事もあり、銃後の母の鑑のように言われる事もある。夫は財界で、私は政界でそれぞれの人生を歩んで行けば良い。そんな風に考えていた。

出来は良かったが、かまわれるのを嫌がり、幼い頃から自立心が強かった末っ子。自慢の息子でもあったが、こちらから彼の将来の為に代議員との会食をセッティングしても、不本意な表情をするばかり。あちらから連絡してくる事は、士官学校に入学して以来なかった。

そんな末っ子、ブルースから会いたい旨の連絡が来た時、正直嬉しかった。でもバーラト原理派としても、国防委員としても、知りたくない話を聴くことになった。自慢の息子との会食の話題が、言い寄られてゐるといふ女性との話でもなく、功績を立てた戦場の話でもなかったのは、普通の夫婦関係とは言えない生活をおくる私への罰だったのだろうか……。

『母さん、この事業計画の予算を何とか通してほしい。既に他の派閥は出資者を募り始めている。このままだと、バーラト原理派は居場所がなくなるぞ』

そんな一言から始まった話は、ひいき目に見ても優秀な息子からでなければ、信じられない話だった。戦功を立てて、昇進したばかりなのに浮かない表情も、信憑性を高めていた。

『このままだとバーラト原理派は、名ばかり少将になる』

そんな一言から始まった息子の話は、軍需産業を支持基盤に押さえ帝国との戦争に勝利するまでは一定の支持率が得られる。だからこそ安寧を囲っていた私にとって、知りたくない事実だった。

『国防委員の母さんにはアクセス権がある。でも、知らないだろうな』  
そう言いながら、第三種機密指定された文書を手渡してきた。内容は惑星カプチェランカの地上戦に関する分析報告。戦いが起きたのは7年前だが、結論からすれば上層部の怠慢で、ある大隊が全滅したというものだ。ならば国防委員会を通じて怠慢を咎め、再発防止策を講じれば済む話では……。と、その時は考えた。

『士官学校、記念大、自治大の入学者はほとんどバートル星系の出身者。そして主張と相まって、士官学校の多くはバートル系原理派が占めて来た。俺の馴染みの連中は見事に出身がばらけたが。つまり戦争を主導してきたのは、バートル系原理派なんだ。』

『けど同盟軍の構成比だとバートル系原理派は15%に満たない。実際に現場で血を流す多くの兵士たちはそれ以外なんだ。戦争の必要を訴え、戦争を主導する派閥が手抜きをして無駄な血が流れた。この件は、たまたま調査されたから明らかになったが、精査されれば似たような案件がかなり出るだろう』

『そう聞いた時、思ったのは封印指定する事だ。そんな物が出回れば、軍備拡張政策にも悪影響が出る。下手をしたら反戦運動すら起こりかねないし、徴兵拒否も多くなるだろう。私の考えたことが分かったのだろうか？』

『別に青臭く、これを公表しろなんて言うつもりはない。俺も同盟軍中尉なんだ。だからこの事業計画を政府案として通してほしいんだ。中身を見れば分かるが、捕虜を活用して少しでもコストを抑えて地方星系の開発を進めようという計画案だ。』

『先に言えば、既に60%の出資分は埋まっている。これは融和への誘いなんだ。これを蹴れば、バートル系原理派抜きで話が進むだろう。そして、自派の軍需産業を潤すために同盟市民に血を流させる吸血鬼とでも批判してくるだろうな』

その後、帝国の『名ばかり少将』の話をしてくれた。爵位だけで将官となり、自分だけでなく多くの部下を巻き込んで敗戦する帝国の貴族達。そう、そんな事を許す独裁制、帝国なんて打倒すべきじゃない！

『無能が原因での敗戦と怠慢が原因での敗戦。俺なら怠慢が原因の敗戦の方が許せない。私の力が及ばずに負けてしまった。私が怠けたせいで敗戦した。遺族たちはどっちの方がまだ納得するだろうか?』  
そこまで言われれば私にも理解できた。もし父の戦死が上層部の怠慢によるものなら、私はバーラト系原理派などに一生投票しないだろう。この報告書は文字通りパンドラの箱だ。ただし、本物のパンドラの箱には希望が入っていた。でも私達には希望もないだろう。

『この融和への誘いに、むしろ全力で応えるべきだ。バーラト系原理派だけじゃ戦争は出来ない。実際問題、無能で負ける事はあっても、怠惰で負ける事は同盟軍では少ないと俺は信じている。でも、優秀な奴が分析すれば、すべきことをしていなかった事例はおそらく出てくる。それがゴシップ紙にでも流れたら……』

そうなれば同盟軍は文字通り自壊するだろう。同盟軍の上層部からバーラト系原理派だけを罷免する事なんて出来ない。敗戦したら軍法会議ではなくワイドショーのコメンテーターに重箱の隅をつつくように批評されるに違いない。相手のある事なのだから常勝なんてありえない。人間である以上、ミスもするだろう。

『だからこそ少しずつでも良いから地方星系を開発するんだ。戦死の報に触れるのは彼らも同じだ。経済力がつけば、士官学校を目指す人材も増えるだろう。彼らにも士官への道を用意する。バーラト系原理派が軍上層部に多いからこそその悪夢なんだから』

「代議員、まもなくご自宅です。財務委員長秘書官には帰宅後に連絡する旨、お伝えしました。また、ブルース様からお礼のご返信が来ております」

「わかったわ。対応してくれてありがとう」

息子との会話を思いだしている内に、車窓から流れる光景は、見慣れたものになっていた。帰宅したらすぐにガマガエルに連絡して、熱いシャワーを浴びてワインを飲みたい……。ブルースは敢えて言わなかったんだろう。軍上層部に席を用意するという事は、議席の枠も当然用意しないといけない。

税負担額を理由にバーラト星系で過半数を押さえているが、地方星



系が経済成長すればその言い訳も通用しなくなる。バーラト星系に割り当てられる議席枠が減る、もしくはは地方星系に新しい議席枠が割り当てられれば、必然的にバーラト系原理派の影響力が薄まる。

「ブルース。私だってそれなりに優秀なのよ。貴方が黙っててもこれぐらい気づくわ。まだ多くはこの未来に気づいていないでしょうけどね。代議士辞めようかしら……」

そんなボヤキを秘書官には聞こえないようにつぶやきながら、私は車を降りて玄関に向かう。邪険にしながらもブルースは私が思っていた以上に母親思いだった。

日常業務に追われて、アクセス権があるにも関わらず、ほとんどの関係者が見る事のなかったある卒論の存在を黙っていたのだから。もし知っていたら、私は代議士をやめていたに違いない。短くても数世代は、この戦争に勝てないなんて、口が裂けても言える立場ではないのだから。

### 第33話 ある老夫婦の涙

宇宙暦731年 帝国暦422年 6月末

惑星シロン オルテンブルク邸

クラウス・フォン・オルテンブルク

シロンの宇宙港から車で1時間前後。平民街を抜け、従士たちがすむ住宅街の先に、爵位を持った亡命者たちが暮らす住宅と言うより邸宅が立ち並んでいる。その中でも一際大きな、館と言うべき物件が数件。その一番東側の物件がオルテンブルク侯爵家の邸宅だった。

庶民からみれば物語に出てくる侯爵家に相応しい館に見えるだろう。実際、屋内も落ち着いた木目調で揃えられ、先祖たちが亡命時に持ち込んだ美術品が、あくまで品を保つ様に配置されている。

ウォーリック商会の会長がこの館を訪れる事があれば、一日中館の主と美術品談議に花が咲いただろう。正面に構えられたエントランスの上部には広めのベランダがある。屋内とを仕切る大きくとられた全開口窓の先で、繰り広げられる美術品談議。ではなく、大人の事情ならぬ貴族の事情による話し合いが行われていた。

「では、フリードリヒから打診のあった名付け親の件だが、そのターナーとやらは十分それに値する男なのだな？」

「オルテンブルク侯、その通りでございます。フリードリヒ様が投資されたウーラント商会の立ち上げは彼が行ったものです。既に収益化もされており、投資先としては非常に優良な物件です。業績にもよりますが数年で元本回収の見込みです。」

それに今回の捕虜となった同胞たちに地方星系の開発に一役買ってもらおう件でも、色々と骨を折ってくれたようです。また、侯が後援されているイーセンブルク校にてマナーを学んでいたことも確認できました。担当したフラウベツカーに確認した所、非常に優秀な生徒であったとの事です」

「左様か。そこまで亡命系に貢献してくれた事と、庶子とは言え直系男子の友人ともなれば、先例としてもそこまで批判は出ないであろう。フリードリヒにも良い返事ができる。喜ばしい事だ」

庶子ではあったが初孫で男子のフリードリヒ。可愛くない訳がない。本当なら手放したくもなかったし、ましてや戦死の可能性がある士官学校に行かせたくはなかった。ただ、文字通り間の悪さが重なり、そうせざるを得なかった。

公式に詫びるような事は、立場がさせなかった。私情で動いて詫びたとしても、私は多少批判される位だろう。だが庶子の養育を頼んだジャスパー家はおそらくシロンを中心とした疑似的貴族制の中で、生きていけなくなったに違いない。

生活費だけは苦労させたくない。そんな気持ちから個人口座のへそくりを振り込んだが、詫びとするのにはあまりにも少額だった。既に家督を譲っており、当主と正妻との間にまだ子はなかった。ここで自分が可愛がればお家騒動になる。帳簿に残る侯爵家の口座から資金を動かす訳にも行かなかった。

「フリードリヒ様は、すでに功績を立てられ、4月から大尉になられたと聞き及びました。紹介いただく投資案件もこれぞというもので、資産をお預かりする私どもも、感謝しております。本来ならハイネセンにお伺いし、お礼を申し上げるべき所、シロンを離れる訳にもいかず心苦しく思っております」

「良いのだ頭取。あやつもそんな事は望んでおるまい。フレデリックとして自由に生きると申しておったそうさ。ただ、良き縁に恵まれたのであろう。冷たい仕打ちをしたとは言え、我が家に亡命系にメリックがある話を紹介してくれる。

あやつこそ当主の器であったが、残念ながら庶子では家を継がせられん。ましてや幼い嫡子がいるとなれば、優秀であるほど危険でしかない。後継ぎのいない頃合いの合う子女がいる家でもあれば良かったが、さすがに侯爵家が動いてはな。強引に取り込むつもりかとも思われかねん。何かと不自由な身分よな」

資産運用の相談相手の頭取は、少し困った表情をしてから、ごまかすようにティーカップを手に取り、お茶を飲んだ。確かに彼にはそうする事しか出来ないだろう。侯爵家当主の後見人を蔑むような発言は出来るはずがない。それに、万が一これが正妻の耳に入れば、それ

こそ気分を損ねて後々どんな災難が降りかかる事になるやら。

「フリードリヒ様の案件は、黒字化の見込みだけでなく、亡命系が投資しやすい状況も整えられています。そういう意味でも、亡命系融和派だけでなく、亡命系原理派の方々にもご紹介しやすいですから、皆様から感謝されております」

「そうだな。これを切っ掛けにバーラト系との融和も多少は進むだろう。それにシロンだけではもう先は見えている。地方星系の開発の件に出資できたことで亡命系の惑星の開発も進むだろう。亡命系が協力する事で国力が高まれば、バーラト原理派も強硬な事は言うまい。そうなれば我々もいちいち身構えずに済む。そうなればさらに融和が進むだろう」

ダゴン星域会戦の帝国の敗戦。それを期に、自分の将来に危険を感じていた層が一気に同盟に流れ込んだ。国力を高めた同盟はコルネリアス1世陛下の大親征も何とか跳ね除けた。だが決して同盟の傷も浅い物ではなく、亡命者が持ち込む資産に高い税金をかける案や、実質的な志願の強制が行われかけた。

使い潰されぬ為の窮余の策として、シロンに固まって団結し、不公平な政策を跳ね除けた。先人たちの苦労も分かるが、結果として亡命系は同盟に溶け込めていない。一同盟市民としては懸念を感じつつも、亡命系原理派の雄であるオルテンブルク侯爵としては、簡単に妥協は出来なかった。

「頭取よ。今は私が動かせる資産だけでも賄える案件ばかりだ。私からも紹介はしているが、オルテンブルク家が正式に投資していない案件を紹介する訳にはいかぬ。今後もフリードリヒは案件を紹介してくれるだろう。その際は、財務に携わるプロの目に適う案件であれば、力になつてもらえまいか？」

今は良いが、あやつの間わる案件にそれなりの金額を投資していると正妻が知れば、それはそれで騒ぐであろうからな。融和を進める意味でも、亡命系はバーラト系と様々な事業に取り組むべきだ。双方が歩み寄るには、継続的な利益が必要であろう。なんとか頼む」

「そのような事はお止めください。お願いされずともそのつもりでこ

ざいます。嗜好品の生産しか投資先がない中で、新しい可能性が生まれているのです。部下たちも張り切っておりますから、むしろ頭を下げるのは当行の方でございます」

頭取が慌てた様子で応じる。それだけでも、フリードリヒの案件が、ひいき目なしでも優良なもののだと改めて感じた。そしてそれを公に誇れない立場を疎ましく思う。この館に代表される貴族的な様式美をかなぐり捨てれば、もう一つか二つは大規模な緑化を行い、大々的に開発する事も出来た。ただ、それを行うという事は信じてついてきてくれた者たちの家業を奪い、世間に放り出すことになる。

幼い頃からオルテンブルク侯爵家を支えてくれた者たちを路頭に迷わす判断は、残念ながら私だけでなく多くの家も出来ないだろう。頭取の暇乞いを受け、ベランダに向かう。私の立場から比較すれば自由に動ける頭取が少し羨ましかった。頭取が乗った乗用車が、表門に向けて走り去って行く。初夏の装いになりつつあるシロンだが、このベランダには良い風が通る。

「この時期はここが一番ですわね。良い風が通りますから」

「おお、クラウディアか……。頭取との話し合いで少し疲れたのかもしれん。しばらくここで休憩しようかと思つてな」

「そうでしたか」

そう言いながらメイドにお茶の用意を命じ、ベランダの一角にしつらえたテーブルに座るクラウディア。こやつにも色々と苦勞を掛けたのかもしれない。情が深い事は良く知っている。もしかしたら私以上に初孫を可愛がりたかつただろうし、当主の戦死の際も、本来なら悲しみを露わにしたかつただろう。

だが、それを堪えてくれた。もしかしたら侯爵夫人と言う立場に私以上に縛られたのが我が妻だったのかもしれない。珍しく人払いを命じてから、彼女は話し始めた。

「フリードリヒの事、悩んでおられるのでしょうか？でも、亡命系に限っていた投資話に、急にバーラト系の案件を含めて御家の資産を割いたら、さすがのあの娘も気づきますわ。そうでなくてもいずれお茶会などで話題になるはずです」

「確かにそうだな。ただ実際に利益は出ておるし、亡命系の将来を広げる意味でも必要な事なのだ。先兵となつて切り開いてくれているフリードリヒの顔を潰すわけにもいくまい……」

「貴方は本当にずるい御方です。いつも立場を意識して抱え込まれてしまう。貴方があの時フリードリヒを可愛がりたいとおっしゃつてくれれば、既に隠居していたのですから、それなりの隠居先を用意して、私達がフリードリヒを育てる選択肢もありました。投資の件もそう。一人でフリードリヒに陰で支援して、他にも支援したいと思つている者がいるとは思わないのでしょうか？」

私が視線を向けると、クラウディアは怒気をはらんだ視線をこちらに向けていた。

「生活費の件も、帳簿に残らない資産なら私の持参金もございしました。言つて下されば私もあの子の力になれた。厳しく接したのもお家の為です。同じ屋敷に住んでいる子がない正妻の目の前で可愛がるような事をすれば、どんな事がおこるか。正妻に嫡子を生んでもらわねばならない以上、ああするしかありませんでした」

表情は変わらないが、手元のハンカチを強く握りしめていた。確かに私ももう少し素直になれれば、違う未来もあったかもしれない。そして、当主である私が本心を隠した以上、その判断は絶対だった。私は自分の決断でこうなつたが、妻は私の決断に巻き込まれ、本心を隠す道しかなかった。

「初孫が同盟の中心地で、少しでも亡命系の立場を高めようとして居るのです。力になりたくない訳がないでしょう？次からは私の持参金も、投資に使つてくださいまし。その位しかもう出来る事は無いのですから」

「クラウディア。お前には苦勞を掛けてしまつたな。本当に濟まなかつた」

傍によつて肩に手を添えると、声をこらえながら涙を流す。見て居るのはつらく、視線を空に向ける。私がこの場を離れてしまえば人払いが終わつてしまう。そうなれば涙を流す訳にもいかないだろう。

空の先にある宇宙、その先にある首都星ハイネセン。そこで頑張つ

てるであろうフリードリヒの事を思う。本当なら大声でお前を褒めたい。我が家の誇りだと社交界で言いたい。こそこそと隠れる様に其方の案件に投資する事くらいしか出来なかった私を笑えと言いたい。

ふと気づいたが、私の瞳からも涙が流れていた。この日から、ほんの少しだけだが、私達夫婦は人払いをしたときは素直に話し合うようになった。そしてフリードリヒから紹介される投資案件の資料を二人で読むのが、夫婦だけの秘密の楽しみになる。

### 第34話 ある捕虜の選択

宇宙暦731年 帝国暦422年 8月末

惑星エコニア 西収容所

デニス・アツカーマン

ひと昔前までは捕虜収容所の存在が強いて言うなら特徴であった惑星エコニア。それ以外はインフラ投資も行われず、荒涼とした大地が広がる自由惑星同盟によくある惑星のひとつだった。

それが、エコニアの顔役になりつつある井上商会と出光商会、そしてウーラント商会在、バーラト融和派の雄であるウォーリック商会に働きかけたことで、第二人造湖の開発事業が動き出してからは、順調に経済成長が進んでいた。

当初は仮設宇宙港から惑星でただ一つの都市、エコニアポリスを挟んで南側に建設された捕虜収容所は、現在では南収容所と改名され、エコニアを中心に東と西にも収容所が新設された。温かい地域住民の対応や、帝国風の食材が容易に入手できるようになり、同盟市民になる事を希望する捕虜も多かった。

とは言え、捕虜のままなら衣食住に困る事もない。第二人造湖の建設から始まる灌漑設備の新設や、その後、現在では第14まで建設された人造湖の建設と灌漑施設の整備。当然増えた農作業への応援。捕虜にもいくらかでも仕事があり、帝国軍の下士官よりはマシな生活が出来ていた。

収容所の新設にあたって、南収容所にいた3万人の捕虜を1万人ずつ移動させ、古株として新しく収容される捕虜の指導役のような役割も与えられる。新しい面々も貴族階級出身は別の惑星に送られた為、理不尽な事もまず起きない。

捕虜の多くを占める徴兵された若年層にとって、帝国で今でも過ごしているであろう家族の事を除けば、それなりに収入もあり、それなりに贅沢もできる。悪くない生活が過ごせていた。悪くはない生活だが、同盟市民になるには何かきつかけがある……。3つある収容所の合計で10万人を超える捕虜の多くはそんな状況だった。



「こりゃ、いよいよ本気で取り込みにかかった感じだな。悪くはない生活だったけど、ここが正念場か……」

「アツカーマン軍曹、どういうことですか？」

新入りの一人が、代表するかのように声をかけてくる。新入りと言ってもフォルセティ会戦で捕虜になったからもうすぐ3年か。古株として信頼されている以上、変に隠す必要もないか……。

「明日、掲示板にも上がるだろうが、古株に事前連絡で明日から募集が始まる案件の情報が回って来たんだ。まあ見てみる」

支給された型遅れのタブレットを渡すと、俺が世話役を務めている8人がタブレットを囲むように集まった。さすがにそんな人数じゃ、一つのタブレットを閲覧できる訳がない。仕方ない。解説してやるか。

「読めば分かるが、輸送艦乗組員の募集が明日から始まる。乗るのは帝国の戦闘艦だ。最も武装撤去はされているだろうがな。んで、カンダルヴァ星系の惑星ウルヴァシーを起点に、水資源を地方星系に運ぶ、そして地方星系から穀物をウルヴァシーに新設される倉庫群へ運ぶことになる。」

注意すべきは特記事項だな、この案件に1年以上従事したら、同盟市民になる際に好きな惑星に移住できる。待遇は同盟軍の新兵並みの給与だが、衣食住の保証付き。まあ、悪くはない条件だな」

「そうしたら、同盟市民になってフェザーン経由で帰国する事も出来るんでしょうか？」

そういう夢は捕虜生活3年ならまだ捨てきれないよなあ。だが、知らない仲じゃないし、この案件に従事するなら、そういう未練はない方が良さそう。

「フェザーンの大商人クラスへの伝手や、爵位持ちの貴族様に顔が利くならともかく、帰国の夢はあきらめた方が良さそう。最前線で捕虜になり、救出されたとかならともかく、俺達は長期間、同盟市民と悪くない関係が続けてきた。帰国の際には尋問も受けるだろう。平民相手にわざわざ情報部が人員を割くとも思えない。担当は社会秩序維持局だろうな」

そこまで言うのと、俺が伝えたいことが理解できたようだ。

「正直に話した所で、危険思想の持主ってことにされるだろうな。そうなれば残してきた家族も危険な事になる。将官クラスは戦死か捕虜かを把握しているだろうが、俺達みたいな平民の下級兵士はまとめて戦死扱いだろう。少額でも戦没者年金が支給されているはずだ。帰国が良い選択とは、残念ながら言えないだろうな」

念のため、最後まで伝えておく。万が一艦船を奪って帰国を図る連中が出てくれば、この事業が中止されかねない。この先も捕虜になる連中は出てくるだろう。そいつらから同盟で新しい人生を始める機会を奪わない為にも、未練がある奴には参加させない方が良いだろう。

「軍曹はどうされるんです？ 応募されるんですか？」

「そうだな。俺もこのゆりかごからそろそろ出ようと思っている。悪くない生活だったが、もともと艦船乗りだったしな。土木関係なら設計図も引けるようになったし、重機の操作にも慣れた。地方星系を回りながら気に入る惑星を見つける。そこでも人造湖や灌漑施設の建設が行われるだろう？ んで、出会いがあれば結婚して同盟市民として生きていく。まあ、悪くない未来だ」

「そうですね。エコニアじゃ既婚率が高すぎて家庭を持つは難しい。でも他の星系ならそうでもないだろうし、そういう可能性もあるのか……」

そもそもエコニアの人口はそこまで多くはなかった。捕虜はすべて男性である以上、男女比は圧倒的に男性寄りだ。そういう意味でも他の星系を回れるのは良い機会だろう。

「それにな。同盟じゃ、帝国では皇帝陛下と貴族たちの悪政が敷かれていると教育してるんだ。徴兵された平民はむしろ戦争に駆り出された被害者って認識らしい。そういう連中が、待ち望んでいたインフラ開発の援軍に来るんだ。大歓迎になるかは分らんが、少なくとも反発される事はないだろう。井上商会もこの案件に関わるから、近々は無理かもしれないが、帝国風の食材も手に入るようになるだろうしな」

そこまで言うのと、連中も自分の将来像がイメージできたようだ。悪く言ってもかなり前向きに検討を始めたって感じだな。井上商会のオーナーにもだいたい世話になった。これ位の恩返しはしておかないとだろう。

それにオーナーの話じゃ、あのオレンジ頭も士官学校を卒業して任官したと聞く。弟の様でもあり子供の様でもあったあいつが、しっかりと人生を歩んでるんだ。俺だけが、いつまでも足踏みしている訳にもいかないだろう。

この案件が掲示板に上がり、募集が始まると捕虜たちの応募が殺到した。おそらく古参の連中が、俺と同じように説明したんだろう。このゆりかごでの生活は悪くなかった。でも足踏みしている事も良く分かっていたんだと思う。

帝国臣民としての人生を捨てて、同盟市民としての人生を始める。踏ん切りをつけるのに3年くらいは必要だろうが、さすがに10年は長すぎる。俺も35歳だ。人生をやり直すとしたら最後の機会だろう。

「曹長、いや、今日から副長ですね。嫁さん探しは階級関係なしでお願いしますよー！」

「馬鹿野郎！お前らは若いんだ。早くいい人を捕まえろ！俺なんかをライバル視してると、他の連中に持ってかれちゃうぞー！」

想定以上の応募によって、鹵獲された帝国戦艦が武装撤去されると同時に、事業が動き出した。古参だった俺と俺が担当していた連中は、比較的早めに輸送艦乗組員になる事が出来た。連中も含め、どこか収容所にいる時はあきらめた雰囲気もあつたが、明るい表情になつていて、背中を押してよかつたと思えた。

初年度だけでも1500隻が動き出したのだからすごいものだと思う。運航人員だけとは言え、2万人近い人員が同盟市民になるべく新しい人生を歩み始めたのだから。急速に開発が進む地方星系では、男手が求められる。

また、想定以上に電力需要も伸び、帝国軍の巡洋艦を地表に降ろし、動力部のみを活用して簡易発電所にする計画も数年後に始まること

になる。そういう意味でも帝国の艦船に知識がある捕虜が、地方星系で求められる存在になった。

捕虜たちが結婚相手として地方星系の女性たちに人気となるのだが、そうなるまでには数年の時が必要になる。ひとり、ふたりと、良い相手が見つかった奴から船を降り、新しい人生に進んで行った。

数年後に俺の番が来て、とある惑星で農場を経営する家庭に、俺は迎え入れられる事になる。お互い連絡を取り合っていた俺の班員は、結婚式や子供が生まれた際には都度都度集まった。

そうして移り住んだ惑星で子育てを終える頃には、今までの経歴が活きて当てにされる事が多かった俺は、地域のまとめ役のような存在になっていた。嫁さんとのんびり余生を過ごそうとしていた頃合いで、割り当てが増えた代議士枠への立候補を求められるのだが、それは当分先の話だ。

### 第35話 役得

宇宙暦731年 帝国暦422年 10月末

統合作戦本部 ジークマイスター分室

ファン・チューリン（大尉）

統合作戦本部の中層に位置する情報部の一区画をわずか3人で使用する特殊な事情を抱える分室に勤務をし始めて一年半が過ぎた。さすがにターナーばかりに室長のお茶の用意をさせる訳にもいれない。ファネツサに頼んで亡命系の資本が経営する紅茶専門店が主催する『紅茶通への第一歩』なる講習会に参加してもらい、ふたりであれやこれやと紅茶談義を続ける事半年、やっとターナーのお墨付きを貰い、室長にお茶を用意できるようになった。

『ファン大尉、君の紅茶は仕事ぶり通りに紅茶も手堅い味がするな』

ニヤリとしながら紅茶の感想を頂いた時は、作戦が成功した時のような不思議な安堵感があった。自分の果たすべき役割は理解している。ただ、どんどん自ら仕事を創り出して室長に提案し、先に進んでいくターナーに置いて行かれたくはなかった。

お茶の用意位は分担する。些細な事だが、私の精神衛生の為にも必要な事だ。室長の感想もターナーのようになまなくやる必要はない。私らしく手堅くやれと励ます意図もあるのだろう。

「ターナー大尉に引つ張られて動きすぎたかな？ 人員の割に手間のかかる仕事を情報部から押し付けられたものだ。そしてターナー大尉は君に押し付けて自分がやりたい仕事に出かけたか。次は施設部と防衛部あたりに貸しを作らないといけないかな？ 君も忙しいだろうが、頼むぞ。特別手当は出しておこう」

「お気遣いありがとうございます。ただ、私はお気遣いただかなくても任務を果たすつもりです」

「そんな事は分かっている。だから君には正式に軍からの給与に合わせる処理しているんだ。大尉もいずれ人を使う側になるだろう。前線任務なら問題ない。ただこの分室では話が違う。目の前を何百万もの予算が動くのだ。それなりの報酬を与えておくのが当然なのだ

よ。それにターナー大尉は経営もしている。自社に利益が落ちる様にしてはいるはずだ。お子さんも生まれるのだし合法的に処理しておくから気持ちよく受け取ってくれ」

情報部に所属する他の分室がどう運営されているのかは不明だが、うちの分室では明らかに機密費から割り振られた予算以上の金額が動く月がある。分室で独自に用意した構成員たちが営む店舗だけではなく、おそらくは株式投資、もしくは先物取引をしているのだと推察していた。

帝国からもたらされる情報の中には、穀物の生育状況なども含まれる。それらがあれば穀物の先物取引で儲け放題だろう。ただ、機密費が有限である以上、活動の為の資金を自前で調達する事は理解が出来る。これがジークマイスター分室の流儀なのだとは私は理解していた。

それでも大尉の年俸が約8万デイナーなのに、特別手当が既に5万デイナー。さすがに多すぎるのではないかと気にはなっている。「了解しました。ではありがたく頂戴します。国防委員会からの特命に関してはいつまで担当することになるでしょうか？ターナー大尉の動き次第では、私はそちらの支援に回る必要性も出てくると思います。すが……。」

「この案件は戦争が続く限りチエックが必要になる案件だ。長くても数カ月、その後はウォーリック商会に調査費を支払う形で手配すれば良いだろう。あちらもこの事業が軌道に乗らなければ困るのだ。どうせする作業に料金が生じるならむしろ歓迎するだろう。国防委員会というより、あの分析を出したのが我々だから、ちゃんと予算を取ったぞと言う打診の意味も含んでいるのだ。優先すべきはターナー大尉の支援だろう」

「承知しました。では、そのように進めます」

急遽、国防委員会からジークマイスター分室へ指名で与えられた任務は、動き出した捕虜たちに武装撤去した帝国の戦艦を輸送艦代わりとして運行させる事業の立ち上がりの確認だった。

收容所を主管する同盟軍施設部だけでなく、人的資源委員会・経済開発委員会・天然資源委員会からも情報を集める必要があった。事業

の進展には地域社会開発委員会と財務委員会も注目しているし、国防委員会としても失敗する訳にはいかないと言った所か？

「二度手間になるだろうから、エルファシル星系のデータも一緒に集めてしまおうと良い。どうせ必要になるだろうから」

そう言いながらティーカップを手に取り、紅茶を飲む室長。話は終わったようだ。自分のデスクに戻り、作業を進める。縦割り行政の弊害で、各委員会は縄張り意識が強く、連携して動くのが不得手な状況になっている。

予算の奪い合いをする相手だから気持ちは分かるが、似たようなデータを別個で集めていたり、統合すれば活きるデータを各々で抱え込んでいたりもした。帝国の情報も入ってくるこの分室が、ある意味、人類社会の概要を一番把握しているだろう。うまく活かして、自前でも活動費を稼ぐというのは、有効的な活用方法なのかもしれないかった。

ターナーがエルファシルに向かったのは、最低でも中規模、出来れば大規模な艦隊駐屯地を作る事前調査の為だ。前線との距離と、補給を含めた生産拠点に必要な労働力・軍人たちが羽を休める歓楽街。それらを踏まえると、エルファシルが唯一の候補だった。

『そうだな。私が帝国軍の司令長官なら、贅肉を早めにそぎ落としたいだろうな』

正規艦隊を敢えて出撃させずに済ませた帝国軍の意図は正直掴みかねていた。使えない『名ばかり少将』達を処分するために独立艦隊として前線に送り込んでいる。そういう可能性も考えられていたが、本当にあり得るのか？という疑問は残った。

その疑問が晴れたのは、室長の一言だった。今の内に前線を押し上げ、イゼルローン回廊出口付近を押しさえる案もあった。ただ、グエン・キム・ホアの唱えた距離の防壁の理論に反する事になる。まず独立艦隊を遊撃戦で撃破し、帝国の正規艦隊をおびき出して撃破。そのうえでイゼルローン回廊出口付近まで押し上げるとというのが、ターナーを含めた同期達で考えたプランだ。室長にもそれはお伝えしている。

エルファシルに大規模な基地が完成すれば、ハイネセンから派遣す

るのに比して半分の距離になる。イゼルローン回廊のこちら側にも帝国の地上部隊はまだ駐屯している。補給艦隊には独立艦隊が護衛にしているので、有利な状況を創り出しつつ戦力を削ぎ落しにかかるのが第二段階だ。

「エルファシルか。確かに唯一の候補だ。ただ帝国軍の来襲をフェザーンが通報してくるのが通例になつてるとは言え、なぜ正規艦隊をハイネセンに集中させてきたのか？前線と補給地の距離が近い方が有利なのは、戦略の基本だ。誰かしら思いつきそうなものが……」

この時、ふと浮かんだ疑問は、各部署から申請した資料が揃った事でこちらに意識が向き消え去ってしまった。この時浮かんだ疑問を思い返して口惜しい思いをするのは、まだ先の事だった。

宇宙暦731年 帝国暦422年 11月末

惑星エルファシル ウーラント商会支社

ヤン・出光・シーハン

「母さん、カーク兄ちゃんはまだかな……」

「そうねえ。もう少しかかるんじゃないかしら？」

エルファシルの歓楽街から2つ通りを挟んだオフィス街。その一角にウーラント商会は支社を構えている。歓楽街にはレストランを構えると同時に、歓楽街を中心に帝国風の食品と地ビールを卸す事業は、意外なほど順調だった。

郊外に大きな目の農場も構え、醸造もそこで行っている。エルファシルで事業を開始した時から、ウーラント商会は子育て支援が特徴的な待遇で人員を確保してきた。このビルの最上階は保育園のように改修され、保育士資格をもつ職員が配属されている。農場の方だと完全に保育園のような一角がある。

父子家庭や母子家庭が多かったエルファシルで、新興企業なのに人気企業になりつつあるのは、手厚いとも言える子育て支援の賜物だろう。実際、タイロンも保育園にお世話になり、初等学校に通いだしただから、下校後はこのオフィスで私が退勤するまで面倒を見てもらっ



ていた。

「どうせなら母さんも来ればよいのに。兄ちゃんならランチ一人分くらい文句言わないと思うよ?」

「そうねえ。でもお父さんが留守の時に一緒に出掛けるのは、あんまり良くない事なの。タイロンもお父さんが内緒で美味しいものを食べてたら良い気分はしないでしょ?」

「うーん、難しくてよくわかんないかなあ」

ウーラント商会の社長でもあるターナー君が、任務でエルファシルに来て一か月近く。午前中はエルファシルの駐屯基地で施設部門の関係者と打ち合わせをし、午後から軍服をスーツに着替え、調査名目で取引のある飲食店や食品店を回る。

『僕も一緒に行きたい!』そんなタイロンの一言から、大体14時にこのオフィスに顔を出し、タイロンがいると一緒に出掛ける。そして夕食前頃にタイロンを送り届けてくれる。そんな生活をタイロンは楽しんでいった。

「それで、ターナーお兄ちゃんに迷惑はかけてない?」

「うん。ちゃんと良い子にしてるよ。それに全部は分からないけど、色々説明してくれるんだ。契約用の印鑑を、代わりに押させても貰ったよ。後ね、お父さんに買ってもらった資本主義ゲーム?あれみたいで楽しい」

「そう……。それなら良いのだけど……」

おそらくエルファシルの駐屯基地が大規模に増設されるんだろうか? 商會名義で農場付近に大規模な農耕地を追加購入しているし、歓楽街で手ごろな物件も複数押さえている。出光商會のオーナーでもある夫と相談して、住宅地の造成事業も計画している。利益が出る話なんだろうけど、タイロンはまだ初等学校に通いだしたばかりだ。生々しいビジネスの場に触れるには早すぎる気もしていた。

「お! タイロン、準備は良さそうだな!」

「あつ、ターナー兄ちゃん。遅いよ」

「すまんすまん。ヤンさん。またタイロンを借りていきますね。こいつはうまそうに料理を食べるし、商談の場でも物怖じしない。一緒に

いてくれると会話が弾むので助かります」

そう言いながら、タイロンの頭をなでるターナー君。ダークブルーのスーツに、髪と同じオレンジのネクタイ。靴も茶系で決めた彼は、軍人と言うより、大規模資本の御曹司のように見える。タイロンの実父であるトーマスとも、養父である夫とも親交があり、タイロンを可愛がってくれる。

「ターナー君、迷惑じゃないのかしら？タイロンはとても喜んでいるんだけど……」

「お気になさらず。社員には聞かせられない話もあるので、本当は一人で回るはずでした。ただ、それじゃ寂しいですね。タイロンがいてくれれば一個艦隊の援軍を得たようなものですから。夕食前には、送り届けますので」

そう言いながらタイロンを抱き上げ、肩車をしながらオフィスを出て行く。上機嫌のタイロンの様子に、親の心、子知らずだと思った。私は看護婦だったし、独立商人の知り合いなんていなかった。

結婚した夫によると、成功した独立商人は幼い子弟を契約の場に同席させてビジネスの場の空気に慣れさせるという慣習があるらしい。契約の場に同席するほど、成功するとも言われていて、ターナー君が契約の場にタイロンを連れ出すことを、むしろ歓迎していた。

『タイロンには器量があるからな。ターナーも目をかけたらいんだろう』

嬉し気に夫が発した言葉が頭に浮かんだ。確かに夫は独立商人で、私も看護師から支社の役員の人になっている。タイロンはおそらくビジネス界に将来進むことになるのだから、良い事なのだとも思う。でも、私という時より楽しそうなタイロンの表情を見ると、それはそれで複雑な気持ちになる。

「あの人が帰ってきたら、3人でダイナーに出かけよう……」

そんな思いが思わず口からこぼれた。気持ちを切り替える意味で、常備されているシロン産の紅茶で喉を潤す。『扱うからには味を知っておくべき』というターナー君の方針のもと、常飲する紅茶はシロン産だし、生産している食材も社員価格で買える。タイロンが幼い頃か

ら食している物は、美味ではあるが、本来は高級品とされるものが多かった。

「タイロン、頑張って甲斐性を身に着けないと、生活レベルが下がるわよ……」

そこで気持ちを切り替えて、私も午後の業務を始める。事業を拡大するならやる事は多い。確定時点で指示が下りてくるだろうけど、事前に準備しておくに越したことはない。役員の一員である私の決済を待つ書類は、そうでなくても多いのだから。

### 第36話 叱責される者たち

宇宙暦732年 帝国暦423年 2月末

フェザーン自治領主府 補佐官室

ヴァレンティ補佐官

「こんな重要な情報がどうして今まで上がってこなかった？補佐官、君は給料泥棒なのかね？」

「カルス長老、申し訳ありません。こちらも寝耳に水でした。失礼ながら、長老も個人的な友誼をお持ちでしょう？同盟の方々からお声掛りはなかったのですか？」

「そういう話をしていのではない。私は君の仕事の不備を追及しているんだ。入札で落ちる事があるのは仕方がない。ただ、入札その物に参加できなかった。こんなことは久しぶりだ。顛末を確認しない訳にはいかないだろう」

宇宙の交易の中心地フェザーン。その都心に存在する自治領主府は、フェザーンの官僚組織の中ではエリートコースだ。30手前で補佐官職の一枚に滑り込んだ俺は、官僚を一つ下に見る独立商人たちにも一目も二目も置かれる存在だった。そんな俺が、外線をかけて来た還暦近い爺さまに怒鳴られているのはそれなりの事情がある。

「今回ばかりは同盟が上手だったという事でしょう。それに彼らも馬鹿じゃない。彼らに帝国の情報を漏らしているように、帝国にも彼らの情報を流していると薄々は気が付いているはずだ。軍としても、この案件にはフェザーンを絡めたくなかったのではないでしょうか？」

「憶測かね？出来る限り詳細な調査をしてもらいたい。今後も軍関連の事業から外されるとしたら、設備投資も考え直す必要がある。少ない予算を割いているんだ。元は取らせてもらいたい。早急にな！」

そう言い放って、爺様は一方的に通話を切った。親しき仲にも礼儀あり、別に俺はあんたの使用人じゃないんだがね。まあ、彼が怒鳴りたくなる気持ちも判らなくはない。新年度が近づくとこの時期は、公共

投資の事業案件もかなりの数動く。そのうち、数年がかりの惑星エルファシルの駐屯地の増設案に、フェザーン系の建設会社は入札すら許されなかった。

建設予定地だけじゃなく、需要が見込まれる住宅地、歓楽街の売り物件も軒並み押さえられていた。強いて言うならエルファシル地場の建設会社株を購入する事は出来た。ただ、半年前からじりじりと値上がりしていた為、残念ながら動いても儲けは見込めない状況だった。

「あちらさんは、帝国の動きを正確に掴んでいるんだらうか？フェザーンが漏らしてきたのは正規艦隊の出征に関する情報だけだ。帝国軍が正規艦隊を動かさず、独立艦隊を前線に送る事で贅肉を削ぎ落そうとしている意図を掴んでいけば、フェザーンからの情報はしばらく価値がない。となれば同盟内をフェザーン商船がうろろして情報が出れる方を防ぎたい。それもあつてのあの倉庫街か……」

『穀物だけなら良い。ただ、あそこが同盟の輸出品の集積地になると、フェザーン商船が同盟領内の奥地をうろつくのは違和感が生まれるな』

前回の補佐官会議で、自治領主閣下が漏らした一言を思い出した。同盟は帝国軍の捕虜を使って地方星系から穀物をウルヴァシーに運び、ウルヴァシーから水資源を運び出す事業を開始した。

当初は穀物だけだったが、いつの間にかウルヴァシーの倉庫街に同盟の輸出品目が集まるようになった。独立商人達からしても、ウルヴァシーですべてが揃う以上、それ以外の星系に行く理由がなくなつた。結果として同盟領内の情報収集に弊害が生まれている。エルファシルの件もその弊害の一例でもあつた。

「地方星系の経済も上向いているが、開発事業は捕虜を活用する形で進んでいる。フェザーンが入り込む余地はない。さすがに人件費で勝負にならないだろう。何とか捕虜たちに問題を起こさせる事は出来ないか？」

考えこむ時の癖で、万年筆でメモ用紙をつつきながら思考を進める。使用されているのが、戦闘艦である以上、破壊工作をするとなる

と大掛かりになる。人員自体に問題を起こさせるとすると、買収か麻薬漬けにする位しか策がない。時間もかかるし、集団で動く捕虜たちに接触するとなると返って目立つ。嚴重ではないだろうが、監視はしているはずだ。

「倉庫街を潰すか？ただ、現物がなければ取引は出来ない。一年交易が出来ないリスクを背負ってまで動くべきだろうか？」

本来フェザーンが採るべき策は、フェザーンの資本で地方星系の開発を進め、輸出品目を生産段階から押さえってしまうことだった。若しくは、地方星系の開発費をフェザーンからの借款で賄わせる。そうすれば同盟政府に圧力をかける事も出来た。

現状は少ない予算で効率よく開発を進め、増産された穀物は、同時に動き出した酪農・醸造業に吸い取られている。穀物の価格自体はむしろ上昇傾向だった。帝国も臣民を飢えさせる訳にはいかない以上、買わないという判断はないが、ウルヴァシーまでの輸送費が上乘せされた事もあり、交易による収益は減少しつつある。

「あのガマガエルに動いてもらうか？ただ、向こうから売り込んで来ないという事は奴の手に余るってことだろう。それに事業予算が抑えられているという事は、財務委員会の影響力も当然少ないはずだ」

ガマガエルのような風貌の財務委員長の好物は賄賂だけだ。如何に経済成長をさせるか？よりも、予算配分に介入して、自分の懐にかすめ取る事に全力を挙げているあれに比べれば、さっきの老人は収益を上げる事で税金を納めてくれる分、まだマシだった。

「金融機関を出店させて景気動向から掴みにかかるか……。気の長い話になるが……」

金融機関なら、地方星系の経済成長も出店の理由になるし、事業計画に触れる機会も出てくる。地味な手法だが、それだけに効果も見込めた。

「後は頭取連中がどう判断するかだな。ハイネセンやシロンならともかく、一次産業主体の惑星に支店を出してくれるだろうか？」

夜も更けて今から動くことは出来ない。明日、打診から始める事にして今日の残業はこの辺で切り上げよう。疲れていた俺は仕事を切

り上げたが、独立商人の本場であるフェザンでは、投資案件が星々の数存在した。農場の設備投資案件の為にド田舎に出店する必要を頭取たちは感じておらず、俺は頭を悩ませる事になる。

宇宙暦732年 帝国暦423年 4月末

地球教団本部

ザビエル助祭

「トールレス司祭、同盟での布教活動が計画通りに進まぬ事、誠に申し訳ございません」

「総大主教殿下も帝国で成果を上げた其方を見込んでの事であったのであろうが致し方あるまい」

帝国で嫡男が戦死した貴族を中心に布教活動を行った私は、複数の夫人を内密に入信させる事に成功し、その成果を持って修道士から助祭に抜擢して頂いた。

ただ、満を持して向かった同盟領内では、残念ながら芳しい成果を上げる事が出来なかった。与えられた予算が枯渇しつつあった事もあり、苦渋の判断で地球への帰還を決定したのが一か月前。旅の疲れもあったが、そのまま司祭にお詫びに上がった次第だ。

「総大主教殿下にお詫びに上がる際は、私も同席しよう。それで同盟はどんな状況であった？」

「はい。彼らは民主共和制を採っておりますが、投票に宗教の意向が含まれることを嫌っております。政教分離なる考えを取り、帝国では権力者を動かせば減税措置も受けられますが、それも難しい状況です」

「うむ」

地球で行われた13日戦争の際、滅亡寸前の状況まで追いこまれた地球。その後、人類社会は復興し宇宙に進出するまでになったが、世紀末の様相を呈しながらも神の降臨は起きなかった。その際に人類から宗教への希望は失われ、銀河に広がった人類に、信心というものはあまりない。だからこそ人類発祥の地、地球への信心も無いのだろう。

「それに、経済成長が地方星域でも進んでおり、将来に不安をあまり感じていないようです。戦死者の遺族へも布教を試みましたが、遺族同士の繋がりも深く、帝国のように救いを求める者も少ない状況でございます」

帝国なら貴族層は悲しみを表に出すことはむしろはしたない事とされるし、平民たちは遺族年金も少なく、生活に困窮すれば入信の可能性があった。同盟でも似たような状況だろうと見込んでいたが、なくとも経済成長は進んでおり、悲しみが無い訳ではないだろうが、それを乗り越えている者が多かった。

「であるならば、フェザーンに要請して、同盟でも宗教を保護する法案を作らせる。また、経済成長を止める為にも、戦争にもっと注力させる必要があるか……」

「はい。後は、選挙資金の提供を行い、我らの意思を形にしてくれる政治家を増やす事も必要かと。選挙に落ちれば、彼らは只人となりません。現職の者より候補者の頃から支援できれば、恩に着るか」と

民主制の肝は投票だ。信者が増えれば政治家たちも地球教団の意向を無視する事は出来ない。そして当選するには選挙資金が必要だ。不信心者に資金をくれてやるのは惜しいが、同盟領内での布教が進めば、回収する事もたやすいだろう。

「助祭の意見は良く分かった。総大主教殿下もお忙しいであろうから、まずは報告書としてまとめておくようにな。お詫びに上がるには間もあろう。ゆっくり骨休めをするようにな」

「寛容なお言葉、感謝いたします」

深々と頭を下げて、司祭の部屋を後にする。不信心者たちに囲まれていた影響か、地下に作られたこの神殿の雰囲気にも今まで以上に安心感を感じていた。不首尾には終わったが、この試練は私の信仰をより高みに運んでくれたようだ。

主に帝国で活動してきた私は、政治資金規正法も贈収賄や便宜供与に関する刑法の存在も知らなかった。私の出した打ち手が同盟では違法行為になる事を知るのは、もう少し先の事になる。



### 第37話 年貢の納め時

宇宙暦732年 帝国暦423年 6月末

惑星ハイネセン レストラン：メトロポリタン

カーク・ターナー（大尉）

「それでは、ブルースとアデレードの門出を祝して。乾杯！」

「乾杯!!」

ヴィットリオの乾杯の音頭に、会場の面々が続ぎ、グラスが触れ合う音が響き渡る。身内の慶事はそれだけで嬉しいものだが、とうとうブルースが年貢を納めるともなると自称悪友連中に取っては、笑いを含んだものになる。

ジョンの所も子供が生まれ、恋愛体質のウォリス以外、文字通り妻子持ちとなったブルースの悪友達。結婚式はもちろん、出産祝いにも同席していたアデレードの突き上げは、もはや活火山もかくやと言える勢いだっただろう。

主賓席に座るアデレード嬢が満面の笑みなのに比べ、ブルースの笑みはどこか作り笑いだ。まあ、士官学校を卒業して2年。ブルースは良く守ったともいえるし、アデレードは良く攻めたとも言えるだろう。

「フレデリック、良い挨拶だったぞ」

「ああ、あんまり長いのは好みじゃないからな。簡潔にまとめてみた。カークの友人挨拶も短めだったしな。主役じゃないんだ。こういうのは短い方が良いだろう？」

「そうだな。俺の方はあのジョークを言うんじゃないかと冷や冷やしたが……」

「バチエラーじゃないんだ。そんなこと言えるか」

苦笑するフレデリックに引つ張られるように、同じ卓に座る男性陣が笑い、パートナーである妻達が夫に感心しないかのような視線を向ける。

まあ、バチエラーの内容は、参加者だけの秘密にするのがマナーだからな。クリステインは流石に呼ばれていなかったが、ご婦人方の何

人かアデレードのバチエロレッテに参加したはずだから追及はないだろう。

流石にバチエラーとは言え、俺達も同盟軍の士官だ。羽目を外し過ぎる訳にもいかないから、礼儀作法無視の結婚式の予行演習を行った。俺は本番と同じように友人代表挨拶を行ったが、アデレードの攻勢にタジタジなブルースを笑い話にしたし、フレデリックは『スカートとスピーチは短い方が良いと言いますので』と乾杯の挨拶を始めた。

極めつけはアデレードの代役として歓楽街にある有名なニューハーフ店のママを招待した事だろう。多芸なウォリスは、人前式を神父になり切って取り仕切り、あの手堅いファンが、新婦の付き添い役を担当した。前世でバチエラーを経験した覚えはないが、人生でも屈指の笑えるひと時だっただろう。

ママも、結婚式を挙げてみたかったらしく、ノリノリだった。新郎役だけが慥然とする一幕もあったが、妻子持ちの先達にとってはそれも笑えるポイントだった。

「貴方？さすがメトロポリタンですね。お味も良いですし、食器もグラスもカトラリーもかなりの物です。うちも導入を検討すべきかしら？」

「そうだなあ。帝国亭はむしろ今のままで良いと思うぞ？内装も含めた雰囲気も違った方が、わざわざ足を運ぶ意味も出るだろ？うん、確かにうまいな」

クリステインはシャンパンで喉を潤しながらアミューズと前菜を食べている。ウーラント商会の経営陣のひとりとして、学べる所は学ぼうとしている様だが、メトロポリタンと帝国亭は雰囲気の違いすぎるからなあ。どっちにする？という選択肢に同時に上がる事はないだろう。

「確かにそうですわね。うちに期待されるのは帝国風の雰囲気ですから……」

納得したようで、うなずきながら視線をこちらに向けてくる。

「貴方のスーツ姿は久しぶりであるの頃を思い出しますが、皆さんの

スーツ姿も素敵ですね」

「そうか？まあ、折角ご婦人方が着飾るんだ。男性陣も第二種礼装じゃ詰まらんと思ってたな。それに軍服には毎日囲まれてるんだ。こんな日くらい、別の恰好をしないと」

「ええ、とても良いお話でした。アルフレッドのスーツ姿なんて、もう何年振りかしら」

嬉しそうに声をかけて来たのは、ローザス夫人となったカトリナだ。クリステインの親友でもあるし、帝国亭にも参考になる意見をくれた。アルフレッドが普段ブルースの世話役をしている事を含め、俺にとつて数少ない頭の上がない女性の一人だ。そう言えばフラウベツカーはお元気だろうか……。

「カトリナさんのおっしやる通りです。うちの人も軍服とパジャマ位しか着ませんもの。ターナーさん。お勧めくださってありがとうございます」

嬉し気に応じたのは、ファン夫人のファネツサだ。あのダンスパーティーがきつかけで結婚するとは思わなかったが、人間関係に不器用な所があるファンを支えてくれてる。突っ走りがちな俺を、手堅いファンが補ってくれている事を踏まえると、こちらも頭が上がらない。ん？意外と頭が上がらない女性が多いな……。

「普段は一緒に買い物に行く機会も少ないでしょうしね。お互いの服を選ぶというのも良いかと。次はウォリスの番かな？」

「残念だなカーク。俺はもうしばらく恋愛体質を続けさせてもらおうぞ。恋人はいるが、パートナーとして連れてこなかったのも、年貢を納めるつもりが無いからだ。向こうもそう言う気持ちが無いのに披露宴に同席させるのもな。変に火がついても、それはそれで困る……。」

語尾がどんどん弱くなったのは、淑女たちの冷たい視線に気づいたからだろうか？浮名を流すウォリスでも、手に負えない女性がいるよ。うだ。その一人がクリステインと言うのは、どこか悩ましい部分があるが……。

「それにしても……。」

そう言いながら多芸なウオリスの趣味のひとつであるカメラの画角を見るような素振を始めた。

「俺が言うのも何だが、ここだけ切り取るとマフィア映画の一幕だな。ビシツと決めたスーツに身を包んだ漢達、傍に控える見目麗しい淑女。結構絵になってるな」

満更でもないのか、淑女たちの表情は嬉し気だ。クリステインも澄ました顔をしているが、口元が少し緩んでいる。まあ、帝国軍と団結して闘ってる辺りは、マフィア映画とも共通するかもしれないな。家族ぐるみの付き合いもしているし、マフィアと言えなくもない。

そんな話をしてしている間にも披露宴は進んでいく。こういう機会でもなければ全員がそろそろ事も難しい。なんだかんだと楽しい時間はあつという間に過ぎて行つた。この時の話が淑女たちから漏れて、俺達の事を『730年マフィア』と呼ぶ連中が出てくるのだが、大々的にそれが広まるにはもう少し時間を必要とした。

宇宙暦732年 帝国暦423年 6月末

惑星ハイネセン バー：レガリス

ウオリス・ウオーリック（大尉）

「予想外に盛り上がったな。まあお疲れさん」

「ああ。そうだな」

シングルモルトのロックを手に取り、軽くグラスを交わしてお互いに軽く傾ける。ブルースの結婚式の2次会が終わった後、カークに声をかけられて裏路地の片隅にあるこのバーに場所を移した。

奥方を先に返したようだが、俺と三次会となると妙な勘繰りが心配だ。こいつの嫁のクリステインは淑女然とはしているが、本来はかなり嫉妬深い。まあ、こいつなら何とでもするか。

「それで、内密の話か？素人ならともかく、ここってそういう場所だろうか？」

「ああ、情報部が資金の出元の店だな。遮音磁場がそれぞれの個室に用意されている。念のためだが、今後は使う事もあるだろう。オーナーへの顔つなぎもかねて連れて来た」

そう言いながら、防音磁場を作動させ、グラスを回すカーク。披露宴の続きじゃないがスーツを着こなした男性が2人。場末のバーで内緒話か。マフィア映画かスパイ映画か？観る者が見れば、創作意欲を刺激されそうな場面だな。

「来月からウオリス、ブルース、そしてアルフレッドはジークマイスター分室に異動するだろ？その背景を先に伝えておきたくてな。ブルースはこれから新婚初夜だし、アルフレッドは隠し事が苦手だ。それもあつてウオリスに同席を願った訳だ」

「それで？俺とブルースが指名されたって事は政治がらみか？フレデリックが外れてるから、同盟政府の話だろ？」

「ああ。エルファシルの件は話したろ？敢えてフェザーンの連中抜きで事を進めた。奴らは帝国に正規艦隊の出撃情報を流してる。こつちも貰ってるから政治家達はそこまで危険視していないがな」

フェザーンが同盟の正規艦隊の出撃情報を流しているのは、前回のカプチェランカ誘因作戦に始まる一連の流れでほぼ明らかになっている。帝国の正規艦隊は贅肉を削ぎ落とし終えるまで出てくる事はない。

それを踏まえると、フェザーンからの情報の旨味は薄まった。前線では今後独立艦隊同士の遭遇戦が主になる。補給の軸になるエルファシルにフェザーンの浸透を許せば、不測の損害を受ける事になりかねない。こいつの判断はむしろ正しいだろう。

「まあ、持ちつ持たれつと言えば聞こえは良いが、同盟の損害の事を思えば良い気持ちにはなれないな」

「当然だが、エルファシルの防諜の必要性は高まっている。んで、事前にエルファシルの物件を方々で押さえた。それこそ諜報員が潜伏するにはちよūdい物件は数える位しかないようにな。俺はそつちを調べることになる」

そこで、グラスを取りシングルモルトを口に含むカーク。俺も習うようにグラスをとり口に含んだ。

「そしてもう一つ気になる動きがあつた。財務委員長の取り巻き連中にフェザーン系の企業から例年以上に献金がされ、エルファシルの案

件にフェザン系も噛ませろと言う圧力と、宗教法人への税制優遇法案の提出が行なわれた。同盟に大きな宗教法人はない。つまりこの2つは、フェザン系のリアクションなわけだ」

「それを俺達で担当する訳か。現職の政治家が絡むとなればこちらも代議員を動かす必要がある。俺のバーラト融和派への人脈とブルースのバーラト原理派への人脈が必要になるか……」

「話が早いな。今の同盟は地方星系の経済成長が始まっているがフェザンはそれに絡んでいない。そこにエルファシルの基地の案件から外されたともなるとな。裏は取れてないが、同盟の地方星系にフェザン系の金融機関が出店を検討したという話もある。奴ら、必死かもしれない」

「交易の拠点はウルヴァシーにある。フェザンはそこから輸出だけさせておけば良い。それでも十分利益が出るはずだ。それ以上のさばらせる必要はないか……」

「ああ、同盟領内もなるべくうるちよろさせない方が良いだろうな。漏れているのが正規艦隊の出撃情報だけとは限らない。そんな事も考えない程、政治家達と癒着してるのかもな。大方宗教法人の件も、手に品を代えて諜報組織でも入り込ませるつもりだろう」

「そこまで見えていれば、裏どりをして然るべき所にそれを提示すればよいか？誰がつながっているか分からんし、法秩序委員会の協力も必要だろうか」

「ああ。その辺はやりすぎないようにお前が調整してくれ。その辺のバランス感覚は信頼している」

任務の話はそこまでだった。グラスを空にすると1000ダイナール紙幣をその下に置き、俺の肩を叩くとカークは席を立って店を出て行った。今日は顔見せも兼ねている。俺が店を後にしたのは、もう二杯ゆつくり酒を楽しんでから。既に夜は十分更けていたがむしろ夜風が心地よかった。

### 第38話 贖罪

宇宙暦732年 帝国暦423年 8月末

惑星エルファシル 某所

カーク・ターナー（大尉）

「諸経費はこれで賄ってくれ。もし不足するようならいつもの方法で」

「助かるぜ旦那。他からの仕事はどうにもしみつたれた上役が多いからな」

「そう言うな。連中は連中で予算をやりくりしてるんだらうよ。んじゃ、また会うことがあれば」

握手を交わして名も知らない壮年の男性を裏通りの4階にある物件に残して、俺は次の場所へ向かう。人の出入りが多く、かつ近所付き合いが少ないエリアは歓楽街の裏通り位しかない。

即入居できる物件を監視できる物件を押さえておいて、そこに職員を配置すれば網の完成だ。ジークマイスター分室の簿外資産から資金を用意し、工作員に現金で渡しておく。小額紙幣で50万。まあ、経費と報酬含みでも悪くない金額だ。

情報部の制服組はこういうフィールドワーカー達に敬意を払う事を忘れがちだ。有限である以上、予算も抑える。公務員としては正しいのだが、非正規で命のやり取りをするし、場合によっては良い仕事をする為に資金もかかる。うちの分室では敬意も勿論、報酬も多めに渡すようにしている。

プロの仕事に敬意と報酬を惜しまなければ、自然と経験豊かな工作員がうちの仕事を受けてくれるようになる。まあ、他の情報部連中が公務員流で諜報活動をしているとしたら、うちの室長は帝国貴族流で諜報活動をしている訳だ。

前世のインサイダー取引すれすれの事もしていそうだが、その収益は最終的には国益の為に使われる。少なくとも俺は取り締まる立場ではないし、気にする必要もないだろう。中将待遇である室長を窘める立場にあるのは、所属も踏まえると統合作戦本部長とか次長クラ

ス。

同盟軍でも最高幹部クラスなわけだが、諜報活動をしているうちの分室には秘匿性も求められる。最高幹部クラスが動いた時点で秘匿性を失いかねない訳だから、気づいても見て見ぬふりをするのが落ちだな。

階段を降りてウーラント商会名義の社用車に乗り込み、次の場所へ向かう。今の俺は軍服姿ではなくスーツ姿。物件のメンテナンス名目で諜報用の器材を修理機材に偽装して持ち込ませ、進捗確認名目で物件を回るわけだ。それなりの商会の社長がやる仕事じゃない？大丈夫さ、取引先なら例え小さな定食屋さんでも足を運ぶ義理堅い存在として社員たちにも認識されている。

オフィスに行けばタイロンがついてきたがるかもしれないから、今回は午前は軍服を着て駐屯基地へ。増設事業の進捗を確認したり、建設現場に足を運んでから、ホテルで着替えて、本来の任務にあたって。余裕があればタイロンとも飯を食べたい所だ。

「さて、このネタをうまく使ってくれば良いんだが……」

こっちでは諜報員の疑いのある連中を押さえる事まではしない。顔写真、入居時に記載した身元、シャツトルでのチェックイン名義を押しさえておく。家賃の引き落とし口座の入金元も勿論押さえる。かなりの確率でハイネセンの政治家連中に非正規ルートで献金している件とどこかでつながるはずだ。フェザンにも強気で交渉できるだろう。どこかの星系の利権を取り上げるなり、制裁金を課しても良い。

仮に突っぱねるようならウルヴァシーでの穀物引き渡し価格を上げる。ブラフだと思うならウルヴァシーに醸造施設や酪農施設新設する事業を進める素振をすればよい。

穀物価格がかなり上がるだろうが、交易の面では重量当たりの単価は上がる。独立商人達にとっても穀物以外の交易品が生まれるのだから嬉しい事だろう。帝国に穀物を融通する事で何かしら強気の交渉をしているフェザンにとっては不都合なことが多々あるかもしれないが……。



他に対抗手段があるとしたら、株の空売り位か？ただ、そうしてくればむしろ僥倖だろう。同盟のGDPはフェザーンの3倍以上、もう少して4倍に届く。中央銀行に国債を引き受けさせて無限介入を行えばよい。さぞかし儲かる事だろう。

地方星系を中心に同盟の経済成長は進んでいく。その資金ははずれ株式市場に流れていくだろう。数年後から株式を放出すれば、利益も見込めるし、フェザーンの影響力を弱める事も出来る。

フェザーン方面の防衛体制が確立できていない以上、どこかで折り合いをつける必要があるが、交易がなくなればフェザーンの存在意義は無くなる。うーん。念のため簡単にレポートにまとめて提出しておくか……。フェザーンに取り込まれている連中の取り巻きもなんだかねだと騒ぐだろうしな。

そうこうしている内に次の物件が近づいてきた。紙幣の入った量産品のバッグを手に取り、階段を上る。陸軍中野学校修了者や、満鉄の調査部なんかはこんな事もしていたんだろうか？

そう考えるとスパイ映画の主人公になったようで、こういう裏方役も悪くない気がする。妙にワクワクしている辺り、俺もまだまだ子供なのかもしれないな。不思議と階段を上る足取りも軽くなるというものだ。

『コン、コンコン。コンコン、コン』

符丁通りにノックをし、次の物件に入る。ハイネセンのあいづらも任務を楽しめていれば良いんだが……。下手したら支援していた代議士が関わっている可能性も考えれば、そうも言っていられないか？それにサポート役のファンも、組織の駆け引きの現場を垣間見るのは初めてだろう。きっと良い経験になるはずだ。ドアが開き部屋に入りながらそんなことを考えていた。

宇宙暦732年 帝国暦423年 8月末

惑星ハイネセン 統合作戦本部ビル

ファン・チューリン（大尉）

「あのガマガエルの悪評は母さんから聞いていたが、ここまでやりた

い放題とはな」

「まったくだ。表では帝国の攻勢を防ぐために、国民の団結を訴えている連中がな……」

統合作戦本部ビルの中層に位置する情報部、その一角に居を構えるジークマイスター分室は、統合作戦本部直属の分室だ。特命扱いであるため、流儀が異なるのは致し方ない。

新しく配属された2名の同期が慣れるまでのサポートが出来れば……。そんな風に思っていたのだが、次の任務は命のやり取りをする類のものではなかったが、ある意味、私達に同盟の膿を見せつけるモノだった。

普段は表情から感情を読み取らせない室長が、どこか悲し気な視線を私達に向けてくるのも、理想の国と信じて亡命した先が、決別した故国と同じような有様だからだろうか……。

良き上司であり、内心尊敬もしている室長に、身内の恥を晒したようにで心苦しかった。辺境星系出身の私ですらそうなのだ。生まれから、代議士との接点が多かったであろう2人の同期にとっては、さらにつらい日々だったかもしれない。

「だが、どうする？正直、政界にとつては爆弾だ。普通の持つて行き方では握りつぶされかねんぞ」

「俺もそう思う。普通にウオーリック商会や国防委員会に持ち込んで、もそもそも対処できるか？」

渋い表情で対策を考える2人。その通りではある。おそらく消極的な関与も含めればバーラト星系の代議員の半分は捜査対象になるだろう。軍需産業や金融機関にも影響が出るだろうし、フェザン系の資本を受け入れている企業にも緊急監査が入るかもしれない。短くても1年、下手をしたら数年は同盟の政界は混乱するだろう。

落とし所を用意すべきだろうが、士官学校を出て2年目の青年士官たちにそれを用意するには、さすがに経験が足りないだろう。むしろエルファシルの調査に私が赴き、ターナーを残した方が良かったのではないか……。

「ファン大尉、皆でお茶でも飲もう。準備を頼めるかね？」

室長が声をかけて来たのはそんな時だった。どこか自分たちの経験不足を指摘されたようで気まずかったのだろう。同期の2人は浮かない様子だったが、紅茶の用意は私の仕事だ。急いで分室の端に用意されたテーブルにお茶を用意する。

4人でテーブルに座るとティータイムが始まるが、室長がゆつたりと紅茶の香りを楽しむ一方、同期達はどこか忙しい様子だ。これも人生経験の差だろうか？

「さて、お困りの様子だったが、君たちはスタート地点を勘違いしている。落とし所を考える前に、しなければならぬ事がある。同盟にとって、この機会を活かしてどんな形にするのがベストなのかという事だ」

そう言いながら紅茶を飲む室長。だが、士官学校を卒業して2年と少し。同盟のあるべき姿なんて考えた事もないはずだ。視線を向けると戸惑う様子が目に入る。私自身も、もし問われる側だとしたら、同じような表情になったはずだ。

「少し話が大きすぎたか……。今回に限って言えば、同盟内におけるフェザンの影響力を弱める。バーラト系に偏った議席枠を是正して、地方星系の不満を抑える。亡命系の隔意をフェザンに向けさせ、融和をさらに進める。優先順位ではこんな所ではないかな？」

「論点を頂ければ、確かにイメージしやすい。どうも軍人の視点に引っ張られていたようです。たしかに政策決定や機密確保の面でもフェザンの影響力は弱めておくに越したことはありません」

「議席枠の件も同様だな。地方星系の経済発展は始まったばかりだが、議席枠の増員は避けられない未来だ。とは言え、バーラト系だけが人口比で優遇されているのも問題だ。この際、統廃合させた方が良いだろう」

室長の発言をきっかけに議論は進みだした。そんな光景を近くで見ながら、ある意味、これが室長への贖罪なのではないか？とも思っていた。アッシュビーもウォーリックも同い年の私が言うのもなんだが、まだ変な組織の理論に染まっていない。

室長ご自身も『清い流れに魚は住まない』と言った初級の統治論な

ど承知のはずだ。目に余る部分を修正でき、しかも同盟の若者たちがそれを行う。少しは亡命した事を良かったと思つて頂けるだろうか。「後は、リアクションへの対策だな。ターナー大尉からフェザーンへの対策レポートが来ていただろう？あれの君たち版を作ればよい。それをまとめて、母君と祖父君に提出したまえ。そのタイミングで統合作戦本部の方に私も根回しを始める。政界が動くなら軍部も細かい事は言うまい」

「では早速取り掛かるとするか！」

「ファン。俺達じゃ身内な分、甘い部分も出てくるだろう。忌憚なく意見を出してくれよ」

明るい表情でこちらに視線を向ける2人が、なぜか誇らしかった。もちろん喜んで協力させてもらうつもりだ。保険をかける意味でターナーに意見を求めるのも良いだろう。私の思考を見透かすかのように、室長は目線が合うと軽くうなずいた。

### 第39話 年貢の取り立て

宇宙暦733年 帝国暦424年 2月末

惑星フェザン 自由惑星同盟高等弁務官府

ロッキード高等弁務官

『本国は年明けから大変そうだなあ。うちのボスも年明けから泊まり込みだろ？栄転でもするのかね？』

「さあなあ。まあ、偉いさんには偉いさんの戦いがあるんだろ？俺達には俺達の戦いがある。亡命希望者に丁寧に接する事で、同化が今まで以上に進むようになる。頑張り次第じゃ亡命希望者が増えるかもしれない。100万人で1個艦隊近い人員を、10億を超えれば1個艦隊分の経済力を奪ったに等しいんだ。弾丸は飛んでこないが、ここはある意味最前線だ！俺達はそっちに集中しようや」

弁務官府の運営方針に大幅な修正が加えられた。亡命業務担当からバーラト原理派が排除され、帝国式のマナー研修が担当者に義務付けられて1年。そんな会話が1階の亡命部門では交わされるようになった頃合いで、同盟の政界を揺るがす出来事が起きた。

初めに火がつけられたのは地方星系の地元紙だ。各地の地方紙で連日のようにバーラト星系の代議士たちの汚職疑惑が報じられた。その後、バーラト星系のゴシップ紙に飛び火し、法秩序委員会が動くという憶測も流れた。

それだけなら、数年に1回は流れる悪質なデマで片付いただろう。ただ、バーラト星系の全国紙もそれを報じた翌日、現職の財務委員長が逮捕拘禁され、違法献金の実行者の数人がフェザン国籍を持ち、同盟の偽造身分証を複数所持していたことも明らかになった。

そこから報道も過熱し、ワイドショーなどではフェザンを同盟の権益をかすめ取る悪代官として扱う報道が始まった。そしてこの弁務官府に、弁務官補佐官という名目で、私の目の前にいる少佐が派遣されてきた。それ以来、私は弁務官府に泊まり込みと言う名の監禁と監視を受けている。

『小官はターナー少佐と申します。本国は当然、貴方の行いに関して

も把握しております。もちろん積極的に働きかけた訳でもない事も。本国の方針を実現するために尽力いただければ、引退には早いかもしれません。勇退という形になるでしょう。』

『ロッキード高等弁務官だ。それはどういう意味かね？私は潔白だ』  
私の名前を聞いた時、妙な表情をしていたのが気になった。

『そうですか。では別の方に功績を立てて頂くだけです。本日付で、送還するだけです。しかしながらそれは賢い選択肢でしょうか？今まで得た不法な利得は国庫に没収されるでしょう。これだけ市民たちの耳目を集めた事件です。生贄はいくらでも必要でしょうし、今後の規範にもなります。どこまで不法利得とされるでしょう？法秩序委員会も功績を上げたいでしょうからね。無一文……。状況によつては負債を負わせる可能性もあるでしょうね』

そこまで言われれば、虚勢を張る意味もない。その日から弁務官府への泊まり込みが始まった。流石に状況が状況だ。自治領主府で担当補佐官と直接交渉するのは憶測を呼ぶという名目で、テレビ通話で交渉を行った。役目を誠実に果たした証拠として必要だと押し切られ、その模様はすべて録音されてもいる。

「ロッキード高等弁務官、いよいよ仕上げの段階ですね。観客はいませんが我々の演劇もいよいよ最終幕です。終わり良ければすべてよし。気持ちよく本国へ帰るためにも、あと一息、頑張りましょう」  
「ああ、そうだな……」

彼との出会いを思い返していると、現実に戻すかのよう声をかけられた。私を脅しつけているこの男は、意外なことに降伏してからは補佐役としてとことん尽くしてくれる。入れてくれるお茶は美味いし、すべき事の事前資料も完璧だ。

彼の振り付けに沿って踊るマリオネット……。それが今の私だが、不本意なのは私の人生の中で一番仕事をしている気がするのだ。出会い方が違えば、彼を秘書としてスカウトし、委員長職を目指す未来もあったらどうか？

「高等弁務官、自治領主府からの外線です。事前資料通りに進めて頂ければ大丈夫です。失敗しても指示通りに動いたのですから、責任に

は問われないでしょう。小官も証言しますから」

最終局面で緊張が表に出ていたのか？笑顔でそう告げられると変な安心感を感じた。これでは監視役と言うより、派閥の長だろう。大仕事に緊張する新人をなだめるかのような態度だ。23歳で少佐ともなれば器が違うのだろうか？とにかくテレビ電話のある執務室のデスクに向かう。

フェザンに対しては初手として指名手配された献金の実行者の引き渡しを要求。市場調査員としての秘匿性を理由に拒否された。対抗手段として同盟はウルヴァシーの穀物引き渡し価格を2倍に値上げ。一部政府系コメンテーターにフェザン系企業への特別監査を主張させている。

「ヴァレンティ補佐官、お待たせした。ロッキードです」

『ロッキード弁務官、私達が貴方と誼を通じていたのは、こういう時の為です。本国のご友人たちは動いておられるのでしょうか？』

「その件ですが、現在、市民にはフェザンへの不信感が広がっております。こうなってしまった以上、不信感をぬぐい去るか、フェザンへの敵意はむしろ危険であると思いませんか？知らせる必要があるのではないのでしょうか？既に経済界は不安を唱えております。事件が落ち着いた後の新政権も、就任早々株価が暴落しているというのは良い気分でもありません。如何かな？」

『高等弁務官殿もお人が悪いですな。よろしいでしょう。フェザンに武力はありませんが、資金というものは使い方次第で剣にも盾にもなる事を証明しましょう』

これでよし。私に与えられた役目は果たせた。後は同盟とフェザンの証券市場に戦場が移るだろう。通話を終わると同時にドアがノックされ、少佐が入室してくる。

「お疲れさまでした。これでお役目は完了です。それではこちらのファイルをどうぞ。法秩序委員長の署名入りの免責証明書です。ご確認ください」

渡されたファイルには確かに法秩序委員長の署名入りの免責証明書が入っていた。これで身の安全は確保できる。詳細を確認すると、

不法利得に關しても半額を国庫に納めればよい事になっていた。

「本当は25%まで交渉したのですが、さすがに今後の範という部分もありましたので。検察が把握している金額の50%になります。発表は懲罰金も含むと発表されます。くれぐれも発言には注意してください」

「なぜ、ここまでしてくれたのかね？」

「気持ちよく本国にお戻りいただける条件を用意しませんと。勇退するとは言え、懲戒もありますから退職金は出ません。それも含めればきちんと経済的に困らない資産を確保するのも私の役目です」

そう応じられては笑うしかなかった。数日後には本国へ向かう。引継ぎに備えて、資料の準備でも始めるか。人生で最初で最後の演者としての時間はこうして終了した。彼が動いてくれた事で老後の心配もない。本国に戻ってひと段落したら新しい趣味を探すのも良いかもしれないな。

宇宙暦733年 帝国暦424年 4月末

惑星フェザーン 自治領主府

ヴァレンティ補佐官

『補佐官、ご指示通り空売りを仕掛けての事です。補填はして頂けるのでしょうか？少なくとも3社の証券会社が破産寸前です。ご指示を受けての利益が自治領主府に還元される以上、損失も当然還元させて頂きますぞ。では』

フェニキア銀行の頭取が一方的に通話を切った。3月の頭からフェザーンの金融機関は一斉に同盟で株の空売りを開始した。2週間で25%値を下げ、フェザーンの資金の怖さを同盟市民に知らしめたはずだった。資金提供しているコメンテーターや芸能人がフェザーンとの協力を呼びかけ始めた所まではシナリオ通りだった。

ただ、そこから大量の買い注文が入り、連日のストップ高。何回か大規模な売り攻勢を仕掛けたが、すべて買い注文にかき消された。今日の終値は介入前の150%近い。頭取は証券会社が3社と言ったが、それは希望的観測だ。下手をしたらメガバンクまで倒産しかねな



い状況だろう。

同盟ではフェザーン資本が5%以上入っている企業への特別監査を実施。今後も定期的に監査を実施すると政府広報が告知しており、同盟企業にはフェザーン資本を嫌厭する流れも出来ている。空売り分も含めて、同盟の経済界でフェザーンの影響力は排除されつつあった。

「まさかロッキードごときに嵌められたのか……」

株式市場への介入をほのめかしたロッキード高等弁務官は既に本国に召還され、帰国している。奴もフェザーンから不法利得を得ていた。いざとなればこの証拠で脅すことも考えていたが、先手を打たれたのかもしれない。あちらには免責証明書という最後の手段がある。免責されるなら脅しに屈する必要もない。うまくやられたか……。

だが、損害も天文学的な額。その上同盟からフェザーン資本が排除されたともなれば引くに引けない。いつその事、調査部のイリーガルを使って破壊活動を行うか？だが、今の政局でそこまでしたら、犯人はフェザーンだと子供でも気づく。進駐される事はないだろうが、更なる穀物価格の引き上げ、最終手段として交易自体の停止もあり得る。そこまで踏み込んで火消しは出来るのか？

「ピピピッ。ピピピッ」

そんな事を考えていると内線の着信音が響く。発信主を確認して俺は思考を止めて通話ボタンを押す。

『ヴァレンティ補佐官、してやられたようだな』

「自治領主閣下、良きご報告が出来ずに申し訳ございません。何とか巻き返しを……」

『今回の件は、これで手仕舞いだ。新任の財務委員長から内々に話があった。同盟は中央銀行に国債を引き受けさせて無限介入をしているそうだ。フェザーンは豊かとはいえ、同盟のGDPはフェザーンの3倍だ。タネ銭がつきるのはこちらの方だな。それこそ帝国で動かしている資本を原資に繰り入れればまだ何とかなるが、そこまで徹底抗戦する価値があると思うかね？』

無限介入だと。そこまで覚悟されてはどうしようもない。帝国で

動かしている資本も短期換金資本は限られている。少しづつ浸透させてきた資本を動かす訳にはいかないだろう。

「申し訳ありません。私が至りませんでした」

『それに手駒のコメンテーターや芸能人も売国奴として名指しで非難され始めているようだ。同盟憲章にも、私人、法人を問わずあらゆるものへの税の公平性を追加記載するらしい。自国の膿を吐き出す、フェザーンの影響力を排除する、宗教法人への対策も実施した。おまけに大儲けか。この脚本を書いた人間がいたらスカウトしたい位だ』

「少なくとも見積もつても一石四鳥。こんな筋書きを描いてやり切る人材などそうはいない。それこそ補佐官職にいれば、次の自治領主候補筆頭だ。そして、残念ながら私は自治領主候補から外されただろう。「重ねてお詫びします。せめて事の裏はきちんとして報告出来るようにいたします」

『そうだな。それと顔が割れている工作人員だが、全員処分して死体を渡してやれ。それで手仕舞いにする。顔が割れた工作人員など使えない。整形してもDNAデータもとられているだろうからな』

「はっ！承知しました」

そこで通信は終わった。俺が後始末をしつつ簡易調査を終えたのは数か月後だ。ウルヴァシー以外の惑星にフェザーン人が向かうにはDNAの提出や渡航目的の提出など、かなり手続きが厳格化されていた事もあり、まともな調査にはならなかった。

本来なら嚴重にボディガードがつくはずの、自治領主府に所属する補佐官の一人が、このゴタゴタで破産した証券会社の元社員に逆恨みで殺された記事がフェザーンのローカル紙の刑事欄に小さく載るのは、この日から半年後の事になる。

## 第40話 後始末

宇宙暦733年 帝国暦424年 8月末

惑星ウルヴァシー 貨物宇宙港警備基地

カーク・ターナー（少佐）

『静止軌道上のステーションを警備艦隊の本部に改修する作業は完了しました。既に同盟領内への入国を希望するフェザン人にはDNAの採取を任意の名の下でお願いしています。DNAデータのアップロード、他星系での参照のシステム構築も完了しました。突貫作業で進めた為、予算がそれなりに……』

「技術中尉。予算の件は明細をこちらに回してくれ。同盟軍は翌末締、翌々末支払いだったね？情報部には話を通しておくから請求書はそちらに送る様に手配してくれ。色々ありがとう」

ある意味悪だくみ仲間となったロッキード氏を首都星に送り出し、惑星ウルヴァシーが属しているガンダルヴァ星系の警備体制の強化任務に当たっていた俺は、技術中尉の報告を受けて、最低限の体制は構築できたと一安心していた。

元々は穀物の集積倉庫と水資源の積み出しがメインだったが、倉庫街が急成長し、今ではシロン産の嗜好品や、ハイネセン製の機械製品までもが集積されるようになった。

交易の為にやってくる独立商人や倉庫街の従業員、そして穀物を搬入し、水資源を搬出する元捕虜。人通りが増えれば自然と歓楽街も出来る。ウルヴァシーはいつの間にか、フェザン方面航路の中継地として発展しつつあった。

後は地表の方の防諜体制の構築だな。元々軍主導で作られた倉庫街が発展の始まりである為、維持には憲兵隊が当てられている。防諜の為に情報部にも出張してもらった必要もあるだろう。それにこのまま発展が進めば、法秩序委員会が主管する警察組織も出先機関を作るだろう。

そうなると協力体制をどうするのかも協議しておく必要があるな。諜報活動で隠れ蓑にされるのは犯罪組織と宗教組織が定番だ。防諜

に関しては、犯罪組織に詳しい警察組織との連携も視野に入れても良いと思う。

ただなあ、政治家も官僚も自分の領分を侵されるのを嫌うんだよ。情報部は国防委員会所属、警察は法秩序委員会所属。すんなりとは行かないよな。強いて提案するなら、防諜専門の捜査組織を立ち上げて、専門の教育施設を作る。一定期間強制的に同じ釜の飯を食わせて、連帯感を植え付けるくらいか？まあ、提案はしておこう。

「ピピピッ。ピピピッ」

そんな事を考えていると外線の着信音が響いた。発信主はブルーか。何か問題かな？

『ターナー。元気そうだな。そっちはどうだ？』

「最低限の体制は構築できた。ただ、ウルヴァシーは今後も発展するだろう。そうなると警察も出張ってくるだろうからな。起こりそうな問題をレポートにまとめて提出しようと考えていた所だ」

『そうか。まあ、お前の予言は当たるからな。忙しい所すまんのだが、相談がある。既に今回の一件の切っ掛けを作った事で昇進した訳だが。今回の一件の利益を考えると。前回の昇進は口止め、功績を評価して中佐に昇進させたいと言う話が出ているんだ』

まあなあ。今回の仕手戦でフェザーンから分捕った利益は、額面だけなら3〜4個艦隊の整備費に相当する。俺も知り合いですべてに株式市場への最大限の投資をお願いした。個人資産も株式市場に投下したし、金融機関から借りれるだけ借りて動いた。

ウーラント商会も同様だし、ウォーリック商会を通じて独立商人たちも動いた。亡命派にも情報を流したし、井上商会と出光商会もだいぶ儲けたはずだ。高騰していた株価も現在は115%前後で落ち着いている。最終的に国庫に入るのは2個艦隊の整備費位だろう。

そう考えると大きな功績だから2階級昇進もあり得るのだろうが、23歳で中佐？俺はジークマイスター分室で好き勝手してただけだし、こいつらも艦隊旗艦の参謀として数回実戦を経験した程度。中佐ともなれば陸戦隊なら大隊規模の指揮、宇宙艦隊なら巡洋艦の艦長だ。連中がいくら優秀だとは言え、経験不足過ぎるし若すぎる。現場

でも反発しか生まれまいだろう。

「室長は何か言っていなかったか？」

『まずはターナーに相談してみろって言われたよ。で、どう思う？』

「そうだなあ。そもそも論だが、自信家のお前は別にして、ファンやウォリスに大隊の指揮官や巡洋艦の艦長が務まると思うか？能力だけの話じゃないぞ？23歳の若造が、中佐様だぞ！って乗り込んで行って、現場で受け入れられるかも考えろよ？」

『確かに厳しいか。まあ俺なら何とでもなるだろうが……』

「ちなみにお前は、アルフレッドとセットで考えられているぞ？能力はともかく周囲からの反発がひどすぎるからな。上もいずれば軍を背負って立つ人材だとは思っているんだろうが、宇宙艦隊司令長官を目指すならアルフレッドに総参謀長を頼めるように今から動いておくんだな」

「なっ！とか言ってるが、任官するまではコープが、それ以降はアルフレッドがお前のお目付け役だったんだ。能力もある。自信があるのも結構だが、冷静に自己分析してくればなあ。アルフレッドを自由に動かせるなら、組織間の折衝役に丁度良いんだ。」

「どの組織もあいつを嫌う可能性は少ない。理知的で配慮もできる。幹事長とかやらせれば派閥間交渉なんてお手の物だろう。ブルースは弁も立つし、容姿も良い。能力もあるけど不謹慎発言でもして大問題を起こしそうだよな。選挙には強そうだけどき。」

『くっ。それでどうすべきだと思う？分室としての功績だろうから勲章をもらう訳にもいかないだろう？』

「報奨金なり、新設されるファンドの権利を貰ったらどうだ？金はあるに越したことはないだろう。いくつで退役するつもりなのかは知らんが、事業をやるにも政界に進出するにも金はかかるだろうしな」

「同盟資本の多くは既に株を売り抜けて、最終的に株は中央銀行に国債を引き受けさせて無限介入を行った同盟政府名義になっていた。ただ株式の多くを政府が所持しているのは経済的に適正な形ではない。10個程度のファンドに分散する事が既に決まっていた。その

ファンドの利権をもらえれば、退役する頃には、資産を理由に選択肢が狭まるような事にはならないだろう。

『うーむ。ただ、室長にお金を強請るのはなあ』

「室長に任せると言えば大丈夫だろう。念のため、俺が資金か利権が良いって言っていたと添えれば良い。どうせ室長も上げつない程、儲けただろうしな」

『確かにな。もっともその資金のお陰で諜報活動が捗っているのも理解している。あの人は自分の為に資金を確保しているわけじゃないのな。室長の提言通り、フェザーンの空売りの信用取引分は懲罰的賠償も含めてかなりふんだくったみたいだしな』

「浮かれるのは分かるが、だからこそ防諜体制を確立しないと。フェザーン側はいつかこの借りを返そうとなりふり構わない可能性が高い。言論の自由は確かに大切だが、国益を損なう方へ世論誘導されれば民主制を取る以上痛いからな」

『報道機関への外国資本の制限も法案が通ったそう。それに『報道の自由を守る会』ってNPOを知ってるか？そいつらが過去に遡ってコメンテーターや芸能人の発言を公開しててな。番組スポンサーに直接クレームを入れたり、不買運動を促したりしているんだ。世論誘導は今まで以上にやりにくくなると思うぞ？』

「なら良いんだがな。どんな組織でも腐敗から無縁ではいられない。そういうNPOも監視対象にしておくべきだろうな」

真面目な話はそこまでで、後はアデレードとの新婚生活の愚痴を聞かされた。帰ったら自分を待っていてくれる存在がいるというのは幸せな事だと思う。ただ、ブルースの場合はそれが首輪をつけられたようで性に合わないんだろう。こればかりは、当人同士の問題だ。アデレードがもう少しブルースを立てる性格なら良かったんだが、あいつも気が強いからなあ。

愚痴で済むなら良いが、離婚の相談なんかしてくるなよ？アデレードとの離婚調停なんて、フェザーンの腹黒連中との交渉よりよっぽど厄介なんだから。

警備体制を強化した最初の成果が、市民たちから追及されて同盟で

生きづらくなつたコメンテーターや芸能人達の密航摘発になるのだが、それを知つて微妙な気持ちになるのはまた別の話だ。

宇宙暦733年 帝国暦424年 10月末

惑星ハイネセン 財務委員会

ナタリー・アッシュビー

「アッシュビー君、気持ちは分かるつもりだ。ただ、財務委員長が実刑判決をうけ、その取り巻きも逮捕された。後任を決めるにも万が一にも関与が疑われる事があつてはならない。

おまけに設立されるファンドの利権をどう分配するのか？議席の割り当てをどう調整していくのか？問題は山積みだ。残つた財務委員の中に、火中の栗を拾いたいと思う代議員はいない。どうか我々の要請を受け入れてはもらえないだろうか？」

「状況は分かっているつもりです。ですが、私は国防委員会でキャリアを積んで参りました。一歩間違えれば同盟が更なる混乱に陥る事も……。そんな状況で門外漢である私が、本当に財務委員長に相応しいとお考えですか？」

ブルースから受けとつた情報を元に、バーラト系融和派の雄であるグレック・ウオーリックと連携して同盟の膿を排除するために動き始めて約1年。ある意味、怖い程事前に貫つていたシナリオ通りに事は進んで行つた。バーラト系の晒した醜態への代償として、バーラト星系の選挙区の統廃合、地方星系への議席割り当て増など、厄介な案件も残つていた。

ただ、中央銀行を通じて無限介入を行った結果、同盟政府は多大な利益を上げる事が出来た。歳出の多くを占める国防予算に四苦八苦していた代議員たちはもちろん、市民たちにも朗報だったはずだ。多少の事なら問題なく進む。むしろ将来噴出するであろう議席割当枠の問題を処理するには良いタイミングだとも言えた。

国防委員会の動きは既に決まっている。国防予算は確保しつつ、今回の利益に関しては同盟領内、特に地方星系へのインフラ開発に予算を割くべきと主張する事で話についてはある。そりや今回の動きの発

端であるブルースの母親が事件に関与しているはずもないのは分かる。だからって私に財務委員長を押し付ける？ブルースのシナリオにはこんなこと書いてなかったじゃない。

「ナタリー、私からも頼む。今回の一件を主導した君なら、良識ある判断だと多くの市民は納得するだろう。ファンドの利益配分、選挙区の統廃合。余程の実績が無ければ、支援者達から突き上げをくらう案件だ。選挙に落ちれば我々はただの人だ。情けない事を言うが、私も火中の栗を拾うには厳しい状況でね」

やれやれと言った表情で、同期当選のラファエルが声をかけてくる。さらりと言ってるが、あんたの言ってる事は厄介事を押し付けるって事じゃない。そんなんだから対立候補から顔だけだの口だけだの言われるのよ。

支持母体も女性ばかり、男性からの支持率を上げる為にも、火中の栗とか言ってるで、動くべきじゃないの？あたしをディナーに誘う時みたいに厚かましくなってみたら？もつとも口だけって認識は私も同じだから、誘いには乗らないけどね。

「引き受けても良いけど、条件があるわ。分かってるわよね？」

「ああ。もちろんだ。君の方針には従う。これは財務委員会の総意だ」

「分かったわ、なら引き受けさせてもらう。でも数年で辞めさせて貰うわよ？バート星系の選挙区の統廃合、地方星系への議席枠追加。それが落ち着くのに数年は必要だろうから」

わかったような表情をしているが、どうせこいつらの事だ。同盟の改革を実績に私を最高評議会議長にでも押し上げて、問題が片付いた後の財務委員長職でも狙ってるんでしょ。残念ながらそうはならない。実現すれば女性初の最高評議会議長になる。でもね、夫は軍需企業の役員、息子は軍人。戦争の主役はあくまで男性だ。

今の同盟で女性の統合作戦本部長や宇宙艦隊司令長官が存在するだろうか？主義主張は個人の自由だが、私はそんなに楽観的じゃない。財務委員長を辞したら、政治活動もやめよう。どうせなら料理を趣味にしても良いかもしれない。今回の件でブルースに貸しが出来



た。母親の料理研究に付き合うくらい、息子としても当然だもの。

## 第41話 進む融和

宇宙暦734年 帝国暦425年 1月末

統合作戦本部ビル ジークマイスター分室

ファン・チューリン（少佐）

『ファン少佐、君の同期達は混乱を最低限に収める為に苦勞するだろう。手堅い仕事で助けてあげなさい。それとね、情報分析をこの分室で主管しているんだ。どうせなら私見も添えなさい。君は分析屋で生涯を終えるのかい？』

室長にそう言われたのは、昨年末。それ以来、分析した資料に関しては私見を添える様に意識してきたが、それもこうなる事を予見されていたからだろうか？ターナーには同い年として敵わないと思っていたが、室長には年長者として敵わないと思う。いつか私も、室長の様に部下達を育成できるようになれるのか？いや、ならねばならんだろう。ここまで手塩にかけて頂いているのだから。

「ファン、国防委員会も法秩序委員会も自分たちが主導権を取りたがっている。カークも厄介な提案書を出してくれたものだ」

「ジョン。彼らの言い分も理解出来る部分はあるんだ。妥協点がすぐに見つかるなら、私達がわざわざヒアリングに動く必要はない。まずは情報の精査から始めよう。ファンにもまた意見を出してもらえると助かるよ」

「それに関しては既に資料を取りまとめおいた。私見だが、お互いに予算を割くから口出ししたくもなるのだろう。人員は事前に資格を設定して、予算は財務委員会に付けてもらうのはどうだろうか？防諜専門の捜査機関となれば、口出しする組織は少ないに越したことはないと思うが？」

「ならブルースに相談してみるか？財務委員会も他の委員会に譲つてばかりでは不満もたまるだろう。それに金融機関への監督権も彼らにはある。金の流れも含めて洗えるならむしろ財務委員会に主管させた方が良いかもしれない」

何とか落とし所の取っ掛かりは提供できたようだ。二人に聞こえ

ないようにホツとため息をつく。年始から730年マフィアと呼ばれる私を含めた同期達は、ジークマイスター分室に配属となった。もつとも、公式の所属は参謀本部なのだが……。

ローザスとコープは、各委員会の懸案事項を事前にヒアリングしながら落とし所を探る任務に当たっている。人当たりが良く、世話好きなローザス。士官学校まではアツシユビーのお目付け役でバーラト原理派出身のコープ。なるべく良い形で取りまとめようという誠実さと、この一件で、自業自得とは言え割を食っているバーラト系としての出身。折衝役として悪くはないだろう。

もともと配属されていたアツシユビーはジャスパールと組んで財務委員長になった母上との連絡役。肉親という最も強いパイプと共に、亡命系のジャスパールを同席させる事で国内の融和を図る。ウォーリックはベルテイナーと組み、祖父であるウォーリック商会の会長との連絡役を務めている。

ベルテイナーはシロンで大農園を経営する家の出身だ。経済面でも亡命系と連携を強め、政策と経済の両面から融和を進める。正直言えば、統合戦本部の特命扱いとは言え、いち分室が担う役割ではないようにも思う。

ただ、今回の一件をある意味主管し、事前のシナリオ通りに事を進めたジークマイスター分室は、実力を示しすぎた。同盟のシンクタンクのような役割をしつつある訳だが、委員会ごとに領分を主張するし、他の委員会も自分の領分を守るために、最適かどうか？ではなく貸し借りで動きがちだ。そういう意味でも実力を示したこの分室が、第三者視点で提言するのは悪くはないだろう。

自分たちの提言が採用される可能性が高い以上、やりがいもあるが責任も大きい。現段階で最適だと信じられる提言をする為にも、情報分析と精査は必要不可欠だった。手堅く仕事を進めるのは私の得意とする所だ。私見を添えるのはまだ慣れないが、同期達に対して自分なりに役に立てている実感もあり、充実した日々を過ごさせてもいた。「それにしてもターナーの奴、俺達に面倒なお偉いさん達との折衝を任せて、自分は楽しい宇宙旅行か。俺もあつちが良かったなあ」

「ジョン。そう言うな。カークはカークなりにすべき事をしているんだろう。実際、今フェザーンに何か工作活動をされれば、政府が落ちつくまで更に時間が必要になる。最重要課題のひとつでもあるぞ」

確かにお偉方との折衝はコープにとっては慣れない分、煩わしい事も多いのかもしれない。ただ、ターナーがある意味自分のやりたい任務に当たれているのは自分から必要だと思われる任務を提案し、室長がそれを認めたからだ。赴任したばかりのローザスとコープには難しいだろう。

それにアッシュビーやウォリックが室長が認める内容の提案をしていけば、そちらを任せていたはずだ。そして私に私見を添える様に促したのも、そういう事なのだ。

「すまないが、お茶の用意を頼めるかね？」

「ファン、今日は私にやらせてくれ。私もカークから色々習ったからね」

そうやって、ローザスがお茶の用意を始めた。私のお茶は手堅い味、ローザスのお茶は世話好きな味、コープのお茶は苦労人の味と室長はおっしゃった。部下のお茶の味で適性や性格が判るのだろうか？室長は帝国騎士という決して帝国では身分が高くはない立場で、艦隊司令まで昇進された方だ。もしそんな極意があるなら、学びたい所だが……。

何度目かの室長とのランチの際に、意を決してお尋ねしたのだが、単に私たちの印象を添えていただけだと応えながら、珍しく大笑いされる事になるのだが、それを今の私はまだ知らない。

宇宙暦734年 帝国暦425年 4月末

惑星シロン オルテンブルク邸

ナタリー・アッシュビー（財務委員長）

「主はすぐ参ります。アッシュビー様、しばらくお待ちください」

秘書とは違う、映画に出てくるような執事が優雅に一礼して、案内された応接間を後にする。シックにまとまった内装、重厚な応接セツト。絵に描いたような帝国貴族の邸宅に異文化に触れる思いだ。融

和が進めば、いずれ歴史ドラマのロケーションなども行われるようになるのかしら？ 原理派の過激派なら、憎むべき帝国の民衆を犠牲にした悪魔の文化などと言うかもしれない。でもシロンでは自由意思に基づいて疑似的な貴族制が維持されている。

亡命時に不当な扱いをされそうになった事に対する自衛、亡命に巻き込んだ部下たちへの責任。少なくともこの屋敷を維持する専門職のニーズが、同盟にあったとは思えない。ある意味、自分の寄子達への責任を果たしたのだろう。その行為自体は、むしろ貴族的で高貴な責任感によるものだ。簡単に社員を首にする同盟資本と比べたら、どちらが雇い主としての覚悟があるだろうか？

『コンコン、コンコン』

ノックに応じると、初老の夫婦が入室してくる。私もソファアールから腰を上げ頭を少し下げる。訪問の目的は融和の促進。財務委員長という肩書はあるけど、侯爵家に敬意を払うのは当然の事だものね。

「アッシュビー委員長、遠路はるばるのお越し、感謝に堪えない。どうぞ頭を上げて、ごゆるりとされよ」

「では、お言葉に甘えます。ただ、今回は財務委員長としてではなく、息子の友人のご祖父母にご挨拶に来たという立場です」

「であれば、私達も孫の友人の親御さんをお迎えするまでの事です。どうぞおくつろぎ下さい」

お互いにソファアールに腰を下ろす。息子のブルースと共に、財務委員会とジークマイスター分室を繋いでくれているジャスパール君は、オルテンブルク侯爵家の庶子。お二人はジャスパール君のご祖父母にあたる。ブルースは濁していたけど、何か事情があるようだったからジャスパール君は同席させなかった。

彼がいてくれるお陰で、実施しようとしている政策が、亡命派にどう受け取られるかを忌憚なく意見してもらっている。亡命派の代議員がいけない訳ではない。ただ、議員という立場をもつ層から意見を聞けば、当然、バーラト系の議員の声も聞かなければ不満を持たれる。

そういう意味でも、ジークマイスター分室の人員配置はありがたかった。経済面はウォーリック商会を中心に動いている。バーラト

系代議員を中心とした大規模な汚職事件は、事前のシナリオ通りに進み、沈静に向かっている。とは言え、実際に落ち着くまでには数年はかかるだろう。

「孫はお役に立っておりますかな？」

「はい。亡命派としての見解を忌憚なく上申して頂いています。一部、今までの意見に引きずられている者もおりますが、大多数は融和を進めるべきと考えています。今後はフェザーンが必ずしも友好的とは言えない以上、なるべく過去のわだかまりを解消し、融和を進めたい。これは私個人の考えとも一致しております」

用意されたお茶を楽しみながら、話を進める。非公式だからか？それとも普段接している口だけでリスクは負わない連中とは違うからか？誠実な息子の友人の祖父母との会談は、腹の探り合いの必要もなく、シロン産の紅茶の良い香りも相まって、リラックスできるものだった。

「そうですね。孫のお陰で私達亡命派も今回の一件でかなりの収益を得られました。同盟領内の様々な企業ともご縁が持てたのは喜ばしいことです。ただ、経営に関わると言う事は責任も伴う。今までのように一線を引いたままではいけないでしょう。亡命派にとっても、融和を進めるには良い切っ掛けとなりましょう」

嬉し気に頷くオルテンブルク侯は、好々爺然としている。ご夫人も嬉しそう。ブルースも自慢の息子だけど、精悍な顔立ちに貴公子然としたジャスパール君はそれだけでも自慢の孫だろう。そんな彼が、亡命派に多大な利益をもたらし、同盟の上層部にも太いパイプを作りつつある。もしかしたら、オルテンブルク侯爵家を継がせると言う事もあり得るのかしら？

「確かに孫は大功を立ててくれました。それを持つてすれば亡命派から異論も出ないでしょう。だからこそ、そのような事は出来ないのです。オルテンブルク侯爵家を亡命派の雄足らしめているのは、血で結ばれた血縁でもあるのです。それを捨てるのは、また私達には早すぎるでしょう。それに私達も、孫には自由に生きて欲しいと思っております。自分で切り開いた立場を捨ててまで、亡命派の雄になりたいと

は、あれも思わないでしょう」

少し悲し気なオルテンブルク侯、市民には市民なりのしがらみが、貴族には貴族なりのしがらみがあるのだろう。私自身はどうだろう？選挙区の支援組織を引き継げば、ブルースは立候補さえすれば代議士に当選するだろう。

でも、唯我独尊の傾向が強いブルースに、政治の世界は正直合わないと思う。強く本人が希望するならともかく、私から積極的に引き継がせたいとは思わない。

「どうやらバーラト系でも気苦労というものからは自由になれないようですな。人間が社会を作る以上しがらみは生まれる物でしょう。立場が高まるほど、そのしがらみもまた強くなる。融和に向けても様々ながらみが障害になるでしょう。それなりの時間も必要になるだろうが、今の垣根を子孫たちに負の遺産として遺すのは、我々の代で仕舞にしたい。協力は惜しまないつもりだ」

広くとられた応接室の窓から、快晴の空が目に入る。できればこの快晴の空のように、国内の融和が進むことを願う。息子の友人の祖母とのお茶の時間は過ぎて行った。お二人にもそういう思いがあったらうれしい。財務委員会に残っていれば、つまらない腹の探り合いに巻き込まれる。大方針は確定している以上、パンくずの奪い合いに参加するつもりはない。

そういう意味でも、財務委員長に就任早々、亡命派に挨拶に訪れた事は悪手ではないはず。出来れば次世代の若者たちが、ブルースとジャスパール君のように協力しあうのが当たり前になれば、同盟の国力もさらに高まり、防衛戦争も優位に進められるだろう。団結するには明確な敵が必要。フェザーンが友好的な勢力とは言えない状況はむしろ都合だ。亡命系にとって商売敵だった存在が、同盟市民の敵にもなりつつあるのだから。

## 第42話 団らん

宇宙暦736年 帝国暦427年 4月末

惑星テルヌーゼン ターナー邸

カーク・ターナー（中佐）

ジークマイスター分室がきっかけで発覚した汚職事件が表沙汰になって3年近い年月が経過した。事前のシナリオ通り、フェザーンへの敵意が市民の中で高まった事でバーラト系と亡命系の融和は着実に進みつつある。最低限に抑えられていた交渉の機会も、今までの反動のように激増し、経済も活性化している。

GDPの面から考えると、低いとは言えない今までの税率なら、13個艦隊を養う事も可能になった。ただ、建国以来、軍備拡張を続けて来た同盟政府は、初めて減税に踏み切った。いつ終わるとも知れない対帝国との防衛戦争の事を考えれば、市民の疲弊はなるべく抑えるに越したことはない。政府が新設したファンドの収益もあり、遺族年金や教育機関への予算も増えている。

『チラッ』

書斎の入り口からなにやら視線を感じ、そちらを向くとシュテファンがドアを少し開けてこちらを見ていた。その横には長女のエリーゼが、シュテファンの袖をつかんでいる。いつの間にか大きくなった。

手招きをすると嬉しそうに駆け寄ってくる。両手で子供たちの頭をなでると嬉しそうに声を上げた。よしよし、可愛い奴らだ。シュテファンを肩車、エリーゼを右手で抱き上げてリビングへ向かう。たまの休暇だ。こういう時間を過ごすのも良いだろう。

3人でリビングに向かうと、ベビーベッドに身をかがめるクリステインの背中が目に入る。生まれたばかりの次男ヴェルナーをあやしていたのだろう。ヴェルナーの名は義父にお願いして名付けて頂いた。当初は同盟風の名前をとお考えになられていたが、ターナー家がウーラント家に近く、半分は帝国をルーツにしているのは事実だ。

亡命派との融和も進むし、変におもねる必要もないと考え、予断を



交えずにつけたい名を……。とお願いした。兄も姉も帝国風の名前だし、変に同盟風の名前にするのもおかしな話だしな。もし4人目が出来た場合は、室長に名付け親をお願いするつもりでいる。

「貴方……。お疲れだったのでは？」

「そんなことはないさ。それにそろそろ火おこしの時間でもあるからな」

嬉し気な子供たちの声にクリスティンがヴェルナーを抱き上げ、あやしながらこちらを向いた。3人の子育てをしつつウーラント商会の経営にも関わる彼女の方が大変だろうに。普段は優雅にハイネセンでホテル住まいをしている俺は、最大限クリスティンの環境にも配慮したかった。

ウーラント邸の隣の物件が空いたのを機に購入し、お手伝いさんも2人雇っている。義弟のユルゲンがハイネセン記念大学を卒業し、修行を兼ねてウオーリック商会と縁のある商会に勤めている以上、義父を一人にする訳にも行かなかったので渡りに船だった。

「お父さん、僕も手伝う〜」

「エリーゼも〜」

「そうか。なら手伝ってもらおうかな？ちゃんと軍手をするんだぞ？」

シユテファンとエリーゼを連れて庭の一角に設えたウッドデッキに向かう。自宅にいる時位は家事を手伝う意味でなるべく俺がディナーを用意するつもりだった。

ただ、キッチンで普通に料理していると子供たちは結局クリスティンにじやれつく事になる。それだと意味がないので、バーベキューとつか焼肉と言うか、ウッドデッキの一角で炭火を熾してワイワイやる形にした。

シユテファンはちゃんと妹のエリーゼに手袋をさせている。まだ幼いエリーゼからすると、積み木遊びの延長なのかもしれないが、俺やシユテファンと炭を組むのがお気に入りようだ。

そして火が落ち着くまでの間、2個だけと決めてマシユマロを炙つてご褒美代わりにしている。炭が落ち着いた頃合いで食材やら取り

皿やらを並べ始める。俺が何も言わなくてもシュテファンとエリーゼも手伝うのだから習慣というのは大したものだ。

「よし、シュテファン、エリーゼを連れておじい様に声をかけてきてくれ」

「はい。お父さん。エリーゼ、行くよ」

庭の一角はウーラント邸につながっている。義父はなるべく家族だけの時間を過ごして欲しい様だが、家が隣同士なのにダイナーを別々に取る方がおかしいだろう。農場を経営している事もあり、バーベキューの素材には困らない。それにウーラント家が同盟で根を張れている事を実感する意味でも。同席してほしかった。

「準備完了だ。よし、少し預かろう」

「貴方にあやされると、ヴェルナーはすぐに寝入ってしまいますものね」

クリステインからヴェルナーを預かり、抱き上げながら身体をゆつくり揺らす。既にミルクを飲んだヴェルナーは満腹だ。少しあやせば眠ってしまうだろう。クリステインにもゆつくりご飯くらいは食べてもらいたい。まあ、多少の嫁孝行もしておかないとな。

クリステインはつかの間の休息をソファアに深く腰掛けてくつろぐ事にしたようだ。ターナー家に限って言えば合計特殊出生率は3.0。辺境星域を含めた同盟全体では4.0を超えそうな勢いだ。この勢いを維持するのは難しいかもしれないが、最新の国勢調査で同盟の人口は130億を超えた。あと2世代、経済発展を維持できれば、人口面でも帝国に並ぶだろう。地方星系にはまだまだ開発の余地が有り余っている。余程の失政でもなければ、十分実現可能だ。

「お父さんくおじいさまを呼んできました」

「これ、ジージから預かった」

「良い赤を頂いたのな。どうせなら一緒に楽しみたかったのだ」

任務を果たしたと嬉しそうに駆け寄るシュテファンと、赤ワインのボトルを大事そうに抱えるエリーゼ。それを見守る様に義父が2人の後ろから声をかけてくる。

「義父上、お気遣いありがとうございます。ヴェルナーを寝かしつけ

てきますので、少しお待ちを」

一言そえてから、リビングにあるベビーベットにヴェルナーをやさしく寝かせ、タオルケットをかける。誰に似たのかうちの子供たちはあまり夜泣きをしない。ヴェルナーは一度寝付くとなかなか起きないからクリステインもゆつくり出来るだろう。

視線をウッドデッキに向けると子供たちが強請ったのだろう。義父が肉を焼き始めていた。帝国騎士としての人生を歩まれていたら、手ずから孫の為に肉を焼く機会など無かっただろう。

40代半ばに未知の国へ亡命し、言語を学び、財務を学び、孫たちにも温かく接してくれる。スポンサーとしても誠実な方だったが、祖父としても誠実で温かい。そんな方を義父に持てた俺は、やはり良縁に恵まれたのだと思う。義父はまだ老人という年齢ではないが、どうせならゆつくり孫との時間を過ごしていただきたい。焼き奉行の役目は、今日の所は俺がすべきだろう。

「義父上、お手数をおかけしました。そろそろ代わりましょう」  
「うむ。頼む」

義父に声をかけてトングを受け取るが、もう少し焼きたかったかのような表情をされている。それならそれで良いのだ。俺が留守の時にもバーベキューを主催してもらえば良いのだから。

宇宙暦736年 帝国暦427年 4月末

惑星テルヌーゼン ターナー邸

グスタフ・ウーラント

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうものだ。孫たちと一緒に同盟流のバーベキューとやらを食す夕食の時間、温かくウーラント家が同盟に根を張りつつある事を実感する時間でもあった。あの時、亡命にあたってバーラト融和派を頼ると決めた時には、こんな未来を想像していただろうか？

嫡男であるユルゲンとも大学の卒業を機に酒を酌み交わした。クリステインも3人の子宝に恵まれ、この手に抱けた。立ち上げた商会も順調だし、先だつての株式相場の乱高下に乗じて莫大な利益を上

げる事も出来た。それも目の前でグラスを傾ける義息の働きのおかげだ。

「とうとうユルゲン殿も婚約ですか？時の流れは早いと申しますが、それを実感する事になるとは思いませんでした」

「エドワーズインダストリーのジェニー嬢とな。在学中からの付き合いだそうな。面識があると申ししていたが……」

「はい。一度会食の場に同席いたしました。想い人が出来たら紹介するという約束を結んでおりましたので。ユルゲン殿は素敵な方を射止められたと思います」

「ふむ。なにやら思いを告げる際にも力添えをしたと聞いたが？」

「ウーラント家の嫡男が居酒屋の帰りに想いを告げるというのも様にならないと思ひまして。流行りのレストランとサプライズを少々用意いたしました。後は誕生年のワインでしたかな。思い出として語れる事が多い方が良いと思ひまして」

「そうであったか。ジェニー嬢も喜んではいたそうだが、流行りを取り入れすぎていてユルゲンが女性慣れし過ぎていと逆に不安になったそうな。まあ、今では笑い話になつているそうだが」

「そう言う意味ではジェニー嬢は相手を見定める目と相手に配慮する優しさをお持ちの様ですな。そんな方を選ばれたユルゲン殿の慧眼に喜びますか」

そう言いながら肩をすくめる義息に笑みを向ける。無言で杯を交わし乾杯すると、ロックグラスを傾ける。小さいとは言え、熾火になりつつある炭の残り火を横目にしながらの会話は、帝国にいた頃にお供していた狩猟の際の焚火によく似ていた。

会話が無くとも気に病む事もなく、話しておこうと思つたことが不思議と口から洩れていく。とても贅沢な時間の過ごし方と言えなくもない。

「いつかユルゲン殿やシュテファン、ヴェルナー、それにユルゲン殿のお子様たちと一緒にこういう時間を過ごせる日も参りましょう」

「そうだな。そんな日が来ることを楽しみに生きるのも悪くはあるまいな……」

そんな事を話しながら、杯を傾ける。空になった頃合いで義息がグラスを引き寄せ、アイスパールから氷を入れて、ワンシヨット分のシングルモルトを注ぎ、私の手元に戻してくれる。流れる様な所作は店員顔負けだ。伊達に飲食店に営業をかけていた訳では無いという所か。

『カランツ』

グラスと氷がぶつかるキレイな音が静かな場に響いた。

「義父上、ウーラント商会も先行きは安泰。クリステインも頑張ってくれました。もし、私に何かあった場合は、シユテファン達をお願いいたします」

グラスの音をきっかけに、義息が話題を変えた。というか、これが本題だったのだろう。

「同盟の膿もある程度処理できました。このまま行けば、地方星系を中心に経済成長が進み、少なくとも帝国に負けない国力を得られるでしょう。後の気がかりは国防体制です。それさえ何とか出来れば、同盟は時間を味方に付けられるでしょう」

「うむ。という事は、30歳で年金資格を取って退役するという話は無理そうなのか？クリステインも楽しみにしていたはずだが……」  
「申し訳ありません。クリステインにも詫びるつもりです。ただ、良くも悪くも良縁に恵まれました。常識的に考えてあり得ない利益を得られたのもそのお陰です。今更、余生に困らない財産を得たからと言って、戦争から身を引くのは……」

「しがらみが出来過ぎたか……。もともと士官学校への進学を依頼したのもユルゲンの徴兵順位を下げる為でもあった。しがらみを作る切っ掛けとなった私に、それをとやかく言う権利などあるまいて……」

「そう深刻にお考えにならなくとも。私の僚友達はかなり優秀です。力を合わせれば、終戦とは行かないでしょうが、帝国軍に打撃を与え、平和な時間を多少は作れると思います。しがらみもありますが、子供や孫たちが少なくとも徴兵されない未来があるならば、賭ける価値はあるかと」

子供に孫か……。もしそんな可能性があるなら、私も志願を考えるだろう。カークは優秀な男だ。そんな彼がそう言うなら、十分可能性はあるのだろう。

「カークよ。バーベキューであつたか？子供たちと肉を食し、食事を終えた後は男性陣で火を囲む。なかなか良い時間の過ごし方であつた。ユルゲンとも、シユテファンとも、そしてヴェルナーともこういう時間を過ごしたいと思う。そして彼らも、お主とそう言う時間を過ごしたいと思うだろう。」

死ぬなどは言わぬ。ただ、生きて帰る努力を尽くすところで約束してもらいたい。誓つてくれるなら、クリステインの説得にも協力しよう。あれは一途に其方を想つておる。援軍なくば説得はおぼつかまい」

「義父上にはかないませんな。確かに単独でクリステインと向き合うとなれば敗戦は必至です。それに誤解されては困りますが、私は死ぬつもりはありませんよ。シユテファンもそうですし、タイロンとも酒を酌み交わしたいですね。習慣が抜けないように、私の留守中は折を見てバーベキューを主催頂ければ幸いです」

そこまで考えているなら、これ以上わたしが言うべきことはない。ん？もしや単独でクリステインと相對するのが不利とみてこの話を持ってきたのだろうか？我が娘ながらクリステインは可憐な見た目に反して、意志が強い上に一途にカークを想つておる。説得できなくはないであろうが、困難な戦場となる事は必定だ。

「カークよ。お主、謀つたな」

「それは言葉が悪いでしょう。難敵にあたる前に援軍を手配するのは軍人として当然の事です。私にとっては帝国の大艦隊並みの難敵ですからね」

そこまで聞いては笑いながら覚悟を決めるしかなかった。親族相手にここまで策をめぐらせるのだ。余程の事が無ければカークが戦死するような事はあるまい。ただ、母となり一段と凄みを身に着けている娘と相對する事を思うと、ため息が漏れた。

敵前逃亡だけはするつもりはない！ただ、士気が決して高いとは言

えない私を、どこまで援軍として当てにするかも、義息の軍人としての力量を計るのにちょうどよいのかもしれない。

## 第43話 捨てた者、残った者

宇宙暦736年 帝国暦427年 4月末

統合作戦本部ビル 情報部ミーティングルーム

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

「閣下。現在のジークマイスター分室は同盟のシンクタンクのような役割を果たしております。先だつての件も含め、当初期待された役割以上の結果を出せていると申せましょう。730年卒の俊英達を独占しているなどと言う妬みを鵜呑みになさいますな。国防員会も我々の働きに満足しているでしょう。予算折衝で大きな割合を必要とする以上、何かと苦言を言われてきた彼らにとっては、閣下は救いの神のようなものですから」

「少将、君にそう言ってもらえるのは嬉しい事だ。ただな、君も理解しているはずだ。亡命派との対立、浸透するフェザーンの影響力増加、経済的に放置された地方星系。帝国と相對するにあたって、片づけておきたい国内問題は、一定の解決を見た。地方星系も経済発展を続けていくだろうし、いずれは2次産業も立ち上がり、軍の補給線もより太く出来るだろう。後は……」

「そうですね。閣下のおっしゃる通りです。帝国の宇宙艦隊に打撃を与え、防衛体制を確立する。残念ながらそちらに関してはどうまく行つてはおりませんな。前線での遭遇戦は優勢ではあります。ただ、閣下から頂いた情報を含めるとオットー・ハインツ2世は先帝の庶子たちに四苦八苦している様子。宇宙艦隊を引き寄せるには、まだ時間がかかるでしょう」

亡命した時から付き合いのある大佐は、今では少将であり情報部長でもある。あの一件を処理する際、前任の情報部長が個人的に付き合いのある代議員に情報を流そうとしたことを掴み、内々に処理したことを踏まえての任命だった。それすらもシナリオのひとつだったのだから、彼も私の分室が現状を維持する事を望むのは理解できた。

「その通りだ。そういう意味でも、そろそろ彼らを私の手元から卒業させる時期なのだ。政府高官ともパイプを持ち、同盟の国内状況も大



梓は理解している。出身派閥も凶ったように分かれている。彼らが前線で活躍し昇進する事で、進みつつある融和もさらに盤石となる。いずれは軍内部の融和の象徴として、軍だけでなく、同盟を背負って立つ人材にまで成長する可能性がある若者たちだ。いつまでも抱え込んでおくわけにもいくまい」

「個人的には、シンクタンクとしての役割を果たす意味でも、各派閥に太いパイプを持っている彼らを手放すのは大きな決断だと思っておりました。ただ、そこまでお考えなら、私が口を挟む案件でもないでしょう。情報部としては、ジークマイスター分室にこれからも最大限協力するつもりです」

そう言うと、情報部名物のコーヒーを飲み干し腐れ縁の情報部長は、敬礼をして部屋を後にした。彼は諜報組織の長としては残念ながら平均点位の人材だ。帝国の諜報網に加えるとしたら、精々3次請けくらいか？

こちらが求めた情報は集めてくるので仕事が出来ない訳ではない。ただ、統合作戦本部なり各委員長なりに独自に強いパイプを作る機会があったはずだ。政争に巻き込まれるのを避けるために敢えてしなかったのだとしたら、彼はあくまで使われる側を望んだという事だろう。

ジークマイスター分室なり統合作戦本部なりリスクを負って指示を出してくれる飼い主がいれば活きる人材。そしてそんな人物がある意味戦争で最も重要な情報を取り扱う部署の長になる辺り、民主共和制も欠陥を抱えているのかもしれない。なかった。

私の分室から情報漏洩を避けるために、他部署との情報交換を行う際はあえてこちらが足を運んでいる。こういう場合、立場が弱い側が足を運ぶのが慣例だ。だからこそ中将待遇の私から足を運ぶ。中将クラスは各正規艦隊司令達、それ以上となれば宇宙艦隊司令長官や統合作戦本部長位だ。

ある者は敬意を払ってくれたと自尊心を満足させて協力的になる。あるものは何か狙いがあるのでと身構える。そしてこちらの打診を、むしろ安心して受け入れてくれる。階級が上でも、爵位が下だか

らとこちらの配慮を当然と思い込む帝国の連中からすれば可愛いものだった。

情報部のミーティングルームを後にして、ジークマイスター分室へ向かう。同志でもない少将に自分の判断を話すことで、そうせざるを得ない状況に自分を追い込んでいる一面があるのも確かだ。亡命者の中將待遇、統合作戦本部付きの特命担当分室を任されたとは言え、同盟政府の上層部に影響力を発揮し、膿の抽出を覚悟させ、その後の新体制をデザインする。

それが出来たのは、私が見込んだオレンジ頭の同志と、その僚友達  
の力があればこそだ。この数年、ジークマイスター分室は同盟で一番  
影響力のある組織だった。だからこそ、そろそろ彼らを解放する必要  
があつたのだ。

「我ながら意志が弱いにもほどがあるな」

生まれていれば私の子供の様な年代の青年たちと同盟をあるべき  
理想像に少しでも近づける日々は、思った以上に楽しい時間だった。  
このまま影響力を持ち続け、同盟を理想国家にデザインしなす。無  
視するには甘美な将来だ。

だが、特定の個人が考える理想を押し付ける事は民主共和制の理念  
に反する。巣立っていく若者たちが功績を上げ、民意を集められる強  
いリーダーとなる。その将来を可能性として残すためにも、私はすべ  
き事をしなければならぬ。

「室長、お疲れさまでした」

「うむ。情報部との協力関係は維持できそうだ。人員が減った分、忙  
しいとは思いが頼むぞ」

ローザス少佐がお茶の用意を始めるのを横目に、私のデスクに向か  
う。来月から、ターナー、アッシュビー、ウォリックの3名はこの  
分室を離れ、参謀本部付きとなりおそろく前線に向かうだろう。ジャ  
スパーが財務委員長との、ベルティニーがウォリック商会とのパイ  
プ役を引き継ぐ。ローザスとコープが各部署との折衝役なのは継続  
だが、来期には彼らも参謀本部に戻るようになるだろう。

「寂しくなるな……」

本心が思わずこぼれた。亡命した時に同盟の有り様には幻滅した。ただ、未来ある若者たちとの前向きに任にあたった時間は私の人生でも明るい日々だった。それを手放したくないと思うのは、許されない事なのだろうか？

彼らが万が一にも戦死するような事があれば、私の希望も消えてしまう。それを恐れるのは、弱さなのだろうか？好い年なのに思春期の若者が悩むような事を考える私は、自分で思う以上に青かったのかも知らない。

宇宙暦736年 帝国暦427年 4月末

ミヒヤールゼン男爵家所有の別荘

クリストフ・フォン・ミヒヤールゼン

「陛下はばらまかれた庶子たちにいつまで配慮しているんでしょう？軍と政府に押し付けられた彼らは間違いなく負債になっています。巻き込まれなければ静観もできませんが、各地の基地司令への横やり、補給線への口出しなど、我々の活動に支障が出ています。閣下、対処しますか？」

「いや、好きにさせておけ。先帝の庶子たちが帝国の方々をかじり倒している。我々の組織にとってはこの事実は好都合だ。活動の支障に関しては補い合えばよい。それ以上に、前線の後退に関しては、軍の、ひいては陛下の威光を損なうものだと噂を広めるのだ」

「ダゴンは守備隊の全滅という名目がありました。奪還作戦は検討中という事になっていますが、実質放棄。とは言え、パランディア・アルレスハイム・ティアマトの前線基地はなんとか維持されている。退くに退けなくさせる訳ですな」

同志の一人が同意するように頷いた。そう、帝国が維持しているイゼルローン回廊向こう側の拠点は、いわば蛾を引き寄せる篝火のような存在になっている。計った様に最低限維持可能な物資の補給のみが許されてはいるが、補給艦隊や遊撃に出ている独立艦隊は消耗を強いられている。『名ばかり少将』達の墓場となりつつあるが、先帝の庶子すら戦死させて維持した拠点だ。ただでさえ放棄できない状況で、

噂を流せば軍上層部は損切りしたくてもできなくなる。

「その通りだ。それに見逃される回を引き当てれば安全に功績も立てられる。ご先祖様たちの威光とやらを傘に着て、偉そうに踏ん返り返っている連中を追い詰める事もできるだろう。それとフェザーンの利権剥奪を煽らせるのも忘れずにな。名目はどうであれ、フェザーンが証券会社が潰れるほど同盟に利益供与したのは事実だからな」

「確かに。欲が人間の皮をかぶったような連中です。フェザーンに嫉めるには好都合ですな。このまま消耗が続けば、司令長官も重い腰を上げざるを得なくなりましょう。承知しました。同志たちにもさりげなく噂を広める様に働きかけます」

「活動費はいつもの所に置いてある。忘れずにな」

同志は敬礼をすると部屋から出て行つた。先帝の庶子たちは、文字通りウイルスの様に軍と政府に出血を強いている。孕ませる事624人。皇室には多額の礼金と結納金をもたらしてくれた。

ただ、押し付けられた貴族たちは当然お返しを求める訳だ。即位したオットー・ハインツ2世陛下には、即位直後から異母兄弟たちへの配慮という名の利権や立場を用意する事を求められた。

利権は当然他の貴族が所持していたものもあつたし、皇族に相応しい階級をという事で、将官の階級もばらまかれた。旗下に招いて万が一戦死でもされれば、破滅だ。名誉職がそんなにある訳もなく、独立艦隊に押し込まれた。

自制心がない彼らはおもちゃを与えられた子供も同然だ。与えられたおもちゃを使ってみずにはいられない。後は想像するまでもないだろう。取扱説明書すら読むこともせず、軍というおもちゃを使えばどうなるか？

幸い、相手はその道のプロだ。子供でも結果は予想できる。フェザーンにしても同様だ。連中は有力者にそれなりに資金提供しているはずだ。泣きついたフェザーンの要望をかなえられなければ面子が潰れる。先帝の庶子と門閥貴族に挟まれて、陛下も気の休まらない日々が続くだろう。

「提督はお元気だろうか？」

張り巡らせた諜報網を私に任せ、同盟に亡命したジークマイスター提督。理想を夢見て旅立たれたが、実際の同盟はどんな状況なのだろう。指示を受ける側だった頃は、組織での役割が上がるにつれ、達成感があった。

ただ、実際に自分がトップに立ってみると苦勞は多い。動機が異なる同志をまとめ、不平不満を解消し、組織としての成果をあちらに届ける。やってみれば提督の苦勞が実感できた。今更だが提督とワインを酌み交わしたいと日々思っている。そんなことが出来るはずもないのに……。

「私達の成果が、提督に活かされんことを……」

そう呟いて、手元にあったワイングラスを傾け、中身を飲み干した。

## 第44話 老提督との邂逅：黒幕

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン ローザス邸

ヤン・ウエンリー

「今話題の英雄に足を運んでもらえるとは、嬉しい限りだ」

「いえ。私も閣下の回顧録は何度も読ませて頂きました。機会があればお話を伺いたかったのですが、中々そうした機会に恵まれずにいた次第で……」

「そんなに構えなくても良い。君とは変な縁がある。半分は私の孫みたいなものだ。ミリアムはターナーに抱いてもらった事もあるし、覚えていないかもしれないが、君を私が抱いた事もある。まだ赤ん坊の頃の話だ。覚えていないのも無理はないけれどもね」

そう言いながらローザス提督は紅茶を用意してくれる。茶葉は実家でも扱っているシロン産のものだ。私も紅茶を常飲しているが、シロン産の紅茶が一番好みだ。軍で常備されているのは量産品のティーパックだ。年代物のティーセットも相まって、私は既にローザス提督に籠絡されかけていた。

「それで、引退した老人に話を聞きたいとの事だったが、どんな事だろうか？旧交を温めに来たという話でも構わないのだが……」

「はい。そもそもの事の始まりは、アッシュビー提督が謀殺された……。という投書が続いた事に始まります。軍部としても無視する訳にもいかず私がその任に充てられた訳です。功績を立てた私に、席が用意できるまで働いてこいという話でした」

頭を搔く私に提督も苦笑されていた。もし、もう一人の祖父のような存在だった彼が生きていたら、こんな話を聞くことが出来たんだろうか？彼が紅茶党だった事は、親しい間柄でなくても有名な話だ。提督も紅茶の香りを楽しみながら、ゆっくりと思案されている。当時は思い出されているのだろうか？

「それで、何から話せば良いだろうか？」

「私の本来の志は歴史家にありました。今回も捜査をするつもりはな

いのです。出来れば、私が聞きたかったお話を、提督にお聞きできればと……。」

それは私の本心だった。祖父のような存在だった彼が、家族の徴兵順位を下げる為に士官学校に進んだように、私も家族の徴兵順位を下げる為に士官学校に進んだ。父さんは代議士に献金すれば何とかなると言ってくれた。でもそんな事はして欲しくなかったし、させたくもなかった。

彼から最後に連絡を貰ったのは、シミュレーターターの授業で10年に一人の天才と言われたワイドボーンを破った時だ。大きなジュラルミンケースにぎっしりと詰め込まれた最高級のシロン産の茶葉。添えられたメツセージカードには

『苦労を背負いこんだな。戦略的大敗に最高の一杯を』

と達筆なペン運びで書かれていた。実際、それがきっかけで戦史研究科の廃止に伴って、秀才が集まる戦略研究科に転入させられ、軍人として不本意な出世をすることになるのだから敵わない。

「そうだな。未だに機密扱いの物もあるが、少佐になら話しても構わんだろう。ターナーの功績を君にも知っておいてもらいたい。それにしても、よく皆で話したものだ。なるべく長生きしよう……。先に死んだら悪口を言われる。死んでしまえば無条件降伏だ！とね。

私は彼らの中では決して優秀な存在ではなかった。ただ、優秀な人材は我も強い。組織として力を発揮するには、彼らを取り持つ潤滑油のような存在が必要だと考え、そうなるべく志を立てた。そんな私が生き残り、彼らを語るのだから運命というものは皮肉なのかもしれない……。」

そこで言葉を切り、紅茶でのどを潤すローザス提督。私もティーカップを手に取り、シロン産の紅茶特有の香りを楽しむ。マホガニーで統一された重厚な書齋には、こういうゆったりとした時間の使い方が似合う。私がこういう書齋に似合うようになるには、まだまだ時間が必要だろう。

「それで、何から話そうか？」

「まずはジークマイスター分室に関して、お聞かせ頂けないでしょう

か？佐官級のアクセス権で閲覧できる資料は閲覧しました。推察は出来なくはないですが、材料が足りません。提督にご迷惑にならない範囲で、お話頂けないでしょうか？」

「あの分室の詳細な実績は、少なくとも中将クラスのアクセス権が無ければ閲覧できないだろう。それを尋ねるといふ事は、将来少なくとも中将になるといふ事だな？」

視線を向けられたが、正直、私に出世欲はない。どうしたものかと頭を掻いたが、提督も半分冗談だったようだ。苦笑されて話を続けられた。

「ジークマイスター室長は、私達の教官でもあり、ある意味父親のような存在だった。思い返せば分室での経験は、同盟の上層部を担うための視野と組織の動かし方を、私達に身に着けさせるものだったと思う」

帝国騎士であり、帝国軍でも艦隊司令官の地位を持った現役の大將。そんな立場を投げ捨てて同盟に亡命したジークマイスター提督は、亡命にあたって統合作戦本部付きの特命分室を任された。その分室に所属した人員の名簿は諜報機関の前例に倣って存在しない。

ただし、ローザス提督を含む730年マフィアと呼ばれた男たちが任官後、それなりの期間所属していたのは確かだ。参謀本部に所属していた彼らの経歴の中で、前線で活躍を始める中佐以前の経歴は真っ白だ。一時期前線に出た者もいるが、祖父のような存在のターナー元帥は、中佐までは昇進した日付位しか記載がない。730年マフィアの中ではファン元帥の経歴も同様だった。

「あの分室は情報部とも太いパイプを持っていた。室長は帝国軍でも最高機密に触れられる立場であったし、当時の宇宙の状況を一番把握している存在でもあった。そんな場所に大した経験もない大尉が配属されたんだ。初めは右も左も分からなかったな」

情報部との太いパイプ、帝国の最高機密に触れていた責任者。中将待遇だったはずだから機密アクセス権もかなり高いレベルで付与されていたはずだ。宇宙のあちら側の事も含めれば、少なくとも同盟ではもつとも情報を集めていた組織と言えるだろう。



「配属当時は、『ハイネセンの嘆き事件』が明るみに出た頃合いでね。多くの代議士や高級官僚、そして企業人が罪に問われ政府が混乱している最中だった。慌てる各委員会や、経済界の有力者から状況を確認し、それを取りまとめる任にあたったのが私とコープだった。」

特に混乱の收拾を主導した財務委員会や経済界の雄には他の面々が担当として付けられていたな。同盟の最高幹部たちと日常的に折衝する日々の始まりだ。不思議と身が引き締まる思いがしたな」

提督が大尉になられたのは21歳の時だ。配属された正確な時期は不明だが、士官学校を卒業して数年でお偉方との折衝の日々、私にはとても勤まりそうにない。出来れば退役までそんな役割はしたくないが、式典など公務員である以上避けられない事もある。そんな将来が来ないように願いたい所だが、これもあの戦略的大敗により背負い込んだ苦労になるのだろうか？

「今でも機密指定にされている事だが、『ハイネセンの嘆き事件』の切っ掛けを掴んだのはジークマイスター分室だった。統合作戦本部付きの分室が、汚職事件発覚の切っ掛けと明らかになれば、政府と軍の信頼関係も揺らぐ。おそらく機密指定が解かれることはないだろう」

確かにそうだ。制度上、軍は国防委員会に属する組織だ。まだ法秩序委員会に属する捜査組織が切っ掛けなら公開もできただろう。統合作戦本部付きの分室がそれを担ったともなれば、軍が政府にノーを突きつけたに等しい。機密指定になるのも無理はなかった。

「その後が生じた『蝙蝠相場』で莫大な利益を同盟にもたらしたのもジークマイスター分室だ。担当していたのはターナーだが、私達も各方面に資金投入を依頼して回っていた」

『ハイネセンの嘆き事件』と同時期に発生した株式市場の大幅な値下がりとその後の高騰は、同盟と帝国、どちらにも良い顔をしていたフェザーンが天文学的な損失を出した事を揶揄して『蝙蝠相場』と呼ばれている。実家もその時期にかなりの利益を株式売買で上げていた。

合法的にフェザーンから資本を吸い上げた同盟では、それまで予算

不足を理由に放棄されていた地方星系のインフラ整備が進み、建国以来の高度成長期を迎える事になる。

「確証はないが、おそらく事件の混乱収束までのシナリオと対策を作成したのは室長、ターナー、フアンの3名だろう。折衝にあたって事前に対策案をいくつも用意して臨んでいたのは確かだ。あの当時、混乱収束までのシナリオと、その先にあるべき体制を具体案として持っていたのは、我々だけだった」

あの一件は同盟領内に影響力を強めていたフェザンへの危機感がきっかけと思っていた。確かに多くの不法行為が明らかになるが、混乱が収束した時には同盟の一人勝ちと言える状況になっていた。

天文学的な収益、フェザンの影響力の排除、亡命派との融和、地方星系への議席増。国内問題をあらかた片づけられたからこそ、経済成長が進んだとも言える。

「少なくとも数年は、同盟で最も影響力を持った組織だったと言えるだろう。だが室長は、混乱が落ち着いた頃合いで、それを支えた我々を参謀本部に戻し、分室の人員を削減してしまわれた。同盟自体を多角的にとらえる視野、上層部との太いパイプ、それなりの階級。実戦経験以外の上層部を担う人材として必要な要素を与えられた私達は、活躍の場を前線に移すことになる」

そこまでの影響力をもったジークマイスター提督は、同盟を陰から主導するという甘美な役割をなぜ敢えて捨ててしまったのだろうか？ 同盟市民の私から見ても、現在の同盟ですら理想通りには運営されていない。『ハイネセンの嘆き事件』の前なら、尚更腐敗が目についただろう。

自分の影響力を使って、理想の民主共和制国家を実現する。亡命するほど民主共和制に心酔していたなら、そう動いても良いのではないだろうか？

「少佐、君の言いたい事は理解できる。その答えは、室長が民主共和制に本当に心酔していたからだ。もちろん理想通りでない現実もあるだろう。ただ、今の同盟をデザインしたのは、当時のジークマイスター分室だ。言ってみれば、ジークマイスター体制は今も続いている

という訳だ。もちろん公言は出来ない事実だがね」

そう言いながら、提督が2つのティーカップに紅茶を継ぎ足してくれた。そうか、民主共和制を心酔していたからこそ、自分の理想を独断で現実にするわけにはいかなかった。そして彼が育てた730年マフィアの面々は、前線での活躍を通じて同盟軍の上層部を担う存在に成長していく事になる。

「一度お話を伺いたかったですね。もっとも民主共和制を担う市民としての心構えが足りない」と、怒られてしまいそうですが……」

「そうだね。私自身も、正直肩身が狭かった。民主共和制に関しても博識だったし、市民たちが聞けば苦笑するような理想像を信じておられたからね」

苦笑しながら頷く提督。彼が主導したジークマイスター体制の陰で、同盟は帝国に負けない国力を整える事が出来た。民主共和制の維持という観点では、国父ハイネセンやグエン・ギム・ホアに匹敵する功績を上げた方とも言える。

そんな存在が帝国からの亡命者だという事に、私は歴史の皮肉を感じずにはいられなかった。一步間違えば、帝国の改革の旗振り役となり、国力で圧倒された同盟が敗戦する未来もあったであろうから。

## 第二章 登場人物

### 第二章登場人物

カーク・ターナー

今作の主人公。おぼろげながらある島国の宰相として上り詰めた記憶を持つ（前世は田中角栄さん）オレンジの髪とエメラルドの瞳を持つ。超長期目線で、対帝国の必勝策を卒業論文とした。内容が内容の為、機密指定となるが、それがきっかけでジークマイスター室長に目をかけられる。

ジークマイスター分室では自主的に提案し、エルファシル駐屯地の増築、『ハイネセンの嘆き事件』『蝙蝠相場』への対応を担った。『蝙蝠相場』ではウーラント商会だけでなく、ターナー個人としても大きな利益を確保した。2章終了時は中佐として参謀本部に戻り待命中。

### ■家族と友人

両親

惑星エコニアの開発計画の話聞いて、全財産をはたいてそれに応じた。緑化事業の中止を受けて父親は心が折れ、母親は荒地で細々と農作をしていた。

第二章終了時ではカークを含めて4人の子供をもうけている。末っ子はカークの子供であるシュテファンとほぼ同年。カーク以外の子供の名前は、作者によって機密指定されている模様。

グスタフ・ウーラント

仕えていた貴族の政争に巻き込まれ、娘と息子を連れて同盟への亡命を決断した帝国騎士。ウーラント商会はターナーの指示のもと、『蝙蝠相場』で莫大な利益を確保した。財務責任者として何度も金額を確認したとかしてなかったとか。

義息のカークには恩義を感じているが、カークも見込んでくれた事を恩義に關しているため、関係は良好。孫たちとバーベキューをするのが楽しみの一つに加わった。

クリステイン・ターナー

今作のヒロイン。商会の経営を助ける為にテルヌーゼン市立経済

大に進学した。既に3人の子供を授かっている。接する機会が多かったカークの僚友達には、淑女然とはしているが、実は嫉妬深くてヤバイ事がうすうすバレている。

シユテファン・ターナー

カークとクリステインの嫡男。名付け親はウォーリック商会 会長のグレック・ウォーリック

エリーゼ・ターナー

カークとクリステインの長女。名付け親はオルテンブルク侯爵（ジャスパーの祖父）

ヴェルナー・ターナー

カークとクリステインの次男。名付け親は祖父であるグスタフ・ウーラント

ユルゲン・ウーラント

ウーラント家の嫡男。カークの義弟。優しい性格で才覚もあるそうだが、軍人には向かないと父親は判断していた。カークを始め、周囲のできる兄貴分たちを尊敬し、また可愛がられた。

ハイネセン記念大学を卒業し、エドワーズインダストリーで修行中。在学中から付き合っていた、エドワーズ・ジェシーと婚約した。

トーマス・ミラー

カークの4歳年上で、兄貴分。井上商會が捕虜収容所内に出店していた売店を任されていた。年の近いカークに井上商會の業務を教えたのも彼。母の妊娠を機に家計を助ける為に志願した。

新兵訓練を終え、任地であるカプチェランカの途上であるエルファシルで、ヤン・シーハンと出会い、恋に落ちる。任地であるカプチェランカの基地が帝国軍の大規模攻勢を受け、戦死した。

ヤン・シーハン

カークの兄貴分のトーマスと出会い、恋に落ちた。共にいたの是一夜だが、お腹に命が宿る事となる。命名はタイロン。誕生日プレゼントを毎年とどけに来てくれていたキャプテン佐三と相思相愛となり、結婚した。（法的には初婚）

ヤン・タイロン

カークの兄貴分であるトーマスとシーハンの子供。銀英伝原作読者なら知らないはずはないある人物の父親でもある。原作比で7年早めの登場。カークと出光による商人としての英才教育が開始されている。余談だが、初めて押印した契約は500万ディナールの案件だった。

アデレード

長年の浸透戦術により、遂にブルースに年貢を納めさせた女傑。ただし彼女がブルースを想うあまり束縛するほど、ブルースはその束縛から逃れようと浮気をする為、必ずしも夫婦仲は良くはない。カークの縁に成功したクリステインとは真逆の結果になっている。

カトリナ・ローザス

進路は士官学校に隣接する音楽学校。カーク達の会食にも参加しており、クリステインとも友人である。アルフレッド・ローザスと結婚した。2児の母。

ファネツサ

カークがダンスパーティーに参加する代わりにファンダンスのダンスパートナーになった音大生。コミュニケーションが苦手なファンに合わせて楽しい時間を過ごせる。ある意味逸材。

子供を2人授かった後も、毎日の愛妻弁当は欠かさない。ジークマイスター分室で愛妻弁当を食べるファンの姿は、ランチタイムの風物詩でもあった。

■ビジネス界

井上オーナー

誠実な商売を心掛けるウォリック商会から独立した商人。惑星エコニアで食品を軸に商会を経営している。エコニアに新設された捕虜収容所内に売店を出店していた。カークとの縁もありエコニアの顔役ともいえる立場に。帝国風の食材を振舞うことにより、捕虜たちの同盟への同化に一役買っている。

キャプテン佐三（出光佐三）

井上オーナーと同じく、ウォリック商会から独立した商人。商船の船長も勤める。定期的に会う機会があったヤン・シーハンとの一時

に安らぎを感じ、求婚した。タイロンの養父となる

グレック会長 イネツサ夫人（ウォーリック商会）

ウォーリック商会の先代。現在は息子達に経営を任せている。バート系融和派の雄であり、亡命帝であるマンフレート2世とも面識があり、帝国の美術品にも造詣が深い。『ハインセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』に際しては同盟経済界を主導する立場となり、多大な利益を同盟にもたらした。

ヴァレンティ補佐官

フェザン自治領主府に所属する補佐官。同盟方面の案件を担当していた。『ハインセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』で、同盟に持っていたフェザンの影響力は失われ、天文学的な損失が生まれた。後始末を終えた段階で、倒産した証券会社社員の逆恨みから射殺された。あまり話題にならなかったが、補佐官には本来護衛が付くことになっており、本来ならあり得ない状況だった。

## ■政界

ナタリー・アツシユビー

国防委員会に所属する代議員。ブルース・アツシユビーの母。夫は軍需系の企業で役員をしている。事実上の別居状態。見た目も麗しく、人妻と承知で口説いてくる相手も多いが、靡かない。末っ子のブルースが大好きで、何かと構うが嫌がられている。

『ハインセンの嘆き事件』の解決にあたってブルースに貸しを作ったと判断して、代議員業を廃業して料理研究を始め、ブルースに試食役をさせようと画策中。懇願されて財務委員長として同盟の混乱を収める。アデレードとの夫婦仲を心配もしている。

ラファエル

財務委員会所属の代議員。顔と弁舌だけが取り柄。圧倒的な女性票の確保で当選している。男性からの支持は壊滅的。ナタリー・アツシユビーとは旧知の仲だが、中身がない事は彼女にも見透かされている。懇ろになろうとナタリーを口説くが袖にされている。

## ■亡命派

クラウス・フォン・オルテンブルク

ジャスパールの祖父。ジャスパールの活躍と亡命派への貢献を嬉しく思いつつも、亡命派の疑似的な貴族制を維持するために、それを公言出来ずにいる。付き合いのあるベルティーニ家を通じて、ジャスパールが縁を紡いだ案件に贖罪を兼ねて投資している。

クラウディア・フォン・オルテンブルク

クラウスの妻、ジャスパールの祖母。本当なら初孫であるジャスパールを可愛がりたかった。ただ、正室との間に子供がいなかった為、可愛がればジャスパールの身が危険になると判断し、厳しく接した。ジャスパールの活躍を応援するために持参金を投資案件につき込むように進言した。

## ■軍関係

### 【帝国軍】

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

自分が生きている内は結果が出ない打倒帝国の夢を新しい希望とし、ターナーを支援する事にした。一時的には同盟内で屈指の影響力を得たが、個人の価値観で民主共和制の理想を実現する事は、民主共和制に反すると判断し、鍛えた730年マフィアの面々を分室から送り出した。

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

自身の手腕を発揮できる場として進んでスパイ網の構築・維持に取り組んでいた。ジークマイスターが同盟に亡命した後は、帝国に於けるスパイ網のトップのような立場となっている。先帝がばらまいた624人の庶子をネタに、帝国内に不和の種をばらまいている。

### 【730年マフィア】

ブルース・アッシュビー

少尉の身である無名時代から大佐より偉そうに見えたという逸話が残る。正にこの時代の同盟版ラインハルト。プライベートでは長年浸透戦術を仕掛けたアデレードに、遂に年貢を徴収される。

何かと束縛するアデレードとの夫婦仲は良いとは言えない。『ハイネセンの嘆き事件』では分室と財務委員会（委員長は母）とのパイプ



役を担当。2章終了時は中佐として参謀本部に戻り待命中。

アルフレッド・ローザス

沈着で公正な良識人。優秀な同期達に称賛を感じつつも、劣等感を感じていたが、それを昇華し優秀な同期達の潤滑油足らんと志を立てた。幼馴染のカトリナ嬢と結婚。夫婦仲も良好で2児に恵まれている。

『ハインゼンの嘆き事件』では財務委員会以外の各委員会、経済界のキーマン達とのパイプ役を担当した。2章終了時は少佐としてジークマイスター分室で励んでいる。

フレデリック・ジャスパール

とかく派手な用兵を好む亡命系原理派の雄、オルテンブルク侯爵家の庶子。彼自身は亡命してすら疑似的な貴族制を取る亡命系原理派に息苦しさを感じていた。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。ベストカップルにも選ばれている。

3児を授かっており、公私ともに順調。『ハインゼンの嘆き事件』ではアッシュビーと共に、財務委員会とのパイプ役を担当。2章終了時は少佐としてジークマイスター分室で励んでいる。

ヴィットリオ・デイ・ベルティニー

ヘビー級ボクサーのような体躯に、無数の小さな戦傷にいろどられた赤銅色の顔と剛い頬髯という見た目。体躯は全く正反対の小柄な音大生と恋仲になり結婚した。

『熊とリスの結婚』などと揶揄されたが、それでも嬉しそうにしていたほど妻に惚れている。惚れたのは妻にか？妻の料理なのか？は明らかになっていない。4児に恵まれている。『ハインゼンの嘆き事件』では経済界の雄であったウォーリック商会とのパイプ役を担当。2章終了時は少佐としてジークマイスター分室で励んでいる。

ウォリス・ウォーリック

常に容姿・言動がキザで芝居がかっており「男爵」と揶揄されたが、むしろ本人が気に入って自ら名乗るほどだった。バーラト系融和派の雄であるウォーリック商会の直系の3男。

年貢を納めていく僚友達を尻目に、恋愛を謳歌しているが、相手を

泣かせるような事はしない為、周囲も強く言えずにいる。『ハイネセンの嘆き事件』では経済界の雄であったウォーリック商会とのパイプ役を担当。2章終了時は中佐として参謀本部に戻り待命中。

ファン・チューリン

この時代では少ない地方星系出身の候補生。人間関係の構築を苦手としていたが、僚友達の影響もかなり改善された。ダンスパートナーとなったファネツサと結婚し、2児を授かる。

ジークマイスター分室では分析官のような役割を果たしていた。手堅い仕事で集められた情報を取りまとめ、『ハイネセンの嘆き事件』では彼の集めた情報を元にシナリオと対策案が作られた。原作からかなり改変された人物の一人。2章終了時は中佐として参謀本部に戻り待命中。

ジョン・ドリンカー・コープ

ドリンカーというミドルネームだが酒は一滴も飲めず、勝利の祝杯もアップルジュースで済ました。バーラト系原理派出身でブルースとは幼馴染。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。2児を授かっている。

『ハイネセンの嘆き事件』ではローザスと共に、財務委員会以外の各委員会、経済界のキーマン達とのパイプ役を担当した。2章終了時は少佐としてジークマイスター分室で励んでいる。

## 漸減戦 宇宙暦736〜738年 第45話 タイロンの志

宇宙暦736年 帝国暦427年 8月末

エルファシル 第3駐留基地

ヤン・タイロン（12歳）

初等学校を卒業してエルファシルでは優秀とされるイースト校に進学して初めての夏休み。僕は相変わらず増設工事の音が響く駐留基地の敷地を表すフェンスを横目に、テクテクと基地東ゲートを目指していた。兄のような、もう一人の父親のようなカーク兄ちゃんとの関係は、不思議なものだった。

僕の本当の父さんはトーマス・ミラーという人だ。写真も見た事があるけど、優しい気な人だった。でも、僕が生まれてすぐに戦死してしまっただけから、実際に会ったことはない。そんな父さんの弟分だったのがカーク兄ちゃんだ。

誕生日ごとにシルバーカトラリーをメッセージカードを添えて贈ってくれるし、7歳の時にはビジネス界で重要視されている『初契約』をさせてくれた人でもある。母さんの再婚相手である佐三父さんに言わせると、『初契約』の金額が高い方が将来の成功につながるって言われているとの事だ。僕の初契約は500万ダイナール。当時のエルファシルで望みうる契約では最高額と言えるものだったらしい。

最も、当時の僕はそんな事は知らなかった。ただ、イリジウムで作られた大きな目の印鑑の重さに、少し緊張した覚えはある。その時売買契約した土地に、駐留基地が増設されている関係もあって、僕は基地を見るのが好きだった。

不思議な関係のカーク兄ちゃんは仕事も謎だった。母さんが働いているウーラント商会の社長のはずなのに、軍人でもあるらしい。でも軍人さんなら軍服を着ているはずだけど、いつもスーツ姿だ。

初級学校の卒業記念でバーラト星系に行った時も、スーツ姿だった。観光の定番である統合作戦本部ビルではなく、証券取引所やハイ

ネセン記念大学を案内してくれた。同僚だと言う人にも会ったけどスーツ姿だったし、ランチと一緒に食べた時は、再放送されているマフィアドラマみたいな雰囲気があった。

カーク兄ちゃんの義弟だというユルゲンさんや、子供のシユテファン君達に会うまでは、変に緊張する事が多かったと思う。奥さんであるクリステインさんは母さんとは違ったタイプだったけど、優しい人だった。

「お！坊主、今日も来たのか？少し待ってろよ」

「うん。いつもお勤めご苦労様です！」

そんな事を考えているうちに、東ゲートに到着していたみたい。警備課のおっちゃんやんが声をかけてくる。僕がそう言って敬礼すると、いつも苦笑する。カーク兄ちゃんの部下の人たちは嬉し気に頭をなでしてくれるのに、この人だけ反応が違うんだ。なんでだろう……。

「おっ！タイロン君、今日も来たのか。お疲れ様」

「軍曹殿、お勤めご苦労様です！」

しばらくゲート傍で待っているとカーク兄ちゃんの部下のハドソン軍曹が迎えに来てくれた。嬉しそうに頭を撫でた後に、ビジターと書かれた大き目のプレートを首にかけ、僕には少し大きいヘルメットを被せてくれる。

「ではタイロン特務兵、参るとしよう」

準備が終わった頃合いで、軍曹が敬礼をしてくる。僕も敬礼するといざ基地の中へ。カーク兄ちゃんの部隊がいる格納庫までの道のりも、僕にとっては楽しい光景だった。効率を考えた施設配置。その中を走る輸送車。掛け声を上げながらランニングする軍人さん達。小さい頃から出入りしていたウーラント商会とはまた違った組織美みたいなものを感じて、変に気持ちが高ぶるのだ。

「特務兵、今日も来たのか？熱心だなあ」

「こつちに熱心になっちゃダメだぜ！偉くなった時に乗る戦艦を買ってもらうんだからな」

格納庫に入ると、顔なじみになったカーク兄ちゃんの部下たちが声をかけてくる。軍の広報活動では志願を募っているけど、彼らはそん

なことは言わなかった。『偉くなつてしつかり稼いで戦艦を買つてくれ』とか、『艦隊司令になるから艦隊整備費を頼むぜ』と言いながら肩に触れてくる。

そして軍の支給品であるやけに甘いチョコレートや、オレンジジュースを『投資だ!』といつて勧めてくるのだ。母さんに見つかったらジャンク食品だから止められそうだけど、大人たちに囲まれながら食べるジャンク食品には変なおいしさがあつた。

「タイロン、今日も来たのか。夏休みの宿題はちゃんと済ませたのか？」

「ターナー中佐殿、任務はしつかり果たしております!」

敬礼しながら応じると、苦笑しながら答礼してくれた。『ヘルメツトは脱ぐなよ』と添えると、格納庫内に設置された訓練機材に戻つて行く。この格納庫には実寸大の新型偵察艦の主要部分が再現されている。先月からエルファシルに移動したこの部隊は、転換訓練を開始し、それが終わり次第、前線で偵察任務に当たると聞いていた。

先週末に基地食堂で夕食を一緒に食べた時、転換訓練がもうすぐ終わる事もなんとなく察していた。僕の夏休みが終わる頃には、この部隊は最前線に向かうことになる。

「従来艦に比べて出力に特化した分、戦闘機動に独特の癖があります。スパルタニアン程ではありませんが、メリハリを付けないとせつかくの特性を活かしきれないでしょう」

「バスケス中尉の意見はもつともだ。慣性を感じながら操艦するとなると、実機で身体に覚えさせるしかないな。スパルタニアンのパイロット指導要綱をベースに、訓練計画を組んでもらえるか?」

「了解しました。予定航路上で良い訓練場所も探してみます」

カーク兄ちゃんと相談しているバスケス中尉は、この部隊では数少ない女性士官だ。もともとはスパルタニアンのパイロットで、部隊新設に伴って異動してきたそうだ。はたから見ていると精悍な感じで、体操のお姉さんみたいな雰囲気をしている。

実戦経験もあつて、帝国のワレキュレを5機落としているからエースでもある人だ。転換訓練が始まった時から、従来 of 戦闘艦とは

特性が違うらしく、運用手法を航海長と3人で良く話し合っていた。そしてバスケット中尉とは内緒の約束がある。

『ねえ？タイロン君は隊長の隠し子なの？』

バスケット中尉がプリンをご馳走してあげる！と言って、一人で食堂に行った時にそう聞かれたのだ。僕もその可能性を考えた事もある。でも僕がカーク兄ちゃんの子供だとしたら14歳の時の子供になる。当時は士官学校対策でエルファシルに来る暇なんて無かっただろう。母さんに聞いてみようかと思っただけ、悲しい表情をされそうでなんとなく言い出せなかった。

『変な事を聞いてごめんなさいね』

そう言いながらバスケット中尉は頭を撫でてくれた。そしてこの一件は二人だけの秘密にしようという話になった。別に気にしてはいないんだけど、なんかそう言う雰囲気だったから僕もしんみり領いておいた。そう言う話が流行っていたのか？ハドソン軍曹も、デラックスランチを奢ってくれると言う名目で食堂に連れ出されて同じことを聞かれた。そして同じように内緒にしようという話になった。

後で聞いた話だと、部隊の中で僕がカーク兄ちゃんの隠し子かどうか？をネタにして賭けが動いていたらしい。情報を制する者はビジネスを制する。それは賭け事の場合でも適用されるらしい。

いち早く動いたバスケット中尉が結構稼いだ。なんて話も漏れ聞いていた。バスケット中尉はプリンで儲け話をつかみ取り、ハドソン軍曹は4倍近いデラックスランチを投資しながら儲けを出せなかった。ビジネス界の厳しさを表す昔話に出てきそうな実例が目の前で起こったのだ。

「タイロン、明日から訓練も大詰めになる。集中しないと危険だから遊びに来るのは今日までだ。すまんな」

「タイロン君、そろそろ夕食の時間でしょ？送っていくわ」

カーク兄ちゃんは比較的甘やかせてくれるけど、ダメと言ったらダメなタイプだ。折角親しくなれたのに残念な気持ちもあるけど、僕が邪魔をして万が一の事があってはならない。今までの感謝を込めて一礼し敬礼すると、みんな答礼してくれた。

バスケス中尉に先導されて東ゲートに向かう。今までなんとなく組織美みたいなものを感じていた基地内の光景も、戦争で死なないという想いの表れだったのかもしれない。深く考えずに見慣れていた自分が、急に思慮足らずなように思えた。

「まだ子供なんだから、難しい事を考えなくてよいのよ。隊長は私たちがちゃんと守るんだから」

表情に出ているのか？バスケス中尉は右手で僕のヘルメットをガシガシしながら左腕で力こぶを作った。中尉の大きな瞳で見つめられると、妙にドキドキする。もつと大人なら、何かうまく返せたのかもしれないけど、僕には領く事しか出来なかった。東ゲートに到着し、ビジターカードとヘルメットを返却する。

「タイロン君が口の堅い男だったから臨時収入があったの。だからおすそ分け」

バスケス中尉はカバンから同盟軍のベレー帽を取り出し、ヘルメットのせいで少し汗をかいていた僕の頭をハンカチで拭いてから被せてくれた。

「隊長の許可もとってあるわ。ちゃんと第111強行偵察大隊のワッペンも付けてあるの。レアものなんだから大事にしてよね」

そう言いながらバスケス中尉は僕の事を抱きしめてくれた。見つめられる時と比べ物にならないくらいドキドキした。

「それじゃあタイロン特務兵。私達の帰る場所をしっかりと守ってね」「はい。中尉もどうかご無事で」

そう言いながら敬礼する中尉に答礼する。『じゃあ、またね』と言い残して、中尉は格納庫に戻って行った。小さくなる中尉の背中が消えるまで佇んだ後、僕は家路につく。来た時にはかぶっていなかったベレー帽が不思議と誇らしかった。

普通に考えたら士官学校を目指すべきなのかもしれないけど、夏休みを共に過ごした大人たちは『稼いで戦艦を買ってくれ！』と言っていた。ハイネセンで同席したアッシュビーさんやファンさんも『軍人になるより事業で稼げ！』って言うてくれた。正規の一個艦隊の整備費がどのくらいの金額になるのかは分からない。でも幼いなりにビ

ジネスの場を経験しているんだ。

「いつか、正規艦隊分くらい納税できる商人になろう！」

ベレー帽を手に取り、第111強行偵察大隊のワツペンに向かって僕は誓いを立てた。この日から経済界では名門とされるハイネセン記念大学に進路希望を定め、商人としての進路を、僕は歩み始めることになる。

誓いを忘れないためにベツトサイドにこのベレー帽を飾るのだが、つらい事や怠けそうになった時、このベレー帽が僕の力になってくれるのは。また別の話だ。



## 第46話 複雑なバスケス

宇宙暦736年 帝国暦427年 10月末

アスターテ星域 外縁部

エレン・バスケス（中尉）

「高速機動訓練は一通り終わった訳だが、航海長、バスケス中尉、どう判断する？」

「正直、訓練で如何こうするには無理があるのではないのでしょうか？従来の航行システムで対応するにも無理がある様に思います」

「小官も残念ながら同じ考えです。猛訓練を積み重ねれば何とかなるかもしれません。ただ、それこそスパルタニアンでの格闘戦でトップクラスになり得る人材を集める所から始める必要があるでしょう」

「そうか。専門家の君たちがそう判断するならそうなんだろうな……」

エルファシル星系を出発し、同盟の勢力圏であるアスターテ星域外縁部に進出した第111強行偵察大隊は実戦に基づいた高速機動訓練を開始している。2隻の僚艦と共に編隊を維持する訓練は残念ながら成果が出ていると言える状況ではなかった。新造された強行偵察型巡洋艦は、武装を減らし、新開発の核融合炉と新型エンジンを搭載する事で、高速かつ中和磁場のキャパシティーを高めた仕様が特徴。

加速に関しては従来の巡洋艦の50%増し、ミサイルを始めとした実弾兵器はその加速で振り切る。中性子ビームを始めとした光学兵器は中和磁場で防ぐ。攻撃能力は皆無に近いものの、強行偵察に必要な能力は十全に備えている。無難な設計に落ち着きがちな技術科学本部が、久しぶりに冒険した設計とも言えた。でもそこに従来通りの航行システムを採用した結果、直線航行には支障はないが、高速機動に関しては上昇した出力が災いし、性能を活かしきれずにいた。

「簡単に言うと、大型トラックでドリフトしながらカーブをきれいに曲がろうとしているような状況です。従来型の操艦システムはそのような使用法を想定していませんから対応不可。努力で何とかしよ

うにも、それこそ手足のように乗りこなす修練が必要でしょう。艦の大きさを踏まえるとスパルタニアンの比ではない難易度になると思えます」

うんうん。航海長の例えは分かりやすい。技術的なアプローチを航海長が、人的努力によるアプローチを私が担当した訳だけど、確かに厳しいわよね。とは言え、スパルタニアンの戦闘技術を買われて呼ばれたんだもの。何か妙案を出したい所だけど……。

「発想を変える必要があるそうだな。強行偵察という任務を考えれば、縦横無尽に機動する必要はない。基本的な戦闘機動が取れば問題ないのではないか？」

「確認は必要ですが、戦闘機動のパターン化は可能です。ただ、それを現在の人員と装備で実戦中にミスなくできるかというのが厳しい……。」

「おっ。バスケス中尉は気づいたようだな」

嬉しそうな表情をする隊長。タイロン君も可愛かったけど、中佐もこういう時は可愛いんだよね。既婚者なのは知っているけど、密かに女性兵の中で人気なのも分かる。真剣に思考していたかと思うと、いきなり嬉しそうな表情をする。まあ、解決策が見つかったからなんだろうけど、こっちまで嬉しくなってしまう。

「はい。要は戦闘機動を高速で行うのに必要な機動はパターン化できる訳です。あとはそのパターンをプログラムで用意してしまえば、比較的簡単な操作で高速戦闘機動が可能になるのではないのでしょうか？」

「それなら対処可能です。ただデータの収集と機関コントロールと連動させる必要がありますので、プログラミングと機関に詳しい人材が欲しいですな」

「ならハドソン軍曹だな。あいつは志願する前はエンジニアだったはずだ。機関長でもあるから最適な人材だろう。軍曹には私から相談してみよう。航海長はプログラムを組み込む準備、バスケス中尉は必要な戦闘機動の割り出しを進めてもらいたい。使えるレベルの機動データを3艦で収集し、プログラムを共有すれば、余程の事でもない

限り、編隊機動の難易度も下がるんじゃないかな？」

確かに同じタイミングで同じプログラムを走らせれば対応は出来そうね。そういう意味では逆に必要な戦闘機動は出来るだけ絞った方が、操作ミスも減るし良いかもしれない。スパルタニアンの常識だけで考えるのは危険ね。航海長や僚艦の艦長たちにも意見を出してもらう必要があるかも……………」

「それじゃあ機関部に行つてくるとしよう。こう見えて、もともとは商船の機関員だったんだ。新型のエンジンも見ておきたいしな。航海長、ここは頼むぞ」

そう言うのと隊長は機関部へ続く通路に消えていった。悪い事じゃないんだけど、第1-1強行偵察大隊に配属された多くの隊員は、隊長の腰の軽さに戸惑うことが多い。26歳で中佐、士官学校を出て以来参謀本部勤務。よく言えばエリートだけど、悪く言うくと現場軽視、頭でっかちなのが普通。そういう予想をしていた隊員たちにとって、隊長は真逆の存在だった。

その道のプロとして、敬意を持って接してくれる。気前も良かったし一般的には良い上官なんだろう。でも陽気なハドソン軍曹も当初は接し方に困っていた。兵士たちの訓練にも一緒に参加していたし、知り合いだと言うタイロン君の出入りも許していた。後から聞いたら『参謀本部のもやし君じゃ隊長として不安だろう？』とか『異性と子供の前では、男はかっこつけたがるものだ』とか、まあ兵士たちの心情をよく理解されていた。参謀本部ではそういう事も習うのかしら？

「参謀本部としても、強行偵察を今後の重点項目と考えているのかもしれません……………」

「航海長、やっぱりあの噂って事実なんでしょうか？」

「ええ。戦闘詳報を見る限り、帝国さんは『名ばかり少将』が多いのは事実だと思います。フェザーンとも残念ながら友好と言える状況では無くなりました。幸いなことに帝国が前線に進出するには必ずイゼルローン回廊を通りますから、正規艦隊が出てくる前に索敵体制を何とか確立したいのでしよう」

正規艦隊が出てくる前に索敵体制の確立を、か。確かに前線では帝国の地上基地を敢えて放置する事で補給の必要性を残し、補給艦隊を間引きする事で帝国軍に出血を強いている。優勢な戦況に喝采をあげる市民も多いと聞くけど、少なくとも軍上層部は油断していないって事ね。

「そうでなければ、中尉のようなエースパイロットをわざわざ引き抜いたりしないでしょうしね。そこまでするならカスタマイズされた航行システムも用意して欲しい所ですが、この艦がどこまで量産されるかわかりませんからね。前線で使用しながら改善点の洗い出し、仕様変更、基本的な運用手法の確立。隊長はそのあたりも期待されているのでしよう」

「それも踏まえて兵士たちにもああいう接し方をされたのかしら？現場が意見を言いやすいようにとか？」

「むしろ、人柄が大きいと思いますね。日常生活を共にしているのにずっと演技は出来ないでしょう。最前線に向かう可能性が高い以上、最後に信じられるのは大隊の隊員ですからね。あれが演技なら、隊員たちもあそこまでなつかないでしょうし……」

うちの馬鹿どもの懐き様は確かに異常よね。そりゃ敬意を持って接してくれて、気前も良いから分からなくはないけど……。って、懐いているのはあたしも同じか……。新型エンジンだから変な癖とかあるかもしれないし、あたしもハドソンから話を聞いておいた方が良いかも。

「ちよつと機関部に行つてきますね。思ったより重要な任務になりそうだし」

「了解しました。艦橋は任せてください」

航海長に会釈して機関部に向かう。乗り慣れていた宇宙空母は居住区画も広かったけど、この艦は通路とかも狭いのよね。頭上に気を付けながら機関部への通路を進む。戦艦クラスの核融合炉に、高出力のエンジンを4つも巡洋艦クラスのサイズに押し込んでいる分、スペースに余裕がない。居住性とかも隊長に意見すれば改善されるのかしら？

「隊長、プログラムを組むのは何とかありますが、エンジン出力を短時間にオンオフするのは想定された使い方じゃありません。最悪どこか破損する可能性がありますね」

「なら戦闘時と別に緊急時のプログラムとして用意するか？ただ、偵察艦がそこまでして回避機動をしないとイケないとなると、その時点で強行偵察任務としては失敗か？」

「そういう状況が無いとも言えませんし、あつしも新型エンジンの出力特性には興味があります。緊急バージョンでどこまで機動が変わるかにもよりますが、可能性を捨てちゃうのはもったいない気もしますね」

機関室の隔壁扉を開けると、既にワイワイ盛り上がっているようだった。商船でも軍艦でも機関員つて変な団結心があるのよね。つて、出力のオンオフでエンジン破損の可能性か。そんな大事な事、先に聞いておかないと駄目じゃない。

「お！姐さんも来なすったんで？」

機関員の一人が声をかけてくる。姐さんつて、私だつてまだ24歳よ！あんたらに姐さんなんて言われる筋合いないし、そもそも隊長の前で姐さんなんて呼ぶな！こいつには後で制裁が必要ね。

「隊長、機関部門の意見も先に聞いておくべきかと判断しました。同席しても宜しいですか？」

「おお、中尉も来たのか。もちろん構わないぞ。どうやら短時間でのエンジン出力のオンオフは、破損につながる可能性がありそうだな」  
そこからあたしもエンジン談義の輪に入った。つて悪くはないけど勝手に盛り上がっている機関員の中になると、運動部のマネージャーになったような気になった。まあ、キャプテン役がタイプだから問題はないんだけどね。

## 第47話　ダゴンでの年末

宇宙暦736年　帝国暦427年　12月末

ダゴン星域　アステロイドベルト

カーク・ターナー

「物資の積み込み作業は1500には完了見込みです。隊員たちも張り切ってますから、予定より早く完了するでしょう」

「了解だ。その後は半舷休息で24時間この場に留まる。折角の年末がこんな僻地ですまないが、その分、飯を豪勢にするように頼んでいた。英気を養うように努めてくれ」

船内通話で指示を出していたハドソン軍曹に答礼して通信を終える。ダゴン星域の惑星カプチェランカにあった帝国軍の地上基地を殲滅した同盟軍であったが、経済的価値が皆無な事もあり、その後地上基地を復旧するような事はしていない。一方で比較安定したアステロイドベルトの小惑星のいくつかの内部をくり抜き、簡易補給ポイントを新設していた。

俺達はその一つから、物資を搬入している所だ。星系の中心にある恒星の活動の影響は皆無ではないが、宇宙空間は基本極寒だ。天然の冷凍庫のようなものだから、維持費もかからず俺達のような小規模編成の部隊にとってはありがたい存在だった。

「データでは見たことがあるが、実際に見ると凄まじい星系だな。こんな所で防衛戦を仕掛けた両元帥にも頭が下がるが、帝国の連中も良くもまあこんな星系に大軍で侵攻したものだ」

「隊長はダゴン星域は初めてですか？私も初めて見た時は驚きました。ダゴン星域会戦と言えば、同盟市民は知らない者がいない会戦ですが、良くもまああって思うのも無理はありません」

航海長が肩をすくめながら同意を示してきた。俺にとってはトーマスの最期の地という印象が強いダゴン星域だが、ここは航路としては最悪な場所だ。恒星を中心にいくつものアステロイドベルトが渦を巻き、索敵の面だけでなく、補給の面でも最悪の環境だ。商船経験のある俺からすると、こんな航路は通りたくない。

機敏な動きが出来ない大型商船だと、余程のベテラン航海士でもない限り接触事故が起きるだろう。防護磁場の出力が小さい商船にとっては、致命傷になりかねない。それは軍の輸送艦でも同じことが言える。

せめて惑星カプチェランカの環境がもう少しまともなら話は変わるのかもしれないが、一年の半分がブリザードな事で有名なあの惑星を、少なくともリソースを割いて維持する価値はないだろう。モニターに小さく映る惑星カプチェランカに、俺は自然と黙祷をしていた。

イゼルローン回廊の同盟側で、帝国が地上基地を維持しているのはティアマト、パランディア、ファイアザードの3星系だ。帝国軍の正規艦隊を釣り出すにあたって、戦場をどこにすべきか？という議論は、参謀本部でも行われているし、ジークマイスター分室の面々とも何度も話し合った事がある。

同盟軍の勢力圏であるアスターテ星域とイゼルローン回廊の中間点に位置するヴァンフリート星系は、大戦力を展開するには宙域が狭いから候補としては不適切だ。ファイアザード星域は、一気にフェザーン方面に抜けられると対応しにくい。

このままだとティアマトかパランディアになるが、ダゴン星系を活用すれば予備戦力の秘匿は容易だろう。年明けに強行偵察に入るティアマト星系を見た上での判断になるが、個人的にはティアマトが有力候補になりつつあった。

戦争に絶対はない。仮に会戦で不利になったとしても、エルファシルまで戻れば補給は万全に受けられる。ダゴンで遅滞戦を仕掛ければ、再戦力化の時間も稼げる。パランディアを選ぶと、遅滞戦をアスターテで行うことになる。あそこは宙域が広い、遅滞戦を効率よく仕掛けるのはかなり難しいだろうしな。

「ああ、惑星カプチェランカですか。以前、輸送艦に乗船していた時に何度か補給任務を受けた事があります。あそこの光景は今でも覚えていますよ。年中ブリザードが荒れ狂っていて、宇宙服を着ても凍えそうな光景でした。その分、補給をみんな楽しみにしてくれていて、

大歓迎してくれたもんです。当時下つ端だった私にも、皆さん良くしてくれました」

「そうだったのか。私も知り合いをあの惑星で亡くしていてね。何となくだが黙祷をさせてもらった所だ」

『そうでしたか……』と言うと、航海長もモニターに向かって黙祷をささげ始めた。帝国軍の地上基地が軌道上からの攻撃で殲滅されて6年近い。人類の戦闘の痕跡は、ブリザードで覆い隠されて残っていないだろう。

でも、カプチエランカに降りてみたいとは思わなかった。トーマスの事ははじめをつけたと思っていたが、心のどこかに棘のように刺さったままなのかもしれない。

「話は変わりますが、ティアマトに突入する前に、簡易操艦プログラムが形になってホツとしました。さすがにダゴンで緊急モードを使う訳にはいかないでしょうが……」

「そうだな。バスケス中尉の腕は信頼しているが、わざわざこんな所で試したいとは思わんな」

俺が肩をすくめると、航海長も同意する様に苦笑した。アスターテ星域の外縁部で試行錯誤を繰り返し、簡易操艦プログラムは一応使えるレベルになった。ただ、改善の余地はまだまだあるし、緊急モードに関してはエンジンへの負荷がかなりの物になる為、常用するとエンジンの寿命が縮まる事になる。

エンジンに関しては通常の物に比して、頻繁なオンオフへの耐久性を加味した物の開発が、操艦データに関してはスパルタニアのベテランパイロットを集めて、一気にデータ量を増やすような事をしないと、これ以上の改善は難しいだろう。

「隊長と航海長はレディーの噂話をされるんですか？ マナー違反ですよ」

「ん？」

モニターに向けていた視線を声の方に向けると、バスケス中尉がこちらに視線を向けていた。

「いや、噂話ではないぞ？ こんな有様の星域では、中尉の腕は信頼して



いるが緊急モードは使いたくないという話をしていただけさ」

「隊長のおっしゃる通りですよ。中尉」

事実を伝えたのだが、中尉は納得しかねる様に俺達に視線を向けている。彼女はハドソン軍曹と共にこの艦のムードメーカー的な存在なのだが、陰で『姐さん』と呼んでいる兵がいる位、有無を言わぬ雰囲気たまに出すことがある。

誰かに似ていると記憶を探ってみると、シーハン嬢の事を聞いたクリステインや、鬼教官モードに入ったフラウ・ベツカーに似ている。流石に俺には軍の階級と言う盾があるが、わざわざ火薬庫の前で火遊びをする趣味はない。

「隊長、糧食長がメニューの確認をお願いしたいそうです。さあ、参りましょう」

『そんな事よりなにか用件があったのでは?』と言うあからさまな話題そらしをした航海長の言葉に、中尉はそう返して、俺の腕を取り、腕を組むと食堂に向かう通路を進み始めた。

何かと接する機会が多い彼女だが、どうも距離感が近いような気がしてならない。ただ、既婚者である事は知っているはずだし、プライベートエリアが近い人材がいる事も知っているから好きにさせている。

さすがに告白もされていないのに、異性として一線を引いてくれと言うのも先走りに過ぎる気がする。それに隊内で『タイロンが隊長の隠し子か?』という賭けが行われていた際に、早々に『否』に賭けて稼ぐほど、人間観察に優れた人物だ。黙っていても察してちゃんと適切な距離感を掴んでくれるだろうし、タイロンにもだいぶ良くしてくれた。お礼も込めて、多少は好きにさせてもよいだろう。

中尉に連れられて食堂に赴くが、糧食長もだいぶ頑張ってくれたようだった。同盟軍の糧秣は決して良いと言えるものばかりではないが、アステロイドベルトで新年を迎える事に、彼なりに思う所もあったんだろう。これなら士気も維持できそうだった。

『軍曹、姐さんはだいぶ攻勢をかけているようですが、どう思います?』

『お前はまたイジイジ迷ってんのか？ 姐さんが『撃墜する』方にもう賭けたらどうか』

『そうなんですがねえ。タイロン坊の事もあるから、隊長は情が深いと思って賭けたんですが、隊長の嫁さんって、亡命者のお嬢様らしいんですよ。ガサツな姐さんじゃ厳しいんじゃないかと思ひまして』

『うーん。賭け直すのは構わないが、お前これで2回目だろ？ かけ直しは3回までだからちゃんと考えた方が良いでしょう』

『そうなんですよねえ。ああ見えて変な所で姐さんは奥手だしなあ。やっぱり姐さんが『撃墜される』方に賭け直そうかなあ。』

『隊長の好みがお嬢様なら、姐さんはだいぶ不利だろうしなあ』

そんな会話を兵たちがしていたらしいのだが、俺がそれを知る事はなかった。ちなみにそれを知った姐さんとやらに、制裁を加えられた某軍曹がいたらしいのだが、本人たちの名誉の為にも、名前は伏せる形にしたい。

## 第48話 サラブレッド

宇宙暦737年 帝国暦428年 1月初旬

ティアマト星系 惑星アンシヤル近郊

カーク・ターナー

『ビーツ。ビーツ。ビーツ……』

「3番艦は先行して味方分艦隊への通報。2番艦へは可能な限り援護を指示」

「了解、3番艦は先行して味方分艦隊へ通報せよ。2番艦へは可能な限り援護を求む」

俺の指示をオペレーターが僚艦たちへ伝達していく。俺が腰を下ろしている司令席のモニターのいくつかはレッドアラート音を鳴らし続けている。

「進路に関しては帝国軍の欺瞞分析を踏まえて設定する様に！。3番艦にも念を押ししておいてくれ」

オペレーターの復唱を聞きながら、どうしたものかと俺は考えをめぐらせていた。ダゴン星系で新年を祝った第111強行偵察大隊は、ダゴン星系外縁部からティアマト星系にワープを行った。ワープアウトし、隠密航行を始めた11時間前に、時を巻き戻そう。

「ワープアウト完了。僚艦も異常なし。隠密航行を開始します」  
「了解、隠密航行を開始」

オペレーターたちの緊張した声が艦橋に響く。実戦経験者で揃えられた隊員たちも、帝国の勢力圏に入ると緊張するようだ。自分でも意外だったが、初めての実戦が近づいているにも関わらず落ち着いている自分がいた。

隊長と言う職責もあつたのかもしれないが、フェザーンで仕事を担当した際は身一つだ。弁務官府を拠点にしていたとは言え、頼れるのは脇に吊っていたブラスターが最後の頼みの綱。それに比べれば本職の軍人たちが周囲を固めてくれるし、乗船している艦は、速度と防御に特化した巡洋艦。あの時に比べれば、むしろ安心感を感じるのが普通だろう。

「まもなく超長距離カメラの撮影圏内に惑星アンシヤルが入ります」  
「よし、偵察カメラ起動。撮影に入れ。慣性航行はそのまま維持」

アンシヤルを軸に水平方向から見て7時方向からアプローチし、重力の影響による減速を最低限にしながら撮影を進めていく。地上には帝国軍の基地が存在しており、撮影された画像から施設規模を確認し、補給頻度の分析精度を高めるのが狙いだ。定期的なありきたりの偵察任務になるはずだった。

「船首パッシブレーダーに感あり。惑星の影に約2000隻の反応」

オペレーターの慌てるような一声で、在り来たりな偵察任務の幕は下り、圧倒的な敵からの逃亡劇が幕を開けた。

「偵察カメラは撮影を停止。本艦はこれより撤収に入る。敵さんはこちらに気づいているか？」

「可能性は高いです。一部の艦に動きがあります」

「では、惑星重力を活かしたスイング・バイ航法で一気に距離を取るぞ。バスケス中尉、やれるか？」

「お任せを。僚艦との操艦リンク開始、角度補正よし。緊急機動開始まで10、9、8……」

「総員、衝撃に備えよ！」

「3、2、1、緊急機動開始」

着席していた俺ですら結構な衝撃を感じる。シヤトルの離陸時を何倍かにしたような慣性を全身で感じながら緊急機動を見守る。スペースシヤトルの打ち上げの際には、こんな感じだったのだろうか？モニターに映る予定航路を現在地を表す光点が通過していき、帝国軍とかなりの距離を取れた辺りで

『ドオン』

と右舷後方から爆発音が響き、モニターからレッドアラート音が鳴り始め、右舷上部にある3番エンジンが緊急停止、推進軸を保つために対角線上にある左舷下部の2番エンジンも緊急停止した。

「機関部、負傷者はいないか？状況報告が可能か？こちらターナーだ」  
『こちら機関部ハドソン、幸いなことにけが人はいませんが、4番エンジンの冷却が追いつかずに火を噴きました。現在消火中』

「了解だハドソン。消火班を送る。機関員に言うまでもないと思うが防護マスクの着用を急げよ」

『了解。対処が完了したら報告します』

艦内通信で軍曹との通信を終えると、バスケス中尉が申し訳なさそうにこちらに視線を向けていた。

「隊長、私……」

「中尉、君が変な責任を感じる必要はない。半分の出力で逃げ切れるかは中尉の腕にかかっている。余計なことは考えるな。エンジンの摩耗を考慮しなかった私に責任がある」

視線を向けると、悔しそうに『イエッサー』と応じて来た。航海長も申し訳なさそうな表情をしているが、視線を向けてうなずくと気持ちを切り替えて、モニターに視線を向けた。

「3番艦は先行して味方分艦隊への通報。2番艦へは可能な限り援護を指示」

「了解、3番艦は先行して味方分艦隊へ通報せよ。2番艦へは可能な限り援護を求む」

俺の指示をオペレーターが僚艦たちへ伝達していく。俺が腰を下ろしている司令席のモニターのいくつかはレットアラート音を鳴らし続けている。

「進路に関しては帝国軍の欺瞞分析を踏まえて設定する様に！3番艦にも念を押しておいてくれ」

逃げ切れれば良いが、帝国軍の指揮官が『名ばかり少将』殿だった事が、逆に災いした。少数の我々を攻撃射界に入れるためにわざわざ回頭した素人だが、少数とみて全艦で追撃にかかっている。艦列もかなり乱れているが、こちらには攻撃能力はない。振り切れないと厄介だ。

「2番艦から入電、本艦の後方でカバーに入るとの事です」

「感謝すると応答を。防御磁場のコントロール権は2番艦に移譲、操艦リンクを開始。バスケス中尉、僚艦と超近距離でのリンクになるがやれるか？」

「任せてくださいー！」

気持ちを切り替えたのか？いつもの雰囲気に戻った中尉が大きめに応じた。エンジンが短時間で修復できれば問題ないが、そこは軍曹の報告待ちだな。こうして、ターナーとゆかいな仲間たちの逃走劇が幕を開けた。

宇宙暦737年 帝国暦426年 1月初旬

ティアマト星系 巡洋艦機関部

ハドソン軍曹

「消火活動は完了。応急修理にこれからかかります」

『軍曹、了解した。大変だろうが、見込みがいたら報告を頼む。必要なものは軍曹の判断で使ってくれて構わない。では』

3番エンジンが火を噴いて20分。消火は何とか終えたが、エンジンは煤と消火剤まみれだ。おまけにケツを追いかけられてる。隊長は落ち着いた様子だったが、3番が停止したままじゃ2番も使えない。帝国軍の坊ちゃんたちを振り切るには出力を取り戻さないと厳しいだろう。

「軍曹、申し訳ありません。俺達が緊急機動プログラムを楽しみ過ぎたせいで……」

「それは俺も同じだ。変な責任を感じている暇があったら作業を進めるぞ。優秀だが折れやすいサブレットを元気にしてやろう」

緊急機動プログラムの作成には機関部も全面協力した。戦艦クラスの核融合炉に4つの新型エンジン。エンジニアの端くれならみんな夢中になる。そんなじゃじゃ馬を乗りこなすプログラムを作るとなったら大はしやぎするのも無理はない。操艦担当はスパルタニアンパイロットでエースのバスケス中尉。

自分たちでチューニングした最高級のマシンを、実績十分な女性ドライバーが運転する。おまけに監督も成果を出すだけ大喜び。気前の良さもピカ一だ。俺も含めて、任務以上に楽しみ過ぎたのは事実だな。

「でもいいんですかね。船外活動服を着れば、温度を気にせずに作業できますが、さすがに贅沢すぎるような……」

「状況を考えろ。距離は取れているが、帝国軍にケツを追いかけられてるんだ。4番を修復できれば逃げ切れる。そうじゃなきゃ、折角の新型エンジンも含めて帝国に取られちゃうんだよ。少しばかり贅沢に備品を使っても文句は出ないさ。隊長も必要なものは使えって指示してただろ？」

「そんなもんなんですかねえ。んじゃ、はじめますか」

俺がそう応じると納得したのか作業に取り掛かる。消火はしたとは言え、中には高熱のままの部分もある。洗浄液を散布しながら破裂した配管やらを切断し、亀裂の有無も確認しながら破損個所の洗い出しを進める。

破棄する部分は、船外作業服を着た連中が次々に運び出していく。応急処置も終わり、起動チエックを開始するのに2時間かかった。エンジンの応急処置としてはかなり手早く出来たはずだった。

「軍曹、何度も試しましたし、バイパスも検討しましたが、第2出力バルブの異常だけが解決できません」

青くなつた起動チエック担当が報告してきたのは、廃棄部材を格納庫に押し込んで戻って来たタイミングだった。

「第2出力バルブがダメとなると、船外活動で直接交換するしかないな」

戦闘行動中の船外活動か、こりや一気にヤバイ話になって来たな。とは言え、まずは隊長に報告しなきゃならない。

『そうか。中尉、外縁部のアステロイドベルトを通過するまでの時間は？』

『通過までなら2時間です』

『軍曹、2時間で船外活動のプランを作ってくれ。可能か？』

『了解しました。何とかしてみせます』

帝国軍との間にアステロイドベルトを挟めれば攻撃を受ける確率は激減する。その間に船外活動をするわけか。どっちにしてもやるしかねえんだ。

「お前ら、聞いた通りだ。仕様書と設計図をもう一度確認するぞ！」

隊長との通話を聞いていた部下たちは、既に資料を壁に貼り始めて

いた。バスケス中尉の腕もあり、何とか帝国軍との距離を維持しながら一直線にアステロイドベルトへ進む。帝国軍がアステロイドベルトを抜ける前にエンジンを再起動できなければやばいことになる。それ位の事は連中も分かっている様だ。

消火活動を終わてかなりの時間が経っているはずなのに、やけに艦内温度が暑く感じる。袖で汗を拭うが、いやに汗をかいているのは、俺に限った事ではなかった。



## 第49話 ひとつ一つ

宇宙暦737年 帝国暦428年 1月初旬

ティアマト星系 巡洋艦機関部

ハドソン軍曹

『ガタガタ……ガタガタ……』

おそらくアステロイドベルト帯に突入したんだろう。軌道修正の必要が出て来た為、慣性の影響で艦が揺れ始めた。ただ、戦闘中の船外活動に向けて待機中でなければ、気にならない程度の揺れだ。

「軍曹、姐さんはやっぱり凄腕なんですね。アステロイドベルトに入っても減速しないし、それで揺れはこのレベルだ。緊急機動プログラムを作るより、通常機動プログラムを煮詰める方が良かったかもしれませんね」

「ったく。こんな時までプログラムの検討か？お前らも好きだねえ」

「カウントダウンをぼーっと待ってるのも勿体ないですね。生きて帰れたら、『姐さんは凄腕だ！』って伝えて、煮詰める作業をお願いしないといけませんや」

「おい。ジnkクスを忘れたのか？今は目の前の事に集中だ」

小説やらドラマで、山場の手前で『生きて帰れたら……』から始まるセリフをいう役は、大抵山場で死ぬんだ。そんなフラグなんて気にしねえ！って奴もいるが、俺は気にするタイプだ。個人的に日記なり手帳なりにタスクとして書いて置く位なら良いだろうが、しみみりした感じで同僚につぶやくのは最悪なんだよな。

『ザァー……ザァー……』

豪雨が屋根に当たるような音と共に、わずかに艦が揺れる。避けるまでもない細かいデブリが防御磁場に当たる音だろう。プログラムの事に意識を向けていた部下の一人が、はっとした表情をした。ほらな。油断大敵なんだよ。何事も目の前の事を一つひとつ片づけるのがベストだ。

軍人なんて明日が来るかもあいまいな商売をしてるんだから。タIRON、軍人なんて因果な商売さ。羨望の目で俺達を見ていたが、お

前は新型エンジンの開発費を納税してくれ。そうすりゃ、俺の軍務にも多少は潤いが出るってもんだ。

新設の部隊で、転換訓練中なのに、知り合いの子供を自由に出入りさせる隊長の意図が、はじめは分からなかった。でも、タイロンのお陰で、訓練にメリハリもついたし、士気も上がったと思う。ここでバカやってる連中だって木の股から生まれた訳じゃない。子弟や弟分の一人ぐらい、故郷に戻ればいるだろう。

タイロンには悪いが、そういう存在の代わりの様な立ち位置だった。これが広報課とかなら『同盟軍は未来の英雄を求めている！』とでも言って、志願を促すんだろうが、そんな事を言う奴は誰もいなかった。俺もそうだ。『戦争は任せろ！戦艦を買ってくれ！』ってよく言ってたな。

『軍曹、現在地はアステロイドベルトの中間位だ。もう少しでカウントダウンを開始する。危険手当は割増しで申請しておくから、エルファシルで慰労会の手配をひと段落ついたら頼むぞ』

「了解です。どうせならタイロンも呼びますか。あいつも特務隊員ですからね」

『そうだな。あいつも全員の帰還を待っているだろう。ちなみに賭けはしてるのか？ 枠があるなら全員帰還に500ダイナール賭けたい所だが？』

「隊長。Betするならみんな『全員生還』ですよ。残念ながらその賭けは成立しませんや」

『それもそうだな』

通常の業務連絡かのように話していた隊長が、最後に少し笑みを浮かべた。通信を聞いていた部下たちが笑い声をあげる。どうやら緊張をほぐす意図があったようだ。まあ、空元気でも笑えりや御の字だ。

『ザー……。ザー……』

また豪雨が屋根に当たるような音と共に、わずかに艦が揺れるが、あまり気にならなかった。緊張は適度にほぐれたかもしれない。

『アステロイドベルト通過までのカウントダウンを開始します。60

0..... 599.....」

オペレーターのアナウンスと共に、船外作業服のヘルメットの内面にカウントダウンが表示される。艦上部のエアロックに機材一式を運び込んで、内壁にロックをかけて俺達は待機中だ。気を落ち着けるかのように何人かが身体を少し動かす。両手足についた電磁石と命綱をちゃんと訓練通りに使えば事故は起きないはずだ。全員でタイロンと飯を食う。俺は自分の頭の中のタスクリストにそれを書き込んだ。

『5..... 4..... 3..... 2..... 1..... Go』

上部ハッチが開き、後方で援護に入っている2番艦が視界に入った。機材を各々が抱えて右手の3番エンジンへ向かう。グングン遠ざかっていくアステロイドベルト。中尉、こんな速度でアステロイドベルトを突っ切るなよ。惚れた相手が観てる前だからって張り切り過ぎだ。まあ、そういう所があんたの良さなんだろうが.....。

3番エンジンに洗剤を吹きかけながら装甲板を外していく。パツと見でも黒く焼け焦げた部分が多い。活動計画に基づいて部下たちがテキパキと応急修理を進めていく。巡洋艦の艦型に無理やり戦艦クラスの核融合炉とエンジンを組みつけたせいで、余裕がないんだな。エンジンの応急処置を一部とは言え、船外活動で対処しないといけないなんて今思えば論外だろうに。

「命綱だけは絶対に外すなよ。焦らなくていい。一つひとつだ」  
「一つひとつ了解」

多少の駆け足なんて、一回つまづくだけでチャラ。下手したら逆に時間がかかるんだ。焦らず一つひとつ進めれば問題ない。時間はまだあるんだ。損傷した部材の取り外しが終わり第2出力バルブが見えてくる。こいつを交換すれば、作業はほぼ完了だ。焦りそうになる自分に言い聞かせる様に、何度も『一つひとつ』とつぶやきながら、俺達は作業を進めた。

宇宙暦737年 帝国暦426年 1月初旬

ティアマト星系 巡洋艦艦橋

カーク・ターナー（中佐）

『600..... 601..... 602.....』

モニターのひとつが船外活動を開始してからの時間をカウントしている。既に不具合が明らかになっていく第2出力バルブの取り外しまでは完了した。計画と比べても順調に作業は進んでいる。焦る気持ちがない訳ではない。ただ、その道のプロが全力を尽くしてくれているんだ。信じて待つのが俺の役割だろう。

現にレッドランプもひとつづつグリーンに戻りつつある。進捗の共有はオペレーターが担当している。落ち着いた口調でアナウンスしているが、暑くもない艦橋で汗だくだ。それを見て、またひとつ落ち着けた。アステロイドベルトをすり抜けた事で、帝国軍との距離もまた少し離れた。さすがに分艦隊規模でアステロイドベルトを通り抜けるには減速が必要だろう。

本能的に危険を感じたのか？水平面下方へ迂回する判断をしたようだが、もともと20隻も分派すれば追跡用の戦力としては事足りるし、アステロイドベルトをすり抜ける事も出来ただろう。自分の手柄にしたいが、戦力を分けたくない.....。そんな怯えが感じ取れる心配だった。

「それにしてもさすがエースだな。通常機動プログラムでここまでやるとは.....」

俺は操艦に集中しているバスケス中尉に視線を向けた。巡洋艦クルスのスパルタニアンに比して巨大なこの艦を、慣性を活かしてアステロイドベルトをすり抜けさせた。冬季装備をフル装備で背負ってアルペンスキーをしたようなものだ。

ナビゲーター役を勤めた航海長の力量もあつたのだろうか、急制動が全くなく、滑る様に予定進路をすり抜けたのには脱帽した。と同時に、おそらくこの艦型と出力がマッチしていなかったんだろう。言ってみればフル出力だと軽自動車にF1のエンジンを積んでいたようなものだ。出力が半分になったからこそ扱いやすくなり、神技のような操艦が可能になった面も否めない。

『ピーッ。ピーッ.....』

レッドアラート音が止まり、エンジンモニターがオールグリーンに変わる。

「船外作業班へ、こちら艦橋。エンジンモニターオールグリーン」

『こちら機関部、再起動チェック完了。行けます』

『船外作業班了解！これより撤収します』

船外作業服のヘルメットに取り付けられたカメラに映る視界が、上部ハッチに向かっていく様子を映している。一先ず何とかなつたようだ。

「船外作業班へ、帰るまでが遠足だ。気を抜くなよ」

『了解です！隊長。ここで事故つたらさすがに笑いものだ。お前ら最後まで気を抜くなよ』

軍曹が明るい声で応じてくる。危機を脱したタイミングだからこそ、注意は促さないと。まあ、俺が言わなくても軍曹が一言添えただろうが、ここで事故が起きたら命に係わる。こういう時は小うるさい位が丁度良いんだ。そうこうしているうちに次々にカメラの映像が上部ハッチ内部に到着した様子を映していく。

「3番艦を通じて、第54分艦隊からアッシュビー中佐名義で入電。これは。進路指示と座標です」

ブルースが配属されている分艦隊から通信を受けたのは、ちょうど船外作業班の全員が上部ハッチに到着し、エアロックを終えたタイミングだった。

## 第50話 生餌

宇宙暦737年 帝国暦428年 1月初旬

ティアマト星系 外縁部

カーク・ターナー

「まもなく指定されたポイントです。帝国軍との距離変わらず」

「了解、中尉、右舷に45。進路変更だ」

「右舷45。了解しました」

艦橋上部に備え付けられた戦術モニターが、我々を追ってくる帝国軍も回頭を始める様子を映している。3番エンジンの修復が終わり6時間が経過した。帝国軍の長距離ビームの射程圏ギリギリの距離を保って、ブルースが送って来たポイントまでわざわざ引っ張って来た。俺達の回頭は、3番艦を通じて第54分艦隊にも共有されている。後はうまくやってくれるだろう。

ちなみに54個も分艦隊がある訳じゃない。第5艦隊の第4分艦隊だから第54分艦隊と呼称している訳だ。中佐とは言え、ブルースはまだ参謀長ではないはずだ。アルフレッドはまだジークマイスター分室のはずだし、ブルースに任せてこ舞いしているであろう上層部の苦労がしのばれる。もつとも、ピンチがチャンスに変わった俺達にとつては喜ばしい事なのだが。

「ポイントを通過。帝国軍の通過までカウントダウン開始します」

オペレーターの声と共に、手元のモニターのひとつがカウントダウンを開始した。正規艦隊が出張って来るようになればこんな戦いばかりじゃなくなる。敵の実力を高く評価するのは、友軍にとつてはあまり好ましい事じゃないだろうが、そろそろ指摘し始めても良いかもしれない。

『帝国軍通過まで3……。2……。1……。』

「帝国軍左舷後方に感あり、同盟軍第54分艦隊です」

「やりましたね。隊長」

オペレーターの報告と同時に、艦橋も嬉し気な声に包まれる。緊張の中、操艦を担当していたバスケス中尉もホツとした様子だ。航海長

も胸を撫でおろしている。オペレーターに戦況を艦内放送で流すように指示しつつ、右舷に進路を取りながら帝国軍の側面に艦首を向ける。ここからは観測班としての役割が待っている。

「第54分艦隊、斉射しました。弾着確認。600隻前後の反応が消滅」

オペレーターの明るい声が艦内放送に流れる。他部署の連中も歓声を上げているかもしれない。艦首に武装が集中している戦闘艦では、側面や背面を敵にさらす事は一方的な損害を受ける事を意味する。ん？まさかそこでそれをするか……。

「帝国軍、第54分艦隊へ向けて回頭する模様」

おそらくブルースを始めとした分艦隊上層部も咄然としているに違いない。確かに側背面を晒しているのは悪手だろうが、敵前回頭は更なる悪手だ。慣性を殺すために減速して艦首を敵に向け、攻撃を開始するまで一方的に攻撃を浴びる。

初撃で30%近い損失を出した以上、そのまま加速して右舷回頭して離脱する。一矢報いたいなら左舷回頭して第54分艦隊に突撃する。この2つしかあの状況での選択肢はなかった。

「こういう発言は良くないのかもしれませんが、あれでは帝国の連中があまりにも……」

「航海長、俺も同感だが、それ以上は……」

気持ちは分かるが、帝国軍に同情する余裕は、今の同盟には無いはずだ。もともと本来なら2隻の偵察艦に分艦隊で追撃する判断自体が指揮官に軍事的素養がない事を表している。責任があるとしたら、能力的に分艦隊司令に相応しくない人物にその地位を投げ与えた帝国軍上層部にある。俺達が変な同情心を出す必要もない。

「2番艦、3番艦に救援活動の準備を伝達。当艦も同様だ。格納庫を一時的な救護室として使えるように準備しておこう」

俺が指示を出したと同時に、第二斉射が帝国軍に突き刺さった。これで勝敗は決した。帝国軍は半数近くが戦闘不能となり、一部の艦は撤退に入っている。あの中に、愚考に愚行を重ねた司令官の乗艦はいらぬのだろうか？だとしたらこの世はあまりにも不条理だ。

「分艦隊司令部へ発信。こちらは救援活動の準備を完了、指示を乞う」  
「了解、救援活動の指示を乞う旨、発信」

第54分艦隊の上層部も追撃をすべきか判断に悩んでいるはずだ。仮に撤退を開始した帝国軍に司令官が残っていたら？ 処分するにもやんごとなき方々に属する以上、帝国軍上層部には配慮が求められる。処分自体が貴族たちにとっては不満につながる。彼らにとって平民の犠牲など気にする必要もない話だ。

では軍にとっては？ 処分が軽ければ上層部への不信につながる。処分ナシなら猶更だろう。ブルースも今の一報で気が付くはずだ。わざわざ数百隻の敗残兵を追跡して、帝国内部の混乱の芽を摘むのか？ 既に同規模の戦力を撃退できた。功績としても十分だろう。

「分艦隊司令部より入電。救援活動の割り当てが送られてきました」  
「では指示に従って救援活動を始めよう」

全チャンネルをオープンにして、救援活動を開始した旨の発信を始める。ゆっくりと戦場に近づいていくが、悪あがきをしようとする艦は、少なくとも俺達の割り当てエリアではいなかった。誤った判断の積み重ねの上に最後は見捨てられた。これで尚、上官の命に従うと言うのは、さすがに上意下達の軍隊でも難しいだろう。

救援活動を終え、指定された輸送艦に捕虜を移送し終えたのは半日後。損傷が少ない艦には工作艦がとりつき、曳行の準備を始めていく。今回の戦果に貢献した第111強行偵察大隊は上客扱いで最優先で補給を受けられた。ブルースが俺の乗艦を訪れたのは、最優先で対応された補給が開始したタイミングだった。

ブルースはよく言えば自信家、悪く言えば傲慢と言えなくもない性格だ。俺自身は自信家は嫌いじゃない。ただ、特に成果が出た直後のブルースは、知らない人間からすると絵に描いたような傲慢ぶりを発揮する事がある。アルフレッドが近くにいれば何とかなるんだが、それもない以上、部下たちのブルースへの印象を守るために少し画策した。

ブルースがエアロックから入ってくる際に、手すきの者を集めておいて、『救援ありがとうございます！』と言わせた後に敬礼し、答礼し



たブルースに交代で握手を求めさせたのだ。部下たちからすると多少は疑問が浮かぶ対応かもしれないが、敬愛する彼らのボスの同期であり、誘因ポイントの通信もブルースの名前でされていたから反発するまではいかなかった。

上司の顔を立てる意味で、多少の歓迎は給料のうちだと思ってくれたようだ。補給中とは言え、任務中だ。艦橋で対応しても良かったが、そうすると話が漏れる。俺はわざわざ先導して艦長室へブルースを誘った。

「帝国軍の連中は大魚を逃したな。と言うかお前には副艦隊司令長官を務めてもらうつもりなんだ。こんな所で終わってもらっては困るぞ」

「それが事実なら、『名ばかり少将』殿も捨てたもんじゃないな。戦利に沿った判断は一切しなかったが、優秀な同盟軍士官が乗艦している事をかぎつけたらしい。とにかく今回は助かったよ。ブルース」

そう応じながら、個人で持ち込んだシロン産の茶葉で入れた紅茶をカップに注ぎ、ブルースの手元に置く。こいつは砂糖を小さじ二杯入れるはずだ。自分のカップに注いでから、シュガーポットを添える。

嬉し気にシュガーポットを手に取り、小さじ二杯の砂糖をブルースは自分のカップに入れた。意外と甘党なのかもしれない。母親がお菓子作りに目覚めて、差し入れされていると話していたのはフレデリックだったか？そういう隙をもう少し出せば可愛げが出てくるんだが……。

「ふん。カークならあれでこっちの意図は察してくれると思っていた。最後の右舷への進路変更も絶妙だったな。あれで初撃の戦果が跳ね上がった。分艦隊司令もだいぶ喜んでいたぞ」

「物言いは相変わらずだな。優秀なのは周囲も認める所だろうが、もう少し何とかならんのか？味方を増やすのはアルフレッド辺りに任せればなんとかなるだろうが、お前が敵を増やしているは本末転倒だろうに」

「事実を言ったまでだ。俺は前言撤回するつもりはないぞ」

そう言いながらすねた様に紅茶で喉を潤すブルース。香りもちや

んと楽しめ。紅茶の香りで少しでもお前の棘のある口調がまろやかになってほしい所だ。そんなことを思いながら俺も紅茶を楽しむ。わざわざ指摘したのはこいつの言動が目に残ると危惧した上官が、『君は自分が万能だとも思っているのか？有能なのは認めるが言を慎みたまえ』

と指摘した事に対して、

『もちろん小官にも不可能はありますよ。あなた方以上のミスをすることです』

と返した事を小耳にはさんだからだ。宇宙暦730年卒の中で、出世が早かった俺達は『730年マフィア』なんて呼ばれているらしい。新進気鋭の代名詞でもあったが、ブルースがはしゃぐせいで生意気の代名詞にもなりつつある。

「軍は俺達だけじゃ動かないぞ？ちゃんとアルフレッドにも感謝しておけよ？」

「大丈夫だ。アルフレッドは総参謀長。カークが副司令長官。後の連中が各艦隊司令になれば問題ない。帝国軍に負ける可能性は限りなくゼロだ」

そう応じるブルースには苦笑するしかなかった。まあこいつはこいつなりに人材の重要性は理解しているんだろうな。自分の欠点を補える人材を理解してはいる様だ。もつとも、自分が改めればだいぶ楽になる……という視点は残念ながら無い様だが。

「話は変わるが首都星に戻り次第、アデレードとは離婚するつもりだ。あいつなりに俺を想ってくれるのは分かっているつもりだ。ただ、俺は一人の相手につなぎとめられるのは正直合わない。ついては……」

「仲裁役ならアルフレッドにでも頼め。ダンスパーティー以来、我がターナー朝のクリステイン女帝陛下はアデレード嬢を要注意人物扱いだ。お前の救援に出て行ってこっちまで火達磨になるのはごめんだぞ？

そういう傾向の男性が存在するのは俺も理解している。お前を責めるつもりはないが、同盟には一人でも将来を担う世代が必要だ。お

前たちの子供なら優秀だろうか？アデレードも母親になれば変わるんじゃないか？」

「そういう可能性もあるだろうが、夫としてだけじゃなく、父親としての義務も増えるだろう？アデレードの事だって俺なりに愛しているつもりだ。子供も多分愛せると思うが、お前たちのように温かい家庭が作れるとはとても思えない。幸いにも独身で国家に貢献した人物は枚挙に暇がない。ブルース・アツシユビーの名を、独身者たちにとって栄えある物にするさ」

「俺は、妻帯して子供を残した上で、国家に貢献した人物を列挙できるが、まあ、もう決めた事なら何も言わんよ」

俺達は苦笑しながらティーカップを少し上げた。アルフレッドが匙を投げる様なら出張る事に否はない。家庭問題に引きずられて変なミスをされても困る。ただ、第111強行偵察大隊はエルファシルを拠点に動いている。今回の戦訓を活かして装備の改善案や偵察手法の提案、操艦プログラムの改善などすべきことは山積みと言える。離婚調停に首を突っ込む余裕は、残念ながら無いだろう。

アルフレッドに厄介事を押し付けることになる。詫びも込めて何か贈っておくか。ブルースも家庭と新しい配属先で色々たまっていた様だ。2時間ほど雑談をしてから分艦隊旗艦に帰って行った。補給を終えた俺達は、ダゴン星域を通過してエルファシルへ戻る事になる。少なくとも全員を生還させる事が出来そうだ。ブルースを送り出してホツとしながら、俺は艦橋に足を向けた。

## 第51話 不良品の処理

宇宙暦737年 帝国暦428年 3月初旬

首都星オーデイン ミヒヤールゼン男爵邸

クリストフ・フォン・ミヒヤールゼン

新無憂宮から地上車で少しの距離にある我が邸宅。同志を除けばそこまで来客が多いとは言えないのだが、最近は来客が増えた。まもなくやってくる青年士官もその一人。話の内容も分かつてはいるが、立场上断るのは難しいのも分かっている。だが、動けば動いたで、男爵家としては不都合が多い。組織にとっても現状維持の方が都合が良いのも事実だ。どうすべきか……。

「旦那様、お着きになりました。応接間にお通しました」

視線を向けると執事が一礼して部屋を辞していった。どちらにしても話を聞いてみるしかないか？デスクの上のティーカップに手を伸ばし、残っていた紅茶を飲み干す。優秀な男だ。出来れば同志に引き込みたい所だが、この状況で動いていること自体が、彼が義侠心に溢れ、軍人としての義務にも誠実であることを示している。残念ながら同志にはならないだろう。

「さて、気の乗らない面会だ……」

そう呟きながら書斎を後にする。少なくとも優秀な青年士官と面識を得られることを良しとするか。

『コンコン、コンコン』

ノックをして応接間に入る。ハウザー・フォン・シユタイエルマルク大佐は今年30歳。貴族出身にめずらしい実力主義者で、同じ貴族出身者に受けは悪いが、軍の大部分を占める平民からの受けは良い。

「閣下、急な話にも関わらずお時間を頂きありがとうございます」

「気にする必要はない。シユタイエルマルク伯にはだいたいお世話になった。その恩義に比べればどうという事もない。それに卿とも一度話してみたかった」

恐縮した様子の大佐に着席を促しながら私も腰を下ろす。私の入室にメイドも付き添わせ、お茶の用意をさせた後に人払いを頼む。艦

隊司令官に名を連ねている事もあり、来客時の人払いを我が家の者は当たり前のものでして受け入れている。別荘に限っていた同志との面会は、本宅でも行うようになった。

「早速で恐縮ですが、小官は貴族的なやり取りがあまり得意ではありません。本題に入っても宜しいでしょうか？」

「もちろんだ。私も軍人としての人生の方が長い。それに相続の際に色々あってな。貴族としての付き合いは最低限にしている。むしろそちらの方がありがたい位だ」

そう応じると嬉し気な表情を浮かべた。私は貴族の厚かましさをよく知っている。もうそれを割り切ってはいるが、彼は義侠心に溢れ、義理堅い軍人だ。先帝の庶子とは言え、『名ばかり少将』たちが跋扈する現状を本心から憂いているのだろう。

「今回お時間を頂戴したのは、専門的な教育を受けないまま立場を得て、前線に独立艦隊で乗り込む方々の件で、お力添えをお願いできないかと。フォルセティ星域の会戦以来、彼らの戦理を逸脱した独断専行により、軍は少なくない戦力を失い続けております。閣下は現状に關して、どうお考えでしょうか？」

「憂慮はしている。彼らのせいで摩耗した戦力は数個艦隊分にも上るだろう。どれだけの兵士たちが無駄に前線で命を散らしたかと思うと胸が痛む。だが、ケルトリング軍務尚書が処断できずにいる理由も察している。それは卿も同様だとおもうが……」

悔し気な表情を意識しながらティーカップを手に取り、紅茶を口に含む。帝国中にばらまかれた624人の先帝の庶子たちは、言わばウイルスに似ている。もちろんすべてを軍で受け入れた訳ではない。それに全員が無能なわけでもない。ただ、悪影響を想定していても伯爵家当主でもあるケルトリング軍務尚書には皇族を拒否するという判断は出来ない。

それをすれば貴族を保証する血を否定するようなものだ。皇族ともなれば尚更。政府系からすれば、前線に送り込んで戦死という形で処分できる以上、なるべく軍で受け入れろと思っただけだ。最も、一人当たり数十万という平民が犠牲になる処分費用に関して、ど

う考えているのかは知りたくもない話だが……。

「それに関しては、小官も認識はしております。ただ、直近のティアマト星域での遭遇戦など愚策に愚策を重ねた結果、撃破されるという最悪の形になりました。もう見て見ぬふりをするのも限界です。」

コーゼル少将とも相談をいたしました。幸い宮中の流儀には詳しい方々です。儀仗兵なり、近衛師団なり前線に行く必要のない部署を増設して、そこで活躍頂く訳にはいかないでしょうか？残念ながら小官は貴族に受けが良くありません。コーゼル少将もまた残念ながら平民出身です。閣下のお力添えをお願いしたいのです」

「確かに良い案だ。そういう観点では、皇室の荘園を警備させても良いかもしれん。暇を持て余して産物を横流ししたり、荘園の平民に手を出す様な事があれば処分の口実にできるかもしれん。ただ、負けていない連中がそれで納得するのかね？発起人として上申するのは構わないが、不満をもった彼らから背中を刺されるのは困る。戦場での戦いはともかく、そういう事には悪知恵が働く方々なのは確かだ」

「たった数隻の偵察艦を追い回し、潜伏していた同盟軍に側背を突かれて撃破されたのは醜態としか言いようがない。通常の軍法会議なら自裁が妥当だろう。良くても軍からの追放、罰金として全財産の没収と言った所か？ただ、残念ながら彼らは皇族だ。軍人である前に皇族である以上、軍法ではなく皇室典範が適用される。」

「つまり処分は陛下のご判断に委ねられる訳だ。今回の処分も軍からの追放と罰金がせいぜいだろうな。宮中は門閥貴族たちの主戦場だ。平民がいくら死んだところで彼らは気にもしない。そんな事で皇族を厳罰に処すれば、明日は我が身と不満を抱えるだろう。政情を不安定にする判断を政府が許すはずもない。つまり厳罰は期待できないのだ。」

「むしろ手を挙げさせるのが良いかもしれんな。政府系もあの方々は困っていないよう？軍としてではなく、新無憂宮と皇室の荘園を守る儀仗兵を取りまとめる組織の新設を上申するのだ。そうすれば役職もかなりの数用意できよう？皇室の財産を皇族が守る。名分は十分立つと思うが……。」

「それに応じなかつた方々は……。そういう事ですが……。配属された兵士たちが哀れです」

「さて。後はどれだけ応じるかにも拠るのではないかな？提督の地位にこだわる者が多いようならヴァルハラ星系専門の警備艦隊を複数新設しても良からう？少なくともいい仲間が前線で命を散らしたのだ。少なくとも叛徒たちが自家の下僕や農奴とは違うのだと、認識はしているだろう」

前線で『名ばかり少将』達が何人死のうが私には関係ない事だ。ただ、同志が巻き込まれる事態を防ぐために何かと裏で動くのもいい加減疲れた。どこかにまとめて放り込めるならそれに越したことはない。

何しろ彼らは計画通りに動く事すらできない。こちらが流す情報の精度が、むしろ低下しているのだ。大丈夫、同盟軍は優秀だ。ジークマイスター提督もおられる事だし、作戦計画を流せば負ける事はないだろう。

「となりますと、政府系への働き掛けが必要になりますが、失礼ながら閣下にお心当たりはございますか？」

「いや、この件はむしろ長官から國務尚書と宮内尚書に伝えてもらう方が良いと思うぞ？途中経過が噂になり、変な工作をされる方がやっかいだ」

「では、父からケルトリング伯に……。ただ、父は規律を重んじる人間です。私の説得に応じるかどうか……」

「では、私も一筆書こう。これでも一応は艦隊司令官の末席にいるのだから、前線の有り様を懸念するのは自然だ。もし足りないようなら足を運ぼう。卿の気持ちもよくわかるし、私も何かできればと考えていた。これも何かの縁だ。力にならせてほしい」

私の言葉に光明が見えたと言いたげなシュタイエルマルク大佐。手紙を認めると応接間を中座し、書齋に向かう。残念だよ大佐。君がもう少し違った人材なら、私の後任候補として同志に引き入れたかった。先ほど話した内容をさらさらと手紙に認め、便箋2枚ほどにまとめ。

こういう場合は一角の人物として認めているという態度を最大限示す方が効果的だ。おそらく、彼は将来の帝国の作戦立案に深くかわるであろうから。認めた便箋と仰々しい封筒。それに家紋入りのシーリングスタンプとワックスと携えて、応接間に戻る。

「待たせたね。卿は智謀も評価されていると聞いている。念のため内容を確認してもらいたい。もし改めるべきところがあれば遠慮なく指摘してほしい」

そう言い添えて、手元にアルコールランプを用意し、ワックスを温める。手紙の内容を確認しながら感激した様子の元後任候補。少なくとも彼は、私の事を現状を憂う同志と認識しただろう。何度も礼を言いながら、彼は我が家を後にした。見送る際にも何とか良き方向に軍の現状を変えようと言い添えておく。

あくまで個人的な所感だが、先帝の庶子たちはやりすぎた。軍での有様を観れば、政府での有様も大体読める。腐ったリングを別の箱にまとめる案には、政府系も諸手を上げて賛成するはずだ。さすがの陛下も、功績を上げているならともなく、言葉を選ばずに言えば邪魔者ではない彼らを、体よく現場から外せるなら細かい事は言うまい。それで皇室の財産を横領するような輩が出てくるようなら、むしろ皇族としての心構えが出来ていなかったのだ。陛下の財産に手を出した以上、処分も重くなるだろう。

「さて、利用するだけ利用してきたが、次のネタを探す必要が出て来たな」

大佐の乗った地上車を見送りながら、私は内心を吐露した。帝国を混乱させるのに役立つてくれた先帝の庶子たちの賞味期限は残念ながら切れてしまったようだ。

幸いなことにコーゼル少将を始めとした平民出身の将官もちらほら出てきている。次は軍部系貴族を煽る事でも考えるか？幸いなことに帝国の闇は尽きる事が無い。私は新たな火種が燃え上がる事に想いを馳せながら、暗い喜びをかみしめていた。



## 第52話 バスケスのやけ酒

宇宙暦737年 帝国暦428年 10月初旬

惑星エルファシル 帝国亭エルファシル店

エレン・バスケス(大尉)

「それでは、隊長の栄転を祝って！」

「カンパニー」

私のやけくそ気味な乾杯の音頭とともに、ジョッキがぶつかる音が方々で鳴る。くっそお。心から隊長の栄転を喜べるお前らが恨めしいよ私は……。帝国軍の分艦隊撃破という功績を評価された第111強行偵察大隊は、昇進と共に装備改善と運用手法の確立という任についた。

部隊も第7試作試験大隊に変更。幸いにもエルファシルに新設された第3駐留基地は敷地も広大だった。強行偵察艦の製作会社であるヤマハ技研は、エンジンアチームと機材を持ち込んで、巡洋艦の艦型に理想的なエンジン配置の試作を開始。一週間ごとに異なる組み合わせを試すためにアスターテ星域に繰り出す日々だった。もちろん緊急操艦プログラムもそのまま試したけど、エンジンの耐久性を損なう事には変わりなかった。

技研のエンジンアチームの話だと、エンジン内部に超硬度鋼を大量に使用できれば解決の目途が立つとの事だったが、調達価格が通常の5倍になるという話をきいた大佐が、打ち切りを命じた。まあ、偵察艦は量産するにしても数が知れているし、当然の判断だったと思う。

「姐さんも栄転おめでとうございます」

「曹長にもなにかと世話になったね。まあ一杯」

昇進して曹長になったハドソンが声をかけて来た。私の内心と真逆で本心から嬉しそうなこいつを覗いていると腹立たしくなるけど、内心を見透かされると負けたようでそれも癪だ。酒が残っていたグラスを空けさせ、強めの酒を注ぐ。もちろん返杯も同じく強めの酒。良いのよ。今日は酔いたい気分だし。

隊長として第7試作試験大隊の指揮をしていたターナー大佐は、偵

察艦の装備改善・運用手法の確立に成果ありと認められ、准将に昇進した。そして通常なら少将がその任につく分艦隊を任せられる事になった。とは言え通常編成の半分の1500隻編成らしいけど。

そして曹長を始めとした機関部門の連中は、隊長に個人的な売り込みをかけて分艦隊旗艦の機関部に異動する事が内定している。新型戦艦の機関ともなればこいつらが垂涎なもの分かるけど、なんだが裏切られた気分だ。

「私のは栄転なのかね……」

「技術科学本部でテストパイロットになるんでしょ？ 十分な栄転ですよ」

そう言いながら肩をすくめるハドソン。もう一つ腹が立つ理由を思い出した。こいつは私が隊長に『撃墜』される方に賭けていたはずだ。それで儲けたと思うと強めの酒を10杯くらい一気させたい気持ちになる。隊長には、この人事が発表になった時点で気持ちを伝えた。

『大尉の気持ちはすごく嬉しい。ただ、私としては優秀な部下としての大尉の期待には応えられるが、女性としての大尉の気持ちには、男性としては応えられない。』

それが隊長の答えだった。気持ちを打ち明けなければ佐官講習が必要だけど少佐に昇進の上で副官になれたかもしれない。でも気持ちを隠したまま傍にいるのも不誠実だ。個人的な感情が大きなミスにつながる事だってある。

『子供は女性にしか産めないんだ。功績の面では前線勤務はもう十分だと思う。後方で支援する側に回りながら、もっと自分の為に使える時間を増やしてごらん』

テストパイロットの内示を隊長から伝えられた時、正直厄介払いされるのかと傷ついた。ちよつと部下としてあるまじき発言もしたと思う。でも、隊長は少し困った表情をしながらこう応じた。

確かに前線勤務じゃ、出会いもない。日常的に命の危険にさらされる以上、自分の将来をちゃんと考える時間も無い。隊長なりに私の事を考えてくれたんだという結論に至って、その人事を受け入れる事に

した。

「あんたらは隊長についていけるからね。なんだか置いて行かれるみたいでさ」

「そりゃ偵察艦のままなら隊長も姐さんの操艦に期待するでしょう？でも次は艦隊旗艦だ。艦隊旗艦だけがとんでもない操艦が出来ても僚艦はついてこれませんよ。それに旗艦がそんな有様じゃ負け戦確定だ。異動にもそういう判断があつたんじゃないですかね？

俺達は逆ですよ。隊長は准将で終わる器じゃないでしょう。いずれは正規艦隊司令つてお人だ。そんな人の旗艦ならまず生き残れません。志願した以上、覚悟は出来てますが生き残れる可能性が高いに越したことはありませんよ」

視線を向けると少し真剣な表情を浮かべているハドソン。私の様なスパルタニアン乗りは、どこかで生死は自分次第だと割りきって戦場に臨んでいる。操艦を担当している時も、私がうまくこなせば生き残れる状況だった。でも機関員たちはそうじゃない。防衛戦自体は優勢とは言え、艦隊戦が行われれば当然撃沈される艦もある。機関部は生存率が決して高いとは言えない部署なのも事実だ。

「忠誠心だけじゃなくて、打算もありの判断か。でもそういうのは嫌いじゃないわ」

「どうせ命を賭けるなら、尊敬できる上官について気持ちももちろんありますよ。会った事もない上官の為に、死線と一緒に潜り抜けた上官と同様精勤できるか？つて言われたら、そりゃ出来ません！つて答えます」

もしかしたら急な人事への不満もあつたのかもしれない。第7試作試験大隊はエルファシル星域造兵廠に吸収される。強行偵察艦の開発は統合作戦本部と情報部も関心を高めていた案件だ。大筋が決まった所で引き取つて、功績のおこぼれを頂戴したい。そんな意図も見え隠れしていて、隊員達には不満もたまっていた。

「それに事なかれ主義で功績になるんですかね？名前を添えるとは言え、率直な意見が関係者なら閲覧できる。開発担当もそれを見るんですよ？現場を肌で知ってる人材じゃないと、むしろ厳しいと思います

がね」

「確かにね」

お互い少し悪い笑みを浮かべながらグラスを傾ける。装備改善を進めるにあたって、隊長は統合合作戦本部のサーバーを確保して、強行偵察艦の乗組員なら誰でも装備についての不満を書き込める掲示板を用意した。ただし、軍人である以上、不満だけでなくコストは考えずに改善案も添える事を条件にして。

結果として改善はかなりスムーズに進んだが、命に係わる分、かなり手厳しい意見もあった。最前線を知っている隊長だからこそ笑って受け入れたが、前線を知らない技術士官がどこまで活かせるのか？と考えると、疑問が残る。ヤマハ技研のエンジニアチームにはこういうのは新鮮だと好評だった。

確かに聞くべき意見をくみ取ってフィードバックと改善に向けた要点を伝えられれば有用だけど、なかなか出来る事じゃない。美味しい所をつまみ食いするつもりだろうが、そうなる可能性は低そうだ。「まあ、第7試作試験大隊としての役割は節目だったとも言えるでしょう。現場の努力で出来る事は粗方片づけました。姐さんの名前も一応残りますし、それで十分でしょう？」

「そりゃあね。ただ、タイロンが余計なことを言わなければ、全部あたしの名義だったんだ。口惜しくないと言えば嘘になるかな……」

「それこそ逆恨みでしょう。あの歳で対象者が望むものをきっちり読んだんです。あいつは大商人になりますよ。大隊全員の子供であり弟みたいな存在だ。喜んでやらにゃ」

「当然でしょ。私のお酌でオレンジジュースを飲んだんだからね。あいつには大物になってもらって子供たちを雇ってもらわないとね」

操艦プログラムのデータ収集にあたって、隊長は各地のスパルタニアン部隊に、強行偵察艦の操艦データを送ると共に、『採用されたデータにはそのパイロットの名前をつける』とメッセージを添えた。当初は賞金を出すつもりだった隊長に、『エースクラスのパイロットなら金銭より名誉の方が報酬に相応しいんじゃない？』と意見したのはタイロンだ。

隊長はその意見を採用し、結果として同盟軍のスパルタニアン乗りが自分の名前を残そうとこぞってデータを残した。当初はほとんど私のデータだったのに、今では『バスケスターン』と命名された戦闘機動のひとつにしか、名前は残っていない。賞金にする予定だった金額を隊長は報酬としてタイロンに渡した。

それだけだったら多少は恨み言も言えるが、タイロンはその報酬で帝国亭のフルコースを私に奢ってくれた。あいつは商人としてきつと成功するはずよ。弟みたいに思っていた存在に手玉に取られて悔しかったけど、それを差し引いても帝国亭のフルコースは美味しかった。

「さてと、そんじや航海長のところにでも行ってきますかね。姐さん、タイロンは記念大を志望してますからね。首都星に行ったら早めに良い人を見つけないと、あいつも心配しますぜ」  
「うるさいわね。行つたいったー！」

ハドソンが笑いながら席を移ると同時に、私もタイロンの近くに席を移した。記念大に受ければ会う機会もあるだろうけど、こいつのお陰で前線勤務が殺伐とした物だけにならずに済んだ。合格を記念してバスケス姐さんのお酌で好物のオレンジジュースを飲ませてやろうじゃないの。

何となく部隊の全員が帰りがたい気持ちを持っていたんだろう。この日の壮行会は夜明けまで続き、多くが二日酔いになった。人生で二日酔いになって嬉しかったのは、この日が初めてだったかもしれない。そんなそぶりを見せない隊長が、いつも以上に紅茶を飲むのを観て、皆で苦笑したのも良き思い出だ。

ハイネセンでテストパイロットの任についた私は、ヤマハ技研のエンジニアの一人に思いを告げられ、付き合うことになる。その人の妻としてのキャリアを始めるのは2年後。その後は妻として、母としてのキャリアを積んでいくのだが、そんなことを知らない私は、任官してから最も居心地の良かった部隊がなくなる寂しさをもうしばらく引きずることになる。

## 第53話 参謀長

宇宙暦737年 帝国暦428年 11月初旬

首都星ハイネセン 統合作戦本部ビル

ファン・チューリン（大佐）

「式典はまだ慣れないか？早ければ来年にはファンも分艦隊司令になるんだ。笑顔の練習も参謀長の業務に組み入れるか？」

「止してくれ。私が笑顔になりだしたら、それこそ部下たちは困惑するだろう」

そう応じると、ターナーはやれやれと言った様子で肩をすくめた。彼のお陰で人間関係に関してはだいぶ改善できたと思う。子供たちも私に懐いてくれてるし、ファネッサもその点は評価してくれている。

ただ、部下に愛想を振りまくようなタイプじゃない。人には向き不向きと言う物が有るのも事実。私は私にできる指揮官像を目指せば十分だ。

「わかったわかった。確かにファンが笑顔で艦隊結成式で挨拶したらハイネセンに隕石が落ちそうだしな。改めてになるが参謀長を引き受けてくれてありがとう」

そう言いながら右手を差し出してくるターナーに応じて、私も右手を差し出し、握手をする。ターナーが准将に昇進し、半個分艦隊司令となる事が内定した段階で、参謀長への就任を打診してきたのは正直意外だった。

ローザスはアッシュビーと組むから除外するとして、幼い頃から付き合いのあるジャスパークベルティニー二辺りに頼むのではと思っていた。私に声をかけて来たのは正直意外だった。

「私で良かったのか？違う選択をすと思うていたが……」

「相変わらず自己評価が低いな。ブルースもウォリスもファンを欲しがっていたさ。それが判っていたからこそ、内示を受けてすぐに連絡を入れた。もちろん快諾してもらった旨をすぐに二人にはメールしたさ。だから連中は3人組。俺達は2人組なんだ」

嬉しそうに紅茶を飲むターナーは、いたずらが成功したかのような嬉し気な表情をしている。アツシユビーの司令部にはローザとジャスパー。ウォリスの司令部にはコープとベルティーニが席を構えている。ジークマイスター分室でコンビを組んでいた組み合わせがベースになっていて、司令部を運営する上で不都合は無いと思うが……。

「本当はウォリスの所にファンが入るのがバランス的には良かったかな？ただなあ、俺も小なりとは言え分艦隊司令を拝命した以上は部下を一人でも多く生還させる責任がある。冷静沈着で手堅いファンがどうしても欲しかったのさ。」

ブルースの所はアルフレッドが攻勢型2人をどう制御するか頭を抱えているだろう。ウォリスの所はジョン辺りが慣れない抑え役にならざるを得ないと悩んでいそうだな。分室でも皆が意見を求めていただろう？攻勢型が大半の中で、守勢に強く冷静なファンは誰と組んでもバランスになれたんだ」

「そう言われれば、そうかもしれないが……。自己評価にすんなりとそれを加えられるほど、私は柔軟じゃないぞ？」

「それでいいのさ。その代わり、ファンが艦隊司令になる時まで、ムードメーカータイプの参謀役を見つけおけよ？別に年上でも良いんだ。典型的にはヴィットリオかジョン辺りかな？攻勢志向だけど、熱くなり過ぎないようなタイプだ。自分に足りない部分は補ってもらえばよいんだから」

そう言いながら寛ぐターナー。ムードメーカータイプか……。個人的には苦手なタイプだな。10時から始まった結成式を無難にこなした私達は、控室で休憩タイムだ。午後からは統合作戦本部や参謀本部の各所に挨拶周りを行い。夕方からアツシユビーの実家に集合することになっている。式典に上層部が出席する事もあり、アツシユビーの式典は14時。ウォーリックの式典は16時の予定だ。

「後は旗艦の名前も考えておいた方が良いぞ？システムの登録もあるからな。いきなり聞かれて面くらったのも事実だしな」

「長門だったか？旧世紀の軍艦の名前からとったそうだが」

「ああ。まだ人類の生存圏が地球に限られていた時代の、ある島国の戦艦の名前だ。その国の総旗艦にもなった艦だし、何より大戦を通じて生き残った艦だ。縁起が良いだろう？」

確かに戦闘に勝利しても生還できなければそこで終わりだ。一人でも多く生還させたいと考えているターナーの乗艦としては良い名前かもしれない。アッシュビーは『俺と出会う帝国軍は不幸だから』という理由でハードラック。ウォーリックは『ファッシュンに興味はあるが、タトウーだけは出来なかった。なのでタトウーの神の名前を付ける』と言ってルーガイランと名付けた。私らしい旗艦の名前か……。確かに今から考えておいた方がよさそうだ。

「俺達を含めて、配備されるのは新型艦の先行量産型だろ？新しいおもちゃをやるから戦功を立ててこい！後は改善すべき点があれば早めに上申しろ！って所だろうな。強行偵察艦で一通り経験はしたが、今回は規模が違う。そういう意味でもファンの手堅い視点が欲しかったのさ」

「そういう所は見習いたいな。何とかかなりそうな気分になってくる」  
ジャスパーもそうだったが、要点をしつかり掴んで、すべき事を明確に出来るのはターナーの美点でもある。大抵の任務は目的地が明確になっておらず、それを明確にすることから司令官の仕事が始まる事が多い。色々と考えすぎてしまう傾向がある私にとっては、良いパートナーなのかもしれない。

例を出すなら山登りだろうか？私が山頂までのルートや装備から考え始めるとしたら、ターナーやジャスパーはヘリを使えば楽が出来ると考える。そんな違いがある。

「ところでファンはお菓子類は得意なのか？一応手土産にシロン産の茶葉とワインを用意はしたんだが……。ブルースのお袋さんが料理に凝りだした事は小耳に挟んだんだが、ブログをみたら菓子類ばかりアップされていてな。男性陣が集まるんだから大丈夫だと思うが、甘いケーキを着にワインを飲むのは俺は勘弁だぞ……。」

「気持ちは分かるが、招かれた以上は出されたものに文句を言うのは



マナー違反だぞ？ターナー。ちなみに私は地元で売り出され始めたチーズの詰め合わせを用意した」

「お！以前贈ってくれたカマンベールの燻製は美味だったな。クリステインも絶賛して帝国亭でも扱っていたはずだ。良い物を紹介してもらって感謝だ。ただ、手土産にチーズは男性のセンスじゃないな？奥方のチョイスだろ？ファネツサ夫人は細かい気づかいが出来る人だからな。どうだ？当たりかな？」

苦笑しながら私が認めると、嬉し気に声を上げる。チーズの生産元には私も出資させてもらっている。実際に味も良いし、故郷で作られた物を手土産に出来るのは密かな喜びだった。それを勧めてくれたのはファネツサだ。確かに家庭では私の至らない点をファネツサが補ってくれる。軍でもそういうパートナーが見つかれば良いのだが……。

「一息付けたし、そろそろランチに行くか？室長にも声をかけてあるんだ。時事の挨拶はしているが、ハイネセンで時間を取れるのも中々ないしな。我らが上官殿にご馳走になりに行こう」

「お忙しかったんじゃないか？無理を言っていないだろうな？」

「大丈夫さ。俺達は半分息子で半分生徒みたいなもんだ。室長だってお偉方との腹の探り合いばかりだろうし、不肖の弟子とたまには気楽に食事を楽しみたいと思っておられるさ」

そう言いながら、ベレー帽を指にひっかけて回しながら上機嫌に控室を後にするターナー。慌ててベレー帽をしっかりと整えて後を追う。統合作戦本部ビルのロビーを抜けて、ロータリーの自動運転タクシーに乗り込み、歓楽街へ向かった。

「統合作戦本部の士官食堂じゃ室長は利用できないし、情報部の方は流石に部外者が入り込む訳にもいかないからな。一応、予約しておいたのさ」

そう言いながらタブレットを渡してくる。画面にはマーチラビツトの別館の情報が映っていた。

「ここなら帝国風のコースもあるし、個室もあるんだ。警護もしやすいだろうし味は保証付き。それに良い値段を取るからな。人の財布

をあてにできる際にはお勧めだ」

「うーむ。私が指摘するのも何だが、室長にご馳走になって良いのだろうか？」

そこからマーチラビットまでの道のりは、ターナーの恩送り論を聞く羽目になった。彼曰く、我々はそもそも昇進が早いから、本来ご馳走になる機会が減り、逆に奢る機会が増加しているらしい。その分、ご馳走になる機会があるなら見逃すのは失点であり、階級も年齢も下の私たちが上官の財布の心配をするのはむしろ失礼になるそうだ。

そうしてご馳走になった分、我々は部下に還元すれば、上官の人徳も高まり、部下の士気も上がる。おまけに経済も良くなるから最善らしい。冷静沈着を自認する私としては、特命分室を預かる室長より、半個とは言え分艦隊を預かるターナーの方が明らかに支出が多いと思うのだが、この場で指摘するのもどうかと考え、恩送り論を黙って聞く事にした。

別館最上階の個室でお会いした室長は、私達を嬉し気に迎えてくださった。ランチにしては豪華な肉料理のコースを完食される健啖家ぶりも健在だ。私達の前線での活躍を把握されており、お褒めの言葉も頂いた。

もつとも、ある分艦隊司令官が調子に乗って年代物の赤を頼もうとした時はさすがに制止する側に回った。参謀長として司令官の足りない部分を補う機会が、こんなに早く訪れるとは思わなかった。

ただ、それを見ていた室長が嬉し気にされた所を考えると、私の制止も含めて、ターナーは一芝居打ったのかもしれない。それならそれで構わなかった。私達はお互いを補い合って、室長に楽しい時間を過ごして頂けたのだから。

## 第54話 母親孝行

宇宙暦737年 帝国暦428年 11月初旬

首都星ハイネセン アッシュビー邸（実家）

ブルース・アッシュビー（准将）

分艦隊の結成式とそれに伴う挨拶回りを終えた俺達は、いったん解散し、20時に俺の家で集合する予定になっている。何かと忙しい悪友たちが一堂に会するのは、俺とアデレードの結婚式以来だ。気のいい奴らだし、集まれるのは嬉しいが、あれ以来と言うのは正直気にかかった。アデレードとは離婚したからな。

18時を過ぎ、夜の帳がおり始めたハイネセンの街並みが車窓から見える。アデレードとの離婚は穏便には進まなかったが、何とか成立した。調停役を押し付けたローザスは疲れた様子で『女性を怒らせるものではない』としみじみと言っていたな。

離婚届にサインする際に、『どうせ貴方は私の元に帰ってくる事になるわ』と断言してきたアデレードの目を見た時、感じた事のない恐怖を覚えたのは確かだ。折よく小なりとは言え艦隊司令の内示を受けた事もあり、しばらくは軍務に精勤しようと思いを切り替えてはいたのだが、俺の離婚はもう一人の身近な女性を激怒させた。

離婚が成立し、独り身になる以上官舎を引き払って、カークの様に優雅にホテル暮らしを楽しむつもりだった俺に、断れない召集令状が届いた。送り主は代議員でもある俺の母だ。

もともと『ハイネセンの嘆き事件』の煽りを食って国防委員だったにも関わらず財務委員長に担ぎ出された母は、キャリアアップを目指すなら最高評議会議長を目指すしかない状況だった。ただ、母としては兄貴たちを含めて3人の育児を終え、ビジネスに興じて家庭を顧みない父への当てつけもあって政界に飛び込んだ。

財務委員長になる事すら不本意で、本心を聞けたのは離婚成立後だが、俺達夫婦に子供が生まれたら、政界を引退して孫育てを本業にするつもりだったようだ。『次世代の育成に貢献したい』とでも言えば、引退の名目としても成立しただろう。兄貴たちだって家庭を構えて

いるし、当然、孫は既にいる。そう判断して油断したのが良くなかった。

『育児も人並みには頑張った。不本意だったけどブルースの為にもと思つて財務委員長も引き受けた。私はだいたい貴方に尽くしたけど、人並みの幸せを期待しちやいけないのかしら？ やつと結婚したし、子供もすぐ出来ると思うのが普通ではないかしら？』

そう切り返されてはぐうの音も出ない。気が付けば無条件降伏していたし、その中でハイネセンに在る間は実家に在る事。なるべく帰つて来る事を約束させられた。

こうなると分艦隊の拠点がエルファシルになる事は不幸中の幸いだった。それを起案したのはカークのはずだ。あいつは軍人に納まらない多角的な視点をもつて在るが、誰かにこんなに感謝したのは数える位だ。最近で言えば、仲介役を洩りながらも承諾してくれたアルフレッド位かもしれない。

本来なら、今夜も馴染みの店に皆で繰り出すはずだった。ただ、パイ役をして在る事もあり、面識のあつたフレデリック経由で、ハイネセンに在る間になるべく実家に在る約束の件が悪友たちに漏れ、それなら実家に集まろうと言う話に、いつの間になつて在る。

どうせ画策したのはウオレス辺りだろう。嬉しそうに

『ブルース、下手を打つたな』

とニコニコしながら肩を叩いてきたからな。もともと結婚式の祝儀はそれなりの額を包んでもらつて在るし、負い目もあつた。それでもなんとか回避しようと思つたが、

『財務委員長には俺達もお世話になつた。こうなつたらブルースの親孝行に力添えするのも良いだろう』

とフレデリックが発言した時点で、戦局は確定した。あいつの竹を割つたような性格は好ましく思つて在るが、俺の気持ちも考えろと思つた時点で気が付いた。こいつは母方の祖父母に育てられたから、特に母親に悪友を紹介する微妙な気まずさが分からないのだ。

そしてそれを指摘する程、俺もガキじゃない。そんな事を思い返して在るうちに車窓の光景が見慣れたものになつていく。モニターに

目を向けると現在地は既に実家付近だった。

「覚悟を決めるか……」

ため息をつく俺の気持ちを察する事無く、自動運転タクシーは実家の前で一時停止し、門が開いていく。徐行したままロータリーに進み、玄関前で停車した。リーダーにカードを通して料金を支払うとドアが開く。右手でアタッシュケースを引き寄せ、降車した。ここまで来たら覚悟を決めるしかない。玄関のドアを開けて『ただいま!』と言いながら歩みを進める。

「ブルース。おかえりなさい。早く着替えてらっしゃいな。軍服は避けるんでしょ?」

「ああ。その予定だけど……」

嬉し気にキッチンから出てきた母さんの恰好に一言いいかかったが、何とか言葉を飲み込んだ。俺達の中でいつの間にか飲みに出る時はスーツ。家族ぐるみの付き合いをするときは普段着に着替え、なるべく軍服で過ごさない習慣が出来たのはいつからだろうか?今夜も普段着で集まる予定だったが、母さんは完全にダンスパーティーで着るようなナイトドレスにエプロンをしていた。

「言いたいことは分かるけど、息子の戦友に会うのに張り切らない母親はいないの。大丈夫よ。アデレードさんの時のように貴方の子供時代の話なんてしないわ。そうなるのは共通の話題が無いからなの。私が国防委員で財務委員長経験者なのをしっかり感謝しなさいね」

そう言いながら肩を叩かれ、二階の自室に追いやられた。軍服をハンガーにかけ、少しラフ目なシャツとズボンにツイードジャケットを羽織る。

「ブルース、暖炉を見ておいてちょうだい」

階下の母の声がある。階段をおりてリビングの一角へ向かう。既に暖炉に火が入っている事もあり、ジャケットを羽織った俺には暑い位だった。ただ、母さんはナイトドレスだし、飲み始めたらジャケットを脱ぐはずだ。これ位の温度が、むしろ適切かもしれない。

リビングの一角に設えられたテーブルには、オードブルとグラスが既にならんでいる。通常ならケータリングなりバーテンダーなりを

頼む所だが、俺達が機密に触れている事もあり、おそらくお手伝いさんと一緒に母さんが用意してくれたんだろう。

「副業で代議員をしてる割には大したものですよ？」

「あいつらも楽しみにしてたよ」

嬉しそうな母さんにはそう応じるしかなかった。思い返せば家に友人を呼ぶこと自体が初めてかもしれない。兄貴たちはたまにそんな事もしていたけど、俺は気恥ずかしくてそういう事は避けてきた。この張り切りようはそれもあるのかもしれない。

「それでね。出迎えは母さんがやるから、貴方はここで皆さんがそろそろまでのお相手をしてちょうだいね。貴方の背中を守ってくれるかもしれない人たちでしょ？ジャスパー君は知っているけど、それ以外は初対面なもの。母さんも少しは話しておきたいし……」

また余計な事を言い出したが、このタイミングで言うという事は譲る気はないという事だろう。俺は苦笑して応じるしかなかった。そうこうしているうちに20時近くなり、来客を告げるベルが鳴る。嬉し気に玄関に向かう母を横目に、俺はため息をついたが、持つべきものは戦術家の悪友達だ。

「ブルース、皆さんお着きよ！それにこんなものまで頂いたわ！」

どうしたのか？と思つて玄関に向かうと大きな花束を持った母さんが嬉しそうにこちらを向き、悪友達が勢ぞろいしていた。

「上官に尽くすのが部下の務めですから、国防委員に尽くすのは当然ですよ」

笑顔でそう応じるウォレスに喜ぶ母さん。その後、リビングの隅に用意してあったハンガーラックにジャケットをかけると、皆でパーティーの用意を始めた。戸惑う母に

「集まると人数が多いですからね。出来る事は自分たちも手伝う事になっているんです。そうしないと場を整えてくれた家庭の負担が多いですから……」

と言ったのはアルフレッドだった。飲み始めてから席を外そうとする母に

「むしろ国防委員として、財務委員長としてのご苦労をお話して頂け

れば……。このまま進めば軍上層部を担う事になります。予算の金額だけで一喜一憂するような上層部にはなりたくありませんから……。」

そうカークに言われた母は、見た事もない位上機嫌で、いつの間にかバーテンダー役まで身に着けたウオレス特製のカクテルを楽しみながら、気づいたらこの輪の中心になっていた。話題も子育てや、軍に息子を送りだした母親の想いなど、主役が母さんになる話題が続く。そこまでされれば俺も気づいた。こいつらはフレデリックの言通り、俺の親孝行にとことん付き合うつもりだったのだと……。

23時近くなると、自然と片付けが始まった。軍人として身の回りの事は出来る連中だが、一糸乱れぬ有り様は専門業者もかくやと言う物だった。ウオレスに至ってはグラスまで磨いていたし、指示を母に仰ぐ場面もあったが、ヴェットリオがレシピを聞いていた事もあり、母があまり動かずに済むように配慮してくれてもいた。

「ブルース、貴方は才能には恵まれたけど、友人は少なかつたでしょ？母さん正直心配していたの。でも、すごく良い仲間にも恵まれたのね。あの子たちの力に少しでもなれるように、もう少し頑張ってみるわ」片付けが終わり、各々にお礼を添えながら帰っていく連中の見送りを終えた時、母さんはそう零した。子供の頃からなんでもそこそこの努力でトップを取ってきた俺にとって、幼馴染のジョン以外は、正直取るに足らない存在ばかりだった。当たり前も当然つれない物だったし、それを改めようと思った事もない。でも、確かに友人に恵まれたんだろう。

「ああ。俺もあいつらと勝利をつかむよ。同盟軍が誇るべき艦隊司令官になる連中さ」

素直に接する機会が少なかった母さんに、不思議とこの時は素直に応じられた。この日以降、概算要求が始まる時期には、可能な連中は『ナタリー・アッシュビーを応援する会』と称して実家に集まることになる。

開催時期に意図的な物を感じるのだが、国防費の増額は俺にも関わる事だ。毎年一度くらいは親孝行と言いつつも聞かせてももちろん参加した。

うれしそうなお母さんの顔を見ると、やめようとも言えなかったのだ。



## 第55話 焦燥（ファイアザード会戦）

宇宙暦738年 帝国暦429年 3月初旬

パランディア星系 旗艦長門

カーク・ターナー（准将）

「総司令部より秘匿回線で入電。司令、内容をご確認ください」

司令部からの緊急連絡を受信したのは、パランディア星系で定期補給艦隊を襲撃し、帝国軍の地上基地を超長距離カメラで撮影していた時だった。いぶかし気な表情をしながらファンが歩み寄ってくる。司令席のモニターを操作して秘匿回線のフォルダーを虹彩認識で認証して開く。

『至急エルファシルに帰還されたし。尚、ティアマト星域で有力な敵と接敵、対応した分艦隊は敗退した模様』

「これは……」

「いよいよ本職が出て来たのかもしれないな。定期便の連中も素人には言え無謀な動きはしなかった。ティアマトの基地の物資が一番厳しかったんだろう。パランディアは捨て石かな？まだ余裕もあるようだし」

見やすいように椅子を引きながらファンに応じる。パランディアに來た帝国軍も、強行偵察艦が近づいても前回のようには追うそぶりはしなかった。欺瞞航路予測でうまく欺いて側面攻撃を成功させて撃破したが、かなり厳しい訓令でも出ていたんだろう。

「室長のルートからおそらく情報が入ったんだろう。それなりの戦力が押し出してくるのだろうな。そうで無ければ集結命令など出る訳がない」

ファンの予測も似たようなものらしい。贅肉狩りの季節が終わりを迎えつつあるという事だ。補給艦隊の撃破で昇進できるはずだが、流石に時間がなさすぎる。ファンは准将になっても参謀長でいてくれるだろうが、どうせなら贅肉狩りが出来る間に司令官にしておきたかった。帝国軍も半端なタイミングで重い腰を上げたものだ。

「ティアマトは正規艦隊が出て来たと思うか？」

「いや。そこまでの戦力ならいくら何でも撤退してダゴンで遅滞戦をするはずだ。同等規模で我が軍を手玉に取れる指揮官だった確率の方が高いだろう」

フアンの言う通りだな。そうなるよ……。いや、これ以上仮定の話を考えても仕方がない。エルファシルに戻れば判断材料がもつと揃うはずだ。

「航海長、我々は一度エルファシルに戻る。進路の変更を頼むぞ」「了解しました」

航海長達からの視線を感じ、俺は思考を一度切り上げて帰還の指示をだした。ブルース達が派遣されたファイアザード星域の方はどんな状況だったのか？どちらにしてもテイアマトに補給がされた以上、帝国軍の目的地はパランディアかファイアザードになるはずだ。

「参謀長、どちらにしてもパランディアの帝国軍の状況も重要な判断材料になりそうだ。あまり時間はないが、こちらでも分析をしておこう」

「では、参謀たちを会議室に集めておこう。どちらにしても分析は総司令部でも行うはずだ。取りまとめたデータを送付する手筈も整えておこう」

頼む……。と応じるとフアンはテキパキと指示を出し始めた。撮影されたばかりの帝国軍地上基地の画像をモニターに映して眺める。基地内の幹線道路には地上車がまだかなり映っている。重力に引かれて墜落した補給艦隊の救援か？ただ、輸送車の割合が高い事を踏まえると人命救助だけじゃなく、物資回収も兼ねているな。パランディアの帝国軍はまだ友軍を気遣う余裕はあるようだ。

「手配は完了だ。1430から第一会議室に皆揃うだろう……」

「なあ、フアン。ファイアザード星域からそろそろ帝国軍にはご退場頂くべきかな？」

「会戦候補を絞り始めても良い時期なのは確かかもしれないな」

「なら、補給を許しても問題ないな。制宙権さえ確保してしまえば生殺与奪がこちらの思うがままだ。艦隊戦力の撃破さえできれば問題ない訳だ……」

「とは言え帝国側は物資を運び込む事を第一目標にするだろう。それをどう活かすかが、作戦の肝になるな」

「参謀連中との会議を前に、回答を確定させるのもな。まだ時間はある。焦らず行こう」

肩に触れながらファンに応じる。まずは精度の高い判断材料を集める。そして出来ればブルース達に功績を立てさせて悪ガキたちに相応しい立場を用意しないとな。

宇宙暦738年 帝国暦429年 3月初旬

首都星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

ハウザー・フォン・シュタイエルマルク（大佐）

「閣下にお力添えをお願いしながらこのようなことになってしまい、申し訳ございません」

「あまり思い詰めぬことだ。艦隊司令長官であるツイーテン元帥が上奏され、ゲルトリング軍務尚書も了承されたのだ。卿が責任を感じる必要はあるまい。軍人である以上、上層部の判断に懐疑的な発言はしない方が良いでしょう」

先ほどまで行われていた最高幕僚会議で正規艦隊を含む3個艦隊の戦力を動員して、ファイアザード星域への数年分の物資補給と、敵戦力の誘因・撃滅作戦の実行が決定された。

ケルトリング軍務尚書のご長男を始め、軍部系貴族の将官が参加する一方、独立艦隊司令にしがみついた『名ばかり少将』達も、戦力に含まれる形になった。ミヒヤールゼン提督にも事前にお力添えをお願いし、何とか『名ばかり少将』達の参加を防ごうとしたのだが、残念ながらその目論見は失敗に終わった。

「タイミングが良くなかったな。コーゼル少将は実力を発揮してくれた。だが、どうせならこの作戦と同時進行でティアマトへの補給も行うべきだったな」

「とおっしゃいますと?」

宇宙艦隊司令本部の廊下を、提督の後ろに付き従いながら歩く。知己を得て以来、私は正規艦隊の一席を占めるミヒヤールゼン艦隊の司

令部に参謀として転籍した。私が提唱する実力に基づく任用に閣下も同意され、何かとお力添えを頂けるようになった。

「卿の働きかけもあり、軍上層部も『名ばかり少将』達の排除には確かに前向きになりつつあった。だが、その実力を示したのがコーゼル少将だった事が、焦りを生んだのだろう。勝つても碌なことにならないだろうな」

「小官も実力に基づいた任用の結果、下級貴族と平民の台頭を危ぶむ声があるのは認識しております。ですが、ケルトリング中将を始め、軍部貴族の方々は実力も備えておられるはず、焦る必要などございませぬ」

提督は立ち止まると悲し気な表情でこちらを向かれた。

「卿自身は実力もあり、器も大きい。それにシユタイエルマルク伯は退役されているから分からねのかもしれない。詳細は分からんが、政府系の貴族から、『軍部は平民に頼らなければ役目を果たせぬのか?』と言う声が上がっているのだ。

軍務尚書も司令長官も当然、ご承知だろう。ケルトリング中將を始めとした軍部貴族の子弟たちにもその声が漏れているはずだ。社交界にあまり参加しない卿は知らぬかもしれないが……」

「申し訳ありません。把握しておりませんでした」  
「軍務に精励しておれば、社交界に出る暇など本来はないのだ。ただ、軍上層部に現役の父親がいるとなればそうもいくまい。それに正規艦隊の席が18席であることにも気が付いたのであろうよ。少なくともひとつはコーゼル少將の物になる事がほぼ確定したという事もあるな」

提督はそこまで言うと、また歩み始めた。私も後ろに続く。

「コーゼル少將が帰還し、中將に昇進して正規艦隊司令になればどうなるか? 『名ばかり少将』達だけでなく太い知縁をもつ軍部系貴族の子弟ですら、正規艦隊司令になれなければ軍人として平民以下だと認定されるに等しい。実際問題、私にも正規艦隊司令からの勇退話が持ち掛けられている。後任に子弟を押し込もうと必死に工作がされている様だ」

「そんなことが……」

「正規艦隊司令になって長いが、挙げた功績と言えば何度が補給を成功させた位だ。会戦で叛徒たちを撃破した訳でもない。外しやすいと言えば外しやすい艦隊司令なのさ。私はね……」

淡々と他人事のように話される提督に私は納得できない物を感じていた。確かに派手な功績は上げておられないかもしれない。だが、最前線で『名ばかり少将』達が良いように手玉に取られる中、何度も危機的な状況で補給を成功させてこられた。

戦線を維持できたのは提督の功績が大きい。地味な功績を評価せず、皇族とは言え素人の横やりを許して犠牲を増やす上層部のやりよりに、義憤を覚えずにはいられなかった。

「尽くしてくれた部下たちを無責任な連中に預ける訳にはいかないと思つて耐えてきたが、さすがに疲れた。それにコーゼル少将もゼロから艦隊を整えるとなると大変だろう。この一件が片付いたら、私の後任にコーゼル少将を指名するつもりだ。本当なら卿に預けたかったが、我が司令部では昇進もなかなかさせられなかった。参謀として、彼を支えてやって欲しい」

「閣下……」

「願わくば、なるべく犠牲が少ない形でこの一件が落着いてくれることを願いたい」

立ち止まって、窓の外に視線を向けながら提督がつぶやく。私はどこで間違つたのだろうか？命のやり取りをする以上、軍には情実人事よりも実力主義が必要なはずだった。皇族だからという理由だけで将官になり、統制の利かない彼らに独立艦隊を投げ与えた上層部への批判の気持ちも確かにあった。

だが、志を同じくしていると信じていた軍部系貴族までもが、私たちの役職を奪われると判断するとは思わなかった。3個艦隊とは言え、実戦力は半分程度だろう。同数の戦力とぶつかれば勝利できるとは思えない。しばらくの間、提督と同じように窓の外の空を見つめた。帝都の天候は私の内心とは真逆で快晴だった。それすら、楽観的な奴らの内面を表しているようで不快だった。

## 第56話 格差（ファイアザード会戦）

宇宙暦738年 帝国暦429年 4月中旬

惑星エルファシル 第3駐留基地 司令部

カーク・ターナー（少将）

前線に散っていた独立艦隊は呼び戻され、ティアマト・パランティア・ファイアザードの各星系の情報分析と並行して作戦立案を進めている。エルファシルに戻った段階で、うちの分艦隊は功績が認められ昇進の辞令を受けた。ブルースたちも派遣されたファイアザード星域で補給艦隊を撃破して昇進している。

これで悪友達は少将が3人、准将が5人。730年卒の中では最速で昇進中だし、いよいよ正規艦隊司令も見えて来た。ブルースは40歳までに艦隊司令長官になると豪語したが、予想以上に早くその地位に就くことになるかもしれない。半個分艦隊だった艦隊規模も戦力化された新型艦の分隊が配属され、3000隻規模に再編成中だ。

部下たちに骨休めを命じながら、俺と参謀長のファンは同盟軍が久しぶりに撃退されたティアマトで生じた遭遇戦の戦闘詳細を確認していた。

「どうやらターナーの言った通りのようだ。欺瞞工作を見切って進路を取られているな」

「まともな連中ならそろそろ対応してくる時期なのも事実だ。毎回欺瞞工作に引つかかっていた方が異常だったんだ」

強行偵察艦の運用体系を提案したのは俺自身だ。帝国軍の欺瞞航路分析を逆手に取って優位なポジションから遭遇戦を開始する戦法は、かなりの戦果をあげた。ただ、これだけ畏にかかれれば、まともな軍事的素養があるプロなら当然修正してくる。

ティアマトに派遣された同盟軍の分艦隊は運が悪かったとも言えるし、前例に引つ張られて油断したとも言える。もつともそれを判断する立場にはないが……。

「同盟軍もそこまで判断は悪くないか……。不利になった時点で撤退の判断を下している。補給は許してしまったが、そもそもティアマ

ト星系はまだ帝国に預けておいた方が良いだろう？負けたが犠牲は最低限に抑えられた」

「それで上層部が納得してくれると良いのだが……。久しぶりの敗戦だ。軍法会議にはならないと思うが、分艦隊司令でいられるかは厳しいのではないかな？」

ファンは、厳し気な表情でモニターを見つめながら応じた。俺はどこちらかと言うと帝国軍がいよいよ重い腰を上げつつあることを分艦隊レベルの遭遇戦で知れたことを喜ぶべきだと考えていた。これが正規艦隊同士の会戦で起こっていたら比喩物にならない損害が出ていたはずだ。

相手のある事である以上、常勝なんてことはまずあり得ない。負けるなら損害をどれだけ抑えられるか？も重要だと思ふのだが、准将になり分艦隊司令の立場が見えて来たファンの採点はもう少し厳しい様だ。

手堅い仕事振りで自分にも厳しいファンからすると、油断した事自体が言語道断なのかもしれない。価値観を否定するつもりはないが、責任を重く捉えすぎて潰れるような事が無いか？少し心配になった。まあ、こいつの精神は鋼糸で出来ているから問題ないか……。

『ピッピッピッ。ピッピッピッ……』

内線の着信音が鳴り始めたのは一息入れようとお茶の用意をして紅茶を楽しみ始めた時だった。

『カーク、ファン。司令部に上申したい作戦案がある。協力してほしい』

内線の主はブルースだった。

「お前が協力なんて言葉を使うとはな……。同期としては喜ばしいが、エルファシルに隕石でも落ちやしないかと怖くもあるな。それでどこに行けばいい？」

ファンもブルースが協力なんて言葉を使ったからか、まばたきが増えていた。それも面白かったが、まずはブルースが俺達に協力を求めてまで上申したいという作戦案に興味があった。急いでカップに残った紅茶を飲み干し、二人で指定された第4ブリーフィングルーム

へ向かう。

「お前らにしては遅かったな」

「正反対の会議室にいたからな。待たせたならすまん」

部屋に入るとニヤニヤしながらウォリスが声をかけて来たので、わざと申し訳なさそうに頭を下げる。

「くそ、そういう意味じゃ」

「ウォリス、下手を打ったな」

焦る様子のウォレスに嬉しそうに声をかけるブルース。まあ、アツシユビー邸に世話になった時もなにかといじっていたからな。一本返せてブルースも嬉しそうだ。

「全員揃ったようだし、俺が思いついたことを伝えよう。帝国軍の戦力は正規艦隊を含む3個艦隊と予想されている。普通に考えれば、独立艦隊が索敵を担当し、ハイネセンから来る正規艦隊が会戦を担当する。だが、それでは帝国軍と同じ土俵に乗るだけだ。戦力を増やせば、奴らは逃げに入るから撃滅は難しくなる」

俺達が席に着くや否や、ブルースは話し始めた。そう、同盟としてはなるべく帝国の正規艦隊を削っておきたいのが本音だ。半端な独立艦隊より、正規艦隊を撃滅する方が難易度も高い。

ただ、人的資源を削る意味では難易度以上の効果がある。それにコルネリアス帝の大親征の時のように大軍で一気に来られるのも厄介だ。3〜4個艦隊ぐらいずつ処理するのが理想でもあった。

「そこでだ。新型艦のみで編成された我々の3個分艦隊は、エルファシルからフェザーン方面の航路を長駆進撃してファイアザード星域で帝国軍を挟撃する作戦案を思いついた」

ブルースが俺達を見回すが、皆思考を始めているようで期待していたのであろう驚きのリアクションは無かった。ただ、非常に良い案だし、ブルースらしい前例に捕らわれない発想の作戦案だ。俺が思う以上、帝国にとってもそうだろう。奇襲は高い確率で成功すると思う。

「こうなると時間が最大の敵だな。補給は済んでいるのか？」

「うちは問題ないはずだ」



「運用想定以上の長駆進撃になる。途上での補給も必要だが……」

「ターナー。惑星ウルヴァシーは今や同盟の集積港だ。物資もそれなりにあるんじゃないか？」

「一万隻くらいまでなら何とでもなると思うぞ？ただ、ウルヴァシーでの補給は頂けないな。フェザーン籍の交易船にも目撃される」

「先行させてメイン航路から外れた星域で補給すれば大丈夫だ」

「何とかかなりそうだな……」

「よし、作戦案を早急に煮詰めよう。アルフレッド、参謀本部の友人に現地の司令部から作戦案の上申を明日行う旨を伝えてくれ。上申の主はブルース、連名でウォリスと俺も署名している様だね。先にあちらが正規ルートで指令を出すと厄介な事になる」

「了解だ。今から取り掛かる」

「フアンは補給計画を整えてくれ。上層部が懸念するしたらそこだ。サインが出たらすぐ動けるようになる」

「取り掛かろう」

「残りのメンバーで作戦案を煮詰めてしまおう。明日に俺達の総意と言う形で上申して裁可を貰う。あちら側の自称戦争のプロ達に派手に喧嘩を吹っかけてやろう！」

「おう！」

俺の声に応じる様に皆が動き出したが、ブルースだけが少し不本意な表情をしていた。どうした？と声をかけると

「案を思いついたのは俺だぞ！采配を取るのも俺の役目だろう」

少しすねた様子のブルースを宥めつつ、俺達は作業を始めた。まあ多少子供なような気もするが、この作戦が成功すれば忘れたかのように機嫌も良くなるだろう。早朝までかけて細部を詰め、翌日には連名で上申した。

俺達の作戦案は参謀本部で最優先で検討され、その日の夕方には裁可を得る事が出来た。ブルースを臨時司令官とした約1万隻の臨時特務艦隊がエルファシルを発ったのは、裁可を得て3時間後の事だった。

宇宙暦738年 帝国暦429年 5月上旬

イゼルローン回廊 同盟側出口付近

ジークハルト・ケルトリング（中将）

「全艦隊のイゼルローン回廊の通過が完了しました」

「出口付近での待ち伏せを警戒していましたが、叛徒どもは違う選択を選んだようです。最も、偵察艦の接触は確認しております」

「参謀長、念のため素人どもにもう一度厳命しておいてくれ。くれぐれも偵察艦の接触に過敏に反応して艦列を崩すような事のないようにとな」

「了解しました。重ねて全艦隊に通達いたします」

参謀長が敬礼してオペレーターに指示を出し始めた。正規艦隊の練度なら、オーデインからここまでかかっても40日だ。だが、何を勘違いしたのか素人のお荷物艦隊が作戦に加わった事で、50日以上も時間を費やす事になった。

平民出身のコーゼル少将が叛徒達を退けた事で、『皇族の自分たちが出向けば必勝間違いなし！』などと高をくくっているらしい。向かっているファイアザード星域の地上基地は、一日も早い補給を望んでいるはずだ。お荷物どもにはそんな事すら意識にないのだろうが……………」

「ロイス伯の艦隊から入電です。司令、如何なさいますか？」

「聞かぬわけにもいかないだろう。メインに映してくれ」

オペレーターが困った様子で対応する。既に叛徒達の勢力圏に近いのに安易に通信をする。どれだけ素人なのか？平民とは言えコーゼル少将は歴戦の猛者だ。皇族だからと言って好き勝手されるのもそろそろ限界だな。

「ケルトリング中将、回廊出口付近に叛徒どもはおらぬようだが、偵察艦の接触は確認しておるのだろうか？出方を見る意味でも、しばらくここに留まるべきではないかと皆が言う物でな」

「そうでしたか。どうしても言うのであれば伯の艦隊の離脱を許可しますが？我々の任務にはファイアザード星域への補給も含まれています。偵察艦の接触程度で、むやみに現在地に留まる判断は出来か

ねますな」

「なつ。儂は皇族だぞ！口の利き方に気を付けたまえ」

「私は中将で、伯は少将でしたな。今は軍務中です。軍の階級をいい加減弁えて頂きたいですな。それと偵察艦が接触しているという事は、叛徒達の勢力圏という事です。無闇な通信はこちらの現在地を知られる事に繋がりますので、お止めいただきたい。こんなことは下士官でも知っている事です。では」

オペレーターに目配せして通信を切らせた。派遣された戦力の半分はロイス伯のような連中が率いている独立艦隊だ。勝手に離脱して叛徒どもの餌になるのは構わないのだが、こども好き勝手されると出来る物もできなくなる。

「参謀長、既に戦闘宙域に入ったと判断して通信封鎖をかけよう。合わせて全艦隊に伝達してくれ。という訳で、連中からの入電は通信封鎖を理由に拒否するように」

参謀長が了解の旨を伝えてくる。オペレーター達もうんざりしていたのだろう。嬉し気な雰囲気がある。身分を理由にされては父も押し返せなかったようだが、お荷物を前線に派遣した判断は正直間違いだ。政府系が軍部は平民の協力が無ければ叛徒どもに勝てないなどと言い立てている事も漏れ聞いている。

こんなことならコーゼル少将も戦力に加えるべきだったか？若しくは実力主義を推奨した事で宇宙艦隊でも浮いているミヒャールゼン艦隊に合力を頼むべきだったか？ただ、実力主義の提唱者であるシュタイエルマルク大佐とお荷物どもを同じ場にしたらそれこそ厄介事にしかならないとも思う。

どちらにしてもファイアザード星域へ向かうしか我々に選択肢はない。我が艦隊を中心とした帝国軍は、ファイアザード星域に向けて進撃を始めた。前線で苦勞しているであろう兵士たちに何としてでも物資を届けねば。メインモニターに映る星々を見つめながら、私は襲い掛かってくるであろう叛徒どもの選択に思いを馳せていた。このまますんなり補給を許す程、奴らは甘くはないはずだ。

## 第57話 審判（ファイアザード会戦）

宇宙暦738年 帝国暦429年 5月中旬

シヤンタウ星域 外縁部

コーゼル少将

「シユタイエルマルク大佐。落ち着くのだ。卿がその有様では部下たちも落ちつくまい」

「コーゼル少将。申し訳ありません。気が急いでいるのか落ち着けません、何とか抑えます」

オーディンを出立して以来、何度も同じやり取りをしていたが、シユタイエルマルク大佐は考えこむ際にするらしいあごに手を当てて人差し指でリズムを取る癖を無意識なのだろうが繰り返している。

軍部系の名門であるシユタイエルマルク伯爵家に属しながら、実力主義を信奉し、友軍の危機を心から心配できるまっとうな精神の持ち主だ。もちろん精神面だけでなく戦術家としての見識も深い。平民出身でなにかと冷や飯を食べさせられた私から見ても、期待してしまう人材だった。

「何もかもが裏目に出てしまいました。どうすべきだったのか？ 考えてはいるのですが正解だと思える答えが見つかりません」

「見つかる訳がないのだ。関わった人間に勝利ではなく自己の利益を優先した人間が多すぎた。敗因があるとしたらそれに尽きるだろう」

思い悩む様子の大佐に、私は忌憚なく応じた。今回動員された3個艦隊の戦力の半分は皇族が指揮される独立艦隊だ。陛下がお許しになったのだ。軍務尚書閣下が断れるわけもなく、素人が艦隊司令の職に就いた。なればこそ、支えられる人材を送り込んでおくべきだったのだ。

ただ、皇族に万が一の事があれば、詰め腹を切らされるのもまた事実。結局、素人の面倒を見られるレベルの人材は、旗下に行くことを拒否した。それもあって戦力にならぬまま彼らはお荷物となっている。

ケルトリング中將が指揮されながらイゼルローン回廊出口付近ま

での進撃に本来より10日以上の日数をかける事になった。その時間を使って、叛徒たちは大胆な作戦の布石を打ったわけだ。

その大胆な策に関しても、挽回する余地があった。ファイアザード星域で挟撃するためであろう戦力が高速で移動しているのを、フェザーン籍の交易船が目撃していた。ただ、帝国内でフェザーンの権益にかじりついていた連中の存在もあり、傍受された際の身の危険もあったのだろうが、その交易船はフェザーンに到着するまでその情報を流さなかった。

そしてその情報を帝国で交易を営む商人に売り、その商人が付き合いのある門閥貴族に伝え、わざわざ軍務尚書にアポイントを取って伝えるまでにどれくらい時間が失われたのか？少なくとも見積もっても作戦開始段階から20日はロスしている。そしてその時間を叛徒たちは勝利の為に使った。それだけだ。

参謀であるシュタイエルマルク大佐がこんな有様でも、艦隊司令のミヒャールゼン提督は何も言わず。ただ腕を胸の前組み、目をつむっておられる。その姿は、奇襲によつて撃滅されつつあるであろう友軍がなんとか持ちこたえてくれと、祈っている様でもあった。

『救援は我が艦隊とコーゼル分艦隊で参りましょう。ただし、救援の成否を問わず、コーゼル少将とシュタイエルマルク大佐の昇進、私の後任としてコーゼル少将を当てる事を確約頂きたい！』

叛徒たちが長軀による挟撃を狙っている事が明らかになった時、ミヒャールゼン提督は救援の為の出撃にあたって条件を出された。それもそうだろう。ケルトリング中將は軍務尚書閣下のご嫡男。旗下の独立艦隊の指揮官には皇族も含まれる。絶望的な状況だが、救援を出さない訳にもいかない。ただ、救援が失敗した時に詰め腹を切らされては敵わない。手を挙げたのは提督だけだった。

『困難な状況。手を挙げたのが小官だけという事も含めれば贅沢な望みでもありますまい。書面が到着次第、進発できるように手配いたします』

司令長官は一瞬不快気な表情をされたが、書面を望まれるのも無理はない。彼ら上層部の判断ミスが招いた状況の尻拭いに行くのだ。

その失敗を背負わされる羽目にならないように保険を望むのは、当たり前の事だったと私も思う。

艦隊司令を勇退するのなら、多少強気な発言をするのも無理はないとも感じる。ただ、自身の後援者のような立場にある提督を全面的に信頼しているシユタイエルマルク大佐と違って、私は行動に違和感を感じている。

伯爵家出身で自身も男爵の爵位を有している以上、軍内部の政治的配慮を熟知されているはずだ。ティアマト星域への補給と遭遇した叛徒の撃破。功績と言えば功績だが、平民出身の私は、昇進に値すると判断されない可能性も考えていた。皇族だからと言う理由で将官の地位を投げ与えられた方々の階級は少将だ。平民出身の私が中将になれば何か起こるか？私ですら想像できる。

なのに提督はわざわざ私の昇進を確約させた上に、正規艦隊司令の地位まで用意した。実力主義と言えば聞こえが良いが、平民の中将までは可能性があったが、正規艦隊司令を平民に任せるのは、帝国軍主流派を占める軍部貴族からしても受け入れ難いものがある。平民たちは私に続けと艦隊司令の地位を目指すだろうし、皇族だけでなく、軍部貴族も平民を競争相手として明確に意識するだろう。

素人のお荷物排除されるかもしれないが、僚友達を共に戦う戦友ではなく、競争相手として認識した時、協力ではなく足の引つ張り合いが始まるのではないだろうか？私ですらその考えに至った以上、提督がそれを認識されていないはずはない。

実力主義を標榜しながら、帝国軍内部の不和を煽るような行動をされる。少なくともその本心を知るまでは、全面的に信頼する事は出来ない。将来帝国軍を背負う人物になるであろうシユタイエルマルク大佐を守る意味でも、提督には注意する必要がある。落ち着かない様子の大佐を横目に、私は新しい自分の役目を明確に意識していた。

宇宙暦738年 帝国暦429年 5月下旬

ファイアザード星域 分艦隊旗艦ハードラック

アルフレッド・ローザス（准将）

『ブルース。完勝と言ってよい戦果だな。俺達をあげて使った気分はどうだ？』

「予定通りさ。まあ、司令官への敬意が足りない気もするが、それ以外は満足だ」

フアイアザード星系に存在する帝国軍地上基地への補給が始まった段階で、ハイネセンから出撃した第2、第5、第13艦隊が進撃を開始。横陣で牽制しあい、長距離ビームの射程にお互いが入ったかという段階で、フエザーン方面から長駆した我々は、一気に帝国軍の右翼後方から突撃を開始した。

右翼後方から左舷に進路を取りつつ中央部を突破。そのまま左翼側面に攻撃をかけつつ、また左舷より進路を取って、帝国軍の後方へ駆け抜けた。開戦して一時間も経たずに勝敗は決した。艦列をズタズタにされた帝国軍は組織的な抵抗が出来るはずもなく、次々に撃破された。

開戦開始から3時間を過ぎたかと言うあたりで、掃討戦に移行する旨の指示が入電する。現在は降伏勧告をしながら救援活動をする段階だ。ブルースを始めといった分艦隊司令達は通信を繋ぎ、雑談を始めていた。

『何度見てもこれ以上はないタイミングでの突撃だった。ウオリス、しばらくの間は同盟に誕生した新しい名将、アッシュビー提督を称えようじゃないか』

「カークもたまには良い事を言うな」

嬉し気な様子ブルースだったが、私を始め、僚友達は苦笑をしていた。確かにこの数年なかった大勝と言っても良い戦果だ。少しの間は上機嫌にさせておくのも良いだろう。そうじゃなくても離婚調停で一時期は落ち込んでいた位だ。これ位は許してもらえらるだろう。

『今、確認が取れたが、中央の部隊はケルトリング中将の正規艦隊だったようだ』

『ケルトリングというと軍務尚書の関係者か？確かに右翼は一蹴できたが、中央は何か一矢報いようとしてきたな』

『それで、彼は捕虜になったのか？』

『いや、指令艦は攻撃の優先順位が高い。彼の乗艦は撃破確認されているから戦死した可能性が高いな。高級指揮官だと、自称ロイス伯爵位だな。彼はいわゆる『名ばかり少将』だ』

『散々足を引っ張って生き恥を晒すか。まあ、捕虜にできたのだからフェザーン経由で身代金交渉を進めて、收容所の予算にする位しか使い道はなさそうだな』

『保護する意味でもその方が良いだろうな。兵士たちの憎しみの対象のはずだ。私刑をうける未来しかないだろう』

「カーク。ファン。この会戦の捕虜は100万近い。これで地方星系の開発も益々進むだろう?どうだ?」

『ブルース。確かに喜ばしい事ではあるが同化までの平均期間は3年だ。100万人を3年間食べさせるとなると大事業だぞ?戻ったら財務委員長に一報入れて置くんだな。若しくは戦勝記念パーティーで持ち上げてやれよ?予算を工面するのに四苦八苦しているはずだ』

捕虜100万人はあくまで宇宙艦隊に限った話だ。ここからファイアザード星系にある帝国軍地上基地へ降伏勧告が行われるはずだから、この数字は更に増えるだろう。ふと、惑星カプチエランカの記憶が蘇り、意地を張らずに降伏勧告に応じて欲しいという想いかられた。

「司令部より入電、メインモニターに映します」

『アッシュビー少将、イゼルローン方面を警戒していた強行偵察艦から急報が入った。約18000隻の戦力が回廊出口を通過し、アルレスハイム星系に向かっていている様だ。大勝の立役者である貴官らに頼むのは心苦しいのだが、新型で揃えた貴官らの部隊が一番足が速い。第2艦隊も後続として向かわせるので対応を頼みたい』

「承知しました。既に3個艦隊の戦力の撃滅に成功しました。あくまで守勢を取りますが、それでよろしいでしょうか?」

『うむ。これ以上捕虜をとっても財務委員長に小言を言われるだけだろう。手数をかけるが頼む』

「どうやら名優にはアンコールが望まれるようだ。もうひと働きするでしょうか」



司令部との通信が切れると、ブルースは嬉し気に出撃の命令をセリフめいた言葉で告げ、やれやれと言った表情で敬礼すると、皆通信を終えた。掃討戦から一番離れていた左翼のカークの艦隊から既に進撃が始まっている。

ブルースの言うアンコールが終われば、しばらくはゆっくり出来るだろう。私も参謀たちに指示を出し始めた。願わくば、帝国軍の増援部隊の指揮官が無謀な判断をしない事を祈りたい。

## 第58話 結末（ファイアザード会戦）

宇宙暦738年 帝国暦429年 6月上旬

アルレスハイム星系 分艦隊旗艦ティアーリウム

コーゼル少将

救援の為にファイアザード星域へ急行していた私たちだったが、アルレスハイム星系からパランティア星系へ向かう航路上で、急激に叛徒たちの強行偵察艦との接触が増えた。少なくとも一個艦隊以上の戦力がこちらに向かってしていると判断できる状況だった。

それを受けて、総司令であるミヒャールゼン提督は進撃の停止とアルレスハイム星系への後退を命じられた。ファイアザード星域に向かったはずの3個艦隊を無視して、戦力をこちらに割く可能性は低い。

先行した艦隊が壊滅したとなると、最大で4個艦隊の戦力がこちらに向かっている可能性もある。アルレスハイム星系への転進は、妥当な判断だった。

「司令部より入電、メインモニターに繋がります」

『コーゼル少将、叛徒たちは続々とアルレスハイム星系に進出している。残念ながらファイアザード星域で友軍は撃滅されたか、少なくとも掃討戦に入っていると私は思うのだが、貴官はどう思う？』

私の敬礼に答礼すると、提督が疑問を投げかけて来た。画面の左にはシユタイエルマルク大佐も映っている。悔し気な表情を見る限り、彼も友軍の敗退を認識しているのだろう。

「小官も閣下の判断に同意いたします。ただ、この段階で見切るにはいろいろと事情がありすぎるのではないかと。見捨てたなどと口実を付けて批判される可能性もあるでしょう。惑星タンムーズ近郊から星系外縁部まで後退し、戦況を確認されてはいかがでしょうか？」  
『そうだな。救援は絶望的な状況とは言え、同等の戦力相手に矛を交えずに退くのも外間が良くないか……。卿の意見を採用しよう。一先ず外縁部まで後退する。叛徒たちの戦力が一個艦隊以上と判断された段階で撤退を開始する。その際は、無念だろうが指示に従って

もらいたい。では』

通信が終わり、紡錘陣形を取ったまま右舷に進路をとり、恒星の重力を利用しながら加速を始める。戦術モニターには既に一万近い反応が出ている。きれいに整った艦列を見る限り、間違いなく精鋭だ。陽動の為の欺瞞戦力でない事は確かだろう。

外縁部へ進む我々に追従する様に、叛徒たちはゆっくりとすり鉢のような陣形で追従してくる。彼らが惑星タンムーズを通過した辺りで、星系外縁部に反応が増え始め、一個艦隊クラスの戦力が到着した。そのまま先行部隊に追従する様に進攻を開始する。残念ながら敵戦力は2個艦隊近い。このまま速度を上げて撤退するか？そんな考えが浮かんだ時に、先行部隊のおそらく旗艦からオープンチャンネルで通信が送られ始めた。

『帝国軍の諸君。私は同盟軍のブルース・アッシュビーだ。ファイアザード星域において我々は帝国軍3個艦隊相当の戦力を殲滅した。ケルトリング中將は奮戦の上戦死、ロイズ伯とやらは泣きながら命乞いをした』

通信と共に何かのデータが送付されている。オペレーターが確認を求めてきたが、許可して開封すると戦闘詳報とおぼしきデータがモニターに映し出される。ある意味予想通りか。ファイアザードで挟撃された帝国軍が、文字通り艦列をズタズタにされて殲滅される様子が映し出される。

『偽報だと思われても困るのでな。念のため証拠を添付しておいた。この作戦案を考えたのは俺だ。お前たちを叩きのめした人物はブルース・アッシュビーだ。次に叩きのめす人物はブルース・アッシュビーだ。忘れずにいてもらおう』

これは挑発なのか？だが、ここまでされてすごすごと撤退して良いものなのか？思わず艦隊旗艦の方に視線を向ける。提督はどう判断されるのか……。

「司令部より入電、メインモニターに繋がります」

『少将、叛徒たちにも跳ねっ返りがあるようだ。元気があって何よりだが、こちらが同じ目線に立つ必要はない。ファイアザードでの顛末

も明らかにになった。このまま撤退する』

「閣下がそう判断されるなら、小官からは何も言うべきことはありません。このまま最大戦速で離脱します」

モニターに映る提督の傍らで、大佐が何やら指示を出している。数分後に、司令部旗艦からオーブンチャンネルで通信が送られた。

『貴官の勇戦に敬意を表する。願わくば再戦の機会まで壮健なれ　ハ  
ウザー・フォン・シユタイエルマルク』

この一報で、少なくとも儀礼の意味では帝国軍は一矢報いる事が出来たと思う。私の見込んだ通り、シユタイエルマルク大佐は帝国軍の未来を背負う人材だ。そう感じたのは私だけではあるまい。だが、これで軍務尚書はご子息の仇討とばかりにアツシユビーの首を望むだろう。

そして、その功績に目がくらんで帝国軍は協力ではなく、足の引つ張り合いを始めるのではないだろうか。確かに叛徒たちの戦力の方が多かった。ただ、全滅の危険を冒してでも、アツシユビーを討ち取るべきだったのではないか？イゼルローン回廊を抜け、ファイアザード星域会戦の戦闘詳報を見直しながら私には新しい悩みが生まれた。突撃のタイミング、帝国軍の艦列を一閃した進路選択。大口をたたくだけの事はある。品性はともかく、アツシユビーは確かにワレキユーレに愛された漢だった。彼を討ち取るまでに積み上げられる損害を思うと、私達は最少の被害でアツシユビーを討ち取る機会を逃したのではないかと思ひ始めた。この悩みは、友軍の敗戦を聞きたびに私の胸をえぐる事になる。

宇宙暦738年　帝国暦429年　9月上旬

惑星ハイネセン　ホテルメトロポリタン

クリステイン・ターナー

「お父様、抱っこ」

「なんだ？エリーゼは甘えん坊さんだな」

そう言いながら、夫はエリーゼを左腕で抱き上げながら、右足にまとわりついているシユテファンの頭を右手で撫でている。こうして

みると大学の同窓生たち同様、子沢山の家庭の良き父親に見える。

テルヌーゼンにある自宅では軍服を着ている事の方が稀だ。帝国軍との戦争で久しぶりの大勝利を挙げた同盟軍。その立役者である新進気鋭の艦隊司令官の一人としてニューースでも取り上げられた。

『母さん、お父さんがニューースに出てるよ！』

とシユテファンとエリーゼは大騒ぎしていた。思い返してみると、夫の軍服姿を二人が見たのはこれが初めてだったかもしれない。戦勝の報が流れたのは6月の頭。最前線からエルファシルの駐留基地に戻り、戦勝記念パーティーや勲章の授与式に参加するためにハイネセンに到着したのが8月末。それに合わせて、子供たちを連れてハイネセンに来て欲しい旨の連絡があった。

アツシユビー君を始め、同盟軍で注目の若手ともいえる夫たちは、自分たちの戦勝パーティーを妻子同伴にすることにした。これは広報部からの提案でもあったらしい。

集合写真には妻子たちも一緒に映ったが、物怖じしないヴェルナーはアツシユビー君に抱かれて。エリーゼはウオレス君と手を繋いで撮影に臨んだ。事情は分かるが、二人は私達の子供。正直もやもやした気持ちになったが、夫のフォローもあって何とか気持ちを静めた。『こういう事が続けば、奴らも行いを改めるかもしれない。それに、クリステインに似て二人とも気立てが良いからな。一緒に映りたいんだ。ここは譲ってやろう』

そう言われては引き下がるしかなかったが、中心人物として注目を集めていたアツシユビー君の写真は色々な紙面を飾った。そして彼に抱かれていたヴェルナーも当然一緒に掲載されることになり、いくつかのモデル事務所から所属の打診があった。もともと子役としての人生を始めさせるつもりはなかったから、すべてお断りさせて頂いたけど……。

「行事が続いてみんな疲れただろう？しばらくはゆつくりできるから、のんびりハイネセン観光でもしよう。少なくとも第13艦隊司令官の着任式までは休暇だからな」

「お疲れなのでは？子供たちは喜ぶと思いますが……。」

「構わないさ。そうでなくても任務優先で夫としての務めも、父親としての務めもしつかり果たせていないんだ。事業の方もユルゲンが戻って来たんだし、君にも少しは休息が必要だろ？」

そう言いながら二人を連れて客室のドアを開け、私を待ってくれる夫。ヴェルナーを抱き上げて私も客室を後にする。今日の夕食は最上階のレストランの個室を予約している。エレベーターに向かい、家族そろって最上階へ向かった。

夫は一躍時の人となった。認められた事が嬉しい反面、出歩くとサインや写真を求められるため、安易に出歩けなくなつた。最もスーツに着替えてパナマ帽を被つてしまえば、気づかれる事はほとんどないのが救いだけだ。

「お待ちしておりました。ご予約ありがとうございます」

レストランの入り口に近づくと、支配人らしき初老の男性が、敢えて名前を呼ばずに出迎えてくれた。彼の先導で個室に案内される。ソファが備え付けられた個室は、子供連れには嬉しい配慮だ。一枚ガラスの大きな窓から見える夜景も素晴らしかった。

「すごい。ねえねえ。父様、すごいよ」

嬉し気に窓を指さすエリーゼ。シユテファンは窓によって早速景色を眺め始めている。私はソファにヴェルナーを座らせて一息ついた。

「支配人、お任せで頼めるかな？子供もいるから定番から見繕ってもらえると嬉しい。子供たちにはアイステイーを。私達は料理に合わせワインを見繕ってもらえれば」

「承知いたしました。当レストランのアイステイーはシロン産ですので、ご安心を。では、お寛ぎください」

そう言いながら静かにドアを閉める支配人。夫はパナマ帽とジャケットを部屋の隅のハンガーラックにかけながら

「やつと寛げるな。こうなってみると芸能人の苦勞がしのばれる。俺にはとても無理だ」

やれやれと言ったジェスチャーをする夫に、思わず笑みがこぼれる。こうしていると、やり手のビジネスマンにしか見えない。同盟市

民の多くが軍人としての夫しか知らない事を思うと、この姿を独占でき  
きる私は、幸せ者なのかもしれない。私にはなかった。

そして、夫も、夫の友人たちも、おそらく子供たちを軍人にしたくない  
のだらう。戦功に湧く同盟に比して、夫は昇進自体はあまり喜んで  
いない様子だった。休暇中くらい、ありきたりな父親としての時間を  
を過ごしてもらおう。それが夫の何よりの休日になるだろうから。

## 第59話 老提督との邂逅：僚友（前編）

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン ローザス邸

ヤン・ウエンリー

「分室の事はこれ位にしましょう。なんだか夢で叱られそうな気がしてきました。少し話は変わりますが、閣下から見ても、730年マフィアの面々はどんな方々だったんでしょうか？回顧録でも触れられています。潤滑油足らんと志す程、優秀でありつつもそれに比例して癖もあつたとの事でしたが……」

「そうだな。間違つて欲しくないのは完璧な人間などいないという事だ。そして、確かに欠点もあつたが、それを補つて余りある魅力の持ち主たちだった。むろん優秀でもあつたがね。同期を持つなら『730年マフィア』という声があるようだが、私はそうは思わない。退屈はしないだろうが、少なくとも静かな学生生活は過ごせないだろうからね」

苦笑しながら僚友達との思い出に想いを馳せる様にローザス提督は遠い目をされている。730年マフィアと呼ばれた8人の男たちは、全員が元帥号を授与された。大将で退役されたローザス提督も回顧録がベストセラーになつた際に、元帥号を授与されている。

士官学校の同期の中から8人もの元帥が生まれる事は今後ともまずないだろう。『同期を持つなら730年マフィア』自分の同期がもつと優秀ならと言う愚痴も含んだ言葉だが、これは当時の同盟の状況を無視した発言でもある。

「士官学校以前から、私はターナーを含めた何人かとは親しい間柄だった。一緒に士官学校対策で勉強合宿をしていた位だ。ただ、敢えて『730年マフィア』と言うからにはそう言う話ではないのだろうか？そうになると、一番印象に残っているのは分室に戻った時、どんな状況でも変わらず冷静に出迎えてくれたファンの姿かもしれないな」

「少し意外な気もします。決してファン元帥を揶揄する気持ちはないですが……」



「意外か……。そうかもしれないな。明るく陽気な人材が多い中で、唯一ファンだけがいつも冷静沈着で手堅い見解を持っていた。それがどれだけ貴重だったか。彼がいなければ、私達はもつと勢い任せで、抜け漏れの多い集団だったはずだ。」

あれは私が大佐になった時だったかな。アツシユビー、ウォーリツク、そしてターナーが准将になり独立艦隊を指揮する事になった時、3人から旗下にと望まれたのはファンだけだった。人間関係の構築は得手ではなかったし、明るい性格でもなかった。ただ、誰よりも信頼されていたのは、ファンだったと思う」

提督はオブラートに包まれたが、当時の同盟軍はコルネリアス帝の大親征で受けた損害を埋めるためにひたすら軍備拡張路線をとっていた。防衛戦力の充実は市民たちの願いでもあったはずだ。だが、艦隊数をとにかく増やす方向で進んだため、悪く言えば数字の上では戦力が多くても、組織としては風船の様な状況だった。

特命扱いの分室に集められた事も大きいが、若くして重責を負うことになった青年士官たちには、ジークマイスター室長以外はお互いしか頼れる存在がいなかった。『ハイネセンの嘆き事件』をきっかけに、協力する事で国内問題の解決を為した彼らは、前線に活躍の場を変えても、その関係を維持して戦果を上げ続けた。

同期だった事ももちろんあるだろうが、お互いに協力して大業を為したという経験が730年マフィアの特徴である強い信頼関係を生んだ事は無視できないだろう。

「それに愛妻弁当の印象も強いな。ファンの妻のファネツサは士官学校時代からの友人でもあったが心配りを欠かさない女性でね。任官以来、毎日夫の為に愛妻弁当を作っていた。分室に異動した頃合いにその話が妻たちの中で広まってね。私も含めて、既婚者は愛妻弁当を揃って食べていたものだ。少佐はまだ身を固めるつもりはないのかな？ ぜひ祝辞を送らせてもらいたい所だが……。」

「残念ながら、そういう関係の女性とはまだ巡り会えていないのです」  
この手の話題には頭を掻く位しか応じようがない。恋人か。ジェシカは半分親戚みたいな存在だし、たぶんジャンの事が好きははず

だ。女の子と言えば、惑星ウルヴァシーでコーヒを差し入れてくれた娘は元気だろうか？名前を聞くのを忘れてしまったし、お礼も言いきびれてしまった。

『あんたは見てくれはまあまあなんだから、早く婚約者をつれておいで。あんたの婚約者を見るまでは、私は死んでも死にきれないよ！』結婚の話になったからか？家族ぐるみの付き合いをしているエレングランマの言葉が脳裏をよぎった。小さい頃から何かとお世話になっているから頭が上がらない。『オムツを換えた事もある』なんて言われたら、何も反論なんて出来ない。負けた訳じゃなく、戦略的撤退って所かな。

「すまないね。私達はどちらかと言うと結婚が早いものが多かった。どうも自分の価値観で話してしまう。老人の悪い癖だな」

提督はフオローしてくれたが、それもどこか寂しい。ただ、変り者の私の所に来てくれる奇特な女性はいらんだらうか？

「少し話が逸れるかもしれないが、730年マフィアと言われて印象が強いのはスーツだな。言い出したのは着道楽だったウォリックかジャスパードと思うが、アッシュビーの最初の結婚式の時に『軍服はもう見飽きたからスーツで参加しよう』という話になったのだ。少佐の前で言うのも何だが、子供たちに変な憧れを持たれたくなくて、もともと任務中以外では私達は軍服を着ないようにはしていた。家族ぐるみの付き合いも多かったからね」

「そう言えば、ニュースや公式資料では軍服の印象が強いですが、プライベートの物は軍服姿の写真は少ないですね。妙な違和感を感じていたのですが、モヤモヤが一つ解けた気がします」

「730年マフィアと言われたのもスーツが原因なのだ。結婚式に揃ってスーツで参加した私達が当時再放送されていたマフィアドラマ的一幕に似ているとね。言い出したのはウォリックだったが、あくまでその場だけの雑談だった。それがどこからか漏れて、730年マフィアと呼ばれる事になるのだから、何がどこでつながるか分からないものだ」

身内での雑談がきっかけで、最終的には730年マフィアが同盟内

で公称のように使われるのだから、あながち馬鹿には出来ない。彼らに似た俳優を集めて『8人の無頼漢』というマフィア映画まで作られたのだから。その映画が記録的なロングランになったのも、公称となるのに大きく影響した。

「当時は批判もあつたが、ファイアザード会戦で戦功をあげ、私達の所属する艦隊の司令部をエルファシルに移転した時は、『基地外では軍服を着るな』という訓令まで出したな。あの頃はエルファシルの人口は400万人に届かなかった。そこに3個正規艦隊と独立艦隊が駐留することになったから500万人を超える軍人が出入りするようになった。皆が軍服でうろろすれば街は軍服だらけだ。市民たちもあまりの変化に驚くだろうと言う判断だった」

「その精神はウルヴァシーの駐留基地にも受け継がれていますよ。もともと私は軍人らしくないので、あまり軍服を着て出歩くタイプではないのですが。プライベートの時間を圧迫感なく過ごすことが出来ました」

軍服を着て出歩くかどうか？は、軍人の間で今でも論議になる話題だ。悲しい話だが、軍服を着て出歩けば優遇されることが多い。士官学校の町であるテルヌーゼンは学生優遇を売りにしている店舗もあるが、特別扱いされる事に慣れる軍人も一定層存在する。

前線であるエルファシルやウルヴァシーを経験した軍人は軍服で出歩かなくなるから、前線未経験にもかかわらず後方で市民相手に威張り散らしていると揶揄してチキンと呼び、前線未経験者たちは軍服に誇りを持っていないと揶揄してアウトローと呼んでいる。私はアウトローなんて言われると違和感しかないのだが……。

「軍服を着るといふ行為にどんな価値を見出すかは人それぞれだろう。ただ、軍人と税務局員が肩で風を切って歩くような社会は、好ましい社会ではないという価値観で私達は一致していたな。さて、話を戻した方が良いだろう。付き合いの長さで歩んだ経歴を踏まえると、ジャスパールの話をしよう。

名前を見れば分かる事だが、私のルーツは帝国からの亡命者だ。面と向かって言われたことはないが、無意識に疎外感のようなものを感じ

じながら私は育った。あれは士官学校に進路を定めた時だったか？亡命派から士官学校志望の青年2名を預かってほしいと打診を受けてね。父にその話を聞かされた時は、ローザス家が亡命派に属した場合の自分を見れる思いがして変な嬉しさを感じた記憶がある」

融和が進んだ現在でも、亡命者の取り扱いはナイーブな部分があるのは事実だ。提督の幼少期には今以上にそういう感覚が強かったのも事実だろう。明言されなかったとはいえ、接し方が無意識に違えばされた側は感じるものだ。感受性の強い幼少期ともなれば尚更だろう。

「実際に会ってみると、貴公子然とした風貌に竹を割ったような明るい性格。物語に出てくる侯爵家の御曹司そのままだった。フライングボール部に入部するとすぐにエースになつてな。男女問わず人気があつた。そしてそんな彼ですら、亡命派の中で息苦しさを感じていた事を知り、世の中はままならない物だと自分の事のように悔しく思つた記憶がある。

用兵も性格通りダイナミックなものを好んでいた。彼の辞書には大勝があつても辛勝は無く、大敗があつても惜敗は無かつた。妙なリンクスがあつて2度大勝が続くと次は大敗するので、兵士たちは本気で遺書を書いたりしていた。場合によっては脱走騒ぎも起きたから笑つてばかりもいられなかつた。ただ、『中途半端は俺の趣味じゃない』と明るく言い切るジャスパーは兵士たちに不思議な人気があつた」

ジャスパー元帥は、そのダイナミックな用兵ぶりからマーチ・ジャスパーとも呼ばれていた。大勝の番なら兵士たちは勝利を確信して彼について行き、仮に大敗の番であっても、それを気にする素振を見せない自分たちの指揮官を見捨てる事は出来ずに従軍した。私には真似できそうにないが、兵士たちを戦地に率いていく将器を備えていたのは間違いないだろう。

「ジャスパーと一緒に我が家に来たのがベルティーニだ。貴公子然としたジャスパーと正反対で、幼い頃から父上が経営していた農場を手伝っていた事もあつて筋骨隆々でな。ボクシング部に所属していた

が人気のヘビー級でたちまちエース選手になった。見た目に反して気の優しい彼は一部の女性陣と後輩達から慕われていた。

用兵はボクシングのスタイルに似て勇猛で粘り強い攻勢を得意としていた。攻勢局面で突破口を開くのは大抵彼だった。体格に比して小柄な女性と結婚した際に、『熊とリスの結婚だ』などと揶揄されたが嬉しそうにしていた。意外なことに熱帯魚を飼う事を趣味としていたのだが、ジャスパールから『熱帯魚？熊に似合うのは鮭の養殖だろう？』とからかわれても嬉しそうに笑っていたな。部下たちへの接し方も細やかな配慮がされていた。そしてそんな彼の突撃に、部下たちも喜んで付き合った訳だ」

残っている写真を見ても、陸戦隊もかくやと言う体躯を無理やり軍服に押し込めたようなベルテュー二元帥の風貌は、文字通り猛将というのが相応しい。

残っている戦闘詳報を見ても、自軍より多数の艦列を何度も食い破り、突破口を開いている。冬眠明けの熊のような勇猛さと、その風貌に似合わぬ優しさ。勇将という表現が、ベルテュー二元帥には当てはまるかもしれない。

## 第三章 登場人物

### 第三章登場人物

#### カーク・ターナー

今作の主人公。おぼろげながらある島国の宰相として上り詰めた記憶を持つ。(前世は田中角栄さん) オレンジの髪とエメラルドの瞳を持つ。超長期目線で、対帝国の必勝策を卒業論文とした。ジークマイスター分室では自主的に提案し、エルファシル駐屯地の増築、『ハイネセンの嘆き事件』『蝙蝠相場』への対応を担った。

強行偵察艦を率いて敵分艦隊を誘引し撃破に貢献し大佐へ。大佐として強行偵察艦の運用案。装備改善に努め、一定の成果を認められて准将に昇進。補給艦隊を撃滅して少将に昇進直後にファイアザード会戦に参加。挟撃の為、長駆した部隊の指揮官の一人として功績を認められ中将に昇進。第13艦隊の艦隊司令となる。

#### ■家族と友人

##### 両親

惑星エコニアの開発計画の話を聞いて、全財産をはたいてそれに応じた。カークを含めて4人の子供をもうけている。末っ子はカークの子供であるシュテファンとほぼ同い年。

カークが生まれた頃は打ち捨てられたしがない地方惑星だったエコニアも、捕虜収容所の大規模新設や地道な緑化事業が続けられ、同盟の同化政策の中心地、経済的にも地方星系の中で、頭2つ分ほど抜き出た惑星になっている。カークの妹弟たちはエコニアで身を立てる方針。

##### グスタフ・ウーラント

仕えていた貴族の政争に巻き込まれ、娘と息子を連れて同盟への亡命を決断した帝国騎士。ウーラント商会の財務責任者。修行から戻った嫡男ユルゲンが経営に参画しているため、肩の荷が下りた。

ユルゲンの妻であるジェシーの妊娠を知り、嫡孫の誕生を期待している。義息のカークには恩義を感じているが、カークも見込んでくれた事を恩義に關しているため、関係は良好。孫たちとバーベキューを

するのが楽しみの一つ。

クリステイン・ターナー

今作のヒロイン。カークとの間に3人の子供を授かっている。接する機会が多かったカークの僚友達には、淑女然とはしているが、実は嫉妬深くてヤバイ事がうすうすバレている。任官以来、単身赴任をさせている事にも罪悪感を感じている。

シュテファン・ターナー

カークとクリステインの嫡男。名付け親はウォーリック商会 会長  
のグレック・ウォーリック。

エリーゼ・ターナー

カークとクリステインの長女。名付け親はオルテンブルク侯爵  
(ジャスパールの祖父)ファイアザード会戦の戦勝記念パーティーでは、  
ウォリス・ウォーリックと手を繋いで記念撮影にのぞんだ。

ヴェルナー・ターナー

カークとクリステインの次男。名付け親は祖父であるグスタフ・  
ウーラント。ファイアザード会戦の戦勝記念パーティーでは、ブルー  
ス・アツシュビーに抱かれて記念撮影にのぞんだ。

ユルゲン・ウーラント

ウーラント家の嫡男。カークの義弟。優しい性格で才覚もあるそ  
うだが、軍人には向かないと父親は判断していた。カークを始め、周  
囲のできる兄貴分たちを尊敬し、また可愛がられた。

エドワーズインダストリーでの修行を終え、婚約していたエドワー  
ズ・ジェシーと結婚した。ウーラント商会の役員として経営に参画し  
ている。

トーマス・ミラー

カークの4歳年上で、兄貴分。井上商会が捕虜収容所内に出店して  
いた売店を任されていた。年の近いカークに井上商会の業務を教え  
たのも彼。母の妊娠を機に家計を助ける為に志願した。

新兵訓練を終え、任地であるカプチェランカの途上であるエルファ  
シルで、ヤン・シーハンと出会い、恋に落ちる。任地であるカプチェ  
ランカの基地が帝国軍の大規模攻勢を受け、戦死した。

ヤン・シーハン

カークの兄貴分のトーマスと出会い、恋に落ちた。共にいたのは一夜だが、お腹に命が宿る事となる。命名はタイロン。誕生日プレゼントを毎年とどけに来てくれていたキャプテン佐三と相思相愛となり、結婚した。(法的には初婚) ウーラント商会のエルファシル支社の経営者でもある。

ヤン・タイロン

カークの兄貴分であるトーマスとシーハンの子供。銀英伝原作読者なら知らないはずはないある人物の父親でもある。原作比で7年早めの登場。カークと出光による商人としての英才教育が開始されている。

カークのエルファシル赴任にあたって、一時期駐留基地に入り浸っていた。親しく接した軍人たちから、『戦艦を買える予算』を冗談交じりにねだられ、ビジネスの世界に進路を定める。

アデレード

長年の浸透戦術により、遂にブルースに年貢を納めさせた女傑。ただし彼女がブルースを想うあまり束縛するほど、ブルースはその束縛から逃れようと浮気をする為、必ずしも夫婦仲は良くはない。残念ながら家庭生活は崩壊し、激論が交わされた離婚調停の末に離婚した。

カトリナ・ローザ

進路は士官学校に隣接する音楽学校。カーク達の会食にも参加しており、クリステインとも友人である。アルフレッド・ローザと結婚した。3児の母。

ファネツサ

カークがダンスパーティーに参加する代わりにファンのダンスパートナーになった音大生。コミュニケーションが苦手なファンに合わせて楽しい時間を過ごせる。ある意味逸材。

ジークマイスター分室で愛妻弁当を食べるファンの姿は、ランチタムの風物詩でもあった。ファンが前線勤務になる頃に妊娠が発覚。3児の母として家庭を守っている。

■ビジネス界



井上オーナー

誠実な商売を心掛けるウォーリック商会から独立した商人。惑星エコニアで食品を軸に商会を経営している。エコニアに新設された捕虜収容所内に売店を出店していた。カークとの縁もありエコニアの顔役ともいえる立場に。帝国風の食材を振舞うことにより、捕虜たちの同盟への同化に一役買っている。

キャプテン佐三（出光佐三）

井上オーナーと同じく、ウォーリック商会から独立した商人。商船の船長も勤める。定期的に会う機会があったヤン・シーハンとの一時に安らぎを感じ、求婚した。タイロンの養父となる。

グレッック会長 イネツサ夫人（ウォーリック商会）

ウォーリック商会の先代。現在は息子達に経営を任せている。バート系融和派の雄であり、亡命帝であるマンフレート2世とも面識があり、帝国の美術品にも造詣が深い。『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』に際しては同盟経済界を主導する立場となり、多大な利益を同盟にもたらした。

ヴァレンティ補佐官

フェザン自治領主府に所属する補佐官。同盟方面の案件を担当していた。『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』で、同盟に持っていたフェザンの影響力は失われ、天文学的な損失が生まれた。

後始末を終えた段階で、倒産した証券会社社員の逆恨みから射殺された。あまり話題にならなかったが、補佐官には本来護衛が付くことになっており、本来ならあり得ない状況だった。

## ■政界

ナタリー・アッシュビー

国防委員会に所属する代議員。ブルース・アッシュビーの母。夫は軍需系の企業で役員をしている。事実上の別居状態。見た目も麗しく、人妻と承知で口説いてくる相手も多いが、靡かない。末っ子のブルースが大好きで、何かと構うが嫌がられている。

『ハイネセンの嘆き事件』の解決にあたって一時的に財務委員長に就任した。ブルースとアデレードの間に生まれるであろう孫の養育の

為に政界を引退するつもりだったが、離婚によりその人生プランは断たれた。それを氣遣い全力で労ってくれた730年マフィアのファンとなり、彼らの為にも政界で頑張ろうと志を立てている。

ラファエル

財務委員会所属の代議員。顔と弁舌だけが取り柄。圧倒的な女性票の確保で当選している。男性からの支持は壊滅的。ナタリー・アツシユビーとは旧知の仲だが、中身がない事は彼女にも見透かされている。懇ろになろうとナタリーを口説くが袖にされている。

#### ■亡命派

クラウス・フォン・オルテンブルク

ジャスパールの祖父。ジャスパールの活躍と亡命派への貢献を嬉しく思いつつも、亡命派の疑似的な貴族制を維持するために、それを公言出来ずにいる。付き合いのあるベルテーター二家を通じて、ジャスパールが縁を紡いだ案件に贖罪を兼ねて投資している。

クラウディア・フォン・オルテンブルク

クラウスの妻、ジャスパールの祖母。本当なら初孫であるジャスパールを可愛がりたかった。ただ、正室との間に子供がいなかった為、可愛がればジャスパールの身が危険になると判断し、厳しく接した。ジャスパールの活躍を応援するために持参金を投資案件につき込むように進言した。

#### ■軍関係

##### 【帝国軍】

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

自分が生きている内は結果が出ない打倒帝国の夢を新しい希望とし、ターナーを支援する事にした。一時的には同盟内で屈指の影響力を得たが、個人の価値観で民主共和制の理想を実現する事は、民主共和制に反すると判断し、鍛えた730年マフィアの面々を分室から送り出した。帝国からもたらされる情報は、同盟が防衛戦争を優位に進めるのに大きな貢献をしている。

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

自身の手腕を発揮できる場として進んでスパイ網の構築・維持に取り組んでいた。ジークマイスターが同盟に亡命した後は、帝国に於けるスパイ網のトップのような立場となっている。先帝がばらまいた624人の庶子をネタに、帝国内に不和の種をばらまいた後は、帝国軍の若手戦術家、シユタイエルマルクの後援者の様な立場をとり、彼が推奨した実力主義による任用を推進する立場をとった。

自分の後任として正規艦隊司令に平民出身のコーゼルを指名する。これによって平民たちは栄達が可能になると考えたが、皇族や軍部系貴族は平民を新たな競争相手と認識し、高級指揮官たちのスタンドプレーを助長する事となった。本人は軍務省人事局長に勇退している。ケルトリング軍務尚書

伯爵家次男。元帥。就任直後に勅命により軍に皇族を多数引き受けさせられた。その結果多くの『名ばかり少将』が所属する事となり、対同盟戦で艦隊戦力を摩耗する事になる。そのツケを支払うかのように嫡男は名ばかり少将を率いたファイアザード会戦で戦死。高級士官である次男に当主としての教育をしながら、長男の仇であるブルースの首を狙っている。

ツイーデン宇宙艦隊司令長官

侯爵家次男。元帥。ケルトリング軍務尚書とは長年の友人。大量の『名ばかり少将』を正規艦隊に組み入れず、独立艦隊を任せる判断をした人物。その本心は、万が一正規艦隊に組み入れて功績を立てた場合、正規艦隊司令にせざるを得ない状況になる事や、万が一死なれた場合、命令無視などが原因でも処罰せざるを得なくなる。

それなら独立艦隊を与えて自己責任にさせた方が被害が少ないという判断だった。その判断は正しかったが、結果として長年の友人であるケルトリング軍務尚書の嫡男を戦死させる事となり、友人の為にブルースを破りたいと考えている。

ハウザー・フォン・シユタイエルマルク

少壮の戦術家で、巧緻な用兵家、また風格ある武人として後世まで名をなす名将。貴族出身だが、その才覚や人柄は貴族嫌いのコーゼルからも高く評価される。貴族出身ながら、選民主義に陥らず、実力主

義に基づいた任用を訴えていた。

後援者となったミヒヤールゼンを信頼しているが、残念ながらミヒヤールゼンの狙いは実力主義を標榜する事で、将官同士の競争心を煽り、不和を生じさせる事にあった。原作で言うヤンの様なポジション。優秀で先も見えているが、上層部の大多数は貴族の為、主流派にはなれずにいる。3章終了時は准将。コーゼル艦隊の参謀長。

コーゼル

幅の広い貫禄ある身体に豊かな茶色の髪、そしてするどく明るい褐色の目を持つ剛直な職業軍人であり、右手の甲には白いレーザーの傷跡が残っていた。貴族出身の高級士官がほぼすべてを占める当時の帝国軍にありながら、平民出身で中将まで昇進している。本人は軍内部の選民意識を理解しており、皇族の『名ばかり少将』が多い中で中将になれるとは思っていなかった。

認めているシュタイエルマルクの実力主義もいずれは必要と思いつつも、実現は当分先の事と考えていた現実的な目線も持っている。そんな彼にとって、自分を昇進させ正規艦隊司令の後任に指名したミヒヤールゼンの行動は、軍上層部の不和を煽る様に映った。これを切っ掛けに内心不審を感じている。3章終了時は中将。正規艦隊司令。

ウイルヘルム・フォン・ミュッケンベルガー

ケルトリング軍務尚書の甥。原作で宇宙艦隊司令長官として登場するグレゴール・フォン・ミュッケンベルガーの父親。能力的には軍人として素養を備えていたが、軍務尚書の息子の後任として正規艦隊司令になった事は、宇宙艦隊内部では情実人事と受け取られ、宇宙艦隊司令たちのスタンドプレーをむしろ煽る事に繋がった。

ロイズ伯

選民思想の典型の様な皇族。軍事的素養は全くなく。ファイアザード会戦までの途上でも何かと身勝手な行動を行い、司令官であったケルトリング中将（軍務尚書の長男）の足を引っ張った。帝国軍右翼を担ったが、ブルース主導の背面突撃に一蹴され、泣きながら命乞いをした。

後に帝室の予算から身代金として100億帝国マルクが支払われ帰国するが、即自裁を命じられ、ロイズ伯爵家は取り潰しとなる。皇帝は一罰百戒のつもりだったが、一部皇族と後ろ暗い所がある門閥貴族が動揺した事で、帝国の政情は不安定になった。生前だけでなく死後も帝国に悪影響を及ぼした人物。同盟にとってはある意味英雄。

【730年マファイア】

ブルース・アッシュビー

少尉の身である無名時代から大佐より偉そうに見えたという逸話が残る。正にこの時代の同盟版ラインハルト。『ハイネセンの嘆き事件』では分室と財務委員会（委員長は母）とのパイプ役を担当。前線に活躍の場を移した後も順調に昇進。

一方で、必ずしもうまくいっていなかったアデレードとは離婚が成立した。3個艦隊クラスの戦力を殲滅したファイアザード会戦では、作戦立案と、挟撃の肝になった長躯迂回を主導した。3章終了時は中将。第2艦隊司令官。

アルフレッド・ローザス

沈着で公正な良識人。優秀な同期達に称賛を感じつつも、劣等感を感じていたが、それを昇華し優秀な同期達の潤滑油足らんと志を立てた。幼馴染のカトリナ嬢と結婚。夫婦仲も良好で2児に恵まれている。『ハイネセンの嘆き事件』では財務委員会以外の各委員会、経済界のキーマン達とのパイプ役を担当した。

前線に活躍の場を移してからはブルースの補佐として軍歴を重ねる。その関係もあり、アデレードとの離婚調停の仲介人を押し付けられた。3章終了時は少将。ブルース旗下の第2艦隊参謀長。

フレデリック・ジャスパール

とかく派手な用兵を好む亡命系原理派の雄、オルテンブルク侯爵家の庶子。彼自身は亡命してすら疑似的な貴族制を取る亡命系原理派に息苦しさを感じていた。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。ベストカップルにも選ばれている。3児を授かっており、公私ともに順調。

『ハイネセンの嘆き事件』ではアッシュビーと共に、財務委員会とのパイプ役を担当。前線に活躍の場を移してからは主にブルース旗下で活躍。3章終了時は少将。第2艦隊旗下の第21分艦隊司令。

ウォリス・ウォリック

常に容姿・言動がキザで芝居がかっており「男爵」と揶揄されたが、むしろ本人が気に入って自ら名乗るほどだった。バート系融和派の雄であるウォリック商会の直系の3男。年貢を納めていく僚友達を尻目に、恋愛を謳歌しているが、相手を泣かせるような事はしない為、周囲も強く言えずにいる。

『ハイネセンの嘆き事件』では経済界の雄であったウォリック商会とのパイプ役を担当。前線に活躍の場を移してからも順調に昇進。第3章終了時は中将。第5艦隊司令官。

ヴィットリオ・デイ・ベルティーニ

ヘビー級ボクサーのような体躯に、無数の小さな戦傷にいろどられた赤銅色の顔と剛い頬髯という見た目。体躯は全く正反対の小柄な音大生と恋仲になり結婚した。『熊とリスの結婚』などと揶揄されたが、それでも嬉しそうにしていたほど妻に惚れている。惚れたのは妻にか？妻の料理なのか？は明らかになっていない。4児に恵まれている。

『ハイネセンの嘆き事件』では経済界の雄であったウォリック商会とのパイプ役を担当。将官になったのを機に、熱帯魚を飼う趣味を始めた。前線に活躍の場を移してからは主にウォレス旗下で活躍。3章終了時は少将。第5艦隊旗下の第51分艦隊司令。

ジョン・ドリンカー・コープ

ドリンカーというミドルネームだが酒は一滴も飲めず、勝利の祝杯もアップルジュースで済ました。バート系原理派出身でブルースとは幼馴染。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。3児を授かっている。

『ハイネセンの嘆き事件』ではローザスと共に、財務委員会以外の各委員会、経済界のキーマン達とのパイプ役を担当した。前線に活躍の場を移してからは主にウォレス旗下で活躍。3章終了時は少将。第5

艦隊旗下の第52分艦隊司令。

ファン・チューリン

この時代では数少ない地方星系出身の士官学校卒業生。人間関係の構築を苦手としていたが、僚友達の影響もかなり改善された。ダンスパートナーとなったフアンネッサと結婚し、3児を授かる。

ジークマイスター分室では分析官のような役割を果たしていた。手堅い仕事で集められた情報を取りまとめ、『ハイネセンの嘆き事件』では彼の集めた情報を元にシナリオと対策案が作られた。大佐に昇進した際に、同時期に准将となり半個分艦隊を任されたターナーに乞われて参謀長を引き受けた。

ターナー分艦隊の補給艦隊撃破の際に准将に昇進。そのままフアンネッサと会戦でも参謀長として参戦した。本人は知らないが、分艦隊を任されたブルース、ウォレス、ターナーの3人から旗下にと望まれていた。内示を受けた数分後に参謀長役をターナーが打診し、引き受けた旨をブルースとウォレスに連絡していたという逸話がある。

少将に昇進した際にいずれは艦隊司令になると見越してターナーから第13艦隊旗下の第131分艦隊司令を内示された。本人も参謀長役を気に入っていたが、艦隊司令になる経験を積むために人事を承諾した。

【部下】

エレン・バスケス

スパルタニアン乗りの中尉。撃墜数5機でエース資格持ち。カークが指揮した第111強行偵察大隊の数少ない女性士官。タイロンを弟分として可愛がると共に、理想的な上官のカークに密かに想いを寄せていた。

残念ながら彼女の想いは実ることなく、ハイネセンの試作部門のテストパイロットとして転出した。その後もタイロンとは家族ぐるみの付き合いを続け、ウェンリーのオムツを換えた事もある。

ハドソン

カークが指揮した第111偵察大隊の旗艦の機関長。ムードメーカーでもあり、部下たちに慕われている。従軍前はエンジニアもして

いた。カークが昇進して半個分艦隊を指揮する事になった際、自ら売り込んで旗艦である長門へ転出した。



前哨戦 宇宙暦738〜742年  
第60話 正規艦隊司令たち

宇宙暦738年 帝国暦429年 12月上旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

コーゼル中将

「閣下、新しいオフィスの使い心地は如何ですか？」

「そのような事、聞かなくても分かっているだろう？平民出身の私が正規艦隊司令になるのは、やはりまだ時期尚早だった。口では祝辞を述べながらも、眼は私を見下す方ばかりだ。卿と違って社交パーティーに呼ばれないのがせめてもの救いだな」

「苦労をおかけしているのは理解しております。ただ、軍の大部分を占めるのは平民出身の兵たちです。身分だけの指揮官に命を預ける事の危険性も身に染みているでしょう。帝国軍の士気を維持するためにも、必要な事だったと、小官は考えております」

「それを言われては何も言えん。二つ返事で参謀長を引き受けてもらったのだ。卿の進言を拒む訳にもいかんからな」

そう応じながら、軍に常備されているコーヒーを飲む。正規艦隊司令職は、いままで軍部系貴族に独占されていた事もあり、司令官オフィスで出される飲み物は、司令官の好みに合わせるのが慣例だった。私のオフィスで出すのは、前線で支給されるインスタントコーヒーだ。人生の中で一番飲んできた味だし、今更気取って高級品を入れた所で、貴族の猿真似だと揶揄されるのが落ちだ。

それならばと下した判断だが、軍部貴族は別にして、平民将校たちには評判が良い。昇進したからと言って、平民としての苦労を忘れてはいないと受け取られたようだ。そのお陰で、平民出身者からの転入希望が多い。正規艦隊司令に内定した際は、貴族出身の高級士官の転出希望が重なったが、その穴埋めは出来たし、風通しの良い艦隊運営が出来るようになった。今では怪我の功名だったと思っっている。

「そちらこそ将官になった気分はどうなのだ？参謀長を押し付けてし

まったが、卿なら数百隻とは言え分艦隊を指揮したいと言う想いもあつたのではないかな？」

「その想いが無いと言えは嘘になりますが、数百隻では戦術面の影響力があまりにも少ないとも思いました。参謀長として戦術研鑽をしながら艦隊指揮を現場で学ぶ方が良いと判断しました。叛徒たちが手ごわい事は小官も認識していますから」

インスタントコーヒーを文句も言わずに飲みながらシユタイエルマルク准将は応じた。救援が失敗に終わったあの一件以来、感じるものがあつたのか？准将は精神的にもう一步強くなつたようだ。アツシユビーを始め、叛徒たちが手強いのも事実。頼もしい参謀長を得られたことは、幸いな事だろう。

「話が変わるが、ファイアザード会戦の帝国への影響をすり合わせた。私の考えでは、宇宙艦隊の中で唯一、平民が指揮官の我が艦隊は、難易度の高い任務を命じられる可能性が高い。だからこそ年明けから訓練に入るわけだ」

「はい。小官も同意します。ケルトリング中将の後任を巡って軍内部のよけいな駆け引きも増えています。今はオーデインから離れた方が良いでしょう。訓練を敢えて辺境星域で実施する判断も手間は増えましたが正解です。既に一部で不穏な空気があるのも事実ですから……」

あの通信で泣きながら命乞いをしたとアツシユビーが公言した口イズ伯は、フェザン経由で100億帝国マルクの身代金を支払い。帰国すると共に勅命により自裁を命じられ、伯爵家もお取り潰しとなった。皇族でありながらあまりにも無様を晒した事もあり、陛下としても一罰百戒の意味で命じられたのだろう。ただ、これでやりたい放題していた一部の皇族と、後ろ暗い所がある門閥貴族たちが、明日は我が身と危機感を募らせた。

帝国が不安定になる一方で、叛徒たちは救援艦隊の派遣の速さからフェザンの商船が通報したと断定し、自治領主府に捜査協力を打診した。その結果、通報した商会が明るみになり、巨額の賠償金を請求したと聞く。事が起こることに叛徒たちは何かと利益を得ている。

そしてどこからともなくその噂が流れ、一部の門閥貴族はそれを口実にフェザン商人に資金協力を強制したようだ。そんなことをすれば、商品の価格に転嫁されて、平民の暮らしが困るだけだと言うのに。さすがにこの場でため息をつく訳にもいかない。

「命じられれば任務を果たす覚悟はあるが、貴族の反乱鎮圧など命じられてはどこで恨みを買う事になるか予想もできん。貴族出身の卿の前でこういう事を言うのは心苦しいのだが、平民出身の正規艦隊司令という立場には、慎重さも求められると思っている。苦勞を掛けるがよろしく頼む」

「参謀長として精一杯お支えする覚悟です。あまりお氣遣いなさいますな」

その後、艦隊編成の確認などを行って、参謀長はオフィスを後にした。軍務省人事局長に転出したミヒヤールゼン中将に抱いている懸念は、確証がないため未だに話せずにいる。年明けに私の艦隊は訓練の為に辺境星域へ進発した。ケルトリング中将の後任人事を聞いたのは、フレイヤ星域を通過している時だった。後任はミュッケンベルガー少将。中将に昇進して正規艦隊司令となる。

ミュッケンベルガー少将に含む所はないが、正直良い人事とは思えなかった。少将はケルトリング軍務尚書の甥にあたる。絵に描いたような情実人事だったし、何より、軍務尚書が嫡男の仇討を全軍に強いるような人事でもあった。奮戦した宇宙艦隊司令長官の仇ならともかく、一正規艦隊司令の仇討を命じられても兵たちにとっては迷惑なだけだ。そして将官たちは功にはやる。決して良い結果にはつながらないだろう。

こうなると、国内に不穏な動きがある事で、大規模な軍事行動がとれない状況は、むしろプラスかもしれない。一応の決着がつくまでは辺境で訓練を名目に政争から離れよう。そう考えながら、残っていたコーヒーを一気に飲みほした。

宇宙暦739年 帝国暦430年 3月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

カーク・ターナー（中将）

第13艦隊司令官への着任式を終えた俺は、家族とゆったり過ごす休暇を終え、司令部をエルファシルに異動させる所から司令官の任にあたった。ブルースの第2艦隊、ウオリスの第5艦隊も同様に司令部をエルファシルに置く。各艦隊から分艦隊を派遣したり、独立艦隊を最前線での哨戒任務に充てていたが、いよいよ宇宙艦隊も拠点をハイネセンに限定しておく事の非効率さを理解したようだ。

エルファシル勤務が確定した際、クリステインは任官以来の単身赴任を気にしたのか？エルファシルへの移住を相談してきた。ただ、次男のヴェルナーはまだ3歳。後2年はワープの影響で健康を害する可能性がある。そして2年後には長男のシュテファンは12歳。早ければ進路を決める時期だ。移転が終わり落ちつけば4半期ごとに休暇は取れる。そう説得して、テルヌーゼンに残ってもらった。義弟のユルゲンと結婚したジェシー嬢も妊娠しているし、クリステインがウーラント家の傍にいた方が良くと判断した。ブルースやウオリスじゃないんだ。浮気なんてしないよ。

少将に昇進したファンは引き続き参謀長をお願いしたい気持ちもあったが、艦隊司令の候補でもあった。旗下の分艦隊司令に異動してもらおう一方、アツテンボロー准将を少将に昇進させて参謀長役をお願いした。もともとは准将で退役して孫の面倒を見ながら、のんびり日向ぼっこをするつもりだったそうだが、叩き上げの経験を買って、なんとか頼み込んだ。

参謀長としてのファンは冷静沉着で手堅い助言役という役回りだった。今更、若手の有望株を引っ張ってきて、前のめりな参謀長を迎えるのは、あまりにも環境が変わりすぎる。その辺りもしっかり伝えて、第13艦隊のご意見番のような役割をお願いしたい旨を伝えると、最後の働き場所になると気持ちを入れ替えてくれた。

「それにしても面白い事を始められましたな。艦隊司令官同士が同期で友人というのは聞いておりましたが、このような訓練は今までの同盟軍であまり実施されてきませんでした」

「参謀長にそう言ってもらえると嬉しいね」

参謀長が訓練報告書を見ながら声をかけて来た。同盟軍の宇宙艦隊で訓練と言うと、それぞれの艦隊や分艦隊独自で行うのが一般的だった。同盟軍の艦隊編成は司令部付きと4つの分艦隊で正規艦隊とし、15000隻前後の戦力を有する。3個艦隊が駐屯するエルファシルには、15個の分艦隊が駐留するわけだ。

この15個の分艦隊を、艦隊の垣根を越えて合同で訓練する取り組みを始めた。例を挙げるなら、ファンの第131分艦隊とフレデリックの第21分艦隊、そしてジョンの第52分艦隊が合同訓練する感じだ。ダゴン星域のアステロイドベルトを活かした遭遇戦訓練や、アスターテ星域で船速を維持したまま艦列を組む訓練などを実施している。

「やはり、帝国の大規模侵攻を想定しての事なのでしようか？」

「そうだね。今は政情が許さないだろうけど、軍務尚書の嫡男を戦死させた上にあれだけ煽ったんだ。帝国のメンツをかけた侵攻が一度はあるだろう。その時の為に艦隊単位じゃなく、分艦隊単位で戦況に対応できるようにしたいんだ。幸いなことに、軍部系貴族は個人的な功績を優先しがちだ。我々がそれに付き合う必要はないと思ってね」

「戦力の適切な配分ですな。メンテナンス専門部隊の創設案も、閣下が提唱されましたな」

「極端な話だけど、戦線の後方で迅速に補給が可能になれば、戦術面での選択肢は大きく増えるんだ。長距離戦でエネルギーを気にせず打ちまくる。エネルギーが切れたら入れ替わって補給を受ける。先に息切れするのはあちらさんだから、撤退するしかない。防衛戦がそれだけで成功する訳だ」

正規艦隊司令になってから、最初に上申したのが新規艦隊編成の中断と、その予算で装備更新とメンテナンス専門部隊の新設をする事だった。幸いなことにエルファシルに駐留する3個艦隊は新型艦に更新済みだが、一部の艦隊は2世代前の艦を戦力にカウントして、実質訓練艦隊になっている所もある。資料上の艦隊数も確かに政治の世界では重要だ。市民たちも同盟軍の戦力が多い方が安心できる。ただ、その為に旧式艦までカウントするのは本末転倒だ。

軍人は雇うだけで固定費が掛かる。だからこそしっかりと使えるものを与える方が経費の無駄にならない。国防委員会は経済成長が著しい事もあり、2個艦隊の整備費を要求するつもりだったようだが、俺の上申で整備更新費に差し替えたようだった。

「メンテナンス専門部隊は遠い将来に起こるであろう『臣民を解放する作戦』でも必要だろうしね。もともとは補給拠点をハイネセンからエルファシルに短縮しただけでもかなりの成果があった。ならより戦場の近くで補給できれば成果も期待できる！って言う子供みたいな発想から生まれたんだけど」

「いざと言うときに旧式艦で最前線に行かされるのは兵士たちもごめんでしよう。補給も同様です。軽微な損傷でも推進剤が失われれば、最新鋭の艦ですら戦力では無くなります。司令のお考えは正しいと思いますよ」

参謀長は美味しそうにシロン産の紅茶を飲みながらそう応じた。年長者としての余裕なのか？参謀長は指摘すべき事は指摘してくれるが、褒めるべきところはしっかりと褒めてくれる。軍歴で一番長く上官だったジークマイスター室長は、褒めると言うより『好きにやってみなさい』と承認してくれるタイプだった。年長者から率直に褒められる機会が少なかった俺は、どうも気恥ずかしい気持ちになる。

でも、30手前で正規艦隊司令になり、苦勞を抱え込んだ可哀相な後輩を気遣って、意識してそうしているとも思うから、止めてくれとも言えずにいた。決して、シロン産の高級茶葉が飲み放題だからだとは、思いたくない。

## 第61話 防衛体制

宇宙暦739年 帝国暦430年 3月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

ブルース・アッシュビー（中将）

『ガガガガガガ……ガガガガガガ……』

ダゴン星域での合同訓練を終え駐留拠点であるエルファシルに戻ってきたが、相変わらずこの基地は工事音が鳴り響いている。シャトルのステップを下り、滑走路の端を歩く。滑走路傍のエントランスから基地内部に入り、自分のオフィスへ向かう。訓練報告がまとまって上がってくるまでは一息つける。

最も、人口400万に届かないエルファシルに、独立艦隊も含めれば500万を超える軍人が出入りを始めた影響はすべてが見えた訳でもない。どこに対応を求めるかで俺達は役割分担をしているから、俺が担当している国防委員会に対策を依頼する案件があれば、気持ち切り替えてすぐに仕事に取り掛からないといけないだろう。

「閣下、おかえりなさい」

「アビー軍曹、早速だが伝言はたまっているか？」

自分のオフィスの一角に進むと、受付のアビー軍曹が声をかけて来た。訓練とは言えアスターテやダゴンは最前線だ。長距離通信は封鎖しているから秘書官役の軍曹の所に一旦集約される訳だ。自慢する訳じゃないが俺の秘書官役は、女性下士官たちの争奪戦になりかけたらしい。ただ、アデレードと離婚したばかりの俺にとって、女性からのアプローチは正直煩わしかった。

アビー軍曹は現地採用で基地の事務部門一筋13年。既婚者で子供も4人いるから『ベテランである事』を理由にこちらから指名させてもらった。カークとウォレスも現地採用の下士官を秘書官にしたことで、秘書同士のすり合わせもスムーズだし、基地司令部との連携もスムーズだ。カークはクリステインが怖いから浮気はしないし、ウォリスは恋愛志向であって、永久就職希望者は求めていない。

3つの正規艦隊が駐留しているから、『3司令会議』、基地司令を含

めれば『4司令会議』なんて呼ばれてる定例会議があるのだが、それと並ぶ権威を得つつあるのが、俺達の秘書官達による『3軍曹会議』らしい。まあ、実力派の事務専門下士官は、10年近く拡大を続けて来たこの駐留基地を最も把握している存在でもある。結果として良い形に落ち付いたと言えるだろう。

「はっ！国防委員会と統合作戦本部から回答が返ってきております。ロックが掛かっておりますので、閣下のPCでご確認ください。コーヒーを準備してお持ちします」

そう言いながら敬礼してくる軍曹に答礼して、オフィスに入る。スペースに余裕がある事もあって、広めの個室をオフィスにさせてもらった。家具は全部私物で用立てた。不満があるといけないから、軍曹の椅子も、俺が用意した。本当はそんなつもりはなかったのだが、カークとウオリスが『権力者には媚を売っておけ！』と忠告してきたからな。二人が秘書官を優遇したのに、俺だけ優遇しないとなるとアビー軍曹が可哀相だ。もつとも職務に精励してくれているから、投資としては安いものだった。

PCを立ち上げ将官限定の機密通信プログラムを起動して、虹彩認識を行い、回答を確認していく。メンテナンス艦に関しては予算は獲得したものの、試作と装備改善、運用体系の確立は前線で行われたしか……。次は、来期装備更新が実施予定の5個分艦隊の早期戦力化のための前線での訓練参加希望……。基地の補給機能には余裕があるが、官舎が足りるか？相談が必要なのはこれ位か。後は満額回答だ。ん？カークから依頼されていた宇宙要塞の建設費見積もりか。想定通り天文学的な金額だな。桁を数える気にもならん。

『コンコン、コンコン』

入室を許可するとアビー軍曹がデスクに近づき、コーヒーを置いてくれた。

「軍曹、ターナー中將に相談したいことがあるから時間をとってくださいと連絡してくれ」

「承知しました。ターナー中將の本日の予定は午後はオフィスのはずです。お急ぎになられますか？」



「そうだな。急ぎの方が助かると伝えて欲しい」

「承知しました。では、調整して参ります」

そう言うのと会釈をして部屋を出ていった。毎回答礼するのも落ち着かないからオフィスに来た時と戻ってきたとき以外は敬礼をやめてもらっている。答礼しないのも変な話だしな。デスクの端に置かれたコーヒーを手を伸ばして引き寄せる。機密を確認する事もあるので、秘書官は基本的にデスクのこちら側までは来ないように教育されている。

第9期基地拡張事業の計画書を開いて確認しているうちに、モニターの端に『ターナー中将との会議1500』とポップアップがでた。確認のボタンを押し、時間を確認する。時計の針は14時過ぎ、文字通り急ぎで対応してくれたようだ。ザツクリとだが拡張事業計画を見る限り、基地機能に余裕はありそうだが、官舎は不足しそうだ。人口が増えつつあるエルファシルでは民間の住宅も不足気味だ。大量の住宅を軍で借りるのは、地域経済のバランスを崩す事になるかもしれない。

「ふう。本来は艦隊司令の仕事じゃないんだがなあ。ただ、エルファシルになにか不都合なことが起これば結局困るのは俺達艦隊司令だ。自分たちの住処は自分たちで快適にするしかないか……」

『コンコン、コンコン』

「閣下、そろそろターナー中将とのお約束のお時間です」

ノックに応じると、軍曹がアラートの意味で声をかけてくれた。時計の針は1450をさしている。そろそろカークのオフィスに向かうか……。

「軍曹ありがとう」

そう言い添えてPCの電源を落とし、オフィスを後にする。廊下を歩きながら強化ガラスがはめ込まれた窓の向こうに視線を向ける。立ち並ぶ格納庫。変わらず響く工事音。8年前までは1500隻レベルの星系警備隊の駐屯地だったとはだれも思わないだろう。T字路を一つ越えれば第13艦隊の司令部だ。何個かドアを通り過ぎるとカークのオフィスが見えてくる。

そのまま進んでいくと、カークの秘書官であるコナー軍曹が一礼してからオフィスへ通じるドアを促すように左手を向けた。防諜体制の構築を担当しているカークのオフィスでは、俺やウオリス以上に機密に触れる機会が多い。コナー軍曹は基本的にオフィスには入らないように指示されていたはずだ。俺も左手を上げて会釈を返してから一応ノックをする。親しき仲間にも礼儀ありじゃないが、諜報関連は漏れない事も勿論だが、漏れた時の追跡調査が大事なんだ。だからなるべく接する人間を減らす。秘書官としては寂しいかもしれないが、必要なことだ。

「閣下。アッシュビー提督がお着きになりました」  
「ブルースだ。入るぞ」

ドアを開けてカークのオフィスに入る。俺はバーラト系のあるデザインナーの作品で揃えたが、こいつのオフィスは亡命系の職人の作品でまとめられている。職人技が光る本革のソファアの座り心地は何度味わっても良いものだ。遠慮なくソファアに深く腰掛けると、カークは備え付けられたティーポットの傍でお茶の用意を始めた。防諜の観点から、こいつのオフィスではお茶も自分で入れる。もつとも、このオフィスに入れるのは俺かウオリス位だろうが。

「無事のおかえりお疲れさん。オルテンブルク侯爵御用達だ。まあ、楽しんでくれ」

そう言いながら紅茶のカップにお茶を注ぐターナー。紅茶の良い香りが部屋に広がる。俺のオフィスではコーヒーを出す。ある意味ここでわざわざ話すと言う事は重要事項だという事。頭を切り替える意味でも、紅茶の香りは俺にとっても大事なものになりつつあった。

「とりあえず、報告で済む話からだ。ハイネセンに頼んだ宇宙要塞の建設見積もりだが、予想通り天文学的な金額だった。イゼルローン回廊を封鎖できるメリットは大きいが、10個艦隊分の整備費に近い。正式に上申するつもりかと確認まで添えられていた」

「あまり個人で出した見積もりと変わらないな。これ以上の経済効果があるならまだ上層部を説得できるんだが、こんなものに予算を割く

なら、ハイネセンやシロンに軌道エレベーターを作った方が国力を高められる。分かってはいたが、桁を数える気が失せる見積もりだな」やれやれと言った様子でカークが見積もりを確認する。こいつと話していて思うのは、軍事的なメリットだけでは政府を動かせないという事だ。帝国の正規艦隊をおびき出して殲滅し、その余勢を駆ってイゼルローン回廊のこちら側から帝国軍を駆逐する。

そしてその勢いを活かして防衛体制を整える。イゼルローン回廊の出口付近に人工天体クラスの宇宙要塞を建設する。帝国が進行ルートにしている回廊を川とするなら、それをせき止めるダムをつくるようなものだ。全てを度外視すれば、国防体制の確立にこれ以上の選択肢はない。

「二応考えてみたんだ。同盟にとってわざわざイゼルローン回廊付近に要塞を作る価値がどれくらいあるかをね」

そう言いながら一枚の資料を差し出してくる。

「既に同盟の人口は150億人を超えた。国防委員会の連中は10億人：1艦隊の割合に基づいて艦隊新設を考えたが、それはやめて装備更新費にした。当然人件費は浮くし、経済成長は続くだろう。それだ。何とか帝国の上層部も含めた戦力をおびき寄せて撃破した時、どれ位の時間が稼げるかな？」

「帝国の人材の厚さにも因るが、俺達が想定している規模で損害を与えられれば最低でも10年。長ければ世代が一巡する20年は稼げると思うが……」

「同盟の特殊出生率は地方星系も含めれば4.0を超える。このままいけば20年後には同盟の人口は少なく見積つても300億、おそらく帝国の人口を超えているだろう。守る事じゃなく攻める事を考え始める時期だ。それを踏まえると拡張工事を続けているエルファシルがあるのに、たった2星系分前線を進める為に天文学的な予算を割く価値があるかな？それなら30年後の技術をつかって、帝国側出口付近のアムリツツア星域に基地を作る方が話が早い」

確かにそうだ。そもそも論で帝国の宇宙艦隊に大打撃を与えなければ回廊出口付近に要塞を作るような大事業は行えない。ハイネセ

ンからエルファシルに拠点を進めた事で補給効率は劇的に改善された。それに引つ張られて要塞をつくれれば大きな効果が得られると思うのは正直浅い考えだろう。

「イゼルローン回廊に関しては、むしろ進撃路として使いにくくして侵攻にかかる手間を増やす方向で考えはじめた。例えばダゴンのアステロイドベルトから小惑星を引つ張って回廊内に流し込むとかな」  
「そうだな。既に回廊内部は航海の難所だ。大型輸送船が航行できなくなれば、侵攻路として使えなくなる。それでも切り込んでくるなら、むしろ御の字だ。補給線が伸び切った艦隊なんて殲滅の対象じゃないからな」

俺の見解に賛成する様にカークも頷いた。

「そうなればイゼルローン回廊は死んだようなものだ。帝国の連中も馬鹿じゃない。そうなれば何を考えるか？それが問題なんだよな」

そう言いながら、ターナーはタブレットを差し出してきた。その画面には、フェザーン方面の星系図が映しだされていた。

## 第62話 鬼門

宇宙暦739年 帝国暦430年 4月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

ブルース・アッシュビー（中将）

「帝国軍の立場に立って考えてみる。イゼルローン回廊が使いにくくなり、出口付近には同盟軍が手ぐすね引いて待ち構えている。袋叩きになるのが目に見えているのにわざわざ固執するか？」

「俺ならしないな。ただ、フェザーン回廊は非武装中立地帯だろ？電撃的に突破できれば戦略的にも戦術的にも効果はでかいが、自治領主府も馬鹿じゃない。保険はかけているんじゃないか？」

「そう考えていたんだが、少なくとも同盟の人口が帝国のそれを上回った辺りからフェザーンは決断を迫られるはずだ。同盟につくか？帝国につくか？をな。回廊の中立は3つの勢力にとってその方が都合が良いから維持されているだけだ。フェザーンが帝国に協力しても同盟の国力に及ばない状況になれば、彼らは同盟にすり寄るしかない。影響力を排除し、唯一の武器である資本すら嫌厭されている同盟にだ」

確かに言われてみればその通りだ。フェザーン回廊が中立であることで同盟は防衛戦線をイゼルローン回廊に限定出来た。帝国はフェザーンを通じて不足しがちな穀物を確保できた。そしてフェザーンは両国間の交易を独占し、収益を上げている。同盟の国力が両国を合わせた物より高まったら？戦争に勝利すれば交易自体が意味をなさなくなる。

運送担当として生き残れるかもしれないが、戦争が終了すれば軍縮が始まる。最大の再就職先は商船乗りだろう。政府としても今まで利益を貪っていた連中と戦争に貢献した退役軍人のどちらを優遇するか？間違いなく後者だ。つまり同盟の勝利はフェザーンの存在意義だけじゃなく、フェザーン人の生活をも脅かす訳か。

「やれやれ。お前は対応に困る予言ばかりするな。ただ、フェザーンが帝国に全面的に協力する可能性は高いな」

「それでな。この数日はフェザン方面の防衛体制を考えていたんだ。フェザンを補給基地として使えるなら、補給線は一気に縮まる。今まで通りの『距離の暴虐』の効果は薄まるしな」

それでこの星系図を見せた訳か。こうしてみるとフェザン回廊を中立地帯に出来た事がどれだけ国防に寄与したかが分かる。イゼルローン回廊からと比してハイネセンまでの距離は60%まで減少する。経由する航路も商船が行き来する宇宙の目抜き通りだ。進撃もさぞかし捗るだろう。電撃的なフェザン進駐と、同盟領中枢への侵攻。背筋が寒くなる気がした。

「遅滞戦が出来るとしたらランテマリオか？フェザンから直進しても迂回してもランテマリオは必ず通る場所だ。ダゴン程じゃないがアステロイドベルトもあつたはずだ」

テーブルにタブレットを置き、星系図のひとつを指さす。

「そうになると、惑星ウルヴァシーに駐留基地を作る必要があるな。あそこは地方星系の物資の集積地だ。そろそろ二次産業の立ち上げを考え始めても良い頃だ。補給線を太くできるし、地方星系の経済発展にもかなり寄与するだろう」

「話が変わるんだが、追加で5分艦隊程前線で訓練をさせたいという話が来ているんだ。基地自体は余裕があるそうだが、150万人分の官舎をエルファシルで用意できるだろうか？」

「今のエルファシルにこれ以上軍人を受け入れる余裕はないな。そうでなくても家賃の値上がりが始まっているからな。再来期の整備計画で、基地から歓楽街を通過して郊外に抜ける地下鉄の建設が始まる。第3駐留基地と同規模の基地を郊外に新設する計画が動き出す。それが終われば何とかなるが、それでも数年先の話だな」

「歓楽街を中心に東西に駐留基地。南北に市街地を伸ばす訳か。ウオリス辺りなら、ついでに南北の地下鉄も引いてしまえばいいそうだが……」

「その通りだよブルース。地方自治体ではそういう話がすでに出ている。軍人ばかりが優遇されるのもおかしな話だからな。開発公社が主管するジョイントベンチャー方式で地下鉄に関しては進める予定

だ。艦隊司令になって経済にも関心が出て来たか」

嬉しそうに応じるカークに、少なくとも経済面で俺の評価は高くなかったのだと判断した。まあ、エルファシルは軍人の大量流入で問題が多く発生しているのも確かだ。駐留部隊最高位の軍人の一人として、無関心ではいられなかったのも確かだ。

「なら、ウルヴァシーの警備艦隊基地を拡張して5個分艦隊の駐留基地にするのはどうだ？集積港としての機能も踏まえれば、警備強化の名分も立つと思うが？」

「そうだな。エルファシルとウルヴァシー間の戦力移動に、フェザーン方面からファイアザードを経由しての戦力展開も慣れさせたいしな。メンテナンス専門部隊の創設の件はどうだった？」

「そつちは、予算は取るそうだが、こつちにほぼ丸投げだな。カーク主導で進めるか？」

「いや、少将連中に試行錯誤させようと思う。自分たちで使うものだし、俺達はエルファシルとウルヴァシーの件でタスクも増えている。中將になれば自分の部隊の事だけじゃなく、軍全体への視点や、他部署と協力して事業計画を進める経験もさせたい。ファンがもう一人いたらウルヴァシーの事業は丸投げできるんだが……」

「大方針さえ決めてしまえば奴ほど手堅く仕事を進められる人材はなかなかいないからな。先に取られたのは、俺の生涯でも数える位しかない失態だったな」

苦笑する俺を嬉し気に見ながら紅茶のカップを少し持ち上げるカーク。まあ、補佐役にアルフレッドが付いている以上、更にファンまで望むのは少し贅沢か。

「次はブルースがお留守番だな。宇宙艦隊司令長官になったら事務仕事も増えるんだ。予行演習だと思って、しっかり頑張れよ」

エルファシルに駐留する3艦隊は、ランダムに分艦隊を選んでダゴンかアスターテで訓練・哨戒を行っている。待機組は静養と補給をするのだが、大規模な遭遇戦が起こった際は増援として緊急出動する事になっている。

ダゴンであれアスターテであれ、数日の遅滞戦で一個艦隊が、一週

間以内にもう一艦隊が増援として参戦する形だ。この流れで行くとウルヴァシーの5個分艦隊との合同訓練案のたたき台は俺が作る事になりそうだ。事務仕事は好みじゃないが、先にそう言われてはやらない訳にもいかない。留守番中は忙しくなりそうだ。

宇宙暦739年 帝国暦430年 5月上旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

ハウザー・フォン・シユタイエルマルク（少将）

「もらえるものは貰っておけばよいのだ。あんな戦いでも功績は功績だ。私に気兼ねする必要はない。少なくとも正規艦隊司令としての務めは果たせる。そういう認識が得られれば私は十分だ」

「ですが、あからさまな人事です。閣下だけを昇進させないと……」

年始から辺境星域で訓練を行っていた我々に、司令本部から命令が入ったのは3月の頭だった。4月の徴税期を前に、帝国では小規模な騒乱が複数発生した。首謀者の階級が真逆の反乱の蜂起が重なったのが偶然の産物だったのかは、調査を待つ必要がある。一方の反乱の首謀者は明日は我が身と身の危険を感じた皇族と一部の門閥貴族だ。こちらは、軍部系の中でも統帥本部長に近い艦隊司令が対応を命じられた。

他方の反乱は、無茶苦茶な徴税を課されてきた皇族領の平民たちが首謀者だった。この対応を命じられたのがコーゼル艦隊だ。平民の反乱を鎮圧する事で忠誠を示せと言う意図が見え透っていた。3か所の反乱に旗下の分艦隊を派遣して対応する。本来なら連座制が適用されるが、首謀者の自首で穏便な対応を確約する事で、早期鎮圧を実現した。

「私が大將になれば何が起こるかは卿も理解しているだろう？だからわざわざ艦隊を分けて対応し、対応策も卿らに一任した。武装しているとはいえ精々ライフル程度だ。気分の良い戦いにならない事は初めから分かっていた。ならば部下の昇進位はもぎ取らんな……」

剛毅な提督には珍しく、少し気落ちされた様子だ。重税を課され生



きるためにやむを得ずの反乱だ。そもそも名誉ある戦いではなかった。そして、我々が反乱の早期鎮圧に成功した事で、皇族と門閥貴族の反乱鎮圧に向かった艦隊も焦りが生まれてしまった。功を焦った事で、強硬な手段で鎮圧は成功したが、被害も多かった。

早期鎮圧を成功させたコーゼル艦隊に『平民同士で馴れあった』という陰口がささやかれている。それに反乱の首謀者とは言え、皇族を処するという任務を与えられた事で、汚れ仕事を押し付けたと軍務尚書への不満も生まれた。統帥本部長を中心に、宇宙艦隊内部に新たな派閥が出来つつある。何か起こるたびに軍内部の不和が高まる現状を憂慮されてもおられるのだろうか。

「参謀長をこのまま続けるか。分艦隊司令になるかは早めに判断してくれ。久しぶりのオーデインだ。骨休めをしておくようにな」

コーゼル艦隊司令部名物のインスタントコーヒーを飲み干すと、敬礼をして答礼を待ってから提督のオフィスを後にする。帝国軍人にとって前線の味とも言えるインスタントコーヒーが私はお気に入りだった。イゼルローン回廊のあちら側で地上基地を奮闘しながら維持している友軍も、きつとこの味に文句を言いながら飲んでいるはずだ。

冬の寒さに帝都から送り出されたが、窓の外は既に春の陽気を示している。郊外の別荘で、この陽気を感じながら戦術書を読むのも良いかもしれない。提督は分艦隊司令への転属も匂わされたが、参謀長のままでいた方が良いだろうと私はみている。平民出身な事もあり、コーゼル提督は宮廷の事情に疎い。反乱は確かにすべて鎮圧された。だが、軍内部に出来た派閥に、政府系と門閥貴族がそれぞれ近づきつつある。

門閥貴族は統帥本部長の派閥に近づいている。彼らからしても、『名ばかり少将』を御しきれず連敗を続けた軍務尚書にはもともと批判的だった。実績のない皇族の優遇を横目に苦々しく思っていたのだろう。一部の門閥貴族もそれに引きづられた形にもなった。軍務尚書の情実人事を批判する名目で実力主義による任用を唱えた事も好感を得たらしい。彼らには実績はないが、自分たちに能力はあると

認識している様だ。

軍務尚書に近づいたのは政府系だった。反乱を起こしたとは言え、皇族相手に強硬な手段で鎮圧した統帥本部長派は彼らにとつては異端者のようなものだ。武力を持たない彼らからすれば、身を守るためにも軍務尚書派に近づく必要があった。何より、先帝の庶子たちに煮え湯を飲まされていたのは政府系も同様だ。半分は同志の様な感覚があったのだろう。

「これでは内憂外患ではないか……。叛乱軍は手強い。帝国内部で争う余裕などないはずだが……。」

思わずため息が漏れ、その思考をすり払うかのように頭を左右に動かした。帝国の状況と真逆の春の陽気が恨めしい。

「別荘に向かう前に、ミヒャールゼン局長に一度お時間を頂こう。コーゼル提督が誤った判断をしない為にも正確な宮廷内部の情報が必要だ」

伯爵家に属し、男爵号もお持ちだ。それに人事局長であれば事情にもお詳しいはず。暗澹としていた思考に一筋の光が見えた気がして、私の足取りは軽くなった。統帥本部長派のように批判の為に唱える者たちと違い、本心から実力主義による任用の必要性を理解されている局長なら、力になって下さる。私は本心から、そう考えていた。

## 第63話 動き出す悪意

宇宙暦739年 帝国暦430年 8月上旬

惑星フェザーン 自治領主府

マリウス・ラープ（自治領主）

「補佐官にも伝えたが、同盟の案件、特に軍関係の事業に食い込むのは当然無理だな。奴らのフェザーンへの態度は一貫している。ウルヴァシーに集めた物資を買い付けるのは認める。だが疑念を抱かせような行動はするな！だ。ウルヴァシーから先の星域では入国管理も厳しいし、臨検も多い。下手な事をすればまた懲罰的賠償金を課してくるだろう。断れば引き渡し価格の引き上げ、関税の新設もありえる。交易以外で収益を上げるには厳しいだろうな」

「お手数をおかけして申し訳ありません。カリス長老。同盟通の貴方にわざわざ連絡を入れたのは、ウルヴァシーの警備基地が増強される件について、意見を伺いたかったからです。一艦隊規模の駐留基地が建設されていると聞いていますが、フェザーンへの進駐を意識したものののでしょうか？」

同盟方面のフェザーン資本を取り仕切っていたカリス長老は、同盟からフェザーン資本が排斥された今では正直落ち目だ。自治領主府の失策のせいで大損害を被った際は批判を強めていたが、ヴァレンティが文字通り命で失策の責任を取ってからは大人しくなった。ビジネス界では財産を失う事があっても、事故でもなければ命の危険はない。自治領主府なりの詫びは済ませた。これで納得しないなら……。というメッセージが伝わってくれたようだ。

「それはあるまい。そもそもフェザーンを同盟が得たとして、一体どんなメリットがある？余剰物資の引き取り手がなくなり、イゼルローン方面だけでなくフェザーン方面も戦線になる。あくまで押し込んでいるのは帝国側だ。むしろ帝国から非公式にフェザーン回廊の通行権でも要求されたのかと、儂は思っていた」

「安心ください。そのような事実はありません。ただ、同盟との関係は友好的とは言えないのも事実です。イゼルローン方面が主戦場

であるにも関わらず、フェザン方面の基地機能を強化し始めた。それを無視するほど、私は豪胆ではないので……」

「それで、同盟経済からの締め出しへの対応策はあるのか？ 儂の資本も置いておくわけにもいかんから帝国で動かしてはいるが、あちらはあちらで門閥貴族は恣意的。統治機構も細切れで予測不能なリスクが多すぎる。儲けも出るが、枕を高くして眠れなくなった。フェザンが安定的に収益を得るためにも、同盟への浸透は必要だと思うのだが……」

「その点に関しては私も十分理解しております。借りがある事も忘れてはおりません。借りはしっかりと返して頂きませんと」

「それなら良いのだが、同盟は着々と国力を伸ばしておるし、発展するほど参入障壁も高くなる。地方星系で年々増産されている穀物の使い道も更に増やす動きがある。ほれ、英雄だと祭り上げられていた第13艦隊の司令。ターナーとか言ったか？ あやつが自身の会社を立ち上げて、同盟内の各地に蒸留所を作り始めておる。蒸留してウイスキーやらブランデーにしてしまえば数十年商品価値を担保できるかな。奴が経営していたウーラント商会も帝国風の食材で財を成した。亡命系の入れ知恵だろうが穀物を売り急がずに済むようにとの意図だろう。忌々しいことよ」

ホツとした様子をした後に、思い出したように忌々し気な表情をするカリス長老。人を褒める事がほぼ無い彼に商売敵として認定されるか。ターナーとやらは軍人としてだけじゃなくビジネスの才能もあるようだ。フェザンに生まれていたら、自治領主府にスカウトしただろうか？ ただ、同盟軍の若手と言うと一番先に名前が出るのはアッシュビーだったはずだ。トップを狙わない辺り、適性としては独立商人の方が向いているやもしれんな。

「長老、こんなことを言うのは釈迦に説法でしょうが、相手は軍上層部を担う人材です。軽率な行動は……」

「言われるまでもない。あの損害が埋まるなら検討はするが、軍幹部の暗殺などすれば同盟も本腰を入れて捜査してくる。バレた時の事を考えればそんな手段はとらんよ。そもそもビジネスの場では脅し

はあつても実際に命を取ることはせん。そんなことをしても得にはならんからな」

暗殺も手段のひとつにする同類とみられたのが不本意だったのが、長老は不機嫌な様子で通信を終えた。経済的な要素だけで動くなら、暗殺は使うべき手段ではない。相手陣営に警戒感を抱かせるし、交渉すらできなくなる。ただ、多くのフェザーン人が勘違いしているが、自治領主府は経済的な要素だけで動いている訳ではない。

「ふう。贅沢は言わないが、ご老人のお相手が続くと疲れるな。もつとも美人で若い宗教指導者がいれば、地球教の布教ももつと進むのだろうが……」

老人はやいのやいのと文句ばかり言う。現役世代への労いを忘れてたら傲慢なだけ。恩着せがましくされれば、恩も恩と感じたくなると言うものだ。さて、気持ちを入れ替えるか。私は執務機の背面に隠されたセンサーに右手を置き、静脈認証を起動した。認証が終わると同時に、左の本棚の一部が移動し、ちょうどひとりが通過できる位の通路が現れる。その通路を進み、灯りが抑えられた小部屋に入ると、ひざまずき、両目をつぶる。

「総大主教猥下、自治領主府をお任せ頂いたラープです」

『おお、ラープか。いい加減朗報であろうな?』

「総大主教猥下にはご機嫌麗しく。ご裁可頂きたいことがあり、通信をお送りいたしました。猥下に朗報を報告出来ぬ非才な私をどうぞお許しください」

『うむ、それで?』

「はつ。現状、同盟の国力の伸長が目覚ましく、このままでは帝国の敗戦が濃厚な状況となりましょう。フェザーンとしては、帝国への支援をさらに強めるべきかと愚考する次第で、猥下のご裁可を賜りたく」  
『母なる地球への信仰心を失った異教徒どもを争わせる方針に変更がないなら一向に構わぬ。だが、同盟への浸透が芳しくない事、帝国も統治機構がばらばらで非効率だと言う話であった。何か手筈はあるのか?』

「はつーまず、フェザーンに在住している帝国系の信者を亡命者とし

て同盟に送り込みます。そして彼らを支援し、子孫も含めて隠れ信者として潜伏させます。一方、帝国の皇太子であるオトフリートには3人の男子がおります。少し気が長い策ですが、帝位を巡ってこの3人を争わせ、貴族達の取り潰しをさせます。これによって直轄領を増やし、効率を高めます。そして、政争によって生まれる大量の亡命者の引き受けを隠れ信者に担当させ、彼らを政界に送り込みます。この際に、信者も送り込めれば尚良いでしょう』

『少し気が長い策のようにも思えるが……』

「猥下のお気持ちもごもつともでございます。卑小な私をお許しください。ただ、現在の同盟が手堅いのもまた事実。短期的な策では効果が見込めぬ以上、深く潜るのも大望の成就の為に一考に値するのではないかと愚考する次第でございます。帝位を争うにあたって貢献できれば、帝国内での影響力もさらに強まりました。今まで献金で懐柔してきた同盟政治家たちは、国外資本の献金規制の強化で、これまでの策は使えません。政界に勢力を作る意味でも最善の策かと」

『左様か。確かに先人たちから受け継がれてきた大望の成就に、焦りは禁物であろうな。よし、お主の献策を受け入れよう。ラープ、しっかり励め』

「はっ……英断を頂きましたこと、このラープ感謝に堪えません」

ひざまずいたまま、頭を下げると通信が終わり、部屋の灯りが少し強くなる。この小部屋自体が、遙か彼方の地球教本部と思念で通信を可能とするシステムになっている。思念で通信する以上、余計な事を考えればそれも伝わる為、反意はなくともこのシステムを使うときは心的なストレスを感じる。相手が総大主教猥下ともなれば尚更だ。

「裁可は得た。民主共和制の弱点を精々利用させてもらおうでしょう」

私が現役の間には難しいかもしれないが、同盟に借りを返す準備は進められる。暗い喜びに浸りながら、この小部屋を後にした。フェザーンを共通の敵とすることで融和を進めた同盟。だが、戦争への想いには濃淡があるはずだ。亡命者が大量流入すれば、それも議題になるだろう。帝国側は自滅するかのよう国内の対立が深まっている様だが、同盟にもそれに倣ってもらう。せいぜいフェザーンの掌の上

で派手なダンスを踊ればよい。今夜はうまいワインが楽しめるだろう。

## 第64話 人事異動（同盟）

宇宙暦739年 帝国暦430年 9月上旬

惑星エルファシル エルフアシル方面軍司令部

カーク・ターナー（中将）

「もう機嫌を直したらどうだ？方面軍副司令がそんな顔をしていたら、部下たちも気にするぞ？まあ、俺は構わないが……」

「ふん！ブルースには一歩先を行かれ、お前には一歩譲られた。俺にだって自負つてものがあるんだ。辞令には従うが、そうですかとニコニコなんてできるか」

「俺に関して言えば、エルファシル方面軍の防諜体制の構築、試行錯誤は現場に投げるがメンテナンス部隊新設の主幹だ。更に兼任で方面軍副司令なんて超過勤務だろう？それとも俺はともかく、ブルースを部下にしたいか？離婚調停の調停人に担ぎ出されるのが落ちだぞ？」

10月の人事異動が確定してから、目の前で拗ねているウオリスをなだめている。同性の俺から見ても華があり洒落ているウオリスは生まれる時代が違えば軍の中心人物だっただろう。それはフレデリックにも言えるし、ジョンやヴィットリオも同様だと思う。

アルフレッドは名将と言うより名補佐役だが、同じ時代の天才が分かる奴なら必ず旗下に呼ぶと思う。ファンは艦隊司令としての適性もあるが、参謀よりかな。慎重で手堅い人間の重要性が理解できる奴なら、必ず手元に置きたがるはずだ。

「大体、ブルースに勝つ事なんて簡単だろうに。普通に家庭を持って、子供を育てれば良い。優しいのは美点だと思うが、お前ならちゃんとお相手を幸せに出来る！会長だつてずっとお前の子供を抱くのを待ってるんだ。そろそろ覚悟を決めたらどうだ？」

「分かってはいるがな。俺達は軍人なんて因果な商売をしている。俺の親父はビジネスで忙しかった事もあるが、子供の頃の思い出なんて祖父母との物がほとんどだ。良き夫、良き父になれるんだろうか？なんでも器用にこなしてきたからこそ不安でもあるんだ」

「その分、休暇は妻子優先にすれば理解してもらえるさ。それにな、俺



達の子孫がそういう普通の家庭生活が出来る未来を作るのも鬪う理由になる だろう？俺としては、鬪う理由にウォリスの子孫の為というのも加えたいがな」

「カーク。お前似たような事をブルースにも言っていないか？アルフレッドからそんな話を聞いた覚えがあるんだが？」

「いけないか？権力者に配慮するのがビジネスで成功できるかの力ギだ。会長とウォリス。ナタリー議員とブルース。どちらに配慮するかなんて自明の理だろ？」

悪びれずにそう言くと、ウォリスは呆れた様子でカップを手に取り、コーヒーを飲み始めた。俺も続くようにコーヒーを楽しむ。ウォリスのオフィスのコーヒーは、ウォリスが自前で用意したものだから薫り高くてうまい。さて、もう一押ししておくか……。

「それにな。今は懐いてくれてるが、親父の自慢話なんて素直に聞けないだろ？だからさ、俺はウォリスの子供たちに小遣いで機嫌を取りながら飯でも奢ってお前の武勇伝を聞かせる。お前はシユテファン達に同じような事をする。そんな老後も楽しいだろ？」

「悪くはないが、おちおちくたばる訳にもいなくなるな。先にくたばったら何を言われるか分かったもんじゃない。それに既婚者だからって偉そうにするな。出来た奥方たちだからこそ、横暴な亭主どもを黙って支えてくれているんだからな」

「分かったわかった。なんだかんだで俺達以上に会合を開いているらしいからな。一体何が話し合われているやら。怖いもの見たさもあるが、知らぬが仏だろうな」

ウォリスも全てにではないだろうが納得してくれたようだ。『結婚か……』とつぶやいていたから戦果はあった。これ以上は逆効果だろう。俺だって引き際は分かっている。ブルースに似たような事をしていするのも事実だ。僚友の活躍をその子供たちに話したいというのは本心だしな。話題になっっている人事異動は以下の様な物だ。

・ブルース・アッシュビー中將⇒大将

エルファシル方面軍総司令 兼 第2艦隊司令

・ウォリス・ウォーリック中將

エルファシル方面軍副司令 兼 第5艦隊司令  
・カーク・ターナー中將

最高幕僚会議常任委員 兼 第13艦隊司令  
・アルフレッド・ローザス少將

エルファシル方面軍総参謀長 兼 第2艦隊参謀長

・ファン・チューリン少將⇒中將（ウルヴァシーへ転出）

ウルヴァシー駐留艦隊司令 兼 第8艦隊司令

・フレデリック・ジャスパール少將（ウルヴァシーへ転出）

第81分艦隊司令（第4艦隊司令に内定）

・ジョン・ドリンカー・コープ少將（ウルヴァシーへ転出）

第82分艦隊司令（第11艦隊司令に内定）

・ヴィットリオ・ベルテイーニ少將（ウルヴァシーへ転出）

第83分艦隊司令（第9艦隊司令に内定）

正直、国防委員会と統合作戦本部は俺達をよく見ていたと思う。俺達を将来の軍上層部を担う人材として周知させると共に、国防体制の確立と旧式艦から装備更新を進める艦隊の再戦力化もやらせるという意図が感じられる人事だ。エルファシルに駐留していた3個艦隊は、司令官同士が同期で個人的な付き合いもある為、うまく回っていた。ただ、昇進のタイミングも一緒だった中將が、協力して動く方が本来は稀だ。誰かを昇進させて指揮系統を明確にする必要があった。個人的な面識もあったので、国防委員会に所属するナタリー代議員には事前に相談された。トップはブルース。次席にウォリス、最後に俺が一番うまくいくと回答した。その旨を、ウォリック会長にも拗れても嫌なので伝えてある。

ブルースを部下にするのは悪夢でウォリスは苦労しからない。ただ、大規模な基地が新設された事で付近の星系のも経済的に大きな変化が起こっている。それに対処する意味でもウォリスは次席にしない立場が軽くなりすぎるので押し込んだって。

会長は上機嫌で笑ってたな。融和が進んだとはいえ、バーラト系原理派は軍需産業で、融和派がそれ以外で強いという傾向は変わっていない。軍内部なら原理派を立てておいた方が収まりがよいのも事実

だった。

ファン達の人事に関しても似たような所がある。ウルヴァシーの警備基地を駐留基地にし、今後もしばらくは増設していく計画だ。自分で言うのも何だが、適任なのは俺だったと思う。

ただそうなると、同列だった状況で序列をつけたブルースとウォレスの間を取り持つバランスー役を新任の中将にやらせることになる。それにエルファシル方面の防諜体制や防衛戦略の出元は俺だ。バランスー役を引っこ抜いて、更に基地増設と艦隊の再戦力化の主幹をやらせるのはさすがに無理がある。最高幕僚会議常任委員と言うのは、統合戦本部や宇宙艦隊司令本部とのつなぎ役でもあるからな。

そこで白羽の矢が立ったのがファンだ。もともと手堅い仕事には定評があり、旗下につく同期達からも一目置かれている。それにエルファシルの基地増設計画を主管した俺と、ほとんどの期間軍歴を共にしている。判断に悩むことがあっても、前例を把握している俺と気軽に相談できる。フレデリックは明るく誰からも好かれる性格。ヴィットリオはああ見えて経済に詳しいし、ジョンはバランス型でなんでもこなす。出身も辺境系・亡命系・バーラト系が揃う。配慮の利いた人事だと俺は判断している。

「13艦隊はファンだけだが、うちは2人も引き抜かれるんだ。練度も下がるだろうし拗ねている場合じゃないか」

「その通りだ。それにエスピノ軍曹もお前が不機嫌じゃ可哀そうだぞ？ 恋愛体質でも女性を泣かせないのが俺の知っているバロン・ウォーリックだ」

「ちつ。お前には口では勝てないな。軍曹にもあとで詫びておくか。それとあくまで確認だが、お前が新しく始めた蒸留所の一件。あれにおじい様は出資されたのか？」

「もちろんだ。一応社名はターナーを名乗らせたが、出資はウォーリック、オルテンブルク、アッシュビー、ベルティーニ、出光、井上、ウーラントが窓口だ。20年以上先の話に出資できる所得層は限られているしな。ブレンドして味を高める意味でもいろんなシングルモルトが必要だ。穀物が余り始めている地方星系を中心に50か所

ほど蒸留所を建設した。将来的には地下保管施設の一部を賃料を取る形で少額出資も想定してはいる」

発展し始めた地方星系でまず注力するのが農業だ。ただ、生産量の伸びに比して人口はそこまで増えない。そのまま放置すれば穀物価格が下落する。それもあつて蒸留所を一気に建設した訳だ。

ウイスキーやブランデーに目を付けたのは、オルテンブルク侯から帝国貴族の道楽について聞いたのがきっかけだ。自分の子弟の成人の際にワインのように生まれ年の物を飲んで祝う。また、ブレンドを行って自分の名前のウイスキーを贈答に使う。俺自身、孫の成人式でそういう事をしてみたいと思つたし、同盟に生まれつつある富裕層にも受けると思つたから始めた事業だ。

「おじい様の気持ちを無駄にするのも無粋か。俺も観念する頃合いが来たのかもな」

ボソツとウォリスは呟いた。その後はコーヒーを飲みながら雑談に興じた。まあ、この人事で一番苦労するのはファンだろうが、やりがいも大きい。そして一番苦労を背負いこんだのはアルフレッドだろう。第2艦隊だけじゃなく方面軍全体の総参謀長になつてしまつたからな。

そんな話を始めたら、一転してウォリスは上機嫌になつた。俺の秘書官であるコナー軍曹を通じて、エスピノ軍曹からお礼の言葉を聞くのは、翌朝のことになる。

## 第65話 人事異動（帝国）

宇宙暦739年 帝国暦430年 9月上旬

惑星オーデイン 軍務省人事局 局長室

ハウザー・フォン・シユタイエルマルク

「閣下のお力でなんとか……。なっ……てい……ればこんな人事案は通……  
いませんな」

「ケルトリング少将、いや、中将には自重を何度も進めたのだ、ご長男が残念な形になった以上、伯爵家を継ぐ者としての責任もある。ただ、ああも軍務尚書ご自身が仇討を口にされ、評価は得ていたとは言え自分ではなく、甥を仇討役に加えたとなるとな。伯爵家は継がせるが期待外れだと周知されたようなものだ」

「だからと言って……。いえ、だからこそその統帥本部長派への参加と正規艦隊司令への任命ですか。実力主義を標榜する統帥本部長派からの推薦でその地位につけば、情実人事で着任したと看做されているミュッケンベルガー中將とも差が付けられる。筋道は通っておりませんが、派閥間の対立は更に深まりました」

軍務尚書のご次男、ケルトリング少将は元々は局長の部下で人事局次長だった。兄君が戦死されたことで伯爵家の跡取りとしての立場も得られたが、仇討役として選ばれたのは軍務尚書の甥にあたるミュッケンベルガー中將だった。軍部系貴族の跡取りとしては納得いかない判断だったかもしれない。だが、貴族として最優先の役目は血を繋いでいく事だ。ミュッケンベルガー中將には幼いとは言え男子がいる。軍務尚書の判断は貴族として正しかった。

「政府系や門閥貴族どもから、陰口を色々と言われていたそう。兄が戦死したから名門のケルトリング伯爵家を継げる。軍務尚書からは家を継ぐ事しか期待されてない。期待していないから誉れ高い仇討からも外された。そのような人物が栄光あるケルトリング伯爵家の後継ぎとして相応しいのか？などとな」

「さすがにそれだけで父君の敵対派閥を作りつつある統帥本部長派に行くのでしょうか？いえ、だからこそその正規艦隊司令なのです。軍

務尚書閣下が、嫡男誕生までは前線に出る事を許すはずがない。ケルトリング中將が自分の名譽を回復し、実力を示せる地位を得るには統帥本部長派になるしかなかった」

軍務尚書は既に高齡だ。このまま退役されれば後任は統帥本部長の地位にある者が繰り上がるのが通例だ。そして厄介な事に、伯爵家の3男である宇宙艦隊司令長官のツイーデン元帥もかなり高齡であらせられる。将来の帝国軍はこのまま進めば統帥本部長主導でデザインされる事に、ケルトリング中將の人事で皆が気づいた。統帥本部長派は実力主義を標榜する事で出征の主導権を握ろうとし、ケルトリング中將が加わった事で仇討と言う大義名分まで手に入れた。

「むしろ私が自重を促しすぎたのかもしれない。少なくとも軍官僚としての彼は十分優秀だった。前線に行かずとも、十分に伯爵家を継ぐに値する功績を残せたはずだった。残念なことに、帝国軍はもう何年も輝かしい戦勝を飾れていない。自分より優れていたと囁かれる兄の仇討と共に久しぶりの戦勝を飾れば、これ以上の証はない。自重するにはよほどの忍耐が必要だが、まだ若いケルトリング中將には難しいだろう」

「今後に関しては、いかがお考えでしょうか？軍務尚書も後継ぎに配慮しない訳にもいかないでしょう。次の出征は統帥本部長派が取り仕切ると考えるべきでしょうか？」

「その可能性が高いだろう。実力主義に基づく任用であると証明する為にも戦功を上げなければなるまい。ただ、宇宙艦隊司令本部がそうやすやすと主導権を譲るとも思えんな。あまり大きな声では言えないが、やつと『名ばかり少將』の影響を排除出来たのだ。足枷がなくなりこれからと言うときに横から大功を上げる機会をやすやすと渡すとは思えん」

「コーゼル艦隊は、あくまで所属する宇宙艦隊司令本部の指示に従うつもりです。ただ、実力主義を標榜する統帥本部長派に期待する声もあり、難しいかじ取りを迫られそうです。コーゼル閣下としては叛徒たちに押されている以上、派閥争いなど愚の骨頂と言う姿勢ですが、結果として両派閥に苦言を呈する形になりました。提督自身は表

立つての主張は控えておられますが、立場を明確にすべきだという圧力も強まっております、やりにくい状況になりつつあります」

コーゼル提督は平民出身で初めて正規艦隊司令になった。実力主義での任用を文字通り体現した存在でもある。兵たちからの期待も大きい。軍部系貴族からすると目障りな存在でもあるが、支持を取り付けたい存在でもある。ただ、貴族の矜持もあって、助力を素直に頼める存在でもない。両派閥の動きからも平民が偉そうに。黙って自分たちを支持しろと言う意思が見え隠れしていた。

「今は派閥からは距離を置いた方が良いでしょう。どちらが先手を取るかは何とも言えん。ただ、先手が取れたからと言って勝てるとも限らない。負ければここぞとばかりに叩きにかかるだろう。命令系統にのみ従うという姿勢で今は良いと思う。卿が宮廷工作に自信があるのならまだやりようはあるが、平民出身のコーゼル中將を軸とするなら大きな成果は見込めないだろう。私も力になりたいが、所詮男爵ではな。実力主義の必要性を認めたとという体の為に人事局長を任されてはいるが、正規艦隊司令の時と比べると影響力も低下してしまつた。もちろん今後も協力は惜しまないし、現状を憂慮している存在がいる事は、忘れないでもらいたいと伝えて欲しい」

「ありがとうございます。そのようなお言葉を頂ければ、提督も心強いでしよう。私自身、軍内部に宮廷闘争を持ち込めばまたよからぬ影響が生まれると判断し、控えておりました。自信がある分野でもありません。襟を正して命令系統に従うのが軍人としてのあるべき姿だと、範となれるような運営に勤めます。引き続きよろしくお願いいたします」

用意されていた紅茶を飲み干して、私は局長室を辞した。両派から距離を置くという事は、出征の機会にも恵まれないという事だ。訓練で上げた練度を示す場が得られない点は悔しくもあるが、政府系や門閥貴族を巻き込みつつある派閥争いに参加するには、宮廷内部への伝手が足りなかった。実力主義を体現したコーゼル提督を今失う訳にはいかない。苦しい舵取りになるが、今は耐えるしかあるまい。少なくとも、現状を憂慮してくれる局長の様な方々もおられるのだから。

宇宙暦739年 帝国暦430年 9月上旬

惑星オーデイン ミヒヤールゼン男爵邸

クリストフ・フォン・ミヒヤールゼン

「軍務尚書派と統帥本部長派、政府に門閥貴族も巻き込んで祭りの様な様相を示しておりますが、先手はどちらに取らせるおつもりですか？ご実家からも働き掛けがあると存じますが……」

「公式には碌な事にはならないから自重しろと伝えてある。だが、暗に煽っておいた。私怨を晴らすつもりはないが、駒としては役に立つ。先手を取らせるのは統帥本部長派にするつもりだ。叛徒たちの戦力は13個艦隊以上だ。派閥争いの結果としての出征で勝利できるほど甘くはない。門閥貴族どもの押しがあつての出征が失敗すれば、陛下も黙つてはおれん。処罰も当然あるだろう。余計なことに首を突っ込んだ落とし前を付けさせる」

「承知しました。統帥本部長派と言えば、ローエングラム伯が方々から要請を受けているとの事でした。既に統帥本部長派ですし、武門の家柄と本人を含め寄りたちも自負している様子。担ぎ出すにはちようど良いと思えますが……」

目の前でワインを楽しむ男は、同志の一人だ。ローエングラム伯爵家の庶子の生まれだったが、なまじ優秀だったのが仇になった。右腕として重用すれば良いものを、幼少から比べられた嫡男から屈折した怨念を向ける対象とみなされた。栄達の道のことごとく邪魔された彼は、本来の能力からは程遠い職場で燻るしかなかった。

ジークマイスター提督が声をかけられ、伝手を使って宮内省の職員となつてからは、能力を發揮して立場を築いた。そんな彼にとって、憎むべき対象は嫡男であつたが、目障りだったのは同じ庶子でありながら皇族と言うだけで傍若無人の振る舞いをした連中だった。本人の強い希望もあり、彼らを処理する計画の一翼を担った。そこで得られた暗い喜びによつてついた復讐の炎は、いよいよ本命を焼き尽くさんと動き出す事にしたようだ。

「伯爵家に連なるとはいえ、私の影響力は決して大きくはない。ロー



エングラム伯が失態を犯したとしても、卿を後継ぎに押し込む事は出来まい。それでも良いのか？」

「構いません。大した戦功のない武門の家柄など笑止なだけです。我々の目的の為、薪として精々派手に燃え上がらせる位しか使い道はありません。あれは昔から被害者意識の強い男でした。宮廷内部で少し噂を流せば過敏に反応してまいりましょう」

「分かった。卿がそこまで言うなら止める理由もない。それとコーゼル提督へ敵意を統帥本部総長派が向ける様に仕向けるのも忘れずに。連中の出征に間違つても彼を参加させるな。平民の象徴になりつつある彼に何かあれば帝国軍内部の兵たちの反応が読めなくなる。期待が絶望に変われば一気に革命ともなりかねんからな」

「承知しております。平民でありながら実力で中將にまでなった方を、あのような愚劣な者たちの巻き添えにするわけには参りません。それにシュタイエルマルク少将でしたかな？一宮内省職員にも氣を使つて下さる良き方でした。あのような方が当主ならローエングラム伯爵家も武門の家柄と胸を張つて言えたのでしようが……」

悲し気な表情をしながら首を振る同志。ルドルフ大帝が帝国の統治を支えるべく用意した貴族制は一部限界を迎えている。能力を無視し、血を優先させた結果としてあまりにも不条理な事がまかり通るようになっていく。私自身は相続の際にそれを思い知つたが、目の前の同志は伯爵家に連なりながら、その連中から自分の能力を否定され続けた。私以上に、闇を抱えているのかもしれない。

「帝国の不条理は尽きる事が無い。それを覆す力がない以上、未来の帝国でそのような事が少なくなる様にすべきだ。それを体験した我々だからこそ出来る事。今後は政府系と門閥貴族の宮廷闘争がメインになるはずだ。卿の働きに期待している」

そう言いながら空になったワイングラスに年代物の赤を継ぎ足す。高い能力相応に、目の前の同志は貴位も高かった。だからこそ口だけでなく相応のもてなしで勞う。多くの同志たちに接した事で私は考えずにはいられなかった。優秀な同志たちの忠誠をささげる対象として帝国が相応しい有り様なら、同盟など一蹴できたのではないか

と。この男を右腕として重用していれば、ローエングラム伯は今以上に影響力を持っていただろうし、宇宙艦隊司令長官の後任候補の一人になっていた可能性もあるのだから。

## 第66話 キヤリア

宇宙暦739年 帝国暦430年 12月上旬

惑星ウルヴァシー 第4駐留基地司令部

ファン・チューリン（中将）

貨物用の巨大な宇宙港と併設された倉庫群、それを見渡せる郊外にあった星系警備隊の本部を中心に第4駐留基地の建設は急ピッチで進められている。分室からの情報では、帝国で正規艦隊司令たちが2派に分かれて派閥争いを始めているとの事だ。国防委員会を始め、多くの代議員たちは、それなら大規模な攻勢は無いと判断しようとした。そんな状況に警鐘を鳴らしたのもジークマイスター室長のようなのだ。

『白黒つける意味で、どちらかの派閥が総力を挙げて攻勢に出る可能性が高い』

と言う予想が、軍上層部の統一見解として叫ばれ始めたのが先月の事だ。最高評議会は補正予算を組んで第4駐留基地の事業費と1個艦隊の装備更新費を前倒しで予算組みする判断を下した。予算が潤沢なのは嬉しいが、早期戦力化の為に最低限の転換訓練を終えた分艦隊からこの基地に配属し、訓練を開始する旨の指示が来た時は正直頭を抱えた。

エルファシルの第3駐留基地を踏襲する形で計画が作成されたが、置かれた状況が大きく異なる部分がある。ウルヴァシーは軍需品だけでなく、フェザーンに輸出される交易品の集積地でもあるという点だ。フェザーン人の出入りも多いし、航行する民間船の数もかなり多い。ターナーが防諜体制を構築してくれたとは言え、駐留艦隊がフェザーン国籍の民間船に目撃される事は防ぎようがなかった。

『カークと煮詰めたロードマップの懸念点にはそんなことは書いてなかったはずだ。つまり目撃されるのを防ぐのは無理と判断したんだろう。なら、こちらもいつ？誰に目撃されたのかを把握できれば十分じゃないか？臨検なんて専門の警備隊以外にやらせても無駄だぞ？禁制品や密航者なんて、臨検専門の教育を受けて実地を経験しないと

そもそも発見なんて無理だ』

そう言ってくれたのが、大筋を掴むことに長けているジャスパードだった。彼の強みは大筋を掴む能力もそうだが、明るくなんでもない事のようにそれを明言できる性格も有難いものだった。彼が言うと思議とそう言う物か……。と妙な納得感を感じてしまう。

ターナーからも最高責任者として気合が入るだろうが、大筋で悩むことがあればジャスパードに意見を聞いてみると言われていた。それもあって大筋で判断に困る場合はジャスパードにまず声をかける事になっている。大方針さえ決まれば、手堅い仕事得意な私にとって、悩むことはそこまで多くは無い。

『地方星系の経済発展は素晴らしいな。カークも二次産業を立ち上げる時期だと言っていたが、実際に見たら奴も驚くだろう。ファン、報告書と出資依頼書だ。』

ウルヴァシーが所属するガンダルフア星系を始め、発展著しい地方星系を回りながら軍需物資の生産設備を立ち上げ始めたベルテイー二は、コープの言を借りると秋の収穫を満喫するクマのように上機嫌に視察を続けている。そして私にも立ち上げた現地法人への出資を求めてくる。

見た目に反してビジネスへの関心が強かった彼は、軍需産業と交渉しながら、地元資本とバーラト系・亡命系そして我々を噛ませる事で横槍を防ぎながら地方星系を生産拠点にすべく精力的に動き回っている。もともと物流自体は穀物を中心に体制が整っていたので、生産が本格化したらそれに組み込むだけだ。もう少ししたら備蓄用の軍倉庫を更に新設する必要があるだろう。経済関連は自然と彼の担当になった。

『今後は転換訓練を終えただけの分艦隊も混ぜて戦力化をしなければならん。それにフェザーン方面からファイアザードを抜けてアスターテ経由でエルファシルに向かう航路は測量も万全とは言えない。これを含めた訓練計画が必要だろうな。前線の哨戒も手は抜けん。アルフレッドと綿密に相談した方が良いだろう』

室長から苦労人と評されたコープは分艦隊ごとに送られて来る転

換訓練を終えただけの部隊を組み込みながら、エルファシル方面軍との合同訓練、そして観測データが不足している星系のデータ収集を取り仕切ってくれている。今後の同盟軍で戦力化のための訓練のスタンダードを我々が作ることになる。

最低でも数回はウルヴァシーからファイアザード経由でエルファシルへ向かう航路と、エルファシルからウルヴァシーの航路は経験させる必要があるだろう。特にマル・アデッタとフォルセティは大規模なアステロイドベルトもあり、追加の観測データは必要だった。

こうして、司令官として至らない点を補ってもらいながら、日々拡大していく駐留基地を帰宅前に眺める日々が始まった。報告書と決裁書の山を処理する日々でもあったが、書類の山を片付ける度に少しづつ工事が完了するのを目の当たりにすると、達成感を感じる事ができる。半年もすれば最初期の工事が終わる。その後は業務も落ち着くだろうし、私も訓練に出られるだろう。色々良い報告が出来る月一開催のエルファシル方面軍との合同会議も楽しい時間になりつつあった。

宇宙暦740年 帝国暦431年 2月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地司令部

カーク・ターナー（中将）

「貴方は恋愛カウンセラーとしての才能もあったようね。おかげさまでブルースは何とか再婚に向けて歩みだしたわ。ルシンダは私の秘書でもあってね。娘みたいな存在なの。これで孫が生まれてくれれば、私も気兼ねなく政界を引退できるわ」

「おや、ナタリー代議員はアイドルグループ『730年マフィア』のファンクラブ代表としてご尽力頂けると思っていましたか……でもそうですね。孫育ての方が政界の腹黒達を相手にするより、遥かに建設的で楽しいでしょう。私でもそうしますから強くは言えないのが残念です」

「女性初の財務委員長。代議員ももう何期目かしら？数えるのも億劫な位、腹黒達を相手にしてきたのよ？女性だからと甘く見られて悔し

涙を流したこともあった。もう十分よ。もちろん政界に影響力は残せるでしょうけど、代議員としてより祖母としての時間を大切にしたいの。いけないかしら?」

「そんな事はありませんよ。ただ、ウォーリック会長も職を退くとの事でした。『ハイネセンの嘆き事件』を共に解決した有力な後援者を失うことになります。最高評議会の面々が我々に最大限の配慮をしてくれているのは理解していますが、危機を共に乗り越える以上に信頼が結ばれる事態はありませんからね」

ブルースの母親で、国防委員でもあるナタリー代議員とはお互いに相談に乗る関係だった。ブルースが再婚する様に援護射撃をしたのは、ナタリー代議員への義理立ても大きい。そして国防委員会に所属しながら火中の栗を拾うために一時的に財務委員長になった彼女は、代議員の中でも大きな影響力をもった存在だった。

「そうね。君たちのように優秀で気持ちの良い人材がこっちに來てくれば私のやる気も出るかもしれない。でもね、これ以上となると最高評議会議長を目指す位しか代議員としての目標は無いわ。ターナー君は女性の評議会議長が今のご時世で成立すると思う?」

「大恩ある貴女に対しては、嘘は付きたくない。現状認識の甘い連中から砂糖で作った将来図は聞かされているでしょうしね。結論から言うと、女性の宇宙艦隊司令長官よりは可能性はあるでしょう。限りなくゼロに近いでしょうが……」

「君はそう言うタイプよね。ブルースなら気を使ってもう少しオブラートに包むわ。そうよね。私だって馬鹿じゃない。女性初の財務委員長の次は女性初の最高評議会議長を！って声も決して少なくないわ。でも戦争中はどうしたって社会の中心は男性よ。それに戦死者の数を数字で理解する生活ももう限界なのも事実。私はブルースを通じて君たちを人間として知ってしまった。君たち皆の戦死の報を、もう資料上の戦死者数として受け止められないわ。男性より女性  
は繊細なの」

「ブルースが優しいのも母親譲りだったという訳ですね。ブルースとウォリスが結婚に及び腰なのも彼らが優しすぎるからでしょう? 完

壁な人間などいないのですから、もつと割り切っても良いといつも言っているのですがね」

「意外な人物鑑定ね。確かにブルースは優しい子だけど、君たちの中で優しいとなるとアルフレッド君だと思っていたけど……」

「アルフレッドは確かに優しいですよ。ただ、自分の出来る事を理解して、及ばない事を理解しています。それは他の面々もそうでしょう。私なんて夫業と父親業は年に一か月位しかしていません。でもブルースやウオリスは優し過ぎるから完璧な夫、完璧な父たらんとする。理想通りの結婚生活が出来ないから結婚生活にストレスを感じる。そもそも結婚まで至らないように線引きする」

「そういう考えも確かに成立するわね。あの子は優秀で息子としては完璧だった。もつと甘えてくれればとも思っていたけど、世間的に評価される事は全て優秀だったわね。結婚生活以外はだけど」

「普通の人間は成功したい分野に全力を注いでやつと評価に値する成果を出せるかどうかでしょう？ただ、完璧になれた彼らは、短時間で完璧な夫や父になろうとする。どんなに優秀だったとしても人間関係、特に家族関係の構築には時間が必要です。相手のある事ですからね」

「そうね。家族関係も信頼関係同様、一緒に時間を過ごして思い出を作る事で家族としての絆は作られるものね。その点に関してはルシндаにも伝えておくわ。それで、ウオリス君の方は順調なの？」

「信頼関係を損なわない最低限のルールはプライバシーを勝手に漏らさないことです。既に競争心は十分煽っていますから、更に競争心を刺激するのは愚策だとアドバイスする事で回答とさせていただきます」

「相変わらず隙が無いわね。君ならこつちに来ても成功できるわよ。腹黒な爺どもをぎゃふんと言わせてもらいたいわね。そうなればもつと議会中継の視聴率も上がりそう」

「軍人の次はワイドショーの人気政治家ですか？気乗りしないキャリアプランですね。私の計画ではそう言うのはブルースとかウオリスに任せてビジネス界に戻りたいのですが……」

「あの卒論、読ませてもらったわ。情報部の月次報告フォルダーに紛れ込ませておくなんて、よほど貴方を守りたかったのね。あれを同盟の公式見解にするには強いリーダー一人じゃ無理よ？ブルースを担ぎ出すにしろ『730年マフィア』の中から数人は政界に進出しないと。最高評議会議長。財務委員長、国防委員長、法秩序委員長。この位は押さえないととても話にならないと思う。あの時から君たちとジークマイスター室長はこのために協力していたのね。お姉さん、仲間外れにされたみたいで悲しかったわ」

「そうでしょうか？少なくともアクセス権はお持ちでしたし、ブルースも知っていた事です。激務でお疲れの母上にこれ以上負担はかけたくなかった。私としても友人の想いを無視して告げ口する訳にもいきませんでしたしね。お姉さまの息子君の優しさに免じて、許して頂ければ幸いですね」

「そういう事にしておいてあげるわ。では！また」

そう言うのと赤ワインの入ったグラスを掲げてナタリー代議員は通信を切った。こういう表現は良くないだろうが、ナタリー代議員が男性だったら……。最高評議会議長になれたと思う。表舞台で女性だからと甘く見られるストレスの発散と、隠している爪を見せる相手として俺との会話を楽しんでるんだだろうな。

ただ、最近バスローブ姿なのが気にかかる。クリステインを裏切るつもりはないが、視線に困るんだよな。ナタリー代議員はいわゆる美魔女って奴で、妙な色気がある。

勝手な憶測だが、彼女はブルースが政界に進出するにあたっての補佐役を俺にやらせたんだろう。信頼関係の構築の特効薬のひとつは秘密の共有だ。そして女性が男性を動かすのに効果的なのが素直に頼る事。

「俺はビジネス界へのキャリアを志望しているんだがなあ……」

母子揃って俺のキャリアプランに変更を要求してくるとは。ただ、自分で蒔いた種でもある。政界の動かし方には自信はあるが、国力を伸ばす意味ではビジネス界に進みたい。さて、どうしたものか。カッブに残った紅茶を飲みながら、俺は自分のキャリアプランに想いを馳



せていた。

## 第67話 青年たち

宇宙暦740年 帝国暦431年 7月上旬

シャンタウ星域 惑星フォントノイ 人造湖建設現場

クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー

帝都があるヴァルハラ星系からフレイヤ星系を通過した先にあるシャンタウ星系。その第2惑星である惑星フォントノイが、内務省に入庁した私の最初の任地だ。大学で専攻していた行政学を活かせる、地方行政部に配属された当初は、喜びを感じていた。

ただ、辺境星域の入り口であるシャンタウ星系ですら、インフラ投資は後回しにされ、一次産業位しか根付いていなかった。限られた予算では、現状のインフラ保守が精一杯。

イゼルローン方面への軍の航路上にあり、帝国軍の艦隊が往来する立地なら、駐留基地を作ってもよさそうだが、回廊のあちら側の最前線にある基地を維持する事と、摩耗した艦隊戦力の再整備に軸足が置かれ、ヴァルハラ星系以外の政府直轄領は、糧秣に使用する穀物を細々と生産しているに過ぎなかった。

『気持ちにはわかる。俺だって予算があればもつとこの星系の発展の為に尽くしたいさ。ただ、財務省の連中は油断したらインフラ保守の予算すら削ろうとするんだ。そんな状況で何ができる？逆らって目を付けられるのは構わない。もつと辺境へ左遷されるだけだろう。だが、予算まで削られたら何とか維持されている経済すら破綻しかねないんだ』

任地に到着した翌日に行われた歓迎会の2次会で、勤務中は真面目な課長が強めの酒を煽りだした事にも驚いたが、漏れ出た本音にはもつと驚かされた。フォントノイは地味豊かで水量も豊富、温暖な気候でもあり農業には最適な惑星だった。人造湖や灌漑設備を新設すれば豊かな農地がいくらでも用意できるのに、その多くは手つかずのまま原野として放置されている。到着当初は可能性に見えたその光景が、政府に打ち捨てられた証なのだと数日で実感することになった。

酒の勢いもあつて本音を吐露した上司を含め、先輩の大半が業務時間外や休日にも、住民と一緒にインフラ保守作業を行なっている事にも驚いた。限られた予算だけでは地元企業に赤字覚悟で入札させるしかやりようがなかった為、作業を手伝う事で赤字の穴埋めをしていたのだ。地元企業が倒産すれば、インフラ保守すらおぼつかなくなるだろう。

「あまり使いたくない手だが、職員の犠牲の上に成り立つ現状はいつか限界が来る」

そう判断した私は、ケーフェンヒラー男爵家のコネと、大学の同期達への働き掛けを始めた。

『妹の婚約者だから骨折りは出来たが、何とかするのは今回が最後だ。なんとかこれで収益を出さないと焼け石に水だな。商売相手は軍以外にはないだろう。そちらの航路は門閥貴族領も通過する。彼らは商船に通行税や関税を課しているんだ。政府への物納以外は課税の対象だからな。軍の輸送船に積める物。ビールなんかが良いと思う』

人造湖と灌漑設備を何とか新設できる予算を工面してくれたのは、ケーフェンヒラー男爵家と同じように官僚を代々輩出している男爵家の嫡男だった。彼の妹は私のフィアンセだった。

『リッテンハイム侯爵領の醸造所が設備更新されるんだ。整備すればまだ使用できると思うからきれいに回収してそちらに送れるように手配しよう』

そう言ってくれたのは、帝国最大手の醸造施設メーカーの営業担当になった同期。その他にもビールに向けた品種の小麦とホップの種を、種苗メーカーに進んだ同期が、予算内で最大の生産性を期待できる計画案を、大手ゼネコンの設計課に配属された同期が用意してくれた。地元企業にはそう言った計画案を作成するノウハウすらなかったのだ。

「ケーフェンヒラーの旦那。これで俺達の暮らしも少しは良くなりますかね？次の機会はもしかしたら孫の代かもしれないねえ。でもね、ちゃんとノウハウとして残る様に些細な事も記録に残しているんでさ」

「棟梁、父親のような年齢の貴方にそう呼ばれるのは気が引けるよ。

クリストフさんで構わない。一緒にフォントノイの明日を創る同志なんだから」

この3カ月の出来事を振り返っていた私に地元企業の棟梁が声をかけて来た。当初していた空元氣の笑顔ではなく、明るい表情をしている。これだけでも方々に頼み込んだ甲斐があつたと思えた。

「とんでもねえ。旦那はフォントノイの福の神様でさ。課長さんは何かと俺達の事を気にかけてくれる人でね。業務時間外や休日に作業に参加するなんて言われちゃね。俺達にだって意地があります。とは言えね、従業員たちを食わせるので精いっぱい、先行きが不安だったんでさ。帝都を知っている旦那からすれば些細な事業かもしませんが、小さな一歩でも新しい事業が始まったんです。それだけでも、俺達は希望が持てるんでさ。旦那、本当にありがとうよ」

軍人もかくやと言う体軀の棟梁が嬉し気に肩をバシバシと叩いてくる。正直痛かったが、彼なりの喜びの表現なのだと思えば不思議と耐えられた。周囲で作業している皆も、こちらに嬉し気な表情で視線を向けている。

「計画までもう少しだ。今日の作業を終えてしまおう！」

照れ隠し半分で私は声を上げた。このまま計画通りに作業が進めば、小麦の時期に間に合う。収穫できるのは来年の夏、それまでに醸造所を整えれば数カ月でビールを販売できるだろう。

「醸造の予行練習も必要だろうな。政府の穀物貯蔵庫から一時的に供出して頂くことは出来ないだろうか？」

そんな事を考えながら皆と同じように作業を進める。ペンとPCに慣れていた私の手には豆が出来ていたし、筋肉痛で節々が痛かった。でも前向きな計画に携われるこの時間は、不思議と楽しい時間だった。軍部にはケーフェンヒラー男爵家としての伝手は無かった。

ただ、軍務尚書派は政府系が、統帥本部長派は門閥貴族が後押ししている事は知っていたので、軍務尚書派とされる艦隊司令の皆さまや、平民出身のコーゼル提督、軍務省の高級官僚に状況の説明と協力を願う手紙を、小麦が植え終わった頃合いから書き始めた。

軍務尚書派が、コーゼル提督や人事局長のミヒヤールゼン男爵を取

り込む意味でフロントノイのビールを軍で正式採用する回答が得られるのはビールの仕込みを始めた頃合いだった。もちろん、この頃の私はそんな事情を知るはずもない。ある事情で志願してから一時お世話になる同名の上官から、事の経緯を教えて頂くことになる。

宇宙暦740年 帝国暦431年 7月上旬

タツシリ星系 惑星バラス

アレクサンドル・ビュコック

「アレク、折角バラスも発展して勤め先が増えて来たのよ？兄貴たちも工場で働き始めてる。そりゃうちは7人兄弟であんたが食い扶持を気にするのも分かるけど、志願する必要なんてないじゃない」

「それも分かっている。でもさ、姉ちゃんがデニスさんを捕まえたし、兄貴たちは工場で働いてる。うちは親父も従軍していないし、徴兵リストの順位は高いじゃないか！俺が志願したら兄貴たちを含めて徴兵順位が下がるんだ。それだけでも志願する意味はあるよ」

「アレク、お前さんはまだ14歳だろ？若いうちからそんな苦労を抱え込んじゃいけねえよ。いざとなりや捕虜上がりの俺が志願するさ。なあに。これでも戦艦の航海士だったんだ。親父さんにも良くしてもらったし、子供も2人も恵まれた。こういうのは年齢順って昔から決まっているんだ。皆に心配かけちゃいけねえよ」

「デニスさんこそ分かってないよ。進出してきた工場に電力を供給している仮設発電所は帝国艦だろ？管理保守できるのはデニスさんを含めて数人じゃないか。デニスさんを志願させる位なら兄貴たちが先に志願するよ」

兄貴たちの状況を考えると、志願するなら俺しか候補がいなくて事に気づいたのは新年のパーティーを皆でした時だ。兄貴たちも工場で出会った恋人を連れてきていた。二人には勿体ない位きれいな人たちだったし、結婚早々志願なんて家族としてさせられない。

「そんなに心配なら、一緒にメンテナンスに行くか？助手としてなら多少は報酬も出るだろうし、アレクは頭も悪くない。帝国語の読み位ならすぐに覚えられるだろう？」

「そういう事じゃないよ。とにかくビュコック家の男として、デニスさんを志願させる訳にはいかないんだ」

姉ちゃんもデニスさんも困った顔をしているが、デニスさんと結婚するまで姉ちゃんはすごく苦勞をしていた。7人兄弟の長女だった事もあるけど、夜はいつも家計簿を見ながらため息をついていた。言うど怒るから言わないけど、婚期が遅れたのも兄弟の事を優先してきたからだと思う。

それに気づいたのは、フライングボール部に入って新しい靴を強請った時だ。渋々姉ちゃんは靴を買ってくれたけど、よくよく考えたら姉ちゃんは自分の靴なんて何年も買ってなかった。兄貴たちはうすうす気づいていて、

『必要なものがあつたら先に俺達に相談しろ』

って後から言われた。先に言えよ。そんなんだから見た目は良いけど中身が子供とか言われるんだ。それに俺の下は2人とも妹だ。俺が志願するのが一番自然だと思う。それにデニスさんと結婚してから、収入が増えた事もあつて姉ちゃんは笑顔でいる事が増えた。やつと笑顔になれたのに、デニスさんを志願させたらどれだけ悲しむか……。

「つたく、どうして俺が目をかけた子供はこうも生き急ぐかねえ。俺が14歳の時は、夕飯のおかずが気になっていたもんだが……」

そうぼやきながら俺の頭を撫でるデニスさん。航海士で重機も使えて凶面も引ける俺の義兄は、バラスの発展にも必要な人だ。さすがに俺が子供でもそれ位は理解していた。

「親父さん達とも相談しないとだが、どっちにしても15歳になったら早期修了志願者の対象なんだろ？勝手に志願しちまう勢いだしなあ……」

「ちよつとあんた？アレクはまだ子供よ？」

「分かってるよ。アレクも親父さん達に相談するのは気が引けたから先に俺達に相談したんだろ？とりあえず決意は分かった。ただな、一度志願しちまえば当分バラスには帰ってこれないぞ？俺も入隊してから一度も故郷に帰れなかった。同盟軍なら帝国より福利厚生はま

ともだろうが、それでも頻繁に帰省は無理だろ？」

俺の父さんたちの世代は、宇宙艦隊はハイネセンに集中していた。志願したら2度と帰ってこないなんてのが普通だった。今ではエルファシルとウルヴァシーにも大規模な基地がある。それに星系警備隊に配属される可能性もゼロじゃない。そんなに世の中甘くないとも思っているけど……。

「いいか？家族を想う気持ちは嬉しいし、アレクの決意は俺も誇りに思う。だから15歳になるまでに冷静に自分の気持ちを確認してみろ。もうバラスに帰れない。それでも後悔しないか？つてな。一応、細いつながりだが、同盟軍にも伝手があるんだ。俺もそつちを当たってみるからよ。その代わり勝手な事はしないと俺達に約束するんだ」「分かった。勝手な事はしないし、ちゃんと冷静に考えてみるよ」

姉ちゃんはまだ収まらない様子だったが、デニスさんが『一度冷静になる時間を取ろう』と宥めてくれた。そりゃバラスには愛着もあるし、どんどん良くなっていくって実感もある。うちだけじゃない。知り合い皆の笑顔が増えた。

だからこそ良くなりつつある皆の生活を守らなきゃ。最前線からは遠くても同盟と帝国は戦争をしている。悪徳貴族が攻め込んで来たら、バラスに何をされるか分かったものじゃない。家族の笑顔を守るためにも、俺は志願したいんだ。

## 第68話 名門の暴走

宇宙暦740年 帝国暦431年 10月上旬

帝国軍軍務省 尚書室

ツイーテン元帥（宇宙艦隊司令長官）

「このままで本当の良いのか？無論、卿の決めた事なら私はとやかく言うつもりはない」

「分かつている。だが嫡男を取り込まれてはな。兄と違って当主としての教育を幼少からしてこなかったツケをこんな形で払う事になるとは。卿にも不本意な結果になってしまった。すまない」

ケルトリングとは長い付き合いだ。伯爵家の庶子でお情けで男爵号を得た私と違い、伯爵家の嫡男として士官学校の同期となつて以来、ずっと輝かしい存在として私の目標であり続けた。何度も叛徒どもとの戦地でくつわを並べた仲でもある。

私が宇宙艦隊司令長官になれたのは、半分はこいつのおかげでもある。コルネリアス帝の大親征以来、叛徒たちとの戦いで大勝を飾れていない軍部を束ねる軍務尚書としては、個人的にも信頼できる司令長官が欲しかったのだ。

その気持ちも理解できたし、何より久しぶりの大勝を飾れば司令長官としてこれ以上の名誉は無い。そう思つて引き受けたのだが、残念なことに私は長年の僚友の役に立っているとは言えなかった。

「新年の拝謁の儀の際に、カストロプ公の口利きでローエングラム伯が上奏をするそうだ。陛下の裁可を得ようというのだろう。そうなればもう止められぬ。参加予定の艦隊の中には練度も装備更新も厳しい艦隊が含まれている。許可を出す条件としてその点を指摘して一年は準備させる。再来年早々に出征だな」

「統帥本部総長も何を血迷つたのか。『名ばかり少将』に煮え湯を飲まされたのは奴も同じはず。派閥争いに門閥貴族を引き込めば、今度は奴らの子弟が軍をおもちゃにするだけではないか……」

「それが分からぬのだ。彼はもともと軍官僚として栄達してきた。最前線勤務の経験はない。悪い意味で戦死者を書面上の数字として割



り切っているのだ。実際作戦自体も後手後手に回っていて功績がないのは統帥本部も同様。このまま卿と私が功績を立てればお払い箱になるとでも思ったのであろうよ」

「私が統帥本部総長への昇格を希望すると判断するとは……。今更の話だが、あやつとは個人的な会話をした覚えがない。お互いに相手の事を理解しておらんのだから、そうなくても仕方ないのか」

愚かな事だ。作戦立案を主管し、犠牲を押さえて勝利を演出すべき統帥本部の主が、自分の保身のために門閥貴族を引き込み、宇宙艦隊に派閥争いを引き起こした。むしろ私が出処進退を誤ったのだろうか？

フオルセテイ星域の会戦の敗戦処理の際、戦闘中に行方不明となったジークマイスターにその責任を押し付けた。家族がいなかった事、男爵株は実家に戻せばどこからも文句は出なかった。戦闘詳報を見れば敗戦の責任は『名ばかり少将』達にあった。

だが、その事実を隠す代わりに黙らせたのだ。それ以降、正規艦隊司令だったミヒャールゼンは宇宙艦隊でも一線を引くようになり、コーゼルにその地位を譲って軍務省へ転出していった。憎らしい位の引き際だ。

「それで？さすがに嫡男を当てにならない連中に預ける訳にも行かない。コーゼルに援護を頼むか？何かと統帥本部総長派は目の敵にしているが実力は確かだ。勝利は難しくても連れ帰る事は出来そうだが？」

「ツイーテンよ。確かにコーゼルは当てになる男だ。奴が貴族出身ならと何度考えたか……。だがな、今更自分の家の事を優先して筋が通るか？『名ばかり少将』達を前線で使い潰す為に何百万の将兵を送り出した。敗戦の責任は私にもある。我が子可愛さでそんな人事をすれば、抛って立つところがなくなる」

「我慢するな。我々は確かに軍人だ。だが軍人である前に貴族であり親でもある。貴族として血を紡ぐのはなにも恥ずかしい事ではない。むしろ当然の事ではないか」

まさかケルトリングがここまで思いつめているとは。軍務尚書は

軍部系以外の貴族と接する機会も多い。次男の敵対派閥への参加、平民出身のコーゼルの正規艦隊司令就任。多少は嫌味を言われているとは思っていたが……。

「もう決めた事だ。敗戦の責任は当然取らせる。カストロプは無理だろうがローエンングラム伯はもちろん、いくつかの門閥貴族も敗戦を理由に取り潰す。政府系との密約だ。門閥貴族どもに軍に関わる危険性を一罰百戒をもって示す。そうしなければ次の出征でもなにかと横やりが入るだろう」

「ケルトリング伯爵家はどうするのだ！なぜ卿がそこまで犠牲を払う。つまらぬ名誉にこだわるな。今からでも遅くはない。次期伯爵は地下室にでも監禁するのだ。身命をかけて、私が再戦を指揮して勝利を掴んでみせる。頼む！」

「もう決めた事だ。それにこんなことを話せるのは卿だけだ。ツイーテン。卿を信頼したからこそ話したのだ。私の信頼を裏切らないで欲しい」

そこまで言われては何も返すことは出来ない。私のいないところで最後の息子を切り捨てる修羅の覚悟を決めてしまっていた以上、私には僚友として、共に修羅の道歩く事しか出来なかった。

「コーゼルは卿が指揮する再戦の場に参加してもらおう。兵たちの信頼も厚い男だ。卿なら使いこなせよう。それとシュタイエルマルクにも正規艦隊を任せる。内々に聞いておろう？叛徒たちと戦う前に同僚と争うような状況では任務を果たせない、勇退希望が出ている」

「シュタインホフのことか？再考する様に促したが、あやつも貴族としての付き合いがある。ケルトリング伯爵家とローエンングラム伯爵家の間に挟まれて悩んでいたようだが……。卿が受理したなら私から言う事はない。それにしてもシュタイエルマルクか……。」

「何か問題があるか？コーゼル艦隊旗下で実力も申し分ないと思うが……。」

「いや、妙な因果を感じたのだ。貴族出身ながら実力主義による任用を主張するなど、軍組織を理解しておらん。軍人としても戦術家としても一流だ。コーゼルが可愛がるのも理解できる。だがな、軍上層部

は政府ともつながるのだ。軍高級官僚とは言え、爵位が無ければ交渉は進まない。そんな事も分らんのかと、実力があるだけに青さを忌々しく思っていたのでな」

「幸か不幸か、少なくとも宇宙艦隊司令部本部では彼が提唱する実主義とやらを採用するしかなくなる。統帥本部総長派の5個艦隊は捻りつぶされる。そして再戦の場でも軽傷ではすむまい」

ファイアザード会戦の戦闘詳報はあれから何度も確認した。戦術構想の大胆さもそうだが、戦力投入のタイミングが神がかった。確かにケルトリングの言う通りだ。余所見をしていて勝てる相手ではない。それから少しでも肩の力を抜いてもらえればと雑談に切り替えたが、尚書室を後にする際に見た表情にはやはり思いつめた様子を感じた。それが事実なのか？それとも私のケルトリングへの印象が変わってしまったからなのか？その判断すらつかなかった。

宇宙暦740年 帝国暦431年 12月上旬

惑星オーデイン ミヒヤールゼン男爵邸

クリストフ・フォン・ミヒヤールゼン

「計算通り動いてくれました。宮内省に事前に提出された上奏文の写しです。ご確認ください」

「良くやってくれた。軍務尚書の横やりで訓練と装備更新の猶予期間は用意されるが、出征の先手を統帥本部総長派に取らせることが出来た。卿の功績は大きい」

俺が評すると満足げに同志は頷いた。上奏文の写しを両手で持ち、確認を始める。要約すると帝室の為に身命を賭して叛徒たちを討滅するという内容だ。書いた事が事実になるなら、誰もが英雄になるだろう。どうせなら自宅の書齋で夢を文字に起こし浸っていればよかったのだ。本人たちも、巻き添えになる兵士たちも、不幸にならずに済んだ。

上奏文に名を連ねた門閥貴族達も、敗戦となればただでは済まない。何しろ身命を賭したのだ。出征が失敗すれば私兵を率いてでも勝利を掴まなければ、陛下に嘘をついた事になる。さぞかし楽しい事

態になるだろう。

「宮廷工作の方は如何なさいますか？」

「どうせなら訓練や装備更新で中抜きをさせたい所だな。ケルトリング中將は流石に無理だろうが……」

「ローエングラムは既に宇宙艦隊司令長官になったかのように振舞っておりませぬ。付け入るスキはあると思いますが、何かしらネタが必要です」

「分かった。少し時間が欲しい。どうせならガセじゃなく、事実を織り込みたい。高等弁務官府経由でフェザーンから叛徒たちの情報は届くのだ。準備をケチって安い仕掛けをして失敗しては元も子もない」

参加予定は

- ・ローエングラム大將（伯爵家当主）
- ・ケルトリング中將（伯爵家嫡男）
- ・エーレンベルク中將（侯爵家3男）
- ・クラ―ゼン中將（伯爵家次男）
- ・フォーゲル中將（伯爵家次男）

の5個正規艦隊に独立艦隊が数個。8万隻を超える戦力を動員するつもりようだ。愚かな事だ。数だけをそろえれば勝てるなら、コルネリアス帝の大親征は成功していたではないか。

「大軍で押し出す様ですが、願ひ通り勝利を掴めるのでしょうか？」  
「無理だな。もし連中が本気で戦訓を学び、叛徒どもを分析していたならアムリツツア星系に補給基地を作る事から始めたはずだ。オーデインから最前線までは遠すぎる。回廊出口まで40日、敵と遭遇するにはさらに進軍するから2カ月近い時間がかかる。」

そんな長期間、精神を張り詰めていられるか？ タンクベッドで肉体的な疲労は確かに何とか出来る。だが精神的な摩耗は避けられん。イゼルローン回廊もな。単艦で通るならまだしも、艦隊で通過するには難所なのだ。難所を通過し、疲労がたまった先で交戦。勝利したとしてもまた2カ月の帰路が待っている。おまけに叛徒どもの拠点が近い。増援もくれば破った戦力も再戦力化して襲い掛かってくるだ

ろう。底なし沼の様な物だ。勝ち目はほぼない」

「それを聞いて安心しました。既に勝ったかのように振舞う有様を見て不快に思っておりましたので。あの顔が絶望に代わると思うと、溜飲が下がる思いです」

表情を一変させて嬉し気にグラスを掲げる同志にならってワイングラスを傾ける。今夜は同盟軍の勝利を願って419年ものの白を用意した。丁度フォルセイ会戦があり、ジークマイスター提督が亡命を成功させた年のものだ。

あの戦闘詳報もひどいものだった。思えば司令長官にはあの時『名ばかり少将』達を排除する機会があったのだ。正規艦隊の分艦隊を預かりながら命令を無視して突撃し、いいように撃滅されたボンボンども。敗戦の責任など、軍人が見れば誰でもはつきりしていた。あの時妥協したからばらまかれた先帝の庶子たちを受け入れざるを得なくなり、帝国軍の大きな足枷となった。

「419年ものですか。まだ若い気もしますが、不思議と美味しく感じます。我々にとつても、この年は事の多い年でした。あちら側で元気であらうでしょうか？」

「無論だ。今も我々の本懐の為に叛徒たちに働きかけておられるはずだ。後2回事が済めば、本懐にだいぶ近づくはずだ。その時は秘蔵の398年ものを同志たちと楽しみたいものよ」

「398年ものですか。帝国の未来が明るいものになると予感された年ですな。そんな日が来ることを私も楽しみにしております」

もう一度ワイングラスで乾杯して、ワインを注ぐ。398年もの赤ワインはジークマイスター提督からの預かりものだ。彼はこの企みを始めた時、本懐がなった際にはこのワインで祝うつもりだった。

残念ながら前線に持ち込むにはあまりにも高価なワインだ。些細な事で疑念を抱かれる可能性をなくすために全て置いて行かれた。帝国暦398年。亡命帝と言われたマンフレート2世が即位された年。爵位だけでなく実力が評価される帝国が始まりかけた年でもある。祝うのにこれ以上相応しいワインは無いだろう。

## 第69話 謀略

宇宙暦741年 帝国暦432年 3月上旬

バーラト星系 惑星シュリナーガル

ブルース・アッシュビー

「ブルースさん、お茶を入れてきました」

「ルシンダ、まだゆっくりしていても良いんだぞ？」

「なら、お茶を飲みながら、もう少しベッドの中でゆっくりしましょ」

俺がマグカップを受け取ると、彼女は自分のカップをサイドボードに置き、しなだれかって来る。俺の胸元に彼女の頬が触れ、人肌の温かさ、髪から女性用のリンスの香りがかすかに香る。左腕で彼女を抱き寄せ、指先で髪を撫でる。そうすると安心するのか、さらに身体を預けてくる。

昼頃までこんな時間を過ごし、ランチ前に着替えて、一角にあるレストランでランチをし、様々なアクティビティを楽しむ。ゴルフや乗馬、フィッシング、陶芸、変った所では自分たちで燻製を作ったり、景勝地でもあるこの一帯をトレッキングするのもいい。

デイナーをルシンダと二人で、時には同じようにこの施設にいるウォレス夫婦と4人で楽しみ、ベッドでの営みを楽しんでから程よい疲労感と、人肌の温かさに包まれて眠る。ウォーリック商会が運営するリゾート施設に移動してからそんな生活を始めて2週間は経過していた。

眠ってしまった彼女の髪を撫でながら、この休暇の始まりを思い返した。事の始まりはジークマイスター室長の分室が、帝国の大規模攻勢をキャッチした事に始まる。それならば万全の準備をして撃破するのみだと考えていたが、帝国軍の油断を誘うために謀略を仕掛けた。その対象に選ばれたのが、俺とウォリスだった。

俺の場合は、母親であるナタリー代議員が4月の改選に出馬しない方針を固めていた。そしてウォリスも後援者とみなされている奴の爺様が内々に引退を決めている。これに合わせて、適度に姿を晒しながらハイネセンの軍病院の最上階にある個室に形式的に入院し、変装

して入室してきた作業員と入れ替わる形で俺達も変装し、そのまま宇宙港へ向かい、軍のシャトルで惑星シユリナーガルへ向かった。

そして俺は婚約間近だったルシンダと、ウォリスは長年愛人関係だったカタリーナと合流した。施設内にあるチャペルで簡単な式まで上げさせる念の入れようには正直悪意を感じたが、大攻勢に近い以上、こんな機会は当分ないだろう。カークの言葉もあり、俺とウォリスは婚姻届にサインをする事にした。

秘匿体制も万全だった。一か月前から改装を理由に休業する旨を告知し、敷地内の各所に情報部とおぼしき人員が警戒に当たる。軍人の俺達は流石に気づいたが、女性陣はそうでもないようで、この休暇に変な緊張感を持ち込まずに済んでいる。アデレードとの生活は衝突が多かった。前線勤務の間に無意識で気が張っていたのか？甘く穏やかな時間を悪くないものだと思えていたのか？

「これも室長の仕込みかな？まったく食えない人だ」

マグカップをサイドボードに置いて、タブレットを起動する。1週間前からアッシュビー・ウォリック両提督の重病説が流れ、軍病院付近からの生中継がワイドショーで始まっていた。今日の話題はウォリック商會を長年率いて来たグレッック會長の引退だ。昨日のIRでウォリック商會から正式に広報されたが、ウォリスの重病説と絡め、今朝の経済誌の一面を飾っている。

週明けには母さんの代議員引退が発表される。それと同時に、最高評議會と国防委員會の確執論や、俺達への陰謀論などが流れる予定だ。ここまで大々的に話題になれば、フェザーン経由で帝国にも流れるだろう。

タブレットを閉じ、ルシンダの寢息に引きずられる様に俺も目を閉じた。少なくとも3か月はこの生活が続く。その間は身を隠すのが俺とウォリスの任務だ。そう言い訳をしながら、俺は夢の世界へ旅立った。

「…………… スさん…………… ルースさん」

「ん……………」

「ブルースさん、そろそろ起きてください。もうお昼です」

「うーん。少し寝過ぎてしまったか……」

上半身を起こしながら頭を覚醒するためにこめかみを左手で揉む。喉が少し乾いていたから、目を閉じたまま右手をサイドボードに伸ばしてマグカップを手に取り、残っていた紅茶を飲み干す。

「お茶を入れ直してきます。カタリーナさんから、午後に燻製を作るのでご一緒しないかとの事でした」

そう言いながら、備え付けのキッチンに向かうルシンダ。後ろ姿を見る限り、彼女は身支度を終えているようだ。ここにきてから、ある意味お互い新婚旅行の様な物だから、男性陣ではなく、女性陣同士で連絡しあうようになった。お互い相手の妻のあられもない姿を見るのは、画面越しでも気まずいからな。

「そうか。燻製づくりは意外に楽しいからな。出来れば渓流釣りの釣果も一緒に燻製にしたいが、さすがにこの時間からでは難しいか」

「いいじゃないですか。まだまだ時間はあるんですから。釣果を燻製にするのは次の機会にしましょう」

そう言いながら新しいマグカップを手渡すと、ルシンダはタブレットを起動して、カタリーナと連絡を取り始めた。出来立ての燻製は自分たちで作った事もあってとても美味だ。それに料理の素人でも作業自体はそこまで難しくくない。なんだかんだと話しながら一緒に作業する。不格好なものが出来てもご愛敬だ。逆にそう言う物の方がうまく感じるんだから不思議でもある。

燻す作業に入れば、傍らで焚火を始め、ワインやウイスキーを楽しむながらの談笑タイムだ。一角に作られている農場産の様々なチーズを肴に、燻製の仕上がりをまつ。まだ早春という事もあり、風は肌寒いが、アルコールの入った身体にはそれも心地よい。

俺はそこまで話題が豊富な男じゃないが、政治家の秘書官をしていただけであつてルシンダは話題が豊富だ。ウオリスも同様だから2人でも4人でも退屈する事無く過ごせている。軍事一辺倒だった俺の頭に、それ以外の知識が、聞きかじりだが入るのも新鮮だった。

「家族ぐるみの付き合いをするときは燻製も悪くないかもな。そのままバーベキューにもできるし、そういう時間も楽しそうだ」



任務を押し付けてしまった僚友達を思い出してそんな事を考えた。子供がいなかった事もあって、アデレードをそう言う場に連れて行くのは気が引けた。でも3か月もこんな生活を続けければ、新しい命を授かるだろう。急に始まった2回目の新婚生活は、一回目と違って色々な事を前向きに捉えられていた。

別にアデレードに非があつた訳じゃなく、ルシンダが凄いわけでもない。きつと俺の考えた方が少し変わったんだろう。そんな事を考えながらテキパキと身支度を始める。新婚とは言え、女性を待たせると厄介な事になるのは変わらない。折角の穏やかな時間を詰まらないう事で騒がすのは嫌だからな。決して飼いならされたわけじゃない。「ブルースさん参りましょう」

そう言いながら腕を組んでくる彼女を、自然と愛おしく思える自分がいた。

宇宙暦741年 帝国暦432年 3月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

ジョン・ドリンカー・コープ（少将）

「急な話で申し訳ないが、ジョンにはエルファシルとウルヴァシーの駐留艦隊の訓練の取り仕切りを頼む」

「それは構わないさ。もともとウルヴァシーでもそつちを担当していたんだ。それだけで大丈夫か？ブルースとウオリス達の仕事も引き受けているんだろ？」

「そうだな。ならメンテナンス艦の運用の最終確認も頼めるか？大型輸送艦にユニットを取り付ける形だから量産体制にはすぐ入れるんだ。なんとか大規模攻勢の前にまとまった数を用意したい」

「わかった。運用確認で良いんだな？仕様書は読み込んでいるから任せしてくれ」

そう応じると、カークは嬉しそうに『これで一息つける』と本音をこぼすと、紅茶をうまそうに飲み始めた。俺はどちらも好きだが、今回はブルースが用意したというコーヒーを飲んでいる。紅茶の香りも好きだが、バーラト系原理派だったコープ家はコーヒー党だった。

「基地も短期間でだいぶ増設が進んだな。ウルヴァシーの方もファンが着々と事業を進めているが、まだまだ始まったばかりだからな」

「少なくとも今回とその次、2回は大規模な攻勢が予想されるからな。最悪連戦もあり得る。物資とメンテナンス部品は抱え込んでおいて損はないだろ？最も保管倉庫の多くは民間規格と統一したんだ。それもわざと基地の敷地のはずれに建設した。フェンスの位置を変えれば、民間向けの倉庫に早変わりするわけだ」

「経済を意識する辺りは変らずだな。ただ、指名を受けた時は嬉しかったが、意外な気もしたな。幼馴染でもあるからフレデリックかヴィットリオを指名すると思っていたが……」

「意外だったか？ファン。フレデリック、ヴィットリオ……。何か気づかないか？」

意味深な言葉を投げかけてながら紅茶を飲むカーク。司令官のファンは手堅い守勢型。フレデリックは攻勢一辺倒、ヴィットリオもどちらかと言うと攻勢寄りだ。それに比べて俺は攻勢もできるが守勢もとれる万能型と自負している。そうか、エルファシルの部隊は金床、ウルヴァシーの部隊は戦槌を担当させるつもりなのだな。メンテナンス艦をまとまった数用意したいのもその為か。

「まあ、それだけじゃない。軍政でもバランス型のなんでも屋に来てもらいたかったのも事実だ。基地増設関連は3軍曹殿たちのお陰で何とかなるが、艦隊の練度、メンテナンス艦の最終確認、ウルヴァシーも含めた訓練進捗と哨戒スケジュールの作成・確認。優先順位が高いタスクが目白押しだからな」

「なら精一杯、期待に応えられるように頑張るか。一応手土産として帝国亭のレアチーズケーキを差し入れておいた。俺も権力者に贈り物をする重要性は理解している」

重役の秘書に嫌われたら、民間じゃアポも取れなくなる。カークたちが重用している秘書官たちがそういう恣意的な事をするとは思えないが、新参者には分からない事も多い。それを積極的に補ってもらえるなら、多少の贈り物はむしろ安いものだ。

「それでウルヴァシーの方はどうだ？適度に噂は広がっているか？」

「ああ。一応フレデリックが旗振り役になって士気の低下に対応しているが、ブルースとウオリスの重病説、最高評議会との確執論は広まっているな。フェザン商船の乗組員たちにも漏れているはずだ」

「苦労している甲斐はあったか。もつともあいつらはハネムーンを満喫中だ。3か月もあれば子供も授かるだろう。これでグレッック会長とナタリー代議員に少しは恩返しができた」

ホツとした様子のカークに、俺も苦笑しながらコーヒーを楽しむ。

『ハインセンの嘆き事件』の際は、事態の收拾にかなり尽力して頂いたのがその2人だ。恩人たちが気に病んでいる問題の解決に、一肌脱ぐのも悪くない。帝国に対しての今回の謀略を主導したのはジークマイスター室長だろうが、潜伏する期間をそのままハネムーンにしたのは、おそらくカークだろう。

「それじゃあ、既婚者の我々は、新婚者の為にも任務に戻るとするか？」

「いや、もう少し雑談して行ってくれ。うちはともかく第2と第5は司令官依存が強いんだ。指示待ち傾向が出ているから、軍曹たちに頼んでケツを叩かせてる。俺があそこに戻ると指示を貰いたがるからな」

エルファシル方面軍を暫定的に取りまとめる立場になったターナーは、大会議室のひとつを改修して、3つの艦隊司令部合同のオフィスを作った。確かに俺が挨拶に訪れた時も、指示待ちの列ができていたな。

「あいつらは運もあるからそういう事は今までなかった。でも司令官が指示を出せない状況もあり得るんだ。少しは主体性を持たせないとな。アルフレッドに視察をさせているのもその為だ。代わりの依存先を見つけられても困るしな」

「それはまた手厳しいことで……」

「そうか？指示が大枠だけで悩んでる分艦隊司令達は、新任が訓練を統括してくれるだけで大喜びだ。イニシアティブを取りやすいだろうし、俺は同期の為に心を鬼にしたんだが……」

そう言いながらティーカップを掲げるカーク。俺もコーヒーの

入ったカップを掲げる。お互い苦笑しながらカップの中身を楽しんだ。その後は子供の話などを小一時間してから、第11艦隊に割り当てられたオフィスに戻る。主体性が……。うちの艦隊も少し気を付ける必要があるかもしれない。

## 第70話 英雄の従卒

宇宙暦741年 帝国暦432年 5月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

アレクサンドル・ビュコック（二等兵）

『ピピピッ。ピピピッ。』

「うーん」

ベッドボードに置いた目覚まし時計に手を伸ばし、アラーム音を止める。暖かな布団に包まれていると離れがたい誘惑に駆られるが、そうも言っていない。布団を跳ね飛ばすと、早朝なこともあり肌寒い空気に包まれる。その刺激を力に変えて眠気冷めやらぬ身体をベッドから引き起こし、寝ぼけながら洗面所へ向かう。冷水に一瞬気後れするが、覚悟を決めてジャバジャバと顔を洗う。何とか今日も眠気を追い払えた。

そのままキッチンに向かい、電気ケトルのスイッチを入れる。就寝前に洗っておいたマグカップを水きりラックから取る。第13艦隊のロゴ入りのカップは、実はお気に入りでもある。一緒にシロン産の紅茶が入った缶を持ってベッドサイドへ。乱れた布団をきれいに整え、パジャマを脱いでトレーニング用の軍服に着替える。こつちにも所属を明確にする意味で第13艦隊のワッペンが縫い付けられている。着替え終わり、パジャマをたたみ終えた辺りでケトルのスイッチが切れ、お湯が沸く。茶漉しをカップに乗せ、茶葉を小さじ2杯入れてお湯を注ぐ。1Rの広いとは言えない割り当てられた個室に、紅茶の良い香りが広がる。よし、今日も一日が始まった。そんな気がするタイミングだ。

香りを楽しみながら紅茶を飲み終わり、シンクで後始末したら出発だ。玄関脇に置いてある時計が6時を示している。ドアを開けると早朝の空気が出迎えてくるが、もう大丈夫。そのまま若年者向けの寮を後にして、司令部の方へ向かう。艦隊司令部の玄関口に近づくにつれ、警備隊の面々や艦隊司令部の皆さんが集まっているのが目に入る。もちろん、俺が従卒としてお仕えするターナー提督のオレンジ頭

も目に入った。自然と駆け足になる。

「おう！アレク。今日も張り切っているな」

気が付いた提督が挨拶をしてくれる。慌てて駆け寄り敬礼するが『勤務時間じゃないんだから堅くなるな』といつも通り肩を優しく叩かれた。提督の言う通り今は勤務時間じゃない。ただ、事務作業や他部署との折衝が多い提督は、このタイミングで司令部の周りをランニングされる。当初は個人的に仲が良い基地警備隊や陸戦隊の面々が警備を兼ねて参加していたらしいが、いつの間にか艦隊司令部の面々も参加するようになった。

『まだ睡眠がたっぷり必要な年頃だろ？無理しなくていいぞ？』

参加を提督に伝えた時はそう言われたけど、デニスさんの口添えで提督付きの従卒になれたんだ。捕虜上がりの紹介じゃこんなもんだなんて、他の部署に思われる訳にもいかない。それに提督は辺境出身で俺より若い時から航海士として商船で働いていた。そんな身の上から士官学校に入って栄達を重ねた本物の英雄。辺境出身者の憧れの人物の傍にいられるんだから早起きも苦にならなかった。

「そろそろ始めよう。あくまで自分たちのペースでな」

ストレッチを終えた面々からランニングを始める。司令部の周り是一周2キロ前後。7時半までランニングをして、シャワーを浴びて軍服に着替える。そして食堂で朝食を食べたら勤務開始だ。提督を始め司令部の面々は軍人らしく締まった身体付きをしている。警備隊や陸戦隊の面々はドラマでも見た事が無い位筋骨隆々としている。親しくさせてもらっているけど、怒らせないでおこうと内心思った位だ。

「アレク君、司令の予定は会議が詰まっているから、今日は私のサポートに回って頂戴。午後から新兵訓練の日ね？じゃあ、この書類チェックをお願いします」

「了解です。コナー曹長」

曹長に敬礼して書類を貰い、自分のデスクで確認を始める。曹長は提督の秘書官で、命令系統でいうと俺の上官になる。姉ちゃんよりももう少し年上。40歳はいかないと思うけど、提督に小声で『曹長に

年齢の事は聞くなよ』ってアドバイスされたから聞かないように心している。

ちなみにこの曹長というキーワードには、コナー曹長だけじゃなく、第2艦隊付きのアビー曹長と第5艦隊付きのエスピノ曹長も含まれている。この基地がまだ駐屯地だった頃から事務部門を担当していて、実務のほとんどはこの3人を經由するんだ。一度適当な書類を出した陸戦隊の佐官が、曹長たちに詰められてタジタジになっていた。階級以外にも逆らってはいけない物があるって今更ながら学んだよ。

書類自体はそこまで難しい内容じゃない。二等兵が重要機密に触られる訳もないからね。俺が受け持つのは主に補給申請だ。本当は第13艦隊の分だけで良いんだけど、アツシユビー提督とウォーリック提督が病気療養に入られた影響で3つの艦隊司令部をターナー提督が監督しているんだ。重要度は低いとは言え、新入りにまで書類仕事が回ってくるのはそんな事情もある。

「曹長、完了しました。誤差の範囲から逸脱した物をチェックしておきましたのでご確認ください」

「ありがとう。そろそろ良い時間ね。午後からは新兵訓練なんだから少し早いけどランチに行っちゃってよいわよ。お疲れ様」

補給申請の内容を確認して、前回の補給内容と照らし合わせる。訓練内容や哨戒報告から大体の適正値が割り出されるので、それと比較して過不足ないか？を確認するのが俺の仕事だ。初めは名誉ある同盟軍人にそんな事をする人がいるのか？とも思ったけど、ハイネセンを除けばこの第3駐留基地は同盟軍最大の基地なんだ。前線も近いし、物資の消費量は膨大だ。帝国の大攻勢に備えて備蓄も増やしているし、その分、ごまかそうと思えばごまかせるらしい。

コナー曹長は言葉を濁したけど、提督を始め、730年マファイアの面々はそれこそごぼう抜きで昇進された。アツシユビー提督なんて29歳で大将だ。これってダゴン星域会戦のリン・パオ、ユースフ・トパウル両元帥より昇進が早い。悲しい事に人の成功を喜べない人種は一定数存在する。ごぼう抜きされた提督たちへの腹いせで、足

を引つ張ろうとする人もいるらしい。実際、横流しが発覚したら監督責任が問われるのも事実だ。

食堂で食券を買い、列に並ぶ。昼時が一番込むけど、時間をずらす人も多いから食堂では既にたくさん軍人がもりもりとランチを掻き込んでいる。

「あら、アレク。今日は早めなのね。内緒で大盛にしてあげるよ」

顔なじみになった食堂のおばちゃんが嬉しそうに山盛りのパンを俺のトレーに乗せた。『ありがとう。訓練頑張ります！』と返すが、列の後ろの諸先輩は苦笑している。本当は多すぎるって言いたいけど、前線に近い第3駐留基地ではこれが流儀なんだ。

今では優位に防衛戦争を進めているけど、昔はエルファシルで最後の晚餐を取り、そのまま前線から戻れない事が多かった。基地の食堂で働く人の中は、夫や息子を戦争で亡くした人も多い。彼らと新兵を重ね合わせて、しっかり食べて帰ってくる力を付けろって思いも込められているんだ。

山盛りのパンをシチューに浸しながらガツガツと食べる。チキンがゴロゴロと入っていて、訓練前には最適かもしれない。飲み放題のミルクに、自費で買った陸戦隊お薦めのプロテインを入れて飲む。給与の半分は仕送りに回しているけど、生活費も安上がりだし困る事はない。そして今更の事だけど、書類仕事が滞ったら補給もそうだし、給与も当然滞る。志願した時は軍人って戦うイメージが強かったけど、それ以上に事務作業って大事だと思う。

はちきれんばかりにランチを腹に詰めたら、訓練用の野戦服に着替えて第7格納庫へ向かう。訓練前に食べ過ぎない方が良いのは確かだけど、取り込めるだけエネルギーを補給して臨むように言われている。訓練中に吐くのは構わない。激しい訓練でエネルギーも消費するからそのままだと筋肉がやせちゃうんだ。もちろん訓練後も大量に食べる。こうする事で、実戦の緊張状態でもちゃんと消化できる強い胃袋が作れるんだとか……。

訓練終了後は、そのままシャワーを皆で浴び、教官が付き添って食堂に向かう。そこからへとへと身体に鞭を打って3人前近い量を



胃袋に押し込む。教官、これで効果が無かったら恨みます。食べ終わったら解散。20時前には寮に戻れるけど、くたくたですぐにベッドに潜り込む。身体を作るには睡眠も重要とか言われたけど、疲れすぎて睡眠以外の事をする気にならないのが本音だ。

訓練は厳しいけど、提督付きの従卒である俺には、役得もある。たまにエルファシルの要人とのお会食に付き添えるんだ。その時はドライバー担当と一緒に、提督持ちで好きなものが食べられる。従卒になって初めてご挨拶した時、『いつまでも従卒でいいので早く昇進しろよ?』って言われたけど、退役まで提督の従卒でもよい気もしていた。

ただ、書類仕事をしているうちに知識の必要性に気づいて、コナー曹長に色々質問するように意識を改めた。それがきっかけで、曹長の娘さんで経済学部志望のサラさんと休日是一緒に勉強するようになるのだが、そんな余裕が生まれるまで、数カ月の時間が俺には必要だった。

## 第71話 杖と車椅子

宇宙暦741年 帝国暦432年 7月上旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

ジョン・ドリンカー・コープ（中将）

「お前さん、なんでも器用にこなすのは知っていたが、演技もいけるんだな」

「いけるんだな……。なんて言葉で片づけるな。これでもジークマイスター室長に頼んで、工作員に演技指導を頼んだ上での判断だ。演技とはいえ、方面軍司令と副司令が揃って車椅子じゃ、士気にかかわる。職責をしっかりと果たしているんだからな。もつと褒めても良いんだぞ？」

やれやれと言った様子で杖で床をトントンとつつくウォリス。もつとも、その杖がシロンの高級家具職人が作った特注品だと知っている俺からすると、御託を並べているが楽しんでいるとしか思えない。まあ、妻子持ちの先輩として、新婚さんに優しくする余裕はあるんだが。

「まあ、ジョンにも世話をかけたな。合計で7個艦隊、同盟軍の過半数の戦力を訓練とは言え統括する気分はどうだ？」

「悪くはないが、何かと評価が辛い連中が多いからな。後で何を言われるかとヒヤヒヤしていたのが本音だ。分艦隊司令の連中は素直で良い奴が多いからな。艦隊司令達にも見習ってもらいたいものだ」

帝国軍の大規模攻勢計画を同盟が認識して半年、旗下の第11艦隊が装備更新を終えた分艦隊で充足したタイミングで俺は中将になった。フレデリックの第4艦隊とヴィットリオの第9艦隊も独立艦隊を解体して充足させ、それぞれ中将に昇進している。まあ、功績の前払いって感じだな。時期としては来年早々と予想されてるが、前倒しになる可能性もある。国防委員会としては出来る範囲で、装備更新と戦力化を進めたと言えるだろう。

「その苦労からは解放されるんだから良いじゃないか。今頃フレデリックの司令部は大慌てかもしれないな」

僚友の苦勞が嬉しいのか？ウオリスはニコニコしながら白磁のティーカップで紅茶を楽しんでいる。これもハネムーン中に新妻と選んだものらしい。恋愛の神様気取りだったこいつが、年貢を納めたとたんこの変わりようだ。まあ、グレッック会長にはお世話になったし、納まる所に納まった。たまに弄りたくなるが、それもお愛敬だろう。

「慣れた俺がそのまま担当すべきじゃないか？とも伝えただがな。ターナーとしては艦隊司令となる以上、少しでも全軍意識を持たせたいと譲らなかつた。今月と来月はフレデリック。その後はヴィットリオが担当だ。11月には一応の体制が整うことになる」

「あいつは言い出したら聞かないからな。ただ、副司令とは言え方面軍司令の経験は確かに良かったぞ。全軍意識とカークは表現しているが、ジョンなら分かるだろ？旗下の分艦隊司令だけじゃなく、連携する艦隊の分艦隊司令全員に、名簿上の名前じゃなくて、一緒に任に当たった上官として認識してもらおうメリットをな」

「それは理解しているがな。会戦ともなれば損害が無いなんて事はない。旗下の連中だけでも万が一の事を考えると胸が張り裂けそうになる。どちらかと言うと冷静な方の俺でもこうなんだ。熱血タイプフレデリックやヴィットリオにとって、全軍意識を持たせるのは酷な気もするな……」

白磁のティーカップを口元に運び、シロン産の紅茶の香りを楽しむ。カークのオフィスもシロン産の紅茶。ブルースのオフィスはバーラト系の名店、アップアイランドのスペシャルブレンドだ。秘書官になったボロトフ曹長からの懇願もあり、どちらかと言うとコーヒー党の俺のオフィスでもアップアイランドのスペシャルブレンドを用意している。

ただ、第3駐留基地の状況はウルヴァシーの第4駐留基地にもすぐに広まる。なので俺達のオフィスでは紅茶はシロン産、コーヒーはアップアイランドのスペシャルブレンドで統一する代わりに、オフィス限定で、艦隊では軍の支給品で我慢する様に統一した。指揮官だけが好みのものを飲むのも良い気はしない。なら司令部も、旗艦

も、艦隊も……。そうなったら目も当てられないからな。

「これはあくまで個人的な見解だがな。艦隊司令なんて因果な商売だ。突き詰めればいかに少ない味方の命で、敵の命をより多く奪うか？って事だろ。今までは良くも悪くも艦隊単位で考えがちだった。それを参戦艦隊すべてに広げようとしているんだ。厳しい話だな。旗下に大損害が出るが全軍視点では損害が減る。覚悟を決めて進軍を命じるのが理想だが、俺達は人間だ。分かっているもなかなかできる事じゃない」

「そうだな。中将ともなれば軍上層部だ。その覚悟を持ってって訳だな。30歳で退役してビジネスの場に戻って公言していたあいつが、軍人としての覚悟を厳しく求めてくるとはな」

「むしろ因果な商売だっつてわかっていたから退役したがったんだろうよ。俺達が憧れ半分で士官学校を目指していた頃には、奴は一家の生活と将来を背負っていたんだ。一度だけハイスクール時代に奴にキレられた事がある。世の中には怒らせちゃいけない奴がいるってあの時心底思ったな。女性に関してはカタリーナだ。士官学校の合格発表の日に首筋に爪痕を付けられてな。家族や友人達と晴れの日を過ごすのにそこまでするか！と女性の理不尽さを学んだ。あれから色々あつて結婚するんだから人生何が起こるか分からないものだ」

しみじみと語っているが、16歳の時に出会っていた相手と結婚するならもつと早く年貢を納められたんじゃないだろうか？恋愛体質などと気取っていたが、結局覚悟が決まっていなかったんだろう。だが、覚悟が一生決まらない奴もいるし、僚友としても友人としても良い奴のウォリスがちゃんと家庭を持てたことには祝福の気持ちしかない。

「話は変わるがファンの奴も駐留艦隊司令になって一皮むけたな。あいつの発言で大笑いすることになるとは思わなかった」

「まあ、確かにな。あいつの場合は揶揄しているのか？本心なのかが分からない所がまた笑える」

事が起こったのはブルースとウォリスが復帰して最初の合同会議の場だった。重病説を担保するためにブルースは車椅子で過ごして

いるのだが、それを画面越しに見たファンが

『アッシュビー。気持ちわかるが歩けなくなるほど盛るな』

となんでもない事のように言ったのだ。多分発言の意図がブルー本人もすぐ理解は出来なかったんだろう。数瞬後に焦りながら否定したし、ちゃんと立ち上がって見せたのだが、その様子も最高に笑えるものだった。

「まあ、ジョンはともかく、フレデリックだのヴィットリオだのが傍にいれば生活指導担当になるんだろうがあれは笑えたな」

上機嫌にウオリスがそんな事を言っているが、同盟軍に生活指導部があるとしたら、真つ先に目を付けられるのはお前さんだったと俺は思うが……。まあ、上機嫌な新婚さんを不機嫌にする必要もないか。フライングボール部のキャプテンやボクシング部のキャプテンは、生徒の中では人気者だが、恋愛やら喧嘩やらで生活指導担当の天敵なのは、どのハイスクールでも定番だろう。

そんな話をしつつ、潜伏生活を過ごしたりゾートの話も聞くことが出来た。僚友全員が揃うのは厳しいかもしれないが、お互いの妻子は誘って行ってみるのも良いかもしれない。雑談を終え、ウオレスのオフィスを後にする。秘書官のエスピノ曹長に軽く会釈するのも忘れなかった。彼女には訓練に伴う補給体制について色々アドバイスをもらった。書面で把握しているのと、実際に見て知っているのはやはり違う。

ただ、それを悲観する必要もない。ちゃんと見て知ってる人にサポートを頼めばいいだけだ。第1艦隊のオフィスへ向かっていると、あちらから車椅子姿のブルースが近づいてくるのが目に入った。どこか不機嫌な様子のブルースに、車椅子を押す……。あれはカークの従卒のアレク君だったか？もどこか困った表情だ。

「アレク君、任務ご苦労様。患者がこんなに不機嫌な様子だと君もやりにくいだろう？」

「はっ！コープ閣下。いいえ、アッシュビー提督の御付は名誉なことです。小官に不満などありません」

アレク君はまだ15歳、カークの知り合いの義弟らしいが、奴に似

ず可愛げのある青年だ。まだ新兵訓練プログラム中のはずだが、軍人らしい身体付きになっている。それもそのはずだ。誰も指摘しないので放置しているが陸戦隊の新兵訓練と合同である為、アレク君の訓練プログラムには一部レンジャー過程志望者向けの物が含まれている。最終的には本人たちの財産になるし、その方が効率が良いと専門家たちが言うなら差し出口は挟めない。もつとも士官学校と比しても厳しい訓練に同情する気持ちもあって、俺はアレク君には親身に接している。

「ジョン。俺は忘れんぞ。アビー曹長に看護兵の服を着させようとして、偽装するならとことんやろうと車椅子に飽き足らず、点滴を用意しようとした新任の中将の存在をな」

アレク君との会話に割り込むようにブルースが声をかけて来た。事前に知っていたのだろう。アレク君も笑いをこらえている。

「ブルース。そんなにカツカするな。部下の嫉妬をうまくいなすのも司令官の務めだろう。アレク君。我らが方面軍司令殿を頼んだよ」

そう言い捨てて、俺はさつさと自分のオフィスに向かった。あんまりからかうとアレク君が困るだろうしな。

『おいージョン。まだ話が……』

『閣下、立ち上がらないでください。これも任務です』

そんな声が聞こえた気がしたが、ここで立ち止まる程、俺も素直じゃない。ウオリスと雑談した分、早くオフィスに戻って艦隊司令としての任に戻らないといけないからな。方面軍司令もそれを望まれるはずだ。決して逃亡した訳じゃないぞ。

## 第72話 覚悟

宇宙暦741年 帝国暦432年 10月上旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

コーゼル中将（正規艦隊司令）

「司令長官に上申はしましたが、もう何も申すなどの事でした。私にできる事は、もう無いのでしょうか……」

「シユタイエルマルクよ。卿の事だ。自分が一番よく理解しているのではないのか？軍務尚書閣下も司令長官閣下も派閥の事を抜きにして最大限支援はされた。あからさまな欺瞞情報を真に受けて、油断する方が愚かなのだ。卿もこの件についてはもう言うな」

フェザーンからもたらされた敵将のアツシユビーとその副将であるウォーリックの重病説がまことしやかに囁かれ、更に政争の勃発まで噂となった。それを真に受けて年明けに出征が予定されている統帥本部総長派の艦隊司令たちは、訓練と装備更新の猶予を与えた配慮を無駄に費やすような動きさえしている。今更してやれる事など無いのだ。

「平民である私の所に、既に方々の門閥貴族のパーティーで勝利宣言をしたと漏れてきているほどだ。この段階での警句など疎まれこそすれ喜ばれる事はあるまい。此度の出征は勅命でもある。これ以上動けば、勅命に逆らう事にもなろう。卿の為にならん」

「そうでしたな。正規艦隊司令を拝命はしましたが、訓練も装備更新もこれからです。旗下の戦力を参加させられない状態で、あれこれと言うべきではありませんでした」

目の前で気落ちした様子この男に、もう少し宮廷内部での影響力があつたら……。何度そう思っただろうか。だが、実力主義を標榜した時点で門閥貴族から敵意を向けられるのも道理。それに私自身、それ無しでこの男を信頼しただろうか？結局無いものねだりなのだという答えに落ち着くのだが、それも口惜しい。出身を理由に不利益を被つたり、理不尽な命令を下された事もある、だが、それに耐えて中将、平民初の正規艦隊司令にまでなっても、口惜しい事は無くなら

ぬ。

「それにしても理解できぬ。なぜあも大々的に勝利宣言を行うのだ？そんな事をする暇があったら、訓練なり転換訓練に力を入れた方が勝利につながる。それに『勝って当然』などと事前に周知すれば、実際に勝利できても評価は低くなる。気負いも増える分、百害あって一利なしではないのか？」

「普通はそう考えます。あくまで私見ですが、統帥本部総長派はこの勝利を切っ掛けに軍内部の主導権を握るつもりなのでしょう。統帥本部総長が軍務尚書に、空いた統帥本部総長にローエングラム伯、宇宙艦隊司令長官にはケルトリング中将とでもお考えなのではないかと。事前に勝利を周知させているのも、門閥貴族の支援を狙っているのでしょうか。宮廷工作は彼らのお家芸ですから」

「そうなれば、軍内部への門閥貴族の影響力が高まる事になる。軍全体にとってはむしろ悪夢の再来だな。勝っても地獄、負けても地獄だな。卿の重要性も不本意だろうが高まる事になる。言うまでもない事だが、くれぐれも自重してもらいたい」

今回の出征が成功するようならそれでも良い。平民出身の正規艦隊司令など目障りなだけだろう。政争に巻き込まれるのも癪だ。退役して故郷で農場でもやればよい。だが負けたとしたら状況は難しくなる。

シユタイエルマルクが今回の出征に警鐘を繰り返したことで、我らは軍務尚書派寄りだと思われる。次回の出征への参加は拒めない。だが、ただでさえ長男の仇討の色が強い軍務尚書派が、ご次男まで戦死すれば私怨で凝り固まるだろう。そんな状況で叛徒たちに勝てるのか？

「閣下と話せたことで小官もすっきりしました。ミヒヤールゼン男爵からも今は自重の時期と助言を頂いております。旗下の練度向上と掌握に今は勤めると致しましょう」

来た時よりはすっきりした様子で、残っていたコーヒーを飲み干すと、敬礼をしてシユタイエルマルクは退室していった。名前の出たミヒヤールゼン男爵への疑念は、まだ胸の内にしまっている。フォルセ



テイ会戦はともかく、ファイアザード会戦には疑念がある。

あの時、攻勢候補はティアマト・パランディア・ファイアザードの3つだった。なぜ叛徒たちは作戦目標がファイアザードだと確信していたかのような作戦行動ができたのか？最前線基地も計った様にギリギリ維持可能なレベルで補給が成立している。そして、統帥本部総長派の出征が決まった直後に流れ始めた叛徒たちの内部情報。出てくる答えは一つだ。

「だが証拠がない。それに誰が通じているのか分からん」

空になった2つのコーヒーカップに視線を向けながら、私は本音を吐露した。シュタイエルマルクは軍上層部も将来を担う存在として認識していたはずだ。実力主義を標榜した事も、あくまで青さと捉えられていただろう。私と親密なもの、平民とのつなぎ役として使える訳だから利点もあった。だが、ミヒヤールゼン男爵が強引に正規艦隊司令を私に譲り、実力主義に賛意を示した事で、状況は変わる。

上層部の多くを占める軍部貴族への造反者と見られるようになり、結果として、実力主義の可否も派閥抗争の口実に使われた。だが、爵位持ちの貴族で最初に実力主義による任用に賛意を示した男爵をシュタイエルマルクは信頼している。

「確実な証拠でもなければシュタイエルマルクには話せん。だが、平民出身の私には、情報部や内務省へのパイプがない。どうすべきか……」

本来なら司令長官であるツイーテン元帥に相談しても良かった。ただ、証拠もなく敵対派閥の出征が確定した段階で、情報漏洩を訴えるのは流石にタイミングが悪すぎる。少なくとも今回の出征が終わった後に相談しよう。叛徒たちがパランディア星域で待ちかまえていたら、情報漏洩の可能性が更に高まるのだから。

宇宙暦741年 帝国暦430年 10月上旬

惑星オーデイン ミヒヤールゼン男爵邸

クリストフ・フォン・ミヒヤールゼン

「良いネタを頂き、ありがとうございました。おかげで狙い通り、きれ

いに踊つてくれました。これも閣下のお力添えのお陰です」

「何を言うか。良い素材が一流の料理になるには一流の料理人が必要だ。卿の差配は見事だった。良い素材を用意した甲斐があったと言う物よ」

お互いにワイングラスを傾けながら、称賛しあう。ジークマイスター提督は依頼に十分以上に応えてくださった。そして目の前の同志も、それを最大限に活用してくれた。苦勞した甲斐はあったが、ここまで思い通りに踊られると、逆に気味が悪くもある。自分たちの出征が決まった途端に同盟の内部情報、それも自分たちに有利になる情報が流れれば普通は警戒しても良い気がするのだが……。

「既に訓練や装備更新の費用が私的流用された証拠や、その資金が一部の門閥貴族に流れた証拠も押さえました。いつもの方法で届くように手配しております。閣下に活かしていただければ……。」

「相変わらず手抜かりがないな。宜しい、今度は私が腕によりをかける事としよう」

そう言いながら添えられていたチーズを口に運ぶ。掌で踊る連中を想いながら飲むワインは格別だった。敗戦直後に自然な流れでケルトリング軍務尚書の手元に届く形にしてみるか？次男まで失つていれば、軍を割って派閥争いをした連中が更に汚職をしていたとなればどう反応するか？

どうせなら同時期に政府系にも流した方が効果的か？正規艦隊の再編をする以上、政府系に強くは出れない。門閥貴族を疎ましく思っているのは政府系も同様だ。その方が面白いかもしれない。

「閣下、本日は暇乞いもかねて参りました。同志としての日々は私の生活に輝きをもたらしてくれました。ただ、ローエングラム伯爵家への復讐が終わった後に、現状の意欲を維持できるか不安なのです。そんな状況で失態を犯す訳にも参りません。大敗の罪を償う名目で自裁しようと思えます」

「急に何を言うのだ？卿にはこれからも働いてもらいたいと思つていたのだが……。」

「庶子とは言え、大敗の責任者の縁者ともなれば、これまで通りにお役

に立てるかも怪しいでしょう。それに私が自裁すれば、処分の基準にもなりません。塵芥のように思っていた存在の命ひとつで門閥貴族たちを苦境に追い込めるのです。これ以上の命の使い道はありませんまい」

「そこまで言うなら何も言えぬ。ただ、どうせなら卿も供にあのワインを味わってほしかった。これは私の本心でもある」

「そう言って頂けるだけで本望です。願わくば、私の死も閣下に活用いただきたく」

「勿論だ。もみ消しも断固阻止するし、爵位だけで人を計る連中をしっかりと苦しめてやるつもりだ」

この男は確かに優秀だった。いや優秀過ぎたのだ。罪を償うと自主的に自裁するような人物が、反帝国活動をしていたとは思えない。それに大罪を犯した嫡男を庶子とは言え兄が命で償う。ローエングラム伯爵家を潰し、命を奪い、そして名誉まで奪い去るか……。そんな事をしてのける逸材が、活躍の場を得られない帝国の有り様に改めて是正の必要性を感じてしまう。

もしマンフレート2世の治世が続いていたら、ローエングラム伯爵家を継ぐことは出来なかったかもしれないが、いずれかの省で辣腕を振るい、能臣としての名声を得ていた未来もあったかもしれないのだから。私は黙って彼のグラスにワインを注ぐ。覚悟を決めた以上、生前に会うのはこれが最後。そう思うと、ジークマイスター提督と別れの前にワインを飲んだ事を思い出す。

この先も、私はこういう別れを繰り返していくのだろうか？爵位や血に捕らわれない実力主義での任用。不条理な有り方の是正。必要なことだと思いつつ、その為に同志たちが命を捨てる必要があるとしたら、この世はなんと不条理なのだろう。ワインを注ぎながら、私はそんな事を考えていた。

## 第73話 始まり（ドラゴニア会戦）

宇宙暦742年 帝国暦433年 1月中旬

惑星オーデイン 軍事宇宙港

ツイーテン元帥（宇宙艦隊司令長官）

「総軍の指揮を執るのはローエンングラム伯だが、お前もケルトリング伯爵家を継ぐ身だ。兄の仇を討つ意味でも、励んでくれると信じている」

「はっ。私もケルトリング伯爵家に連なる男です。功績を立てて、伯爵家を継ぐ者として相応しいと示して見せます。兄上のご無念は、弟である私がきつと晴らして見せましょう」

そう応えると、ケルトリング中將は私にも視線を向けていた。舞台裏を理解している私は、ただ頷く事しか出来なかった。年初の儀や新年を祝うパーティもひと段落し、大々的な出征式も終えた。形式の上で最大限の配慮はしたが、敗戦を覚悟している父親に、それを黙認した宇宙艦隊司令長官。その戦場に送り出される息子。三文小説でもこんなシナリオは用意するまい。それに役者でもない私には演技は出来ない。頷くのが精いっぱいだった。

中將は我らに敬礼し、答礼を確認すると乗艦へ歩み去って行った。『引き留めるなら最後の機会だ』そう言えたらどれだけ楽だっただろうか。ただ、長年の友人でもある軍務尚書の覚悟を知っている私がその言葉を吐けば、覚悟だけでなく矜持も踏みにじる事になる。そして宇宙艦隊司令長官という立場も、その言葉を吐き出すことを封じていた。

「後はローエンングラム伯が公言した事を現実に来るように祈るばかりだ」

息子の乗艦が動き始めた時、ボソツとつぶやいた声からは諦めの匂いを感じた。参戦する戦力は5個正規艦隊に数個の独立艦隊。8万隻を超える大艦隊は、司令官が到着した部隊から既に移動を開始している。ケルトリング艦隊は後陣の為、進発は比較的遅めだった。長男が戦死し、嫡男となった次男を戦場に送り出す軍務尚書への配慮だった。

たのかもしれないが、覚悟を聞いていた私にとっては、それも忌々しかった。

「そうだな。そう願いたい」

自分の語彙力の無さを悔やんだ。ただ、敗戦を覚悟した戦場に唯一残った嫡男を送りだす友人にかける言葉など、どんな辞書にも載っておるまい。立場が逆なら、もっと気の利いたことを言っただろうか？ 長年の友人にそんな覚悟をさせてしまった責任は私にもある。寒空の下、高度を上げていく艦隊旗艦が見えなくなるまで、黙って見送る友人に付き添う。それ位しか出来る事は無かった。

「気を使わせてすまん」

艦後方のエンジンから出る光点が見えなくなった時、そう呟くと、私の肩を叩いて、彼もこの場を後にした。おそらく軍務省へ向かうであろう彼の公用車が見えなくなってから、私も自分の公用車に乗り込む。気を利かせて暖房を強めに入れてくれていたが、それすら煩わしかった。

罪悪感に似た想いに駆られていた私には、寒空の下で吹く風が自分の罪への罰に似てむしろ心地よかったのだとその時思った。副官も運転手も私の雰囲気を感じたのか？ 沈黙したまま車は宇宙艦隊司令部へ向かう。事情は知らなくとも、統帥本部総長派に押し切られる形での出征だ。私が不機嫌だと察したのだろう。本質からはずれてるが、今は会話をしたいとは思わない。結果が自分の好みに沿うなら、上位者があれこれ訂正する必要もない。

静かな車内にエンジン音が響く中、車窓はいつも通り流れていく。軍事宇宙港から司令本部まではそこまで距離は無い。本部の敷地が近づき、守衛の確認を済ませて見慣れたロータリーで停車する。

「コーゼル提督との面談が終わったら今日は帰宅する。そのつもりで頼む」

運転手の了承の旨を背中受けてながら、足早に司令長官室へ向かう。背後で副官がどこかに連絡している。おそらくコーゼルの艦隊司令部に私が戻った旨を伝えているのだろう。そのまま通路を進むと見慣れたドアが見えてくる。

「おかえりなさいませ」

「うむ。コーゼル提督が来たらすぐに通してくれ。それとコーヒーは官給品で良い。私の分もな」

秘書官に指示を出し、ドアを開けると室内に用意された応接セットに腰を下ろす。この状態で執務にあたっても良い結果にはならない。決裁書は少し溜まっていたが、見て見ぬふりをした。

『コンコン、コンコン』

ノックに応じると、秘書官がコーゼルの到着を知らせて来た。後に続くようにコーゼルが入室してくる。椅子を勧め着席を促した。

「秘書官がコーヒーを用意している。本題はそれから話そう」  
「はっ」

着席したコーゼルの視線を向ける。軍人に相応しい体軀。鋭くもどこか優しい気な瞳。手の甲に残るレーザーの傷跡。この姿だけで彼が歴戦の勇士である事が分かる。何度、この男が貴族出身だったらと思っただことか。

再びノックがされ、それに応じると秘書官が本当に良いのか？という視線を向けて来た。私が頷くとそれぞれの手元にコーヒーカップを置き、退出していく。カップを手に取り、口元に寄せる。酸味ばかりが強いコーヒーは、門閥貴族からは泥水などと呼ばれている。その泥水をすすりながら前線を支える兵士がいるからこそ、安全が保障されているのだ。

「長官、これは……」

「卿に含む所がある訳ではないぞ。ただな、宇宙艦隊司令長官ともなると門閥貴族の訪問も多い。泥水を飲まされた等と陰口を言われるのでな。彼らにこの味の良さは分かるまい。何しろ前線の味だからな」

サプライズは成功したようだ。さすがのコーゼルも宇宙艦隊司令長官のオフィスで官給品のコーヒーが出るとは思わなかったようだ。私がそう応じると、彼も嬉しそうにコーヒーを飲み始めた。

「今回の出征、勝てれば私は勇退だ。なので負けた時の事を考えれば良い。私は卿の実力を高く評価している。正直に言おう。何度も貴

族出身だったらと思った。だが、身分に囚われない実力主義での任用は出来なかつた。なぜだか分かるかね？」

「長官、小官は自分の出身で確かに泣かされたこともあります。それでも、正規艦隊司令に抜擢して頂きました。平民であっても一定の評価は頂けていると認識しております」

「まあ、卿の立場ならそう言うしかないか。こんな事を私が言うべきではないが、爵位で弾が逸れてくれるなら前線で爵位の意味もある。誰だって実力ある僚友を、特に前線では求めるはずだ。だが、正規艦隊司令はこれまで軍部系貴族が独占していた。それは正規艦隊司令が軍上層部の登竜門のひとつだからだ」

そこで言葉を区切り、コーヒーを飲んで口の渴きを癒す。コーゼルも釣られるようにコーヒーを飲んでいる。実力主義を標榜するシユタイエルマルクとはこんな話はした事が無いのだろう。少し戸惑う様子もあるが、話を続ける。

「正規艦隊司令の先は文字通り軍上層部としての任が待っている。政府や時によっては門閥貴族との折衝も仕事になるだろう。つまり爵位がモノを言う世界になるわけだ。正規艦隊司令に抜擢されるほどの人物でも爵位が無ければ力を振るえない世界になる。だから、実力主義による任用の対象ではなかつた」

「そうですね。小官も政府との折衝や門閥貴族との交渉でお役に立てるとは、胸を張って申せません」

苦笑しながらコーゼルが応じる。こうして胸襟を開いて彼に接するのは初めてだ。もつと早くこう出来ていれば、もつと違った展開もあつたのだろうか？ふとそんな思いがよぎつた。

「だが、今回の出征が失敗に終われば爵位にこだわってもいられなくなるだろう。派閥争いには門閥貴族もかなり関わっていた。彼らも軍に手を出すと火傷では済まないと学習するはずだ。そうなれば長官職は無理でも次官職なら何とかなるだろう。もちろん、貯まりに溜まった叛徒どもへの負債を清算した後の話になるがな。その証ではないが、出征軍の敗退が決まった時点で、卿は大將に昇進する。来たる戦いで、卿の事を当てにしたい。頼めるか？」

「無論です。小官でお役に立てるなら、任務に誠実に取り組むつもりでおります。その点については誓ってお約束いたします」

「そう言ってもらえて安心した。それにしてもこういう話はシユタイエルマルクとはしないのか？まあ、ミヒヤールゼンがやや強引に卿に正規艦隊司令を譲ったせいで、貴族から距離を取られたのも事実だが、あやつも艦隊司令だ。そろそろそういう視野も持つ時期だと思うが……」

そう応じた時、コーゼルの表情が少し曇った。シユタイエルマルクとは懇意のはず。ミヒヤールゼンに何か懸念でもあるのか？

「長官、ミヒヤールゼン男爵が関係しているかは不明ですが、小官は情報漏洩の可能性を懸念しております。確たる証拠はございませんが、ファイアザード会戦が疑念の始まりでした。叛徒たちの艦隊運用を踏まえると、作戦目標がファイアザードだったと事前に知っていなければあり得ない。少なくともイゼルローン回廊出口付近の哨戒網に引っかかってからでは間に合わない運用をしております。最前線の基地に関しても疑念を感じます。まるで計った様に維持がギリギリ出来る程度の補給を許している。見方を変えれば放棄を決断させない程度に調整しているとも思えます」

「そんな事がありえる訳が……。いや、冷静に考えればその可能性は否定できんか。もう少し早くに言っただけは良かった……。と言うのも無理な話か。敵対派閥が勅命で出征の準備を始めた段階で、情報漏洩の可能性など提唱できるはずもないか」

コーゼルが詫げるような表情をしているが、本当は私がある可能性に気づくべき立場にある。彼を責めるのは筋違いだ。

「すまぬ。むしろよく気づいてくれた。それで、ミヒヤールゼン男爵の関与を卿は疑っておるのか？」

「確信はありません。ただ、強引に小官を正規艦隊司令の後任に指名し、実力主義を標榜していたシユタイエルマルクの後援者になる事で、宇宙艦隊内部は悪い意味で競争心が高まりました。統帥本部総長派との派閥争いも、きっかけはあの人事にあると小官は思っております。それに……」



「それに？」

「今回の出征が決まった直後に、叛徒たちの内部情報が、それも帝国有利を匂わすものが急に噂として流れました。それを主導したとなると、ある程度の地位、爵位、人脈、それに資金が無いと実行できません。少なくとも正規艦隊司令の地位にある小官でも不可能です」

コーゼルの言う通りだ。あの噂は記憶が正しければ宮廷から広まった。それも門閥貴族を中心に広まったはずだ。ミヒヤールゼン男爵が主導したとしても無理がある。なら誰が……。

「残念ながら小官の権限で捜査を進めるには限界があります。その辺りもお力添え頂ければとも思うのですが……」

「分かった。ただ、今回の出征の成否を確認してからだ。今動けば捜査の主導権を状況によっては譲ることになる。そのような猶予を与えれば、証拠隠滅に走るやもしれん。情報部と内務省の中から、身辺調査を済ませた者を用意できるように手配だけは進めておこう」

「はっ。」配慮に感謝いたします」

コーゼルは溜めていたものを吐き出せた事もあつてホツとした様子だが、私は厄介事を抱え込んでしまった。だが、少なくとも私が関与していないと信じて託してくれたのだ。その期待に応えなくてはならない。コーゼルとの会談を終えた後、私は予定通り帰宅した。

さすがにこの状況で軍務尚書に更に心労はかけられない。この日から、誰に話を振るべきかという悩みが、就寝前の私を襲うようになった。状況だけを踏まえれば、かなりの立場にいる人物の関与が確実だった。だが宇宙艦隊司令長官という立場もあつて、簡単には動けなかったのだ。

## 第74話 戦場へ（ドラゴニア会戦）

宇宙暦742年 帝国暦433年 2月中旬

アスターテ星系 惑星ウガリット静止軌道上

カーク・ターナー（中将）

『この時間だけはどうも慣れんな。そろそろイゼルローン回廊の出口付近に来るはずだが』

『ブルースはせっかちだからな。どうせ出産には間に合わないんだ。開き直って、勝利を手土産に新生児室に行くしかあるまい。俺も共犯がいた方が気が楽だ』

『ウォリス。俺は何も出産に立ち合いたいからイライラしている訳じゃないぞ』

「我が方面軍司令殿も、8万隻近い帝国艦隊が向かってくるとなるといつものように不敵に笑う余裕はない様だ。ウォリス、ここは俺達があしつかりお支えせねばな」

『カーク。そもそも俺とウォリスに子供をつくる様に勧めたのはお前だろうか？もつと気遣ってもいいのではないか？』

「お前たちが父親になった方が良いと思ったのは本心だ。ただ、動機は世話になったビジネス界の師匠と、何かと力添えしてくれた代議員への恩返しだからな。残念ながらお前たちは用済みだぞ？もつとも、軍人なんて因果な商売をしている夫を持つことになった伴侶には責任を感じているからな。ちゃんとご挨拶に行かせてもらうつもりではいるがな」

『そんな事を言っているが、家族ぐるみの付き合いにお前たちを一番加えたがっていたのはカークだからな。俺は悪い男性が愛娘に近づくのは気が進まないが……』

ジョンがニヤニヤしながら会話に入ってきた。ちなみに息子持ち視点でも評価は高くはないぞ。僚友としては良いかもしれないが、シユテファンやヴェルナーがパートナーを曜日ごとに代えだしたら正直心配だ。

そんな俺達の会話を、艦橋の連中も苦笑しながら聞いている。うち

の参謀長のアッテンボロー少将は孫娘が何人もいる。若くして成功を掴んだ男性はそうなりがちなのも事実だが、感心は出来ないって感じだろうか？

「回廊出口付近からこっち側には強行偵察艦が2000隻近く待ち構えているんだ。すり抜けられる可能性はない。急報が入ったらすぐに動けるようにして待機するしかないな」

『その時間がなんともな。準備はしたつもりだが、どうも落ち着かん』  
大軍が迫っているのもあるのかもしれないが、初めての出産で父親は自分が役立たずだと身に染みる経験をする。まあ、どんなに頑張っても男性に子供は産めないからな。だからこそ。せめて傍にいたいと思うのは当然の感情だ。だがなあ、いくら優秀なお前らでも右往左往するしかないんだ。醜態を晒さずにすむ口実が出来て良かったと俺なんかは思うが……。

『話を戻すが、奴ら、アルレスハイムに向かうかな？さすがに敵地で戦力分散はしれないと思うが……』

『5個正規艦隊+αの大戦力だ。ヴァンフリートは星域自体が狭い。うまくやれば2個艦隊で遅滞戦が出来なくもない環境だからな。アルレスハイムからパランティアに向かうのは道理でもあるが……』  
帝国軍進発の報を受けて、エルファシル方面軍所属の第13艦隊を含む4個艦隊と4000隻のメンテナンス艦は、補給を万全にしたうえでアスターテ星域まで進軍している。今頃はウルヴァシーから進発したファン達の3個艦隊がエルファシルで補給を終え、進軍を再開しているだろう。帝国軍がアルレスハイムに進路を取って時点で、俺達も移動を開始し、パランティア星域の外縁部に向かう予定だ。

久しぶりの正規艦隊同士の戦いだが、今まで帝国軍を率いている事が多かった『名ばかり少将』達は戦理に合わない判断を下す事も多かった。もしヴァンフリートに進んでくるようなら、遅滞戦を仕掛けながらアスターテ星域まで引き込む第二案も検討済みだ。

『相手も正規艦隊司令達だ。アルレスハイムに向かうだろうが、念には念を入れておこうという判断は間違っていないだろう。進発日から逆算すれば、こういう会話を楽しめるのも長くても数日といった所

だな』

アルフレッドが俺達を宥める様に発言した。方面軍の良識担当の奴が発言すると、いつも通り妙な納得感があり、ブルースはいつもの不敵な雰囲気を取り戻した。ほんと良い補佐役だよな。本当はもう10年も軍歴を積んだベテランどころの役目だ。士官学校の対策をしていた頃から、なにかと苦労性だった事を知っている俺からすると、妙な嬉しさを覚える光景だ。

『そう言えば、アレクは結局旗艦には乗せなかったんだな。よくあいつが納得したな』

『当然だろう？ガキの頃に重機の扱い方を仕込んでくれた恩人から預かったんだ。本人は覚悟は出来てるとは言うけどな。長年収容所で顔役みたいな事をして同化政策にも貢献してくれた恩人が、やっと身を落ち着ける先を見つけたんだ。戦死なんかさせてみる。温かい家庭に融合弾を撃ち込むようなものだ。少なくとも伴侶は志願には反対だったらしいからな』

『あいつは仕える対象と真逆で素直で努力家だからな。家族も手放したくなかったんだろう。それで置いて来たのか？』

『そこまであからさまに優遇したら奴の軍歴に傷がつく。メンテナンス部隊の司令艦のひとつにオペレーターとして乗船させたよ。結局スパルタニアンのシステムを流用して開発を進めていたナビゲーションシステムは間に合わなかったからな』

デニスのおっちゃんから預かったアレクを、志願したとはいえ任官一年もしないうちに最前線には連れていけない。それに俺の秘書官役のコナー曹長の娘さんと、ちよつといい感じなんだよな。俺の精神的な安寧の為に、旗艦への乗船は許可しなかった。万が一の事があってもコナー曹長はとやかく言わないだろうが、それはそれ、これはこれだ。

同盟軍が導入している制宙機、スパルタニアンは所属する宇宙空母とシステムでリンクされている。帰還や補給のオペレーションはかなり自動化が進んでいる。このシステムを流用してメンテナンス部隊のオペレーションも自動化を目指したんだが、残念ながら開発が間

に合わなかった。

代案として司令艦の一部を改装しオペレーター席を50席追加した。星間国家の戦争で、メンテナンスの段取りを人力で整えると言うのも時代錯誤な気がするが、その道のプロが捻りだした解決策だ。信じるしかないだろう。当初は肉体派の傾向が強かったアレクも、曹長に事務仕事を振られたり、司令部の面々と関わる機会が多い事もあって、勉強の方にも意識が向いている。今のあいつになら、開戦すればてんやわんやになるであろう指令艦のオペレーターも務まるはずだ。『指令艦のオペレーターか。あいつも苦勞するな。今度何かうまい物でも奢ってやるか』

『なんだジョン。そんなに大変なのか?』

『ああ。当初は戦死の可能性が低いから希望者も多かったんだ。実際に運用演習が始まったら後悔した連中も多かったはずだ』

「まあ、可愛い児には旅をさせないとな。それにメンテナンス部隊の働きは今回の作戦の肝だ。俺達の命を預けたようなもんだ。ちゃんと一人前として扱っているだろう?」

『強行偵察艦よりに入電、我、回廊出口で帝国軍を発見。アルレスハイムへ進路変更を確認す』

俺がジョンに応じたタイミングで、緊急入電が流れた。

『よし、作戦開始だ』

ブルースの号令と共に、俺達は移動を開始した。

宇宙暦742年 帝国暦433年 2月下旬

パランティア星系外縁部

アレクサンデル・ビュコック（一等兵）

「アレクよう。いい加減機嫌を直したらどうだ?いくら従卒だって言ってもよ。志願まもないお前さんを旗艦に乗せるのは提督だって気が進まないだろう?わかってやれよ」

「エイポーン軍曹、頭ではわかっているんです。艦橋に居ても飲み物を出す位しか出来ませんし。でも、お傍にいたら最悪弾避け位は出来るかなって。俺、筋肉もだいぶつきましたし……」

「やっぱりな。お前さん、ちゃんと提督の話聞いてなかったろ?俺

も詳しい事は知らないが、今回の作戦ではメンテナンス部隊の活躍が肝になるはずだぜ。そうじゃなきゃ、方面軍の上層部総出で最終確認なんかするはずなねえ。なんか言われなかったのか？」

正直、旗艦への乗船を禁止された時点で意気消沈して、ちゃんと話を聞いていなかったかもしれない。

「確か、ブルースの御守に成功したから、次は俺達の命を預けてやるって……。」

「ほらな。お茶の用意も大事だが、命より大事なものはねえ。ちゃんと話してくれてるじゃねえか。お前さんには今更かもしれないねえが、俺達がうまくメンテナンスを回し続けられれば前線は楽になる。逆に下手を踏めば提督方を危険にさらす。お前の双肩に、同盟軍が勝利できるかが掛かっているといっても過言じゃねえ。どうだ？やる気が出て来たんじゃないか？」

「やる気が無かったわけじゃないですよ。ただ、少し気落ちしていません。ありがとうございます。もう一度、運用プログラムの演習をさせていただきます」

俺がそう言うと、軍曹は嬉しそうに肩を叩いてくれた。エイポーン軍曹の本職は衛生兵だ。ただ、指令艦のオペレーターが果たす役割は、衛生兵が行うトリアージに似ている。なので運用のサポート役としてメンテナンス部隊に参加している。新兵訓練のメデイカル担当でもあるから、もともと顔見知りだった。陸戦隊もかくやという筋骨隆々の身体付きで、衛生兵ってよりレンジャーが似合うと思う。

既に帝国軍をキャッチした同盟軍は、先行していた4個艦隊からパランティア星域の外縁部を通り抜けて、アルレスハイムとの航路の間地点にある小惑星ドラゴニアを目指している。たまたま発見された時、表面の影がドラゴンに見えたからそう名付けられたらしい。割り当てられたオペレーター席に座り、運用シミュレーターを起動する。メンテナンス部隊が担当するのは中破判定以下の艦だ。大破判定の艦は戦線から後退して工作艦のお世話になる。

メンテナンス艦は大型輸送艦の両舷に簡易ドックを取り付けたような艦型をしている。メンテナンスを受ける分艦隊が近づいてきた

ら、自分の担当するメンテナンス艦の状況を確認しながら、タッチペンでどの艦で補給するかを指示する。口頭で追いつく作業ではないから、モニター上で割り当てを触れば指示が完了する。その時に気を付けないといけないのが、ミサイルの残弾数と重傷者の受け入れ枠だ。これは各メンテナンス艦の状況を青⇒黄⇒オレンジ⇒赤で視覚的に把握できるようになっている。これの偏りが無いように指示するのが俺の役目だ。

『話を聞く限りだと、生産設備の効率向上に似ているかも』

そう言いながら、ボトルネックの活用法について書かれた本を貸してくれたのは、いつの間にか一緒に勉強する仲になった、コナー曹長の娘さんのサラだ。彼女は記念大の経済学部志望だから博学なんだ。話を聞いているだけで色々勉強になる。

さっきのボトルネックの話だと、俺の任務の中では、提督の時間とかが良い例かもしれない。艦隊司令以外の任務も多く抱えている提督は、決済する書類も多い。でも現場確認や訓練で不在にする事も多い。つまり限られた時間で決済を取らないと艦隊運営に支障をきたすんだ。だからこそ提督の手元に行く前に何回もチェックされる。

あと面白かったのがキャッシュフローの話だ。ビュコック家も農場を経営しているけど、世の中には黒字でも倒産する事があるらしい。利益が出ていても支払うべき時に資金が手元に無いと、倒産してしまうんだ。確かに利益が出ているからって給料は半年後とか言われたら困る。戦場で、遊兵を多く生み出してしまい、局地的な優勢を許してしまう感じにも似ている。

「でもサラには戦場には来てほしくないな。」

俺が勉強を意識したとどこかで耳に挟んだターナー提督は、自分で作ったと言う士官学校対策ノートを俺にくれた。それを見たサラは、何故か過去問と一緒に解きたがったし、たまに提督がしてくれる対策講義にも参加するようになった。このままだと士官学校にも合格しそうだけど、記念大はどうするんだろう。

「俺がサラに戦場に出て欲しくないと思うように。提督たちも俺にそういう想いを感じたんだろうな。確かに志願して一年足らず。身体

付きは成長したけど、まだ殻を被ったひよこみたいなもんだし……」

でも、再会した時には胸を張ってお会いしたいし、どうせならトントン役に立って見せよう。何度も繰り返して作業感を感じ始めているシミュレーターを一回リセットし、真剣に取り組む。そんな俺を乗せた指令艦は、着々とドラゴニアに近づいていた。

『ねえ母さん。アレクと仲が良い女性兵っているの?』

『どうかしら?でも素直で皆から好かれているし、顔も悪くない。もう少ししたらアプローチをかける子も出てくるんじゃないかしら?』  
『ええ、どうしよう。私、記念大はやめてエルファシル市立大にしようかな』

『ずっとエルファシルが任地とは限らないじゃない』

『そうだよね……。どうしよう……。』

『実現できるかは分からないけど、士官学校にアレクを押し込めば良いんじゃないの?記念大の経済学部って、テルヌーゼン市立経済大学とキャンパスが合同になったんじゃない?』

『士官学校の対策なんて今からで間に合うかな?ねえ、ターナー提督は次席入学だったんでしょ?母さんから頼んで、対策ノートみたいな貰ってよ』

『お優しい人だから力になってくれると思うけど、こういうのは本人がその気になるのも大事なの。そこまで言うなら母さん、提督と相談してみるわ』

そんな母娘の会話の結果が、今の俺の置かれた状況の遠因なのだが、そんな事を知る由もなかった。



## 第75話 斜線陣（ドラゴニア会戦）

宇宙暦742年 帝国暦433年 2月中旬

パランティア星域への航路上 小惑星ドラゴニア付近

ケルトリング中将（軍務尚書の次男）

『叛徒どもは4個艦隊。こちらの方が2万隻近く多い。大軍に兵法なし、このまま押しつぶすのが良いのではないか？』

『ここでもたついては増援が来かねません。叛徒どもは戦力予想を過少に見積もっていたのでしよう。そもそも5個艦隊での侵攻など近年ありませんでしたからな』

アルレスハイム星域を抜け、パランティア星域への航路上にある小惑星ドラゴニア付近に差し掛かった時、4個艦隊程度の叛乱軍がリーダーに映った。そこで一旦進軍を停止し、策を協議するために艦隊司令の旗艦を繋いで会議が始まった所だ。口火を切ったのがエーレンベルク中将だ。それに賛同する様にフォーゲル中将が続く。叛徒達の戦力は約6万。こちらは8万隻を超える。確かにお二人の言う通り、本当に遭遇戦なら押し切ってしまうばよい。

「小官は叛徒どもが遊弋している位置が気にかかります。パランティア方面から進出するなら、あの位置は通常通らないはずです。総司令もそれを気にされたのでは？」

小惑星ドラゴニアは天頂方向から見て時計回りに自転をしている。アルレスハイム側から進出するなら右舷を、パランティア側から進出したなら左舷を通過し、スイングバイで加速するのが本来の航路だ。だが、叛徒どもが遊弋しているポイントは、本来アルレスハイム側から進出した際に加速を開始するポイントだ。このまま帝国軍が進攻すれば、自転の影響もあって効果的な突撃を実行可能だ。わざわざそんな優位を与えるほど、叛徒たちは素人の集団ではないだろう。『ケルトリング中将の懸念も理解できるが、叛徒たちはここで足止めしたいのではないかな？ 加速に最適なポイントを押さえておけば我らは奴らを見捨てる事は出来ない。増援を待つつもりなのか？ それとも別動隊がパランティア星系を攻めているのかは判断に迷う

が……』

『ならば尚更先手を打たねば。増援が来る前に優位を活かして撃破すればよい。パランティア星系が攻められているとしても、残存艦隊で十分対応できるはずだ』

『ローエングラム伯、好機を逃す訳には参りませんぞ。我々には勝利する義務がある事を忘れてはなりません』

クラーク提督が私の懸念に応じて意見を出したが、エーレンベルク・フォーゲル両提督は、むしろ各個撃破の好機と捉えたようだ。本当に各個撃破の好機なら、会議をしている時間すら惜しい。本当に好機ならだが……。

『分かった、ここは各個撃破の好機と捉えよう。我々には勝利が義務付けられている。機会を逃す訳にはいかない』

総司令のローエングラム伯が決断された。ドラゴニア寄りの右翼からクラーク・私・総司令・エーレンベルク・フォーゲルの順に艦列を整えながら前進を始める。独立艦隊は予備として中央後方に控える。

「それにしても妙な布陣だな」

お互いに長距離ビームの最大射程に入ったが、叛徒たちは距離を少しづつ縮めながらも後退している。そしてクラーク艦隊が対する敵左翼を先頭に、斜線陣を取っている。ドラゴニアの影響がどんどん強くなり、こちらの艦列は乱れがちだが、あちらの艦列は見事に維持されている。

「叛徒どもめ、何を企んでいる……」

罠の存在は確信に変わりつつあるがいつ来るのが分からない不安が脳裏を侵食していく。

「まだか……。まだか……」

周囲には聞こえないように呟きながら戦況を見守る事90分。丁度帝国軍の右翼がドラゴニアに最接近した所で、この答えが明らかになった。

『エネルギー反応が一気に増加しています。砲撃。来ます』

オペレーターの警告と共に叛徒たちの猛撃が開始された。自転の

影響で背中を押され前のめりになっていた前衛部隊がかなりの被害を受けている。

「臆するな。撃たれたら打ち返せ！こちらの優勢は変らぬ」

これが狙いか？確かに手痛い損害を受けたが、こちらの優勢を覆す程ではない。このまま押し切れる。そう判断した時に、戦術モニターに映る叛徒どもの艦隊に新たな動きがあった。

『これは……。敵最左翼が戦線から後退、その穴を埋める様に全艦隊が左翼に向けて突撃を開始しています』

「敵の狙いはこれか！小惑星をうまく使っている。だがそれだけで数的不利を覆せると思ったら大間違いだ。光るものがあるのは認めるがな」

小惑星ドラゴニアをうまく使い、叛徒どもは安全地帯を意図的に作り出した。帝国軍右翼のクラークゼン艦隊はドラゴニアに近すぎてこれ以上戦線を広げられない。それに対して、叛徒どもの位置なら自転を利用してスイングバイが可能だ。加速した叛徒は艦列を整えて最右翼に回る。戦力の展開を制限された帝国軍は、叛徒どもの艦列に削り取られる様に撃ち減らされている。

『総司令部より入電。叛徒の艦隊機動に正対、左舷45度回頭せよ』  
「オペレーター、総司令部につないでくれ」

確かにこのままではこちらの損害も大きい。だが、予備戦力を左翼後方から迂回させれば叛徒たちの艦隊運動を断ち切れる。ここは上申すべきだ。

『総司令部とつながりました。どうぞ』

「ローエンングラム伯、戦闘中の上申をお許しくください。敵の思惑に應じる必要はありません。予備兵力を左翼後方から迂回させ、艦隊運動の起点を断てば我々の勝利です」

『ケルトリング中将、戦術モニターをよく見たまえ。最左翼のフォーゲル艦隊の損害が著しい。このままでは左翼から押し込まれ、半包囲されかねない状況だ。予備戦力はフォーゲル艦隊の援護に出さざるを得ない』

馬鹿な。いくら突撃の起点とは言え、なぜこうも損害が出ているの

か？それとも総司令が言われた通り、左翼を押し込んでドラゴニアに押し込む形で半包囲するのが目的なのか？戦術モニターに視線を向けているうちに、予備戦力がフォーゲル艦隊の援護に向かう様子が映し出される。

『気づいたことがあればいつでも上申してくれ。フォーゲルがもう少し持ちこたえてくれればな……』

そう応じて通信が切られた。フォーゲル中將は一定水準の能力をお持ちだ。どうしてこうも損害に差が出る。なぜ攻撃の勢いが衰えない。帝国軍左翼への砲撃の密度は濃い。損害を考えればミサイルも撃ちまくっているはずだ。帝国と叛徒どもが使う艦型にそこまでの大きさの違いはない。補給を受けなければこんな戦い方は維持できざるはずがない。

「まさか、後退した部隊は補給を受けてから左翼に回っているのか？」その答えを得たのは30分後。猛撃を受け続けた帝国軍左翼は援護に入った独立艦隊を含めてもかなり撃ち減らされていた。叛徒どもは何かしらの方法で補給を受けているのは明らかだ。

宇宙暦742年 帝国暦433年 2月中旬

小惑星ドラゴニア付近 メンテナンス部隊 指令艦

アレクサンデル・ビュコック（一等兵）

「無心だ。集中しろ。余計なことは考えるな……」

そう呟きながら、俺は自分のオペレーター席で文字通り奮闘していた。これを経験したら受験勉強なんて楽勝だ。メンテナンスを開始して既に2時間。分艦隊は一巡したが、どんどん減っていくミサイルの残弾数、埋まっていく重傷者収容枠。実戦を正直甘く見ていた。戦死の可能性は旗艦より確かに低かった。でも、艦橋でモニター越しに敵味方の戦闘艦が光点になるのを見るより、戦争を肌で実感できる。『いいかアレク。実戦は訓練とは少し違う。だから訓練でやった事をミスなくこなすのが大事だ。色んなことを感じるだろうが、それに負けるな。負けそうになったら無心になるんだ。そして任務をこなす。お前なら大丈夫さ』

そう言ってくれたエイポーン軍曹をメンテナンスの合間に探したが、姿が見えなかった。その時になって、重傷者管理の為に他の部屋で指示を出すと軍曹が言っていたのを思い出した。そんな事を忘れるほど、無心でモニターと向き合っていたのだ。

軍曹が言っていた事は本当だった。戦力的に劣勢な同盟軍が曲がりなりに帝国軍を抑え込んでいるのは、ドラゴニアを活かした戦列形成とメンテナンス部隊の補給のおかげだ。ミサイルの残弾数でどれだけ撃ちまくっているかがわかる。そして、重傷者数の増え方から、短距離で撃ち合っている事も。そうこうしているうちにモニターに艦名が次々に表示され始める。その中に『長門』を発見した。良かった。提督はご無事だ。

「無心だ。集中しろ。余計なことは考えるな……。」

そう言い聞かせながら、タッチペンで『長門』の項目に触れ、メンテナンスを担当する艦をクリックする。建前じゃなかった。今、俺はターナー提督の命を預かっている。そして一つひとつの指示が命に係わるんだ。

「無心だ。集中しろ。余計なことは考えるな……。」

もしかしたら『ハードラック』や『ルーガイラン』、『ヴィヴァスヴァット』もあつただろうか？そんな事が頭をよぎったが、また自分に無心になれと言いつ聞かす。担当するメンテナンス艦の残弾数がほとんどなくなり、収容枠も余裕がない……。

「どうする……。どうすれば良い……。」

食い入るようにモニターを見つめ、出来る事がなくなつたと絶望しかけた時。

『うおおお！勝ったぞ!!』

と歓声が上がった。そこでようやく俺は同盟軍が勝利した事に気づいた。

「おうアレク。キツチリ任務を果たしたようだな。お疲れさん」

どこからともなく現れたエイポーン軍曹は、いつもと変わった様子もなく明るく声をかけて来た。軍曹が手渡してくれた官給品の紅茶を一息で飲み干し、お代わりを飲もうと席を立った時に気が付いた、

自分の腰が抜けていて歩けない事に……。

こんな時は深呼吸だ。そして数を数える。2……。4……。5……。8……。9……。11……。そして13。よし落ち着いた。すぐに損害速報を呼びだして目を通す。少なくとも艦隊旗艦は無事なようだ。

「ふう……。」

そこまでして、ようやく初陣と言って良いのか分からないけど、勝利を経験した喜びのような妙な感情が湧きだしてきた。

「うおおー！」

その感情が抑えられなくてみんなとふた呼吸は遅れて雄たけびを上げた。そんな俺をエイポーン軍曹を始め、みんな温かい表情で見てくる。その表情から何かを感じとるには俺はまだまだ新米だった。彼らの表情が、童貞を捨てた後輩を見る者だった事を知るのは、もう少し先になる。

戦闘に勝利してからも忙しい。自軍も含めた救援活動、負傷者の後送、捕虜の収容。結局割り当てられたベッドに潜り込めたのはこの時から12時間後だった。でもそれで良かったんだと思う。あの後すぐに寝ようとしても興奮して寝れなかっただろうから。こうして、俺の初陣らしきものは幕を閉じた。

## 第76話 鬼教官の講義（ドラゴニア会戦）

宇宙暦773年 帝国暦464年 9月上旬

惑星テルヌーゼン 同盟軍士官学校

ウランフ候補生

「ムーア候補生、私の講義で余所見とは良いご身分だな」

「はい。いいえ教官殿。小官は予備資料の閲覧をしていただけであります」

「ほう……。そうか。私は候補生ひとり一人が誠実であると信じている。だから確認する事はしない。ただし、任官した後にそれが通用するとは思わない事だ。上官と部下の関係になればひとり一人信頼に値するか見極める。少なくとも私はそうしてきたからな」

ビュコック教官に一喝されてムーアは極まりが悪そうだ。あの様子だと大好きなフライングボールのリーグ戦速報でも観ていたな。教官としても候補生が嘘をついたと明らかにしてしまえば何かしら処分しなければならぬから敢えて見逃したという感じだろう。同期のムーアやパストーレは、代議員の親戚である事を鼻にかけて目に余る行動をすることが多い。中には見逃す教官もいるが。さすが鬼教官と言われるビュコック教官だ。この講義でそういう事は許さないと明確に意思表示された。

「さて、話を戻そう。今日の教材は『ドラゴニア会戦』だ」

そう言いながら教官が手元のタブレットを操作すると、講義室中央に設置された3Dモニターが起動し、小惑星ドラゴニアの宙域図が3次元で表示される。白と緑で補足線が追加され、自転方向や通常航路が示される。

「730年マファイアが主導した会戦のひとつとして有名な会戦だ。候補生の多くも一度は分析した事があると思う。帝国軍は赤、同盟軍は青で表示している。一度開戦から終戦までの流れを確認した上で、何名かに私見を述べてもらう。では、始めよう」

教官がそう言うのと3Dモニターに表示された両軍が動き始める。本来ならアルレスハイム側から進出した際にスイングバイを開始し

するポイントに遊弋した同盟軍。状況に戸惑うかのようになり、一度進軍を停止してから、帝国軍は意を決した様に進軍を再開した。長距離砲の射程に入り、砲火を交えながら同盟軍は後退、帝国軍は前進していく。それと同時に新たな補足線が表示された。帝国軍の索敵範囲でドラゴニアの影になる部分が判りやすく表示される。そしてその陰になる部分に同盟軍の増援が表示される。

一方で後退しつつ斜線陣を形成する同盟軍。そして帝国軍がドラゴニアに最接近したタイミングで、同盟軍が新たな動きを始める。分艦隊単位で、左翼方面に砲火を交わしながら進軍し、最左翼まで進むと後方へ離脱。そのまま艦隊後方のメンテナンス部隊で補給を受け、また最右翼から戦線に復帰する。ドラゴニアが邪魔になり、帝国軍右翼の艦隊展開に制約がかかるポイントまで引き込んだ辺り、戦術の妙を再確認する思いがした。

ただ、後退に違和感を抱かせない為とはいえ、自軍より2万隻近く多い帝国軍を相手に、計画的な後退戦を実行した先人たちの胆力にも畏怖を感じる。もし帝国軍が損害を無視して全軍突撃を実施していたら、食い破られていた可能性もあったはずだ。

こうして寡兵をうまく展開しながら帝国軍を押さえている間に、本来のパランティア側からの航路を突き進み、スイングバイのポイントで加速しながら、左舷ではなくドラゴニアに沿うように右舷に舵をとり、帝国軍後方に増援部隊が進んでいく。

挟撃が成功してから包囲までの展開も、帝国軍が気の毒になるほど見事だ。帝国軍の左翼後方から突撃した増援部隊は、そのまま帝国軍中央に痛撃を与えると右舷に舵を取り、帝国軍右翼の後方に展開。メンテナンス艦部隊から補給を受けた分艦隊が増援部隊の通過した穴を埋める様に展開して、挟撃から包囲殲滅へ陣形が変化する。そこからさらに数分、包囲の中で帝国軍が撃滅される様子が流れた後、時間経過が止まった。

「さて、では私見を聞いていこう。まずは……。パストーレ候補生、述べよ」

「はい。やはりアッシュビー提督の艦隊運用の構想の偉大さが光るも



のかと。小官もこうありたいと思う次第です」

730年マフィアの代表的な存在であるアッシュビー提督の特徴は、大きな視野での作戦構想にあると私も思う。ファイアザード会戦ではあの長征一万年もかくやという艦隊展開で挟撃を成功させた。ドラゴニアはそれを凝縮した一例とも言えるだろう。帝国軍を寡兵で待ち受けて引き寄せ、挟撃から包囲殲滅に至るまで思惑通りに運んだ。パストーレの意見は間違っていないが、ハイスクールの学生でも言える意見だ。

「うむ。ではウランフ候補生。私見を述べよ」

「はっ。小官としては寡兵で敵軍を引き受けるにあたって、艦隊司令達の能力や現場の努力に頼るのではなく、斜線陣からの全軍での機動戦術、メンテナンス部隊の配置に凄みを感じました」

「うむ。ちなみに私は当時メンテナンス部隊に配属されていた。無くなっていくミサイルの残弾、埋まっていく重傷者の収容枠。もうだめだと絶望しかけた時に勝利が確定してな。周囲の歓声でそれに気づいたのだが、一息つこうとオペレーター席を立とうとして気が付いた。腰が抜けて歩けない事にな。振り返れば圧勝だったが、後方のメンテナンス部隊ですらそんな状況だった事を添えておこう。では次に……」

『ビュコック教官は3年次の夏休み明けの講義は必ずドラゴニア会戦を題材にするからな。ちゃんと予習しておくといふ事があるかもしれないぞ』

候補生の私見を聞いていく教官を横目に、事務長として赴任されたシトレ少佐の言葉を思いだしていた。当時大佐だったビュコック教官が士官学校に教官として配属されたのが10年前。シトレ少佐はそう言うくくりは公式にはないが、ビュコック一期生といえる方だ。候補生だけじゃなく、民間人でも軍の胸章に詳しい人物なら、教官の胸章のひとつがレンジャー有資格者を示すものである事に気づく。

その資格の取得難易度を示すかのようには、教官は士官学校に赴任してからすつと自主トレを欠かさない。誰が言い出したか、いつの間にか『鬼のブートキャンプ』と呼ばれ、毎年自主的にそれに参加し、そ

の多くが脱落していくのが士官学校の恒例行事だ。私はしぶとく食らいついているし、シトレ少佐も、『懐かしいですな』と赴任されて以来、笑顔で復帰された。

もちろん苦しい事ばかりではなく、教官の伝手で割引してもらったウーラント商会の高級食材を使ったバーベキュー大会などもある。そう言う場にはOBもたまに参加する。参謀畑を進まれているグリーンヒル大尉や、入れ替わりで卒業されたボロデイン・ホーウッド両先輩と知己を得たのもバーベキュー大会の場だ。

バーベキュー大会にはターナー商会で働いている教官の息子さんや、市立経大に進学した娘さんたち、そしてまだ9歳の双子の男の子も参加する。鬼からこんなキレイな娘さんが出来るのかとびっくりするのも、教官の妻であるサラさんを見て、『サラさんの遺伝子が強くてよかった』などと話すのもブートキャンプ継続組の恒例行事にもなっている。

話を戻そう。これは諸先輩方の私見も含めた話だが、ビュコック教官は意図的に何か苦難に立ち向かった共通の経験を末する場を設けるためにブートキャンプを継続されているのだと思う。『同期を持つなら730年マファイア』なんて言葉があるが、多くの候補生が彼らの輝かしい功績に目を奪われて、本質を理解しているものは少ない。

730年マファイアは確かにひとり一人が優秀だった。ただ、特筆すべきはその団結心と信頼関係だ。ファイアザード会戦でも、ドラゴニア会戦でも、確かに戦史に残る勝利をあげられた。だが、アツシユビー提督の構想を実現し、あらゆる可能性を検討し、対策を立案した僚友がいなければ、彼の構想も絵に描いた餅だし、一步間違えば大敗していた可能性もあった。

ブートキャンプが自己鍛錬の場だけでなく、ブートキャンプに耐える経験をした人物たちの顔つなぎの場としての機能を有しているのも、結局は信頼できる軍人を、先輩後輩関係なく見つけろと言う意思なのだと思う。そしてそれはブートキャンプに限らない。試験対策なり、シミュレーターで切磋琢磨するなりなんでもよいのだ。もつとも候補生からみても甘く言って過酷なブートキャンプ以上の連帯感

は生まれないうらう。私自身、同期のムーアやパストーレより、シトレ少佐たちに親近感を感じる位だ。

『キツイかもしれんが、ブートキャンプは頑張れ。きつとウランフの宝物になる。それに、本当は教官が一番欲しかったものを得られる場かもしれんぞ』

シトレ少佐の言葉を思い出す。15歳で早期志願し、ドラゴニア会戦に一等兵として参加した教官は、翌年士官学校に合格し軍歴を大きく転向した。ただ、実戦経験があり、当時のターナー中将の従卒だった事もあって、同期の中では浮いた存在だったとも聞く。成績もよかったしレンジャー資格も持っていた彼は、同期どころか先輩から見ても格上の存在だった。反発する者や迎合する者はいいても、信頼できる僚友足りえる存在は、遂に現れなかった。

その傾向は、士官学校卒業後にさらに強まる。第2次ティアマト会戦の勝利で昇進したターナー元帥の補佐官として軍歴を始め、長年宇宙艦隊司令長官の地位にあったジャスパール元帥や、統合作戦本部長だったファン元帥を始め、730年マフィアの面々から直々に薫陶を受けた。

多くの候補生は、教官をどこかで見た記憶があるはずだ。統合作戦本部長や宇宙艦隊司令長官の秘書官として、広報活動にも参加していた教官には私にも見覚えがあった。それを抜擢と捉えるか？ひいきと捉えるかは人それぞれだが、防衛戦争を圧倒的優勢にした同盟軍では実戦の機会が減り、教官が実力を示す機会は少なかった。それもあってひいきと判断した人物も多かったようだ。

『最近の新任士官はたるんどる。アレク、お前が行って叩き直してこい。宇宙艦隊司令長官になる頃には、帝国軍はまた押し寄せてくるぞ。当てになる連中を育てておけ』

そう言ったのは、私の中では財務委員長という印象が強いターナー元帥だという説と、宇宙艦隊司令長官だったジャスパール元帥だったという説があるが、36歳で大佐、宇宙艦隊司令本部の参謀のひとりだった教官は、主任教官として士官学校に赴任する。3年後に准将に昇進し戦略研究科の学部長に、更に3年後に少将になり副校長を兼任

した。数年前から宇宙艦隊司令部に戻り、艦隊司令になると言われている。

『ウランフさん、父の旗下になる事があつたらよろしくお願いしますね。厳しい人だけど、優しい人でもあるんです』

国葬だったため士官学校の候補生も動員されたファン元帥の葬式で、教官の次女、レベツカ嬢から言われた言葉を思い出す。『喪服の女性魅力的に見える』とはだれの言葉だったか。いつも以上に美しく見えた彼女に、思わず承諾の旨を回答していた。

教官に恩返しができて美しい女性の願いがかなえられるなら、私自身も本望だ。もっとも旗下に呼んでもらえるか？という問題が先にあるが……。後に勇将として多少の名声を得、宇宙艦隊司令長官の婿のひとりになる私の候補生生活は、こうして過ぎて行った。

## 第77話 老提督との邂逅：僚友（後編）

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン ローザス邸

ヤン・ウエンリー（少佐）

「さて、次はウォーリックとコープの話でしょう。正直、個人的にも彼らには複雑な思いがある。誤解してほしくないのだが、悪い意味ではない。私自身は士官学校に入る前から、同世代の才能達の潤滑油足らんと志していた。そして実際に輝く才能たちと行動を共にすることで予想外の栄達があったわけだ」

一呼吸置くように2つのカップにお代わりを注いでから、ローザス提督は話を再開した。ウォーリック元帥とコープ元帥は、士官学校の成績も優秀だし、なんでも器用にこなす印象が強い。特にウォーリック元帥の多彩な趣味は、軍一辺倒になりやすい軍人に趣味を持つという意味を込めて、今でもエピソードが語られることも多い。

「経歴を見る限り、お二人とも私が言うのは失礼かもしれませんが、控えめに言っても優秀な方だと思いますが……」

「その通りだ。前線で兵を率いて良く、作戦家としての資質も持ち合わせていた。軍政面でも優秀だった。なんでもこなせる2人を、当初は羨ましく思ったこともある。だが、ちょうどドラゴニア会戦が終わった時期から別の考えが頭をよぎる様になった」

そこで言葉を区切り、少し考えこむような素振りをされる。発言をせかす必要もない。私は注がれたばかりの紅茶のカップを手に取り、再びシロン産の良い香りを楽しむ。暗黙の了解で嗜好品は持ちこむ事は可能なのだが、任官したての若造がシロン産の紅茶を持ち込むのは気が引けた。官舎には常備しているが、飲む方は得意なのだが、淹れる方はからつきしの私にとって、確かな淹れ方で紅茶を飲むのは久しぶりでもあった。

「なんと評すべきか……。ドラゴニア会戦の勝利でアッシュビーが宇宙艦隊司令長官となった際、こう思ったのだ。戦略はターナー、戦術はアッシュビー、軍政はファン、兵からの人気ではジャスパート

ヴイットリオが双壁だった。なんでもこなせながら、第一人者になれずにいる彼らには複雑な思いを抱き始めていた。何といえれば良いのか？少なくとも生まれる時代が少し違えば、彼らは第一人者になれる能力も、気概もあつたはずだからね」

言葉を区切りながらも提督が紡ぎ出した言葉は、ある意味的を得ていると思う。第二次ティアマト会戦で勝利し、帝国の脅威がひと段落した後、真っ先に軍を退役して政界に活躍の場を移したのが彼らだ。ウォーリック元帥は国防委員会へ、コープ元帥は法秩序委員会へ圧倒的な大差で当選した後に進みを進めた。

「私個人は、730年マフィアの中で、お二人が政界に活躍の場を移した事は、結果として良かったと思っています。増大する一方だった国防費に初めてメスが入れられ、警察組織も防諜体制に一役買うようになりました」

「そうだな。あのときは『とうとう軍だけじゃなく政界まで730年マフィアが牛耳るのか』と心無い非難もあつたが、きちんと成果を評価してもらえたことを、彼らも喜んでいるだろう」

同盟市民10億人あたり一個正規艦隊を整備する。その方針に最初に待ったをかけたのはターナー元帥だ。彼はドラゴニア会戦の数年前から、艦隊数ではなく装備更新を重視する主旨の上申を行っている。実際、730年マフィアの活躍を支えた要素のひとつに、旗下の艦隊が最新鋭の装備で整えられていた事を上げる評論家も多い。

「一応、これでもヤン商会の長男ですから……。父から経済的な指導は幼い頃から受けていましたから……」

「そうか。少佐も軌道エレベーターの契約に連れ出されたんだつたな。あれは些かやりすぎな感はあるが、経済界で重視された慣習でもあつた。誰にどの押印を任せるか、ターナーが悩んでいたのを思い出す」

ハイネセンで既に運用が開始された軌道エレベーター。フェザーンの物を参考に設計されたが、軍事利用も踏まえた独自改良もされている。事業計画が動き出したとき、私はまだ10歳にもなっていなかった。当たり前のように利用している軌道エレベーターの完成が

たった10年前だと思うと、意外な気持ちがある。もつと以前からあっても良い気がするのも確かだ。

「残念ながら私は経済界には進みませんでした。押印仲間たちには申し訳ない氣もします」

「それを気にする必要はないさ。あれは子供の成功を願う親の為の儀式だ。それにウォーリックもコープも軍人として成功をおさめたからこそ、大きな方針転換となる決断を推進する影響力を確保できた。それに倣えとは言わんが、氣になるなら将来なにかしら国益に寄与すれば良いだけだろう。それにウルヴァシーで400万人の民間人を救ったのだ。それで十分な氣もするが……」

「やめてください。あれは何と申しますか……。とにかく運がよかったです」

私の反応が面白かったのか？提督は少し嬉し気に紅茶を飲まれている。提督の言われた通り、国防費にメスを入れたウォーリック元帥は、正規艦隊を既存の13個艦隊に制限し、新型艦への更新も3個艦隊に限定した。その上で、膨大な開発費がペイ出来ない事を懸念した軍需産業へ配慮して軍との共同開発を条件に研究開発費を大幅に増額した。

これによつて5年周期で3個艦隊の装備が更新されることになる。巨額の研究開発費が注ぎ込まれたことで、今までとん挫していた多くのプロジェクトが動き出した。そこで得られた新技術が惜しみなく使われた新型艦は、性能と共に価格も高騰するが、戦力としての宇宙艦隊の密度を高めた点で、予算の使い方としては最適だった。13個艦隊全てを装備更新していたら、ここまで研究開発が進むことはなかっただろう。

「コープの法秩序委員長就任の時も色々な声があつたが、成果が出たときは自分の事のように嬉しかったな」

警察を防諜体制に組み込む政策は、一歩間違えと秘密警察の登場を想起させ、計画段階から反対の声があつたのも事実だ。だが、計画が実行された直後に、言論の自由を標榜していたコメンテーターや文化人がフェザーンから不明瞭な資金提供を受けていたことが明らかに

なり、最初の摘発対象となった。その後も、辺境の小惑星に作られた麻薬精錬施設や、第一次産業がメインだった地方星系でのフェザーン工員員の逮捕劇などの活躍が大々的に広報されると、反対の声は鳴りを潜めた。

『法秩序委員会と協力しつつ取り組んでいる防諜体制の確立は、ある意味で国防の最前線だ。考えてみて欲しい。我が軍の最新戦艦の設計図がフェザーンに盗まれ、帝国軍に活用されたらどうなるかを。市民の皆さんの長年の努力を無駄にしてはならない！』

国防委員長になった所信表明演説でウォーリック委員長はこう述べた。そして秘密警察にならないよう、最高評議会議長、財務委員長、国防委員長、法秩序委員長、そして統合作戦本部長の5名に報告を義務付けた事も併せて公表した。市民たちは防諜活動に一定の歯止めがかかった事に安心したし、これ以降、防諜機関の注意人物リストに載る事が一流ジャーナリストの証という風潮が言論界に生まれるのだから面白い。

『成功者は妬まれて普通。本物はそう言う連中も味方にするものさ』  
あれは士官学校に合格した事を報告しに、父さんと一緒に彼が所有する蒸留所を訪れた時に言われた言葉だったか……。

『タイロンからしたらうまい酒でも飲まないとやってられないだろう。候補生なら一人前扱いしてやろう。今度ジークマイスターと言う銘で売り出すウイスキーも用意した』

そう言って年代物のウイスキーやブランデーを飲ませてくれた。やけに美味しいチーズにソーセージ。初めて二日酔いになったのもあの時だ。そうか、ジークマイスター室長の名前を、彼はこういう形で遺そうとしたんだな。なぜ忘れていたんだろう。

『二日酔いか。ウエンリー、二日酔いの時にしか飲めない酒がある。それは迎え酒だ』

そう言いながら、シロン産の紅茶にブランデーを少し垂らしたものをを出してくれたっけ……。そんな思い出が、ふと頭をよぎった。良い紅茶の香りとブランデーの香りのハーモニーはなんとも魅惑的だ。あれ以来、紅茶にブランデーを少し垂らすのが私のお気に入りになっ



た。

「さて、残るはターナーとアッシュビーだが、もう夕暮れ時だ。それに色々思い出した事もあり、私も一度整理したい。続きはまたの機会でもよいかな?」

「申し訳ありません。楽しい時間はあつという間に過ぎると申しますが、本来なら私から気づくべきでした」

書斎の窓から刺す光は、既に夕暮れ時の物になっている。楽しい時間にも夢中になってしまふのは私の悪い癖だ。

「レイチエルがダステイ君を呼ぶといっていた。声をかけてくるから寛いでいてくれ」

提督はそう言うと、書斎を出て行った。恐れ多い気もするが、こういう時に素直に甘えないと、退役軍人のお歴々は逆に気を悪くする。『年寄り扱いするな!』ってよく言われたものだ。憧れの書斎の雰囲気浸っていると、

『コンコン、コンコン』

とノックがされる。それに応じると

「ウェンリーさん。ダステイはもう到着しているわ。私と話し込んでいたの。待たせてしまつてごめんなさい」

「いいんだよレイチエル。私も楽しい時間の余韻に浸っていたからね」

そう応じると名残惜しい気持ちを押し殺して席を立ち、階下に向かう。提督の孫娘のレイチエル嬢とは何回か面識がある。距離感の近さが特徴的で、テルヌーゼン市立経大に在籍している。ご両親はハイネセンで働いていたはずだ。

「ウェンリーさんからも一度ダステイに注意してくれませんか? マフィアの身内同士ならともかく、教官相手に偽悪主義を貫くなんてバカみたい。もうすぐ卒業なのに、眼を付けられた教官の旗下になつたら割を食うのはあいつなのに……」

「親父さんに似たのかなあ。ほら、あいつの親父さんは有名なジャーナリストだし、士官学校で非推奨の文庫を回し読む会で会長をやつていたはずだし……」

「そんな事までしてるんですか？あいつの事だから活動に夢中になって自分はそんなに読んでないのが目に浮かびます」

レイチエル、あんまり婚約者を見透かしちゃだめだ。アツテンボロー、ちゃんと援護できなくてごめん。彼女が言ったマフィアとは、730年マフィアの面々が軸になり縁をもった人間が非公式に作った組織の呼称だ。家族ぐるみの付き合いをしていた彼らの子弟は、その後も縁を大切にした。父のタイロンも初期からのメンバーだ。

彼らは年に数回、一堂に会する場を設け、そこにこれだと思う人物を連れてくる。経済界や官僚、そして軍に散らばった独自の人脉で影響力を維持している。ターナー元帥旗下で参謀長をつとめたアツテンボローの曾祖父が、初代事務総長だったはずだ。もともとは休暇の際に前線に残した僚友達を気遣い、僚友の家族も集めてバーベキューやキャンプをしたことがきっかけだと言うから、本人たちもびつくりだろう。

「ターナーさんとタイロンさんから毎年貰っている花束に免じて、何も聞かなかつた事にするわ。その代わり、私達に娘ができたなら、ウエンリーさんも宜しくね」

「ちやつかりしているなあ」

マフィアの中で特徴なのは、特に親しい間柄の子弟の誕生日にシルバークトラリーを贈り合う事、そして女性には花束を、男性には成人の際に生まれ年のワインや、年代物のウイスキーやブランデーで祝う。会場はターナー商会の蒸留所が最上とされる。年代物の酒の分野はターナー商会の独壇場だから無理もない。そう言う意味では少し早かったが私も彼直々に祝ってもらったことになる。そして母や妹の誕生日に大量の花束が届くのも我が家の風物詩だった。

「初めはきれいなお花が毎年届くのが嬉しいと思っていたわ。確か10歳の誕生日だったかな。カークさん直筆のカードが付いていたの。『外見はこの花のように美しく、内面はこの花以上に美しく』ってね。帝国の文化に詳しい友達に聞いたら、『花を贈られた分、女性は美しくなる』って文化もあるんですって。どうせならそう言う感動を娘にもして欲しいじゃない」

そんな事を話しながら階下を目指す。

「先輩、任務お疲れさまです」

「アッテンボロー、世話になるね」

「いいんですよ。俺も先輩と話したかったですから。レイチエルまたな」

「はいはい。ウエンリーさん、また来てくださいね。祖父は久しぶりに長時間話したからか、サロンで眠ってしまったみたいで」

レイチエル嬢に見送られながらローザス邸を後にする。アッテンボローの先導で自動運転車に乗り込んだ。

「おっ。メンテナンスが終わったんだね」

「ええ。メンテナンスに出した専門業者からは売却を検討する際は必ず連絡をくれって念を押されましたよ。そんなに良い物なんですか？」

「ファイン社の特注モデル。自動巻きの腕時計。もともとターナー元帥が旗下の将校の退役の際に贈る為に作らせたんだ。シリアルナンバーが刻印されていて、誰に贈ったかもファイン社に写しがある。この宇宙に1000本しかないモデルだ。エルファシルとウルヴァシーに士官学校が新設される際に、その為のチャリティーオークションに一本だけ出されたんだ。その時の落札価格が30万ダイナールだったかな」

「うーん。それを聞くと常用するのは気が引けますね。母さんが『軍人になったのはお前だけだから、爺さんの形見を付けて欲しい』って言っていたんですが……」

「アッテンボロー中将は歴代の第13艦隊の参謀長の中でも、ご意見番的な存在で、ターナー元帥からも一目置かれていたといわれる存在だ。そんな曾祖父所縁の品なんだ。身に着けてあげた方が良いと思うよ。少なくとも盗品として捌けるような品物じゃないし」

ちなみにこの時計を頼み込んで手に入れた父さんは、更に当時は解隊していた第111強行偵察大隊のワツペンを模した刻印を作り、自分の物をカスタマイズした。さらにファイン社に依頼して、当時存命だった旧第111強行偵察大隊の元所属隊員49名に、同じように腕

時計を贈った。エレングランマや既に鬼籍に入ったが、ハドソングランパはどちらも所持していたはずだ。

そして、士官学校が新設されたことで、指導役として在籍していた生徒の6割が異動し、同時に戦史研究科の廃止が決定された。文科系の教育予算も充実しつつあり、歴史研究は記念大と自治大に任せる判断が下りた訳だ。そこから私の人生は予期せぬ方向へ動き出す事になる。

「それにしても詳しいですね。やっぱりタイロンさんの影響ですか？」

「うーん。私はそこまでじゃないよ。部隊のワツペンの善し悪しなんて私には分からない。商船に乗りながら各地の駐留部隊のワツペンを買って漁っているからねえ」

父のワツペン好きは退役軍人の間でも評判だ。時間が許す限り自分たちの英雄談を笑顔で聞き、所属した部隊のワツペンをきれいにファイリングしている父は、いつの間にか退役軍人会の名誉会員に納まっている。

「でもよかったのか？アツテンボロー。折角ならレイチエル嬢と夕食を取りたかったんじゃない？」

「あいつの美点は世話好きですが世話を焼き過ぎないことです。それにローザス提督の薫陶もあって、『男同士の付き合い』って奴にも寛容ですよ。それに報酬を伴わない関係は長続きしない。ちゃんと報酬を貰ってこいと、うちの司令官から指示もでています」

「やれやれ。なら帝国亭が良いかな？久しぶりに本店の味を楽しみたいし」

「そう言うと思って予約してあります」

どうやら私よりアツテンボローの方が出世しそうだな。帝国亭へ進んでいく車の中で、私はそんなことを考えていた。

## 第四章 登場人物

第四章登場人物（～宇宙暦742年）

カーク・ターナー

今作の主人公。おぼろげながらある島国の宰相として上り詰めた記憶を持つ。（前世は田中角栄さん）オレンジの髪とエメラルドの瞳を持つ。超長期目線で、対帝国の必勝策を卒業論文とした。ジークマイスター分室では自主的に提案し、エルファシル駐屯地の増築、『ハイネセンの嘆き事件』『蝙蝠相場』への対応を担った。第13艦隊の艦隊司令となった後は、エルファシル方面の防諜体制の構築や国防委員会・統合作戦本部とのパイプ役を担う。ドラゴニア会戦で勝利に貢献したメンテナンス部隊も彼の上申により設立された。4章終了時は中将、第13艦隊司令、同盟軍最高幕僚会議常任委員。

■家族と友人

両親

惑星エコニアの開発計画の話聞いて、全財産をはたいてそれに応じた。カークを含めて4人の子供をもうけている。末っ子はカークの子供であるシュテファンとほぼ同年。カークが生まれた頃は打ち捨てられたしがない地方惑星だったエコニアも、捕虜収容所の大規模新設や地道な緑化事業が続けられ、同盟の同化政策の中心地、経済的にも地方星系の中で、頭2つつ分ほど抜き出た惑星になっている。カークの妹弟たちはエコニアで身を立てる方針。

グスタフ・ウーラント

仕えていた貴族の政争に巻き込まれ、娘と息子を連れて同盟への亡命を決断した帝国騎士。ウーラント商会の財務責任者。修行から戻った嫡男ユルゲンが戻ってきて経営に参画しているため、肩の荷が下りた。ユルゲンの妻であるジェシーの妊娠を知り、嫡孫の誕生を期待している。義息のカークには恩義を感じているが、カークも見込んでくれた事を恩義に感じているため、関係は良好。孫たちとバーベキューをするのが楽しみの一つ。

クリステイン・ターナー

今作のヒロイン。カークとの間に3人の子供を授かっている。接する機会が多かったカークの僚友達には、淑女然とはしているが、実は嫉妬深くてヤバイ事がうすうすバレている。任官以来、単身赴任をさせている事にも罪悪感を感じている。

シユテファン・ターナー

カークとクリステインの嫡男。名付け親はウォリック商会会長のグレック・ウォリック。

エリーゼ・ターナー

カークとクリステインの長女。名付け親はオルテンブルク侯爵（ジャスパールの祖父）。ファイアザード会戦の戦勝記念パーティーでは、ウォリス・ウォリックと手を繋いで記念撮影にのぞんだ。

ヴェルナー・ターナー

カークとクリステインの次男。名付け親は祖父であるグスタフ・ウーラント。ファイアザード会戦の戦勝記念パーティーでは、ブルース・アッシュビーに抱かれて記念撮影にのぞんだ。

ユルゲン・ウーラント

ウーラント家の嫡男。カークの義弟。優しい性格で才覚もあるそうだが、軍人には向かないと父親は判断していた。カークを始め、周囲のできる兄貴分たちを尊敬し、また可愛がられた。エドワーズインダストリーでの修行を終え、婚約していたジェシー・エドワーズと結婚した。ウーラント商会の役員として経営に参画している。

トーマス・ミラー

カークの4歳年上で、兄貴分。井上商会が捕虜収容所内に出店していた売店を任されていた。年の近いカークに井上商会の業務を教えたのも彼。母の妊娠を機に家計を助ける為に志願した。新兵訓練を終え、任地であるカプチェランカの途上であるエルファシルで、ヤン・シーハンと出会い、恋に落ちる。任地であるカプチェランカの基地が帝国軍の大規模攻勢を受け、戦死した。

ヤン・シーハン

カークの兄貴分のトーマスと出会い、恋に落ちた。共にいたのは一夜だが、お腹に命が宿る事となる。命名はタイロン。誕生日プレゼン

トを毎年とどけに来てくれていたキャプテン佐三と相思相愛となり、結婚した。(法的には初婚) ウーラント商会のエルファシル支社の経営者でもある。タイロンがハイネセンに進学した事もあり、キャプテン佐三との間に2人の子供に恵まれている。

ヤン・タイロン

カークの兄貴分であるトーマスとシーハンの子供。銀英伝原作読者なら知らないはずはないある人物の父親でもある。原作比で7年早めの登場。カークと出光による商人としての英才教育が開始されている。ビジネスの世界に進路を定め、名門である記念大経済学部に合格した。4章終了時で3年次。

アデレード

ブルースの初婚の相手。激論が交えられた離婚調停の末に離婚した。調停役になったアルフレッドをして『女性を怒らせるものではない』と言わしめた人物。

カトリナ・ローザス

進路は士官学校に隣接する音楽学校。カーク達の会食にも参加しており、クリステインとも友人である。アルフレッド・ローザスと結婚した。3児の母。

ファネツサ

カークがダンスパーティーに参加する代わりにファンのダンスパートナーになった音大生。コミュニケーションが苦手なファンに合わせて楽しい時間を過ごせる。ある意味逸材。ジークマイスター分室で愛妻弁当を食べるファンの姿は、ランチタイムの風物詩でもあった。ファンの出身地の名産を手土産に勧めるなど、交友が苦手な夫を支えてもいる。3児の母として家庭を守っている。

ルシンダ

ブルースの再婚相手、母親のナタリー代議員の秘書のひとりだった。アッシュビー重病説を流すために新婚旅行を兼ねて3カ月、バラト星系の惑星シュリナーガルのリゾート施設で一緒に過ごしていた。この配慮もあつて、原作では誕生しなかったブルースの子供が誕生した。

カタリーナ

ウオリスの結婚相手。長年愛人関係が続けていたが、ウォリック重病説を流すためにリゾート施設に引き込まれたウオリスに連れ添った。原作では恵まれなかったウオリスの子供を授かる。士官学校の合格発表の日に、赤い三本線をウオリスの首元に付けた女性でもある。

## ■ビジネス界

井上オーナー

誠実な商売を心掛けるウォリック商会から独立した商人。惑星エコニアで食品を軸に商会を経営している。エコニアに新設された捕虜収容所内に売店を出店していた。カークとの縁もありエコニアの顔役ともいえる立場に。帝国風の食材を振舞うことにより、捕虜たちの同盟への同化に一役買っている。現在ではエコニアが所属するタナトス星系でも有数の商会に成長している。

キャプテン佐三（出光佐三）

井上オーナーと同じく、ウォリック商会から独立した商人。商船の船長も勤める。定期的に会う機会があったヤン・シーハンの一時に安らぎを感じ、求婚した。タイロンの養父となる。彼が経営する出光商会も、バート派・亡命派、そして軍部にも太いパイプを得て成長中。

グレック会長 イネツサ夫人（ウォリック商会）

ウォリック商会の先代。現在は息子達に経営を任せている。バート系融和派の雄であり、亡命帝であるマンフレート2世とも面識があり、帝国の美術品にも造詣が深い。『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』に際しては同盟経済界を主導する立場となり、多大な利益を同盟にもたらした。宇宙暦741年に会長職を退き、引退を表明した。

ヴァレンティ補佐官

フェザーン自治領主府に所属する補佐官。同盟方面の案件を担当していた。『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』で、同盟に持つて



いたフェザーンの影響力は失われ、天文学的な損失が生まれた。後始末を終えた段階で、倒産した証券会社社員の逆恨みから射殺された。あまり話題にならなかつたが、補佐官には本来護衛が付くことになっており、本来ならあり得ない状況だった。

## ■政界

ナタリー・アツシユビー

国防委員会に所属する代議員。ブルース・アツシユビーの母。夫は軍需系の企業で役員をしている。事実上の別居状態。見た目も美しく、人妻と承知で口説いてくる相手も多いが、靡かない。末っ子のブルースが大好きで、何かと構うが嫌がられている。730年マフィアのファンとなり、彼らの為にも政界で頑張ろうと有力な支援者のひとりになった。ブルースの再婚に伴い、念願だった孫育ての為に任期満了に伴う総選挙に不出馬を決めた。現在は念願の孫育てと、ターナーを政界転出後のブルースの盟友にすべく、政策談義を定期的に交わるのが楽しみ。

ラファエル

財務委員会所属の代議員。顔と弁舌だけが取り柄。圧倒的な女性票の確保で当選している。男性からの支持は壊滅的。ナタリー・アツシユビーとは旧知の仲だが、中身がない事は彼女にも見透かされている。懇ろになろうとナタリーを口説くが袖にされている。

## ■亡命派

クラウス・フォン・オルテンブルク

ジャスパールの祖父。ジャスパールの活躍と亡命派への貢献を嬉しく思いつつも、亡命派の疑似的な貴族制を維持するために、それを公言出来ずにいる。付き合いのあるベルティニー二家を通じて、ジャスパールが縁を紡いだ案件に贖罪を兼ねて投資している。

クラウディア・フォン・オルテンブルク

クラウスの妻、ジャスパールの祖母。本当なら初孫であるジャスパールを可愛がりたかつた。ただ、正室との間に子供がいなかつた為、可愛がればジャスパールの身が危険になると判断し、厳しく接した。ジャスパールの活躍を応援するために持参金を投資案件につき込むように進

言した。

## ■軍関係

### 【帝国軍】

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

自分が生きている内は結果が出ない打倒帝国の夢を新しい希望とし、ターナーを支援する事にした。一時的には同盟内で屈指の影響力を得たが、個人の価値観で民主共和制の理想を実現する事は、民主共和制に反すると判断し、鍛えた730年マフィアの面々を分室から送り出した。帝国からもたらされる情報は、同盟が防衛戦争を優位に進めるのに大きな貢献をしている。いずれも大勝に終わったファイアザード会戦・ドラゴニア会戦も、彼経由で帝国軍の作戦計画が入手されていた事が、勝利を決定づける大きな要素となった。

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

自身の手腕を発揮できる場として進んでスパイ網の構築・維持に取り組んでいた。ジークマイスターが同盟に亡命した後は、帝国に於けるスパイ網のトップのような立場となっている。平民出身のコーゼルが正規艦隊司令となり、実力主義による任用を匂わせ、軍部貴族の競争心を煽る一方で、同志たちに噂を広めさせ、宇宙艦隊司令本部内の対立を煽った。結果として名門軍部貴族中心で計画された出征軍はドラゴニア会戦で同盟に大敗することになる。本人は軍務省参事官になり、役職上は第一線から退いている。

ケルトリング軍務尚書

伯爵家当主。元帥。就任直後に勅命により軍に皇族を多数引き受けさせられた。その結果多くの『名ばかり少将』が所属する事となり、対同盟戦で艦隊戦力を摩耗する事になる。そのツケを支払うかのように嫡男は名ばかり少将を率いたファイアザード会戦で戦死。敗戦を覚悟の上で、名門軍部貴族中心で計画された出征を許可するも、想定以上の大敗となる。次男もこの戦いで戦死し、ケルトリング伯爵家は後継ぎを2人ともアッシュビーに殺される事となった。

ツィーデン宇宙艦隊司令長官

侯爵家次男。元帥。統帥本部総長を中心とした名門軍部貴族たちの派閥抗争を抑えられなかった。結果として長年の友人であるケルトリング軍務尚書の次男を戦死させる事となる。これによりケルトリング伯爵家の直系は途絶えた。アツシユビーを破る事を本懐とし、平民出身のコーゼルを相手に、本心を吐露するなど、政治的な能力は低い。司令長官としては、器も人物眼もある人物。

ハウザー・フォン・シュタイエルマルク

少壮の戦術家で、巧緻な用兵家、また風格ある武人として後世まで名をなす名将。貴族出身だが、その才覚や人柄は貴族嫌いのコーゼルからも高く評価される。貴族出身ながら、選民主義に陥らず、実主義に基づいた任用を訴えていた。原作で言うヤンの様なポジション。優秀で先も見えているが、上層部の大多数は貴族の為、主流派にはなれずにいる。名門軍部貴族中心の出征が敗戦する事を予期した上層部の配慮で、正規艦隊司令に任命された。

コーゼル

幅の広い貫禄ある身体に豊かな茶色の髪、そしてするどく明るい褐色の目を持つ剛直な職業軍人であり、右手の甲には白いレーザーの傷跡が残っていた。貴族出身の高級士官がほぼすべてを占める当時の帝国軍にありながら、平民出身で中將、正規艦隊司令を勤める。名門軍部貴族中出身の軍務尚書や艦隊司令長官も彼の能力は内心認めていた。実力主義を標榜した統帥本部総長派と軍務尚書派との派閥抗争からも一線を引いていた。またミヒヤールゼンの行動から不審を抱き、ドラゴニア会戦前に内心を吐露してきた司令長官の信頼に応える様に、自身が感じていた疑念を打ち明けた。

ウイルヘルム・フォン・ミュッケンベルガー

ケルトリング軍務尚書の甥。原作で宇宙艦隊司令長官として登場するグレゴール・フォン・ミュッケンベルガーの父親。能力的には軍人として素養を備えていたが、軍務尚書の息子の後任として正規艦隊司令になった事は、宇宙艦隊内部では情実人事と受け取られ、宇宙艦隊司令たちのスタンドプレーをむしろ煽る事に繋がった。

ロイズ伯

選民思想の典型の様な皇族。軍事的素養は全くなく。ファイアザード会戦までの途上でも何かと身勝手な行動を行い、司令官であったケルトリング中将（軍務尚書の長男）の足を引っ張った。帝国軍右翼を担ったが、ブルース主導の背面突撃に一蹴され、泣きながら命乞いをした。後に帝室の予算から身代金として100億帝国マルクが支払われ帰国するが、即自裁を命じられ、ロイズ伯爵家は取り潰しとなる。皇帝は一罰百戒のつもりだったが、一部皇族と後ろ暗い所がある門閥貴族が動揺した事で、帝国の政情は不安定になった。生前だけでなく死後も帝国に悪影響を及ぼした人物。同盟にとつてはある意味英雄。

#### ケルトリング兄弟

名門軍部貴族であるケルトリング伯爵家に生まれ、軍務尚書でもあった父から厳しく養育された。軍人としても水準以上の能力を持っていたが、兄は名ばかり少将達に足を引っ張られファイアザード会戦で戦死。弟は、統帥本部総長派に属した名門軍部貴族中心の出征に参加し、ドラゴニア会戦で戦死した。

#### ローエングラム伯

軍部貴族の中でも武門の家柄とされるローエングラム伯爵家の当主。帝国軍の派閥争いに関連して、統帥本部総長派に属し、宮廷工作・陛下への上申を行うなど主導的な役割を果たした。ただ、残念ながら軍人としての素養はそこまでなかった。また優秀だった庶子の兄を妬んで冷遇した事で、その兄がミヒヤールゼンの同志となり、彼の足元に罠をめぐらす事となる。結果として油断した彼が率いた出征軍はドラゴニア会戦で包囲殲滅され、彼自身も戦死した。

#### エーレンベルク中将

侯爵家の3男。名門軍部貴族出身で、正規艦隊司令。ドラゴニア会戦では速戦を主張し、同盟軍の罠にはまる結果となる。挟撃成功後は同盟軍の増援3個艦隊の突撃を受け、旗下戦力は壊滅的な打撃を受けた。包囲殲滅の過程で戦死。

#### フォーゲル中将

伯爵家次男。名門軍部貴族で正規艦隊司令。ドラゴニア会戦では

慎重論を唱えたケルトリングに対して速戦を主張した。最左翼を担当していた彼の艦隊は、同盟軍の機動斜線陣の前に猛撃を受け続け、予備戦力を援護に回されるほどの損害を会戦序盤で受けていた。挟撃の際も、真つ先に突撃を受け、限界に近かった事もあり一瞬で崩壊した。真つ先に崩壊した事で、彼の旗下のごく一部が包囲される前に戦場から離脱出来たのは運命のいたずらだろうか。

クラーク中將

伯爵家次男。名門軍部貴族出身で正規艦隊指令。ドラゴニア会戦では慎重論を唱えたケルトリングに同調するも、勝利を標榜していたローエングラム伯は、進撃を決定。最右翼を担当していた彼は、ケルトリングと連携して包囲後も奮戦するが、それにも限界があり戦死した。

〔730年マファイア〕

ブルース・アッシュビー

少尉の身である無名時代から大佐より偉そうに見えたという逸話が残る。正にこの時代の同盟版ラインハルト。必ずしもうまくいっていないかったアデレードとは離婚し、母の秘書のひとりルシンダと再婚した。3個艦隊クラスの戦力を殲滅したファイアザード会戦では、作戦立案と、挟撃の肝になった長駆迂回を主導。ドラゴニア会戦では小惑星を活かした挟撃―包囲殲滅作戦を主導した。4章終了時では大將、エルファシル方面軍總司令、第二艦隊司令官。

アルフレッド・ローザス

沈着で公正な良識人。優秀な同期達に称賛を感じつつも、劣等感を感じていたが、それを昇華し優秀な同期達の潤滑油足らんと志を立てた。幼馴染のカトリナ嬢と結婚。夫婦仲も良好で2児に恵まれている。前線に活躍の場を移してからはブルースの補佐として軍歴を重ねる。その関係もあり、アデレードとの離婚調停の仲介人を押し付けられた。4章終了時は中將。ブルース旗下のエルファシル方面軍總參謀長、第2艦隊參謀長を兼務

フレデリック・ジャスパール

とかく派手な用兵を好む亡命系原理派の雄、オルテンブルク侯爵家

の庶子。彼自身は亡命してすら疑似的な貴族制を取る亡命系原理派に息苦しさを感じていた。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。ベストカップルにも選ばれている。3児を授かっており、前線に活躍の場を移してからは主にブルース旗下で活躍。ウルヴァシー駐留基地増設に伴い異動。ファン旗下で第4艦隊の再戦力化を行う。ドラゴニア会戦では増援3個艦隊の先陣を切り、帝国軍の艦列を粉砕した。第4章終了時では第4艦隊司令、中将。

ウォリス・ウォリック

常に容姿・言動がキザで芝居がかっており「男爵」と揶揄されたが、むしろ本人が気に入って自ら名乗るほどだった。バート系融和派の雄であるウォリック商会の直系の3男。前線に活躍の場を移してからも順調に昇進。長年愛人関係が続いていたカタリーナと結婚した。ドラゴニア会戦ではブルースと共に、機動斜線陣を活用し数的に有利な帝国軍を受け止めた。第4章終了時は中将。エルファシル方面軍副司令、第5艦隊司令官。

ヴィットリオ・デイ・ベルティーニ

ヘビー級ボクサーのような体躯に、無数の小さな戦傷にいろどられた赤銅色の顔と剛い頬髯という見た目。体躯は全く正反対の小柄な音大生と恋仲になり結婚した。将官になったのを機に、熱帯魚を飼う趣味を始めた。前線に活躍の場を移してからは主にウォリス旗下で活躍。ウルヴァシー駐留基地の増設に伴い、第9艦隊の再戦力化を行う。ドラゴニア会戦では増援3個艦隊の第2陣を担当。猛攻を加えながら挟撃―包囲陣の形成を巧みに行った。第4章終了時では第9艦隊司令、中将。

ジョン・ドリンカー・コープ

ドリンカーというミドルネームだが酒は一滴も飲めず、勝利の祝杯もアップルジュースで済ました。バート系原理派出身でブルースとは幼馴染。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。3児を授かっている前線に活躍の場を移してからは主にウォレス旗下で活躍。ウルヴァシー駐留基地増設に伴い、第11艦隊の再戦力化とエルファシル方面軍と連動した訓練を主導した。アッシュビー・ウォー

リック両名の重病説を流す際に、ターナーの補佐としてエルファシル方面軍に異動。メンテナンス部隊の最終運用確認なども彼が主導した。ドラゴニア会戦では機動斜線陣の一角を担い、挟撃―包囲殲滅に貢献した。第4章終了時では中将、第11艦隊司令。

ファン・チユーリン

この時代では数少ない地方星系出身の士官学校卒業生。人間関係の構築を苦手としていたが、僚友達の影響もかなり改善された。ダンスパートナーとなったファネツサと結婚し、3児を授かる。少将に昇進した際にいずれは艦隊司令になると見越してターナーから第13艦隊旗下の第131分艦隊司令を内示された。本人も参謀長役を気に入っていたが、艦隊司令になる経験を積むために人事を承諾した。ウルヴァシー駐留基地増設に伴い、軍政面の能力を買われて駐留軍総司令に任じられる。フェザーン商船の出入りも多いウルヴァシーをエルファシルの前例も確認しながら防諜体制も含めて構築を主導した。ドラゴニア会戦では増援3個艦隊の総指揮を担当。手堅く小惑星ドラゴニアの影になる様に艦隊を進撃させ、挟撃―包囲殲滅を成功に導いた。第4章終了時は中将、ウルヴァシー駐留艦隊司令、第8艦隊司令。

【部下・同盟陣営登場人物】

エレン・バスケス

スパルタニアン乗りの中尉。撃墜数5機でエース資格持ち。カークが指揮した第111強行偵察大隊の数少ない女性士官。タイロンを弟分として可愛がると共に、理想的な上官のカークに密かに想いを寄せていた。残念ながら彼女の想いは実ることなく、ハイネセンの試作部門のテストパイロットとして転出した。試作担当のヤマハ技研のエンジニアと結婚。

ハドソン

カークが指揮した第111偵察大隊の旗艦の機関長。ムードメーカーでもあり、部下たちに慕われている。従軍前はエンジニアもしていた。カークが昇進して半個分艦隊を指揮する事になった際、自ら売り込んで旗艦である長門へ転出した。

アツテンボロー少将

ターナー旗下の第13艦隊の参謀長。孫娘たちとの時間を作るために退役するつもりだったが、フアンの転出に伴い、ご意見番的な参謀長を求めていたカークの三顧の礼により、退役を延期した人物。歴戦の経験に基づいた進言は新進気鋭の集団である730年マフィアの面々にも一目置かれている。孫娘のひとりにはパトリックという男性と結婚し、3人の娘とひとりの息子に恵まれる。

アレクサンドル・ビュコック

出身地の惑星バラスの経済発展に伴い、家族の徴兵名簿順位を下げするために志願し辺境出身の若者。姉と結婚した元帝国軍捕虜のデニスの伝手で、ターナーの従卒となった。エルファシルの新兵訓練は、陸戦隊も合同で実施されていたので、一部レンジャー資格向けの過酷な訓練を受けながら、直属の上司であるコナー曹長からも書類仕事を振られるなど、密度の濃い軍歴をスタートした。初陣はドラゴニア会戦。メンテナンス部隊のオペレーターを見事に勤めた。書類仕事を経験する中で知識の必要性を感じ、コナー曹長の娘、サラと勉強する事となる。原作では士官学校へは進まなかったが、今作ではコナー母娘の思惑もあり、士官学校へ進路希望している。

サラ・コナー

ターナーの秘書官であるコナー曹長の娘。記念大の経済学部を目指していた。休日に一緒に勉強する様になったビュコックに思いを寄せる。志望していた記念大の経済学部のキャンパスが、士官学校と同じテルヌーゼンにある為、ビュコックが士官学校を志望する様に画策した。士官学校対策にも長じており、彼女の想いを知らないビュコックは、サラも士官学校志望なのか?と心配している。

コナー曹長

ターナー旗下の第13艦隊司令部付きの秘書官。エルファシルが駐屯基地だった頃から事務関係を担っていたベテランの女性下士官。サラと言う娘がいる。ビュコックに思いを寄せた娘にアドバイスを求められ、士官学校へ進ませる画策を勧めた。どちらかと言うと勤務中は言葉少なめなタイプ。機密に触れる事が多いターナーの状況を



理解し、線引きした業務遂行が出来る人物。

アビー曹長

アッシュビー旗下の第2艦隊司令部付き秘書官。コナー軍曹同様、エルファシルが駐屯基地だった頃から事務を担当していた。明るく甲斐甲斐しい人柄だが、怒らせると怖い。

エスピノ曹長

ウォーリック旗下の第5艦隊司令部付き秘書官。コナー軍曹同様、エルファシルが駐屯基地だった頃からの事務を担当していた。コナー・アビー・エスピノの3軍曹の会議はエルファシルにある第3駐留基地ではかなりの権威を持ち、帝国3長官会議になぞらえて3軍曹会議などと呼ぶ者もいた。

決戦 宇宙暦742〜745年  
第78話 ターナー邸とタイロン

宇宙暦742年 帝国暦433年 3月中旬

惑星テルヌーゼン ターナー邸

アレクサンドル・ビュコック

「ねえアレク。ほんとにここで合ってる？」

「うん。間違いないと思うけど……」

士官学校に合格した嬉しさは、初陣への緊張でそんなに噛みしめる余裕がなかった。そのままドラゴニア会戦に参加して勝利の余韻に浸ったと思ったらバーラト星系へ移動を始める時期になっていた。

『士官学校に合格したんだから初陣は卒業してからでも良いんじゃないか？』

何気なくターナー提督はそうおっしゃったが、新兵訓練の同期も参戦するし、何よりターナー提督を始め、エルファシルの第3駐留基地の上層部の皆さまには良くしてもらった。そんな状況で自分だけ後方に下がる判断は出来なかった。

『アレクって世渡り下手よね。でもすんなり後方に下がっていたらそれはそれで見損なったかも』

俺の判断を受けて一緒にバーラト星系にやって来たサラはそう応じた。姉ちゃんが知ったら怒るかもしれないけど、父ちゃんやデニスさんは褒めてくれると思う。それに士官学校に合格できたのは半分はサラのおかげだ。よくわからないけど見損なわれる様な判断をしなくて良かったと思う。

『初陣祝いだ。士官学校に入学したら多少の小遣いは支給されるが、応援してくれたサラにちゃんと恩返ししろよ』

エルファシルの歓楽街にある有名なテーラーに連れていかれ、礼服とスーツ一式を新調した時、提督からは餞別として5万デイナーが入金された北極星銀行の通帳を渡された。正直スーツの支払いも提督が持ってくれたし、どうしたものかと悩んだ。

『こういう時は年長者に恥をかかせるな。あと恩に着るならデニスさんにな。俺もあの人から重機の扱い方を習ったんだ。そのお陰でだいぶ家計を助けられた。多少は恩返ししておかないと、オチオチ再会も出来ないからな』

肩を組まれてそう言われては受け取るしかなかった。どこかの夕イミングでサラへの恩返しに何かしようと思っただけど、ハイネセンからテルヌーゼン行きのシャトルの乗り継ぎは時間の余裕もなく、カバンを持つくらいしか出来なかった。そしてテルヌーゼンに到着し、自動運転タクシーに乗り込んで、目的地らしき場所で降りた所だ。確かに表札には『ターナー』って出てるけど、やけに広い敷地にドラマに出てくるような豪邸が庭の先に見える。間違いないと思うけど、呼び鈴を押すには妙なプレッシャーを感じる。

「もし、ビュコック様とコナー様でしょうか？」

俺達が門扉付近でまごついていると、お手伝いさんらしき女性が声をかけてくれた。

「そうです。私がコナー。こっちがビュコックなんですけど、話に聞いていた以上のお家で気後れしてしまつて……」

「いえいえ。私も初めて伺つたときは同じように気後れいたしました。その気持ちはわかります」

そう言いながら先導してくれる彼女に、サラの荷物も抱えながらついていく。青々とした芝生にガーデニングって奴だろう。所々に花が植えられているのが目に入る。そのままロータリーを越えて玄関に入る。提督は何社かの企業のオーナーだとも聞いていたけど、ここまでとは思わなかった。

「奥様、ビュコック様とコナー様がお着きになりましたよ」

「長旅ご苦労様でした。夫がお世話になっております。妻のクリステインです」

お手伝いさんが声をかけると730年マフィアの特集番組に映っていたクリステイン夫人が奥から現れ、挨拶をしてくれた。

「アレクサンドル・ビュコックであります。提督にはいつも良くして頂いております」

「サラ・コナーです。母が提督にお世話になっております。私も勉強を見て頂きました。こちらこそお世話になります」

「ご丁寧ありがとうございます。長男と長女は中等学校なの。次男のヴェルナーです。ヴェルナー？ご挨拶を」

「ヴェルナー・ターナーです」

そう言いながらペコリとお辞儀をするヴェルナー君を見て、俺はピンときた。サラに視線を向けると彼女も気づいたようだ。一時期、同盟で一番有名になったアッシュビー提督が抱いていたのがこの子だ。一部のゴシップ紙が隠し子説まで報じてたっけ。

「ヴェルナー君よろしくね。私の事はサラって呼んでね。これからよろしく」

そう言いながらしゃがんで頭を撫でるサラ。もともと弟が欲しいって言ってたからな。面倒見の良い彼女にとってヴェルナー君はアイドルのように映っているんだろう。

「サラさんとビュコック君の部屋は2階に用意してあるの。部屋に荷物を解いたら少しゆつくりして頂戴。足りないものもあるだろうから、少ししたら買い物に行きましょう。ビュコック君も入学式までだけど、寛いでね」

そう言いながらヴェルナー君の手を引いて廊下を進み、階段の方へ先導してくれるクリステインさん。慌てて俺達もついていく。広めの階段を上がり、右手に進むと、ドアが4つ並んでいる。

「一番奥をサラさん、その手前をビュコック君が使ってるね。将官の家だから防犯システムはあるんだけど慣れない場所ですから。ビュコック君がエスコートしてあげてね」

「はい。勿論です。あと私の事はアレクとお呼びください。提督からもそう呼んで頂いておりますので……」

「アレク」

「あらあら。ではアレク君と呼ばせてもらおうね。何か足りない物があつたら遠慮なくおっしゃってくださいね」

そう言いながら2つのドアを開けて軽く会釈すると、クリステインさんはヴェルナー君を連れて階下に降りていく。まずはサラの部屋

にカバンを運ぶ。大き目の窓から良い風が抜ける。ベッドの傍にカバンを置き、窓に近づくと広々とした庭が一望できた。

「ここで4年間お世話になるのか……。慣れるまでが大変そう……。」

「うん。提督は30歳で退役してビジネスの世界に戻るつもりだったって言ってたけど、ここまでとは思わなかったな……。」

「ねえ、ベッドもふかふかだよ。座ってみたら？」  
「おう」

そう言いながらベッドに大の字になつているサラの傍に腰かける。確かにふかふかだ。俺に割り当てられた部屋のベッドも同じものだろう。士官学校に入学してから寝ることになる寮はここまで快適なはずがない。半月位だけど半分バカンスだと割り切つて慣れないようにしないと……。

「アレク。私も頑張る！こんな豪邸は厳しいけど、せめてベッドは良い物を買えるようになりましょ」

「そうだな。こんなベッドで休めれば、トレーニングも増やせそうだし……。」

そう言うとなぜか枕で頭を叩かれた。『この朴念仁……』つてサラがつぶやいていた気もする。勉強と一緒にするようになってから、たまにこういう行動をサラはする。ただ、姉ちゃんや妹たちで女性は意味不明で偶に理不尽な事をするのは慣れているから気にはしない。

「んじゃ、俺も荷物おいてくる」

そう言い添えて、自分に割り当てられた部屋に向かう。サラの部屋と同じように整えられた部屋は、正直俺には勿体ない気もした。ふかふかのベッド。窓の傍にはシングル向けのテーブルセット。ベッドの傍にはデスクもある。20平米位かな。それにクローゼットもついている。

俺は着て来たスーツを脱いですこしラフ目な格好に着替えながらカバンから服を出してクローゼットにかけて行く。候補生の制服もしわが付かないように少しテンションをかけてからしよう。そうこうしているうちにそれなりの時間が過ぎていたようで、買い物の時間

が来たようだ。

「やあ。僕はヤン・タイロンだ。よろしく」

「アレクサンドル・ビュコックです」

「さすが士官学校合格者だ。良い体つきをしているね……」

そう言いながら、腕や肩を触ってくる黒髪黒瞳の男性に戸惑っていると、察してくれたのか

「すまないね。奇妙なご縁でテルヌーゼンに於ける後見人をクリスティンさんをお願いしているんだ。記念大の3年次に在籍しているんだよ。サラさんの先輩になるのかな？ 日頃お世話になっているから運転手役を引き受けたわけだ」

そう言いながら苦笑する彼は、どこか憎めない人柄だった。

「ほら。カーク兄さんは子供の頃に重機オペレーターをして稼いでいたって話だろ。だから私もそれに倣ってね。重機の免許を取ったのは良いんだが、やせ型だろ？ 一応細かい建材運びをもしないといけないんだが、筋肉痛で重機の操作が翌日覚束なくてね。親方に重機以外触るな！ って呆れられたものさ」

そんな話で笑いを取りながら間を埋めてくれるタイロンさんは、今まで俺の周りにいないタイプだった。故郷のバラスでは男は舐められたら終わりって感じだったし、入隊してからもそれは同様だった。でも不思議なことに卑下する感じや媚を売る感じはない。多分虚勢を張る必要がないんだと思う。自然な自信があるし、記念大に合格する位だから、実際優秀だろうし……。

提督の事を『兄さん』って呼ぶ理由も、なんでもない事の様に教えてくれた。タイロンさんの父親が提督の兄貴分で色々面倒を見てくれた方らしい。その方が若くして戦死して以来、父親と言うには年の近い提督が、父親と兄の様な関係を続けて来たそうだ。

「ターナー邸ではなるべく軍服や候補生の制服は着ない方が良いでしょう30年マフィアの面々はプライベートでは軍服を着ないから」

そう教えてもらったのは、クリスティンさんとサラが女性向けの下着店に入って行った時の事だ。ミックスのソフトクリームを上機嫌で食べるヴェルナーを挟んでベンチでアイステイーを飲みながら話

してくれた。

「実戦を経験した事が無い僕が言うのも何だけど、映画やドラマで表現される様な良いものじゃないんだろ？優しく接してくれた軍人さん達も誰も志願しろなんて言わなかった。その代わり、ビジネスで身を立って、戦艦を買ってくれて言われたなあ」

確かにそうだ。俺も自分の兄弟に志願して欲しいとは思わない。それに横で美味しそうにソフトクリームを食べるヴェルナーにも。俺は軍しか経験した事が無いけど、なんとなく世の中は役割分担なんだと思った。俺みたいなのが前線で戦う。タイロンさんの様なタイプが稼いで武器や補給物資を買ってくれる。書類仕事と同じようなものだ。

前線でビーム砲を撃つ人材だけじゃ戦争には勝てない。年の近いタイロンさんと、クリステインさんの弟で、提督の義弟でもあるユルゲンさんは、軍だけしか知らない俺に、知らない世界を教えてください。兄貴分になった。そして、フライングボール部のレギュラーという提督の長男、シユテファン君とはトレーニング仲間となる。見知らぬテルヌーゼンに不安も感じていたが、急に兄や弟の様な存在が出来る、テルヌーゼンは俺にとって第二の故郷のような土地になるのだが、それはしばらく経ってからの事だった。

## 第79話 新たな懸念

宇宙暦742年 帝国暦433年 4月中旬

惑星エルファシル 第3駐留基地

カーク・ターナー

「随分派手な勝利宣言だったわね。母としても市民としても誇らしかったわ。政府も支持率が回復して一安心でしょうね。高度経済成長は維持できても、各星系に議席枠を振り分け直した影響で、辺境系の影響力が大きくなった。今後も難しい政局が続きそうね」

「引退されても何かと頼られるでしょうね。辺境系に議席割り当てを増やしたのは貴女だ。バーラト系でありながら辺境系にも発言力がある。バーラト系にも大きな影響力がある事を踏まえれば、何かと頼られるでしょうね。お疲れ様です」

ドラゴニア会戦が同盟軍の勝利に終わって2カ月。式典などはハインセンで行なうが、エルファシルに帰還した時点でブルースをメインに勝利宣言を政府広報の後に続く形で行った。

『帝国軍の諸君、お前たちを叩きのめした人物はブルース・アツシユビーと730年マフィアだ。次に叩きのめす人物も俺達だ。同盟市民の諸君、帝国の圧政に同盟軍は決して屈しない!』

ブルースの発言は同盟中を駆け巡り、市民たちは拍手喝采を上げた。同盟中の機関誌の一面を飾った以上、フェザーンを通じて帝国にも流れるだろう。

「それで?確認の為にあそこまで派手にした意図を確認させてもらえるかしら?気が早い支援者はブルースが政界に来るのではと確認してきたわ」

「ブルース本人の意思はわかりませんが、そう言う意図で行った訳ではありません。政府首脳部には事前に知らせましたが、帝国軍の宇宙艦隊には虎の子の部隊が残っています。それを叩かない限り、防衛戦の優位を確立できませんからね。軍務尚書の2人の息子は戦死。宇宙艦隊司令長官のツイーテン元帥は長年尚書と僚友関係にあります。なんとかもう一回出征してもらおうための布石でもあるのです」



「フオルセティ以来、ここまで戦勝を重ねてもまだ帝国には出征の余地があるとみているのね。そう言う意味でも貴方の論文は正しかった。帝国の国力は侮れないわね……」

念願だった孫が誕生し、政界を名目上は引退したナタリー元議員を当てにしているのは俺も同じだ。帝国軍を誘き寄せるための餌としてブルース主演で730年マフィアを大々的に広報させた。だが、これで代議員たちが妄動するようでは困る。彼らからすれば前線で大功をあげた英雄が對抗馬になるのは悪夢だ。

そう言う意味で事前に根回しを欠かさないようにしているし、俺だけじゃなく、アルフレッドにもそれを依頼している。そして影響力の大きいナタリー元議員に報連相を欠かさないのも軽拳妄動を防ぐ意味も兼ねている。

「二応、渡された人事案に賛同する旨は国防委員長に伝えたわ。他のルートでも上申したんでしようけど、今までの慣例から外れることになるから、否定的な意見も多かった。本当に良かったのかしら？」

「ご承知の通り、私は早めに退役してビジネス界に戻るつもりでした。自分の退役後の体制を考えた時、宇宙艦隊司令長官から統合作戦本部長になるルートには無理があるかと。司令長官に求められるのは前線で将兵を鼓舞する将器やカリスマ性。統合作戦本部長はどちらかというと軍政面や、国防委員会との折衝力、官僚にも有無を言わさぬ論理性、そんな所でしょうか？前線を経験しないまま統合作戦本部長と言うのは弊害があるでしょうが、重視される項目が違いますからね」

「そうね。確かにブルースに宇宙艦隊司令長官の適性はあっても統合作戦本部長としての適性は低い気がするわね。あの子は優秀だけど、理解力の乏しい相手や門外漢相手に丁寧に説明する志向は皆無だもの」

そう言いながら納得する様に頷く元議員。ドラゴニア会戦の勝利にあたって、様々なルートから近い将来来襲するであろう帝国軍の精鋭との戦いに臨むにあたっての人事案を上申していた。人事案の主旨はこんな感じだ。

・ブルース・アッシュビー大将⇒元帥  
宇宙艦隊司令長官 兼 第2艦隊司令  
・ウオリス・ウオーリック中将⇒大将  
宇宙艦隊副司令長官 兼 第5艦隊司令  
・カーク・ターナー中将⇒大将  
統合作戦本部次長 兼 第13艦隊司令  
・アルフレッドローザス少将⇒中将  
宇宙艦隊総参謀長 兼 第2艦隊参謀長  
・ファン・チューリン中将⇒大将  
ウルヴァシー方面軍司令 兼 第8艦隊司令  
最高幕僚会議常任委員

フレデリック、ジョン、ヴィットリオの3名に関しては艦隊司令になるにあたって功績の前渡しで昇進していたから、それなりの勲章を要請している。問題になるのは俺とファンの人事案だろう。説明した通り、本部長と司令長官には求められる能力が異なる。正規艦隊司令から司令長官ではなく次長職を経由して本部長になるキャリアを認めて欲しいという意図を提示した訳だ。そして俺の後任候補はファンという意味表示も含めている。

「国防委員会の雰囲気だとジャスパー君たちの昇進も用意しそうですね。帝国軍8万隻を包囲殲滅だもの。それにブルース一人が元帥なのも気にしているみたいね。大将を増やして、少しでも突出した感を薄めたい思惑もあるんじゃないかしら」

「クーデターが必要なほど今の同盟が悪政をしいているとは思いますが、潔白な代議員など少数派でしょうからね。後ろ暗い事がある小心者は、なにかと勘繰りますか……」

「そうね。それに『ハイネセンの嘆き』事件を主導したのは貴方たちだと今更ながら思い出したのかもしれないわね。ご機嫌は取っておきたい。勝利ももたらしてもらいたい。ただ、政界に来られたらどうするか……。って所かしらね」

やれやれと言った様のナタリー元議員。もしかしたらそんな周囲に疲れた事も彼女が政界を引退した要因のひとつなのかもしれない。

「人事案がなんとか承認されれば、後はこちらで何とか出来るでしょう。アルフレッドが説明に回れば代議員の多くが感じている不安も多少は拭えるはずです。それと、もう一点、こちらはご判断をお任せしますが、考えて頂きたい事があります」

「何かしら？もつとも代議員は引退したし、孫だけを楽しみにしている善良な市民に出来る事なら良いけど……」

「別に構いませんよ。親友の息子で恩義がある元代議員のお孫さん、ドナルド君が成人する頃に大問題になる可能性があるだけですから……。善良な一市民には知らせない方が良いかも……」

「そんな言い方はずるいわね。それで？」

「民主共和制の仕組みを踏まえた対策を検討する時期かと。同盟の人口が帝国を上回るのは確実です。私が老人になる頃には300億も夢じゃない。そういう状況で一発逆転の手段が残念ながら残されている。これは民主共和制の根幹にかかわりますから、今から手を打たないと間に合いません」

「具体的には？」

「捕虜と亡命者に対する参政権の取り扱いです。亡命者に関しては正式に受理されてから3年後。捕虜に関しては帰化申請が受理された段階から認められています。極論ですが、フェザーンと帝国が結託して同盟に降伏する。彼らの人口は260億。現段階ならそのまま選挙で同盟を乗っ取れます」

「その可能性は低いわ。もう少し具体的な懸念を例として出して欲しいわね」

「そうですね。可能性として高いのは、帝国軍がフェザーンに進駐し、かの地を補給拠点として攻勢をかけてくる事です。同盟側からの物資が途絶えたとしても数回分の全力出撃を支える物資はあるでしょう」

「そうですね。それは認めるわ。何しろ宇宙で一番商船が行き来する惑星だものね。続けて」

「既にフェザーンの防衛体制の構築にも手を付けています。余程の油断が無ければ攻勢を跳ね返す事は出来るでしょう。そのままフェ

ザーンを防衛拠点とするのが効率の面でも最適です。そうなる  
と……」

「状況にもよるけど、フェザーン人がそのまま同盟に亡命ないし併合  
されることになるわね。20億から30億人。その時の同盟の人口  
にもよるけど無視できる数ではないわね」

「そうです。それに彼らの飯のタネは交易です。帝国がフェザーンに  
進駐した時点で、交易なんて不可能でしょう。フェザーン回廊が紛争  
地帯になるわけですから。同盟の経済成長が続いていたとしても、多  
く見て30億人を養えるほど物流業界に隙間はないでしょうね」

「その先は私が言うわ。旧フェザーン人は自分たちの生活の為に帝  
国への早期侵攻を望むでしょう。それなりの資金を持った人口10  
%の集団。確かに民主共和政体がいきなり抱えるにはリスクがあり  
すぎるわね」

「おっしゃる通りです。それにフェザーン人への対応は、その後の帝  
国臣民を同盟市民として受け入れる際の先例にもなります。フェ  
ザーン人は利益に偏重し、帝国臣民のほとんどは初等教育を受けたか  
どうかのレベルでしょう。彼らに参政権を大盤振る舞いした  
ら……。考えたくもない未来ですね」

「それで、貴方の腹案は？」

「亡命者に対しては参政権は亡命から20年後。納税も一定額上確認  
出来た上でと言うのはどうでしょう？捕虜に関しては正直悩みます  
ね。彼らは軍に入隊した時点で最低限の教育を受けていますし、帝政  
や貴族制との違いを感じてもらうためにも参政権は早めに体感させ  
たい所ですが……」

「具体的な法案は評議会と官僚に考えさせるしかないわね。ただ、確  
かに放置できないリスクを孕んでいるのは理解できたわ。この件は  
どこかに上申しているのかしら？」

「嫌な報告は信頼できる実力者に真っ先にすることにしています。小  
心者に知らせても右往左往するだけですからね。ご意見を伺った上  
で、他に対処しようかと……」

「実力者だなんて言われると照れるわね。ただ、ドナルドの件で貴方

に借りがあるのも事実だわ。一旦待って頂戴。話はこちらで通すわ。それにしても人使いが荒いわね。やつと引退できたのに……」

「見どころのないご年配を相手にするより楽しいでしょう？それに、支持率に怯えた政策提言ではなく、同盟にとって必要な政策提言をしているつもりです。ドナルド君の将来の為にも、もうひと働きして頂ければと……」

「もう代議員じゃないから、公職選挙法にも引つかからないわ。感謝の気持ちを期待して良いかしら？」

「勿論です。年代物のワインをかなり集めましたからね。存命のうちにはワインで困らないようにします。それに祝いもかねてドナルド君名義の蒸留酒枠を増やしておきますよ」

「それは良い贈り物ね。精々長生きしなくっちゃ。それじゃあ動きがあれば知らせるわ。援護射撃も必要になると思う。それだけは心得ておいてね」

そう言いながらワイングラスを掲げる彼女に恭しく一礼すると、笑顔で通信が終わった。帝国なら征服して終わりだが、民主共和制の同盟ではそうも言っていられない。それにフェザーン人や帝国臣民に同等の権利をすぐに与える事自体、同盟市民からも反発があるはずだ。

今から議論を進め、落としどころを作っておく事は、必要なことだろう。戦後処理が落ち着けばハイネセンで式典の嵐だ。もしかしたらその時に進捗も聞けるかもしれない。政治家たちがどういう判断を下すのか？正直それも気になった。

## 第80話 掃除の始まり

宇宙暦742年 帝国暦433年 4月中旬

アムリツツア星系 惑星クラインゲルト

ハウザー・フォン・シユタイエルマルク

「子爵。この度のご尽力、感謝にたえません。敗戦したとはいえ、彼らは名誉ある帝国軍人です。手厚いご対応を頂きありがとうございます」

「帝国軍の中将が簡単に頭を下げてはなりませんぞ。それに私も若い頃は士官学校にお世話になりましたのでな。一度だけカプチエランカにも赴いた事があります。最前線の兵士たちの苦勞は身に染みておりますゆえ」

しみじみと語るクラインゲルト子爵はかなりの御歳だ。もしかしたら私が歴史上の戦いとして学んだ会戦に従軍された経験もお持ちなのだろうか？こんなことならちゃんと言と軍のデータベースを再確認すべきだった。ここでもどこか貴族同士の社交を煩わしく感じている私の欠点が出ていた。子爵の尽力に応える意味でも、経歴は確認すべきだった。

「いえいえ、父が病に倒れて急に子爵家を継ぐことになりましたな。軍歴自体は8年。30前には退役しておりました。シユタイエルマルク殿に語れる程の事は無いのです。ただ、あの当時は苦しかった日々も、今は良き思い出となりましたのでな。出来る事をしたまでの事です」

そう言いながら子爵領の農園で取れたという茶葉で作られた紅茶を美味しそうに飲む子爵。私も釣られるように紅茶で喉を潤す。帝都で飲むものと違い、洗練はされていないが、どこか人の営みの力強さの様なものを感じる。社交の場には合わないかもしれないが、私の好みには合っていた。

「それで、彼らの処遇はどうなるのでしょうか？窮地に陥った帝国軍を救援するのは臣下として当然の事。されど敵地に赴いて苦勞の末に生還したのも事実。儂はともかく、領民たちに処刑させる為に救護

活動をしたとは思わせたくはないのだが……」

「はい。その辺りは未だ流動的なのも事実です。昨今例を見ない敗北なのは事実ですが、彼らが何とか情報を持ち帰ってくれたおかげで我々は何かあったのかを知る事が出来ます。軍務省と宇宙艦隊司令本部では、その功績と相殺して処罰しない方針でした。ただ、今回の出征を主導したローエングラム伯の庶兄にあたる方が、敗戦の責任を詫げる形で自裁されました。その方が宮内省の管理職だった事で、戦後処理に何かと横やりが入っております」

「尚書閣下と司令長官殿のご苦勞が偲ばれるな。少なくとも勝敗の責任は将官に属するはずじゃ。末端の兵士たちに責任を問う方がおかしい。そもそも統帥本部総長を後押ししたのは門閥貴族の面々であろう？厚顔、ここに極まれりと言うべきか……」

「ご存じでしたか……」

「うむ。このクラインゲルト領が辺境星域の端にあるとは言え、噂は漏れてくる。どこまで役に立つか分かんが、儂の名前で助命嘆願書を認めておいた。持ち帰って頂ければと思うが……」

「ご温情、重ねて感謝します。今回は大佐のみを連れ帰るつもりです。中佐以下はもうしばらく子爵領で静養と言う形をとればと。物資の方は持参しておりますし、もうしばらくすれば手配した輸送船も到着します。お礼と言うには微々たるものかもしれませんが、当座はそれで対処して頂ければと」

「かたじけない。辺境星域はインフラ投資も手付かずな所が多い。軍にとっては小勢でも我が領にとってはかなりの人数じゃ。その物資はきちんと兵士たちの為に使いましうぞ」

ホツとした様子の子爵を見て、私の配慮が無駄ではなかったと安心した。8万隻を超えた出征軍のうち、このクラインゲルトまで撤退してきたのは1000隻足らずだ。それでも10万人。一つの都市に匹敵する人員を養う余裕は無いと判断して、直卒艦隊に物資を多めに積み込んで来たことが活きた。

「それにしても気にいって頂けたようで良かった」

「はい。私は紅茶に詳しくはないのですが何やら力強さを感じます。

帝都で飲む紅茶はどちらかと言うと宮廷好みの味ですから。普段はコーヒーを飲んでいるのですが、美味しく頂けました」

「それは嬉しい。大量には差し上げられないが、辺境のこの地では大した土産も用意できぬ。ぜひお持ち頂きたい」

「ありがたく頂戴します」

このあと少し雑談をし、子爵邸を後にする。未舗装のあぜ道を軍用の4輪駆動車で進む。揺れが気にならないと言えば嘘になるが、屋根がない分良い風が抜ける。普段帝都にいるせいもあるだろうが、妙な解放感があった。そのまま人造湖を活用した仮設宇宙港を抜け、郊外に向かう。

「彼らも満身創痍でありながら着陸する場所は選んだのだな」

小惑星ドラゴニア付近で行われた会戦は、中盤以降、帝国軍は包囲下に置かれた。クライングルトまで撤退できた部隊は、挟撃直後になんとか戦線を離脱出来た艦だけだ。戦闘詳報を分析する前から敵前逃亡を問う声もあったが、最右翼にいたフォーゲル艦隊は右翼後方からの突撃で指揮系統を含めてズタズタにされている。これで敵前逃亡とするなら、帝国軍兵士には勝利か死か？という選択肢しか残らないだろう。

そして命からがら撤退に成功した彼らだったが、アルレスハイムからイゼルローン回廊を抜け、アムリッツア星域まで来たところで活動限界に至った。何とか最後の余力を使い、クライングルト領の郊外に着陸した彼らを、子爵が救援して下さった訳だ。

「本来なら奮戦の上、決死の撤退戦を生き残った艦たちだ。勇士の誉れは得ても、懐疑的な視線を向けるべき対象ではないのだが……」

軍務尚書閣下の指示により、今回の出征に参加した艦隊は装備更新の機会が優先的に与えられたはずだった。だが、郊外に着陸した艦は、私の直卒艦隊に配備された新型艦とはどう見ても異なる旧型艦。つまり装備更新費の流用なり着服が行われた証拠でもあった。

「見て見ぬふりは流石に出来ぬ。コーゼル提督から司令長官に報告して頂こう。大将に昇進された直後に汚職の対応をさせてしまうのは心苦しいが……」



『名ばかり少将』の件が片付いたと思つたら派閥争い。その上に戦力の再編成だけでなく汚職の摘発までせねばならんとは。いつになつたら帝国軍は叛徒たちに集中できるのだろうか。不時着した旧式艦を横目に、私はそんな事を考えていた。

宇宙暦742年 帝国暦433年 4月下旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

コーゼル大将

「ここにきて汚職まで発覚するとはな。いくら叛徒どもの内部で揉め事が起こっているとしても、油断するにも程がある。この件はこちらで引き取ろう。おそらく統帥本部総長派を後押ししていた門閥貴族の関与があるはずだ。平民出身の卿が表に出ては、いらぬ口実を与えるだけだ」

「承知いたしました。あくまで確認なのですが、甘くされますので？ 8万隻もの戦力を失いましたが……」

「少しは信頼して欲しいものだが、これまでがこれまでだからな。今回はなあなあにはせん。次の出征には私も出るつもりだ。留守の間に好き勝手されてはかなわん。門閥貴族や宮廷内部で声高に嚴罰を叫ぶ者がこれに関与しておるのだろう。軍部への責任追及を止める代わりに自分たちの不正もうやむやにしようとしても考えているのだろうかそうはさせん」

あくまで念のために聞いたのだが、司令長官はよほど腹に据えかねていたらしい。広めの額に青筋が立っている。勝敗は軍人の常だ。全力を尽くしても及ばない事はある。だが、素人が差し出口を挟んだ上に汚職までされては見逃しようがないだろう。

「失礼なことを伺いました。申し訳ありません」

「構わぬ。軍務尚書の手元に統帥本部総長派を後押ししていた門閥貴族の名簿は既にあるのだ。軍の利権は確かに大きい。欲しがる気持ちも分かるが、手を出せば火傷では済まないと示す意味でも妥協はしないつもりだ」

「承知いたしました。シユタイエルマルクにもお二人の覚悟を伝えて

おきます。それと、もう一つご報告しなければならぬ事がございませぬ。例の件ですが、敗戦に責任を感じて自裁したローエングラム伯の庶兄ですが、彼と頻繁に会っていた事は確認が取れました。噂が広まったのも宮廷からですが、庶兄は課長クラスの管理職でした。噂の出元の候補者ではありません。ただ、有力な証拠を掴むには至っておりません」

「分かった。もし卿の懸念が事実なら簡単に尻尾を出すような失態は起こすまい。おそらく次の出征に絡んで、何かしら動きがあるはずだ。そこで泳がせて証拠を掴むのが良いだろう。どうせ出征候補はティアマトしかないのだ。航路の関係から見ても、次の会戦は正面衝突しかあるまい。気取られぬようにな」

「承知しました。ある程度流す情報を区切り、情報漏洩のルートから協力者も絞れるようにいたします。それで宜しいでしょうか？」

「うむ。手配を頼む。卿は既に戦闘詳細は確認したか？」

「はい。詳細な分析はこれからですが、撤退の末に持ち帰ってくれた貴重な情報です。真つ先に確認いたしました」

クラインゲルト領に撤退してきた残存兵は、子爵に救援を依頼すると共に、戦闘詳細も送付してきた。戦線離脱に入っていた為、確度は低くなるが、最終的に包囲殲滅に至る様子が見て取れた。結果だけを見ればローエングラム伯がやや拙速だったことは否めない。

だが小惑星の影を活かした探知範囲外を迂回進撃させての挟撃、ここからの包囲殲滅までの流れるような陣形の変化。叛徒の首魁であるブルース・アッシュビーとその僚友達は、決して侮って良い人物ではない。

「その表情を見ると卿の意見も同様だな。アッシュビーとやらは大言壮語するだけの力量を持っている様だ。そこでな、クラインゲルトに補給基地を作ろうと思う。今回の大敗の処分に区切りがつくまで、残存兵を帝都に戻す事は出来まい？ 詰め腹を切らせるつもりもないのでな。そうなると10万人をそれなりの期間養ってもらふことになる。それならいつそ考えたのだ」

「良いお考えかと。アムリツツア星系に補給基地が出来れば、回廊を

抜けてからの活動期間も大幅に増加します。何より敗戦のショックから立ち直る意味でも、身体を動かした方が良いでしょう」

「卿に賛成してもらえれば安心だ。何かと意見もあるだろうからな。補給基地の件はシュタイエルマルクに任せようと思う。あやつなら誠実に任に当たるであろうし、兵たちへの心配りも欠かすまい」

「そうですね。それに彼がつくる補給基地なら効率の面でも期待できそうです」

社交界にあまり参加しない彼を守る意味もあるのだろう。変に口添えすれば将来の帝国軍を担う人材に傷をつけることになりかねない。処分が落ち着くまでは辺境に置いておく。軍部系貴族の将官は、長期間帝都から離れるとなると嫌がるものだが、彼ならむしろ喜びそうだ。水があつたのか、クラインゲルト領からの通信は血色が良さそうだったからな。司令長官と私が話す際に定番となつた支給品のコーヒーを飲みながら、そんな事を考えていた。

## 第81話 続・青年たち

宇宙暦742年 帝国暦433年 6月中旬

アムリッツア星系 惑星クラインゲルト

クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー

「シユタイエルマルク提督、軍事に関しては私は素人です。ですが、この基地の効率的な運営には地域経済とのバランスも必要なことはご理解頂けるでしょうか？その為にも、軍事宇宙港の民間利用、及び補給基地の倉庫の一部分の民間利用。どうしてもご納得いただけないなら基地敷地のゲート付近に民生用の倉庫の建設を許可頂きたいのです」

「まったく、ケーフェンヒラー殿の気迫にはいつも押されるな。いつもの事、計画段階から会議に加わってくれ。民生用の倉庫も基地敷地内に作ろう。ゲート付近に倉庫とは言え中層の建物を立てれば警備に不安が残る。全く、内務省の地方自治課局の職員は皆そうなのか？」

「今まで边境星域にはインフラを整える予算がありませんでした。この補給基地が边境における地域開発のモデルになるかもしれないです。軍務省との共同事業となれば、予算もつきやすくなるでしょう。我々としても必死なのです」

本心を吐露すると、補給基地建設事業の総責任者でもある提督は苦笑された。だが内務省地方自治局にとっては文字通り正念場だ。シヤンタウ星域では一定の成果を出せたものの、多くの边境惑星は予算が付かないまま放置されている。アムリッツアだけでなく、警備哨戒を考えれば数か所は補給基地の新設の余地はある。

「まったく、小官は軍に奉職するつもりだから良いが、卿は男爵家の跡取りだろうに。私には経験がないが、結婚したての新妻を放り出して帝国領の最果てまで出張るとは卿も仕事人間だな。むろん妥協できぬ事もあるだろうが、しっかり相談して進める事は約束しよう」

「ありがとうございますー」

提督に礼を述べて、旗艦ヴァナディースを後にする。文字通り帝国

領の最果てであるクラインゲルト領には、人口自体が少ない。基地建設の本部は急造した人造湖付近に着陸したシュタイエルマルク提督の旗艦ヴァナディースだ。地方自治局の職員である私達は領主であるクラインゲルト子爵のご好意で館の一室を提供されたが、作業員の多くは郊外に降下した戦闘艦に寄宿している。

正直、私は旧式の戦闘艦の可能性にも注目していた。インフラを整える際に予算が掛かるのは道路や水道、それに電気だ。退役した旧型艦の武装を外し、惑星に降下させればそれだけで発電所に早変わりだ。装備更新後にスクラップにするより有効活用ができる。軍としても退役艦の利用法があるなら装備更新費を請求しやすくなるのではないか？そんな事を考えていた。

「新婚なのは確かだが、この事業の成否で辺境星域の未来が変わる。理解してくれるはずだ」

婚約していた男爵家の令嬢との結婚式を終えた後、私はこの補給基地の新設のサポート班の責任者として赴任した。内務省地方自治局は責任過多、予算過少な部署だ。そこで一定の成果を出した私は、よく言えば評価されたし、悪く言えば目を付けられた。

人事的には抜擢だが、軍部主体の事業に後乗りする形だ。省庁の中でも屈指の影響力をもつ内務省ではむしろハズレの任。それでもかまわない。シュタイエルマルク提督は前評判では偏屈な戦術家だったが、会って話せばちゃんと理解を示してくれる。

「すぐには行かないだろうが、放棄されたままのこの荒れ地が、いつか一面小麦畑になる。誰かが信じなければ、成る物もならない。私が信じなくて誰が信じるのだ」

硬化剤を注入しただけの砂利道を僻地仕様の4輪駆動車で走りながら私は呟いた。残存兵を含め十万を超える労働力もあるのだ。シャンタウ星域での日々に比べたら、余程希望が持てる。そう自分に言い聞かせながら車を進める。

私に同意するかのように良い風が車内を吹き抜ける。帝都では味わえない妙な解放感。それだけが自分に言い聞かせなければ萎えてしまいそうな任をおくる日々の私の救いだった。数か月後に補給基

地は完成するのだが、それに合わせて妻から離婚を希望する旨の手紙も届くことになる。

宇宙暦742年 帝国暦433年 8月中旬

惑星テルヌーゼン 市立競技場

アレクサンデル・ビュコック

「兄さん！イケーー！」

「シユテフアン！そこよ〜!!」

士官学校に慣れたかと思えば夏季休暇だ。帰省する事も考えたが、故郷のバラスまで往復すれば、それだけで夏休みが終わってしまう。ユルゲンさんやタイロンさんからビジネスの話を聞いたり、サラと特別講義を聴講したり、シユテフアン君に誘われて一緒にトレーニングしたり……。

士官学校に入ったらもつと殺伐とした日々かと思っていたけど、テルヌーゼンでの生活は予想に反して学園ドラマの様な日々だ。これでいいのか？とも思うが、提督を始め、同盟軍が守っている物のひとつに、後方での平和な生活もあるのだと思うと、今だけはそれを楽しんでも良いのではとも思う。

「もう。アレクもちゃんと応援しなさいよ！」

「サラ姉さま。アレクさんはまだ観戦に慣れていらつしやらないだけです。まずは雰囲気を楽しんで頂けば問題ありませんわ」

そんな声を聞き流しながら、シユテフアン君の動きを目で追う。エースではないがとにかく視野が広い。アシストはチーム最多だし、インターセプトも良く決める。それにフォローがとにかく早い。上に立つ素養の様なものを感じ取り持っている。それだけでも彼が提督の息子なのだと思った。

そして長女のエリーゼ。才女なんて言葉があるが、この娘はそれが霞むくらい優秀だ。今の言葉で分かる通り、人の状況を読み取るのがうまいし、大人の話をなんとなく聞いて理解している。クリスティンさんやサラを始め、お屋敷に出入りする面々には経済系を専攻する人物が多い。それもあるのだろうが、言葉の節々から基本的な経済学を

理解している雰囲気がある。

『兄さんが羨ましい。私はチームスポーツが苦手だから……』

あれはバーベキューの時だったか？ フライングボールの話題で盛り上がっていた時にエリーゼがこぼした一言だ。シユテファン君も優秀だが、どちらかと言うと秀才タイプだ。文武両道を地で行っているが、俺は深夜まで決して楽じゃない練習を終えた後に勉強している事を知っている。

『ターナー家の長男として、エリーゼの兄として相応しい存在でいいですから』

シユテファン君は苦笑しながらそう漏らした。ビジネスでも成功をおさめ、同盟の生きる英雄のひとりでもある提督を父に持つだけでもプレツシャーだろう。一つ違いの妹がさらにここまで優秀だと、心労が更に重なるのではないだろうか。

チームスポーツが苦手なもの、彼女が分かってもらうためにどう説明したらよいか分からないからだと思う。説明されなくても何となく光景を見ていれば要領を得てしまうのだ。軍なら活かせるか？とも考えたが、全幅の信頼を置いてくれる将官の下で参謀役ならとも思った。でも730年マフィアですらあれだけ実績を示しながらも嫉妬の対象だった。女性のエリーゼなら猶更かもしれない。

『ブツブツブツ』

前半の終了を知らせるホイッスルが鳴る。シユテファンが所属するメープルヒル校がかなりリードしている。無重力下を再現した環境で行われるフライングボールは、見ごたえもあるし攻守の切り替えも早い。それだけに一つひとつのプレーに切り替えの早さが求められる。この点差はひいき目かもしれないが、シユテファンが決めたインターセプトと素早いフォロウの積み上げの結果のようにも感じた。

「兄さ〜ん！」

「シユテファン！ ナイスゲーム!!」

横で歓声を上げる二人の視線の先を見るとシユテファンが手を振っていた。さすがに手を振るのは恥ずかしい。俺は視線を向けながら右手の親指を立てた。認識するのは難しいはずだが、シユテファ

ンが笑顔になって右手を上げて親指を立ててくれた。あいつ、本当に視野が広いな。後半もメープルヒル校は試合を優勢に進めていく。そんな状況を観戦しながら、俺はふと思った。

「普通はこうやって切磋琢磨するんだな」

勝敗がはつきりつくのも良いし、一発逆転はまずない。地力の差が積み重なるスポーツだから地道な努力なしでは、余程の才能がない限り勝てない。それにチームスポーツだ。ひとりが突出しても数で潰されてしまう。チームで努力しないと勝てないと言う点で、軍に似ているとも思った。

最前線ではなかったとは言え実戦経験があり、新兵訓練課程も修了した俺は、士官学校では正直異質な存在だ。教官の助手にも任命されたし、時の人でもある730年マフィアの傍にいた事もあって手は抜いていない。だが、死を覚悟するレベルでの訓練なんて大半の候補生には無理だ。それに環境だけ切り取れば恵まれたとも言える。媚びてくる奴と反発する奴が半々くらいだが、正直相手にしていない。

『ブツブツブツ』

そんな事を考えているうちに後半が終わる。結果は大差でのメープルヒル校の勝利だ。トレーニング仲間として嬉しく思うが、勝つべくして勝った。そんな試合だった。

「もう。ちゃんと応援しなきゃダメじゃない！」

「サラ姉さま。アレクさんは今は休暇中なんです。どうせ卒業したら父様たちにごき使われるんですから、今は温かく見守りましょう」

エリーゼがドキリとさせる言葉を漏らした。前言撤回だ。俺は君の様な参謀はほしくない。当たってほしくない予言ばかりする参謀なんて抱え込んだら心労が増える。クリSTEINさんはヴェルナーのスイミング大会の方に行ったはずだ。結果次第で褒めるか？慰めるかしないといけない。

素直で笑顔が可愛いヴェルナーにはサラも夢中だが、俺も弟が出来たようで可愛がっている。現実逃避に似た思考の切り替えには成功したが、エリーゼの予言は俺の頭の片隅にずっと残っていた。



## 第82話 つかの間の後方

宇宙暦742年 帝国暦433年 10月中旬

惑星ハイネセン ホテルユーフォニア

カーク・ターナー（大将）

「閣下、おはようございます。モーニングをお持ちしました」

「メアリー。マネージャーの君がこんな事をして良いのかい？君の淹れてくれる紅茶は美味しいから私は嬉しいんだが」

「昇進されるとお世辞もお上手になりますね。業務的な話をしますと、将官クラスの方のルームサービスをアルバイトに任せるわけには参りませんわ。提督のお陰で、ハイネセンに出張する同盟軍の皆さまは当ホテルを定番の逗留先にされています。失礼があつてはいけませんから」

「そういう話の進め方だと、個人的な話もあるのかい？」

「もちろんです。まだ少尉だった貴方に、毎朝紅茶をお持ちするのは私の密かな楽しみでした。初心に帰る意味でも、提督への対応を担当したかったので、職権を乱用しました。子供や孫に、『あのターナー提督に紅茶をお出ししていた』と自慢できますし」

少尉時代から定宿にしているホテルユーフォニア。大将になってもそれは変わらないが、ウエイトレスをしていたメアリーがマネージャーになっていと思うと、時の流れを感じる。もうあれから12年か。メアリーも結婚して子供が2人いたはずだ。

「そう言われると、更に職務に精励しないといけないね。わざわざシロン産を用意してくれる支配人にもよろしく伝えて欲しい。それと、軍人相手でも問題があれば遠慮なく対応してくれ。そんな事いうまでもないかもしれないが……」

「面白いのは、前線を経験された方程、軍服を着替えてお出かけになれる事でしょうか。当ホテルに滞在される方はあまり軍人である事をひけらかしませんから。憲兵隊のやつかいになるのは歓楽街の方が多いと思います。ただ……」

「ただ？」

「皆さんスーツを着る事が多いのですが、体躯の良い男性がスーツにサングラスですと『8人の無頼漢』のオープニングシーンですから。治安は良いのですが、マフィアの会合なのかと勘違いされる方もおられます。事情を説明すればご安心頂けるのでご懸念には及びませんが……」

そう言いながら苦笑するメアリー。『8人の無頼漢』は俺達をモチーフにしたマフィア映画だ。オープニングはマフィアの会合だったはずだ。一堂に会したマフィアのボスたちの談笑シーンから始まり、スーツに身を固めサングラスをかけた男たちがぞろぞろと会場を後にする所から話が始まる。あのシーンの様な光景を見たら、部外者が勘違いするのも無理はなかった。

「では、おかえりをお待ちしておりますわ」

そんな雑談をしながら、経済誌を片手に朝食を楽しむ。ドラゴニア会戦の戦後処理が終わり、ハイネセンで式典の嵐が過ぎた後の日課になりつつある朝の時間だ。少尉時代と変わったのは、部屋がスタンダードからデラックスになり、朝食を部屋で取る様になったことぐらいか。始めはルームサービスを頼むつもりはなかったんだが、これでもそれなりに顔が売れている。ある程度ルーティンがある中で、朝から声をかけられるのは正直苦だ。支配人に頼んでルームサービスをお願いした。

「さて、行きますか」

ホテルを出るいつもの時間が近づき、俺はスカーフを身に付けてベレー帽を左手の人差し指にひっかけ、右手でアタッシュケースを持って部屋を後にする。エレベーターでロビーに降り、そのままエントランスを抜けてロータリー右手のタクシー乗り場に向かう。いつも通り停車したタクシーに乗り込み、統合作戦本部ビルに向かう。この時間は株価のチェックに充てる事が多い。

「へえ。タイロンの奴、意外にやるじゃないか」

新規上場の欄に、記念大の学生が起こした企業名とその株価を見て、俺は思わず声を上げた。タイロンは佐三キャプテンとシーハンさんの間に弟妹が出来た事で、出光商会はその二人が継ぐべきだと本音

を俺に漏らした。

確か記念大合格祝いでダイナーを食べた時だったかな？その時に独立資金を稼いで見せろと、資金を預けた。かならず伸びるからと種銭の増額を申請してきたのがこの銘柄だったはずだ。資産運用の適性がありそうだし、ターナー商会で投資部門を立ち上げて良いんだが、タイロンは商船に乗り込んで同盟各地を行脚したいらしい。

「まあ、いずれは身を落ち着けないといけないだろうしな。投資部門を立ち上げるにしてもファンドで分ければ問題ないか？」

軍と同じでビジネスの世界も自分が素人の分野はその道のプロに資金を預けて任せるのが一番ローリスク・ハイリターンだ。そして投資部門の立ち上げを考えた時、もう一人の候補の事が頭をよぎった。「エリーゼもなあ。クリステインの話だと誰かの下につくのは向かなさそうだし、個人事業主となると投資家か芸術家か……。パトロンになれる位の資産はあるが……」

進路を決めてからでも遅くはない。そう思い直して思考を切り替えようとした辺りで、既に統合作戦本部ビル近くである事が車窓から見える景色で分かる。ロータリーで停車したタクシーのリーダーにカードを通し、支払いを終えると下車してロビーを目指す。午前中の予定は統合作戦本部規定の健康診断だ。エレベーターで地下五階のクリニックを目指す。

「健康診断のデータなんてエルファシルの第3駐留基地にもあるだろうに。まあ、防諜の為なら仕方ないのか」

下りのエレベーターで俺は思わず本音を零す。俺は今回の人事で統合作戦本部の次長職兼任になった。防諜の基本は情報の分離と隔離だ。軍上層部を除いてどんな情報も共有させない為、わざわざ健康診断も受診しなければならない。

『地下5Fです』

アナウンス音と共にエレベーターのドアが開く。受付で身分証と予め記載しておいた問診票を提出する。

「おはようございます。閣下。5番ルームにお入りください」

受付の女性下士官の笑顔に見送られ、5番ルームを目指した。どこ

かその視線に母性を感じるのは、健康診断にビビる連中がいるからだろう。前世の健康診断に比べたら、なんてことはない。太い注射で血を抜かれる事もないし、何より胃カメラが無いのが最高だ。担当の看護師さんと雑談している内に医療診断システムでスキャンされるだけ。ほとんどの悪性腫瘍にも特效薬が開発されている。世の中進んだものだということふと感じる。

「ターナー提督。おはようございます。本日担当するグレースと申します。お荷物はこちらに置いて下さい」

「おはよう。こちらこそよろしく。統合作戦本部のは初めてでね」

荷物を指定された場所に置き、ジャケットとシャツを脱いでハンガーにかける。健康診断用の装置に腰かけると、グレースが操作を始め、リクライニングが下がり、膝が持ち上げられ、横になった状態になる。ナノサイズの針が付いた器具を血管付近に巻くと採血が始まる。そのまま問診票を確認するグレースに応じながら、機械に身をゆだねる。グレースは金髪碧眼で、バレリーナの様な細身の体系だが、テキパキと作業を進める腕からしなやかな筋肉が存在感を主張していた。

『グレース看護師は大当たり』

統合作戦本部の若手士官がそんな事を言っているそうだが、確かになと思った。大きめの碧眼、通った鼻筋。業務の兼ね合いからかショートに纏めた金髪。美女と言うより、美形と言うべきか？女性に人気だった前世の歌劇団を彷彿とさせる妙な色気があった。

「提督はこういう機会に慣れておられるのでしょうか？」

「ん？どういう意味かな？」

「いえ、表現に困るのですが、時に何十万という部下たちを率いて勇戦される様な方が、健康診断では子供の様な態度をされるんです。そういう一面を独占できるのもこの仕事の醍醐味なので……」

「どうだろうね。どちらかと言うと私は女性の前では見栄を張りたいかな？君みたいな素敵な女性相手なら猶更だと思うけど？」

「お上手ですね。でも今は恋愛に時間は割けないんです。母が体調を崩していますので……」

若手が夢中になるのもなんとなく分かった。これだけの容姿で自立心も持ち合わせている。グレースはフェザンでも名門とされる看護学校に通っていたそうだが、交易業を営んでいた父親が、貴族から理不尽な要求をされて商売が傾いた。心労で父親は亡くなり、母親も容体が良くないらしい。後難をおそれて亡命したそうだ。きれいにいなされたのも久しぶりだが、不思議と悪い気はしなかった。

「これで問診は終了ですね。お疲れさまでした」

笑顔のグレースに送り出されて5番ルームを後にする。そのままエレベーターに向かい、自分のオフィスを目指す。持つべきものは当てる参謀長だ。第13艦隊の方は中将に昇進したアツテンボロー参謀長にお任せしてある。当初は副艦隊司令の地位を内示したのだが、

『老兵にこれ以上仕事を押し付けるおつもりですか？』

と拒絶された。念のため中将と大将の年金受給額の差を提示して、次の会戦までは退役しない旨を確約してもらった。俺が何かと仕事を持つてくるせいで、参謀長も業務過多気味だったからな。

そのままエレベーターに乗り込み、上層へ向かう。午後からは再戦力化に躍起になっているであろう帝国への対応に、宇宙艦隊司令本部をエルファシルとウルヴァシーの中間にあるジャムシード星系に移設する件で会議が目白押しだ。

「今のうちにもう一度整理しておくか」

『62Fです』

そんなアナウンスを聞きながら、俺は独り言をつぶやいた。

## 第83話　メテオライト

宇宙暦742年　帝国暦433年　10月中旬

惑星ハイネセン　統合作戦本部ビル

ファン・チューリン（大将）

「念のため、現状の再確認からだ。まずは『宇宙要塞建設概要』を見てもらいたい」

統合作戦本部次長職を兼任したターナーが司会進行役でこの話題は進む。参謀本部からの出席者もいるから、もしかしたらこの見積もり案を初めて見る者もいるかもしれない。曲がりなりにウルヴァシーの第4駐留基地の増設に関わった経験のある私から見ても、かなりシビアに弾き出した金額だ。

「防衛体制の確立にあたって、まず第一に想起されるのが宇宙要塞の建設だ。小説や映画でもよく出てくるから諸君も一度は思い浮かべたのではないだろうか？ イゼルローン回廊の出口付近に要塞を建設できれば、それだけで国防体制の半分は完成だ」

面々は頷くが、同時に苦笑もしている。それもそうだろう。国家予算数年分に匹敵する見積もりに、その金額を国内開発に回した際に期待できる経済成長の予測が併記されている。艦隊司令として名を上げて来たターナーだが、彼の特徴は軍政の進め方にある。エルファシールの第3駐留基地にしてもそうだった。星系の経済発展に寄与する様に事業を進める。結果として長い目で見れば公共投資と何ら変わらず、20年もすれば基地建設費はペイできてしまう。

「二応な、財務委員会は『軍がどうしても言うなら』という枕詞付きで了承の回答は得た訳だが、後は軍人としての諸君の見解をこの場で聞いておきたい。こんな高額なものがなければ国防体制が確立できないのか？という視点も含めてだ」

一部の参加者には一瞬喜色が浮かんだが、ターナーの言葉を最後まで聞いて表情を消した。

「次長殿は採点が辛いからな。俺も一応軍人だ。宇宙要塞に憧れが無いと言えば嘘になる。だが建設するにしても次の会戦の後だ。準備

も含めれば今から始めるに越したことはないだろうし、忌憚なく意見を述べて欲しい」

場を和ますようにウォリックが発言した。軍人としての立場に限定するなら事業としては魔性の魅力を備えた事業だ。ただ、イゼルローン回廊の出口付近に作るという事は公共投資としての効果は一時的。一部、民間に業務を委託するはずだからそれなりの都市クラスを増収にはなる。だが、総事業費から考えれば雀の涙だ。ターナーは実質反対。ウォリックは議論を促すために発言したが、彼の実家はあのウォリック商会だ。本音では反対だろう。

「俺は最後に発言するぞ。先に意見を出したら議論がしにくいだろう？」

そう言いながらニヤリとしたのはアッシュビー。横でローザスがやれやれと言った表情をしている。まあ最高位の元帥、宇宙艦隊司令長官が真っ先に発言したらどうしてもその意見に引つ張られる。妥当な判断だろう。そこから統合作戦本部・参謀本部の将官たちが意見を出し始める。それこそ感情論から論理的な意見まで賛否両論が出揃った。

私自身は、イゼルローン回廊が唯一なら賛成だった。だが、同盟とフェザンの関係は必ずしも良くない。ウルヴァシーにいと、どこか様子を窺うような感覚を感じてしまう。名目上は帝国の自治領でもあるフェザンは、同盟が対帝国への優勢を確立したら帝国よりの態度をとる可能性が高いと私は見込んでいる。つまりもう一つの回廊、フェザン回廊側も戦場になるだろう。そうなればわざわざ建設した要塞は意味をなさなくなる。

「議論は出尽くしたようだな。では、俺の意見を述べる前にこの作戦案を確認してもらいたい」

アッシュビーがそう言うと、各々の手元にあるモニターに作戦案が表示される。作戦名『メテオライト』。ターナーに視線を向けると少し肩をすくめた。これをアッシュビーから言わせるあたり、手が込んでいる。宇宙要塞が作られるとしたら、その管轄は宇宙艦隊司令本部になる。その長から別の手段を提示させるとはな。

「我々の目下の懸念は、戦力の再編成に躍起になっているであろう帝國軍の正規艦隊だ。既に6個艦隊にファイアザード・ドラゴニア両会戦で壊滅的な打撃を与えた。全軍が最新式と言うのはあちらでもあり得ないだろう。残る12個艦隊の内、半分でも撃滅できれば攻勢をかけるだけの余力を、世代単位で奪えるはずだ」

そこで一旦言葉を区切った。本来なら6個艦隊が壊滅した段階で攻勢を維持する意欲が尽きてもおかしくはない。だが、軍務尚書の子息2名、皇族と軍部貴族多数を戦死させた以上、負けたままでは皇帝の面子も立たない。もう一度は大きな出征が予想されていた。

「この作戦の主目的は帝國軍正規艦隊の誘因にある。ダゴン星域のアステロイドベルトから隕石を曳航し、イゼルローン回廊出口付近から射出する。高硬度ワイヤーで連結され、振り子のように回転しながら2つの隕石が進んでいく。一定の期間が経つとワイヤーが外れ、隕石は運動エネルギーに沿って散らばっていく」

アッシュビーの言葉を表すように射出された隕石が回廊を進み、ワイヤーが切れて拡散していく様子がモニターに映る。

「これを現在戦力化出来ている7個艦隊で行う。訓練も兼ねてになるからルーティンとしては年2回が限度だろう。射出される隕石は年間21万個。独立艦隊を加えればもつと増やせる。これを放置すればテイアマトの地上基地を放棄することになる点から、帝國軍も腰を落ち着けて戦力化には取り組めない。それにこれでイゼルローン回廊を封鎖できるなら経済的だ。要は大型輸送艦が通過できなくなれば補給線が断てる訳だからな」

ウォーリックに視線を向けると少し苦笑していた。おそらく彼も事情を理解しているんだろう。突き詰めてしまえば、どんなに頑張っても国力以上の軍備は維持できない。我々の目指す所は効率よく防衛体制を確立して、建国以来の高度経済成長を維持する予算を整える事だ。人口と経済力の両面で帝國とフェザーンを併せた物を上回れば、負ける事はないのだ。あとは併合に足る国力が養われるのを待てば勝利が見えてくるだろう。

「それにフェザーンを無力化するのは案外簡単だ」



自分だけに聞こえる声で思考の一部が漏れた。思えば私も随分感化されたものだ。感化した張本人に視線を向けると、何かを確認するようにエメラルドの瞳をまばたきした。フェザーンから何かにつけて資金や利権をふんだくる手法は彼の十八番だ。

それをもう一步進めてみる。『交易の停止』をするだけでフェザーンは干上がる。収入源の尽きたフェザーンに帝国がどこまで価値を認めるかは分からない。だが、地方星系の経済成長も著しく、同盟領内ではインフレ傾向が続いている。少なくとも同盟にとつて、フェザーンとの交易は必須の物ではなくなりつつあるのは事実だろう。

「では、メテオライト作戦の効果を分析したうえで、要塞建設に関しては再度検討する」

アッシュビューが会議を締めくくる様に結論を述べた。こうして、兵士たちからは『ダゴンエクスプレス』と呼称される作戦の実施が決定した。

宇宙暦742年 帝国暦433年 10月中旬

惑星ハイネセン アッシュビュー邸

ナタリー・アッシュビュー

「さすがブルースの子供だ。赤子なのにどっしりしていて貫禄があるな。それともお祖母さんに似たのかな？何しろ女性で初の財務委員長だからな」

「ドナルドは俺に似たに決まっているだろう。それにしてもカーク。お前抱き方がうまいな。俺が抱くとドナルドは起きてしまうんだ。すやすや眠るのは構わんが、負けた気になるのが癪だな」

「そりゃ3人も子供がいるんだ。それにそろえた訳じゃないがもう一人出来たみたいだ。こうなるとコナー軍曹に申し訳ないな。サラ君を預かったのは良いが、面倒をかける事になるかもしれない」

「お手伝いさんもいるんだ。問題あるまい。お前の所は父親に似ずに皆可愛げがあるからな。ヴェルナーも大物の貫禄があった。うちのがもう少し大きくなったらリゾートにでも誘いたい所だ」

赤毛の青年、私の息子のブルースと、孫のドナルドを抱いたオレン

ジ色の髪をした青年、ターナー君が何やら楽し気に言い合いをしている。司令長官になった息子はハイネセンにいる事が多くなった。そのおかげもあって、息子の妻ルシンダのお腹に二人目の命が宿った。

そして統合作戦本部次長を兼任するターナー君も激務の合間を見てドナルドを抱きに来てくれた。私と面識がある事もあって、730年マフィアの面々は各々我が家を訪ねてドナルドを抱いてくれた。本当は一堂に会したいのだろうけど、軍上層部を担う彼らの重責がそれを許さない。でも休暇ごとにお互いの子息を招いて色々イベントをしているのは聞いていた。『僕にはお父さんが8人いる』そんな言葉が漏らした子もいるとかいないとか。

「ターナー君、シルバーカートラリーも届いてるわ。色々ありがとうね」  
「大恩ある方のお孫さんですからね。当然の事です。そう言えば、映画の影響もあってシルバーカートラリーを贈るのが流行ってるみたいですね。同盟の経済成長の証でしょう」

「おい！俺には恩義はないのか！」  
「お前さんとは貸し借り無し位じゃないか？」

そんな話をしているが、お互い笑顔だ。そしてそれに動じずやすやすや眠るドナルドは、息子たちの言う通り大物になるかもしれない。どうせなら曾孫が出来るまで生きれたら嬉しいのだけど。ルシンダは身重な事もあってソファアーにゆったりと座っている。だが、こんなブルースを見た事が無いのだろう。コメディイの様な二人の掛け合いに、笑い声をあげている。

「ターナー君、今日は泊って行ったら？」

「そうしたい所ですが、深夜の便でテルヌーゼンに向かう予定です。宇宙艦隊司令本部の移設話もありますし、士官学校の視察もありますしね」

「講演じゃないのか？」

「ブルース。俺達は業界によってはまだ若造だぞ？30過ぎで元帥だ、やれ大将だなんて奴の話聞かせてどうする？そうだな、活きるとしたらファンの講演かな？あいつの手堅さを候補生が身に付けてくれれば、同盟軍は安泰だ」

「それこそ無茶だろう。候補生に人気なのはフレデリックじゃないか？シミュレーターの貸し出し回数、が歴代一位らしいぞ」

「あいつのデータを学んでもなあ。大当たりか大外れしかないだろうに。話を戻すと士官学校も予算を増やして欲しいのさ。正規艦隊だけで13個だ。増員もいずれば必要だろうし、シミュレーターも新型を入れたいだろう」

「そういう話なら俺も力添えするつもりだ。お前に手抜きはないだろうが、また報告を上げてくれ」

「プライベートの方だな。統合作戦本部の若手は、俺達が馴れ合うのをあまり喜ばないんだ。ほら、連中の階級だと他部署との情報交換は出来ないからな。国防委員会や統合作戦本部と宇宙艦隊司令本部のつなぎに俺を呼んだくせにわがままな連中だよ」

「ようやく理解できたか。今まで上司に恵まれていた事にな。だから俺が言った通り、副司令長官になればこんな苦労はしなくて済んだだろうに」

「その場合はウオリスかファンが苦労を背負いこむことになるからな。俺が地ならしだけした方が早い。ファンは前例があれば大抵の事はうまく処理するしな」

ドナルドをあやししながら2時間ほどこんなやり取りを続けて、ターナー君は我が家を辞していった。

「ねえブルース。政界には興味はないの？」

「やれなくはないだろう。ただ政策の推進に協力してくれる人物が何人かいないと無理だな。それに俺は政治家連中を信じてはいない。みな腹芸が得意だ。あいつらが政界に行くなら何とでもなるだろうが……」

「ターナー君はどう？ 辺境星域の票を集められるし貴方の理解者でもあるんじゃない？」

「……。母さんのいう事は正しいけど、そこまであいつの人生を変えて良いんだろうか？ ビジネス界に戻りたかったあいつを軍に慰留したのは俺だ。そして軍政面で色々手を打っているのも理解している。これ以上は……」

「今すぐ答えを出す必要はないわ。ただ、頼めば引き受けてくれると思うわよ。国力を強めるという点で、政治家以上に影響力を発揮できる立場はないわ。それに国力が高まるほど、市民たちの帝国進攻を求める声も高まると思うの。実力と実績を兼ね備えた人物が政府上層部にいる事は、あの論文を実現する為にも必要だと母さん思うわ」

「悪魔の論文を読んだのか……。俺が読んだときはまだ候補生だった。戦闘に勝っても戦争には勝てない。少なくとも俺達の年代ではね。そう思い切れた事がかなりの救いになったのも事実だ。もう少し考えてみるよ」

ドナルドを抱きながらめつたに見せない優し気な表情で息子はそう言った。実際、730年マファイアが戦勝を積み上げる毎に好戦的な言論が増えているのも事実だ。

「あの件も急かさないといけないわね」

彼の予想通りだ。もしフェザーンを併合するとしたら、同盟の世論は一気に好戦的になりかねない。

「世の中、ほんとにままならない」

ドナルドを抱いて玄関に戻る息子の背中に小声で私はそう呟いた。

## 第84話 コーヒーと紅茶

宇宙暦743年 帝国暦434年 1月中旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

コーゼル大将

「まったく。叛徒どももやる気満々という訳か。それに連中も決戦はティアマトと認識している。あれだけ大勝したのだ。多少は大人しくなるかと思つたが……」

「アッシュビーが宇宙艦隊司令長官になった事もあるでしょう。彼の同期たちも侮れません。ティアマトの地上基地から観測できる範囲でデータも取ってくれていますが……」

「放置は出来んな。ただでさえ難所のイゼルローン回廊に隕石が散乱すれば補給路として使えなくなる。連中も色々考えるものだ」

「アメリカのア星系の惑星クラインゲルトに補給基地を建設する事は無事に完了した。門閥貴族を含んだ処分が終わるまでシユタイエルマルクを遠ざげる意味もあつたが、本人は自分の理論を踏まえて基地を作る事に楽しみを見出したようだ。嬉し気に報告をする彼を見てホツとしたし、内務省地方自治局の職員と関わる事で、地域経済に関しての知見も得られたようだ。そんな彼が、叛徒たちの新たな動きを報告してきたのが昨年末。分析を踏まえた善後策の事前協議を、私のオフィスで行っている。」

「それで、卿の見立ては？」

「はつ。いくらイゼルローン回廊が難所とは言え、封鎖するにはそれなりの量の隕石が必要です。それでも戦闘艦で破壊する事で解決出来ます。最短で3年。掃宙を含めるなら5年でなんとかなるか。念のためシミュレーションも致しました」

「うむ。怪我の功名ではないが、そうなるとアメリカ星系に補給基地がある事は幸いだな。戦力化が始まった艦隊の射撃の的としても使える。もつとも今はなるべく艦船に予算を割きたいというのが本音だ。ビーム兵器での破壊は難易度が高いか……」

「はい。出来れば実弾兵器。爆発を伴う物が好ましいのが確かです」

そう言う意味でもなんともいやらしい手だ。隕石の処理に最適なのはレーザー水爆ミサイルだが、決して安い兵器ではない。訓練を兼ねてダゴンからティアマトを経由して回廊出口付近から射出する。ティアマトの威力偵察、我々への挑発、回廊の封鎖。一石三鳥の妙手だし、あちらの経費は動力エネルギー位だ。懐もそこまで痛まんだろう。放置すれば回廊が更なる難所に、対応すれば予算を取られる。宇宙艦隊の再戦力化もオチオチしていられんとは。

「ん？まさかとは思うが射出された隕石がそのまま回廊を通り抜けてアムリツツア星系に来るような可能性はあるのか？」

「それはありません。回廊半ばのイゼルローン星系で恒星の重力圏に入りますので。ただ、その付近が丁度回廊の狭隘部なので懸念は残りますが……。もつとも隕石がそこまで達するのは数年後です。影響が明らかになるのは更に先でしょう」

シユタイエルマルクの反応にひとまず安堵する。射出された隕石がアムリツツア星系に落下する可能性があるなら、臣民を守る意味でも放置は出来なくなる。叛徒たちが色々考えているとは言え、一石四鳥とはさすがにならんか。

「提督、話は変わりますが、クラインゲルトで補給基地に建設に意見を出してくれたケーフェンヒラー殿が軍に志願されるとの事でした。いずれ挨拶に参られるかもしれませんので、念の為、お知らせを」

「うむ。ケーフェンヒラー……？聞き覚えのある名だが」

「シャントウ星域で新しく立ち上げた醸造事業にお力添えを頂いたと嬉し気に申しておりますが……」

「おお！あの一件か。口添えをしただけなのだが、やけに丁寧な礼状を貰った記憶がある。その主がケーフェンヒラーだったはずだ」

「その男です。内務省の中でも地方自治局は予算が少ないらしいのですが、それにめげずに精力的に働く好感の持てる人物です。翻意を促したのですが、志願の意志が固く、知らぬ仲ではないので推薦状を添えました」

「うむ。卿がそうまでいうなら地方自治局でも重宝されていたのではないか？いったい何があったのだ？」

「事情は彼から直接聞きましたが、私がお話しするのは彼の名誉にも関わりますので……。ただ、男爵家の嫡男でありながら臣民の事を真剣に考え、尽くせる人物です。何かの機会があれば、気にして頂ければと……。」

「分かった。卿がそこまで言うなら私も配慮しよう」

私がそう応じると、シユタイエルマルクはホツとした表情を浮かべたが、まだ何か言いたげだった。

「どうした？ 卿と私の間で憚られる事などあるまいに」

「いえ。ケーフェンヒラーと接して思う所があります。アツシユビーは今年33歳。再戦の機会はいくらでもございましょう。再戦力化の動きを遅らせる事は出来ない物かと……。」

言葉を選んでいるのだろう。彼にしては珍しい事に発言が途切れる。余人がいるならともかく時間が押している訳でもない。コーヒーを飲んで発言を待った。

「補給基地の建設にあたって、彼は地域経済への効果が最大限になる様に様々な具申をしてくれました。結果として戦艦数隻分の増収を得られました。微々たるものかもしれませんが、予算が増えた事で放置されていた荒れ地の開発計画が動き、臣民たちの表情も明るくなりました。それこそ一個艦隊分も予算を回せば……。」

「気持ちにはわかる。だが、それができない相談だという事も分かっているはずだ。陛下が即位されてから軍は良い所がない。損害を合わせればコルネリアス帝に匹敵する勢いだ。それに軍務尚書閣下のご子息を始め、皇族や軍部貴族の戦死者も多数。一度は勝たねば軍としても面目がたたない。そうであろう？」

半分は自分に言い聞かせる意味でそう応じた。それにしても立場と云うのは厄介なものだ。貴族出身のシユタイエルマルクが内政重視を言葉にし、平民出身の私が軍備拡張を唱える。本来なら平民出身の私こそが内政を唱えるべきなのに。気を落ち着かせる意味でカップを口元に運ぶ。飲み馴れているはずのコーヒーがいつも以上に苦く感じた。

宇宙暦743年 帝国暦434年 2月中旬

惑星オーデイン 軍務省 参事官室

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

「参事官付きを命じられました。クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー中佐であります。ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします」  
「うむ。私の名前もクリストフだ。内務省では優秀だったと聞いている。軍独自の仕事の進め方もあるだろう。不明点があれば遠慮なく確認してくれ」

「はっ。お気遣いありがとうございます」

内務省の地方自治局は言ってみれば苦労人の部署だ。予算は少なく、すべきことは多い。労多くして報われぬ事の多い部署だが、そこで曲がりなりに結果を出した人材が急に軍に志願した。余程の事があつたに違いないと判断して私の部署で受け入れ研修を実施できるように手を回した。

「まず一年は私の部署で決済する書類の精査にあたってもらいたい。特に留意してもらいたいのは物資の流れを掴む事だ。事務官としての卿の能力は即戦力だと軍でも期待している。頼むぞ」

「温かいお言葉ありがとうございます」

中佐は今年24歳。地方自治系の学部を卒業してからは内務省で官僚としてのキャリアを積んだにしては肩幅がある。配属先によっては予算が足りない分、職員が土木作業を手伝うと聞く。その結果がああ肩幅なのかもしれない。軍人と言うには少し細めだが……。

「それで配属に希望はあるのかね？卿の様な事務処理能力に長けた人材はどこも欲しがると思うが……」

「出来ればコーゼル提督のお役に立てればと。前職で受けたご恩をお返ししたいと考えております。もちろん閣下にお力添え頂いたことも忘れてはおりません。ただ、出征も近いと漏れ聞きました。微力ではありますが、少しでも勝利に貢献したく存じております」

「承知した。コーゼル大將は勇猛な漢だが、前線指揮官の例にもれず事務は苦手だ。きつと卿なら力になれるだろう。折を見て宇宙艦隊司令部の後方支援関係の将官とも顔を繋ごう。しつかり務めてもら



いたい」

まだ慣れない敬礼に答礼すると、部屋を辞していった。彼は公言を避けているが、いずれは地方自治局長行きだったレールを捨て、男爵家の嫡男でもある彼が急に軍に志願した背景は、同志たちによって調査済みだ。結婚早々に職務によって帝国領外縁部と言っても良い僻地へ旅立った。相手も男爵家の令嬢だ。貴族にとって大事なものはまづ血を残すこと。そう教育されてきた彼女にとって、夫の行動は理解に苦しんだに違いない。

「そこに伯爵家の三男、しかも若いながら建築家として受賞経験もある男性が現れた」

同志からの調査報告を読み進める。まあ、自分の存在を無視された直後にそんな男性と恋に落ちれば運命の相手だと思いつくか。法衣貴族の男爵家の令嬢からすれば、辺境の臣民の生活など気にした事もないだろう。そして、夫より社会的に評価され、自分の理解が及ぶ成果を出せる仕事だ。

「同志に引き込めるかと思ったが……。やめた方が良さそうだな」

帝国政府の職務に精勤し、しかも嫡男の嫁を留守中に寝取るなど本来なら恥でしかない。だが、末っ子でもある三男を甘やかしていた伯爵は、金でそれを押し通した。少なくとも慰謝料を提示されながらも彼は離婚を拒否。そして軍に志願した。意志の弱い人間が本当に絶望したら、自裁するのが普通だ。でもそうしなかった。今までの人生を放り捨てても受けた恩は返してから。意志の強さと誠実さを感じる行動だ。

「帝国はまた人材を失ったな」

順調にキャリアを積んでいけば、少しづつでも臣民の生活は向上し、帝国の国力も増加したはずだ。そんな人材が絶望し、半分死ぬ気で志願したのだ。帝国の闇を改めて感じる思いがした。

「惜しい人材だがその覚悟は認めたい。しっかりものになる様に育てるか。未熟なまま前線に送れば、コーゼルに不信を抱かせる事にもなりかねん」

方針を決めた私は、中佐の調査資料をシュレッダーにかけた。これ

まで下した判断に後悔が無いとは言わない。だが、下した判断は変えない事を私は旨としている。内心感じていた後味の悪さを洗い流すように紅茶で喉を潤す。良い香りとすっきりとした後味が広がる。決戦の時はそう遠くはない。今更気を緩める訳にはいかない。そう自分に言い聞かせた。

## 第85話 候補生とマニア

宇宙暦743年 帝国暦434年 4月中旬

惑星テルヌーゼン 同盟軍士官学校

アレクサンドル・ビュコック

「いやあ、持つべきものは候補生の友人だね。士官学校を見学できるなんて天にも昇る気持ちだ」

「はあ……」

タイロンさんは、ターナー邸で行われるバーベキューの場でするような満面の笑みを浮かべながら視線を全方面に向けながら歩いていく。2年次になり、候補生生活にも完全に馴れた頃合いで、

『来年には卒業だし、テルヌーゼンにいつまでも居られない。士官学校を見学させてもらえないかな?』

と、タイロンさんから依頼を受けた。タイロンさんは記念大の経済学生の4年生。年間を通して株式相場の動きを予想し、仮想で運用する競技で2連覇中でおそらく3連覇するだろうと言われている有名な人だ。サラもお世話になっているし、『それ位なら……』と安請け合いましたが、大事な事を忘れていた。

悪い事じゃないが、彼は大の同盟軍マニアだ。一番の宝物は既に欠番となった『第111強行偵察大隊』のワツペン付きベレー帽らしいが、それ以外にも部隊を表すワツペンを始め、様々なものを集めている。

『株価は変化するし、事業予測もしないといけない。それに比べたら、部隊の業績を覚える位は苦じゃ無かったなあ』

戦技担当のアツテンボロー教官と廊下で出会った際、教官が所属していた部隊の話でタイロンさんが代表的な戦いだけとは言え、把握していたのには驚いた。驚いている俺になんでもない事のように漏らしたのがこの言葉だ。教官の父上は、ターナー提督の参謀長として有名で、教官自身は誇りに思っていない訳ではないが複雑な想いがあるのも知っていた。

『悲劇を繰り返さないための対応ですからね。それに実戦も経験され

ておられる。少なくとも私にとっては貴方は英雄ですよ」

教官と握手をしながら、さらりと零したのは『ゴルネリアス帝の大親征』以来、同盟軍で暗黙の了解で行われている人材配置の件だった。帝国の大攻勢を同盟はなんとか跳ね返したが、多大な損害を受けた。当時は親子や兄弟を同じ部署に配属していた。そうする方が心的ストレスが少ないという学術結果に基づいての判断だったが、ある艦隊に4人兄弟が配属されていて、全員が戦死する事態になった。

それ以来、配属が分けられるようになったし、前線で任に当たっている者の関係者は、なるべく後方に配属されるようになった。教官としては還暦近い父上が前線で身体を張っているのに、自分が後方の安全地帯にいる事に複雑な想いがあり、早く退役して孫たちと穏やかな時間を過ごして欲しいと思っている事を知っている俺は、タイロンさんの対応に内心胸を撫で下した。

「それにしても、第3戦術教義室に最初に行きたがるって何かあるんですか？」

「私の様な者にはまさに聖地だよ」

そう言いながら、うっとりした表情をしつつ、一番後ろの机を触るタイロンさん。規律を重んじる士官学校だけに、掃除は行き届いているが、新式の3Dモニターが他の教室に設置された事もあって。この教室はあまり使われなくなっている。

「士官学校創設以来、この第3戦術教義室は補修こそされたが、大幅な改築が唯一されてないんだ。第1期生の卒業生はここで任官式を行った。たった150名だったが、彼らが今の同盟軍の土台を作ったとも言える」

そう言いながら演台に視線を向けるタイロンさん。俺も釣られるように演台に視線を向ける。そう言われると古びた印象の強いこの教室が歴史の舞台の様に感じるから不思議だ。

「その後も英雄の卵たちがこの教義室で学んだ。リン・パオ、ユースフ・トパロウル両元帥しかり、そしてギリギリだが我らが730年マフィアももちろんここで授業を受けている。既にゆりかごととしての役目は他の教室に移ったかもしれないが、確かにこの教室は英雄たち

のゆりかごだったんだ。もしかしたら君が座っている席にアッシュビー提督が、私の座っている席にターナー提督が座って学んだかもしれない。それを歴代の校長方も知っているから、ここは改築されないのかもしれないね」

「親しく接してもらったからなんとなくだが光景が浮かぶ。偉そうなアッシュビー提督をからかうウォーリック提督やコープ提督。それをなだめるローザス提督に、少し離れた所で苦笑するターナー提督。」

「なんとなくですが、タイロンさんが伝えたいことが分かる気がします。『英雄たちのゆりかご』かあ。詩的な素養もあるんですね。何となく数字で判断する機会が多い印象があったので意外でした」

「はは。アレク君は人物評価が適切だね。『英雄のゆりかご』と言う表現は私の創作じゃないよ。第111強行偵察大隊が解隊する時、旗艦の機関長だった当時のハドソン軍曹が言った言葉だ。隊長だったターナー提督だけじゃない。多くの人員が新天地でも活躍した。志を含んだ言葉だったんだが、不思議と印象に残ってね。使わせてもらったんだ」

「そう言いながら微笑む彼は、やはり士官学校にはいないタイプだ。タイロンさんには、志願してからの一年間で貯まった貯金を預けて運用してもらっている。提督から貰った賤別をそういう風に使うのは違う気がしたから口座に入れたままだ。彼が提督から預かっている資金に比べたら、微々たるものだが、律儀に運用報告をしてくれた。提督の代理はエリーゼだ。彼女の方が理解できているのが少し情けない様にも思うが、運用結果だけを見れば、彼は錬金術師ではないかとも思う。」

『運用は必ずしも経済学だけじゃダメなんだ。心理学の要素も強い。そう言う意味では軍事的な素養も多少は必要になるのかな？資産運用をするなら孫子は読んだ方が良いね』

「そう言いながら、旧時代でも更に年代物になる兵法書を話題に出した。軽く読んでみたけど。ファイアザード会戦やドラゴニア会戦の

勝因に通ずる部分もあった。博学な人は色々な所から活かせる教訓を学び取る。経済もある意味戦争に近い要素がある。俺はタイロンさんの様に、様々な場面から教訓を学び取れているだろうか？

「さて、マニアの教室談義が済んだ所で、次はシミュレーター棟を頼もうかな。出来れば一度観戦したかったんだ」

次の楽しみを思い出したタイロンさんは足取りも軽く、スタスタと進み始めた。慌てて先導を始める。本当なら戦術シミュレーター部の連中に対戦を頼むつもりだったが、有りのままを見たいという意向もあってそういう事はしていない。提督たちも通ったであろうシミュレーター棟には、現在行われている内容を観戦できる部屋もある。しばらく観戦した後、

「実際にやってみても良いかい？」

と言われ、私がサポートに入って暇そうにしていた一年生に対戦を頼んだ。おそらく過去の戦いの分析もしていたんだろう。操作はともかく、作戦案は候補生もたじろぐ様な切れ味があった。

「花を持たせてもらったね。ビュコック候補生のサポートもあつたし、良い思い出が出来たよ」

判定勝利を勝ち取った彼は、後輩にお礼と言いながら飲み物を奢り、そう言葉をかけた。まあ、面目を立ててくれた感じだな。

『操作性を改善すれば売れるかな？』

そんなつぶやきを聞いた気もするが、戦術シミュレーターは士官学校でも高価な部類に入る備品だ。それに簡易戦術シミュレーターにそこまで需要があるのだろうか？その時はそう思っていたが、タイロンさんは数年後に戦術シミュレーターの開発元と資金を出し合って、家庭用のPCでもできる戦術シミュレーターを開発。オンラインでロビーを作り、対戦と感想戦を行える商品を発売する。軍人だけじゃなく、退役軍人や士官学校志望者からも支持を受けたそのソフトは、3次元チェスに続いて、同盟市民の趣味として定着し、最終的にはプロまで生まれるのだから商売のタネはどこで見つかるか分からない物だ。

『売れる確信？そんなものはなかったかな？ただ、自分が候補生に

なった気分になれるなら多少高めでも売れる気はしていたよ。志願していなくても、戦争の話題がこんなに世間に溢れているんだから』  
なんでもない事のように言われた時、ビジネスで成功するのはこういう人物なんだと感じたし、俺は軍に進んで良かったとも思った。どうあがいても勝てないからな。

「本当に今日は楽しかった。修行先はウォーリック商会の関連会社の投資会社になったんだが、卒論が終わったらすぐに入社しろってうるさいんだ。卒業旅行でウルヴァシーの第4駐留基地に行きたかったんだが、そうも言っていられなくなってね。代わりと言っては失礼かもしれないが、士官学校見学が私の卒業旅行みたいなものだ」

各艦隊のグッズは、買おうと思えばネットでも買えるのだが、彼は妙なこだわりがあって実際に任官先に向いて買うのを信条としていた。エルファシルに次ぐ規模のウルヴァシーの駐留基地。そして宇宙艦隊司令本部の移転先であるジャムシードへの旅行を計画している事は私も聞いていた。だが、錬金術師を遊ばせておくつもりは、大人たちには無いらしい。

「子供の頃、一人でも接した軍人さんが志願を勧めていたら、私は軍を選んでいたと思う。でもみんな『兵器を買う予算の為にビジネスで稼げ！』って言うってくれてね。だから一個艦隊の整備費用分をビジネスで稼いで納税しようと思立てた。稼ぐのは私に任せて、アレク君は一人でも多くの部下を生きて連れて帰る指揮官になってくれ。そうすればいつか同盟が勝利できるさ」

「買い込んだ士官学校のグッズを自動運転タクシーの後部座席に積み込んでから、俺に視線を向けてタイロンさんはそう言った。『分かりました。俺もそうなるように精一杯努力します』」

握手を交わして、走り去って行くタクシーを見送った。タイロンさんなら本当に一個艦隊の整備費分くらい納税しそうだ。なら、俺も彼との約束を果たせるように頑張ろう。友人の頼みがきっかけだった士官学校の見学は、予想外の展開を見せ、俺にとっても思い出深いものとなった。

## 第86話 動き出す帝国

宇宙暦743年 帝国暦434年 7月中旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

コーゼル大将

「うむ。また大胆に割り切った策だな。いずれ帝国軍を背負う人物だと見込んでいたが、それは間違っていないかったようだ。」

「はい。それに、この策は作戦案には記載いたしません。インゴルシユタット艦隊の編成はシャンタウ星域で行います。これなら彼の艦隊に情報提供者が所属していなければ漏洩の可能性は極めて低いかと」

「うむ。そう言う面でも優れた作戦案だ。あとは卿の艦隊編成だが……」

「戦場はティアマト。それは叛徒たちも覚悟しております。敵将アツシユビーの得意とする用兵は詰まる所、主力で攻勢を受け止めつつ、戦力を後背に展開させ挟撃する点にあります。ならばそれを受け止める役目が必要かと」

私のオフィスでいつもの前線の味を味わいながらシユタイエルマルクと作戦案の太枠を煮詰める。本来なら統帥本部が行うべき事だが、統帥本部総長は更迭。併せて彼を後援していた一部の門閥貴族も取り潰された。もちろん出征を主導したローエングラム伯爵家も取り潰し。カストロプロ公爵家ですら多額の罰金を科された。

『軍に手を出せば火遊びでは済まない事を理解させる』

司令長官から軍務尚書閣下の意向は聞いていたが、文字通り大鉦を振るつたと言える処罰だった。だが、統帥本部総長の後任人事は未だ決まらず、壊滅した5個艦隊の後任人事も手つかずだ。独立分艦隊として再戦力化は進めているが、軍部系貴族の候補者も少なく、かといって平民を抜擢するにはタイミングが悪い。表面上とは言え、統帥本部総長派が実力主義を標榜していたのは事実。大鉦を振るつた後だけに体裁が悪い。そしてそれをすれば門閥貴族も人を出したがるだろう。そうなれば厳罰を科した意味がなくなる。



「局所的な攻勢を跳ね除ける専門部隊か。意図は分かるが卿は次代の帝国軍に必要な存在だ。参戦はしてもらおうが矢面にはなるべく立つてもらいたくない」

「ですが、対抗策を用意しない判断はあり得ないのでは？どなたか候補者はおられますか？」

「いるではないか。平民出身で大将という階級を恐れ多くも頂戴し、軍務尚書閣下と司令長官に取り入って宇宙艦隊司令本部を我が物顔でうろついている人物がな」

「提督ご自身がこの任にあたると？能力面では申し分ないでしょうが、今の提督は宇宙艦隊司令本部の要石となりつつあります。御身に何かあればそれこそ取り返しがつかないのではございませんか？」

「どちらにしても次の決戦で勝たねばならんのは事実。勝ったら攻勢はしばらく出来ん。私は前線を退き、統帥本部の立て直しを次長として拜命する事になる。ならば覚悟をしっかりと示しておく必要もある。分かりやすい功績も用意せねばな」

シユタイエルマルクの作戦では、インゴルシユタツト艦隊を旧式艦で揃え、あからさまに迂回進撃を匂わせて叛徒たちの戦力を引き付ける。戦力としては心もとないが、叛徒の1個艦隊でも引き付けられれば十分だ。そして対抗策として主戦力の中の1個艦隊を戦艦のみの編成とし、いわば全軍の盾として叛徒たちの衝撃を受け止めるといふものだ。彼はこの役目を自分が担うつもりだったようだが、わざわざ装備更新が進みつつある艦隊を再編するのは無駄だ。いや、言い訳はやめよう。彼が戦死して私が生き残る状況は避けたいのが本音だ。

「そこまでおっしゃるなら、小官としては提督の采配に従うのみですが……」

心配げな視線を向けてくるが、前線に立つ機会はこれが最後になるだろう。勝利を掴む以外に道はないのだから危険な役目を担う事にも懸念はない。

「ですが、帝国軍内部に情報提供者がいるというのは本当なのでしょうが？提督の言葉を疑う訳ではありませんが……」

「卿はまだ良いのだ。今回の作戦案は漏れる事を前提に作成してい

る。迂回進撃の意図が漏れれば、叛徒たちは多めに予備戦力を用意せねばならん。それに好機と見れば戦艦の列に飛び込んで来ることになる。そうなれば情報漏洩は確定的になるし、勝利の可能性も高まる。統帥本部に異動してからの最初の任務は連中のあぶり出しになるだろう」

「容疑者に心あたりはあるのですか？」

「証拠を掴んだ訳ではない。司令長官には念のため報告はしているがな。そんな顔をするな。卿は能力面はもちろんだが、誠実さが良さなのだ。人の足元に落とし穴を掘るような連中の事を気にするのはもう少し後で良いだろう。ただ、万が一の事もある。私の身に何かあった場合、我が家を訪ねてくれ。状況が把握できるように手配はしていた」

「閣下、そのような事は申されませぬ」

「良いのだ。あと5年もすればそういう配慮を考える立場になるだろう。卿は軍部貴族の受けが悪いから司令長官は難しいか……。統帥本部総長……。軍務省次官……。その際はむしろ私が支える立場になるかな？その時は今まで支えてもらった分を返せればよいのだが……」

『ピッピッピッ……。ピッピッピッ……。』

そんな話をしていた時、私の携帯が鳴った。発信主を確認し、シュタイエルマルクに一瞥を送ってから通話ボタンを押す。

「コーゼルです。ミュッケンベルガー中将、どうなされた？」

『提督、内密にして頂きたい話なのだが、今お話して大丈夫だろうか？』

「はい。この場にはシュタイエルマルクもおりますが……」

『彼ならお話しただいて構いません。先ほど叔父が倒れました。司令長官にお知らせした所、提督にもお知らせする様にと……』

「なんと……。それでご容体は？」

『軍病院に緊急搬送いたしましたので何とも。私もこれから向かう所です』

「承知した。艦隊司令部の方は私も気にしておくので気にせず付き

添ってもらいたい。それと……」

『はい。容体に関しては改めてご報告させていただきます』

通話が終わると、いぶかし気なシュタイエルマルクにも事情を説明した。この段階で軍務尚書に倒れられるのは痛い。だが、良いところがない帝国軍を長年尚書として支え、二人のご子息まで戦死した。その心労を想うと、責める気持ちは湧かなかった。

宇宙暦743年 帝国暦434年 10月中旬

惑星オーデイン 国務省尚書室

ツイーテン元帥

「ケルトリング伯の事は痛ましく思うが、我々は今後の事も考えねばならん。軍務尚書も統帥本部総長も不在では、司令長官にその責が集中するであろう？政府としても勝ってもらいたい気持ちはあるが、卿にまで倒れられては帝国軍が崩壊しかねん」

「リヒテンラーデ侯を始め、政府の皆さまにはご心配をおかけし申し訳ございません」

7月に倒れたケルトリングは、そのまま療養生活に入った。当初は回復が見込まれていたが、夏を過ぎた辺りで甥のミュッケンベルガー中将が見舞いに訪れた直後に容体が急変した。

『アツシユビーを斃せ！』

と呻くように2度繰り返してそのままこと切れた。帝国軍トップとしての重責、2人の子息の戦死。隠してはいたが、心労が重なっていたのだろう。長い付き合いだった。なんとかアツシユビー戦死の報を届けてやりたかったが……。

「その件なのですが、一時的にエーレンベルク侯とクラーゼン伯の現役復帰を考えております。先だつての敗戦の責任は子息にあるとは言え、汚名返上の機会が欲しいと。軍務尚書はエーレンベルク侯に、副司令長官をクラーゼン伯にお願いしようかと」

「卿が軍務尚書にはならんのか？」

「私怨がないとは申しませんが、軍務尚書が実質戦死したのです。司令長官として長年協力してきた身としては前線で叛徒どもを討伐す

る機会を逃したくはありません」

もし制約が何もなければ副司令長官にはコーゼルを押しただろう。平民とは言え正規艦隊司令の地位にあり、常に実力を示してきた彼は一定の権威を持ちつつある。だが、副司令長官は実質国内治安維持の為に任命する。コーゼルを任命しては前線に連れていけなくなる。それにいくら国難の時とは言え、平民が宇宙艦隊副司令長官になるのは、無理筋な人事だ。

「副司令長官には国内治安維持を主管させます。クラ―ゼン伯なら政府系の皆さまとのつながりもある。ご安心頂けると判断したのです  
が……」

「その配慮はありがたい。だが、些か政府系に近すぎんか？ 儂にその気はないが、軍と政府系の間に太いパイプができるのもな……」

「その時は門閥貴族が受けた大やけどを政府系が受けるだけの事でしょう。ご判断は侯と伯で決定されれば宜しいのでは？」

「また身も蓋もない事を……」

苦笑しつつも目は笑っていない。ケルトリングがこういう交渉を担ってくれていたのだと思うと今更ながら頭が下がる思いだ。

「軍としては壊滅した5個艦隊の再編成の足掛かりを付け、出征の準備を整えるのに1年から2年頂ければと。現役復帰も長くて数年と了承も取っております」

政府系からするとこういう交渉ごとに慣れておらず、長年司令長官職にあり権威だけはある私を軍務尚書にした方が何かとやり易いのだろう。だが、その思惑に乗るつもりはなかった。

「翻意は難しいか……。個人的には卿を尚書職にと考えていたのだが……」

「なにとぞ……」

出征に関しては心配していない。右腕にコーゼル。ミュツケンベルガーもシュタイエルマルクもいる。宇宙艦隊司令部総出で渾身の出征とするつもりだ。ケルトリング亡き今、政府系の一部からは攻勢への疑問の声も上がっている。旗振り役になれるのは私だけだ。そして旗振り役が後方に下がるわけにはいかない。

「承知した。政府としても全面的に協力しよう。もつとも予算の増額は厳しいがな」

政府系の首班であるリヒテンラーデ侯の内諾が取れた。この男の美点は貴族でありながら信用と言う物の重要性を理解している事だ。言葉にした以上は約束を違えない。これで本来の任に集中できるだろう。

「ありがとうございます。ではこれにて」

一礼して国務尚書室を辞した。出された薫り高い紅茶には手を付けなかった。軍が前線を維持している中で、後方でぬくぬくとしている連中が格式高いものを楽しんでいると思うと、妙な怒りが湧いていた。我ながら子供の様な意趣返しだと思う。格調高い内装に分厚い絨毯。贅を凝らした国務省の最上階の廊下を歩きながら、いつもコーゼルと飲む前線の味が恋しくなった。

## 第87話 動き続ける同盟

宇宙暦744年 帝国暦435年 2月中旬

惑星カツファ 第5駐留基地

ブルース・アッシュビー（元帥）

「それで？計画案から主導した基地の建設現場はどうか？」

「まあまあだな。完成すれば良い眺めになりそうだ」

駐屯基地をベースにした第3、第4駐留基地と異なり、宇宙艦隊司令本部の移転先になるこの第5駐留基地はすべてを新設する形で計画された。宇宙艦隊司令本部が移転すれば民間の需要も高まると予想されている。駐屯基地はそのまま民間用に宇宙港に改装する予定だった。

「各所とのホットラインを繋ぐ通信衛星は配置完了。駐留基地としての機能は可能だが、宇宙艦隊司令本部としての機能については問題も出てくるだろう。要望を受けながら増設と並行して事業計画を修正する予定だ」

基地が一望できる管制塔の窓に視線を向けながら、アルフレッドから報告を受ける。宇宙艦隊司令本部の移設には『首都星系の守りはどうするのか？』という感情論での反対もあった。だが、そもそも首都星系に侵入を許すような状況では敗戦したようなものだ。それにこのジャムシード星系はイゼルローン回廊とフェザン回廊の両方からハイネセンへ向かう最短航路を押さえられる位置にある。最終防衛線の構築と言う意味でも、移設は正解だった。

「後は星系経済への効果と、ハイネセンでの影響だな。まあ、政治・経済・軍のすべてが集約されている方が効率は良いかもしれないが、ハイネセンは既に過密過ぎる状況だ。そう言う意味でも何かしら効果が生まれると思うが……」

「そうだな。司令本部の後には国防委員会と法秩序委員会、それに財務委員会の外局が入る予定だ。官舎も一部払い下げが検討されている様だし過密な状況は少しは改善できるだろう」

4本の滑走路に整然と並んだ格納庫。地下には環状の地下鉄が走

り、各艦隊司令部のオフィスを始めほとんどの施設も地下に建造した。統合作戦本部ビルのような高層化も検討したが、動線がどう考えても過密になり過ぎる。分散させる意味で今回は地下案を採用した。運用を進める中で確認する必要もあるが、地下化した事で惑星標準時に合わせた照明の明暗の調整も行い、時間感覚を失いがちな艦隊勤務にあたる人員の環境改善も試みている。

「経済の面でも既に動きが出ているな。アンダーパイン社が隣のタフテ・ジャムシードにあつた警備艦隊向けの巡航艦工廠への大規模な投資を発表した。エルファシルやウルヴァシーと同様にサプライチエーンの構築の為に周辺星系への企業の進出も増えている。初手としては及第点はもらえるだろう」

「まったく。基準がカークやファンだから採点も厳しめになるか……」

第5駐留基地の規模は、現在3個艦隊レベルだ。最終的には6個艦隊クラスになる予定だが、増設工事はこれまでより余裕をもって進めるように計画した。拡張工事が完工すればその分、建設業界の案件が一気に減る。カッフアでも駐留基地稼働に合わせて民間でも建設ラッシュが続いている。案件が集中しすぎないように調整する意図も含んでいた。

「地下鉄駅周辺に設置した地下街への入居も順調だ。既存の住民優遇策の一環だったが、上々の滑り出しだな。大半は個人経営になりそうだし、軍と企業の癒着の声はこれで薄まるだろう」

「もともと軍に慣れ親しんでいたエルファシル、商船乗りが商売相手だったウルヴァシーとは状況が違うからな。軍の食堂で出せるものは決まっているんだ。ならそれぞれ特色があつた方が皆も喜ぶだろう?」

「そうだな。艦隊司令部は流石に固定するが、訓練様式に変更はない。となるとそれぞれ独自色があつた方が良いのは確かだろう」

エルファシルは軍事の中心だったハイネセン風の食文化。そこにウーラント商會が帝国風の食文化を持ち込み、独自色が生まれている。ウルヴァシーはフェザンからの商船乗りと各地方星系、それに

元捕虜の出入りも多いからそれらが交じり合ってやはり独特だ。

そこで現在は4箇所、最終的に7箇所設置される地下鉄駅付近に設置する地下街のテナントは、基本的に地域資本優先にした。ハイネセンから出撃する際、必ず通る航路ではあったが、今までは文字通り素通りだった。見かけるが関係は浅い。そんな存在だった軍が急に身近な存在となる。大規模資本を入れても良いのだが、独自色を出す意味と、地域経済への効果も期待しての決断だったが、うまくいったようだ。

「これであいつらも俺が経済面でもやる奴だと思いつただろう」

「うーむ。そう言う面はあるだろうが、カークやファンなら『司令長官の仕事か?』と言いつつだし、ウオリス辺りなら『まあまあだな』とでも言うんじゃないか?」

肩をすくめながらアルフレッドが応じた。連中に対抗する意識がゼロだったとは言わないが、宇宙艦隊司令本部の移設に司令長官が陣頭指揮を執るのは不自然じゃない。特に艦隊司令と兼任で統合作戦本部次長になったカークには、色々負担をかけた。

第13艦隊の艦隊司令部はあいつの参謀長であるアツテンボロー爺さんに任せれば問題ない。今まで面倒をかけた礼の意味も込めて家族との時間を取りやすいハイネセンにしばらく居させたかった。ファンはウルヴァシー方面軍の司令だし、ウオリスは俺の後任としてエルファシル方面軍の司令だ。それも含めれば、陣頭指揮は俺がとるべきだろう。

「実際問題、ハイネセンの各工廠は設備更新の時期が迫っていたからな。そう言う意味でも良いタイミングだった。軍需産業の大手もハイネセン偏重の体制を再構築する良い機会になっただろう。どの地方星系でも最低限のインフラは整っているからな。軍需産業はハイネセンに偏重していた最後の業界だ。派閥色を薄めるという意味でも悪い事ではないだろうな」

ハイネセンに偏重していた軍需産業はバーラト系原理派の牙城でもあった。だが、派閥同志でいがみ合っていた時代を知る世代の引退が始まる時期だ。次の世代が派閥色で影響を受けない為にも、裾野が



広くなって欲しいと思う。

軍需産業の事を考えた時、ふと親父の顔が頭に浮かんだ。長男ドナルドに続いて長女イヴァンカが生まれた時も顔を見には来たが、過ごした時間を考えればジークマイスター室長や悪友達の方が長い。祝われてもそこまで感情が動かなかったのは、俺が薄情なのだろうか？ そんな事を考えながら、管制塔から見える基地に視線を向ける。まだ2月だと言うのに、天気は快晴。こういうのを凍て晴れというのかな。幹線道路を歩く兵士が寒そうに手をこすり合わせるのがやけに印象に残った。

宇宙暦744年 帝国暦435年 3月中旬

惑星ハイネセン 統合作戦本部ビル

カーク・ターナー（大将）

「忙しい所押しかけて迷惑だったかしら？」

「貴女の訪問を迷惑に思うような恩知らずじゃありませんよ。それにそろそろこのオフィスにも来客が欲しかった所ですから」

「私が初めての来客なの？ 噂には聞いていたけど、随分気を使っているのね」

「34歳なんて民間や政界ではやっと中堅どころでしょう？ 足を運ぶだけで好感が得られるならこんなに割安な話もありますからね」

お互いにシロン産の紅茶を楽しみながら会話を交わす。会話の相手はブルースの母親でもあるナタリー元議員だ。俺がエルファシルの第3駐留基地にいた頃は、上層部限定で利用可能なホットラインで話が出来た。ただ、いざハイネセンに来るとなかなか難しい。

ブルースの留守に、幼子二人がいるアッシュビー邸で密談するのは無理があるし、どこかで会食しようものなら何かと痛くもない腹を探られる。議員を引退したとはいえ影響力は保持している元議員と、宇宙艦隊と政府上層部のつなぎ役であるはずの統合作戦本部次長が密談すれば勘繰るなど言う方が無理かもしれないが……。

「少なくとも歴代の国防委員長の部屋よりは趣味が良いわ。亡命系のソファアの座り心地はオルテンブルク侯爵邸で体験済みだけど、自費

とは言え貴方も良い物を早く知りすぎたわね。これカツシーナ工房の作品でしように……」

「良いんですよ。ここに招くという事は私にとって大切な方なんですから。そのソフアーもやつと座り心地を確かめてもらえて喜んでいきますよ」

「足を運んで好感度稼ぎ、足を運ばせても好感度稼ぎ。貴方も隙が無いわね」

「貴女からそう言われるのは嬉しいですね。まあ、こう見えて色々気にするタイプですから、ホスト役をする機会はなるべく減らさない。と。そうでなくても考える事は多いですし……」

ハイネセンに異動して8カ月、週末はテルヌーゼンで過ごしているし、一般的な家庭持ちの生活らしきものを俺は新鮮な気持ちで楽しんでいる。統合作戦本部次長職に就いたと言っても、俺の役目は宇宙艦隊と統合作戦本部の繋ぎ、それと国防委員会への根回しだ。

代議員たちは支援者に見せる意図もあってまず写真を撮りたがる。その後は今までの尽力に感謝し、軍としての意向を分かりやすく伝える。そして予算が必要なら、ちゃんと見込まれる経済効果の資料も添えて選挙区に生まれる利益を明示する。そこまですれば大抵の話はすんなり進む。

喜ばしいのは、ジークマイスター分室は統合作戦本部付きだから、会食する機会が増えた事だ。恩師孝行じゃないが、室長も62歳。あの頃に比べたら白髪も増えたし、健啖家ぶりも健在だが、いつまでもという訳にもいかないだろう。ターナー邸にも何度か招けた事は、俺にとっても喜ばしい事だった。

「例の件、だいぶ時間が掛かってしまったけど何とか改正案がまとまったわ。出元が貴方である事は内密にしたいだろうから、息子の友人に表敬訪問の態を取ったのだけど……」

「お気遣いありがとうございます。実際問題、私達が話をする場合は選択肢があまりないですからね」

「あら、馴染みのバーでも私は構わないけど？」

「思わせぶりの態度は良くありませんよ？貴女はドナルド君とイヴァ

ンカさんというアイドルに夢中のはずだ。私と火遊びする気はないでしょうに……」

「そういう事を把握しているのは流石ね。言い寄ってくるのはそういう事に考えが及ばない男性だもの。あしらうのも正直疲れるわね。戦況を把握している点は、同盟軍が誇る統合作戦本部次長ね。褒めてあげるわ」

そんなやり取りをしていると、ナタリー元議員は2枚の資料をこちらに差し出してくる。

「改正案に関しては来月の最高評議会で決が採られるわ。既に過半数を押さえているから改正は確定ね」

「公布から施行までの猶予期間はとるんでしょうか？」

「いいえ。今回は手続法改正だから採決がとられた日から施行するわ。捕虜の取り扱いと亡命者の取り扱いは差が出る形になるけど、これは将来的に帝国への侵攻を開始した時の同化政策の検討も含んでいるの」

【捕虜の帰化申請者】

・ 帰化申請が受理されてから満10年で選挙権を付与

・ 15年以上、1万ディナール以上の納税をした者に帰化から満20年で被選挙権を付与

「選挙権は帝政との明確な違いを体感させる意味でも必要でしょう。それに帰化から10年もすれば自分の環境に愛着も湧くはずですよ。1万ディナールが高いか？安い？はそれぞれですが、同盟市民の平均的な納税額から少し低い位でしょう。低すぎも高すぎもしないハードルだと思います」

「そうね。こっちは案外すんなり決まったの。ほら、帝国軍の兵士たちは強制されて出征しているって感覚が市民にはあるわ。彼らは半分は独裁制の被害者とも言える」

前世の記憶も含めると不思議な価値観だが、市民の多くは帝国軍の捕虜を被害者とみなしている。エコニアでもそれは同じだったし、デニス軍曹を始め、歓迎とまでは言わないが、自然に受け入れられた事に、帰化申請した捕虜の方が戸惑うような状況だった。

「もめたのは亡命者の方ね。フェザーンとは関係が良いとは言えない。かと言って、あまりに厳しい条件にすれば、折角進んだ融和が崩れかねないという声もあったの」

「懸念する気持ちも分かります。時間をかけてようやく融和が進んだのも事実ですからね。ただ、自治領主府が正式な書類を整えればこちららは裏を取るのには難しい。表面上は亡命者を装いながら工作員が入り込むのは防げないでしょう」

【亡命希望者】

・ 亡命が受理されてから満20年で選挙権を付与

・ 20年以上、1万ディナール以上の納税をした者に亡命から満25年で被選挙権を付与

・ 身元引受人がいらない亡命者は移住先を限定する

・ 引受人は保証金を政府に収める

「亡命者への条件は捕虜より厳しいものにしたわ。それと身元引受人がいらない場合は移住先は辺境星系か亡命系の星系になる。ハイネセンのような中枢部に大量流入は出来ない形にしたの。保証金に関しては一人当たり5万ディナールを予定しているわ」

「熱烈な共和主義者でもない限り、基本的には身の危険から逃れる為の亡命のほずですから良いのではないでしょう？強いて言うなら、短期間でも移行期間を設けて、その時期に亡命申請した案件については名簿が欲しいとは思いますが……」

「案としては伝えるけど、どうかしらね。想定以上に申請が増えたら防諜機関だけで対処できるのかしら？人口としての1万人は少ないけど、危険人物リストの1万人は対処するのは厄介じゃない？」

「確かにそうですね。泳がせるにも数が多くなれば抜け漏れは出るでしょう。防ぐだけでは限界がありますから攻めに出たい気もしますが、今回はあきらめましょう」

「その方が良いわ。何かあった時に責任問題になりかねない。功績を横取りするのと責任を押し付けるのだけは得意な連中の巣窟なんだから」

「写真と選挙区への利益を用意すれば大体話を通してくれる方々なの

で少し甘く見ていたかもしれません。ご教授感謝しますよ。それとこの一件で条件緩和を強く主張した方の名簿が欲しいですね。疑えば切りがありませんが……」

「既にマークされてはいると思うわよ。念のため用意するけど、統合作戦本部に代議員の名簿があるなんて話は色々憶測を呼ぶわ。言うまでもない事だけど、取り扱いには注意してね」

これはあくまで俺の持論だが、政治は現実・生活だと思う。同盟憲章と言う理念はあるが、明文化されていない理想を主張する代議員がいるなら要注意だ。理想を優先して市民を危険にさらすような思考を持つ人物は政治家になるべきではない。それこそ理論に浸れる学者なり思想家になれば良いのだ。暴論に聞こえるかもしれないが、独裁制でも人は生きていける。程度はもちろんあるが、優先されるのは国民の安全と生活。明るい未来を感じられれば尚良い。

「言葉だけの感謝はもう代議員時代に聞き飽きたの。ちゃんと現物もお願いね」

「勿論です。イヴァンカさんの生まれ年のワインをちゃんと大量に保管してありますから」

「それ朗報ね。私も骨を折った甲斐があったわ」

嬉し気にカップを掲げるナタリー元議員。酒ばかり用意している気がしないでもないが、彼女はターナー商会の大口ユーザーだ。ブルースだけじゃなく、二人の兄の子供たちの分も生まれ年のワインとウイスキー・ブランデーを発注している。取り寄せることもできるが、結局年代物の酒を開けるのは醸造所でそれなりの肴を用意した会食の場になる。継続的なヘビューザーに多少の優遇をするのは、ビジネス的には当然の事だ。

彼女との会合を終えた俺に、軍病院から緊急の連絡が入る。アルフレッドの妻であるカトリナが倒れ、緊急搬送されたというものだった。前線を担ってきた俺達の間で、首都星系にいる者が父親なり夫の代行をするのが習わしの様になっている。連絡を受けてすぐに軍病院へ向かった。

## 第88話 休息地

宇宙暦744年 帝国暦435年 4月中旬

惑星テルヌーゼン ターナー邸

アルフレッド・ローザス（大将）

「このワインは……。また気を使わせてしまったな……。」

「気にするな。逆の立場なら、お前がこうしただろう？それだけの話だ」

連れ添って14年、出会ったのは初等学校だから26年。隣にるのが当たり前のようになっていた妻を失った私は、自分が思っていた以上に打ちのめされていた。このままでは軍務に支障をきたすと翻意を促すブルースに今回ばかりは気持ちを押し通し、休職させてもらった。

倒れた直後にカークを始め、クリスティンさんの手配で子供たちも病院に駆け付けた。だから一人で逝かせる形にはならなかったが、自分が間に合わなかったことは心に鉋が刺さった様にズキズキと痛む。

流星に子供たちだけでシルバーブリッジの官舎に置いておくわけにもいかない。普段から家族ぐるみの付き合いをしている僚友達の伴侶たちが協力を申し出てくれたが、官舎を引き払い実家のあるテルヌーゼンに居を移す判断をした。

「子供たちの件もすまん。カークのような存在を支える志を立てたとこのに甘えてばかりだ」

「気にするな。そもそもメープルヒル校の時代からフレデリックだの、ウォリスだのヴィットリオだのと頭痛の種に囲まれていた。その上、ブルースだろ？そういう統計があるとしたら、平均の10倍は苦勞を背負いこんだんだ。こういう時期があっても誰も文句は言わんさ」

軍人として前線に赴いている私は、誰がどう言おうと戦死の危険が付きまとう。妻の薫陶もあって子供たちもそれを理解はしていた。それだけに亡くなると言う想像をした事が無かった妻の死は、子供たちにもショックだったようだ。

カーク夫妻の勧めもあつて、3人の子供たちはターナー邸で生活している。そして土曜日の昼から夕方にかけて、庭でのバーベキューや燻製作りなどを行いながらその週にあつた事を聞く。それからカークと一緒に少し酒をたしなみ、ローザス邸に帰る。そんな生活をしている。

「両親に似て良い子達だ。それにうちにはサラ君もいるし何だかんだとタイロンも入り浸っている。アレクも出入りしているしな。距離感を確認しなおす意味でも今はこのままで良いだろう。復帰するにも、転職するにも保護者役が近くにいる必要はあるんだからな」

「そうだな。私からも折を見て小遣いを渡しておかないといけないな。それにしてもテルヌーゼンもだいぶ変わったな。子供の頃は士官学校が特色だったが、人口の増加でその色も薄まった。スーツを着て出歩けば誰も私だと気づかないしな」

「ふふ。アルフレッド、サングラスにスーツはほどほどにな。『8人の無頼漢』の大ヒットで、採寸したスーツに濃い目のサングラスをかけるのが流行っているらしいぞ。もつとも最近ではミラーグラスが流行り始めたらしいが……」

「それは初耳だが、確かにミラーグラスをかけている市民が増えていた気もするな。それにしてもあの時は、こんなことになるなんて思いもしなかった。流行りが何から生まれるかなんてわからないものだな……」

自然に少しだけ笑えた。笑ったのはカトリナを失ってから初めてかもしれない。そう言えば昔から頼んでいるテーラーでもだいぶ選べる生地が増えていたし、サングラスも記憶よりだいぶ種類が増えていた。

「男性陣には苦勞をかけたかもしれないな。スーツが流行った事で女性陣の見る目も肥えた。誰でも着ればそれなりに見えたのに、最近では採寸したものでないとシルエツトが醜いとか、カフスが派手過ぎないか？靴は安物じゃないか？ちゃんと磨かれているか？なんてのがモテるポイントらしいぞ」

「女性陣はいつだって男性に厳しいものだが……。スーツを流行ら

せた原因の一人としては、申し訳ない気もするな」

「豊かになった証拠でもあるんだろうな。女性陣からすれば化粧に装いと気合を入れたのに、男性陣が普段着……。なんてのがご不満だったんだ。スーツを着ればそれなりになるが、それでも女性の準備に比べたら楽だろうからな。もつと気合を入れるという事だろう」

結婚してからはそうでもなくなったが、付き合っている頃は私も何かと妻にリードしてもらったものだ。カークの配慮で一緒に通った帝国亭でもエスコートが成っていないとよく怒られた。

『食べるペースを合わせないとそう言うつもりはなくても急かされている気がするわ。美味しい料理も大事だけど、会話も同じくらい大事な。料理に夢中になり過ぎないで』

そんな事を言われた記憶がふと蘇る。クリスマスに手品を披露した時も、自分以外には見せるなど言われた。後から知った事だが、直前の人気バラエティで手品の特集があり、ネタばらしを妻は見ていたようだ。

「少しサングラスをかけておけ。男同士でハンカチのやり取りなど様にならない」

カークにそう言われて、瞳から涙が流れている事に気づいた。ハンカチを受け取り目を拭ってからサングラスをかける。既に夜になる時間帯。サングラスをかければ視界は真っ暗になるが、むしろそれが良かった。ワインをちびりちびりと飲みながら雑談を続ける事2時間。私はカーク夫妻と子供たちに見送られ、家路についた。

宇宙暦744年 帝国暦435年 4月中旬

惑星テルヌーゼン ターナー邸

クリステイン・ターナー

「よし！子供は寝る時間だぞ〜」

そう言いながらヴェルナーを肩車し、セシリアちゃんを抱っこした夫が玄関へ戻って行く。一時期は焦燥した様子が強かったアルフレッド君もだいぶ落ち着いて来たし、預かっている彼の子供たちもこの生活に馴染んでくれている。



「シユテファン、良い判断だ」

視線を向けると玄関のドアをシユテファンが開けている。

「クリステイン、君も体を冷やしちゃいけない時期だ。早くおいで」  
玄関で2人の子供をゆつくり下ろした夫は、息子とドアの抑え役を交代し、私に声をかけてくる。少し足早に玄関に進み、夫に迎え入れてもらおう。氣遣う様に腰に手を回してくれる夫。統合作戦本部次長職を兼任してから夫は週末を自宅で過ごすようになった。そういう機会も増えたから私のお腹には4人目の命が宿っている。

「アルフレッド君も一時期よりは落ち着いたようで安心しました」

「うん。まあ、あいつは自分の為というより誰かの為に頑張る方が動機付け要因になるタイプだ。もう少し休めばそれを自覚して立ち直ってくれるさ」

知り合った頃からアルフレッド君は周囲に配慮を欠かさない人だった。そんな彼にカトリナさんはもどかしい思いを感じていた時期もあったようだけど、彼女が思いを寄せたのもそういうアルフレッド君の美点があったから。でも私が彼女だったらやっぱりやきもきしたと思う。意中の人が自分に配慮してプロポーズを迷っているなんて、やきもきするだろうから。

「大事にしないとイケない時期に負担をかける形になって済まないな」

「いいえ。子供たちは一緒に遊んだ仲ですし、皆良い子ですから」

妊娠するのは4回目。何となくそんな気がして産婦人科の診察を受けたのが1月の末頃。それを知った夫は『ありがとう。これで室長に名付け親になって頂ける』と大喜びだった。士官学校を卒業して最初に任官した部署がジークマイスター室長の分室だったそうだ。機密もあるので詳しくは話してくれなかったが、だいぶお世話になった方との事だった。

初めて我が家にお迎えする時は緊張したが、物静かな初老の男性でスーツをきれいに着こなし、軍人だと知らなければ財界の名士のような雰囲気を見せていた。父と同じように子供たちとのバーベキューを楽しんで頂けた。もつとちゃんとしたおもてなしをすべきではと

も思ったが

『美食という意味では食べようと思えばどこでも行けるんだ。我が家らしいおもてなしの方が喜ばれるよ』

夫の言葉にしたがったが、ヴェルナーが室長に肩車を要求した時は正直どうしたものかと思った。笑顔で孫をあやすように肩車をする室長を見て、なぜか昨年、ウォリス君の次男の誕生の報を待っていたかのようにお亡くなりになったグレック会長の顔が頭をよぎった。

会長も私達と接する時は優しい祖父のような印象だったが、ビジネスの場では別の顔を持つていただろう。室長しかり、夫しかり。戦士たちが羽休めに訪れる我が家が休息の場として相応しいものであれば良いのだけど……。

「クリステイン。何も気にする必要はないさ。子供はまず家庭で社会を学ぶんだ。年長者としてタイロン、アレク、そしてサラ君。同世代もいるし赤ん坊も生まれる。我が家は環境としてはかなり良いと思うよ?」

表情に出っていたのか? 夫は私になにか懸念している事は察してくれたみたい。少し方向がズレていたけど、そんな事は雑事だ。夫の左腕を抱きしめながら階段を上り寝室に向かう。留守がちだった夫との時間が増えて喜んでるのは子供たちだけではないのだから……。

「そう言えばサラ君の件はどうするんだい? 人生の進路を決めるのは少し早い気もするが、アレクと結婚するつもりなんだろう?」

「ええ、良い子ですし記念大の経済学部卒なら人材としても申し分ありません。断る理由は無いと思うのですが……。」

「そうか。二人の卒業は3年後だ。軍の主要な任地にはウーラント商會は進出しているし問題ないだろう。私からもユルゲンにお願いしておくが、クリステインからも口添えしてやってくれ。もし仲人を頼まれたら受けるつもりだが、良いだろうか?」

「もちろんです。式は帝国亭でなさいます? それとも蒸留所の会場にされますか?」

「本人たちの意向を確認してからだな。タイロンに資産運用を依頼し

ている様だが、新婚生活は何かと物入りだ。多少は支援してやりたいが構わないか？」

「当然ですわ。それに士官学校と記念大の卒業生が出席するんですから宣伝効果も見込めます。むしろ報酬を出したい位です」

「君も一人前の商売人になったな」

そんな話をしながら二人の時間が過ぎていく。妊娠中だからお酒は控えているけど、それでも私にとっては世界で一番満ち足りたひとときだ。こんな日々がずっと続いたらと思わないと言ったら嘘になる。でもさすがにそれは望みすぎだろう。

夫は近いうちに前線に戻る。だからこそこのぬくもりを今のうちに噛みしめておこう。肩を抱き寄せる夫のぬくもりに意識を向けながら身体を預けゆったりと過ごす。妙に子煩悩な夫の事だ。お腹の子が生まれれば、そちらに意識を向けてしまうだろうから。

## 第89話 燃やす者 くべる者

宇宙暦744年 帝国暦435年 7月中旬

惑星オーデイン 宇宙艦隊司令本部

ツイーテン元帥

「卿には色々と手数をかけさせたな。無理がない人事だったとは言わないが、何かと煩わしい事が多かったのも事実。やっと出征計画に本腰を入れられる余裕が出来た」

「ケルトリング伯があのような事になったのです。軍でも政府でも要であられた方が急逝されたのです。私が言うのも変な話ですが司令長官のご尽力に感謝します」

リヒテンラーデ侯の協力は取り付けられたものの、ドラゴニア会戦の敗戦の責に問われた人物の親を現役復帰させる案には、否定的な意見も存在した。

『軍部貴族は老人まで担ぎ出さねばならぬほど人材不足なのか？』  
『司令長官を昇格させればよい。復讐の為の出征に意味はあるのか？』

と言った意見が陰で囁かれていた事も把握している。だが、人事案と出征が陛下に承認された事で、その声も落ち着いた。宮廷工作が得手とは言えない私を政府系が援護してくれた結果でもある。借りが出来た事は確かだ。この借りは出征の勝利で返したい所だが……。

「私が動けない中、宇宙艦隊の統制を取ってくれた事、改めて礼を言う。作戦案も見させてもらった。シュタイエルマルクの作戦家としての才能は確かだな。それを卿が磨き上げた物だ。私としてもこれで進めたいと思っている」

「ありがとうございます。シュタイエルマルクも司令長官の言葉を聞けば喜びましょう」

慣れない政府や宮廷での工作に時間を取られた私に代わって、宇宙艦隊の統制と作戦案の作成を進めてくれたのはコーゼルだった。本来なら統帥本部が作戦案を主導し、司令長官である私が統制を取るのが筋だが、そうも言っていられなかった。平民出身とは言え、ある種

の權威を備えつつあるコーゼルは、事情を理解して全面的に協力してくれている。この状況で信頼できる味方がいてくれたことは、私にとつても救いだつた。

「一点気になるのは卿の艦隊の役目だ。インゴルシュタット艦隊については異論はない。将官として平均的な能力はあるが、叛徒どもと真正面から組み合うには力不足と本人も認識しているだろう。だが、卿がわざわざ矢面に立つ必要はあるのか？」

「長官、誰かがやらねばならぬ役目です。当初案ではシュタイエルマルクが提案者の責務としてこの任に当たるつもりでした。ですが帝国軍の将来を考えると、シュタイエルマルクとミュッケンベルガーの両名は失う訳にはいかないでしょう」

彼から名前が出た両名は軍部貴族の若手の中でもかなり高い評価を得ていた。作戦家としての評価は高いが社交を好まない為、支援者が少ないシュタイエルマルク。作戦家としては一步譲るが、典型的な軍部貴族の将官で社交にも積極的なミュッケンベルガー。前者はいずれ統帥本部総長。後者は宇宙艦隊司令長官の候補と言えた。

「卿のいう事は確かだが……いや、そこまで言うなら何も言うまい」

私が今一番当てにしている目の前の男は、逆に平民出身という事に引つ張られているのかもしれない。残念な事実だが大将と言う階級は平民にとつての最高到達点だ。貴族出身でない限り、上級大将には昇進できない。戦後は統帥本部の次長として、立て直しの主幹になる事が内定している。

平民出身としてはこれ以上は無いだろう。だが、平民出身ながら軍部貴族も一目置くコーゼルも帝国軍にとつては失えない人材ではないだろうか？軍内部の大掃除を安心して任せられる人材は彼しかない。そして、勝利しても無傷では済まない事を考えれば、軍部は今後、下級貴族や平民にも上層部への扉を開くだろう。

「長官、お考えになられている事はシュタイエルマルクからも直言されました。ですが戦後の御役目を果たすためにも、分かりやすい功績を上げる必要があると判断しました。拔擢には責任が伴うのだと明

示すれば、安易な夢を見る士官も減るでしょう。不満を減らす意味でも必要な事だとお考え下さい」

「分かった。卿の覚悟、ありがたく思う」

出征案は既に煮詰まりつつある。年明け早々には出征できるだろう。宇宙艦隊の威信をかけた出征に参加するのは以下の艦隊だ。

- ・ ツイーン艦隊（宇宙艦隊司令長官直卒）
- ・ コーゼル艦隊（旧式戦艦のみの編成）
- ・ シュリーター艦隊
- ・ インゴルシュタット艦隊（旧型艦のみの編成）
- ・ ミュッケンベルガー艦隊
- ・ シュタイエルマルク艦隊
- ・ カイト艦隊
- ・ カルテンボルン艦隊

8個正規艦隊を動員し、総勢105000隻。コーゼル艦隊は戦艦のみの編成で1万隻。カイト・カルテンボルン艦隊は最新鋭艦で揃えた為、同じく一万隻の編成だ。既にアマリッツア星域に新設した補給基地にミサイルを始めとした軍需物資の搬入を開始した。

物資の蓄積を待つて先遣隊を派遣し、イゼルローン回廊内の掃宙を開始する。大型輸送船も2万隻後に続く。今まで生じていた補給面の不利も、これで解消できるはずだった。コーゼルはもしかしたら私の内心を慮ってくれたのだろうか？アッシュビーの首を取るか死ぬか。私もそんな覚悟を決めている。

宇宙暦744年 帝国暦435年 7月中旬

惑星オーデイン 軍務省参事官室

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

「おめでとうケーフエンヒラー大佐。志願以来よく励んでくれた。卿を昇進させて送り出せる事を私も喜ばしく思う」

「はっ。参事官には至らない小官をご指導頂き、ありがとうございます。宇宙艦隊司令本部に異動してからも閣下のお名前を汚さぬように精勤するつもりでおります」

襟元の中佐の階級章を大佐の物に付け替え、私が祝辞を述べると、ケーフェンヒラー中佐、改め大佐は嬉し気にそう応じた。一年半、彼の教育に携わったが内務省の地方自治局とはいえ、エリートコースにいたのは伊達ではなかった。事務作業に関してはお手の物だったし、変なプライドも無いから不明点はそのままにせずに周囲に確認していた。

当初は男爵家の嫡男で内務省のエリートと言う前評判に距離を置いていた職員も、今では彼を送り出すのを嫌がっていた。優秀で謙虚で話の分かる中間管理職は今の帝国では得難い存在だ。そんな彼を守ってやれなかった内務省も、ある意味、帝国の闇の一端なのかもしれない。

「来年には出征と聞いております。その前に一度ご挨拶に上がればと思っておりますのでよろしくお願いいたします」

「そんな事は気にせんで良い。まずは出征に集中するのだ。事務作業の手順は宇宙艦隊司令本部も変わらないはずだが、各所で独自の流儀があるのも事実だ。まずは任に慣れる事だ。私への挨拶など、戦勝の後でも良いのだから」

「承知しました。最後までご指導いただきありがとうございます」

感謝の視線を向けながら応じる大佐が、軍人らしい敬礼をする。それに答礼すると参事官室のドアを開けて部屋を辞していった。この後は参事官付きの面々と挨拶でもするのだろう。義理を欠かさない。貴族としての教育も身になっている。

「本当に残念だよ。大佐……」

閉まったドアから視線を外し、執務机の右手にある窓に歩みを進める。窓からは夏の季節に相応しい強い日差しが差し込んでいるが、冷房の効いたこの部屋ではむしろ心地よいものだった。

「こんな感傷めいたものを感じるあたり、私もまだまだ甘い様だ」

強い日差しを受けながら風を受けて揺れるけやきの枝に視線を向けながら私は自問していた。あれから何度も同志にすべきではないか？と悩んだのも事実だ。それを吹っ切る意味で彼の事は利用させてもらった。

もともとコーゼル艦隊への配属を希望していた事は申告されていた。半年もすれば業務に慣れていた彼を、宇宙艦隊司令本部の任であるアマリツツアの補給基地への軍需物資輸送計画に噛ませるべく動いたのも私の手配だ。司令長官は軍務尚書が倒れた事で慣れない政府との交渉に時間を費やしていた。宇宙艦隊で権威を備えつつあるコーゼルがその計画の責任者になる。

「コーゼルめ。さすがだな。情報漏洩にも、そしておそらく私が関わっている事にも気づいたに違いない」

ケーフェンヒラーを貸し出すにあたって、コーゼルからは丁寧な礼状が送られてきた。だが、これは異常事態だ。正規艦隊司令の後任に指名し、伯爵家に連なり男爵家当主でもある私は、本来なら彼の後援者でもあり、宮廷の事情にも詳しい。何か含む事が無いのであれば、慣れない業務に苦戦している司令長官を助ける意味でも私とお礼言上の名目で面会するのが普通だった。

「まあ、証拠はない。大掃除を始めるのは叛徒たちを叩きのめしてから……。」と言った所かな？」

来年に予定されている出征計画は今まで以上に簡単に情報が手に入った。軍務省と統帥本部が機能不全を起こしている事を加味してもさすがに不自然だ。つまり手に入った情報にはさらに裏があると見た方が良い。

「まあ、良い。作戦案が漏洩する事を加味して作られた可能性が高いと添えれば良いだけだ。それに私に疑いを持っているなら、旗下に配属された彼への接し方にも悩むだろうしな」

コーゼルが可愛がっているシユタイエルマルクが作戦家として優れているとしたら、ケーフェンヒラーは軍政家としての才を持っている。そして周囲への配慮と言う面ではむしろ上だろう。職務に精勤しながら理不尽な離婚に絶望し、軍に志願するような青臭い若者。コーゼルは私の件が無ければきっと可愛がるタイプだ。だからこそ悩むに違いない。

「私の部署にいた。それだけでは証拠にはならない。実際に彼は何も知らないのだ。素直に重用してくれても構わない。だが、コーゼルな



らきつと気にはするだろう。それだけで十分だ。少しでも出征に雑事を持ち込めば、それだけに集中できなくなるだろう」

半分はケーフエンヒラーを利用した自分を肯定するために吐いた言葉だ。マキをくべ始めてどれくらいの時が過ぎただろうか？何本のマキをくべたのかも覚えていない。

今更、手元のマキのひとつに愛着を感じたからと言って、くべる事を躊躇する理由になるだろうか？躊躇した所で意味はないのだ。ならば遠慮なく燃やすべきだ。感傷に浸るのは大きく燃え上がった炎を確認した後でも遅くはないのだから。

## 第90話 老提督との邂逅：予定外のキャリア

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン 帝国亭

ヤン・ウエンリー（少佐）

「数年ぶりだけど、ここは変わらないね。それがまた良いんだろうけど。この雰囲気を持するために改築費以上の修繕費をかけているんだからすごいものだ」

「士官学校の卒業生たちにとっては思い出の地ですからね。合格をここで祝い。在学中は慶事があるとここで祝い、そして卒業は友人たちとここで、父兄とは蒸留所で祝う。そうして同盟領に散らばっていく先にも、ほとんどの基地近くには帝国亭がありますからね。もつとも星系によって多少アレンジが違うらしいですが……」

「そうだね。私はウルヴァシーしか他所を経験していないが、雰囲気もメニユーも少し違うかな。定番の物は同じレシピだけどね」

停車場で自動運転車を降り、帝国亭のロビーへ向かう。「変らない」という事が売りになる事は父さんからの教えでなんとなく理解はしていた。でも、この歳でそれを実感することになるとはなあ。確かに勤務明けには私もなぜか帝国亭に足を運んでいた。もつともメニユー以上に手慣れた手付きで淹れられるシロン産の紅茶目当てだったが……。

「ヤン様、ご無沙汰しておりました。お連れ様は既にお着きです」

ドアマンが開けてくれた扉を抜けてロビーに入ると、顔なじみのマネージャーが声をかけて来た。一瞬誰かと思ったが

「キャゼル又先輩にも声をかけておいたんです。ヤン先輩からの回収はまたの機会にお願いしますね」

「まったく。そう言う要領の良さを士官学校でも活かせば良いのに……」

「候補生としては自分の策略が優秀な先輩に通用するか試したと言った所です」

ニコニコしているアッテンボローに苦笑しながらそう応じた。

キャゼル又先輩とは士官学校以来の付き合いだ。戦史研究科の廃止に伴い、私はエリート学科の戦略研究科への異動を命じられた。学費の返還という条件付きだが、断る権利もあった。でもそれだと家族の徴兵名簿の順位は下がらない。渋々それに応じたが、その話を聞いて憤慨したのが従妹のような存在のジェシカだった。

隣接する音楽学校に通っていた彼女は、お嬢様と言っても良い環境で育ったのにやけに行動力があつた。それにエドワーズ家もマフィアに属していたから当然士官学校にも顔なじみが多数いた。私や親友のジャンだけでなく多くの候補生が『出来る限りお互いの力になる』という暗黙のルールを重んじて、自分の立場を無視してジェシカが旗振り役の抗議運動に参加した。

あの時は内心どうなるか心配したが、マフィアに属する将官の中で最高位で宇宙艦隊副司令長官だったビュコック大将が事情を説明するという配慮をした事で、事態は沈静化した。ただしここまで事が大きくなると御咎めなしとは行かない。

『タイロンにあまり心配をかけてはならんぞ』

『ヤン候補生、君には責任を取って、戦史研究科の廃止で移動される書籍の目録作成を命じる』

呼び出された校長室でビュコック大将は私の肩を強めに叩きながらそう言った。そして苦笑しながらシトレ校長は処分を科した。シトレ校長もマフィアだし、父が初期からのメンバーなのも知っていた。個人的には嬉しい処分だが、甘すぎるのではないか？とも思ったが。

『ここらが落とし所だろうか？首謀者のジェシカ嬢は音大生だ。抗議活動自体は同盟憲章でも保障された権利だし、責める道理がない。ヤン候補生に重すぎる処分を科せばエドワーズ家も面目が潰れるし、抗議活動に参加した候補生も納得しないだろうからな』

やれやれと言った表情でシトレ校長にそう言われた事もあり、私は処分を受け入れた。

『とは言え、訓告位はせねばな。シトレ、ヤン候補生を少し借りるぞ』  
そう言って連れ出された先もこの帝国亭だ。レンジャー資格もも

つビュコック大将は健啖家で、食べきれないくらい料理を頼まれた。

『食べきるのが訓告の内容だからな』

そう言われて人生で一番の量を食べさせられた。今となっては良い思い出だ。大将はエルファシル方面軍司令だったから任官してから会う機会は無かったが……。

こういう事情で課外は図書館に入り浸る生活になった私は、自分の趣味と重なったことで書籍を読みふけるついでに目録を作る生活に入った。閉館時間を超えることもしばしばで、それを見かねて図書館のカギの管理が出来るように手配してくれたのが当時事務官補佐として赴任していたキャゼル又先輩だ。何かと話す機会が多く、友人付き合いをしてもらっている。もともと先輩からすれば『面倒をみている』かもしれないが……。

「先に始めさせてもらったぞ」

「胴元にはそういう権利もあるでしょうからね」

上階の一室に通されると先輩が声をかけてくる。手元のジョッキに入った黒ビールは半分くらいに減っていた。悪びれる様子もなく支払いを催促する候補生と共に席に座る。

本店の個室には同盟風の絵画と帝国風の絵画の両方が飾られている。ここが出来た当時はバート系と亡命系の派閥争いが現実のものとして存在した。それに配慮されたという歴史の一旦を感じる光景だ。これがウルヴァシーになるとフェザーン風の物。エルファシルになると軍をモチーフにした絵画が増える。客層に合わせて内装を変えるのも帝国亭の特徴だった。

「先輩、お待たせしたようですね」

「良いんだ。新婚早々の女房孝行さ。オルタンスは実家で羽を伸ばしている所だ。それに明日は蒸留所で義両親同席で説明を受けるしな。お前さんにこの任務を任せたいのは俺でもある。任務の内容を良い事に、あの時の様に趣味優先で任務をおろそかにしていないか？確認する必要もあったからな」

「ひどいなあ。私も任官した以上はちゃんと任務に精勤しますよ」

「どの口が言うんだ。統合作戦本部の記録統計室に配属されたのを良

い事に、一日中持ち込んだシロン産の紅茶を片手に趣味に勤しんで、懲罰半分でウルヴァシーに送られた奴の言葉とは思えんな」

「それを言わないでください。あの時は文字通りエデンの園を追い出された心境だったんですから」

今考えても、地下1階の片隅の部署だったとはいえやりすぎたと反省している。そして軍官僚としても前線指揮官としても評価が高かったリンチ少将、特進されて今は大将か……。彼の司令部で軍人として学び直せと言う意図で配属されることになった。

ワイドボーンをシミュレーターで破った事が最初の人生の経路変更の原因だったと考えると、リンチ司令部への配属が第二の経路変更になるのかもしれない。帝国のフェザーンへの進駐を予想していた同盟軍は、電撃的な侵攻への対策案も用意していた。だが、正規艦隊同士がぶつかる脇をすり抜けて分艦隊クラスの戦力がウルヴァシーに到達してしまった。

赴任間もない私は住民の避難計画を担当する事となり、リンチ少将旗下の防衛艦隊が奮戦して稼いだ時間で何とか脱出する事が出来た。急報を受けた主力艦隊が戻って来た事でウルヴァシーに被害は無かったが、身を盾にするように奮戦したリンチ艦隊はその時には壊滅していた。私の異例の昇進は半分はリンチ司令部の生き残りへの配慮もあつたと思う。

「それでお前さんたちは何にするんだ？」

「帝国亭と言ったら肉ですよ。俺は肉メインのコースにします」

「そうだね。帝国亭に来てソーセージやベーコンを食べない選択肢はないか」

「なら肉メインのコースを3人前だな。折角だからボトルも開けるか」

「先輩、帝国亭の黒ビールも味わわない手はないですよ。一杯目は黙って黒ビールです」

「分かったわかった。黒ビールも3杯頼んでおこう」

そんなこんなで注文が済み、黒ビールのジョッキで乾杯する。重厚な飲み心地は名物のひとつに数えられるだけの事はある。中にはこ

れを飲み続ける猛者もいるらしいが、食が軍人にしては細い私は、一杯目だけにしておかないと料理を楽しめなくなる。

「それで、どんな塩梅なのかな？」

「すみません。今更ですが俺が聞いて良い話なんでしょうか？」

「似合わない遠慮はするな。軍としても与太話と判断している。新しく生まれたウルヴァシーの英雄殿に趣味を兼ねた裏どりをさせているだけなんだ。気にしなくて大丈夫だ」

オードブルを摘まみ始めた頃合いで、今回の任務の話になった。

「現段階ではアッシュビー元帥を始め、730年マフィアの人となり  
を再確認している段階ですが、正直、提督を謀殺する動機が、当時の  
同盟政府にはありません。軍としては与太話と判断しているとの事  
でしたが、確認した情報もそれを裏付けていると思います」

「うん。続けてくれ」

「そうですね。仮に当時の政府がアッシュビー元帥を謀殺したとして、得られるメリットは何でしょう？帝国軍相手に勝利を重ね、国防体制の構築を主導したのも彼らです。それに歴史的には金食い虫なことが多い軍が高度成長期を迎えていた事を加味しても、軍政を通じて経済発展にも貢献していた。当時の国防委員長はさぞかし鼻が高かったと思いますよ」

「そうだな。俺も自分なりに考えてみたが、ファッシュオンが真似されるほどの人気を得ていた集団のリーダーを謀殺する。メリットがあるにしてもリスクが大きすぎる。好きにやらせておけば戦果も経済発展も為してしまうとなれば、上役として理想の部下だしな」

「むしろこういう噂を流す事で同盟内の不和を煽る帝国の謀略と見る方が自然です。実際、マフィアの件が無ければ軍も笑い飛ばしていたでしょうし」

強いて言うなら730年マフィアのリーダー的な存在だったアッシュビー元帥がいなくなれば、彼らの団結心が崩壊すると判断した可能性もある。だが、結果として彼らは団結を続け、政界へ転出した3人と軍に残った3人は協力関係を維持し続けた。

そして家族ぐるみの付き合いも続き、現在ではその輪が広がって公

然と語られるマフィアという組織まで生まれる。父さんが退役軍人会で身内扱いされるのはミリタリーマニアな事もあるがマフィアの初期メンバーであることも大きい。

「聞いていて思ったんですが、最高評議会議長の座を守る為って言うのはどうです？ 実際、政界に転出した3人は委員長職には長年君臨しましたが、誰も最高評議会議長にはなっていないません。もつとも政治家嫌いな親父に言わせると、最高評議会議長は半分看板だから、本当の実力者はその席に座らないらしいですが」

「それは面白い説だね。確かに前線で功績を上げ続けた英雄が最高評議会議長になる。銀河帝国を建国したルドルフ大帝の置かれた状況そっくりだ。それを懸念した勢力がいた可能性は否定できないね」

「俺が思うに、彼らの中で最高評議会議長はアッシュビー元帥だったのかもしれんな。俺も少し接点があつたが、ターナー元帥を始め、あれだけの成功を収めたのに晩年まで頭が下がる位義理堅いのも彼らの特長だろう？ オルタンスなんて婚約の際に祝辞を貰って以来、ターナー元帥の大ファンだからな。直後にあんなことになつてしまったが、国葬には同席すると言つてきかなかつた。かくいう俺も、あの人には頭が上がらなかつたが……」

「俺は小さい頃に頭を撫でてもらつたらいいですが記憶にないんですよ。ただ、戦死した祖父に代わつて爺様から何度も薫陶はされましたが……」

そこでメイン料理が運ばれ、一旦そちらに意識を向ける事になる。キャゼル又先輩ほどの人に頭が上がらないと言わせると、本当にすごい人物だったのだと改めて思う。でもよくよく考えれば、彼の思い出は私の記憶にも鮮明に刻まれているし、もし存命なら、私も頭が上がらなかつただろう。

そんな事を想つて少し苦笑しながら、メインのローストビーフを口に運ぶ。ジューシーな肉の脂が口に広がり、自然と口角が緩む。そして赤ワインを口に含むと何とも言えないハーモニーが生まれた。毎日とは言わないが、何かしらの節目にこの味を味わいたいと思うのは私だけではないだろう。

## 第91話 老提督との邂逅：歴史講師の見解

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン 帝国亭

アレックス・キャゼルヌ（中佐）

「それにしても先輩がターナー元帥と接点があったのは意外ですね。そんな話は聞いていませんでしたから」

「まあ、何というかな。少し気恥しい話でもあるんだ。少なくとも候補生相手にしたり顔で話すような内容じゃない気がしていてな。まあ、今ならもう構わんが……」

メインのローストビーフを食べ終わり、食い足りないだろうとソーセージとベーコンの盛り合わせ、それに赤ワインのボトルを追加した頃合いで、ヤンが興味あり気に話題を戻した。

「お前さん達には話したことがあると思うが、俺はもともと記念大の経営学部希望だった。今でもなぜ勘違いしたのか分からんが受験日を間違えたせいで士官学校に行く羽目になったがな。候補生時代に組織工学に関する論文を書いてな。それを見たある企業からスカウトされたんだが、それがターナー商会だったんだ」

「何とも意外なつながりですね。ただ、シユテファンさんのスカウトなら待遇も良かったでしょう？断る方が先輩らしいですがそれでも意外な気もしますね」

「断ってくれたおかげで俺はうまい飯にありつけている訳ですが」

ヤンは興味深げだが、アッテンボローはどこか揶揄する感じがある。タイプは全く違うが、いつの間にか会食を共にする仲になっているんだから人のつながりは不思議だとも思う。強いて言うなら、経営志望の俺、歴史家志望のヤン、ジャーナリスト志望のアッテンボロー。皆、第一志望は軍人ではなかった事が共通点か。

「アッテンボローも数年もすれば奢る側になるからな。今のうちに人の財布で飲み食いしておく事だ。確かに待遇は良かったな。任官しないなら学費を返還しないといけないが、オファーにはその保証もついていた。だが、待遇が良すぎた事と、今更任官しないのは同期達へ



の裏切りの様にも思えてな。最低限の筋は通そうと、断る旨を会って伝えようと本社へ足を運んだんだ。丁度この季節だったかな？風もだいぶ寒くなっていたはずだが、どう伝えるべきか思い悩んでそんな事は気にならなかった」

思い返しても後悔はしていないが、ターナー商会と言えば既に大企業として同盟では知られた企業だった。待遇を知れば、断る事を反対されると両親にも相談できなかった。恐る恐る受付に名前を告げ、面会の約束がある旨を告げた時は、半分やけになっていたかもしれない。

「受付に名前を告げてロビーで待っていると、ニュースで見た事のあるオレンジ頭の男性が急に現れたんだ。『シユテファンが絶賛しているから一度会っておきたかった』と笑顔で言われてな。こっちは予定以上の大物が出てきてとにかく緊張した」

「そういう事を好みそうな人でしたからね」

「それでな。名前を聞かれたんだ。アレックス・キャゼルヌですと言うと、『そうそうアレックスだ。キャゼルヌというのは覚えやすくて良い姓だ。それでうちに来てくれるのかな？』と確認された。今思えばただの一候補生が大それたことをしたと思うが、本心を伝えると笑顔で応じてくれてな。『誠実な対応の礼に飯でも食べよう』とそのまま会食に連れていかれた。土産も大量に持たされてな。高級食材をもらった理由を両親にどう説明するか、また悩んだものさ」

「その逸話は聞いたことがありますよ。人たらしって言葉はあの人の為に来た言葉だって親父も言っていました」

「裏の事情は俺も知っているさ。それを知った時も悪い気はしなかったし、更にファンになったな。後、この話には続きがあるんだ」

相手の名前が分からないとき、ターナー元帥は敢えて名前を確認した体をとって姓は覚えていたかのように振舞っていたのは今では有名な話だ。

「あれは士官学校から統合作戦本部に異動した時だったな。急に財務委員長だった彼がお忍びで視察に来たんだ。その時に『おお！アレックス。元気にしていたか？シユテファンも席を空けているから、軍に

重用されなかつたらいつでも連絡をしてくれ』と、周囲に聞こえる様に言ってくれたんだ。その直後に抜擢人事をもらえてな。仕事は大変だったが、今思えばあれが栄達の切っ掛けだったと言えなくもない」

「案外本気でスカウトしたかったのかもしれないね」

「あの人なら、スカウト出来なかった先輩には最低でも後方勤務本部長位にはなつてもらうとか考えそうではあるね」

「実際、婚約の祝辞には『未来の後方勤務本部長とそのご婦人へ』と書いてあつたな」

そんな話をしながらワイングラスを空にしていく。彼の人たらしエピソードを悪く解釈する人がいない訳ではないが、一度会えばその存在感を強く認識させ、二回目には味方にしてしまう不思議な魅力の持ち主だったのは確かだ。

「それで話は戻るが、ローザス提督とはどこまで話をしたんだ？」

「第二次ティアマト会戦の前までですね。なんというか、あの会戦は事情が色々複雑ですから、提督も一度間を取りたいという感じでした」

「そうか。確かにあの戦いは色々あるからな」

「どういう意味です？」

第二次ティアマト会戦は名目上は730年マフィアに戦死者が出た事もあり、士官学校ではあまり扱わない事になっている。そういう公式見解を真に受けている士官も存在するが、実際は戦理だけを見るとあの戦いは異常なのが本当の原因だ。それでも勝利した彼らの凄みを感じる一方、あれを教材に学ぶのは危険すぎるだろう。

「アッテンボロー。あの会戦は勝利が目的じゃなかったんだ。少なくとも私はそう考えているよ。よくよく考えてごらん。確かに730年マフィアは連戦連勝を重ねたが、大胆な戦力展開からの挟撃・包囲殲滅が彼らの代名詞だった。なのにあの会戦では真正面から帝国軍とぶつかり合ったんだ」

「会戦の勝利だけじゃなく他に狙いがあったと？」

「そうだね。あくまで個人的な見解だが、帝国軍の宇宙艦隊司令本部

の高官たちを根こそぎ戦死させる事を目的にしていたと思う。出征してきた艦隊は帝国軍にとつては最後に残った虎の子の艦隊だった。司令長官を始め、100名近い将官が参加していた。アツシユビー元帥がことさら煽った事もあるが、帝国軍としても連戦連敗の中で攻勢を断念する機会はいくらでもあった。それをさせずに文字通り帝国の屋台骨を支える人物たちを戦場に引きずり出した意図は何か？」

「もしそうなら、確かに士官学校の教材にならないのも分かる気がします。一度自分なりに戦闘詳報をシミュレートしてみました。あんな薄氷を踏むような用兵は自分にはとてもできませんし」

ヤンとアツテンボローの会話を聞きながら、亡くなってからも強烈な印象を残すオレンジ頭の爺様の事を想った。同盟の優勢を決定づけ、帝国の屋台骨を折る為に自分たちを餌にしたのだと、俺は考えている。財務委員長になってからの優し気な印象が強い俺からすると意外な気もするが、自分達を餌にするような決断を経験した彼らからすれば、その後の日々は周囲が甘く見えるものだったかもしれない。

「もしブルース・アツシユビーが生きていたら……か。確かに歴史小説家たちが繰り返し話題にする気持ちも分かる気がするし、あの投書を軍が必要以上に気にする気持ちも分かった気がするな」

優し気な表情をしながらどんなことを想っていたのだろうか？彼らの思惑は確かに成功したが、僚友の犠牲を必要としたのも事実だ。共に喜びを分かち合いたいと願う存在を亡くした彼らを思うと、その後も続いた家族ぐるみの付き合いも、異常な義理堅さもしかしたら贖罪を兼ねていたのではないかと感じた。

『敵は砲火を交えるだけだから分かりやすい。御しがたいのは話の分からない味方だ。説得しようにもこちらの話を理解できないのだからな。そんな人物が代議士になる。全く世も末だ』

何度か失言問題で話題になったウオーリック国防委員長の失言語録の中で、もっとも有名なものだ。政界に進出し財務・国防・法秩序委員長職を押さえた彼らは、最高評議会議長を選んでいると言われるまでに権威を獲得した。

『ブルースが居なくなつたせいで、政治家なんて因果な商売をする羽

目になった。本当ならこんな煩わしい世界じゃなく、気持ちよく稼げるビジネス界に戻りたかった』

これはローザス提督の回顧録で触れられたターナー元帥の発言だ。案外、彼ら自身もアツシユビー元帥が戦死していなかったらと日々考えていたのかもしれない。

国防体制が確立できたことで余裕が出来た同盟は、一気に経済政策に力点を移し、国力を飛躍的に高めた。結果だけを見れば彼らの判断は正しかったが、『事実上の寡頭制だ』という批判が絶えなかったのも事実だ。40年以上前の会戦に思いを馳せながら、俺達の会食はもうしばらく続いた。

## 第92話 マファイアの流儀（第二次ティアマト会戦）

宇宙暦744年 帝国暦435年 10月中旬

惑星カツファ 宇宙艦隊司令本部

アルフレッド・ローザス（大将）

『とうとう帝国も本気になったようだな。宇宙艦隊司令長官直々の出征だ。今までの連中とは一味も二味も違うだろうな』

『だが、ある意味でずっと待っていた機会がついに到来したわけだ。逃す訳にいかないな。司令長官を置いて逃げるわけにはいかんだらう?』

『俺達は何かと腰が軽い司令長官で良かったな。司令長官の腰が重いとこうなる。真面目に戦争している帝国軍の連中は今頃思い詰めているんじゃないか?』

『腰が軽い? 同盟軍の司令長官は目立ちたがり屋だと思っていたが……』

「貴様ら! 上官侮辱罪で営倉に放り込んでやろうか? 幸いな事に将官で酒が原因で始末書を書かされるという名誉にあふれた前例はウオリスが成し遂げた。次は正規艦隊司令の営倉入りだな。さて、誰がこの榮譽に輝きたい?」

ホットラインで結んだエルファシル方面軍司令部とウルヴァシー駐留軍司令部、そして総合作戦本部次長室との作戦会議は、こんなやり取りで始まった。内容だけを聞けば悪ガキ同士の罵り合いにも聞こえるが、これが私達の流儀だった。

「くくく……いや、すまん。笑うつもりはなかったのだが、帰って来たのだと急に実感してな」

急に笑い声を上げた私に視線が集中したが、咎める視線は無く、むしろ温かさを感じた。少し気恥ずかしい気もしたが、妻の死で折れかけた私を、変らぬ態度で受け入れてくれた皆に感謝の気持ちすら感じていた。休職して実家とターナー邸を歩き来する生活を始めて数カ月。結局気持ちの整理はまだついていないが、身を休めれば休めるほど、精神的には逆につらくなった。

ブルースの女房役は楽じゃない。だが、身体がそれに慣れていて以上、精神的な安定のためにも現役復帰した方が良いと覚悟が決まったのが数週間前。移設も絡み業務が立て込んでいた事もあるだろうが、ブルースだけでなく、司令部の皆も復帰を歓迎してくれた。

『アルフレッド、お前が休んだおかげで司令部の連中は自分たちの司令長官が優秀だが厄介な奴だとちゃんと理解したぞ。根回しもなしにあれやこれやと一方的な指示を出されて困り果てていたからな。手綱を離すとんでもない事になる。総参謀長の復帰は下手したら軍全体が喜んでいられるかもしれんぞ』

「ウォリス、どうやら営倉に行きたい様だな」

そんなやり取りに皆で笑う。

『まあ、完璧な人材なんて存在しないんだ。ブルースの欠点に関してはこれ位におこう。完璧な上司の下では部下は委縮して成長しない。上官に苦勞を掛けられて俺達は成長できたんだ。むしろそれを喜ぼうじゃないか。そうだな、司令長官の部下育成能力の考課を最高評価にしておくか』

「カーク、統合作戦本部次長が職権乱用をするな」

ターナー夫妻にもだいぶ迷惑をかけてしまった。視線を向けると優しい気な表情で彼も視線を向けてくる。そして少し頷いた。私もそれに応じる。

「お遊びはこれくらいで良いだろう。事前に知らせた通り、帝国軍の連中はいいよ本腰を入れて来たようだ。カーク、分かっている事を頼む」

『了解だ。現在判明しているのは参加艦隊の内訳だな。念のためモニターに映すぞ』

その言葉と同時にモニターのひとつに人名が表示された。

- ・ ツイーン宇宙艦隊司令長官
- ・ コーゼル大将
- ・ シュリーター大将
- ・ インゴルシュタット中将
- ・ ミュッケンベルガー中将

・シユタイエルマルク中将

・カイト中将

・カルテンボルン中将

『総兵力は少なくとも10万隻以上、最大で12万隻。作戦案の詳細は不明だが、あちらはブルースの得意な迂回進撃で意趣返しを狙っている様だ。それと、室長からはさすがにそろそろ情報漏洩を疑う高官の存在も指摘されている』

『インゴルシユタットはあまり聞かん名だな』

『主に国内の治安維持と反乱鎮圧で功績を上げて来た人物の様だな。前線に出す程ではなかったと捉えるか、地味な任務を着実にこなすから国内に置かれたのか？』

『油断はしない方が良い。後者だと判断すべきだろうな。派手さはないが敵に回すと厄介で味方にいれば当てになるタイプだろう』

フレデリックがファンに視線を向けながら発言した。派手な用兵が代名詞のフレデリックからこういう発言が出るのは意外だったが、ファンのようなタイプは確かに厄介だ。無理をしないから大崩れしないし、守りに入られると簡単には撃破できないだろう。

『コーゼルは確か平民出身だったはずだ。身分社会の帝国で大将にまでなった。用兵巧者なのは事実だが彼を抜擢した事だけ見ても、司令長官の人を見る目は確かだろう。』

『ファンの言う通りだ。一時期は彼を副司令長官にという声もあったようだが、国内に残す艦隊の統括があるからな。出征に参加させる意味でその人事は流れたが、実力は帝国屈指だろう』

『シユタイエルマルクは、俺の通信に回答してきた奴だな。貴族の軍人らしい気取った返事だった記憶がある』

『あの時はまだ正規艦隊司令じゃなかったはずだ。ああいう対応をして干されていないってことは、コーゼルを見出した司令長官から評価されているって事だろうか』

「ここまでで十分だ。帝国も出せる手札をすべて出してきてきたって事だ。この挑戦を叩き潰して帝国軍の屋台骨を完全に叩き折る。その

為の作戦会議なわけだが……」

『迂回進撃は戦略面では使えんな。連中も馬鹿じゃない。イゼルローン回廊出口付近に偵察艦を残すはずだ』

『会戦はティアマトだろう？その気になれば数日で回廊まで撤退できる位置だ。戦力差が明らかになれば切り上げられる可能性もある。数で押すのも厳しそうだな』

「今回ばかりは正面から撃ち合うしかないだろうな。司令長官が退くに退けない状況にすれば、連中も簡単には撤退できなくなる。今までは発想の転換で勝ってきたが、今回ばかりは地力で勝つしかなさそうだ」

ひいき目に観ても、旗下の分艦隊に限定せずに流動的に訓練を重ねている同盟の方が、艦隊運用の面では分があると思うが……。

『地上基地のあるアンシヤル付近では戦えないな。索敵面で不利になる。ダゴンから進むと大河の様にアステロイドベルトがあり、その切れ目が主要航路になっている。』

いつの間にか人名を映していたモニターはティアマト星系の概略図に切り替わっていた。

『帝国軍の狙いもこの辺りじゃないか？アステロイドベルトの向こう側を正確に索敵するのは無理がある。これを隠れ蓑に迂回進撃させての挟撃。若しくはそう見せての中央突破。そんな所かな？』

『一人でも多くの将官をしとめるにはこちら側に引き寄せる必要があるが、あちらも流星に簡単には乗ってこないだろう。一時的には負けて見せる位の仕掛けが必要だな』

「そうだな。やつと巡って来た機会だ。帝国軍の屋台骨をしっかりと折らせてもらおう。方針としては今回ばかりはまずは正面からぶつかると。その後、帝国軍を引き込んで各艦隊から抽出した戦力を統合して左翼から迂回進撃させて挟撃・包囲へ持ち込む。敵の別動隊にはフレデリックが当たってくれ。挟撃のタイミングで敵別動隊を蹴散らして帝国軍左翼後方から攻勢をかけられれば最高だが……」

『敵がいての事だから約束は出来ないが、今回は俺は勝つ番だからな。期待してくれて構わんぞ』



フレデリックが自信ありげに見栄を切った。満足げにそれを見つめるブルース。

『話の腰を折るようで悪いが、統合作戦本部としてはお偉方への説明に勝ちますから問題ありませんとは言えん。子供の使いではないからな。もしもの時はダゴンで遅滞戦を行う。その為に工作艦を既に派遣済みだ。俺も数日以内にエルファシルへ向かう。ウォリス。世話になるぞ』

『カークなら歓迎だ。駐留基地の地域経済担当官が何かと悩んでいる様だ。俺も案は出しているんだが、一度相談に乗ってやってくれ』  
『俺は経営アドバイザーになった覚えはないんだが……。まあ、ウォリスには貸しが沢山あるが、会長への恩返しはまだ済んでいないからな。それ位はおまけしておくか』

カークの言葉にまた笑い声上がる。二人のやり取りで私は不意に士官学校受験対策をしていた日々の事を思い浮かべた。あの時からもう20年近くなる。カークとウォリスの関係も見ていて不思議な間柄だった。優秀だが移り気が多く、手抜かりが多い彼を黙ってフォローしていたのがカークだ。

もちろんカークは余裕があれば他の面々もフォローしていたが、一番気にかけていたのがウォリスだと思う。そしてウォリスもそれはわかってはいるが、敢えて礼を言うような感じではなかった。ただ、どこかで返そうという意識はあったのだろう。

ターナー家の子供たちを実の父親以上に可愛がっていたのが実はウォリスだ。実子が生まれてからもそれは変わらないと聞いた。そしてウォリスに感化されてシユテファン君が恋愛体質になるのではとカークが真剣に心配している事も。

そんな事を考え苦笑している間にも会議は進んでいく。時に揶揄しあいながら、笑い声を挟みながら進む会議。国防委員会の面々が見たら驚くかもしれないが、これが私達の流儀だった。士官学校以来のこの環境に、もしかしたら私は慣れ過ぎていたのかもしれない。若しくは帝国の本気を甘く見ていたのか？

青春の延長のような時間が失われ、少し形質が変わった後で、この時

間がどれだけ貴重なものだったかを私は噛みしめる事になる。だが、少なくともこの時は油断しているつもりは毛頭なかった。彼らとワイイと話していると、どんなことでも何とかできるような不思議な気持ちになっていたのは確かだから。

## 第93話 帝国の意地（第二次ティアマト会戦）

宇宙暦745年 帝国暦436年 2月中旬

ティアマト星系外縁部 旗艦ディアールウム

コーゼル大将

「敵ながら叛徒どもの威容の見事な事だ。彼らが旗下にいてくれれば司令長官も安心できただろうが、仰ぐ旗が違う以上、そうも言っていないらんな」

『戦争とは時に残酷なものですな。士官学校で出会っていれば親友になれたかもしれない人物と砲火を交える。もつとも、敵将アツシユビーはだいたい目立ちたがりの様ですから、小官とは合わなそうですが……』

「卿が合いそうなのはターナーやファンではないかな？手堅い仕事に裏方も嫌がらない。それに民政にも見識がありそうだ。卿とケーフェンヒラーを足したような人物だろう。参謀長にすれば、司令官はかなり楽が出来そうだ」

『ケーフェンヒラーですか。回廊出口付近での補給の差配を任せておられましたな。補給基地の件で共に仕事はしましたが、志願して数年で並の補給士官が霞む働きをしておりました。知己の活躍を嬉しく思いましたか……』

「卿の誠実さは美点だが、本人が黙しておるのだ。話題にしてやるな。私も深くは聞いておらんのかな。いずれ彼の中で整理が付き、聞いてほしいと思えば話題にするだろう」

『はっ！小官はどうもそういう機微に疎いものですから』

ティアマト星系の外縁部にあるアステロイドベルトの切れ目。その周辺に両軍合わせて20万隻近い艦隊が正対している。インゴルシュタットは予定通りアステロイドベルトを隠れ蓑に突撃の機会を狙うかのような動きをし、それに応じる様に叛徒どもの一個艦隊が動く様子も戦術モニターに映し出されていた。

妙な縁で司令部に参謀の一人として転出してきたケーフェンヒラー大佐は、当初は情報漏洩の疑念があるミヒャールゼン男爵の下に

いた事もあり、内心警戒していた。だが、話をしてみると好青年だし、私が長い軍歴で失っていた熱意のような物も持っていた。それに仕事が出来、謙虚さも持ち合わせていた。いつの間にかやが我が艦隊の事務部門は彼が取り仕切る様になり、今回の出征では全軍の事務部門の有力者の一人のようなポジションになっていた。

『惑星フロントノイでのご恩をお返しできれば本望です。雑用でもなんでもお命じください』

まっすぐ私を見つめていた彼の視線には後ろ暗い物は感じられなかった。補給基地の一件で関わったシュタイエルマルクからの評価が高かったこと。それにミヒャールゼンの部下だった事もあって、自分の目で経歴も含めて人となりを確認した。

内務省でエリートコースに乗りながら、新妻から離婚を切り出されて今まで積み上げてきたものを投げ捨てて軍に志願する。よくある話ではないが、長期間前線で苦勞して戻って見たら、戦地の夫を心配するあまり心勞がたまり、浮氣していたという話は少なくはない。

だが、軍としては当然見過ごせないし、意趣返しではないが慰謝料と共に謹慎なりさせるのが通例だ。彼が軍にいればそうできたが、内務省は部下をそこまで守る気が無かったようだ。伯爵家の3男程度、戒めに糾弾するのにそこまでの不都合は無いだろうに……。

『総司令部より入電。1400をもって前進を開始。砲撃戦に移行せよとの事です』

「よし。始めるとしよう。シュタイエルマルク、卿に武運を」

『はっ！では後程』

そう応じてシュタイエルマルクは通信を終えた。帝国軍は右翼からカルテンボルン・シュタイエルマルク・カイト・ミュツケンベルガー・司令長官・コーゼル・シュリーターと艦列を並べる。対する叛徒たちは左翼からウォーリック・ファン・コープ・アッシュビー・ベルティーニ・カークの順で艦列を形成した。インゴルシュタットに依拠しているのはジャスパイだろう。あの男の破壊力のある用兵は戦局をひっくり返す可能性がある。それを引き付けられただけでも困としては大成功だ。

「それにしてもアッシュビーは若いながら人を良く見ている様だ」

これまでの戦いでベルティー二艦隊が切り込み隊のような役目を果たしている事は判明していた。普通の指揮官ならベルティー二艦隊を最右翼に置くだろう。だが、敢えて攻守両面に秀でたカークを最右翼に置いた。我が艦隊の役目は攻勢を受け止める事だ。必然的にベルティー二艦隊をマークするが、最右翼にカーク艦隊がいる事でやりにくい。

こちらサイドに限定すれば、前進しながらスイッチし。カーク艦隊を我らに正対させながらシュリーター艦隊に攻撃を集中させる可能性もある。若しくはカーク艦隊をシュリーター艦隊の左舷方向に展開させ両舷方向から十字砲火を浴びせる事もできる。

「考える事はどちらもそこまで変わらんか……」

私は戦術モニターに映るシユタイエルマルク艦隊に視線を向けた。どちらかと言うと戦意は高いが前のめりになりがちなカルテンボルトとカイトの統制の役目を押し付けられたのが彼だった。両艦隊は最新鋭艦で揃えているし期待したい所だがあちら側は攻防両面が得意なウォリックとコープ。それに守りのファンがいる。崩すとしたらこちら側の方が難易度は低いかもしれない。

『まもなく長距離砲の射程に入ります。5……4……3……』

「全艦砲撃戦用意……ファイエル！」

こうして後に第二次ティアマト会戦と呼ばれる戦いが幕を開けた。両軍併せて100万本を超える長距離レーザーの光線がモニターを覆う。光量調整がされていなければ目を開けてはいられなかっただろう。そのまま両軍は前進を続ける。そして中距離戦の射程になるうかというタイミングで異変に気付いた。

「一度敵との距離を確認しろ」

『1分前から艦隊正面の叛徒は恐らく後退をしています。彼我の距離が縮まりません』

戦術モニターに視線を向ける。右翼では既に中距離戦が開始されつつある。このまま砲戦を続ければお互いに左翼が前進した形にな

るが、一体何が狙いだ？

『正面の敵、シユリーター艦隊へ攻撃を開始。ベルティーニ艦隊とカーク艦隊は入れ替わっています。シユリーター艦隊の被害多数の模様』

「カーク艦隊は無視だ。シユリーター艦隊の援護を長距離砲で行う。こちらは戦艦のみでの編成だ。まずは救援を優先しろ！」

やられた。斜線陣になると見せてベルティーニ艦隊は下がりながら近距離戦に切り替えていたようだ。そして突撃をかけたベルティーニ艦隊と進路を交差する様にカーク艦隊が正面に出てくる。もつとも我が艦隊への攻撃はあくまで牽制レベルだ。カーク艦隊からもシユリーター艦隊へ向けて長距離砲が撃ち込まれている。

「シユリーター艦隊へ電信。そのまま後方に下がり、我が艦隊の現在地まで退くようにと。我々は前進してベルティーニ艦隊を抑えるぞ」  
真似をするようにで癪だが、先ほど叛徒たちがしたのを巻き戻すように、今度は我々が位置をスイッチする。損害は少なくないが、シユリーター艦隊はまだまだ健在だ。位置を入れ替えると同時にシユリーター艦隊を守る形を取り、態勢の立て直しの時間を稼ぐ。

「く。そういう事か……」

我々がベルティーニ艦隊に正対すると、長距離戦の距離まであつけなく後退していく一方で、カーク艦隊が司令官直卒艦隊へ攻勢を始める。それを抑えようと直卒艦隊の右翼にいたミュッケンベルガー艦隊が前進を始めた。

「ならん。ミュッケンベルガー。それは罠だ！」

司令席に拳を振り降りしながら叫んだが、もう手遅れだ。斜線陣から突出した形になったミュッケンベルガー艦隊に、アツシユビー・コープ両艦隊の砲撃が側面から突き刺さる。それを見て何とかしようとかイト艦隊が前進を始めるが、それこそ思うつぼだ。正対していたファン艦隊から側面攻撃を受ける。

「功を焦る前にやるべきことがあるだろうに……」

軍務尚書の怨念の対象であるアツシユビーが目の前にいる。そして司令官直々の出征。気がはやる気持ちはわかるが、これでは勝て

る物も勝てん。戦術モニターではシュリーター艦隊の立て直しにはもう少し時間がかかりそうだ。

だがベルティーニ艦隊を無視すれば彼はそのまま再編成中のシュリーター艦隊に突撃するだろう。こちらは動けない。やきもきしながらモニターに視線を向けていると、動きがあつた。

「さすがはシュタイエルマルクだ。だが間に合うか……。」

ファン艦隊がカイト艦隊に砲撃を向けている間に、カルテンボルン艦隊と正対しているウォーリック艦隊にシュタイエルマルクの艦隊が前進し、攻勢をかける。と同時にカルテンボルン艦隊は右舷方向に移動を始め、挟撃態勢を作ろうとしていた。

『シュリーター艦隊より入電。再編成を完了した、カーク艦隊の牽制に向かうとの事です』

これで一息つけるか……。そう思つた瞬間、叛徒の直卒艦隊とコープ艦隊が集中砲火を受けて艦列が崩れたミュツケンベルガー艦隊に突撃を開始した。

『艦隊旗艦クアマルクの反応が消えました。司令官の脱出は確認できません』

ミュツケンベルガーの戦死。これでこの戦いはますます難しくなつた。軍務尚書の甥でもある彼は、司令長官にとっては忘れ形見のようなものだった。これで撤退は安易に下せない判断になる。

「シュリーター艦隊に電信。我が艦隊はカーク艦隊と直卒艦隊の間に立つて再編成の時間を稼ぐ。ベルティーニ艦隊への牽制を打診。総司令部にはコーゼルが立て直しの時間を稼ぐと伝えるように！」

先ほどのスイッチをまた繰り返し、カーク艦隊に砲火を集中しながら直卒艦隊の盾に回る。2艦隊からの砲火は甘くはないが、戦艦の防御磁場なら十分耐えられるはずだ。

『敵艦隊、後退を開始、長距離戦の射程まで下がっていきます』

どうやらシュタイエルマルクは間に合つたようだ。2艦隊に攻勢を受けていたウォーリック艦隊がファン艦隊まで艦列を下げている。あちらも一度仕切り直すつもりか？まだ負けたわけではないが、艦隊司令の戦死の報は兵士たちにも影響するはずだ。

さて、どうする。長距離戦で砲火を交えながら距離をとる両軍を戦術モニターで確認しながら、落ち着かなければ良い考えも浮かばないと経路上理解していた私は一先ず従卒にコーヒーを頼んだ。



## 第94話 窮地（第二次ティアマト会戦）

宇宙暦745年 帝国暦436年 2月中旬

ティアマト星系外縁部 旗艦長門

ロビン・アツテンボロー（第13艦隊参謀長）

「初戦はこちらがやや押せたという感じですか？」

「そうだな。いろいろな工夫はしたが、あちらさんも必死だ。何よりコーゼル艦隊がやけに堅いのが気になる」

「おそらく通常編成ではないでしょう。戦艦を多めに配置している可能性がありますな。数が少ないのにやけに堅いのも、それなら説明が付きます」

「まったく、彼がこちら側に生まれていてくれたらな。俺ももつと楽が出来た物を……。それにしても我が身を顧みず、あれではまるで盾だ。来られると嫌な所に来るのは流石だが、あれでは常に死地にいるようなものだ。宿将格の彼を帝国軍は使い潰す気なのか？」

初戦がひと段落し、仕切り直す意味で両軍は長距離戦の間合いを取り、艦列を整えつつある。本来なら准将で退役するつもりが、オレンジ頭の青年に拝み倒されたのがきっかけで儂の人生もだいぶ変わった。初めはご意見番で楽が出来るという話だったのに、多忙な彼に代わってこの数年は実質正規艦隊司令の真似事の日々だった。

「おそらく自ら買って出たのでしょうか。提督から聞き及んでいる彼の性を踏まえるとそんな気がします」

「買って出たか……。そうだな。参謀長の言う通りかもしれないな……」

儂の意図した事が伝わったのか？提督は少し切なげな表情をした。儂がコーゼル大将なら、やはり盾役を申し出たと思う。肩を並べて戦った多くの戦友。中には教え子のような存在も沢山いただろう。そう言う存在を数十年吊い続けたのだ。若い者が戦死して自分が生き残るのはもううんざりだろう。

『総司令部より入電。メインモニターに映します』

『カーク。ミュッケンベルガーは戦死させたが、コープの艦隊の損害

もかなり出ている。右翼は現状維持でヴィットリオと敵に圧力をかけて欲しい。やれるか?』

「メンテナンスもぼつちりだ。それに我らが森の熊さんがいよいよ暴れたそうだしな。任せてくれ」

アッシュビー司令長官との掛け合いを聞きながら、今感じている儂の心境と似た物を感じているのだろうと、戦術モニターに映るコーゼル艦隊に視線を向ける。提督も含まれる730年マフィアは確かに優秀な一団だ。彼らを生きて帰したいと本心から思う。

だが優秀がどうかではなく、若者を見送るのに疲れている自分もいた。もつとも、あのまま少将で退役していたら、どこかで後悔していたとも思う。辛い事の多い軍歴だったが、このオレンジ頭の青年の旗下になってからは、激務だが楽しい日々だった。もつとも、本人が正規艦隊司令と統合作戦本部次長を兼任しているから、業務の多さに文句を言いくいのが玉に瑕だったが……。

「おうヴィットリオ、前半は大人しめだったんじゃないか?」

『心配をかけてすまん。もう大丈夫だ』

司令長官との通信が終わると、最右翼に位置するベルティ―二艦隊との通信が始まる。一見強面のこの青年が、熱帯魚を飼う事を趣味にしているだけで可愛げがあるが、それぞれに僚友達の名前を付けていたと言う。『熊とリスの夫婦』と揶揄されるほど小柄な奥方と結婚されているが、その愛妻家ぶりは同盟軍でも有名だった。

そして奥方のミスで熱帯魚が全滅した時、結婚生活14年で初めて怒鳴りつけるという行為をし、それを悔いて意気消沈していた。開戦前に提督が慰めて事なきを得たが、いつもの彼ならもつと破壊力のある用兵をしていただろう。

「今回はどうする?先陣を切るか?それとも崩した所を食い破るか?」

『心配をかけた分、名誉挽回の機会が欲しい所だな。先陣を任せて欲しい所だが』

「そうか。なら援護は任せろ。どこから仕掛ける?」

『そうだな。カークはこのまま前進して牽制をかけてくれ。俺はコー

ゼル艦隊の左翼に攻勢をかける。帝国軍の盾になっているあの艦隊を潰せれば、かなり楽が出来るはずだ」

「分かった。ならそれで行こう」

いつも不思議に思うのは、士官学校からの同期で友人とは言え、打ち合わせがまるで会食の場を決めるかのような雰囲気で行われる事だ。一時期は戦争を楽しんでいるのかとも思ったが、先ほどの表情を見ても分かる通り、人の感情の機微に敏感な青年だ。むしろ割り切れないので、敢えてこういう形を取っているのかもしれない。

『総司令部より入電。メインモニターに映します』

『カーク、1800から前進を再開してくれ。あちらさんはどうやら当初案の迂回進撃をここで試みるつもりのようなようだ。敢えてそれをさせて、タイミングを見て戦力を引き抜き帝国軍の右翼から逆王手をかける。右翼部隊の負担が増えるがそこは堪えてくれ』

「分かった。出来れば分艦隊をいくつ引き抜くかを早めに伝達してくれ。帝国軍右翼を突撃の対象にする案には俺も賛成だ。ヴィットリオをマークしてコーゼル艦隊は最左翼にいるからな。もちろん手を抜かずに圧力をかけ続けるつもりだ」

『分かった。頼むぞ』

メンテナンス部隊で補給を受けた全艦隊が1800になり再び前進を始める。通常より艦列を広めにとった第13艦隊は正対するセキュリター艦隊に長距離砲を浴びせながらコーゼル艦隊にも一部の戦力を当てる。その分、右舷方向にズレたベルティーニ艦隊がやや角度を付けて突撃を開始した。前回までの堅牢さが嘘のように艦列を押し込んでいく様子が戦術モニターに映る。

「おかしい。これは……」

儂と同じように戦術モニターに視線を向ける提督がつぶやいた時、第9艦隊の反応が一気に激減した。

「近距離戦用意。第9艦隊の撤退を支援する。総司令部に電信。第9艦隊の損害多数、再編成はそちらに願いたし」

『総司令部に電信しました。提督……。旗艦トラウイスカルバンテークトトリの反応が消えました。ベルティーニ提督の脱出、確認でき

ず』

「提督？」

「参謀長、俺は大丈夫だ。それよりもまず第9艦隊の残存部隊の撤退支援だ。戦艦で壁を作りその隙間から巡洋艦と駆逐艦はとにかく撃ちまくれ。こちらがどれだけ圧力をかけられるかで生還できる数が変わるぞ！いそげ！」

『総司令部より入電。再編成の件は了解した。第8艦隊をこちらに回すとの事です。それと……。元帥への昇進をヴィットリオに越されたな。以上です』

「戦死して元帥なんて褒められたものじゃない。いいか！二等兵でもこの戦いから生還すれば間違いない英雄だ。それは第9艦隊も同様だ。どうせなら英雄たちに精一杯貸しを作ってやれ！」

その場の機転でオペレーターの一人が提督の発言をオープンチャネルで流した。数的劣勢にあった第13艦隊はこれを切っ掛けに奮戦し、半数程度の第9艦隊の残存部隊を撤退させることに成功した。だが、そこから正面からシュリーター艦隊、右舷方向からコーゼル艦隊の猛攻を受けることになる。

「まったく、運命の女神とやらは大分思わせぶりなようだな。それとも日頃の行いかな？ただなあ。俺は真面目に仕事をしていたんだが……」

「こちらに責任転嫁は良くありませんな。どこぞの悪徳軍人に『大将格で年金を用意する』と甘言されて以来、階級と役職の倍は働かされて老骨に鞭うつような日々でした。それに部下の不徳は上官の不徳です」

「ならブルースが諸悪の根源だな。どうせなら『ヴィクトリー』とか縁起の良い名前を付ければよかったんだ。何が『俺と出会った敵は不幸だからハードラックにする』だ。部下まで不幸にしやがって」

ジリジリと後退する艦隊の艦列を何とか維持しながら、儂や司令長官を揶揄する辺り、この青年にはまだ余裕がありそうだ。参謀の面々も提督の態度を見てやつと落ち着きつつある。

『第8艦隊が到着しました。ファン提督より後退を支援する旨、入電』

その方で、艦橋に安堵の雰囲気広がる。

「まったく、ファンもキツイ御役目を引き受けたものだ。参謀長、余力のある分艦隊を2つ用意してくれ。こんな綱渡り投機家でもそうそうしないぞ」

提督の言を受けてもう一度戦術モニターに視線を向ける。ファン提督率いる第8艦隊はどう見ても半個艦隊程度の数しかいない。

「後退しながら艦列を広げるぞ。突破を許せばこちらの負け。ブルースの策が間に合えばこちらの大勝利だ。第8艦隊にもその旨を電信してくれ」

指示通り余力のある2個分艦隊を後方に回し、第8艦隊と第13艦隊で艦列と言うには薄い横陣を形成していく。

『総司令部より入電。2個分艦隊はありがたく使わせてもらおう。それと小細工をしたからうまく活かしてくれとの事です』

「なんのことだ?」

入電から数分後に、艦列の後方に反応が増え始めた。

「こりやメンテナンス部隊に大きな借りが出来たぞ。交戦能力が無いのいつから我が軍は命知らずの集まりになったんだ?少なくとも俺は『命大事に』を薫陶してきたつもりだが……」

文字通り張子の虎だ。帝国軍からみれば戦艦クラスの反応が増援として送られてきたように見えるだろう。だが、メンテナンス部隊に交戦能力は無い。

「いいか……ここで踏ん張れ。俺達が抜かれたらメンテナンス部隊が全滅するぞ。連中に『欲しがってばかりで守ってもくれない』なんてダメ男が言われる様なセリフを吐かれなくなかったらとにかく踏みとどまれ!」

全艦隊にそれが流れると共に、帝国軍の猛攻が始まった。そして同盟軍左翼から少し離れた地点に同じく半個艦隊程度の第11艦隊が2個艦隊程度の敵に押し込まれる様子が映り始めた。候補生が見ても同盟軍は挟撃・包囲殲滅の危機に陥りつつある。それが数分おきに現実のものになろうとしていた。

## 第95話 決壊（第二次ティアマト会戦）

宇宙暦745年 帝国暦436年 2月中旬

ティアマト星系外縁部 旗艦ディアールウム

クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー（大佐）

「司令長官をやらせる訳にはいかん。済まぬが皆には無理を強いるぞ」

コーゼル大将の野太い落ち着いた、だがきつぱりと覚悟を決めたような声が艦橋に響いた。

「全艦、直卒艦隊と叛徒どもの間に割って入るぞ。続け！」

艦橋のメインモニターには、戦術分析が映し出されている。初戦は押され、その後押し返し、叛徒たちを挟撃できる体制が出来つつあったのもつかの間、迂回進撃していた別動隊の右翼から叛徒たちの別動隊と思しき部隊が突撃を開始し、そのまま帝国軍右翼へなだれ込んだ。シユタイエルマルク艦隊は何とかその勢いを避け、少しでも進撃を遅らせようと食らいについてはいるが、叛徒たちの勢いはモニター越しでも凄まじい。

「なかなかうまくいかぬものよな」

「そのような事を申しますな。提督の采配を間近で観れて小官は嬉しく思いました」

前面の敵を放置して直卒艦隊の援護に向かう。敵将ベルテイーニを戦艦の厚みのある艦列で受け止めている間にシユリーター艦隊と連携して集中砲火を浴びせる。用意していた罠に誘い込んだが、それでも猛将と言われてた人物の指揮だ。食い破られるギリギリの所まで追い詰められたが、なんとか撃破する事が出来た。

これによって敵右翼部隊は数的な劣勢に立たされ、突破の可能性も見えたが、いつの間にか増援が現れ、さらに後陣に戦艦らしき反応が多数現れた。だが、その間にも別動隊が敵後方に迫り、挟撃が成功するはずだった。

『シユリーター艦隊より入電。ここは任されたし。直卒部隊をお願いします。以上です』

「シユリーターも覚悟を決めたようだ。私もそれに報いねばな」

敵前での90度回頭を行った我々の側面に、正対していた艦隊から砲撃が行われるが、それを抑える様にシユリーター艦隊が我々の抜け穴を埋める。だが、二艦隊で形成していた艦列を急に埋めるのは不可能だ。前進するという事は我々の後方を守る意味があるが、それと同時に半包囲の中に自ら飛び込む事も意味している。

「大佐殿、すでにインゴルシユタット・カルテンボルン両提督の戦死が確認されました。提督にお伝えすべきでしょうか？」

「今は控えた方が良いでしょう。提督の指揮を曇らせるような要素は排除すべきだ。私から後で報告する」

オペレーターのリダー役が戸惑いながら私に確認してきた。戦術モニターを見る限り、帝国軍右翼で曲がりなりにも艦隊を維持しているのはシユタイエルマルク艦隊だけだ。そうこうしている内に直卒艦隊の右舷から襲い掛かる敵別動隊になんとか我が艦隊の前衛がとりついた。

「総司令部に電信。ここはコーゼルが引き受ける。最善の判断を……とな」

『総司令部に電信……完了しました』

コーゼル艦隊には敵直卒艦隊と左翼の部隊の攻撃が始まっている。いくら戦艦のみの編成とは言え、側背面攻撃をこれだけ受ければ長くはもたないだろう。

「くっ。アツシユビーめ。まだ殺し足りないのか」

帝国軍右翼を崩壊させた勢いで直卒艦隊に突撃をかけていた敵別動隊は、そのまま艦列を左舷方向に伸ばし、挟撃体制を作ろうとしている。後方から支援をしていたシユタイエルマルク艦隊にも敵右翼の部隊が取りつきつつある。このままでは叛徒たちの得意な挟撃・包囲殲滅体制が完成してしまう。

「シユタイエルマルク艦隊に電信。支援を感謝するが退くタイミングを間違えるな。とな」

『シユタイエルマルク艦隊へ電……』

『直撃きますー！』

「全員伏せろ！」

我々の穴を埋めたシュリーター艦隊も半包囲下で打ち滅らされている。包囲体制が完成する直前、観測官の声と共に提督が司令席から立ちあがり、伏せる様に指示をされた。その直後に艦橋は爆発にまつまれた。私は伏せていたものの吹き飛ばされ、意識を失った。

宇宙暦745年 帝国暦436年 2月中旬

ティアマト星系外縁部 旗艦ヴァナディース

ハウザー・フォン・シュタイエルマルク（中将）

『総旗艦との通信途絶。反応も消えました』

「これより撤退戦に移行する。殿として最後まで友軍の撤退支援を続けるぞ」

挟撃体制の構築に成功する目前で肝だった別動隊の右舷後方から突撃され、そのまま帝国軍右翼が崩壊、直卒艦隊を含めた帝国軍左翼部隊が完全包囲された。コーゼル提督の旗艦ディアールウムとの通信が途絶えて既に一時間。

『支援を感謝するが退くタイミングを間違えるな』

と言う電信が最後の通信だった。この一文が逆に私を奮起させた。提督は『撤退しろ』と言う命令を最後に伝えてくださった。これは撤退の大義名分と、戦後の敗戦の責任から守る意図があったと思う。

全軍が崩壊し包囲されつつある今、曲がりなりにも艦列を維持しているのが我が艦隊だ。敵は包囲陣形成を優先したからそこから漏れた友軍が必死にこちらに下がってくる。せめて彼らだけは本国に連れて帰りたいかった。

「閣下、救難信号に関しては独断でシャットアウトさせました。ご報告が遅れ申し訳ありません」

「良い。受信しても対応できないのだ。気を使わせたな」

参謀長が顔をしかめながら詫びて来た。自力で撤退できない艦を救援する余裕は残念ながら無い。既にオープンチャンネルでは叛徒たちは降伏を呼びかけ始めている。帝国軍は宇宙艦隊司令長官と宿将と言っても良い存在……。それだけでなく多くの将官を失った。



撤退しながら惑星アンシヤルの傍を通過する際にも、地上基地から救難信号が送られていた。それを振り切る様に後退を続ける。

宇宙艦隊に見捨てられたとなれば、彼らも降伏しやすいはずだ。それだけが、彼らに出来る援護だった。叛徒たちを振り切り、艦隊の再編成に入れたのはイゼルローン回廊出口付近まで撤退してからの事だった。出征時には10万隻を超えていた艦隊がわずか1万3千隻まで撃ち減らされていた。

「出来る限りの準備はした。少なくともここまでの大敗になるはずはなかった。我々には何が足りなかったのか？」

手痛い片づけにはあまりに損害の大きいこの敗戦の原因分析が、戦後の私の最初の任務となる。戦死の報を携えてコーゼル提督の邸宅を訪れた時、少なくともその要因のひとつの存在を知る事になる。

1年後に提督の軍服と階級章、それに認識票が丁寧に梱包されて送られてきたと聞き、補給基地で共に事に当たったケーフェンヒラー大佐が、提督をちゃんと吊ってくれたと事と共に、彼の存命を知った。奥方から見せて頂いた手紙には遺髪も送っていたが、提督の髪が短く、断念した事が詫びられていた。

戦後に敵将アッシュビーの戦死の報に触れ、弔電を送った私には軍内部から批判が集まっていたが、それを知って弔電を送っておいでよかったです。確かに苦渋を舐めさせられたが我々がしているのは戦争であり、殺し合いではない。矜持を失えばただの殺し合いになってしまう。少なくとも私はアッシュビーに敬意を払い。叛徒たちもコーゼル提督に敬意を払ってくれた。それで十分だった。

宇宙暦745年 帝国暦436年 2月中旬

テイアマト星系外縁部 旗艦「デアールウム」

クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー（大佐）

「…… 佐殿！…… 大佐殿！」

「くっ…… すまない意識がまだはつきりしない」

「すみません。大佐殿は脳震盪状態との事でしたので休んで頂きました

かったのですが、本艦で存命の士官の最高位が大佐殿なんです。叛徒たちから降伏勧告が送られてますが、受諾して宜しいですか？」

「艦の状況は？」

まだ意識がはっきりしないが、そういう状況なら決断しなければならぬ。私は状況を確認した。

「3発も直撃弾を受けました。損害判定は大破。核融合炉も緊急停止しています」

「わかった。降伏勧告を受諾してくれ」

「了解しました。それと水です。これを飲めば少しは意識もよくなるかもしれません」

右手にペットボトルらしきものを握らせると、声の主は私から離れて行った。なんとか上半身を起こし、ペットボトルを口元に運んで水を飲む。水分が喉を通り、身体を潤していく。それが認識できた頃合いで、ようやく意識がはっきりしてきた。

「はっ。提督はどうされた？」

「残念ながら爆風で司令席に叩きつけられ、そのまま頭部を強打されました。ほぼ即死状態だったそうです」

声の主へ視線を向けるとオペレーターのリリーダ役を務めていた曹長だった。頭に巻いた包帯が痛々しいが、目にはまだ力がある。艦橋に詰めていた士官の大半が人事不肖な中で、彼が救命活動を取り仕切ってくれたのだろう。

「世話をかけたな」

「いいえ。当然の事をしたまでです。降伏勧告も受け入れて頂いてホッとしました。そう言うタイプじゃないのは知っていましたが、過去に玉砕を命令した貴族さまがいた話も聞いていたので」

苦笑しながら応じる曹長に頷きながら提督の元へ歩みを進める。すでに軍仕様の毛布が掛けられていたが、顔の部分だけ毛布をめくる。そこまで余裕がなかったのか？それとも帝国軍の宿将であり、半分は父親の様でもあった提督の死を受け入れられなかったのか？特徴的な明るい褐色の瞳は開いたままだった。

「提督、ご恩返しを希望しながら弾除けにもなれず申し訳ありません」

それから右手で瞳を閉じて、認識票と階級章を確保する。そんな事があるとは思いたくないが、これは残された家族に形見として届けた。紛失という名目の窃盗から守る意味でも必要な処置だった。それから曹長に協力してもらい、重傷者向けの簡易カプセルに提督のご遺体を安置する。作業を終えてから長めに敬礼をした。

そこまでしてようやく艦橋の有様が目に入り始めた。メインモニターは碎け散り、アラート音は出ていないが船内状況を表すモニターは赤で埋まっている。

「生きる希望を失い、志願した先でも死に損なうか……。私には生きる希望がないと言うのに……」

「失礼します。小官は第13艦隊の参謀長を務めておりますアツテンポロー中将です。勧告を受諾されたケーフェンヒラー大佐でいらっしゃいますか？」

「はっ。小官がケーフェンヒラー大佐です。存命の士官の中では最上位になります。責任はすべて小官にあります。できれば降伏した生存者には寛大な処置を願いたく」

「ご心配為されますな。この艦がコーゼル閣下の旗艦である事も認識しております。失礼があつてはならぬと当初は艦隊司令ご自身で対応しようとされたのですが、さすがにそれは……。とこの老骨が出しゃばった次第です。それで閣下は？」

「あちらです。残念ながら即死状態でした」

アツテンポロー中将は簡易カプセルに近づき、ベレー帽を取って黙祷をささげてくれた。すでに核融合炉が停止し、生命維持装置も停止していた艦内気温は急激に低下しつつあった。

「救援活動はこちらでしますので、避難をお願いします」

その言葉に促され、提督を安置した簡易カプセルと共に旗艦長門へ移乗する。

「差し出がましいかもしれませんが、埋葬までお考えなら冷凍カプセルに移した方が良いでしょう。宜しければ手配しますが……」

「ぜひお願いしたい。それと形見の品を何とかご遺族に届けたいのです。お力添えを願えれば幸いです」

医務室に隣接した安置所でカプセルを移し替える作業をしていると、何名かの士官が手伝ってくれた。その中のひとりに特徴的なオレンジ頭の青年がいる事を認識したのは作業を完了した後だった。彼は報道にも載っていたから帝国軍の私でも顔は知っていた。

「降伏勧告を受諾したケーフェンヒラー大佐であります」

「驚かせてしまったならすまないね。カーク・ターナーです。それにしても惜しい人を亡くされましたね。提督がこちらに生まれてくれていれば、私は軍人なんて因果な商売から足を洗ってビジネスをしていましたよ」

「老人をその因果な商売とやらから引退させずにいる張本人がそうきますか？」

「参謀長、君も被害者さ。提督がこちらにいてくれたら、君も退役して孫娘との時間を楽しめていたさ」

「そうかもしれないな」

そんな会話を挟んでから、ベレー帽をとって黙祷をささげてくれる叛乱軍の士官たち。私も続くように黙祷をささげた。

「大佐、もうしばらくは救援活動の指揮があります。そちらも大変だったでしょう。少し安静にされて下さい。皆さんの今後の生活の事もあります。お互い話し合う必要があるでしょうから」

少し悲し気な表情でそう言い残し、ターナー提督は安置室を後にした。この時、私は彼の友人でもあり、猛将とうたわれたベルティーニ提督の戦死も、そして軍務尚書の憤死の原因となった彼らのリーダー、アツシユビー提督の戦死も知らなかった。

それを知ったのは何度か、捕虜尋問と言うにはあまりにも甘い茶飲み話をターナー提督と数回行い。手配された輸送船でエコニアの捕虜収容所に着いてからの事だった。

捕虜から帰化した住民が多数を占めるエコニアは、敵国の捕虜と言うより疲れ切った犠牲者を温かく迎える様な不思議な雰囲気があった。ターナー提督の口添えがあったのか、提督のご遺体も丁重に扱われ、郊外の小高い丘にある墓地に埋葬された。

「地方星系では元捕虜の住民の活躍に支えられている所が大きいんで

す。コーゼル閣下は平民出身ながら大将まで昇進され、何かと帝国軍時代に世話になった住人も多い。敬意を払うのは当然の事です」

そう説明してくれたのは、埋葬に立ち会ってくれたエコニアの名士、井上商会の会長だった。それから捕虜としての生活が始まるが、これが捕虜と言えるのか？疑問の付く日々が始まった。内務省地方自治局に在籍していた事を知ると、エコニアだけでなく地方星系の役人から何かと助言を求められるようになった。

家賃分は働こうと自分に言い訳をしながら、内務省時代は予算が理由で出来なかった事業プランを調整して提供する。現地調査にも乞われて頻繁に向かい、収容所内にいる方が少ない日々だ。そんな生活を送っているうちに、形見を送ったご遺族から丁重な礼状が届いた。「これで肩の荷が下りた気がします。提督、またご報告に上がりますね」

礼状の到着をお知らせするついでに墓参りに来たが、提督の墓所には花が沢山飾られている。帝国軍時代は平民出身と言う事で軍部上層部から不公平な扱いを受けたとも聞いていたが、部下に誠意を尽くして接してこられた提督の生き様が、こういう形であっても報われて嬉しく思った。

更に時は流れ、730年マフィアを題材とした映画が作成されることになった時、そのライバルとして描かれたコーゼル提督やシユタイエルマルク提督の人となりの取材を申し込まれた。補給基地で共に任に当たった彼は、唯一実名でアツシユビー提督に弔電を送った事で、敵国であるはずの同盟市民に妙な人気があった。

軍広報部に押し切られる形で協力というより帝国軍のシーンの監修に近い事までさせられたが、その礼としてエコニア収容所の名誉所長という肩書と、大佐格での年金を授与されることになる。

『生きる希望が無いのは分かりました。ただ貴方が助けになれる人の数は、同盟でもかなり多いと思います。助けられる存在がいる。それだけでも生きる意味にならないか。確かめてみませんか？』

オレンジ頭の提督に言われた言葉がその時頭をよぎった。名誉所長となつてからは実質エコニアの名士の一人に数えられた。助言し

た事業進捗も含め、それからの私は既に財務委員長になっていた彼と陳情も兼ねて頻繁に連絡を取る仲になる。

決して甘い交渉相手ではなかったが、『予算がない』事を理由にしない彼との交渉は、その結果が地方星系の発展に影響する事もあり、私のやりがいになっていく。もつともそうなるまでには少なくとも時間が必要とした。

## 第96話 老提督との邂逅：呪縛

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン ローザス邸

アルフレッド・ローザス

「……ちゃん。…… お爺ちゃん起きて」

「うーむ……」

「ウェンリーさんはダステイが送って行ってくれたわ。お腹はすいてる？一応いつものチーズの盛り合わせと生ハムクラッカーは用意してあるけど……」

「すまないなレイチエル。いつの間にか眠ってしまったようだ。いつもありがとう。後は自分でやれるから大丈夫だ」

「分かったわ。大学のレポートの仕上げをしなくっちゃ。部屋にいるから何かあったら声をかけてね」

「ありがとう。私の方は大丈夫だから、ちゃんとレポートに集中しなさい」

『は〜い』と明るい声で応じたレイチエルは、そのまま居間を出て行った。軽やかに階段を昇っていく音がかすかに聞こえる。孫ながら明るく面倒見の良い、そして何より優しい娘に育ってくれた。窓の外に視線を向けるとすっかり夜が更けている。時計を見ると20時過ぎ。仮眠と言うには長く眠ってしまったようだ。

「ブルース・アツシユビー……。なぜ私ではなく、おまえさんがあの時死んだのか？自信満々で死ぬ気配すら感じさせなかった君が先に死んだことで、皆がどれだけ迷惑したか……」

ヤン少佐と語り合っ忘れていた思い出のいくつかが蘇った。そのいくつかは、正直私の古傷をえぐるような痛みを伴う。『軍人なんて因果な商売だ。一日も早く退役したいものだ』そうボヤいていたのはカークだったか。確かに因果な商売だ。

余人は気にし過ぎだと言うかもしれないが、第二次ティアマト会戦でブルースが戦死し、なぜか私が生き残ってしまった事は、呪いの様に戦後の私に付きまとった。

『あの野郎は最後まで俺達に宿題を押し付けたな。軍人も因果な商売だが、それに輪をかけて真つ黒なのが政治家だ。だが、ここで怠けて奴にしたり顔で小言を言われるのも癪だ。アルフレッド、もう少しばかり奴に恩を着せてやろう。先にあの世で宜しくやっているあいつに貸しをたくさん作ってどうせならでかい顔をしてやろうじゃないか』

第二次ティアマト会戦後に、次長から昇格して統合作戦本部長になり、2年で防衛体制の構築を終えたターナーはそう言って政界に転出した。後任には次長職を勤めていたファンを指名した。ブルース亡き後の宇宙艦隊司令長官にはフレデリックがその任に当たった。私は総参謀長として20年彼とコンビを組み、54歳で名目上は早期退役した。

『ブルースと似た欠点があるからな。アルフレッドが総参謀長でいてくれたおかげで、司令長官の任も大過なく務められた。本当なら60まで踏ん張ってもらいたかったが、いい加減子守から卒業したいか……』

早期退役を依頼した時、苦笑しながらフレデリックはそう応じて受け入れてくれた。少年の頃から彼の事は知っていた。貴公子然とした風貌、快活な性格。人の輪の中心にいるべき人物だった。ブルースと比べれば多少の独善性など可愛いものだ。畏敬の対象に近かったブルースとは違い、彼は兵士たちから愛された司令長官だった。

『どうせならお前さんもこっちに来ないか？軍と違って政治の世界では上意下達が成立せんのだ。悪い事にそんなのでも市民の代表だから形式上は無視もできん。なんなら党幹事長の椅子を用意するぞ？お前さん悪ガキの相手は得意だろ？』

早期退役の報告を兼ねて訪れた国防委員長のオフィスで冗談のようにウオリスは言ったが目は本気だった。この頃にはカークが財務委員長、ジョンが法秩序委員として君臨していた。軍も外野から見れば730年マフィアが押さえていた。

大多数の市民は私達の成果を喜んでいたが、『730年マフィアによる寡頭制だ』という批判は常に存在した。何かと失言をクロース



アップされたウォリスは、あの頃には政界を疎みだしていたのかもしれない。

『アルフレッドもついに子守から解放されるか……。長年負担をかけてすまなかつたな。ウォリス辺りから既に言われているだろうが、俺としてもアルフレッドには政界に来てもらいたい。だが、いい加減子守ではなく、孫の相手をした時期だろうな』

苦笑しながらジョンはそう応じた。23年も総参謀長を勤めた私は、おそろしく破られる事のない在任記録を残した。あの戦いの後の20年は国防体制を盤石なものとする日々だった。それに目途がついた時、もう肩の荷を下ろして後進に席を譲るべきだと思つたのも事実だ。

士官学校まではジョンがブルースの緩衝材役だった。私の気持ちを一番理解していたのはもしかしたら彼だったのかもしれない。強く慰留はされなかったが、どこか寂し気で切なげな視線だった事はよく覚えている。

『軍からは皆足を洗ってしまおう。また寂しくなるな……。』

いつもの生真面目な表情を少しだけ緩め、ファンはそう呟いた。ブルースも含め僚友達皆から信頼された彼は、カークが引いたロードマップに少しずつ手を加えながらイゼルローン回廊の封鎖事業と全軍の装備更新を効率よく進めていた。

国防委員会と財務委員会の全面的な協力が得られていたとは言え、どんな事業も実現できなければ絵に描いた餅だ。正規艦隊司令になるまで、カークが旗下に置き続けたのは伊達ではなかった。心無い人々は『ターナー提督の後を引き継いだけ』などと中傷したが、一見地味な仕事を手抜きがなく、しかも改善し続ける事の大変さを理解していれば、こんな発言はしないだろう。

『他の皆も何かしら打診しているだろうから、更に重なるのは不本意だ。ただ、正直判断に困っているので話だけ聞いてもらいたい。ローザスに統合作戦本部付きのある分室を監督してもらいたい。既に帝國側との情報のやり取りはしていないが、何かと様々な情報を上げてくれていてな。元職員たちが困る事の無いように気にかけてくれ

るだけで良いのだが……』

ジークマイスター室長はあの戦いの数年後に肺炎で亡くなった。ウォリスとジョンの当選を知ってからの事だから、同盟の将来を多少は安心した上で旅立たれたと思う。

防衛体制に意識を向けた同盟領内では、軍と司法機関の形質もやや変化した。防諜・破壊活動への対策を共同で行う形に変化した彼らに、無名の市民を名乗って情報提供をする。分室はそんな形に変化していた。既に多くの職員は現役を退いていたが、気前よく支払われた報酬で身を立てる事に成功していた彼らの何人かは、自分の役目を子弟に継がせるべく教育していた。

分室への哀愁とそんな彼らの義理人情に絆されて、私はフアンの打診を受ける事にした。送金をする為にダミー会社として小さな出版社を設立したのはこの後すぐの事だ。

取材費やブッキング手数料など送金名目に困らないから出版社にしたが、活動実績が無いのは問題なので回顧録を執筆した。それがきっかけでノンフィクション作品に贈られるクリアウオーター賞を受賞するのだから世の中は本当に分からない。

『提督、軍としてはこれを機会に元帥号を授与したいと考えています。アッシュビー提督の件を気にされて昇進を辞退されたのは私も理解しています。ただ、生前に元帥号を贈りたいという後進達の想いを汲んで頂けませんか?』

士官学校副校長から正規艦隊司令に転出したアレクが急に押しかけて来たのはこの頃だった。彼の主催するバーベキューパーティーに誘われて顔を出していたから、説得役を押し付けられたのだろう。士官学校の教官になったのも半分くらいは730年マフィアのせいだった。

借りを返さない訳にもいかず、私は二つ返事で了承した。アレクがあんなにホツとした表情をしたのは、サラにプロポーズを受け入れてもらった時以来じゃないだろうか?

『閣下、退役したからにはこの老骨の手助けをして頂きますぞ。現役時代を思い出すのが、年寄りの冷や水も多いですし、何より、国力増

進のために頑張る現役世代を支えるのも、われわれ隠居世代の大切なお役目ですからな』

そう言って設立した出版社の一角を自分の事務所の様に使い始めたのがアッテンボロー退役大将だ。彼は退役してから孫達の面倒を見る生活をしていたが、前線に出ていた息子が戦死すると、私達の孫を含めた面々をあつめてキャンプやバーベキューをするようになっていた。自宅に多くの人が出入りするのは孫夫婦の負担になるので、これ幸いと避難先に選ばれた。

星間国家である同盟では、軍人だけでなく多くの父母は家を留守にしがちだ。その寂しさを少しでも和らげたいと言う想いには共感できたから、私も協力は惜しまなかった。こうして曾祖父に連れられてオフィスに出入りし始めたダステイ少年と、祖父に連れられて出入りし始めたレイチエルが婚約するのだから、人と言うのはどこでつながるかかわからないものだ。

「さて……。この先の思案は部屋の方が良いか……。」

あの戦いの事を想うとき、前もって良かった思い出を振り返る様に意識している。そうしないと『ブルースじゃなく私が死ぬべきだった』という想いに引っ張られて思考がどんどん暗い方向へ進むからだ。

ワイングラスを左手の中指と人差し指で挟み、レイチエルが盛り付けてくれたプレートをその上に乗せる。右手で常飲しているターナー商会のハーフトルを持つと、私は自室へ向かった。サイドテーブルにワインと肴を置き、ロッキングチェアに腰を下ろす。ボトルの栓を抜き、グラスに注ぎながらウーラント商会のブルーチーズをまず口に含む。

濃厚な香りが口いっぱいに広がり、それを洗い流すように赤ワインを飲む。すると香りが全く別の物となり、少し経つとワインの香りだけが残った。次はファンから紹介されたカマンベールだ。濃厚な舌触りが味覚を楽しませる。それに別れを告げる様にまたワインを口に含む。するとまたさっぱりとしたワインの香りが残る。

「良い奴から先に死ぬか……。ヴィットリオには当てはまるかもし

れんが、ブルース、お前さんがそうだとはさすがに思いたくないな。カーク、まさかお前さんが先に逝くとは思わなかった。ブルースの悪口を的確に言う役目はお前さんの物だった。フレデリック、ウォリス、ジョン……それにファン。皆逝ってしまうとはな。遺された身として同盟の行く末を少しでも長く見届けようとは思っているが、そろそろ私にもパーティーの招待状を送ってくれても良いんだぞ……」

そう呟きながら、私はあの戦いの記憶の扉を再び開けた。

## 第97話 老提督との邂逅：十字架

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星テルヌーゼン ローザス邸

アルフレッド・ローザス

『第13艦隊旗艦長門から入電、第9艦隊の損害多数、再編成はそちらに願いたしとの事です』

「アルフレッド、ベルティニーニは？」

「トラウイスカルバンテクトの反応も消えたようだ。続報を待つ必要があるが、厳しい状況だろう」

「そうか……。オペレーター。第8艦隊司令部へ通信を繋いでくれ」

ヴィットリオ戦死の報に触れたブルースの表情は、変わらずに自信家のそのままだったが、右こぶしをぎゅっと握りしめた事を私は見逃さなかった。

艦隊司令から司令長官になった時、巨大な責任に少しは大人しくなるかとも思ったが、総参謀長の重責に息をのむ私と違い、お気に入りのおもちやを与えられた子供の様に精力的に動き始めた。何かと軋轢が増えて気をもんだのも事実だが、結果としてブルースが精力的に動いたことでこの会戦の迎撃態勢が余裕をもって整えられたのも事実だ。

「ファン。3個分艦隊も引き抜いて置いて勝手な話だが、カークを孤軍奮闘させる訳にはいかない。右翼に回って第13艦隊の援護に向かってくれ」

『承知した。言うまでもない事だが長く持たせるのは厳しいぞ？』

「分かっている。乾坤一擲の突撃を必ず実施する。それまで何とか持たせてくれればこちらの勝利だ。頼む」

『承知した。では』

ファンはそう応じて通信を終えた。

「オペレーター、第13艦隊に電信。再編成の件は了解した。第8艦隊をそちらに回す。それと……。元帥への昇進をヴィットリオに

越されたな。以上だ」

『了解しました。第13艦隊へ電信……………完了しました』

「ブルース？」

「アルフレッド、今は何も言うな。悼むのは勝ってからでいい。奴も納得するはずだ。だが、どうせなら生きて元帥にしてやりたかった……………いい奴から戦死するってのはどうやら本当の様だな。第9艦隊の再編を急いでくれ」

これがブルースなりの、いや730年マフィア流の悼み方なのかもしれなかった。あれはカークの『自分の子供に業績を誇るのは少し痛い奴になりかねない。どうせならお互いの子供に、父親の友人として業績を語ろう』という言葉がきつかけだったか。

いつの間にやら先に戦死したら子供たちに何を言われるかわからない。先に死ぬわけにはいかないという風潮が生まれた。粗野に見える外見の影響もあって市民たちはヴィットリオを典型的な猛将タイプだと認識している。だが、大柄でクマのような体格をしながら、その性格も絵本に出てくるクマの様に優しい男だった。

「いつも苦勞を掛けているメンテナンス部隊の連中にこんなことをさせるのは気が引けるが、いま右翼が崩壊すれば全軍の崩壊につながる。第8、第13艦隊の艦列の後ろにメンテナンス部隊を移動させる。もう補給のタイミングは無い。彼らにも最後まで貢献してもらう」

ブルースの指示で横陣を形成しつつある第8、第13艦隊の後方にメンテナンス部隊の艦列が進んでいく。と同時に戦術モニターの画面からも分かるほど、第13艦隊が2個分艦隊を後方に下げている。この期に及んでさらに戦力を抽出するつもりなのか。ファン程ではないとは言え、基本的に手堅いカークも覚悟を決めたようだ。

「オペレーター、第13艦隊に電信。2個分艦隊はありがたく使わせてもらう。それと小細工をしたからうまく活かしてくれ。以上だ」

『第13艦隊へ電信……………完了しました』

「さて、そろそろ最終幕の開演といこうか」

直卒艦隊の後方で艦列を整えた第9艦隊の残存部隊を先頭に、各艦

隊から抽出した分艦隊で編成した別動隊が戦線を迂回しながら左翼へ向かう。2個艦隊程度の帝国軍相手に遅滞戦を続けるジョン率いる第11艦隊の後方を通り、帝国軍の別動隊右翼後方から突撃を開始した。

「借りを返そうと第9艦隊の連中は張り切っているみたいだな。それにしてもシュタイエルマルクは返信の件も含めてだいぶ冷静な奴だな。そういうタイプはファンだけで十分だ。俺と奴はどうやら友達にはなれんようだ。第11艦隊にシュタイエルマルク艦隊の牽制を命じる。我々は先に進むぞ」

帝国軍の別動隊を粉碎した我々は、そのまま帝国軍右翼へ突撃を続ける。右翼で戦列を形成していた艦隊のひとつが、突撃の勢いをいなすように後退しながら艦首をこちらにむけて牽制射撃をかけて来た。

まともに突撃に正対すれば撃破されるだけだ。どうせなら右翼全体でそれを行えばこちらの被害も馬鹿にならなかった。だがほとんどの艦隊は正対する同盟軍左翼部隊の攻勢を支える事に気を取られ、無防備に側面を晒したままだ。

「どうやら勝ったな。後続にはそのまま左舷方向へ艦列を伸ばし、第13艦隊の右翼部隊との合流を命じる。このまま包囲殲滅戦へ移行するぞ。あの艦隊はコーゼルか？危機を察知したのは流石だがもう遅い」

ブルースが腕組みをしながら戦術モニターに視線を送りつつそう言ったのは、第9艦隊の残存部隊が帝国直卒艦隊の側面に食らいつき、我々が敵右舷後方で艦列を整えて攻撃を開始した時だった。

なんとか直卒艦隊の盾になろうとコーゼル艦隊と思しき帝国艦隊が正対していた第8、第13艦隊を無視して援護に来たが、そこは正直に言って死地だ。右舷以外の三方向から攻撃を浴び、見る見るうちに撃ち減らされていく。

「左翼の連中も息を吹き返したな。ジョンも良くやってくれた。後は殲滅するだけだ」

同盟軍の右翼部隊の戦線ではコーゼル艦隊の抜けた穴を別の帝国艦隊が埋めてはいるが、半分になった艦列を半包囲しつつある。メン

テナンス部隊の艦影がむやみに艦列を広げる判断を帝国軍にさせなかったのかもしれない。『毒を食らわば皿まで』ではないが、カークとファンは最後まで薄氷の上を歩き切るつもりのようなようだ。

メンテナンス部隊の艦影が無ければ、帝国軍の左翼艦隊はむしろ突破を狙う位、艦列は薄くなっている。包囲の輪から漏れたシユタイエルマルク艦隊は第11艦隊が正対し、うまく引きはがしている。撃ち漏らしは出た物の、敵戦力の大半を包囲する事が出来つつあった。どうやら我々は賭けに勝てたようだ。

「そろそろお開きだな。全軍に降伏勧告の開始を電信。第11艦隊はシユタイエルマルク艦隊の牽制がある。アルフレッド、どこが余力がありそうだ？」

「ブルース。どこも奮戦の後だ。余力は無いだろう。牽制を続けている第11艦隊の次に地上基地のあるアンシヤルに近いのは第4艦隊だな」

「ならジャスパーに頼むか。あいつも後始末はあまり好みじゃない。むしろ喜ぶはずだ」

悪だくみをするかのような表情でブルースが応じると、オペレーターが第4艦隊へ電信を始めた。庶子とは言え侯爵家に連なるフレデリックに、貴族の捕虜対応が集中した時期があった。具体的な対応は同じでも、対応する人物が変わるだけで相手が納得するなら、その方が効率的なのは確かだ。

だが、悪い意味で門閥貴族的な捕虜だったロイズ伯への対応を最後に、フレデリックはその手の役割を断固拒否する様になった。

『うちの爺様が政争に敗れることなく帝国にいたらあんな人物だったのかと思うと、正直ぞっとする。俺は自分の精神衛生の為にも、もうこの手の役目は受けないぞ』

高額な身代金と交換で身柄の引き渡しを済んだ後に、彼はそう断言した。身代金の金額から功績と判断され昇進を蹴る代わりに談判してこの条件を勝ち取った。あの時の笑顔は、会戦で快勝した時以上のものだったのが印象に残っている。

「ブルース。その件はあまり触れてやるな。フレデリックの数少ない



起爆スイッチのひとつだからな」

包囲が完成して1時間。直卒艦隊を殲滅された帝国軍に組織的な動きはすでない。帝国軍の残骸を避けながら降伏勧告をオープンチャンネルで発信していく。交戦不能な艦から山のように救難信号が発せられている。損傷状況を加味しながら優先順位を付けて各艦隊が対応していく。

『残骸の後ろに帝国艦、エネルギー反応あり、攻撃来ます！』

『右舷回頭、防御磁場最大出力』

救難信号への対応を進めていた時、唐突に艦橋にオペレーターの悲鳴のような叫びと艦長の指示が響いた。

『僚艦が対応に動きました。これで安心……。別方向からも反応あり、これは……。レールガンです。直撃コース』

『総員伏せろ！』

その声と共に艦が大きく揺れ、艦橋は爆発に包まれた。床に額を叩きつけられた私は、額からの出血で右目の視界を失いつつも顔を上げブルースの安否を確認する。

「アルフレッド、出血がひどいぞ。そのまま安静にしておけ」

司令席に手を突きながらブルースが声をかけてくる。どうやら無傷の様だ。

「ブルース……。二次災害があるかもしれん。まだ伏せていてくれ」

「何を言う。誰かが対応の指揮をとらないとな。お前さんには迷惑をかけ続けて来た。最後の大会戦でこれまでの……」

その時、もう一度艦橋に爆発が起き、周囲は煙に包まれた。

「まったく、近頃の戦争は質が悪くなった……。ヴィットリオの次は俺か……。もう少し順番は後だと思っていたが……」

出血している額の右側を押さえながら私は立ち上がり、ブルースに視線を向けると、爆発で飛来したセラミック片に腹部を貫かれた彼は血だまりの中に横たわっていた。

「ブルース……」

「アルフレッド、どうやら俺はここまでだ。皆に後を頼むと……」

それとルシンダに子供たちを頼むと……」

「ブルースーブルースー！衛生兵はいないか？衛生兵！」

難治とされてきた多くの病を人類は克服してきたが、残念ながら出血性シヨックを瞬間的に治癒させる手段を、人類は獲得するには至っていない。あわてて駆けつけて来た衛生兵に出来た事は、ブルースの死亡確認だけだった。私はその場で総旗艦ハードラックが通信設備に損害を受けた事とし、戦後処理の主導を第13艦隊に依頼する旨を電信させた。

カークは統合作戦本部次長でもあった。指揮系統の受け渡し先の最上位でもあったし、何よりブルースの戦死の報が、同盟軍の捕虜への対応を過激なものにする可能性を考えての判断だった。重傷者用の冷凍カプセルにブルースの遺体を収容し終えた時、もしかしたら最初に考えたのかもしれない。

『私が死ぬべきだった……』と……』

僚友達も少なからず同じことを考えていたのだろうか？少なくともあれから40年以上の月日が流れたが、私なりに誠実に、精一杯生きて来た。ブルースの死に対する贖罪だったのかは分からない。僚友達の内心も分からない。ただ、自分が生き残ってしまったという重たい十字架の様な物を背負ったことは分かっていた。

司令長官を死なせてしまった私は、元帥号を固辞して受けず、大将のまま総参謀長の任を続けた。本心は退役したかったが、後を直接託された者の責任として、それは許されないようにも思ったのだ。

回想の海から浮かび上がった私は、ロッキングチェアを少し揺らして気を落ち着ける。回想の合間に飲んでいたワインの瓶は既に空だ。私は立ち上がり、チェストに二段目にしまっている『ジークマイスター』の瓶と大き目のグラスを取り出した。

グラスの半分まで注ぎ、口元に運んで飲む。芳醇なブレンデッドウイスキー特有の香りが鼻に抜けると共に、強いアルコールの刺激が喉を襲う。だが、若い酒とは違ってどこか優しい刺激だ。

『酒はある意味女性に似てるな。若いのも勿論魅力的だ。だが棘があつたり火傷をしたりする。年を経て成熟すれば、魅力は色あせない

が優しく包み込んでくれるようになる。まあ、半分は男性の願望かもしれないがな……」

『ジークマイスター』を売り出す前に、僚友達を始め親しい人にこの酒を贈ったカークは、『ジークマイスター』の味をそう評した。その際、ふと室長が同盟に生まれていたらどんな関係になっただろうかとも考えた。

30年近い年の差があった室長と私達は、彼にとっては部下と言うより子供や弟子のような存在だったと思う。相談はいつでも歓迎してくれたが、方向性を示すだけで手段はフリーハンドな事が多かった。そして親の様にすこし高みからこちらを見守ってくれた。そう思うと、案外、カークの評も的を得ていたのかもしれない。

「レイチエルの式までとはとも思っているが、私もそろそろそちらに行きたいものだ。室長も仲間を引き込んで楽しくやっているんだろうな。お前さんたちは……」

室長も交えて最後に僚友達と撮った写真に視線を向けながら私は本心を吐露した。背負った十字架を考えれば最後まで生きるべきだと判っている。だが、もうよいのではないか？そんな気持ちになるのもまた事実なのだ。

空になったロックグラスに『ジークマイスター』を注ぎ直し、一気に煽る。そのままロックキングチェアに身をゆだね、私は意識を手放した。

## 第五章 登場人物

第五章登場人物（～宇宙暦745年）

カーク・ターナー

今作の主人公。おぼろげながらある島国の宰相として上り詰めた記憶を持つ。（前世は田中角栄さん）オレンジの髪とエメラルドの瞳を持つ。超長期目線で、対帝国の必勝策を卒業論文とした。ドラゴニア会戦で勝利に貢献したメンテナンス部隊も彼の上申により設立された。

第二次ティアマト会戦では右翼を担当。ベルティーニがコーゼルの策で戦死した後は、寡兵で右翼を支え、その後応援に来たファン率いる第8艦隊と共に、寡兵で帝国軍左翼を押さえ続けた。ブルース率いる別動隊の突撃に合わせて戦線を展開し、帝国軍主力を包囲下に置く事に貢献した。5章終了時は大将、統合作戦本部次長、第13艦隊司令官。

■家族と友人

両親

惑星エコニアの開発計画の話を聞いて、全財産をはたいてそれに応じた。カークを含めて4人の子供をもうけている。末っ子はカークの子供であるシュテファンとほぼ同じ年。

カークが生まれた頃は打ち捨てられたしがない地方惑星だったエコニアも、捕虜収容所の大規模新設や地道な緑化事業が続けられ、同盟の同化政策の中心地、経済的にも地方星系の中で、頭2つ分ほど抜き出た惑星になっている。カークの妹弟たちはエコニアで身を立てる方針。

グスタフ・ウーラント

仕えていた貴族の政争に巻き込まれ、娘と息子を連れて同盟への亡命を決断した帝国騎士。ウーラント商会の財務責任者。修行から戻った嫡男ユルゲンが戻ってきて経営に参画しているため、肩の荷が下りた。

ユルゲンの妻であるジェシーの妊娠を知り、嫡孫の誕生を期待して

いる。義息のカークには恩義を感じているが、カークも見込んでくれた事を恩義に關しているため、関係は良好。孫たちとバーベキューをするのが楽しみの一つ。

クリステイン・ターナー

今作のヒロイン。カークとの間に4人の子供を授かっている。接する機会が多かったカークの僚友達には、淑女然とはしているが、実は嫉妬深くてヤバイ事がうすうすバレている。

任官以来、単身赴任をさせている事にも罪悪感を感じている。テルヌーゼンにあるターナー邸を守る一方、ウーラント商会の顧問、ターナー商会の共同経営者でもあり、留守がちなカークを公私両面から支える良妻賢母。

シユテファン・ターナー

カークとクリステインの嫡男。名付け親はウォーリック商会会長のグレック・ウォーリック。ウォリス達も通ったメープルヒル校でフライングボール部に所属している。体力面では士官学校候補生のアレク、勉強面では記念大生のタイロンやサラに指導を受け、文武両道の学生になっている。

エリーゼ・ターナー

カークとクリステインの長女。名付け親はオルテンブルク侯爵（ジャスパールの祖父）。ファイアザード会戦の戦勝記念パーティーでは、ウォリス・ウォーリックと手を繋いで記念撮影にのぞんだ。頭の回転が速く、本質を掴むことに秀でている一方、接する機会が多い年長の男性陣は時折みせる予言めいた発言に恐怖を覚えさせている。

ヴェルナー・ターナー

カークとクリステインの次男。名付け親は祖父であるグスタフ・ウーラント。ファイアザード会戦の戦勝記念パーティーでは、ブルース・アツシユビーに抱かれて記念撮影にのぞんだ。ターナー邸にはタイロン・アレク・サラを始め、個性豊かな年長者が出入りしており、彼らの影響を受けながら成長している。

オスヴァルト・ターナー

カークとクリステインの三男。名付け親はジークマイスター室長。

名前の由来は「弾劾者ミュンツァー」。ミュンツァーは帝国の国政を司法尚書として肅正して蔓延していた腐敗の一掃を行った人物。ジークマイスターとしては同盟がそうならないようにという想いも込めた命名だった。

ユルゲン・ウーラント

ウーラント家の嫡男。カークの義弟。優しい性格で才覚もあるそうだが、軍人には向かないと父親は判断していた。カークを始め、周囲のできる兄貴分たちを尊敬し、また可愛がられた。エドワーズインダストリーでの修行を終え、婚約していたエドワーズ・ジェシーと結婚した。ウーラント商会の社長として経営に邁進している。3児の父。

トーマス・ミラー

カークの4歳年上で、兄貴分。井上商会在捕虜収容所内に出店していた売店を任されていた。年の近いカークに井上商会の業務を教えたのも彼。母の妊娠を機に家計を助ける為に志願した。

新兵訓練を終え、任地であるカプチェランカの途上であるエルファシルで、ヤン・シーハンと出会い、恋に落ちる。任地であるカプチェランカの基地が帝国軍の大規模攻勢を受け、戦死した。

ヤン・シーハン

カークの兄貴分のトーマスと出会い、恋に落ちた。共にいたの一夜だが、お腹に命が宿る事となる。命名はタイロン。誕生日プレゼントを毎年とどけに来てくれていたキャプテン佐三と相思相愛となり、結婚した。(法的には初婚)

ウーラント商会のエルファシル支社の経営者でもある。タイロンがハイネセンに進学した事もあり、キャプテン佐三との間に2人の子供に恵まれている。

ヤン・タイロン

カークの兄貴分であるトーマスとシーハンの子供。銀英伝原作読者なら知らないはずはないある人物の父親でもある。原作比で7年早めの登場。カークと出光による商人としての英才教育が開始されている。ビジネスの世界に進路を定め、名門である記念大経済学部

合格した。

在学中は名門校の経済学部が参加する仮想投資運用の競技で3連覇し、在学中にウォーリック商会の関連投資会社からスカウトされた。カークから多額の資金を預けられ、実際に運用された結果であることを知る人間は少ない。アレク曰く『錬金術師』。

また、同盟市民の中で3次元チエスの次に趣味として記載される事が多くなる『今日から提督』の製作発起人でもある。原作では古美術品のコレクターだったが、今作では退役軍人会で有名になるほどのミリタリーマニア。

アデレード

ブルースの初婚の相手。激論が交えられた離婚調停の末に離婚した。調停役になったアルフレッドをして『女性を怒らせるものではない』と言わしめた人物。

カトリナ・ローザス

進路は士官学校に隣接する音楽学校。カーク達の会食にも参加しており、クリステインとも友人である。アルフレッド・ローザスと結婚した。3児の母としてシルバリーブリッジの官舎を守っていた。宇宙暦744年に急病で倒れ、搬送されたものの急死した。末娘の名前はセシリア。

ファネツサ

カークがダンスパーティーに参加する代わりにファンのダンスパートナーになった音大生。コミュニケーションが苦手なファンに合わせて楽しい時間を過ごせる。ある意味逸材。

ジークマイスター分室で愛妻弁当を食べるファンの姿は、ランチタイムの風物詩でもあった。ファンの出身地の名産を手土産に勧めるなど、交友が苦手な夫を支えてもいる。3児の母として家庭を守っていた。

ルシンダ

ブルースの再婚相手、母親のナタリー代議員の秘書のひとりだった。アッシュビー重病説を流すために新婚旅行を兼ねて3カ月、バラト星系の惑星シュリナーガルのリゾート施設で一緒に過ごしてい

た。

この配慮もあつて、原作では誕生しなかったブルースの子供が誕生した。この時誕生した長男はドナルド。数年後に長女イヴァンカが誕生している。

カタリーナ

ウォリスの結婚相手。長年愛人関係が続けていたが、ウォリック重病説を流すためにリゾート施設に引き込まったウォリスに連れ添った。原作では恵まれなかったウォリスの子供を授かる。

士官学校の合格発表の日に、赤い三本線をウォリスの首元に付けた女性でもある。ドナルドと同じ年の長男、イヴァンカと同じ年の次男が誕生している。

## ■ビジネス界

井上オーナー

誠実な商売を心掛けるウォリック商会から独立した商人。惑星エコニアで食品を軸に商会を経営している。エコニアに新設された捕虜収容所内に売店を出店していた。カークとの縁もありエコニアの顔役ともいえる立場に。

帝国風の食材を振舞うことにより、捕虜たちの同盟への同化に一役買っている。現在ではエコニアが所属するタナトス星系でも有数の商会に成長している。名実ともにタナトス星系を代表する名士の一人になった。

キャプテン佐三（出光佐三）

井上オーナーと同じく、ウォリック商会から独立した商人。商船の船長も勤める。定期的に会う機会があったヤン・シーハンとの一時に安らぎを感じ、求婚した。タイロンの養父となる。彼が経営する出光商会も、バートル派・亡命派、そして軍部にも太いパイプを得て成長中。

グレック会長 イネツサ夫人（ウォリック商会）

ウォリック商会の先代。現在は息子達に経営を任せている。バートル系融和派の雄であり、亡命帝であるマンフレート2世とも面



識があり、帝国の美術品にも造詣が深い。

『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』に際しては同盟経済界を主導する立場となり、多大な利益を同盟にもたらした。宇宙暦741年に会長職を退き、引退を表明した。グレッツクはウオリスの次男が誕生した743年に肺炎で亡くなっている。

#### ヴァレンティ補佐官

フェザーン自治領主府に所属する補佐官。同盟方面の案件を担当していた。『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』で、同盟に持っていたフェザーンの影響力は失われ、天文学的な損失が生まれた。

後始末を終えた段階で、倒産した証券会社社員の逆恨みから射殺された。あまり話題にならなかったが、補佐官には本来護衛が付くことになっており、本来ならあり得ない状況だった。

#### ■政界

#### ナタリー・アッシュビー

国防委員会に所属する代議員。ブルース・アッシュビーの母。夫は軍需系の企業で役員をしている。事実上の別居状態。見た目も麗しく、人妻と承知で口説いてくる相手も多いが、靡かない。末っ子のブルースが大好きで、何かと構うが嫌がられている。

730年マファイアのファンとなり、彼らの為にも政界で頑張ろうと有力な支援者のひとりになった。ブルースの再婚に伴い、念願だった孫育ての為に任期満了に伴う総選挙に不出馬を決めた。孫のドナルドとイヴァンカの教育は実質ナタリーが権限を握っている。『同盟を偉大な国家に！』とか言い出すような教育がされるのかは不明。

#### ラファエル

財務委員会所属の代議員。顔と弁舌だけが取り柄。圧倒的な女性票の確保で当選している。男性からの支持は壊滅的。ナタリー・アッシュビーとは旧知の仲だが、中身がない事は彼女にも見透かされている。懇ろになろうとナタリーを口説くが袖にされている。

#### ■亡命派

#### クラウス・フォン・オルテンブルク

ジャスパアの祖父。ジャスパアの活躍と亡命派への貢献を嬉しく

思いつつも、亡命派の疑似的な貴族制を維持するために、それを公言出来ずにいる。付き合いのあるベルティー二家を通じて、ジャスパールが縁を紡いだ案件に贖罪を兼ねて投資している。

クラウディア・フォン・オルテンブルク

クラウスの妻、ジャスパールの祖母。本当なら初孫であるジャスパールを可愛がりたかった。ただ、正室との間に子供がいなかった為、可愛がればジャスパールの身が危険になると判断し、厳しく接した。ジャスパールの活躍を応援するために持参金を投資案件につき込むように進言した。

#### ■軍関係

##### 【帝国軍】

マルティン・オットー・フォン・ジークマイスター

自分が生きている内は結果が出ない打倒帝国の夢を新しい希望とし、ターナーを支援する事にした。一時的には同盟内で屈指の影響力を得たが、個人の価値観で民主共和制の理想を実現する事は、民主共和制に反すると判断し、鍛えた730年マフィアの面々を分室から送り出した。

帝国からもたらされる情報は、同盟が防衛戦争を優位に進めるのに大きな貢献をしている。いずれも大勝に終わったファイアザード会戦・ドラゴニア会戦も、彼経由で帝国軍の作戦計画が入手されていた事が、勝利を決定づける大きな要素となった。

第二次ティアマト会戦でもそれは同様で、情報漏洩が懸念されている事も踏まえてブルースは薄氷を渡るような作戦案を実行し、宇宙艦隊司令長官を含めた70名近い将官を討ち取る事に成功した。

クリストフ・フォン・ミヒャールゼン

自身の手腕を発揮できる場として進んでスパイ網の構築・維持に取り組んでいた。ジークマイスターが同盟に亡命した後は、帝国に於けるスパイ網のトップのような立場となっている。

平民出身のコーゼルが正規艦隊司令となり、実力主義による任用を匂わせ、軍部貴族の競争心を煽る一方で、同志たちに噂を広めさせ、宇宙艦隊司令本部内の対立を煽った。

第二次ティアマト会戦の前後からコーゼル提督に疑惑を向けられている事に気づき、活動を休止するか決めかねている。本人は軍務省参事官になり、役職上は第一線から退いている。

ケルトリング軍務尚書

伯爵家当主。元帥。就任直後に勅命により軍に皇族を多数引き受けさせられた。その結果多くの『名ばかり少将』が所属する事となり、対同盟戦で艦隊戦力を摩耗する事になる。

そのツケを支払うかのように嫡男は名ばかり少将を率いたファイアザード会戦で戦死。敗戦を覚悟の上で、名門軍部貴族中心で計画された出征を許可するも、想定以上の大敗となる。

次男もこの戦いで戦死し、ケルトリング伯爵家は後継ぎを2人ともアッシュビーに殺される事となった。第二次ティアマト会戦の前に倒れ、甥のミュッケンベルガーが見舞いに訪れた際に「アッシュビーを斃せ！」と二度呻いて憤死した。

ツイーデン宇宙艦隊司令長官

侯爵家次男。元帥。統帥本部総長を中心とした名門軍部貴族たちの派閥抗争を抑えられなかった。結果として長年の友人であるケルトリング軍務尚書の次男を戦死させる事となる。これによりケルトリング伯爵家の直系は途絶えた。

アッシュビーを破る事を本懐とし、平民出身のコーゼルを相手に、本心を吐露するなど、政治的な能力は低い、司令長官としては、器も人物眼もある人物。第二次ティアマト会戦は司令長官として参加した。

ブルースの薄氷を踏むような作戦の前に帝国軍は包囲殲滅され、彼も戦死した。宇宙艦隊司令長官の戦死という前例のない事態に、帝国軍だけでなく帝国政府も攻勢を断念する方向に動くことになる。

ハウザー・フォン・シユタイエルマルク

少壮の戦術家で、巧緻な用兵家、また風格ある武人として後世まで名をなす名将。貴族出身だが、その才覚や人柄は貴族嫌いのコーゼルからも高く評価される。貴族出身ながら、選民主義に陥らず、実主義に基づいた任用を訴えていた。

原作で言うヤンの様なポジション。優秀で先も見えているが、上層部の大多数は貴族の為、主流派にはなれずにいる。第二次ティアマト会戦ではブルースの起死回生の突撃をうまくいなし、友軍を最後まで援護するが、戦力の大部分が包囲された戦局を変える事は出来なかった。

#### コーゼル

幅の広い貫禄ある身体に豊かな茶色の髪、そしてするどく明るい褐色の目を持つ剛直な職業軍人であり、右手の甲には白いレーザーの傷跡が残っていた。貴族出身の高級士官がほぼすべてを占める当時の帝国軍にありながら、平民出身で大将、正規艦隊司令を勤める。名門軍部貴族中出身の軍務尚書や艦隊司令長官も彼の能力は内心認めていた。

ミヒヤールゼンの行動から不審を抱き、ドラゴニア会戦前に内心を吐露してきた司令長官の信頼に応える様に、自身が感じていた疑念を打ち明けた。第二次ティアマト会戦では戦艦のみで旗下を編成し、全軍の盾の様な役割を引きうけた。

最終局面では身を挺して司令長官の直卒部隊を掩護するも、3方向から攻撃を受けて旗艦に直撃を受け、その際に戦死した。彼が戦死した事により、統帥本部次長として組織の立て直しと情報漏洩の捜査という重要な役目が宙に浮くことになってしまう。

#### ウイルヘルム・フォン・ミュッケンベルガー

ケルトリング軍務尚書の甥。原作で宇宙艦隊司令長官として登場するグレゴール・フォン・ミュッケンベルガーの父親。能力的には軍人として素養を備えていたが、軍務尚書の息子の後任として正規艦隊司令になった事は、宇宙艦隊内部では情実人事と受け取られ、宇宙艦隊司令たちのスタンドプレーをむしろ煽る事に繋がった。

第二次ティアマト会戦の初期に斜線陣を組む同盟軍の時差攻撃に曝された直卒艦隊の援護をしようとした際に側面から集中砲火を浴び、戦死した。

#### ロイズ伯

選民思想の典型の様な皇族。軍事的素養は全くなく。ファイア

ザード会戦までの途上でも何かと身勝手な行動を行い、司令官であったケルトリング中將（軍務尚書の長男）の足を引っ張った。

帝国軍右翼を担ったが、ブルース主導の背面突撃に一蹴され、泣きながら命乞いをした。後に帝室の予算から身代金として100億帝国マルクが支払われ帰国するが、即自裁を命じられ、ロイズ伯爵家は取り潰しとなる。

皇帝は一罰百戒のつもりだったが、一部皇族と後ろ暗い所がある門閥貴族が動揺した事で、帝国の政情は不安定になった。生前だけでなく死後も帝国に悪影響を及ぼした人物。同盟にとってはある意味英雄。

#### ケルトリング兄弟

名門軍部貴族であるケルトリング伯爵家に生まれ、軍務尚書でもあった父から厳しく養育された。軍人としても水準以上の能力を持っていたが、兄は名ばかり少将達に足を引っ張られファイアザード会戦で戦死。弟は、統帥本部総長派に属した名門軍部貴族中心の出征に参加し、ドラゴニア会戦で戦死した。

#### ■ドラゴニア会戦組

#### ローエングラム伯

軍部貴族の中でも武門の家柄とされるローエングラム伯爵家の当主。帝国軍の派閥争いに関連して、統帥本部総長派に属し、宮廷工作・陛下への上申を行うなど主導的な役割を果たした。ただ、残念ながら軍人としての素養はそこまでなかった。

また優秀だった庶子の兄を妬んで冷遇した事で、その兄がミヒャールゼンの同志となり、彼の足元に罠をめぐらす事となる。結果として油断した彼が率いた出征軍はドラゴニア会戦で包囲殲滅され、彼自身も戦死した。

#### エーレンベルク中將

侯爵家の3男。名門軍部貴族出身で、正規艦隊司令。ドラゴニア会戦では速戦を主張し、同盟軍の罠にはまる結果となる。挟撃成功後は同盟軍の増援3個艦隊の突撃を受け、旗下戦力は壊滅的な打撃を受けた。包囲殲滅の過程で戦死。

フォーゲル中将

伯爵家次男。名門軍部貴族で正規艦隊司令。ドラゴニア会戦では慎重論を唱えたケルトリングに対して速戦を主張した。最左翼を担当していた彼の艦隊は、同盟軍の機動斜線陣の前に猛撃を受け続け、予備戦力を援護に回されるほどの損害を会戦序盤で受けていた。

挟撃の際も、真つ先に突撃を受け、限界に近かった事もあり一瞬で崩壊した。真つ先に崩壊した事で、彼の旗下のごく一部が包囲される前に戦場から離脱出来たのは運命のいたずらだろうか。

クラーゼン中将

伯爵家次男。名門軍部貴族出身で正規艦隊指令。ドラゴニア会戦では慎重論を唱えたケルトリングに同調するも、勝利を標榜していたローエングラム伯は、進撃を決定。最右翼を担当していた彼は、ケルトリングと連携して包囲後も奮戦するが、それにも限界があり戦死した。

#### ■第二次ティアマト会戦組

シュリーター大将

コーゼル提督とタツグを組み、帝国軍左翼を担当した人物。初戦ではターナー・ベルティーン両提督の巧みな連携に翻弄されるが、会戦中盤にコーゼル艦隊と連携し、730年マファイアの最初の戦死者としてベルティーンを討ち取った。

会戦終盤に直卒艦隊の援護に向かうコーゼル艦隊の穴を埋めるべく、半包囲される事を覚悟して渦中に飛び込んだ。アッシュビー率いる別動隊により帝国軍右翼は粉碎され、包囲されたあとも奮戦するが及ばず。戦死した。

インゴルシュタット中将

旗下の艦隊は旧式艦で編成されており、敵戦力を引き付ける目的で動員された。当初は目的通りジャスパーク率いる第4艦隊を引き付け、非戦力化に成功する。会戦中盤に当初予定されていた迂回進撃案を司令部が採用した事で、帝国軍最右翼に配置され、戦列を担った。

迂回進撃は成功するかに見えたが、アッシュビーの別動隊の突撃により帝国軍別動隊は崩壊。その勢いで側背面攻撃を受けたインゴル

シュタット艦隊は、編成が旧式艦だったこともあり30分で壊滅した。

カイト中将

会戦初期はシュタイエルマルク艦隊と連動して帝国軍右翼を担当。その後旗下の艦隊が最新鋭艦で編成されていた事もあり、当初案の迂回進撃を担当する別動隊に加えられた。

会戦初期に戦死したミュッケンベルガー艦隊を含めた彼の別動隊は、応対してきたコープ率いる第11艦隊を相手に優勢を維持し、挟撃は成功しかけた。だが、それはアツシユビーの作戦であり、第11艦隊に誘い込まれた別動隊は、アツシユビー率いる同盟軍の別動隊に側背面から突撃を受け、崩壊した。

カルテンボルン中将

会戦初期はシュタイエルマルク艦隊と連動して帝国軍右翼を担当。最終局面でも直卒艦隊の右翼を担っていた。インゴルシュタット艦隊の想定以上に早い崩壊と、右舷に遊弋していたシュタイエルマルク艦隊がいなす様に後退したため、アツシユビー率いる同盟軍別動隊の突撃を側面からもろに受ける事になる。コーゼル艦隊が来援する時間を何とか稼ぐが、奮戦むなしく戦死した。

〔730年マファイア〕

ブルース・アツシユビー

少尉の身である無名時代から大佐より偉そうに見えたという逸話が残る。正にこの時代の同盟版ラインハルト。必ずしもうまくいっていないかったアデレードとは離婚し、母の秘書のひとりルシンダと再婚した。再婚後は2児に恵まれ、母親のナタリーが数十年ぶりに教育ママとしての一面を発揮していた。

第二次ティアマト会戦では、ジークマイスター分室から事前に受けていた帝国軍の動向を元に、薄氷を踏むような作戦案を敢行。一步間違えば同盟軍の全面崩壊を招きかねない状況から逆包围を完成させ、40分間の戦闘で宇宙艦隊司令長官を始めとした70名近い帝国軍将官を戦死させる功績を上げた。この損害は帝国では『軍務省の涙す

べき40分』と呼ばれ、同盟への攻勢を断念させる事となる。

本人は戦局が決定的になり、降伏勧告を始めた際に旗艦に命中した流れ弾による爆発で腹部を貫かれ、出血性のショックで戦死する事となった。その輝かしい武勲と、あまりにも早い死に『アツシユビー提督が生きていたら？』と言う想いを後世まで語られる事にもなった。五章終了時は元帥、宇宙艦隊司令長官。

アルフレッド・ローザス

沈着で公正な良識人。優秀な同期達に称賛を感じつつも、劣等感を感じていたが、それを昇華し優秀な同期達の潤滑油足らんと志を立てた。幼馴染のカトリナ嬢と結婚していたが第二次ティアマト会戦の直前に急死した。本人も意外だったと語るほどこのことは精神的に彼を悩ませた。

当時司令長官だったブルースの慰留も固辞して半年間の休職に入るが、整理するには時間が必要で、精神的にも激務に身を置いた方が安定すると現役復帰した。そうして迎えた第二次ティアマト会戦ですぐ近くに乗り合わせていたブルースが戦死した事で、『自分が戦死していれば』という新たな十字架を背負う事になる。五章終了時は大将。宇宙艦隊総参謀長。

フレデリック・ジャスパール

とかく派手な用兵を好む亡命系原理派の雄、オルテンブルク侯爵家の庶子。彼自身は亡命してすら疑似的な貴族制を取る亡命系原理派に息苦しさを感じていた。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。ベストカップルにも選ばれている。

第二次ティアマト会戦では初戦は帝国軍の別動隊への牽制役を担当。その後、ミュッケンベルガー艦隊を撃滅したが損害が多かった第11艦隊に代わって同盟軍左翼を担当した。別動隊の攻勢から直卒艦隊を守ろうと艦列に割り込んだコーゼル艦隊に大攻勢をかけ、組織的な抵抗をさせなかった事も功績としてあげられる。ティアマト星系の帝国軍地上部隊への降伏勧告も彼が担当した。五章終了時は大将、第4艦隊司令官。

ウオリス・ウォーリック



常に容姿・言動がキザで芝居がかっており「男爵」と揶揄されたが、むしろ本人が気に入って自ら名乗るほどだった。バーラト系融和派の雄であるウォリック商会の直系の3男。カークの画策により、長年愛人関係だったカタリーナと結婚した。

第二次ティアマト会戦では同盟軍最左翼を担当。シユタイエルマルク艦隊と一進一退の攻防を繰り返した。第五章終了時は大将。宇宙艦隊副司令長官、第5艦隊司令官。

ヴィットリオ・デイ・ベルティーニ

ヘビー級ボクサーのような体躯に、無数の小さな戦傷にいろどられた赤銅色の顔と剛い頬髯という見た目。体躯は全く正反対の小柄な音大生と恋仲になり結婚した。将官になったのを機に、熱帯魚を飼う趣味を始めた。

第二次ティアマト会戦ではカークと共に右翼を担当。持ち味の破壊力のある攻勢でシユリター艦隊に損害を与えたが、攻勢を待ち構えていたコーゼルの堅陣に攻勢を止められ、逆撃を受けて戦死した。司令官の戦死を受けて後方で再編された旗下の第9艦隊残存兵力が別動隊の先陣となり、故人となった彼顔負けの突撃を敢行した事が最終的な同盟勝利の要因ともなっている。ブルースと共に国葬が営まれ、死後元帥号を贈られた。

ジョン・ドリンカー・コープ

ドリンカーというミドルネームだが酒は一滴も飲めず、勝利の祝杯もアップルジュースで済ました。バーラト系原理派出身でブルースとは幼馴染。ダンスパーティーで知り合った音大生と結婚。3児を授かっている。

第二次ティアマト会戦では左翼を担当。斜線陣による会敵タイミングのズレを活かし、直卒艦隊の援護をしようとしたミュッケンベルガー艦隊を少なくない損害を受けつつも撃破した。会戦後半では帝国軍別動隊の牽制を担当し、寡兵ながらブルース率いる別動隊の突撃に合わせて帝国軍別動隊を誘引した。

別動隊の突撃後は包囲から逃れたシユタイエルマルク艦隊を牽制

し、包囲網の維持に貢献した。戦史研究家の中にはブルースの突撃のタイミングを称えながらも、コープの帝国軍別動隊誘引を勝因に挙げる者も存在する。第五章終了時では大将、第11艦隊司令。

ファン・チューリン

この時代では数少ない地方星系出身の士官学校卒業生。人間関係の構築を苦手としていたが、僚友達の影響もかなり改善された。ダンスパートナーとなったファネッサと結婚し、3児を授かる。

第二次ティアマト会戦では当初は同盟軍左翼を担当。ヴィットリ才率いる第9艦隊がコーゼルの策で大損害を受け、自身も戦死するにあたって、孤軍奮闘していたカーク率いる第13艦隊の援護に、旗下の分艦隊の半数を直卒艦隊に引き継いだ上で向かった。

合流後は第13艦隊も2個分艦隊を直卒艦隊に引き継いだ為、同盟軍右翼部隊は倍近い帝国軍を同盟別動隊の突撃まで抑えるという一歩間違えば戦線が崩壊するような作戦案を敢行した。

戦史研究家の中では、ブルースの突撃のタイミングの妙を称えながらも、第二次ティアマト会戦の勝因として、同盟軍右翼の決死の戦線維持を上げる者も存在する。第五章終了時は大将、ウルヴァシー駐留艦隊司令、第8艦隊司令、同盟軍最高幕僚会議常任委員。

【部下・同盟陣営登場人物】

エレン・バスケス

スパルタニアン乗りの中尉。撃墜数5機でエース資格持ち。カークが指揮した第111強行偵察大隊の数少ない女性士官。タイロンを弟分として可愛がると共に、理想的な上官のカークに密かに想いを寄せていた。

残念ながら彼女の想いは実ることなく、ハイネセンの試作部門のテストパイロットとして転出した。試作担当のヤマハ技研のエンジニアと結婚。

ハドソン

カークが指揮した第111偵察大隊の旗艦の機関長。ムードメーカーでもあり、部下たちに慕われている。従軍前はエンジニアもしていた。カークが昇進して半個分艦隊を指揮する事になった際、自ら売

り込んで旗艦である長門へ転出した。

アツテンボロー中将

ターナー旗下の第13艦隊の参謀長。孫娘たちとの時間を作るために退役するつもりだったが、フアンの転出に伴い、ご意見番的な参謀長を求めていたカークの三顧の礼により、退役を延期した人物。

歴戦の経験に基づいた進言は新進気鋭の集団である730年マフィアの面々にも一目置かれている。統合作戦本部次長職をカークが兼任してからは実務面で艦隊司令に近い事をしていった。孫娘のひとりはパトリックという男性と結婚し、3人の娘とひとりの息子に恵まれる。

アレクサンドル・ビュコック

出身地の惑星バラスの経済発展に伴い、家族の徴兵名簿順位を下げするために志願し辺境出身の若者。姉と結婚した元帝国軍捕虜のデニスの伝手で、ターナーの従卒となった。

初陣はドラゴニア会戦。メンテナンス部隊のオペレーターを見事に勤めた。書類仕事を経験する中で知識の必要性を感じ、コナー曹長の娘、サラと勉強する事となる。士官学校に入学し、ターナー家の面々やタイロンと接点を持ちながら軍人としての素養を磨いている。

サラ・コナー

ターナーの秘書官であるコナー曹長の娘。記念大の経済学部を目指していた。休日に一緒に勉強する様になったビュコックに思いを寄せる。志望していた記念大の経済学部のキャンパスが、士官学校と同じテルヌーゼンにある為、ビュコックが士官学校を志望する様に画策した。

ターナー邸に寄宿しながら記念大に通っている。主要な軍駐屯地には勤務地がある成長企業、ターナー商会に入社したいと考えている。理由の大半は意中のアレクについていけるから。

コナー曹長

ターナー旗下の第13艦隊司令部付きの秘書官。エルファシルが駐屯基地だった頃から事務関係を担っていたベテランの女性下士官。サラと言う娘がいる。ビュコックに思いを寄せた娘にアドバイスを

求められ、士官学校へ進ませる画策を勧めた。どちらかと言うと勤務中は言葉少なめなタイプ。機密に触れる事が多いターナーの状況を理解し、線引きした業務遂行が出来る人物。

アビー曹長

アツシユビー旗下の第2艦隊司令部付き秘書官。コナー軍曹同様、エルファシルが駐屯基地だった頃から事務を担当していた。明るく甲斐甲斐しい人柄だが、怒らせると怖い。

エスピノ曹長

ウォーリック旗下の第5艦隊司令部付き秘書官。コナー軍曹同様、エルファシルが駐屯基地だった頃からの事務を担当していた。コナー・アビー・エスピノの3軍曹の会議はエルファシルにある第3駐留基地ではかなりの権威を持ち、帝国3長官会議になぞらえて3軍曹会議などと呼ぶ者もいた。

最終章 日はまた昇る 宇宙暦745〜804年  
第98話 老提督との邂逅：旅立ち

宇宙暦788年 帝国暦479年 11月初頭

惑星テルヌーゼン ローザス邸

ヤン・ウエンリー（少佐）

「先輩、ご足労ありがとうございます」

「アッテンボロー。この度は何と言うか……。ご愁傷様です……」  
「止めてください。先輩にかしこまられると俺もむず痒くなりますから」

そんなやり取りをしながら芳名帳に記帳する。ローザス提督が急死されたのは私が話を伺ったその夜だった。急な事で驚いた。もつと話を聞いておくべきだったとも思ったし、提督を回想の世界に私が追いやった事で、こんな事になったのではと後悔と言うには少し複雑な感情を抱いた。

「軍部葬という事もあって軍からも人員は出ているんですが、孫の婚約者として出来る事はしてやりたいと思ひまして」

受付を終えた私を先導しながらアッテンボローはそう零した。幼い頃から提督の出版社に出入りしていた彼にとつて、実の祖父のような存在だった。いつもの不敵な斜に構えた様子も鳴りを潜めている。彼がここまで懐くという事はローザス提督はやはり良い方だったのだろう。もつと話を聞いておくべきだったという想いが強くなった。

「レイチエル、先輩が来てくださったぞ」

「レイチエル嬢、この度はご愁傷様です」

「ありがたいウエンリーさん。祖父も喜んでいると思うわ。貴方の事を気に入っていたみたいだから……」

「先輩、俺は雑用係なので失礼します。レイチエル、先輩の相手を頼む」

「おかしいでしょ。ダステイの奴だったら妙に張り切っているの。曾祖父の時は子供で何も出来なかったからその分もしつかり送り出すん

だつて……」

返事も聞かずに受付に戻って行くアツテンボローの背中に視線を向けながらレイチエルは苦笑しつつ話を切り出した。

「先に渡しておくわ。ダスティに預けるか迷ったけど、あいつは程度をしらないし祖父の関係した事では妙に張り切るから。ウエンリーさんならしつかり対応してくれるでしょ？」

「これは？」

ポーチから取り出されたヌメ革のバイブルサイズの手帳を受け取りながら確認する。

「祖父の日記帳と言うか、回顧録の草稿みたいなものね。出版されたのはこの内容をキレイに整えたものみたい。このまま世に出すのは悩む内容も書かれてるわ」

「私に預けて本当に良いのかい？」

「自慢じゃないけど私は祖父に判断を否定された事は一度もないの。それにブルースさんやカークさんの事を話せなかったことを気にしてもいたしね。貴方に預けるのが一番だと思う」

この場で内容を確認したい気持ちを抑えてアタツシユケースにしまい込む。香典は内ポケットに収まるから手ぶらで来るつもりだったが、官舎が隣のミンツ大尉のアドバイスに従って正解だった。彼は紅茶を淹れる達人で、息子のユリアンにもその技を伝えている。

練習相手として味を見る役得に預かっているが、私なんか足元にも及ばない腕前を6歳にして有している。ユリアンがカフェをオープンしたら毎日通うのだが、父親を始め軍人に接する機会が多い彼は、自然と軍人を志向しているようだ。

「内容を確認しても驚かないでね。正直、祖父がそんな事を考えていたなんて思わなかった。深夜にレポートに詰まって飲み物を取りに行くときにね、妙に怖い表情をして考え事をしている姿を見た事があるの。きつとあの時にその事を考えていたんだわ」

「……」

独白しているレイチエル嬢の話の内容についていけず、かといって遮るのも違う気がして私はいつもの癖で頭を掻いた。

「ごめんなさい。話が飛び過ぎたわね。祖父は第二次ティアマト会戦で自分が死ぬべきだったとずつと悩んでいたみたい。私の結婚式までは……。とも思っていたみたいだけど、数年前から回想の世界に浸る方が楽しくなっていたのは確かね。安心して、自殺じゃないわ。睡眠中の急性心筋梗塞だったみたい。だから祖父の死に責任を感じる必要は無いのよ？ ウェンリーさん」

一瞬中身を確認しようかとアツシユケースに視線が向くが、自制止で何とか堪えた。私の内心を見透かしたかのようにレイチエルは苦笑している。

「ブルースさんの事は今でも尊敬はしているつもり。祖父の栄達が彼のお陰だった事も確かに事実だわ。でも彼の死が祖父を含めた730年マファイアの面々に重たい十字架になっていたのかと思うと、なんだかやりきれないのも確かね」

提督ご自身は謙遜ではなく本心から自分の栄達はアツシユビー元帥の補佐役になれたことに因るとお考えだったのだろうか？ どんな天才も、それを翻訳し周囲との軋轢を和らげてくれる存在がいなければ夢想家で終わる。

ローザス提督を始め、元帥の天才性を認め、補佐した優秀な男たちの存在こそが重要だったと私は思う。そう言う意味では組織人としては欠けている部分があったアツシユビー元帥を組織内で力が発揮できるようにしたという点で、ローザス提督の功績は大きい。

「軍人に限らず、親しい人が亡くなると人は何かしら影響を受けます。その存在感が大きければ大きい程、影響も大きくなる。それ位しか私には言えません。……」

なぜか、叔父のような存在のヴェルナー提督の事が頭をよぎった。親友が結婚直後にイゼルローン回廊内部での遭遇戦で戦死した彼は、内縁関係が続けながらも入籍はしていない。

「レイチエル嬢、この度はご愁傷様でした。ウルヴァシーの英雄殿も元気そうだな。親父さんが気にしていたぞ」

思い浮かべた直後に聞きなれた声と共に肩を強く叩かれる。振り返ると父親譲りのエメラルドの瞳に母親譲りの金髪の男性がおも

ちやを見つけたような視線をこちらに向けてくる。

「ヴェルナーさん、遠路はるばるありがとうございます」

「気にするな。ローザス提督には父もだいぶ世話になったしな。本来ならビュコックの親父さんも来たがっていたんだが、方面軍司令が今任地を抜けるわけにもいかんのでな。俺が代理で来させてもらったんだ」

ヴェルナー提督は現在52歳。中將として第2艦隊司令の職に就いている。催し好きな彼はマファイアの会合にも良く参加していた。幼い頃に会合で面識を得て以来、何かと親しくしてくれるが、存在感が良くも悪くもある彼の傍にいと気後れする私には少し苦手な人物だ。

「キャゼルヌに調整期間を埋める任務を任せられたらしいな？そんな暇があるならうちの司令部に来ればよいんだ。もつともうちにはワイドボーンがいるからやりにくいかもしれないが……」

「あらあら。ヤン少佐は第5艦隊の司令部が先に目をつけているの。妙なスカウトはやめて頂けるかしら？」

「その声はイヴァンカに……。姉さん？なんで姉さんがイヴァンカと一緒にんだ？」

「当然じゃない。3人も子供を産ませておいて変なジnkクスを勝手に真に受けて入籍もしない。おまけにお母さまが何も言わないのを良い事に子育てを押し付けた馬鹿な弟と、軍務に精勤しながらもターナー邸に頻繁に顔をだして母親業もおろそかにしない義妹。どちらを応援するかなんて自明の理でしょうに」

ヴェルナー提督と内縁関係にあるイヴァンカ提督は今年45歳。3回の産休を挟みながら軍歴を重ね、一昨年、第5艦隊司令に任じられた。同盟軍初の女性艦隊司令の誕生は一時同盟の話題になった。

ヴェルナー提督のフォローをさせてもらうとしたら、彼女が正規艦隊司令を熱望していた事も入籍しない理由ではある。軍人同士の結婚はよくある話だが、両親が戦死する事の無いように基本的に妻を後方に配属する暗黙のルールが存在する。ヴェルナー提督と入籍すれば必然的に彼女の正規艦隊司令への道は閉ざされてしまうのも事実



だった。

「ウェンリー君もお元気そうね。ご活躍は耳にしているわ。貴方の旗艦の設計を今から発注しようかしら」

「ありがとうございます。ただ、私はまだ少佐です。それに将官になれるかもわかりませんから……」

イヴァンカ提督と一緒に現れたエリーゼさんは今年56歳。幼少の頃からターナー元帥の資産を一部運用し、兄のシュテファンさんがフライングボールのプロ選手になった影響で、スポーツディレクターのような事を始め、それが高じて自分のチームを所有するまでになった。正式な結婚はせず、愛人との間に4人の子供をもうけている。

一時期、ターナー邸にはシュテファンさんのご息も含め10人以上の子供たちが生活していた。クリステインさんは孫たちとの生活を楽しんでいたそうだが、保育園のような有様だったと聞いたことがある。

父さんが納税で軍に貢献したのに対して、エリーゼさんは納税だけでなく知己の将官が艦隊司令になった際に旗艦を贈るという祝い方をすることでも有名だ。幼少の頃から親しく接していたビュコック元帥のリオグランデを始め、マフィアを通じて知己のある提督方の旗艦はほとんど彼女の資金で建造された。

一部からは『軍内部の公平性』を問う声も上がっているが、豊富な予算で最新技術を詰め込んで作られた旗艦の存在は、結果として全軍の生還率向上にもつながり、肯定的な意見が大多数を占めていた。

「タイロンさんはいらしてないの？ミリタリーマニアも良いけど兵器開発には多額の資金が必要ですよ。あの人もまだ64歳でしょ？趣味に生きるのは早いのではないかしら？」

「はあ。父としては退役軍人会とマフィアの事務方の仕事がいぶ気に入っているようです。それに『今日から提督』のリーグ戦の運営にも関わっているようですし、楽しくやっているとるので投資の世界に戻るのには難しいかと……」

「楽しく過ごすのは良い事ね。本人に直接伝えようと思っていたんだけど、『今日から提督』のプロチーム。うちも設立しようと考えている

の。ウエンリー君はかなりの腕前なのよね？一度見に来てくれないかしら？」

「私で良ければ喜んで。もちろん任務に支障がない限りですが……」  
父がダメなら息子かあ。ただ、この人の頼みを私は断れない。投資業界で父さんとエリーゼさんはある意味伝説的な存在でライバル関係でもあった。生涯納税金額が当時の一個正規艦隊の整備費に達した時、父さんは突然ファンドを清算した。

残った資金の預け先にしたのが彼女のファンドだ。ヤン家の大黒柱が趣味に生きていても控えめに言って多額な収入があるのは彼女のお陰でもある。それに父親に負けずに恩に着せるのがうまい。

淑女然とした見た目に騙されて甘く見ると大変な事になる。ターナー邸にひと夏預けられたときに身近に接する機会が多かった私は、女性を敵にはいけないという事をこの2人から学んだ。

「レイチェルさん、セシリアさんには伝えたのだけどシユテファンさんは式には間に合わなそうなの。丁度リーグ戦でエコニアに行っていた所だね。選手で終われば自由になれたのに監督まで引き受けて。普段は出来るのに肝心な時に間の悪い兄をどうか許してね」  
「フェザン派が顔をだすとはどういうつもりだ！」

そんな会話をしていると受付のほうから聞き覚えのある声が聞こえ、何やら周囲がざわついている。

「ちよつと様子を見てきます」

「ウエンリーさん、私も行きます」

苦手な存在から逃げる様に受付に歩みを進める。それに続くレイチェル。近づくにつれ見覚えのある後ろ姿と正対する男性の姿が目に入る。

「どういう事だと言われても、ローザス提督の葬儀は軍部葬と聞ききました。国防委員の一人である私が参列するのは当然でしょう」

「同盟市民の生き血をすすめるだけでなくローザス提督の死まで利用するつもりか！それは許さんぞ！」

「いくら退役軍人会の主幹とは言え言ってよい事と悪い事があります。侮辱罪で告訴しますよ」

「父さん、落ち着いて」

「おお、ウエンリーか。これが落ち着いていられるか！フェザン派がしたり顔で参列しようとしとるんだぞ」

「トカゲのトリユーニヒト……。よくもまあ」

感情的になっている父さんの声の後に、レイチエルの冷えた声が小声にも関わらず耳に残った。帝国からの亡命者を亡命派と呼ぶのに対し、同盟の国力が明らかに帝国を上回った頃から増加したフェザンからの亡命者をフェザン派と呼んでいる。彼らの主張はフェザンを併合しての帝国との全面戦争だ。

同盟の人口は300億人を超えているが、帝国全体を飲み込む国力はまだない。ターナー財務委員長がぶち上げた『民主共和制の勝利条件論』は今でも盛んに議論されている。様々な経済学者が分析をしているが、どんなに生産性を高めても400億人を超えないと厳しいという意見が主流だ。

フェザン派の意見は完全併合ではなく戦争の勝利によって帝国に憲法を作らせ立憲君主制にするだけなら今の国力でも可能だというものだった。

「タイロンさんが声を荒げるなんて珍しいと思ってきたら、面の皮の厚さは銀河一のトリユーニヒトさんでしたか。貴方の面の皮の厚さなら戦艦のビーム砲も貫けないのじゃないかな？主張通り戦争がしたいなら、フェザン派で大隊なり連隊なりをつくって最前線の一部を担われてはいかがですか？」

騒然としかけた受付に別の声が響く。声の主は視線を向けるとオスヴァルト代議員だった。彼は今年48歳。父親と同じ財務委員会に所属し、数年以内に委員長職に就くと言われている。

記念大を卒業後、法曹界に進んだ彼は、弁護士として成功しその後政界に転身した。弁舌の鋭さで多くの支持を集めているが、その鋭さから敵も多いとされる。

「それは暴論でしょう。実際フェザンの経済力は現在でも魅力的です。彼らと協力できれば同盟の国力は更に高まるのは自明の理だ」「ここで政策論争をしますか？では確認しましょう。その経済力の根

幹は交易にありました。フェザーンの行いを正すために同盟は交易の停止と為替市場の停止を実施しました。交易の出来なくなつたフェザーンにどれだけの価値があるのでしょうか？外装だけは派手な中身のない宝石箱なのでは？」

「20億人の教育をうけた人材がフェザーンには存在する。彼らが帰化すればそれだけで国力が増強されるのは間違いない。その上で戦争に勝利し、帝国に憲法を作らせるのです。そうすれば……」

「なぜ完全併合を否定するんです？そうか！帝国が存続すれば交易が再び行われる。貴方方の得意分野が再び金になりますね。それにフェザーン派の票も20億増える訳だ。同盟市民の血と血税を使って自分たちの利権の復活をもくろむ訳ですね。さすがは面の皮の厚い貴方の政策論だ。それともオブラートに包んで言つても恥知らずのサンフォード党首の意見かな？ハイスクールの生徒でも分かりそうな事を無視されている」

『吸血鬼が！』

『戦争を煽るなら最前線で義務を果たしてみろ』

トリユーニヒト代議員の論説を鋭く叩き切つたオスヴァルト代議員に煽られるように場が騒然となり始めた。

「困つたわね。要は軍部葬だからトカゲさんは参列しようとするんですよ。ならこの式の費用は私が持つわ。公費でないなら貴方たちは尻尾を撒いて帰るんでしょう？」

「エリーゼ・ターナー……」

トカゲ……。じゃなくてトリユーニヒト代議員の視線の先には、エリーゼさんが楽し気な表情で優雅に佇んでいる。フェザーン派の対抗馬に惜しげもなく政治献金を公然と行う彼女は、フェザーン派からすればオスヴァルトさん同様、目の上のたん瘤だ。

「トリユーニヒト代議員、貴方の弔意は親族を代表して私が受けました。ですのでお引き取り頂けませんか？祖父を静かに送り出したいという孫娘の意向は尊重されるべきだと思いますが」

意を決した様に進み出てレイチエルが頭を下げる。それを見たトリユーニヒト代議員は、変わらず笑みを浮かべていたが額の汗を拭う

と、踵を返して立ち去って行った。

「あらあら、レイチエルに全部持つて行かれるなんてオスヴァルトも大したことないわね。献金を打ち切ろうかしら……」

「エリーゼ姉さん、それとこれは話が違うよ」

騒然としていた場の雰囲気は、ターナー姉弟のこのやり取りで一気にほぐれた。

「ヤン、なにやらあったようだが、大丈夫か？」

「キャゼル又先輩……。ええ。何と言うべきか……。姉は強し、

孫娘は強し……。と言った所でしようか？」

「お前さん、早く身を固めた方が良いな。一番大事な母は強しが抜けているぞ。オルタンスも母になってからだいぶ強くなった。おちおち昼寝もできないからな」

そんな会話をしながら式場にもどる。興奮して少し疲れた様子の父さんの背中をさすりながら、さすがにフアンドマネージャーが務まる体力は無さそうだと感じた。式自体は生前のローザス提督の手柄を表すかのように悲しみに包まれながらもどこかぬくもりを感じる物だった。

## 第99話 老大佐との邂逅：拝命

宇宙暦788年 帝国暦479年 12月初頭

統合作戦本部ビル 後方勤務本部

ヤン・ウエンリー（少佐）

「少佐、お茶をどうぞ。ユリアンも少佐にご賞味いただけのおかげでまた腕を上げました。ご迷惑でなければ、またお邪魔させていただきます」

「ミンツ大尉。貴官のお茶は芸術品だから気の進まない話も前向きに聞けそうだよ。うん。香りも素晴らしいね。」

「折角の紅茶を冷ましてしまうのも勿体ない。大尉、ありがたく頂くよ。それにしてもヤンの家に息子を出入りさせるなんて教育上宜しくないんじゃないか？お前さん、家事全般が苦手だろうに？」

「問題ありませんよ。食事はほとんど外食ですし、洗濯はクリーニングで済ませてます。キッチンやダイニングはほとんど使ってませんからね。ユリアンが使ってくれないと、私の官舎は書斎と寝室以外は無駄になりますから」

ヤン家の収入が多めなこともあって、小さい頃から美食と言われるものにも多少は触れて来た。でも自分だけの為にそこにこだわるほど私は食通という訳でもない。軍関係の企業が売り出しているワンプレートの冷凍食品で十分だ。

そうでなくても食事情を心配した両親が食品や各種優待券を送り付けてくる。最近のお気に入りはウーラント商会の生ハムでチューリンのカマンベールチーズを包んで食べる逸品だ。切るだけで済むし、必要な分に調整もできる。

「それと、あまり気を使わないで頂ければ……。紅茶のお礼と言うにはだいたい高価なものを頂いているようですし……」

「すべて頂き物ですからあまり気にしないでください。冷蔵庫にいたまま痛めてしまうよりは、大尉のお宅で美味しく食べてもらった方が食材も幸せでしょうから」

「そうですか……。ではありがたく頂戴します」

そう言つて、大尉は先輩のオフィスを辞していった。マイペースで運動神経も良くなかつた私が軍人になつた事を今でも心配している両親は、食材も大量に送つてくる。単身者で官舎にいる事も少ない私の代わりに受け取ってくれるのが隣のミンツ家だ。

そして私の帰宅に合わせてユリアンが運んでくれる。そのお礼に私は届いた食材をユリアンに渡し、ユリアンはお礼にと紅茶を淹れてくれる。取引としては上々だろう。

「まあ、お前さんの家に年少者が出入りするのには良い事なんだろうな。身なりに無頓着で家事に疎いお前さんの家が、なんとか見れるレベルになつているのはそういう事なんだろう？」

「それは否定しません。苦手な事に時間を割くのは無駄ですし、軍ではそれを補つてくれる人材に任せてしまうという考えなのは変りませんが、初等学校に通い始めた少年に掃除を押し付けるほど私は矜持がない訳ではありませんから……」

そんな話をしながら大尉の紅茶を楽しむ。シロン産の紅茶の良さを最大限に引き出したような一杯。歴史学者志望だつた私にとって、ローザス提督との会談を始め、アツシユビー元帥の謀殺説の調査は楽しい任務だつた。その樂園から追放される事が分かっているから、いつも以上に紅茶に癒される気がする。

「まず、ローザス提督の草稿というか。手帳の件だ。内容を確認したお前さんは分かっていると思うが、旧ジークマイスター分室はローザス提督が監督を受け継ぎ、非公式に情報収集を担当していた。ターナー元帥が亡くなつた一昨年に解室したが、その時に実務面を取り仕切っていたバクダツシユ大尉にあの手帳は預ける事になつた。現在は防諜課に在籍しているが、当時の工作員を引き継いでいるのもあつてな。当然だが、あの内容は機密扱いになる」

「分かりました。私も他言するつもりはありません。それに今の同盟市民にあの内容を冷静に受け止める余裕はないでしょう。ローザス提督も公開されるにしてもそれに相応しい時期を選んでほしいと思います」

「うん。言うまでもないとは思つたが、念を押さされていてな。ベテラ

ンの工作人員の中にはまだ730年マフィアの面々から直接指示を受けた事を誇りにしている人員も多いそうだ。公開のタイミングを間違えば彼らが暴走しかねないともボヤいていたな」

「そこまでですか？ 死後も接した人間に強い影響を残す。それだけでも彼らは確かに英雄だったんですね」

「だいぶ気前が良かったようだな。それに自分たちが集めた情報をちゃんと活かして結果を出してもくれた。工作人員としてこんなに嬉しい事はないとバクダッシュ大尉も苦笑していたな。ターナー元帥も関係していたと思うが、解室にあたって保有されていた資産が一度統合作戦本部付きになったんだが、分室で抱えるにはあまりにも巨額だった。額が多すぎてどう処理するか担当者は顔を青くしていたよ」

「おそらくジークマイスター室長の手配でしょう。彼は帝国では爵位を持ち、正規艦隊司令で大将でした。自由に使える予算に困った事は無いと思います。ですが統合作戦本部の特命分室の室長ではそうはならない。『蝙蝠相場』で上げた収益をその後も運用し続け、それを活動費にしていたんでしょう。」

そして任官直後にそれを見て育った730年マフィアは、同じことを表立って大々的に行なった。辺境出身のターナー・ファン両元帥がいた事もあるでしょうが、金を使うだけじゃなく収益が生まれる様に心掛けた。軍人と言う物は予算を欲しがるだけの傾向が強いんですが、謎がひとつ解けた気がします」

「そして優秀な軍人の基準にもなったわけだ。後を継いだ後進達への採点が辛くなるわけだな。もつとも本人たちはそれを理解していたからうまく配慮してくれていたらしい。正規艦隊司令を拝命したシトレ閣下なんて予算折衝でだいぶ細かい指摘をされて苦笑していたらしいからな」

大柄ながら笑みを絶やさないシトレ校長は、その外見に反して正統派の策略も好まれる。私の場合は配慮と言う形で恩恵を受けたが、校長が苦笑するほど苦労したとなると、妙な嬉しさがこみあげてくるから不思議だ。

「話が飛んでしまったな。ここからが本題だ。お前さんの次の任務だ



が、タナトス星系の星系警備隊の参事官だ。前任者が地上戦畑でな。フェザーン侵攻作戦に召集された。その後任と言うことになる。警備隊の司令部はエコニアだ」

「エコニアですか……。また意味深な任地だと勘繰るのは私が素直じゃないからでしょうか？」

「この場合はお前さんが正しいな。少なくとも第2、第5、そしてシトレ閣下の第7艦隊から司令部付き参謀としての打診があったのは事実だ。だがなヤン。お前さんにとってこの任務はある意味厄介事かもしれないな」

「正規艦隊司令部の参謀は忙しいですからね。私には星系警備隊の参事官の方がありがたいですが……」

「まあ、安全だと思われていたウルヴァシーであんな事になったからな。お前さんの父上と副司令長官は親しい仲だ。ほっておくと危ない目にあいそうだからそれなら自分の手元にとあのお三方は考えたのかもしれない。だが、フェザーン侵攻作戦は既に動き出している。今から門外漢が異動しても貢献は難しいだろうな」

「星系警備隊の参事官の方がよっかいと言うのはどういう事ですか？」

「うん。再確認の意味も含めるが、エコニアを始め、過去に辺境星域と言われていた地域には捕虜から帰化した市民が多数住んでいる。亡命派の惑星が帝国の貴族風な地域なのに対して、旧辺境星域は帝国平民風の地域なんだ。そこにお前さんを行かせるという言う事は……」

「参ったなあ。私は出来れば穏便に読書が出来ればそれで充分なんです」

「帝国の平民の価値観を知ったうえで宇宙艦隊に戻り、対帝国臣民対策の参謀辺りにしようというのが上の判断かもしれないな。それと先方のご指名があつたのも事実だ」

「エコニアに知り合いはいないはずですが……」

「タナトス星系の自治体の補佐役がお前さんを指名したらしい。第二次ティアマト会戦で捕虜になったらしいが、もともと内務省の地方自治局のエリートでな。それを知った星系自治体が何かと相談を持ち

込むようになり、捕虜収容所の名誉所長と兼任で今では名士の一人だ。

彼の事業計画を俺も確認したが、人物は帝国にもいると思う出来だった。それに財務委員長時代のターナー元帥と頻繁にやり取りをしていてな。軍内部の方々にもなにかと彼に借りがある人物が多いんだ。実際方々から確認が入ったからな」

「はあ。私は将官たちの借りの代償と言う訳ですか……」

「まあ、人事なんてこんなものだ。それに帝国亭も出店しているからな。ウルヴァシー以外の店舗の味を確認できると思えば悪くは無いただろう」

「分かりました。それで手を打ちましょう。エコニアへはいつまでに赴任すれば？」

「年明け、2月頭からだな。年末年始はちゃんと実家にもどって、家族孝行をするようにな」

ローザス提督の軍部葬で気落ちしていた父さんと、『ジークマイスター』を飲むのも良いかもしれない。妹のチェンシーは紅茶を淹れる練習をしていると手紙に書いていたし、弟のウーフエイも進路を決める時期だ。

頼りないとは言え兄の私が帰省するタイミングとしては良い時期なのかもしれない。空になったティーカップを横目に、私はそんな事を考えていた。

## 第100話 老大佐との邂逅：出会い

宇宙暦789年 帝国暦480年 2月初頭

惑星エコニア 宇宙港第2ターミナル

ワルター・フォン・シェーンコップ（少佐）

「それにしても自らお出迎えなさる必要があったのですか？ウルヴァシーの英雄とは言え、まだ任官して3年目の若者でしょうに。大佐の御歳で腰が軽いのは結構ですが、些か軽すぎる気も致しますな」

「ワルター。別にお前さんについてこいとは言わなんだろう？彼の父君にはエコニアにも多額の投資をしてもらっている。それにお前さんが起案した『薔薇の騎士大隊』の設立にも何かと協力もし、寄付もしてくれた。そして何より恩人が孫の様に可愛がった人物だ。自身で出迎えるのがむしろ礼儀というものだよ」

「またターナー財務委員長ですな。大佐のターナー好きはよく存じておりますが、ここまでくると筋金入りですな」

「ワルター。お前さんも名前だけとは言え騎士爵をもつのだからこれだけは覚えておけ。貸しは忘れても借りは忘れてはならん。亡命子弟たちが同盟市民と変わらぬ教育を受けられたのは、彼とファン元帥がなにかと地方星系の事を気にかけて、開発事業を後押ししてくれたり、個人的に育英基金を設立してくれたおかげでもある。まあ半分は彼の生まれ故郷の発展ぶりを、孫同様の存在だったヤン少佐に観てもraithたいという気持ちもあって指名までしたのだ。それも含めれば当然の事だ」

やれやれ、幼い頃から何かとこの爺様には世話になった。貴族同士の利権争いに敗れ、共和主義者のレットルを張られて祖父母が俺を連れて同盟に亡命したのが19年前。

騎士爵は持っていたが宮内省の役人しかしたことのない祖父が、なんとか自治組織の経理職に就けたのも、祖母がマナー講師の真似事で収入を得られたのも、エコニアが経済成長を続けていたからこそだ。そう言う意味では中央政府と太いパイプをいつの間にか作り、様々な開発事業の予算をもぎ取った目の前の大佐にこそ、俺は多大な恩があ

るんだが……。

「ターナー家の方でももてなしの準備をしているそうだ。人となりを聞く限り、そこまで社交性がある訳でもなさそうだが、お前さんの我儘でこんな時期に後任を押し付けるのだ。場繋ぎも含めてしっかりと引き継ぎを行うようにな。もう決まった事だから何も言いたくないが、カリンもまだ5歳だ。フェザーン侵攻作戦に志願する必要などあるまいに……」

「引き継いでの件は謹んで承ります。お言葉ですが、カリンも物心がつきはじめまして。憧れの父親が後方でのんびりしていたら思春期に何を言われるかわかりませんからな。ローザも賛成してくれまして。それに我々新亡命派も税金だけでなく戦功をあげておかないと、後々面倒なことになりそうなのも事実ですから」

19年前に亡命手続きを対応してくれた高等弁務官府の職員は、親切な男性だった。同盟の状況を全く知らない祖父母に、転住先の検討にあたって国内の状況を分かりやすく説明してくれた。

先帝であるオトフリート5世の後継者を巡る兄弟争いは、結果として期待されていなかったために後援者が得られなかったフリードリッヒ4世が即位された。長男と末弟を担いだ400家近い門閥貴族が連座しておとり潰しになった。

極刑を免れた多くの関係者が亡命し同盟に流れこんだ。シロンを中心とした亡命派の惑星は経済的にも発展はしていたが、高位爵位持ちが多数流入した事で地方自治の体制に揺らぎが起きていた。

『今、亡命派に転入してもあまり良い顔はされなんでしょう。それよりも地方星系の方をお勧めします。捕虜から帰化された方々も活躍されていますし、実務経験がある方は一人でも欲しいはずです。それに帝国風の文化が根付いていますから、マナー講師としてのご婦人の教養も活かせると思いますよ』

金髪にエメラルドの瞳という特徴だけは覚えていたが、それがヴェルナー提督だと知るのは大分後の事になる。彼が率いる第2艦隊もフェザーン侵攻作戦に動員される予定だ。恩を返す意味でも参加したかったのが内心だった。

そう言う意味では俺も親ターナー派だ。大佐の事は笑えないな。中央政府が捕虜の帰化政策を推し進めた事もあり、持ち込んだ資産で開発を進めた亡命派と異なり、新亡命派は中央政府と二人三脚で開発を進めて来た。新参者でありながら中央との結びつきが深く、保守系政党の大票田なのが特徴だ。

ターナー元帥の生家であるターナー家は、今ではエコニア屈指の大農場を経営している。雇った労働者の状況に応じて勤務体系を調整したり、保育園と広々とした学習室を完備し、初等学校との直通バスまで用意して子育て支援に積極的な企業として有名で、エコニアの就職先ランキングでは、井上商会と毎年首位を争う企業でもある。彼の父親であるタイロン氏との関係も良好だし、その息子が赴任するとなればなにかと歓待したいのが本音だろう。

「こういう話ができる時間もあまりないでしょう。フェザン侵攻作戦後、政府はフェザン国民への対応をどうされると思いますか？」

「うむ。虐殺する訳にもいかんだろうが、自治領主府が行ったことへの責任が皆無と言う訳でもあるまい？亡命申請の停止解除を行えば保守系の票を失う事は分かっているはずだ。一応私見は伝手を使つて上申はしたがな」

「憂国党がなりふり構わずに国民を含めたフェザン併合を唱えていますか？」

「何が憂国党だ。あれがしている事は傾国か売国だ。交易の出来なくなったフェザンなど、防衛拠点としての価値しかない。20億人の国民も、そのほとんどが金融・交易で生計を立てている。」

彼らを受け入れれば同盟の金融業界が連中に乗っ取られかねんし、星間物流が整った同盟領内に商船乗りを億人単位で受け入れる余地はない。失業者をそんなに抱えれば財政の悪化は免れないからな。まあ、方々に手を打っているから、お前さんがフェザンで不本意な想いをするような事にはならんと思うがな」

きな臭くなってきたのはフェザン派とよばれる新しい派閥ができた事に端を発する。彼らの主張は同盟の国力が帝国を上回った今こそ、フェザンを併合してそのまま全面衝突を行うと言う物だ。

主張の威勢のよさから一部の支持を集めてはいるが、フェザーン經由の不明瞭な政治献金の流れ、党首と最近売り出し中の若手の徴兵逃れが暴露され、市民たちの支持は得られずにいる。新亡命派は手厚い対応を受けた事で軍への志願者も多い。だが、戦功をあげたと胸を張れる実績を作っておく必要性を、俺達の世代では感じていた。

「お前さん達を見ていると、愛国心と言う物は教育だけでなく、一定以上の生活水準と明るい未来が養うものだ実感するな。バーラト星系の市民がみたらさぞかし驚くだろう」

「そんなつもりはないのですが……」

軍人になったのは若年で安定した収入を得られる手段だった事が大きい。士官学校に合格はしたが、お迎えが近い祖父母から離れるのも気が引けた。今では直行便で一週間のウルヴァシーに士官学校が出来たが、当時はまだテルヌーゼンにしかなかったしな。

ただ、大佐の言ったことも一理あるのかもしれない。捕虜から帰化した市民の子弟が、本人の努力次第で名門とされる記念大や自治大、そして士官学校に入学できるのだ。帝国で言えば、平民の子供が貴族向けの名門校に通えるって所か？そんな事はあり得ないだろうし、今の恵まれた環境を守りたいからこそ、俺を含めて新亡命派の若者が志願している側面はあるかもしれないな。

「そろそろ予定時刻だな。ゲートに向かうとするか」

大佐のその言を受けて運転席から飛び出して後部座席のドアを開ける。スーツをキレイに着こなした杖を持つ大佐は、老俳優のような味のある雰囲気醸し出している。この杖はウォーリック元帥が使ったものと同じモデルで、膝が痛むようになったと聞きつけたターナー元帥から贈られたものだ。明言はしないが、いつも持ち歩いている辺り、お気に入りの品なのだろう。

高齢にもかかわらず背筋を伸ばしてスタスタとゲートに向かっていく大佐の後に続く。祖父もそうだったが、ご老人方はせっかちでない。まだ時間に余裕はあるし、上役を待たせたとヤン少佐も赴任早々気を使うだろうに……。10分ばかりゲート付近のロビーで待機すると、予定の便が到着したのだろう。ゲート付近に人混

みが出来始めた。

「ワルター、あの黒髪で長身の男性がお前さんの後任じゃ。声をかけてこい」

大佐の視線の先には、誰かを探すように視線を左右に向ける黒髪の青年の姿があった。指示にはすぐに従わないとまた小言を言われるからな。足早に黒髪の青年の元へ向かう。

「ヤン少佐ですな？お迎えに上がりました。シェーンコップ少佐です」

「ヤン・ウエンリーです。どうぞよろしく」

敬礼ではなくベレー帽をとりペコリと頭を下げるあたり、彼もウルヴァシーの空気に慣れた口らしい。それとも軍人志望ではもともと無かったのか？そう考えれば軍人にしては細い体格も何となく理解できる。

「ヤン少佐、我らの上役は大分せっかちでしてな。あちらでお待ちですのご同行頂けますかな？」

そう言つて大佐の方へ視線を向ける。彼も顔を知っていたのだろう、マイペースな印象の後任が慌てる様子に、悪いとは思ったが苦笑してしまった。上役との挨拶が終わると、エコニアに赴任した士官が行う最初の定例行事だ。郊外の小高い丘の上にある墓地へ向かう。

「コーゼル提督のお墓参りですか。それは光栄です。あの人の話でもよく出てきましたからね。平民でありながら初めて正規艦隊司令、大将まで昇進された方だと。彼がこちら側に生まれていれば、軍人なんて因果な商売に手をささずに済んだと何度か聞かされました」

「ヤン少佐は彼の事をあの人と呼ぶのだね？」

「そうですね……。言葉にするのは難しいのです。祖父のような存在ではありませんが、血縁関係はありません。過ごした時間は印象的でどれも記憶に残っているのです。ただ、人付き合いが苦手な私にとって、あの人はまぶしすぎたと言うか……」

「うん。ターナー元帥の評は色々聞いて来たが、『まぶしすぎる』か……。妙な納得感があるな。初めて面識を得たのはコーゼル提督のご遺体を冷凍カプセルに移す時だった。わざわざ元帥自ら手を

貸して下さった。

そして先ほど少佐が言ったような事を僕も聞かされた。本来なら上官の仇の一人だった訳で憎むべき存在なのだが、不思議とそんな感情は抱かなかつた。敵と見るにはまぶしすぎたのかもしれない」

後部座席の会話を聞きながら、車を墓地へと進める。俺が転入した頃はまだ導入されていなかったが、この数年でエコニアでも自動運転システムが完備された。ハンドルを握るのが好きな俺にとっては味気ない気もするが、これも経済発展の証なのだと思わず自分自身を納得させている。

墓地の駐車場に車を止め、石畳を歩いてコーゼル提督のお墓へ向かう。遠めにみえてきた提督のお墓には、たくさんの献花がすでに見て取れた。あるものは亡くした人の安眠を、ある人は子弟の成功を、ある人は夫や恋人の安全を願い、自家のお墓参りと一緒に提督の墓に献花する。

武人だったはずの提督からすれば、戦地での安全には多少の見識はあるだろうが、それ以外は門外漢だろう。恩人の恩人と言う妙な関係の提督が、あの世で困惑する様子が目に浮かび、俺は大佐に隠れて苦笑した。妻であるローザが娘のカリンをつれて、毎週祖父母の墓参りの後に、俺の無事を願って献花していた事を知るのは大分先の事になる。



## 第101話 老大佐との邂逅：心残り

宇宙暦789年 帝国暦480年 2月初頭

惑星エコニア 星系自治本部

ヤン・ウエンリー（少佐）

「改めてになりますが、星系警備本部参事官を拝命しました。ヤン・ウエンリーです。宜しく願います」

「ご丁寧なあいさつ痛み入る。クリストフ・フォン・ケーフェンヒラーだ。星系自治本部の補佐役に、名誉収容所所長と言う妙な役職を拝命しておる。もう知らぬ仲ではないのだ。そう堅くなる必要もあるまい。掛けてくれ」

知己を得たばかりの年長者に着席を促され、オフィスの一角に設えられたソファーに腰を下ろす。亡命系の製品とは一味違う趣があり、デザイン面では素朴な印象を受けたが座り心地は上々だ。

洗練されたデザインが特徴のバーラト系、貴族向けの為、本格派な亡命系とはまた違う趣も不思議な味がある。帝国平民風の独自文化が形成されつつあるという先輩の話を、肌で感じる思いがした。

「ヤン商会にお願いしている星間物流にこのソファーも便乗しているぞ。マフィアの面々の協力もあってな、最近の大企業では応接室を商談相手ごとに分ける流れが出来たそうだ。バーラト風、亡命風、そして新亡命風とな。売れ筋はもう少し細工を施したものだが、座り心地は変らんはずだ」

「造詣が深い訳ではないんですが、不思議な味がありますね。バーラト系のデザイン重視で色合いも鮮やかなど所は見るには良いですが常用するのは気が引けます。かと言って、亡命派の物は本格的過ぎて主人役にそれなりの貫禄を求める様に思います。それと比べると、落ち着きがありますしそこまで本格的でもない。丁度良い感じでしょうか？」

「うむ。表現にはまだまだ改善の余地がありそうだが、物を見る目は確かなようだ。経済成長は続いていたとは言え、帰化した捕虜たちには本格的な亡命派のソファーは高過ぎ、バーラト系のもはデザイ

ンの過ぎた。安価で落ち着けるものを……。と帰化した捕虜の中で家具職人だった者たちが声をかけあつて工房を立ち上げたのが20年前だ。

井上商会も出光商会も出資してくれたし、君の言うあの人も、もちろんタイロン氏も二つ返事で出資してくれた。帝国時代は何かと予算に泣かされた。それはこちらに来てからも変わらなかったが、幸運なことに話の分かる上司と、事業計画さえ精査してあれば気持ちよく出資してくれる友人に恵まれた。時には激論を交えた事もあつたが、今思えば捕虜という身分には勿体ない程、充実した日々だったな」

遠い目をしながら少し苦笑する大佐は、一見すればスーツを着こなし、年相応の貫禄も備え町の名士といった雰囲気も備えている。何度も帰化を促されながらそれを固辞し、困った地方自治体の懇願もあつて名誉収容所所長、大佐、星系自治体の補佐役という役目を押し付けられた。

固辞したのは亡くなられたコーゼル提督への義理立てなのか？ 男爵家嫡男としての責任からなのかは分からない。だが、本当に世捨て人になるには大佐も若かつただろう。それにやりがいのある仕事と言うのは不思議な魔力がある。帝国時代に予算を理由に却下されていた大佐のアイデアの多くが、同盟で予算がついて形になり、星系の発展に大きな貢献をした。

その結果、マフィアを始め、多くの事業家たちに名を知られる事になり、出資の仲介まで行うようになった。自分が介在する事で経済成長が促進され、その成果を日々目に出来る生活。本当なら帝国でそうありたかつたかもしれないが、それでも充実した日々だった事は確かだろう。

「捕虜に分不相応な官舎まで割り当てられたが、このオフィスは警備が付くのでな。私物なのだが個人的に貴重なものはここに置いている。何かと方々へ出向く機会も多くてな。一か月近く官舎を留守にすることも多かつた。今では配達先もこちらになっているほどだ。警備主任は黙認してくれてはいるがね」

「当然の事でしょう。長期間留守にするお部屋に置いておくには貴重

な書籍が多数あります。帝国の物もあるようですし、私の様な歴史に興味がある人間には、このオフィスは宝の山ですから」

「うむ。出光商会やヤン商会はフェザンとの伝手もあったのでな。書籍の取り寄せに骨を折ってもらったものだ。あんなことがあってフェザンとの交易は停止してしまっただが、それだけに貴重なものも多い。私の身に何かあった時は、星系図書館に寄贈する手筈になっている。貴重なものは司書たちが分類して、評議会図書館に移してくれるだろう」

士官学校時代に戦史研究科の廃止に伴い関連書籍の移設先の目録作成を名目に書籍を読み漁った私からすれば、帝国の書籍の希少価値は一目瞭然だ。あちら側の公式見解や価値観を知る意味でも、書籍によつては貴重な一言では表せない価値がある物も、数点見受けられた。

「ローザス提督の回顧録ですが……。私も何回も読ませていただきました」

「知己があつたのでな。事前に予約させてもらったし、本人のサイン入りの初版ものだ。著者はサインなどいやがったそうだが、ターナー元帥に押し切られたらしくてな。初版の予約分のみ彼の直筆サインが入っている。彼の死は私にとつても急な事で驚いた。弔問に訪れるのは少し違う気がしたので弔電を送らせてもらったが……」

「亡くなる直前にお話を聞く機会があつたのです。楽しみに僚友達の話を読ませてお元気そうでしたから、私も寝耳に水の話でした。話が広がりすぎてアツシユビー元帥とあの人の話を聞く前に仕切り直す事になり、それっきりでしたが……」

「ターナー元帥はともかく、アツシユビー元帥の事を語るには、ローザス提督も内心感じる所があつただろう。それは程度の差はあれ、生き残った730年マフィアの面々も同様だろうな。コーゼル提督に置いて行かれてしまった経験がそう思わせるのかもしれないが、アツシユビー元帥の生涯は鮮烈で、その死は予想外で急すぎた。

ターナー元帥を始め、何人かとは実際に面識を得たが、国家の元勳と言つても良いような成果を出しながら、彼らは晩年まで謙虚さを忘

れず、誠意ある人物で在り続けた。大学で出会っていればそれこそ生涯の友となるような好漢ばかりだ。これはあくまで私見だが、コーゼル提督の死の影響で私が精勤した様に、彼の死がその後の生き方に何かしら影響したのだろうと思っている」

「私にはまだそう言う経験はありませんが、歴史的に見ても多くの英雄とされる人物が幼少期や青年期に親しい人を亡くし、その死が大きく影響する事例については理解しているつもりです」

「一番近い事例で言えば、ターナー元帥と君の祖父だろう。ウーラン卜家の令嬢と結婚した事もあつただろうが、彼が経済界を志したのは君の祖父の経済的な事情からの志願と戦死が大きい。任官してからも常に地方星系の経済成長を意識していたし、財務委員長になつてからは更にそれが顕著になつた。

二人で超光速通信越しにお茶を飲みながら苦笑したものだ。昔は経済的な事情で志願者が多かつた。経済成長が進むにつれ、その生活を守るために志願する者が増えた。軍人なんて因果な商売をなぜ志望するのかとボヤいていたな。

私もそれに加担した側だから一緒に苦笑するしかなかった。捕虜から帰化した者たちの生活向上が目的だったのだが、彼らの子弟は結果としてその恵まれた生活を守りたいと、志願する事が多かつたからな」

意外な事に、惑星エコニアを始め新亡命派とされる地域からの志願兵は多い。あの人が生まれた頃と異なるのは、建国以来名門校として君臨し続ける記念大・自治大、そして士官学校の入学者出身地比率位だ。

当時はほぼバーラト系独占だったが、今では3割を切っている。地方星系出身は軍だけでなく同盟全体を担う層になりつつある。面白いのは、志願者数も含め、地方星系出身者が愛国的で保守的な事だ。あの人がぶち上げた『民主共和制の勝利条件論』の信奉者も多い。

そして持ち込んだ資産で金融業界に一定の影響力を持つフェザーン派を同盟の血を啜る拝金主義者と毛嫌いし、バーラト系の革新派を理論だけの夢想家と一蹴するのが特徴だ。政治評論家の何人かは

バーラト系の保守派と区別して新保守派なんて呼んでいたりもする。「ターナー元帥とは色々な話をした。その中で一番記憶に残っているのが、私の関心事だった『ジークマイスター提督の亡命事件』と『ミヒャールゼン提督の暗殺事件』の事を尋ねた時の事だ。いつもはその場で是であれ非であれ即答する彼が、珍しく一週間待てと言ってきた。」

一週間後に、帰化した上で一日だけ軍に在籍した形にすれば機密アクセス権は何とかなりそうだと言われた。今思えば、夜な夜な一人で思考して積み重ねた仮説が採点されるのが怖かったのか？それとも長年帰化を固辞してきた意地もあったのか？私はその話を受けなかった。あれ以来、その話題は二度と出なかったな」

「では、あの投書の主は大佐であらせられたのでしょうか？」

「さてな……。だが、私ももうお迎えが近いのは自覚している。少なくとも何かしら自分なりの確証を得た上で旅立ちたいと思っているのは確かだが……」

こんな形で、730年マフィアとは別の形である人の盟友だった年長者との関係は始まった。引継ぎの兼ね合いでシェーンコップ少佐の官舎にもお邪魔し、ユリアン以上に年少の知己にも恵まれた。

週に何度か、帝国亭の『お子様ランチ』を報酬におませなレディーをエスコートしたり、様々な人物から帰化政策の歴史を生の声として聞く、帰化政策専攻の歴史研究家のような生活がスタートする。一年後に異動する事となり、小さなレディに泣かれて私は頭を掻くことしか出来なかった。

「小官の愛娘を泣かせるとは……。始めの印象とは違って、だいぶ罪作りな方でしたな」

フェザン進攻作戦で名を上げた薔薇の騎士大隊の副隊長となり、その後も何かと一緒に任務にあたる事になるシェーンコップ少佐に事あるごとにそう言われて苦笑する事になるのはもうしばらく先の話だ。

## 第102話 生還者の義務

宇宙暦759年 帝国暦450年 10月末

惑星オーデイン 軍務省施設局局长室

ハウザー・フォン・シユタイエルマルク（上級大将）

「忙しい所をわざわざ足を運んでもらって済まぬな。まあ、掛けてくれ」

「はっ」

リユーデリッツ伯に勧められるまま局长室に備えられたソファーに腰を下ろす。伯爵家当主でもある彼は本来なら予備役入りして領地の経営に専念できるはずだった。ただ彼が軍官僚として優秀だった事、そして何より第二次ティアマト会戦で宇宙艦隊司令部を中心に70名以上の将官が戦死した事が、彼の予備役入りを許さなかった。

中継ぎ色の強かった軍務尚書・統帥本部総長に加え、現役の宇宙艦隊司令長官の戦死。文字通り組織的には崩壊したと言っても過言ではない帝国軍の再建の事務系統を一手に引き受けてくれたのが私の対面で渋い表情をしている伯だった。

「現地調査の件、重ねてになるが感謝する。私は書類仕事には適性があるが、爵位の件もあって前線には出られなかった。階級だけが偉くなってから前線を視察するのもどうも気が引けてな」

「伯には宇宙艦隊の再建にあたって色々のご尽力を頂きました。小官で良ければこの程度の事などお気になさらずお声がけください。勅命に関わる事でもありません。念には念を入れたいお気持ちもよく理解できます」

「そう言ってもらえると助かる。観測データは既に確認したが、実際にその眼で見た卿の所見をしっかりと聞いておきたいとも思っていた。それに作戦家としての見立てもな。隕石群をイゼルローン回廊内に送り込んでいる事から見ても、叛徒達に攻勢の意欲はあるまい。だが、先帝陛下の事もあり、陛下が国防体制をしっかりと整えたいとお考えになるのも自然な事だ。命じられた以上、事情計画は作らねばならん」

「はい。イゼルローン回廊の狭隘部に人工天体クラスの宇宙要塞を建設し、国防の要とする。戦略的には正当な判断でしょう。後は事業として予算的に許容できるものなのか？そして戦術的に活用する為に建設以外に必要な手間……。」と言った所でしようか？」

「その通りだ。計画段階ではあるが直径60キロの人工天体ともなると建設期間だけでも5年はかかる。その期間の安全の確保、これは流入を続ける隕石群だけでなく叛徒達の攻撃からもな訳だが……。」

「観測されただけでも隕石群は300万を超えており、調査中にも流入は止まりませんでした。小さなものを含めれば無数としか言いようが無いでしょう。掃宙自体はそこまで困難ではありません。レーザー水爆ミサイルを撃ち込めば事足りる話です。ただし数が数です……。」

「地ならしだけで最低レーザー水爆ミサイルが300万発か……。」  
メーカーは嬉しい悲鳴を上げるだろうが、軍務省の予算局は悲鳴を上げるだろうな……。」

「もちろん中性子ビーム砲での破壊も想定しましたが、爆風が無ければ掃宙効率は大幅に低下します。それこそ戦艦で牽引して一つひとつ恒星に墮とすのと変わらないレベルになるでしょう」

レーザー水爆ミサイルは近距離戦では絶大な破壊力のある兵器だが、主兵装はあくまで中性子ビーム砲だ。最新の戦艦クラスはフル装填で20発のレーザー水爆ミサイルを備える事が出来るが、宇宙艦隊再建の為、艦政局に大きな予算を割いてきた帝国軍では、微々たる量しか配備されていない兵器だ。

「使用期限が切れている物をかき集めても足りんな。帝国がいずれ攻勢をかけるにしろ、叛徒達の攻勢を受け止めるにしろ必要なものだ。いつかは量産を再開せねばならんものだが、果たしてそれが今か……。」

「建設予定ポイントの掃宙だけならそうなります。ただ、戦術面で考えると掃宙の範囲を広げる必要が出てくるでしょう。要塞を建設しても近距離にアステロイドベルトがあるのは頂けません。」

言ってみれば見張り台の傍に木が生い茂っているような物です。

叛徒たちの接近に気づくのが遅れますし、建設ポイントの安全確保も難しいでしょう。哨戒と安全確保のために最低でも1個艦隊、出来れば2個艦隊は戦力を張り付けるべきかと」

「建設期間を考えれば交代が必要だな。そうなると交代と整備休暇で6個艦隊を動員することになるか……。卿にこんな質問を知るのは釈迦に説法かもしれんが、2個艦隊もの戦力が回廊内で遊弋すれば叛徒達に察知される危険も増すのではないか？」

「おっしゃる通りです。ですが、あちらも馬鹿ではありません。隕石群の現状把握の為に強行偵察艦が回廊内に入り込んでいる節があります。大量の隕石反応が消失すれば当然そこに着目するでしょう。そう言う意味でも建設予定ポイントから叛徒側出口に向けてそれなりの宙域の掃宙は必須です」

「うーむ。一戦は覚悟したうえで臨まねばならんか。建設途中の要塞本体は赤子の様に無防備だ。仮に2個艦隊以上の戦力を割いて来た場合、戦線を死守する事は可能なのか？」

「狭隘部での遅滞戦は可能ですが、絶対とは……。アムリツツアの補給基地に更に2個艦隊を用意し、補給の余地を作ればなんとかといえませんか」

「その案で進めると12個艦隊の動員になる。もうそうなると宇宙艦隊総出になるな……」

「もちろん就工まで発見されないという可能性もゼロではありません。ただ完全な運頼みになります」

「概算の段階でも天文学的な事業費が見込まれている。それに比べれば艦隊の常駐費などあってないようなものだ。あとは事故のリスクをどう見積もるかだな。ただでさえ宇宙空間での事業には困難が付きまとう。国防体制を固めるという意味ではクライングルト補給基地を大規模増設する方が安上がりだ。念のため、そちらも併せて上申する事にするか……」

方針が固まったのか？ ホツとした様子でコーヒーを啜るリュウデリツツ伯。初めて見た時は驚いたが、彼が軍務省で常飲しているのはコーゼル提督も好まれていた官給品のコーヒーだ。



『1帝国マルクでも節約して艦隊整備費用に回したい。こういうことは上が口で言うだけではダメなのだ。伯爵家の当主が門閥貴族達が泥水と揶揄するコーヒーを常飲する。そういう行動が部下たちに本気だと伝える手段でもあるのだ』

そう言われた時は、正直頭が下がる思いがした。本来なら局長ではなく、軍務尚書、もしくは次官に押されても良いはずだが、実戦経験がない事を理由に局長に留められている。

司令長官やコーゼル提督と共に70名近い将官を失った第二次ティアマト会戦からもう少しで15年。その間、イゼルローン回廊内部での偵察艦隊の遭遇戦以外は戦闘と言えるものは起こっていない。失った人材の穴埋めという側面はあったが、下級貴族や平民の登用も進んだ。往時の戦力を取り戻すにはまだまだ道半ばだが、ここまでこれたのは伯の尽力あつての事だと私は思っていた。

「それにしてもあれからもう8年か。軍上層部もつまらぬ噂など無視して卿を尚書職にしてくれば、私も安心して予備役入りできるのだが……」

「最後に面会したのは事実です。軍務省内部での暗殺事件でしかも未解決に終わりました。上層部としても判断に悩んでの結果でしょう」  
カップに残っていたコーヒーを飲み干し、事業計画案と代替案であるクラインゲルト補給基地の増設案が固まった時点で相談する事を約して局長室を後にした。秋晴れが続くこの時期の帝都にいと、胸の奥に刺さった棘がズキズキと痛みます。

8年前の10月29日、大規模な人事異動が発令された日にミヒヤールゼン男爵が軍務省内の参事官室で何者かに暗殺された。その日には軍務省内部を含め2万人近い帝国軍人の人事発令が行われた為、容疑者は広く見れば2万人。第一容疑者は最後に面会した私だが、想定に反して『受付をしてまで面会した軍部高官が暗殺犯な訳がない』という理由で、簡単な聞き取り調査を受けただけで容疑者からは外された。

「やはり正式な告発をすべきだったのではないだろうか？」

あれから何度も自分に問いかけたやり直す事も出来ない選択につ

いての悩みが口からこぼれた。

『まさか卿自身が来るとはな。アポイントの打診を受けた時から何となく察してはいた。コーゼルには感づかれていたようだな』

『なぜこのような事を？コーゼル提督が遺された資料を基に隠密に調査を進めてましたが確証は得られませんでした。限りなく貴方は黒ですが……』

『君が提唱していた実力主義による任用を実現する為だ。実際にあの  
大敗で70名近い将官が戦死した。コーゼルは生還すると思つてい  
たが、ほとんどの軍部系貴族は軍務に耐えられる状況では無くなつ  
た。実力ある下級貴族、平民が未来の帝国軍を担う存在になるだろ  
う』

『その為に友軍を生贄に捧げたと？いったいどれだけの犠牲が出た  
と』

『ファイアザードから数えれば13個艦隊だ。正規艦隊だけでな。だ  
が捕虜となった平民の多くは同盟に帰化して幸せに暮らしている。  
徴兵され、貴族達に下僕の様扱われ、帰省も碌に出来ない生活より  
よほど恵まれた環境だろう』

『それが免罪符になるとでも？友軍を背中から撃つような真似をして  
自己正当化はお止めください。大敗がきっかけで陛下も体調を崩さ  
れ崩御されました。帝国貴族としての義務はどうされたのです？』

『私の忠誠をあんな優柔不断な男に捧げたつもりはない。あれがした  
のは外聞を気にするあまり赤の他人に等しい皇族を帝国中にばらま  
き、混乱を促しただけではないか。』

私が忠誠をささげたのはマンフレート帝ただ一人だ。陛下の治世  
が続いていれば爵位と実力を切り分けた任用が、軍だけでなく帝国中  
で行われただろう。本来あるべき帝国の姿へ軌道修正した。私は自  
分のしたことをそう認識している』

堂々と持論を述べるミヒヤールゼン男爵には、事が明らかになった  
怯えのような物も、後ろめたさも微塵もなかった。備えられたソ  
ファーに腰かけたまま、持論が続けられる。

『もう帝国は貴族だけの持ち物ではなくなるだろう。軍と言うのは国

内最大の實力組織だ。その最大の組織内で下級貴族と平民の影響力が増す。そうなれば政府もそれを意識せざるを得ない。当然、門閥貴族も今のようにならば領民を虫けらのごとく扱えなくなるだろう。それを見た軍の反感を無視できなくなるのだからな。

爵位にあぐらをかいた連中の行状も四半世紀もすれば成り立たなくなる。それを守ろうとすれば帝国に叛旗を翻すしか道はない。ここに至って初めて實力主義による任用が帝国でなされるだろう。その為ならもう13個艦隊を犠牲にしてもお釣りがくると私は判断している』

そこで言葉を区切り、真つ白な磁器のティーカップを落ち着いた素振で口元に運ぶ男爵を見て、不思議とリユーデリッツ伯の事を思い浮かべた。貴族の間では泥水と呼ばれるコーヒを啜りながら宇宙艦隊の再建に尽力されていた。

伯爵家当主なら実績がなくても大将にはなれる。実戦経験なしで上級大将に昇進できたのは評価されての事だが、実戦経験がない事を理由に苦勞の多い仕事を押し付けられていたのも事実だ。

『後は、卿の覚悟を確認しておきたい。實力主義による任用が口だけの物でないかをな』

『どういう意味です?』

『既に私の中で事は成った。確証はないとの事だが、憲兵隊に告発するかね? そうなれば私は今の主張を供述することになる。当然、その供述書は政府上層部に報告されることになる。それを知った連中は何をやるだろう? その程度の事なら社交会を煩わしく思つて避けて来た卿にも想像がつくだろう』

そう言いながら私の右腰に吊ったブラスターに視線を向け、自分の腰を叩く男爵。それに操られるかのように私の右手がブラスターを引き抜き、男爵に狙いをつける。

『ここまで犠牲を払ったのだ。せめて實力主義による任用くらい実現しなければ卿とてコーゼルに合わせる顔があるまい』

そう言いながら頷く男爵の動きに合わせて右手の人差し指が引き金を引いた。ブラスターから進んでいく光線は男爵の胸中央に進ん

でいく。身動き一つしなかった男爵の胸にそのまま吸い込まれた。間違いなく心臓を貫いた。それだけが頭をよぎった。

『これで良いのだ。修羅となり帝国の行く末をしつかり見届ける事だ……』

それが男爵の最後の言葉だった。せめてもの礼儀だ。開いたままの瞳を閉じて、部屋を後にした、あの日も今日のような秋晴れの日だった。時間にして数分だったが、軍務省の廊下の窓から見える秋晴れに視線を向けながら、もう数えきれないほど繰り返してきたあの日の回想を、私はまた繰り返したのだった。

銀河帝国皇帝から見てもあまりに高額な事業費に、オトフリート三世陛下も眉を顰められ、国防体制は代案であったクラインゲルト補給基地の大規模増設案が採用されることになる。この一件は妙な形で尾を引く事となった。

後継者を巡って皇太子派と末弟派の争いが激化する中、旗色を鮮明にしないリューデリッツ伯に業を煮やした皇太子派が宇宙要塞費の見積もりを誇大に水増ししたと主張したのだ。一緒に自裁を命じられる覚悟で私も動いた事もあり、処分は保留されたがそれを恥としたリューデリッツ伯は自領で自裁されてしまう。

その直後に皇太子が大逆罪を企んだとされ処刑され、後援していた門閥貴族も問答無用でお取り潰しとなった。伯への訴えも讒言だったとされ、見舞金名目で多額の下賜金が授与されたが、帝国はまた一人人物を失った。

更にその数年後、今度は皇太子の大逆罪が末弟派の工作に因るものだったと露見し、宮廷はまたもやお取り潰しの嵐が吹き荒れることになる。その時には軍務次官の任についていたが、また一步、実力主義による任用が行なわれる帝国に近づいたと思っただけだった。

その事に気づいた私は、十分修羅に染まったものだど、泥水を啜りながら苦笑した。その日も不思議と帝都の空は秋晴れだった。

## 第103話 因果

宇宙暦788年 帝国暦479年 8月末

惑星ハイネセン バー：レガリス

バグダツシユ大尉

「またこの季節が来ちゃったな。そんな顔をしている辺りお前さんの胸のわだかまりはまだ解けてはいないようだな」

「親父さんも相変わらずだな。人の傷を抉るのが楽しそうだ」

「慰めの言葉を言えるようなまともな性格なら工作員なんて因果な商売をやる筈がねえだろう。それで？頼んだものは用意してくれたかい？」

「ああ。ここにまとめて入れてある。10月から導入される新式の偽造防止対策に対応した身分証だ。確認してほしい」

アタツシユケースを受け取り、中身を確認している老人を横目に、俺はロツクグラスを傾ける。キンキンに冷えた強いアルコールが喉を通り抜けていく感覚。熱いのか？冷たいのか？どちらともいえる不思議な感覚で一瞬現実を忘れる。あの日から確認はしていないが酒量が劇的に増えた。だが飲まずにはいられない。

帝国の電撃的なフェザーン進駐からの同盟領侵攻。ファン統合作戦本部長が遺した想定のひとつで、宇宙艦隊は事前に作成されていた対策案に基づいてこれに応じ、第二次ティアマト会戦以来の快挙、帝国軍宇宙艦隊司令長官であるグレゴール・ミュツケンベルガーを始め、7個艦隊を撃滅する大戦果を上げた。軍だけでなく市民たちも歓喜に湧く中で、俺はその輪に入れず、毎晩酒を煽る日々を過ごしている。

「バクダツシユ、俺なんかから説教されたくないと思うだろうがまあ聞けよ。この世界じゃ舐められたら終わりだ。だからやられたらキツチリはじめを付ける。それは軍でも同様だろ？酒なんか舐める程度にしておけよ。ぼやぼやしてたらはじめを付ける機会がなくなるぜ？」

こちらに視線を向けながらソルティドッグ風に見えるグレープフ

ルーツジュースを飲む親父さん。ひよんなことから適性を評価されローザス提督が統括されていた特命分室に任官されて以来の付き合いだ。

もつともこの世界にどつぷりの親父さん達からすれば、士官学校を出たばかりの俺など素人同然だった。良く言つて雑用係だったが、予算も豊富でスパイ小説さながらの日々に俺は夢中で食らいついた。そんな日々を過ごして数カ月。あの事件が起こった。

「スラム育ちで碌な学も無かった。あの方々との出会いが無ければ裏通りで野垂れ死んでいただろう。そんな俺に仕事をくれ、報酬も弾んでくれた。プロとして敬意を持って接してもらった。そのお陰もあつて家庭を持ち、子供たちはしつかり学を付けて表社会で敬意を持たれる仕事に就いた。

とても返しきれねえ恩だ。古参の連中は同じような経験をしている。死んで来いと言われたら喜んで死んだだろう。お前さんも自分で納得できるはじめを付けられるように祈つてるぜ。身分証もありがとうよ」

そう言つてグレープフルーツジュースを飲み干すと、親父さんはグラスの下に100ディナール紙幣を挟んでレガリスを後にした。それを見て思わず苦笑してしまふ。

親父さんはターナー元帥の信奉者のような所がある。いろんな逸話のある方だが、レガリスで支払う時は決まって100ディナール紙幣をグラスに挟んでいたらしい。どこからかそれを聞きつけた親父さんもいつからかそれに倣うようにしたと小耳に挟んだ。

「そうは言うけど、『もし』を考えずにはいられないよ。親父さん。俺が気づくのが1日、いや数時間早ければターナー元帥が死ぬことは無かった。ベッドに入るとあれから毎晩それが頭をよぎるんだ」

引退して念願だったビジネスの世界に戻り、隠居生活と言うには精力的な生活を始めたターナー元帥が暗殺されたのは2年前。捜査の結果、心臓発作で亡くなったウォーリック元帥、事故死したジャスパール・コープ両元帥、そして肺炎で亡くなったファン元帥にまで暗殺の可能性が出て来た。発覚のきっかけを掴んだ俺は昇進したが、それ

も喜べなかった。

そして分室の責任者だったローザス提督は、責任を取る形で辞任し分室の解室が決定された。情報部の防諜課に異動した俺は、工作人員とのつなぎ役を続けているが、予算の少ない情報部から出る雀の涙のような報酬で、この世界でも凄腕の親父さんのような連中が文句も言わずに動いてくれるのも恩人たちを守れなかった贖罪からだと思っっている。

「はじめか……。フェザーン侵攻作戦は粛々と動き出している。親父さん達の動きを活かす意味でも、俺がやさぐれている訳にもいかないか……」

被害者がある意味国家の元勳だった為に、捜査も苛烈を極め、最後の手段とされた自白剤の使用も許可された。確保した容疑者全員がフェザーンから帰化した経歴を持ち、一部は反社会的教団としてマークされていた地球教信者である事も判明したが、捜査が苛烈だったために証拠の信憑性にも疑問符が付いた。意味の分からないことを喚くだけ喚いて自殺した容疑者もいたほどだ。

「事実が明らかになれば、このわだかまりはすつきりするんだろうか？」

まだ中身の残ったロックグラスを脇に寄せてグレープフルーツジュースをオーダーする。それを飲み干すと、グラスに50デイナル紙幣を挟んで、俺もレガリスを後にする。国父ハイネセンの肖像が描かれた100デイナル紙幣ではなく、彼を支えたグエン・キム・ホアの肖像が描かれた50デイナル紙幣を選んだのは、表舞台には立たず、主戦力を支える情報部の役割とどこか似た彼の生涯に感じる所があったからだ。

この日から就寝前にグレープフルーツジュースを飲むのが俺の日課となる。フェザーン侵攻作戦が煮詰まっていくなかで、防諜課でありながら情報参謀付き補佐官として従軍を許可されたのはこの日の1年後のことになる。

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星ハイネセン 公安局 要人警護課

カスパー・リンツ少尉

「リンツ少尉、要人警護課としては君の経験を高く評価している。あの一件は不幸な出来事だった。だが、それを糧として貴官は要人警護課の設立メンバーとして尽力してくれた。私としてはこのまま要人警護課で能力を発揮してもらいたいのが本音なのだが……」

「課長、お言葉ありがとうございます。お許し頂けるなら、薔薇の騎士大隊への志願をお許し頂きたいのです。ターナー元帥を守れなかった事は、今でも胸のつかえになっています。フェザーン侵攻作戦に参加する事で自分なりのけじめを付けたい。お許し頂けないでしょうか？」

『作戦終了後に復帰の第一候補とする』事を条件に、渋る課長を説得して許可を貰えたのは10分ほどの再考を促す課長との攻防を経た後だった。帰化した捕虜の父親を持つ私は、辺境星域ではありふれた経歴を経た。

地元の初等学校に通い、ハイスクールには通わずに地元星系の軍専科学校を経て16歳で下士官待遇となった私は、ナイフを使った格闘術への特性を評価されて要人警護課の前身である警護課にスカウトされた。

『ハイネセンのもやしどもに新亡命派の意地を見せてこい！』

軍専科学校で良くして頂いたシェーンコップ先輩は、そう言って送り出してくれた。警護課で研修を終えて護衛の任に就いたのが6年前。私にとっては財務委員長と言うイメージが強いターナー元帥だった。

『政界を引退して隠居生活を始めた老人の警護に君のような前途ある若者を当てるとは人的資源の浪費だ』

そう言っつて警護を解こうとされた事には驚いたものの、引退したからこそターゲットとなる可能性が低いため、新人の経験を積む意味でも警護を継続させてほしいとの打診を受けると、元帥は渋々それを受け入れた。

『若者が汗をかいている前で食事を楽しめるほど俺は凶太くはないぞ



！』

孫のような年代の私を何かと氣遣つてくれ、食事にもよく同席させて頂いた。まだ成長期だった私にとって、食事つきの護衛任務は何かと嬉しい物だった。そして私の何でもない身の上話を喜んで聞いてくれた事も印象に残っている。

後から考えれば当然の事だったのかもしれない。地元の名士で私も世話になったケーフェンヒラー大佐と密に連絡を取り合い、開発事業費をもぎ取っていたのが元帥だったのだから。

『画家か……。良い夢じゃないか。軍人なんて因果な商売だ。政治家に比べたらマシだがね。ただ、こんなご時世じゃ食べていくのも大変だろう。商売として考えるなら肖像画だな。経済成長が続けば可処分所得も増える。そうなると写真じゃなくて肖像画を遺したいというニーズも生まれるんじゃないか？』

食っていけないと諦めた画家になる夢の事を零すと、元帥はむしろ応援してくれた。ひとり目の肖像画のモデルにも渋々ながらなって頂けた。それがきっかけでマフィアの関係者から打診が来るようになり、本業まではいかないが、副業として成立しだした頃、あの事件が起きた。

『全く、若い先短い老人の余生を2日も潰すとは……。老いては子に従えというが、現役の連中は余程暇なようだな。俺の健康状態なんかより気にすべき事は沢山あるだろうに……』

急遽健康診断の為の検査入院を依頼する打診が統合作戦本部から届いたのが数日前。本来予定されていた試飲会をキャンセルすることになった元帥は、珍しくボヤいていたのが記憶に残っている。

『お前さん、今日は大事な日じゃないか。老人の警護なんてしている場合じゃないだろう？これで花束でも買って、ちゃんと祝ってやりなさい。迎えは明日の昼過ぎで構わないから』

検査入院の日は、絵画教室で知り合い付き合っていた美大生の誕生日だった。何度も謝辞したがポチ袋を押し付けて譲らない元帥に押し切られる形で私は病室を後にした。

『元帥は……無事か？今すぐ警戒態勢を取ってくれ。増援も手配した』

当時のバクダッシュ少尉からそんな緊急連絡を受けたのは生花店で花束を買った時だった。買ったばかりの花束を投げ捨てて病室に急行したが、もう手遅れだった。

病室で待つていたのは事切れた元帥と右膝を撃ち抜かれ、あごを砕かれた年配の看護師だった。元帥は最後まで逃がすまいと抵抗されたのだろう。左手で看護師の右腕の掴んだままのお姿だった。

『相手は元帥達の暗殺の為に何十年も暗躍してきたんだ。半端な覚悟じゃねえ。お行儀よく取り調べなんて通用する相手じゃねえだろ？ 見ている気持ちの良い物でもない。お前さん達は少し休憩でもしてきたらどうだい？』

18時間の尋問に黙秘を貫いた暗殺犯。元帥に顎を砕かれた事で自決は出来なかったが、奥歯には青酸カリが仕込まれていた。どこからともなく現れた年配の男性が尋問官たちにそう言うのと、彼らは悔し気な表情をしながら取調室から出て行ったと聞いた。数時間後には数名の名前が浮かび上がり、翌日には全員が取り調べを受けていた。『隠居されてまで警護付きじゃ元帥も煩わしいだろうにと思っていたが、あんたの事は気に入っていたみたいだった。この件は報酬を貰いながら連中の存在に気づけなかった俺達の落ち度だ。責任なんて感じるんじゃねえぞ？ 半人前の護衛官ごときに責任を感じられたら、俺達の立つ瀬が無くなる』

護衛対象から押し切られたとは言え、持ち場を離れた私は処分の対象のはずだった。指示を確認する前に帰宅する訳にもゆかず、とは言えそんな事をしている余裕が上官にもない数日間。

雑用係のような形で捜査に参加していた私に、名も知らぬ年配の男性が声をかけて来た。彼が『親父さん』と呼ばれているベテラン工作員である事を、バクダッシュ少尉から後日聞かされた。

『数時間で良かった。早く作業に取りかかっていたらば……』

バクダッシュ少尉は悔し気にそう呟いていた。任官したばかりだった彼は親父さんを始めたとした業界の先輩たちに揉まれながら過去の資料を業務外の時間も使って読み込んでいた。

その中でウォーリック元帥とファン元帥が病死した時期に病院が

違うにも関わらず同じ看護師が担当していたという事実を掴んだ。そしてその看護師の現在の勤務先がターナー元帥の検査入院先である事も。

捜査の過程で明らかになった事だが、軍のデータベースセンターのメンテナンスを行っていた企業に潜り込んだ作業員が、指示の改ざんを行って実行犯のいる病院へターゲットを入院させる。

その上で、心臓発作を誘発させる薬や、免疫力を一時的に低下させることで肺炎を誘発させる薬を看護の合間に投与するというのが彼らの手口だった。数日後には軍関連の企業からフェザンからの亡命者が一斉解雇された。

そして一週間後に開催された臨時最高評議会でフェザン自治領への弾劾、正式な回答までの国境封鎖・交易停止。そして亡命者受け入れの永久停止が決議され、即日施行された。

『極端な思考の持ち主数名の行いをみて、フェザン派を貶める事には納得できない。軍の横暴をみても差別されているのは明確だ。このような事は民主共和制の精神にも、同盟憲章にも反するものだ！』  
フェザン派排除の流れに危機感を覚えた憂国党のサンフォード党首はそう訴えたが、この声明を切っ掛けにフェザン派への風当たりが一気に強くなった。

『嫌なら出ていけ！』

『同盟の努力に無料乗りする連中を許すな！』

そんなデモが各地で行われ、フェザン派資本商店への襲撃や企業製品への不買運動も巻き起こる。危機感を高めた憂国党幹事長のトリューニヒト代議員は帝国との全面戦争論やフェザン併合論を唱え、タカ派の取り込みを狙った。だが彼が徴兵免除申請を出していた事が明らかになると、批判の声は更に高まった。

亡命時に多額の資産を持ち込んでいたフェザン派は教育水準も高く、士官学校よりも自治大や記念大に進む傾向も強かった。それが悪い事だとは思わないが、軍内部で少数派にも関わらず全面戦争論を唱えるのには私も違和感を覚えた。

この動きを静かに見守っていた新亡命派は、志願者で構成する『薔

『薔の騎士大隊』の設立を宣言する。これによって新亡命派とフェザーン派の明暗は別れた。

もつとも暴動や略奪の際にそれを見て見ぬふりをした治安組織員も多く、フェザーン派からしても今更軍に志願した所で、不当な扱いを受けるだけという判断もあつたようだが……。

「元帥、軍人なんて本当に因果な商売です。ただ逃げるわけにもいきません。フェザーンに出征してもけじめが付くかはわかりません。貴方は志願なんかしやがってと仰るかもしれませんが……」

荷物の整理を終え、『薔の騎士大隊』の本部があるウルヴァシーに向かうシャトルの中で私は思わず呟いた。因果に飲み込まれてしまった以上、自分なりにあがいてみるしか選択肢はないのだから。

## 第104話 応報

宇宙暦788年 帝国暦479年 10月末

惑星ハイネセン メトロポリタンホテル 最上階

ジョアン・レベロ

「フェザーン侵攻作戦が差し迫って忙しいところ済まないな」

「構わんよ。昇進されて宇宙艦隊司令長官になったビュコック教官を始め、張り切っている人物が多いからな。旗下の艦隊戦力を整えておくだけなら通常の業務範囲だ。フェザーン侵攻自体も軍内部では長年議論されて来た事でもある。今更、私が口を挟む必要もないと判断している」

初等学校で席が隣同士になって以来友人関係を続けているシトレが、ロックグラスを傾けながら応じた。シトレは士官学校を経て軍へ、私は自治大を経て財務官僚の道へ進んだが、毎月とはいかないまでも四半期に一度、定期的にこうして2人で酒を飲む。後は慶事があつた時もある。シトレが正規艦隊司令になった時、そして私が代議員選に出馬して初当選を決めた時も、こうして酒を飲んだ。

「という訳だから、フェザーン侵攻作戦に私は深くは関与していない。敏腕財務委員の頼みでも、予算の削減には協力できないぞ？」

「そんな話をするつもりはない。同盟の財政はゆるぎない程健全だ。政府系のファンドは投資先に飢えている位だ。フェザーンとの交易停止を逆に好機と捉えて起業も増えている。出来の良すぎる子供が自立して進路も含めて自分で歩みを進めていくような状況だ。」

財務委員会としては悩みが無いのが悩みだな。しいて言うなら未だにターナー信者が多い事くらいか？即断即決で責任を取ってくれる上司に皆が慣れ過ぎた。彼を基準にしたら皆赤字だ」

38歳で軍を退役して政界に転出したターナー元帥は、地方星系の票を固めて歴代最多得票で当選を決めた。42歳で財務委員長に就任して以来、7期28年もその任に当たった。

『もう俺も70歳だ。いい加減余生は好きに生きたい。但し増税は許さんぞ！そんな噂を聞きつけたら怒鳴り込むからな』

冗談交じりにそう言い残して政界からは引退されたが、所有している各星系の蒸留所を見て回る傍ら、応援演説に担ぎ出されたりと現役時代と変わらぬ多忙な日々を過ごしていたと聞いている。

『俺がカーク・ターナーだ。知らない人間もいるかもしれないから名乗っておく。君たちは同盟中の秀才代表であり、財政金融の専門家だと認識している。私は素人だが、子供の頃から人並みに苦勞してきた。そこで学んだのは一緒に仕事をするにはお互いを知る事が大切だという事だ。』

我こそは！と思う者は誰でも委員長室に来てくれ。なんでも言ってくれ。上司の許可を得る必要はない。できる事は出来る。できない事はやらない。しかし全ての事はカーク・ターナーが背負う。以上』

今では伝説の様に語られる財務委員長就任時の挨拶だが、とは言え当初は手を上げる者は少なかった。彼が本気でそれを言っていた事を実感するのは、各地方星系から開発事業案が直接持ち込まれ始めた時だったと聞く。

『財務委員会は仕事を回すだけなら馬鹿でもできる。黙っていてもトップから指示が下りてくるからな。だからこそアンテナを張って視野を広く持て。仕事に追われるんじゃない、仕事を創る側になるんだ。そうしないとずっと下っ端のまま終わるぞ』

25年前に官僚として財務委員会に入庁した時、教育担当の先輩から真顔でそう言われた。脅し文句だと思っていたが、それが事実だと理解するのに数日もかからなかった。各所から持ち込まれる事業案の分析・評価・改善案の作成がひっきりなしに降りてくる。

それを捌くだけなら半人前。さらに自分なりに事業案を作成して予算が付けば一人前。激務の合間に睡眠時間を削って作った事業案を委員長室に提案しに行った時の緊張感は今でも忘れない。そして予算が付いた時の喜びも同様だ。

『君がレベロ君か。名前は覚えたぞ。それにしても良い職場を選んだね。君が汗をかいた分、同盟の経済成長が進むんだ。こんなにやりがいがある仕事は無いだろう？』

決裁書にサインをもらったときにそう言われてなぜだか分からないが涙がこぼれた。激務の嵐の中でなんとか結果を出そうと足掻いてはいたが、それが同盟全体を良くも悪くもできる重責を伴う事を失念していたからだ。

一人前と認められる結果を出した私からは変な焦りも消え、落ち着いて業務に取り組めるようになった。気づけば重責すら適度な緊張感となり仕事に好影響をもたらす形に昇華できるまでになっていた。「フェザーンの連中も馬鹿なことをしたものだ。彼らは同盟市民の祖父であり父だった。そんな存在に手を出して市民たちが泣き寝入りする訳がない。既に現役を引退して余生を楽しんでいるだけだった。何もせずとも20年もすれば永眠するだろうに」

「理想好みのレベロがそう言うとは思わなかったな。裏は取れていないが事の発端は『ハイネセンの嘆き事件』と『蝙蝠相場』、そしてあの時に同盟憲章に追記された税制面のあらゆる特例の禁止が原因のようだ。」

実行グループは全員がフェザーンから帰化した者だが地球教の信者でもあった。地球教の反社会組織認定も元をたどればあれがきっかけだ。地球教の狂信者をフェザーンが書類を用意して亡命者に紛れ込ませたと推定しているようだ。フェザーン侵攻作戦がうまくいけば、事の真相ももう少し明らかになるだろうが……」

「私は今でも理想は捨てていないぞ？だが、これだけの事をされてはな。同胞として迎え入れた人間が、実際はテロリストだった。そんな事が明らかになれば当然反動は起こる。対象となった連中は差別と言うかもしれないが、した側からすれば区別だ。私だってフェザーン派と食事を同席したいとは思わない。もつとも暗殺のターゲットになるほど要人だとも思っていないがね」

フェザーン派を代表する憂国党の対応も最悪だった。それを横目で見ていた新亡命派はしたたかに動いた。そのせいもあってフェザーン派への風当たりは強い。問題を起こしながら原則論で被害者になろうとした党首に、徴兵逃れをしながら主戦論を唱えた幹事長。

同期当選ながら面の皮の厚さに驚かされる事が多かったトリユー

ニヒトの取ってつけたような笑顔が頭をよぎった。派閥を代表する以上落選する事は無いだろうが、国防委員に留まり続けているあたりはもうあきれるばかりだ。代議員とはいえ徴兵逃れをした人間が軍人から敬意を持たれる事は無いだろうに。

「軍内部でのフェザン派への扱いはどうなっているんだ？あんな事があった以上、軍需関連企業からフェザン派の排除が行なわれるのは仕方がない。だが除隊を促すとなるとそれはそれでやり過ぎな感もあるが……」

「実際にフェザン派の軍人は数自体が少ない。フェザン派が入植した惑星の星系警備隊に集中して配属される事になるだろう。新亡命派の様に大隊設立申請も結局無かったしな。まあ、今更申請された所で全滅でもされたらそれこそ不当な扱いを受けたと騒ぐだろう。」

もつとも前線に出せない軍人などいくら政治的な背景があっても必要ない。士官学校では幸いな事に面接も試験項目だ。残念な事だがフェザン派の受験生は面接で落とされる事になるだろうな」

「残念な事だが、仕方ないとも思う。民主共和制の意思決定の根幹は多数派の意向だ。少数派の事情がすべて無視されるのは違う気もするが、その事情をくみ取り過ぎれば多数派から見れば逆差別に見えてしまう。もつとも常に多数派だった『バーラト系融和派』出身の私達がこんな話をするのも妙な話だが」

「レベロ、結局のところ人間は自分の経験から物事を判断して意思決定をする。官僚には官僚なりの、軍人には軍人なりの意思決定があるんだろうな。フェザン派も狂信者もそれは変らない。彼も言っていただろう？『一緒に仕事をするにはお互いを知る事が大切だ』と」

「そうだな。だが彼が言うから成立する要素もあるのだぞ。何かと存在感があり、接するだけで信者にしてしまうような人だった。財務委員会での日々は今思い出しても激務だったと思うが、油断したら置いていかれる勢いでバリバリ事業を進めるトップが目の前にいるんだ。何とか食らいっこうと皆とにかく必死だった。泣き言を言う暇すら惜しかった」

そんな官僚時代を13年過ごし、いくつかある局長職のひとつにお



さまった。事務次官を目指すつもりはなかったし、かといって業界団体に天下つて余生を過ごすには若すぎた。それに激務の日々に慣れた自分には物足りない世界だとも。

そんな時に故郷のテルヌーゼンで補欠選挙が行われることになり、立候補の話を受けた。私の中で財務委員長としてイメージできるのは彼だけだ。激務である事は間違いないが、同盟を良くも悪くもできる最高の職責。それを目指せるならやってみたいと考えて話を受けた。

『話は聞いたぞ。レベロには財務委員会を支えてもらいたかったが、君のような人材が財務委員になるなら、それも良いだろう。餞別だ。選挙に使って欲しい』

立候補することを報告しに委員長室に行くと、大き目の紙袋を渡された。固辞する私に

『君を金で買えるとは思っていない。だが選挙と言う物は何かと金がかかるものだ。もし余ったら、これから苦勞を掛ける奥方とディナーに行くようにな。これは君との縁を切らない為の物だ。俺の顔を最後に潰すな。なんとか納めてもらいたい』

そう言われて受け取った紙袋には30万ディナールが入っていた。官僚としてそれなりの収入を得ていた私にとっても少なくない金額だったが、結果として想定以上に膨らんだ選挙費用にこの時の金はほとんど消えてしまう。

当選を決めた後、残ったわずかな予算で行ける昔なじみの居酒屋で妻とささやかな祝勝会をしたのも、今となっては思い出深い。

党派は別れていたが、応援演説に駆け付けてくれ、その後も重要法案を提出する際は事前に相談される人物の一人として扱ってくれた。そのお陰もあって新人議員の時から政界でも一目置かれるようになり、若手の代表格として扱われ、仕事も進めやすかった。

「レベロ、話を聞いていると私なんかより君の方が余程ターナー信者の様に思えるが？」

「政界に転出したのは確かに彼の影響が大きいだろう。恩があるのも事実だ。だが一線を引いてきたつもりだぞ？古巣の一部からは『裏切

者』呼ばわりされた事もあるんだ。彼の事は部下として尊敬していた。人間としても好きだったと思う。

確かに、彼らが同盟を仕切っていた時代、数字だけを見れば同盟は黄金期を迎えた。バブルにならない範囲での経済成長と人口増。様々な新技術も財政に余裕が出来た事で予算が付き、開発された。

だが、言葉を選ばずに言うところのあの時代は民意が政策を決定するのではなく、彼らの意向を民意が承認するだけになっていた。彼らの成果を謳歌した私たちの世代がこういうことを言うのはおかしい気がするが、彼らだって永遠の存在ではなかった」

「意図的だったのかもしれない。軍に関してはビュコック教官を始め、後継者のような存在を育成したが、財務委員会を始め、政界においては後継者を育てなかった。その結果苦労もあるだろうが、彼らもまた、その時の現役世代が決めるべきことを宿題として置いて行ってくれたのかもしれない」

「この歳になって宿題に追われることになるとはな」

お互い苦笑しながらグラスを傾ける。シトレと話しながら彼らが最高評議会議長にならなかったのは、その席が戦死したアツシユビー元帥の物だったからではなく、もともと時期が来たら権力を手放すつもりだったからではと言う考えが頭をよぎった。軍・国防・財務・法秩序を押さえた彼らは、強引な手法も混ぜながらとにかく同盟の国力増進に努めた。

『負けない国力と国防体制は整えた。後は君たちで考えろ。但し増税は許さんぞ！』

そんな声が聞こえた気がして思わず周囲に視線を向ける。

「委員長、私だってもう青二才じゃない。貴方程じゃないが今でも激務に浸る日々を過ごしていますよ」

そんな言葉が出かけたがなんとか堪えた。シトレに視線を向けると静かにロックグラスを傾けている。もしかしたら彼も、師匠のような存在のビュコック元帥とのつながりで親交のあったジャスパール元帥やファン元帥に思いを馳せているのかもしれない。

## 第105話 策謀の報い

宇宙暦789年 帝国暦480年 6月末

惑星フェザーン 自治領主公邸

アドリアン・ルビンスキー

「ルビンスキー補佐官、これはどういうことかね？我々にはこのような火遊びを楽しむ余裕は無いはずだが？」

「ワレンコフ閣下にはご機嫌麗しく……。などと言った建前はどう不要でしょう。フェザーンの最高責任者として起死回生の手を考えられるのは責務かもしれませんが、内心を吐露する場を間違えませんでした。総大主教殿下の耳はそこら中に張り巡らされております。その点を甘く見たのが閣下の落ち度でしたな。私としても残念です」

「では聞けど、フェザーン領民20億を食べさせる手が他にあるのか？フェザーンの成立に地球教団の思惑があったとは言え、教団の為に餓死させるような事はできない。どんな子供もいずれ自立し親離れをする。フェザーンにもその時期が来たという事だ」

「まさに正論でしょう。同盟が受け入れるかは別として、今までフェザーンが帝国・同盟両国に対して行ってきたあらゆる諜報工作活動の資料に教団の内部資料まで差し出せば少なくとも交渉のテーブルには座れたでしょうな。ただ、残念ながら親からすれば子が自分たちを切り捨てて生き延びるような策を許す気はないそうです」

「それで君はフェザーンが狂信者たちの持ち物であり続ける事を許容するのか？40年以上前に亡命者に紛れ込ませた狂信者の暴走によってフェザーンは同盟から完全に敵視された。戦争状態にある両国を煽りながら、交易を独占し富を蓄積する。」

「疲弊して荒廃した両国をフェザーンの資金と宗教で立て直し、地球をこの銀河の聖地とする。もうそんな妄執の片棒を担ぐのはうんざりだ。同盟の国力が帝国とフェザーンを合わせた物を超えた時点で、そんな未来は来ないのだからな」

「まあ、閣下には閣下の言い分が、総大主教殿下には総大主教殿下の言い分があるのは確かでしょうな。補佐官としての見解を述べさせて

もらうなら、乾坤一擲の最後の機会を帝国は活かせなかった。そしてあまりにもたやすく一蹴されてしまった。同盟はこの時を予期してずっと待ち構えていたのでしょうか」

幼少期から暗殺工員とされるべく洗脳に近い教育を受けさせられたグレースとかいう女性からすれば迷惑な話だろう。そうなるべく育てられ、与えられた舞台上で自分の役割を果たしたただけだ。

しいて注文を付けるとしたら命じた人間が、それが露見した時のリアクションを想定しなかった事だ。狂信者たちにとっては聖戦だったかもしれないが、元勳のような存在を暗殺などすれば当然リアクションは強硬な物になる。民主共和制の同盟は市民の声を無視できない。帝国以上に報復は苛烈な物になるだろう。

「それで手はあるのかね？私の命でフェザーンの窮状を救えるというならそれでも構わないが……」

「今の状況はフェザーンの影のオーナーの意向を反映したものです。彼らを切り捨てることなく出せる範囲で交渉のテーブルにつく。その先はやってみないと判りませんが、少なくとも暗殺の一件は過去の自治領主が首謀したもので、閣下はその責任を取って自裁された。詰問状の回答には不十分ですが、時間は稼げます」

730年マファイアの暗殺が露見した時、同盟はフェザーンとの交易の停止と回廊出口付近の通商封鎖を決定した。交易の出来ないフェザーンなど中身の無い金庫のようなものだ。

同盟内に小さいとは言え勢力を持つフェザーン派を通じて嘆願交渉がされたが、この決定は覆らなかった。フェザーンだけなら蓄積された富によつてそれなりの期間、猶予は得られたかもしれない。

だが、同盟からの輸入で穀物の不足分を調達していた帝国ではそうもいかなかった。食品価格が一気に高騰し、門閥貴族が自領からの穀物流出を防ぐ方向に動いた時、両国を再び真正面から噛合わせる機会だと判断した猊下は、フェザーン回廊の通行の許可と同盟領の惑星ウルヴァシーに蓄積された物資詳細を帝国軍に提示する様に指示された。

電撃的なフェザーン進駐と、惑星ウルヴァシーの占拠。それが実現

できていれば、数年の猶予が得られた。だが、同盟領に侵攻した帝国軍は、ウルヴァシー方面軍とジャムシードから出撃した同盟軍司令官直卒艦隊に攻勢を阻まれ、そうこうしている内にエルファシルから迂回した別動隊に挟撃されて殲滅された。

第二次ティアマト会戦以来の宇宙艦隊司令長官が戦死するほどの大損害を出し、帝国軍は這う這うの体で撤退。フェザーンにはお情け程度の防衛艦隊と陸戦部隊が配属されているが、同盟軍の侵攻を阻むことはできないだろう。

「時間を稼ぐだけか？よくそんな見通しで猊下も君にこの椅子を任せようと思われたものだな」

「閣下と私の違いは、フェザーンを諦めている点でしょうな。教団を殺してフェザーンが生き延びるのではなく、フェザーンを殺して教団を生き延びさせる。そういう方向で動くつもりです」

「フェザーンを滅ぼすと君は言うのか？」

「事実を開示した所で一体何になるんです？同盟がどんなに甘く採点した所で我々は地球教の共犯です。主犯が別にいるからと言って今更フェザーン人を受け入れるとでも？ならば受け入れざるを得ない層に混ぜてしまえばよいのです。」

帝国臣民に混ぜつつしまえば、フェザーン人への差別は帝国臣民への差別になります。同盟の人口が300億を超えたとはいえ、帝国とフェザーンを合わせれば270億を超えるでしょう。私はその辺りに活路を見出すつもりです」

思えば歴代自治領主と猊下の策はことごとく裏目に出た。先帝オトフリート4世には3人の男子がいた。それを活かして政争を誘発し、門閥貴族に割り当てられた領地を直轄化し、帝国政府の力を強める。その過程で帝国政府内に食い込み利権を確保する。

政争で破れた貴族達とその取り巻きを亡命させ、同盟内でフェザーンに友好的な派閥を作る。前者はうまくいったが、もともと期待されなかったために傍観者に徹した事で後継者になったフリードリヒ4世は、最高権力者の地位についても傍観者であることを変えず、貴族達の政府への影響力はむしろ強まった。

後者に關しては完全に失策だ。定期的に流入する亡命者にリスクを感じたのか？亡命者に關する選挙権の付与条件を同盟はかなり厳しいものに改めた。居候に家主と同じ権利を与えるというのは確かにおかしな話だ。

だが、それに気づいたのは定期的に流入する亡命者の多さが原因だろう。どうせやるなら一度に大量に行うべきだった。送り込んだ亡命者たちが作ったフェザーン派は年々人口増が続いた同盟内では少数派のままだ。

そして暗殺事件の露見と共に交易の停止だけでなく亡命者の受け入れの停止を決定した。勝手な予測だが、同盟としては帝国との戦争に何かしらの区切りがつくまで解禁するつもりはないだろう。彼らからすれば交易が出来ないフェザーン人など生活保護の予備軍としか見ないだろうしな。

「まあ、私に遺された選択肢はもう無いのも事実だ。それで後任として何を望むのかね？」

「自裁を。いらぬ気使いかもしれませんが年代物の赤を用意しました。死因は心臓発作になるでしょう。同盟の高等弁務官に検死の立ち合いを打診する予定です。あまり惨たらしい形で進めたくはありません」

「そうか。まさか君に後を託す事になるとは思わなかった。こんな形になったのは不本意だが、後を頼む」

ワイングラスに封を切った年代物の赤を注ぎながらワレンコフ氏は私に視線を向けてそう応じた。そしてビタミン剤かのようにカプセルを口に含み。赤ワインでそれを飲み下す。

「どうせなら肴も欲しい所だったな」

そんな事を言いながらゆつくりとワインを楽しむ彼をじつと私は見ていた。数分もすると発作が来たのだろう。苦し気に胸を押さええたが最後の意地なのか取り乱すこともなくそのまま執務机に倒れ込んだ。

「検死官、後は頼むぞ。私は同盟の高等弁務官に自治領主の死亡を伝えてくる」

公邸に与えられていた補佐官室に向かい、高等弁務官府に連絡を入れる。こうなるとワレンコフ氏が念には念を入れて高等弁務官府を守る判断をしたのは不幸中の幸いだった。

『古来から外交官の身命は保証されてきました。叛徒たちとの戦争はこれからも続くでしょう。丸腰の外交官に何かしら起これば、戦争が単なる殺し合いになりかねません。その辺りも含めてご検討頂きたいのです』

事実上の宰相として帝国政府に君臨しているリヒテンラーデ侯にそう談判した事で、出入りは制限されたものの宮廷警察の3個小隊が警備に付き、高等弁務官府の職員を保護した。

宇宙艦隊の大敗と、盟友だったミュッケンベルガー司令長官の戦死の報に触れて、フェザーンに駐屯している装甲擲弾兵を率いるオフレッサー中将が騒いだそうだが、さすがの『ミンチメーカー』も宮廷警察の威光の前には大人しくなったようだ。

「フェザーンにとっては最悪の状況だが、逆に考えればこれ以上状況が悪化する事もない。先人たちの遺した負債を整理しながら少しでも成果を出せば名が上がる。自治領主の地位は既に形骸化したから、だからこそ踏み台としては丁度良いと言える。こんな所で終わってしまるか」

同盟高等弁務官府の応答を待つ間、本心を吐露した。先ほどまでワレンコフ氏に甘さを指摘していたにも関わらず、使い慣れた自室に来た事もあり油断していた。同盟はこの数十年、研究開発の分野にも多額の予算を投資していた。

その結果として彼らの兵器は格段の進歩を遂げていたが、進歩したのは兵器ではなかった。定期的にクリーニングされているはずの自治領主公邸内部ですら盗聴を可能にしていたことを知るの、もう少し後の事になる。

## 第106話 害虫処理

宇宙暦790年 帝国暦481年 10月末

惑星フェザーン 自治領主公邸付近

カスパー・リンツ（少尉）

「リンツ、帝国の弁務官府の方は大荒れだったそうだ。こっちも何が起こるか分からん。油断するなよ」

「副隊長、了解です。部下たちにも再度注意するように伝えます」

5個艦隊が動員されたフェザーン侵攻作戦は申し訳程度に配置された警備艦隊を蹴散らし、一気に地上戦へもつれ込んだ。軌道エレベーターや航路局は楽に押さえられたものの、殿として死守命令でも受けたのか？装甲擲弾兵一個師団が都市部でのゲリラ戦を展開した。指揮官は同盟軍からミンチメーカーと呼ばれたオフレッサー中将だ。

彼は長年続けられてきたメテオライト作戦によって隕石群が渦を巻く難所となったイゼルローン回廊内で、索敵が困難な事を逆手に取って強襲揚陸艦で突貫し、切り込みを行うという無謀の一言で片づけるには度を超えた戦術で名を上げた人物だった。

当初から激しい抵抗が予想されていた。切り込み役を志願した我々『薔薇の騎士大隊』も重要目標とされた帝国高等弁務官府・フェザーン自治領主府・自治領主公邸に分散して派遣された。自治領主府の方はシェーンコップ先輩同様、副隊長を拝命したりユーネブルク少佐が向かい、帝国高等弁務官府には大隊長のヴァーンシャッフ中佐自ら担当された。

フル装備の装甲擲弾兵が待ち構えていた帝国軍高等弁務官府周辺。その一角だけが星間国家同士の戦争であるにも関わらず原始の時代にタイムスリップしたようだったと聞く。

ミラーコーティングが施された装甲擲弾兵の重装甲スーツにはブラスターを始めとした小火器は効果が無い。炭素クリスタル製の戦斧で文字通り血で血を洗う肉弾戦が繰り広げられた。

総司令部からはリスクがあるなら空爆も選択肢として提示されていたが、大隊長は敢えて帝国からの挑戦を正面から打ち破る判断をさ



れた。新亡命派の奮戦を印象付けたい思惑もあったのだろうが、結果としてミンチメーカーの覚悟を甘く見ていたのだと思う。数的優位な状況で逆撃を受け、大隊長は戦死。急遽、自治領主府から転進してリユーネブルク副隊長が指揮を執った。

空爆の後に再度突入が実行されたが、覚悟を決めていたミンチメーカーは最後の最後に用意していた自爆装置を自身で起動させたらしい。敵将と同じく最前線で奮戦したリユーネブルク副隊長も重傷を負い、高等弁務官府はがれきの山となった。

『シエーンコップ少佐、本部から入電。指揮系統の再編が終わったので突入を許可するとの事です』

「やっとか。では我々も仕事にかかるとしよう」

最悪の場合は帝国高等弁務官府へ増援の必要もあった。自治領主公邸組は万が一の事態に備えて待機していたのだが、これでやっど動ける。

「シエーンコップ少佐、突撃には私も同行させてもらいたい。自治領主府の方ではこれと言った証拠は見つからなかったようだ。帝国高等弁務官府のように自爆するような事は無いと思うが、少しでもネタを集めたい。許可頂けるだろうか？」

「リンツの顔を潰すわけにもいきませんからな。但し自分の身は自分で守って頂きたい。情報部士官の命の責任は、個人的ならともかく、大隊としては負えませんからな」

「感謝します」

緊張した面持ちで突入への参加を打診してきたバグダツシユ大尉に苦笑しながら先輩はそう応じた。顔を繋いだのは親交のあった私だ。防諜課に属していたはずの彼は、本来なら前線まで出張るはずはない。勝手な憶測だが、彼も私同様、何かしらのケジメを付けるために志願したのだろうと推察していた。

「まずは強行偵察としゃれこむか。リンツ、ブルームハルト、デア・デツケンについてこい」

待ちくたびれたとでも言いたげに戦斧を右手に持った先輩が指名をしてきた。ブルームハルトは射撃の腕で大隊のトップ。デア・デツ

ケンには最近伸び悩んでいるが格闘術の実力者だ。4人で死角を補い合いながら重厚な両開きのドアを開き、屋内へ侵入する。

静まりかえった公邸内だが、観測班からの報告では熱サーモセンサーにかすかな反応があった。装甲服の暗視装置のサポートを受けながら暗闇を進む。大きなりビングを通り抜けて自治領主の私室エリアへ進む。妙な感覚だが、暗闇の中を進んでいるのに人がいる事がなぜかわかる。書斎と思しきドアの前まで来ると、先輩が視線を向けて来た。黙ってうなずき、援護の為の射界を確保する。

『バキン』

という音と共にドアを蹴破り室内へ突入した。

「やれやれ、随分なお出迎えだな。この屋敷は2週間前から無人だぜ」  
執務机で資料を作成していた人物に携帯していたレーザーライフルを向けると両手を上げながらそう応じて来た。

「親父さん？」

「ん？誰かと思えばあの時の護衛官か？顔見知りかいて良かったぜ。という事はバグダツシユも近くにいるのかい？」

「はい。外で待機していますが……」

確認するかのように視線を向けてくる先輩に頷きながら親父さんに応じる。細かい所にまで気が利くブルームハルトが無線で状況を報告し始めた。おそらくバグダツシユ大尉を呼び出しているのだろう。

「お前さん達には隠居した好々爺に見えるだろうが、それでも情報部に雇われた職員でな。情報収集の任に当たっていたわけだ。その報告書をまとめるのに丁度よい空き家があったんでな。転がり込んで報告書の作成に勤しんでいたわけだ」

悪びれる様子もなくPCに視線を戻す親父さんにさすがのシエーンコップ先輩も毒気を抜かれた様子だ。ただ、実力者であることを肌で感じたのだろう。デア・デツケンは警戒を解いていない。

「さてと。これで完成だ。さすがに帝国高等弁務官府の方には手が出せなかったが、自治領主府の方もきっちり調査済みだ。お前さん達が知りたいことも大体は網羅できているだろうぜ。これは出迎え料だ。

持って行け。情報部だけで抱えるには事が大きすぎるしな。新亡命派の薔薇の騎士大隊も把握している方が、政府上層部も腹をくくるだろうよ」

「親父さん、音信不通になったと思っただらこんな所で……。重要機密を勝手に流出させるのは控えて欲しいのですが……。」

「重役出勤の上に俺に文句を垂れるとは偉くなったなバグダッシュ。まあ、先に中身を見たらどうだ？事情を把握している陸戦組織の協力があった方が、お前さんの仕事もやり易くなると思うがね」

「少佐、申し訳ないが先に確認させてもらいたい。親父さんはこう見えて工作人員の中でも古株で腕も確かだ。掴んだネタが公開されれば同盟が混乱するような情報も過去に暴いている。これだけは譲れない」

「分かった。なら俺達はお茶でも飲むか」

先輩がそう応じると大尉はホツとした様子で親父さんが取りまとめた資料に目を通し始める。キッチンから引つ張り出したティーセットで紅茶を淹れ始めた俺達を横目に、『なんてことだ』『まさか』といった呟きが漏れ聞こえてくる。

先輩はそれを楽しし気に観ているが、読んでいる物がモノだ。これが人気小説の最新刊なら私も楽しみに出来たが、豪胆とは言わないまでも神経が凶太い大尉がこの有様となると、余程の事が書かれているのだろう。そんな機密を新参者の薔薇の騎士大隊が知ったとなるとむしろデメリットの方が大きいのではないだろうか。

こんな状況でも悠然と紅茶を楽しむ先輩、いたずらが成功して嬉し気な親父さん、そして額の汗を拭いながら資料を確認する大尉。それをどうしたものかと眺める我々。別な意味で異様な雰囲気に含まれ、やけに時間が経つのが長く感じる。もっと経ったように感じていたが、大尉は小一時間で資料の確認を終えた。

宇宙暦790年 帝国暦481年 10月末

惑星フェザーン 自治領主公邸付近

バグダッシュ大尉

「親父さん、この最後の一文。薔薇の騎士大隊に渡す物にも記載されているのかい？」

「いんや。工作員の独白言語をわざわざ部外者へ渡すものに記載する程、俺はインテリじゃないぜ」

いたずらが成功したかのようにニヤニヤしながら視線を向けてくる親父さん。腕利きなのは認めるが若手の分析官たちから嫌がられるのはそういう秀才たちを馬鹿にするような態度が原因だ。

ただ、親父さん達フィールドワーカー達からすれば安全な所からなんやかんやと細かい注文を出してくる分析官たちに思う所があるのも理解はできるが……。

「ここまで暗躍していたとなると、処理できるうちに処理したほうが良いという親父さんの意見には賛成だ。今すぐ司令部に許可を……」

「お前さんも甘ちゃんだねえ。フェザーン派を含めてどこまで同盟内に根が伸びているかは俺にも正直分からねえ。司令部の許可なんざいるのかね？俺としては明日の昼頃に匿名の通報が薔薇の騎士大隊に入って、現場を発見するって流れが良いんだが」

「しかし……」

「別にいいぜ。お前さんのけじめを付けたって想いを汲んでここまですて手配したんだ。共犯じゃなく部外者でいたいってんならそれでも構わねえよ。ここは同盟領内じゃないから当然同盟刑法は適用外だ。非公式な工作人員の俺は軍法も適用外だしな」

やけに張り切っているとせば、急に音信不通になった辺り、親父さん達もけじめを付けるつもりか。そして止めてもやめるつもりはない。薔薇の騎士大隊に協力してもらえば制止は出来るだろうが、その場合は当然彼らにもこの内容を確認した上で話になるだろう。

これが事実なら、新亡命派としても黙っていられない。彼らの多くが亡命する切っ掛けとなった帝国内での政争が、フェザーンと地球教の共謀によって引き起こされた物である事も、この資料には記載されている。

「分かったよ。親父さんのプランで行こう。シェーンコップ少佐、明

日匿名の通報が薔薇の騎士大隊本部に届くと思うので対応をお願いしたい。できればリンツ少尉も同行させてもらえればと個人的には思う」

大尉が少佐に資料を渡しながら打診を行う。

「内容を見た上での判断になるが、リンツの胸のつかえがそれで解消されるなら、薔薇の騎士大隊の副隊長としては制止する理由もないな」

そう言いながら資料をめくり始めた。接した時間は短い、不敵な雰囲気のあるシェーンコップ少佐は、前線では勇猛な男なのだろう。若いながらよくできたリンツ程の男が素直に部下になっているのだから。

ただ、今手にした物は『悪魔の書』だ。交易国家を隠れ蓑にこの銀河の悪意の塊のような闇が行った悪事の数々が記載されている。表情を変えずにそれが読めるかな？

「やられました。資料に一瞬意識を向けた時に消えました。同席するだけでプレッシャーを感じたのは初めてです。あの人、何者なんですか？」

ずっと親父さんに意識を向けていたブルームハルト曹長が発した言葉で、親父さんが姿をくらました事に気づいた。この資料には重要参考人の潜伏先を始め、地下鉄線路に併設された隠し金庫など見逃せない情報が記載されている。

悪用される前に押収してしまった方が良いだろう。帝国が持ち去ったフェザン準備銀行の金塊に比べたら見劣りするが、それでもフェザン侵攻作戦の予算を賄えるほどの資産にはなりそうだ。

翌日の昼過ぎ、政府施設の地下に作られたシェルターの更に地下に作られた要人向けと思われるシェルターにて、フェザン侵攻作戦が開始された頃から姿をくらましていたアドリアン・ルビンスキーと護衛役と思われる数名が、背後から頸椎をナイフで一撃され死亡した状況で発見されたとリンツ少尉から報告が入った。

取り急ぎの悩みはフェザン派の取り扱いだろう。彼らの亡命が計画的なもので、民主共和制の精神を逆手に取って世論を好戦的に煽

り、帝国と同盟の共倒れを画策していた事が広まれば、国内でまた論争が起ころうだろ。

『悪魔の書』を同じように読んだ薔薇の騎士大隊の連中が同様に悩んでいるであろうことだけが、唯一の救いだった。情報部に比べれば善良な陸戦部隊の彼らが、俺以上に悩むことになるのは確かだろうから。

『既に小官だけでなく、証拠の確保に協力した薔薇の騎士大隊も事態を把握しています』

報告書を上げた時から詰問に近い質問を各所から浴びせられる事になるのだが、この言葉を免罪符のように使う事で、詰問の勢いが弱まったのは確かだ。それにしても730年マフィアしかり、エコニアの名士として知られるケーフェンヒラー大佐しかり、旧世代の人材の凄みを再確認した。

フェザーンと地球教の悪辣さがほの暗い闇のような印象なら、好々爺然とした印象の彼らがこんな事を考えていたと思うと、人間の二面性を見たようで目をそらしたくなる。受け入れ拒否をしたフェザーン市民20億人を使った悪辣な策が実行に移されたのは、リンツ少尉から報告を受けた数日後の事だった。

「防諜課でよかった。こんなことを思いついても、実行に移すには戸惑いがあるだろう。化け物たちを先人にもった諜報課の連中は本当に不幸だ」

内心を吐露しながら紅茶を楽しむ余裕があるだけ、マシンだったと思う。方々から詰問されてグロッキーになりかけたが、自分たちがすることの影響を考えると良心の呵責を感じるに違いない連中に献杯しながら、俺は正式な最終報告を取りまとめ始めた。

## 第107話 経済危機

宇宙暦791年 帝国暦482年 4月末

惑星オーデイン ヴェストパーレ男爵邸

マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

「ヒルダ、マリィンドルフ家は今回の件にどう対応されるつもりなのかしら？何か話は聞いていて？」

「はい。苦渋の決断だったようですが、男爵夫人に勧めて頂いた通り、農産物を始めとした食料品の輸出禁止に動くとの事でした。父は当初、他領の臣民を切り捨てるような政策は取りたくない様子でしたが、領民たちの生活を守るのが第一と説得いたしましたわ」

「そうね。残念だけど直轄領は政府の責任、自領をまずは守る事を考えないと……。領地がめちやくちやになってしまつては領主としての責任放棄だものね。幸いな事にヴェストパーレ領もコツコツと農地開発を続けて来たからなんとかなりそう。でも収益性に目がくらんで鉦山開発から軸足を移さなかつた所は深刻な事になりそうね」

叛徒達の領内でフェザーンが彼らの元勳たちを暗殺していた事が発覚した直後、フェザーンの生命線だった交易を彼らは禁止し、フェザーン回廊のあちら側を封鎖したのが5年前。不足していた穀物をフェザーンからの輸入で補っていた帝国では、穀物価格が一気に上昇した。

もつとも穀物価格に関しては交易と言う生命線を断たれたフェザーン資本が帝国内に流入し、各地で増産計画を実施したから解決の目処が立っていた。だが事はそれだけでは済まなかつた。

「公の場では申せませんが、出征計画があと数年先送りされていればと、父も零しておりました」

「そうね。ただ、食料生産を握つた事でフェザーンの発言力は良くも悪くも帝国内で増大したわ。そうなると彼らの意向も無視はできない。生命線を断たれたんだもの。彼らも費用対効果をかなぐり捨てて方々で陳情したでしょうしね」

「ええ。それに交易が停止した状況に帝国が慣れてしまえば、彼らの

生命線の価値が文字通り無くなります。その辺りをもう少しリヒテ  
ンラーデ侯を始めとした政府上層部が理解してくださっていた  
ら……」

「本当に貴方が男性だったらねえ。私が皇帝陛下ならあなたを帝国宰  
相に任命して、この国難に全権を与えて対処させるのに」

ヒルダのお母さまがヴェストパーレ男爵家が経営する美術学校の  
講師だった事もあり、マリンドルフ家の嫡女であるヒルダとは幼い  
頃からの付き合いだ。ヴェストパーレ男爵家同様、男子に恵まれな  
かったマリンドルフ家。父親たちは同じ悩みを持つ同志でもあつ  
て仲が良かった。

お互いの屋敷を行き来する御供として同行した私達は、いつの間に  
か姉妹のような関係になっていた。この子は芸術の分野にはそこま  
で関心が無いのが残念。でも為政者としての資質はかなり高い物を  
持っていた。父を亡くして男爵家を継いだ私にとって、領地経営の良  
き相談相手でもあった。

「それにしても経済の分野はフェザンが銀河一だと思っていたけ  
ど、叛徒の中にも人物がいたようね。もともと建前上は帝国の自治領  
だったフェザンを帝国が併合するのは多少の無理はあっても可能  
だと私も考えていたわ。でも叛徒たちがどうフェザンを扱うのか  
には注目していたの。こういう使い方をしてくるとはね」

「そうですね。この策を考えた方がどなたなのかは存じませんが、経  
済に精通しているのは確かです。それ以上に冷徹な覚悟のようなも  
のを感じますわ。例えていうなら長年医者として患者を活かす事を  
研鑽してきた人物は、当然、どうすれば患者が死ぬかも理解してい  
る訳です。叛徒たちの治療で得た見識を帝国を殺すために流用した。  
そんな印象を受けますわ。分かっているにしても、私には実行する決断は  
出来ないと思います」

少し気落ちした様子でティーカップに手を伸ばし、喉を潤すヒル  
ダ。好物のコーヒークッキーには、まだ一枚しか手を付けていない。  
「貴女の年頃ならそんなもの持ち合わせていないのが普通よ。まあも  
う少ししたら領地経営にも関わる事になるし、そうなったら悪辣な人



間との距離の取り方も学ぶ必要があるだろうけど」

「そうですね。私も伯爵家に生まれた以上、政略結婚は覚悟しております。ただ、あからさまな財産目当てのお話にはさすがに気乗りは致しません」

財産目当てね。ヴェストパーレ男爵家を継いで男爵夫人となつてからは、私にもそう言う話が多く舞い込んだ。父親の爵位が無ければ箸にも棒にもかからない癖に自信だけは一人前で、やけに上から言い寄られたことが何度もある。

社交界で相手を見つかる事を諦めた私は、経営していた美術学校の卒業生たちから愛人を見繕った。趣味と恋愛が両立して効率的だと、今でも思っている。

「カストロプ公の脂ぎった顔もいい加減見るのに飽きて来たわ。経済危機に有効な手を何も打てていない。まともな神経の持ち主なら辞職するでしょうに」

「マリンドルフ家の寄り親ですからあまり発言はしたくありませんが、私と嫡男マクシミリアン殿との婚約話や、食料の代金を農奴で支払う旨の打診があったのは事実です。温和な父もさすがに激怒して一蹴してくれましたが……」

「食べさせられない領民を押し付けて食料を寄せなんてまともな価値観を持っていたら言うはずがないわ。でもね。たまにいるのよ。爵位を振りかざせばなんでも通ると思ってお馬鹿さんがね。」

彼らにあるのは自分の要求を押し通す事だけ。そう言う方々に時間を割いても無駄なのよ、交渉が成立しないものね。だからこそ社交界での情報収集が必要な。貴女はあまり好んでいないようだけど「分かってはいるのですが、ワインや宝石の話題にはあまり関心がありませんでしたから。それに重要性に気づいた所で、しばらくは社交の場も開催される事はないでしょう」

「それもそうね。事態が落ち着くまではそんな余裕もないでしょう。それに今の帝都ではいつ暴動が起こるか分からないわ。私も午後の面会の約束を終えたら領地に戻る準備を始めるつもりなの。早めに領地へ戻る様にお父様にもお伝え願えるかしら？」

「ええ。今日も半分は暇乞いの意味がございました。数日中に領地へ戻る予定ですわ」

それを聞いて一先ず安心し、お互いのティーカップに紅茶を注ぐ。不測の事態が起きた時に接するマリーンドルフ領が領主不在では正直不安だった。後は午後の面談の結果次第かしら。ただ彼らにとつてもメリツトのある形を用意できたはず。

あの子も恋愛には無頓着な感じだし、ヒルダと引き合わせてみるのも良いかもしれない。親友の赤毛ののっぽさんは幼い頃からアンネローゼに夢中なのに。来た時よりも少し笑顔になり、二枚のコーヒークッキーに手を付けたヒルダを横目に、紅茶で喉を潤しながら私は次の面談の事を考えていた。

宇宙暦791年 帝国暦482年 4月末

惑星オーデイン ヴェストパーレ男爵邸

ラインハルト・フォン・ミューゼル

「ラインハルト様。アンネローゼ様の宿下がり以外で男爵夫人からお誘いを受けるなど初めての事です。どんなご用件なのでしょうか？」  
「キルヒアイス、帝国がこんな状況だからな。男爵夫人としても方々から意見を聞いておきたいのではないかな？もつとも、俺達が知っていて彼女が知らないことなど無いだろうが……」

落ち着かない様子のキルヒアイスに応じながら、俺は苦笑した。5年前に姉上が宮内省の役人に見いだされ、陛下の寵姫となる事になった時、俺達はまだ幼くて姉上を守る力が無かった。

『いつか姉上を取り戻す』。そんな志を立て、宮内省の役人に要望を聞かれた際は軍人になる近道をと軍幼年学校への入学を希望した。

姉上を皇帝に売った罪悪感からか？母上が門閥貴族の子弟が運転する車に跳ねられて死亡してから酒浸りだった父は、更に酒に溺れた。2年前に肝硬変で亡くなったが、当然の報いだと思わなかった。むしろ悲し気だったが姉上に会えて嬉しかったほどだ。

一方で、皇帝への感情は少し変化した。あの時ならともかく、フェザーンが交易を停止された事で起きた食物価格の高騰から姉上を守

る事は出来なかつただろう。

寵姫の実家、寵姫の弟という事で配慮され、願わなくても何かと優遇策を受ける事が出来た。父親が内務省の下級官吏だったキルヒアイスの家ですら、あの時は生活が困窮したらしい。そして今回の経済危機では見通しが全く立たないというのが実情のようだ。姉上のお気持ちを察すると思う所が無い訳ではない。ただ、少なくとも姉上を守る実力が俺達には無いのが実情だ。

「待たせてしまつてごめんなさい。色々と噂が流れているから事実確認に手間取つてしまつて。どうぞおかけになつて」

案内されたサロンに、男爵夫人が現れた。父が死に、俺が幼年学校へ入学した為にミュールゼル家は現在自宅を持つていない状況だ。姉上が暮らす後宮には原則男性は入れない。宿下りの場として屋敷を提供してくれたのが男爵夫人だ。

それ以外にも、ミュールゼル家が下級貴族であつた為に、それを口実に姉上を貶める発言をした貴族を逆に論破するなど、非常にお世話になつている。俺にとつては唯一頭の上がない女性だつた。

「今日、話し合いたいのは、貴方たちの任官の件。宇宙艦隊があんな事になつた上にこの経済危機。組織再編も一向に進まず、門閥貴族が財務尚書への批判の声を高めているわ。ヴェストパーレ男爵家としても混乱が予想される帝都からは離れておきたいのが本音ね。そして政局が落ち着くまで自衛できる状況を整えておきたいとも考えているの」

フェザンへ電撃的に進駐し、叛徒たちの交易拠点だつた惑星ウルヴァシーを一時的に占領する。蓄積された物資を帝国が得られれば、フェザン資本の協力を含めれば食料を含めた生産体制を構築でき、帝国は安定するはずだつた。

だが、待ち構えていた叛徒たちに侵攻に参戦した7個艦隊は殲滅され、司令長官まで戦死した。後任人事は当初はメルカツ中將を大將に昇進させるという話だつたが、彼が下級貴族出身だつたことから横やりが入り、結局後任は決まつていない。

そうこうしている内に叛徒たちがフェザンに進駐した。『ミンチ

メーカー』と畏怖されたオフレツサー中將の奮戦も話題になった。戦死したミュッケンベルガー司令長官と親交があつた為とも言われているが、むしろ地上戦はこれから増えたはずだ。彼の活躍の場はこれから増えたはず。フェザーンで玉砕しては人的資源の無駄使いだったようにも思う。

「あくまで噂話に聞いた程度ですが、そこまで状況は悪いのでしょうか？」

「ええ。今は嵐の前の静けさと言つた所ね。財務尚書の汚職は今に始まつた事ではないわ。快くは思つていなかったでしょうが、公爵家に對して、陛下の娘婿が連名で弾劾をするなんて前代未聞なもの。

任命したのは陛下だから実質不信任を突きつけたに等しいわ。それに帝都の治安も刻一刻と悪化している。新無憂宮だつてどうなるか。近衛兵や宮廷警察だつて自分の子供が餓死しそうな状況なら、名誉ある職責を果たすとは思えないしね」

「ラインハルト様。そのような事になればアンネローゼ様も危険なのではないでしょうか？」

「それも含めて相談したかつたのよ。思つたより根回しに時間がかかつてしまつたけど」

フェザーンに進駐した叛徒たちは、名目上とは言え帝国の自治領であつた事から、フェザーン人の受け入れを拒否した。その一方で人道的見地から急遽増刷したフェザーンマルクと自治領主府が所有していた帝国国債を大量に配布。財産権放棄の契約を結んだうえで帝国内に送り込んだ。

持てるだけの貴金属と有価証券、それに一人当たり一億フェザーンマルクと言う大金を手にしたフェザーン人の流入は、当初は歓迎された。だが、数日後から帝国内で一気にインフレが進んだ。

帝国内の流通を担う存在でもあつたフェザーンが発行したフェザーンマルクは、帝国内でも実質貨幣として使われていた。20京フェザーンマルクという天文学的な資金の流入により経済は混乱し、あらゆるものが値上がりした。一切のパンが宝石のような価格になつたとも聞く。ここに至つて帝国政府は生活必需品の確保の為に、

門閥貴族を始めとした在地領主に物資供出を求めた。

『帝室への忠誠は誰にも負けぬつもりだ。だが、領民に苦勞を掛けて供出した物資が正当に使われるのだろうか？長年、帝国の予算配分には穴が開いていた。少なくとも正当に使われる確信が得られるまでは、物資供出には応じられない』

皇帝の娘婿でもあり、門閥貴族の雄であるブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯が連名で出した声明を口実に、在地領主の多くは物資供出を拒否した。一方で、フェザーン人が持ち込んだ財産に重税をかける動きもあると聞く。

「帝国が安定しているなら、陛下の寵姫とか寵姫の弟という肩書は持つていてもデメリットはないわね。でも今はそうでもない。臣民の多くが困窮した状況で一定の配慮を受けたんだもの。槍玉に挙げられかねない危険な肩書になりつつある。そう考えているわ」「では、我々はどうすれば？」

「領地に戻るにあたって、軍事に精通したアドバイザーが欲しいの。それを貴方達にお願いしたいわ。こんな状況じゃ、軍内部はどこも寵姫の弟なんて引き受けたがらない。行くところが無いから軍務省で待命中なんでしょう？」

「しかし、それでは姉上が……」

「大丈夫よ。アンネローゼも一緒に来てもらうわ。二人は知らなかったようにけど、彼女に下賜された荘園のひとつが男爵領のすぐ傍なの。寵姫が領民の生活を危惧して荘園に視察に赴く。政府としても臣民の不満を少しでも和らげたい時期だから反対はしないわ。話を受けてくれるならすぐに手配を進めたいのだけど……」

「男爵夫人、そのお話、ありがたく受けさせて頂きます」

一度キルヒアイスに視線を向け、頷き合おうと俺はそう回答した。このまま待命していても意味がないし、男爵夫人への恩もある。そして姉上を守る事につながるなら、これ以上の話は無いと考えた。

男爵領で軍事顧問の真似事のような生活が始まって数カ月。糾弾されたカストロプ公が急死し、嫡男マクシミリアンが政府から懲罰金を科せられた事を切っ掛けに反乱を起こした。

ヴェストパーレ男爵家と盟友関係にあったマリーンドルフ伯領に攻め込む反乱軍をなんとか撃退し、急遽討伐軍司令に命じられたメルカツ大將が反乱を鎮圧するまでの一か月、俺達は軍事顧問として激務の渦の中心で過ごすことになる。

反乱鎮圧の成果をもつてメルカツ大將は上級大將に昇進し、宇宙艦隊司令長官に任命された。戦勝を祝う名目でブラウンシュヴァイク公から祝賀会を開催する旨の招待状を受け取ったが、戦後の後始末に追われていた俺達は参加が難しかった。

皇帝が出席するなら同席しなければならぬのが姉上の立場だったが、姉上が帝都を離れている内に仲が戻ったベーネミュンデ侯爵夫人が同席するとの事で、ヴェストパーレ男爵領での忙しいながらも姉上やキルヒアイスと近しい生活はもうしばらく続くことになる。

## 第108話 内乱の始まり

宇宙暦794年 帝国暦485年 9月末

新無憂宮 南宮 控えの間

クラウス・フォン・リヒテンラーデ

「それで、軍の全面的な協力が得られると思ってよいのじゃな？」

「は。軍としては政府の方針に従うという事で意思統一が出来ております。もつとも親族が門閥貴族連合に参加した者の離脱はやむを得ないと考えておりますが……」

「そこまでは期待するのは酷な事だと判っておる。軍にそれを要望するなら、政府としてもフェザン系の切り捨てをせねばなるまい」

「フェザン系を切り捨てられるわけには参りませぬか？それが出来れば我らも大義名分が立ちますが？」

「軍務尚書、それが出来れば話が早い事など儂が分からんと思うか？責任追及を避ける為に反乱を起こした連中とは違い、我らは戦後の事も考えねばならぬ。経済危機に続いてこの度の内乱。帝国内の荒廃は更に進むじやろう。その立て直しをフェザン系の協力なしで進める。やろうと思えば出来るじやろう。ただし復興は数年遅れることになる」

「失礼いたしました。念のため確認したまでの事です」

軍務尚書のエーレンベルク元帥が恐縮するかのように少し頭を下げながらそう応じた。経済危機で一番傷ついたのは平民達だ。軍高官には貴族出身者が多いとは言え、下級貴族や平民出身の将官も多い。平民たちの生活を切り捨てる様な判断を政府がすれば、軍内部から新たな反乱が起きかねぬ。とてもできる判断ではなかった。

「宇宙艦隊の集結は完了しました。但し各地の抑えもごさいます。シヤンタウ・フレイヤ・マールバッハに一個艦隊を派遣しました。先年の会戦での損害が埋まるまでには至っておりません。実働戦力は10個艦隊、帝都には7個艦隊が集結している状況です」

「それで卿らの見立てはどうかのだ？」

「速攻を仕掛けるのは些か無理があるかと。門閥貴族連合が本拠地と

したガイエスブルク要塞は、イゼルローン回廊に建設予定だった人工天体要塞の試作品とはいえ、直径40キロにも及ぶ物です。そこに少なくとも5個艦隊クラスの戦力が待ち構えているとなれば油断はできません」

「軍としては門閥貴族連合に組した者の領地から切り崩しを仕掛けたいと考えています。それによつて要塞から出撃してくればそれだけで戦闘は有利に進められますからな」

「こうなると、クライストにガイエスブルク要塞を預けていたのが痛かったな。すまぬ。軍を非難するつもりはないのじゃ。愚痴が漏れたわ。忘れてくれ」

帝都とフェザーンを結ぶ国内のメインストリートを抑えるアルテナ星系。そこに建設されたガイエスブルク要塞は内乱勃発までは単なる駐屯地でしかなかった。門閥貴族連合の盟主、ブラインシュバイク公爵領とも近く、陛下の娘婿でもあった公爵への配慮もあつて寄り子の子爵家出身のクライストに預けていた経緯があつた。

「軍事に関しては素人が口を挟んでも良い事はあるまい。政府としても混乱を抑えると共に体制を整える事に注力するつもりじゃ。他に儂が知っておくべき事はあるか？」

「はつ。侯に報告するほどの事でもないのですが、『カストロプの乱』で功績があつたマリーンドルフ伯爵家・ヴェストパーレ男爵家から連名で自警軍の創設許可が求められております。物資の供出と併せての申し出ですので無下にもできません。辺境の警備艦隊を中心に分艦隊程度を派遣する方針です」

「ほう。それで司令官は誰を当てるのだ？」

「はつ。軍事顧問のような立場で参戦していたラインハルト・フォン・ミューゼルをとの打診です」

「うむ。かの者はまだ20にもならないか？」

「はい。今年で17歳のはずです。ですのでお目付け役はもちろん付けますが、カストロプ・マリーンドルフ方面が1個分艦隊で安定するなら多少の事には目をつむつても宜しいかと。実質グリーンニューラルト伯爵家の家宰のような立場です。階級は現在少佐ですが、特務少将



に昇進させようかと。無論、お目付け役も併せて配属いたします」  
「少将など男爵家の当主なら従軍経験が無くとも与えられてきた階級であろう？ 卿らが構わぬというなら儂から言う事はない。軍の良きように」

外戚が主導した反乱が発生したばかりじゃ。元寵姫の弟への優遇とも取れる人事に儂が反対すると思っていたのかもしれん。軍務尚書も艦隊司令長官もホツとした様子じゃった。『カストロプの乱』への初動が遅れた事で、両家に迷惑をかけたのもまた事実。その借りがこの程度の事で返せるなら安いものだて。

『永遠の生命が無いように、永遠の国家も過去には存在しなかった。銀河帝国といえどもそれは同様であろう。どうせ滅びるなら、精々華麗に滅びれば良い』

軍首脳分との打ち合わせを終え、一息つこうとした時、ふと先帝陛下が漏らした言葉が頭をよぎった。兄と弟の自滅によって至高の地位に就いたフリードリヒ4世陛下は、国政には一切関心を示さなかった。

強いて言うなら誕生した二人の皇女を門閥貴族の領袖であるブラウンシュヴァイク公とリツテンハイム侯と娶わせ、次代の体制を強化されようとした位じゃ。だが、皇太子ルードヴィヒ殿下は、もともと病弱な方であられた。

介添えについていた侍女と子を設けたが、嫡孫とするのには血筋が悪すぎた。経済危機で荒れる帝国を横目に、風邪をこじらせて急死したが、ニュースにもならなかった。

「クロプシュトゥックの討伐。今更ながらブラウンシュヴァイク公に任せるべきじゃったか？ だが、そうなれば外戚筆頭として帝位継承にも影響力を持つてしまう。あの時はとてもできぬ判断じゃった」

長年財務尚書の地位にあり汚職が生きがいかなのような動きを続けて来たカストロプ公。経済危機にも確な対策は打てず、門閥貴族からの糾弾を口実に処分できたのは良かった。そして鎮圧の指揮を執ったメルカッツを司令長官に出来たまでは上々。計算が完全に狂ったのはそこからじゃ。

『カストロプの乱』の戦勝を祝うという名目で、ブラウンシュヴァイク公が祝賀会を主催した。彼らからしてもカストロプ公は目に余る存在だったとはいえ、任命責任は陛下にあった。汚職まみれとは言え財務尚書を連名で糾弾した事への詫びの意味も兼ねて、陛下の臨席を求めめるのも当然と言えば当然だった。

そこで想定外の事態が発生した。もともと陛下の兄を支援していた事から、懲罰はされなかった物の、社交界から締め出されていたクロプシュトック公も『和解を乞う』という名目で出席し、そこに小型爆弾を持ち込んだ。

この爆弾は至近距離で爆発し、陛下と同行していたベーネミュンデ侯爵夫人は即死。門閥貴族の関係者にも多くの死傷者が出た。ブラウンシュヴァイク公は釈明の場と償いの機会を求めたが、軍としても司令長官にしたばかりのメルカッツに功績を立てさせたかった。

それに外戚とは言え、陛下の臨席を願った場に暗殺犯を招き入れた罪は重い。政府としてはブラウンシュヴァイク公に蟄居を命じた。そしてメルカッツが反乱鎮圧に向かった頃から、新たな火種が帝都を中心に広まり始める。

『国政に関心がない先帝陛下を即位させ、実権を握る。その為にフェザーンと組んで政府系貴族が行った謀略の結果が、リヒャルト殿下とクレメンツ殿下の死である。掴んだ権力を手放さぬために、今回も政府系は門閥貴族の粛正に乗りだすに違いない』

そんな噂と共に、資金の流れや工作の内容が差も事実かのように記された資料と共に流れ始めた。これを切っ掛けに帝都の屋敷で蟄居していたブラウンシュヴァイク公を筆頭に門閥貴族が自領へ向かい始め、『君側の奸を撃つ』という名目で挙兵した。

『この危機の原因となったフェザーン系を罰する事もせず優遇する政府系に違和感を感じていたのは我らだけではあるまい。この噂が事実でないと言うなら経済危機の原因となったフェザーン系を政府は追放すべきである。それが出来ないなら、この噂は真実であると考えるしかない』

自給率が高く、農奴が多い貴族領ならいざ知らず、国内人口の大部

分を抱え、どちらかと言うと消費地という要素が強い直轄領には物流の停滞は死活問題だ。そして辺境系を始め、良識派と言われる在地領主が中立を保っているのも、長年予算を理由に開発が進まなかった領地にフェザースン系の投資が舞い込んだことが大きい。彼らをつなぎ止め、政情を安定化させる意味でも、フェザースン系の切り捨ては出来なかった。

「どちらにせよできる事をやるまでよ。叛徒どもの動向からも目が離せぬが、フェザースン回廊からの進撃ならアルテナ星系は無視はできぬはず。長期戦に持ち込めば分はこちらにあるはずじゃて」

そう呟きながらティーカップに手を伸ばし紅茶で喉を潤す。いつもは香りに癒されるのだが、なぜが後味の苦さが印象に残った。

## 第109話 帝国領侵攻

宇宙暦797年 帝国暦488年 9月末

惑星クラインゲルト 帝国軍補給基地

ヤン・ウエンリー（大佐）

「想定通りね。一先ず玄関までは楽に来れた。後は帝国辺境星域の在地領主たちがどう考えるか？ね。クラインゲルト子爵との折衝はどうだったの？」

「はい。概ね想定通りです。処罰があるなら責任は取るので領民の生活には配慮を願いたいと。それと子爵家の嫡孫、カール殿の同盟への留学を打診されました」

「それはウエンリー君から持ち掛けたの？それとも子爵が進んで打診してきたのかしら？」

「後者です。おそらく周辺の在地領主も同盟軍が進駐すれば似たような話を打診してくると思われれます。政府の方針にも沿う物ですし、権限がないので保留しましたが個人的には最大限協力するとお伝えしました」

「ならこの場でその権限も与えておくわ。イゼルローン方面軍の民生政策の主幹なんだからそのくらいの裁量は持つて然るべきよ。他に何か懸念点はあるかしら？」

「そうですね。惑星クラインゲルトは補給基地が大規模に建設された事で帝国辺境星域では経済的に恵まれたエリアだと分析されています。ですが実際見て見ると状況はかなり厳しいものがあります。

今後進駐する星系の多くが入植時からほぼ開発が行われていない状況が予想されます。開発援助をどの程度行うのか？手厚くすれば地域住民は同盟を歓迎するでしょう。ただ、優遇が過ぎれば市民たちの反感を買うことになります。新たな問題の火種になりかねません」

「ウエンリー君の所でたき台を作って提出してもらえないかしら？支援の手厚さを3段階。それに必要になる予算、結果のシミュレーション、そして懸念点ね」

「分かりました。感覚ですが巨額すぎる・なんとか出せる・さすがに少

なすぎる……。の3パターンで宜しいでしょうか?」

「ええ。流石ヤン商会の嫡男ね。理想論者は同盟市民に一時的に負担を強いてでも同化政策を強行したいと考えるでしょうけど、始まりから無理をしても長続きしないでしょう。それと、幼い頃から知った仲でやりにくいのもかもしれないけど、もう少し進んで上申してほしい所ね。君はやればできるのにお尻を叩かないとなかなか動かない子だったから。そういう意味では私の方が幼い頃の印象に引っ張られているのかもしれないけど」

「善処はしてみます。民生政策に関して根本的な問題があります。イヴァンカ提督には早期に報告すべきだと考えました。私が提案する『何とか出せる金額』の政策を実施すれば同化政策は進んでいくと思いますが、それを帝国全土でやるにはどう頑張っても予算が足りないでしょう。完全併合を事実上諦めるような提案をすれば、私個人は良いのですが同化政策に悪影響が出るのでは?とも考え、動くに動かせませんでした」

「まったく、子供世代の代表の一人としては嫌になる事実よね。『最低500億』あの話が最高評議会でぶち上げられて以来、様々な経済学者から市民までが議論をしてきた。親離れしたい気持ちもあって現状でも何とかなると考えて来たけど、甘かったわね。元帥・財務委員長に続いて、死後に予言者の称号までついたとなると苦笑していいさうだけ」

「オズワルド財務委員長も苦笑しているかもしれないね。手っ取り早いのは増税ですが、それを事あるごとに戒めて来たのもあの人です」

「そうね。少なくともイゼルローン方面軍では完全併合案に危険信号が灯っている事に皆気づき始めているわ。念のため、宇宙艦隊司令本部や評議会には個人的に報告を入れておく。貴方も、占領地民生本部に報告を入れてもらえるかしら? 本部長のキャゼルヌ君は、貴方の数少ない友人でしょ?」

「はい。候補生時代に事務官をしていた関係で個人的な付き合いもあります。たたき台に関しても意見を貰いたいと考えていますが、宜し

いででしょうか？」

「構わないわ。そう言う意味ではシュテファンさんがスカウトした程、経営に見識のある人物が軍にいてくれたのは救いね。軍を志向する男の子たちは戦術好きが多いけど、戦勝が必ず国益につながる訳じゃない事も理解してもらいたいわね。アレク司令長官もだいたい渋い顔をしていそう」

「比較対象が730年マファイアでは現役の軍人はみな及第点を貰えないでしょう。あまり好きな言葉ではありませんが、優秀な8人の候補生が同期となり、任官直後から予算付きで同盟をデザインするような任につく。そこで磨かれ原石から宝石となった彼らは栄達を重ね、自分たちがデザインした『帝国に負けない国力をもつ同盟』のを実際のもんとした。まさに奇跡のような存在です。歴史的に見ても予算を食い潰す存在になりがちな軍組織が、当時は国力増進に貢献していたわけですから」

「あら。ヤン講師の歴史授業ね。久しぶりだわ。どうせならお茶も用意しましょうか？」

「いえ。たたき台の作成に取りかかりませんと」

イヴァンカ提督はつまらない私の歴史講義染みた話も楽しそうに聞いてくれる。それ自体は嬉しい事なのだが、ある時期から彼女に歴史の話をするのはなるべく控えるようにした。

偉人たちのエピソードには多聞に漏れず恋愛や子育てに関する物もある。自分が話したエピソード通りの対応を急にされて窮地に立たされる叔父のような存在の男性や、弟妹のような存在が実験材料にされる光景を見れば、自分が彼女を示唆したように感じて妙な罪悪感を覚えるのだ。

「それは残念ね。では」

私の敬礼に提督が答礼するのを確認してから執務室を後にする。同盟軍がフェザーンに進駐し、大量のフェザーンマルクと共にフェザーン人を帝国に送り出した事で帝国では経済危機が発生した。

その後起きた『フリードリヒ4世暗殺事件』とフェザーンが過去に行った謀略を情報部が帝国内に流布した事を切っ掛けに門閥貴族

が反乱を起こした。経済危機の余波も重なり、結局鎮圧には至っていない。内乱勃発から3年。帝国政府・門閥貴族連合、そして中立を守る辺境在地領主に分裂し小競り合いを繰り返していた。

同盟首脳部は内乱勃発時には静観する方針だったが、2つの事件をきっかけに帝国領侵攻を決断した。最初の事件は若手貴族の暴走による地球への核攻撃だ。情報部の流布した資料により、フェザーンが行った謀略の主犯は地球教である事も明らかになっていた。膠着した状況に業を煮やした若手貴族が独断で行ったと発表されたが、これによって中立派の動揺が予想された。

独自の制宙戦力をそこまで持つていない彼らからすれば、数名の貴族が暴走し、数隻の戦闘艦が静止軌道に到達すれば領地が核攻撃に曝される可能性が生まれた。帝国軍主力が門閥貴族連合とにらみ合う状況では防衛戦力の派遣は期待できない。主義主張ではなく生存権の確保の為に同盟を選ぶ可能性が生まれた。

そして皇太孫エルウィン・ヨーゼフ2世の誘拐暗殺事件だ。帝国政府が皇位の後継者とみなしていた彼はまだ乳幼児だったが皇宮で厳重な警護の下で養育されていた。奸臣に監禁されているという認識を首謀者たちは持つていたようだが、彼を奸臣の下から救い出し、門閥貴族連合の2人の盟主、ブラウンシュヴァイク公なりリッテンハイム侯の娘と婚約させる。

成功すれば確かに起死回生の一手だった。実行犯の一人、ランズベルク伯は先祖が新無憂宮の建設に関わった事もあり、宮殿内に張り巡らされた秘密通路の設計図を家伝として所持していたようだ。

それらを駆使して後宮まで侵入し、寝室まではたどり着いたものの、厳重な警備に事が露見した。進退窮まったランズベルク伯は乳幼児を道連れに自裁してしまう。

庶子とは言え皇太孫、直系唯一の男子を暗殺したともなれば完全な大逆罪だ。ランズベルク伯が門閥貴族連合に属していた事も周知の事実であり、帝国政府は門閥貴族連合に大逆罪を適用した。これによって両者は完全に仇敵同士となり、和解の道は無くなった。

当初はフェザーン方面からの侵攻が計画されたが、イゼルローン回

廊を掃宙して主攻とする案を出したのは私とアツテンボローだ。フェザーン方面からの攻勢では門閥貴族連合を帝国政府と挟撃する形になる。これでは内乱鎮圧に貢献するようなものだ。

ならば、帝国政府から切り捨てられた状況に置かれた辺境星域を押しさえ、帝国側に勢力圏を築く。長年開発予算がつかず放置されてきたエリアに多少でも援助し、生活が向上すれば新亡命派同様、同盟への同化政策の進めやすいのではと考えた。

その上申は帝国領侵攻作戦の総指揮を執るビュコック司令長官に採用され、私はイゼルローン方面軍の同化政策の主幹に任命され、同時に昇進して大佐になった。

方面軍総司令のイヴァンカ提督の旗艦に個室を持ち、進駐したこの基地でも分室を構えている。イゼルローン方面を主攻とする作戦案を上申した事は、私にとっては第3の人生の岐路だったかもしれない。

「大佐、おかえりなさい」

「少尉、なにか報告はあるかい？」

分室に到着すると補佐官のグリーンヒル少尉が声をかけてくる。彼女との関係も不思議なものだった。出合いは予想外の帝国軍の接近に揺れるウルヴァシー。防衛戦で手一杯の星系警備本部で新任だった私は住民の避難計画を担当した。

騒然とする市民たちをなだめ、なんとか避難計画の見通しが立った時にサンドイッチを差し入れてくれた少女が彼女だ。激務が続いていた事もあり、差し入れてくれたサンドイッチを私は喉に詰まらせかけた。その際に慌ててコーヒーを差し出してくれたのだが、

『どうせならコーヒーじゃなくて紅茶が良かった』

などと失礼なことを私は言ったようだ。この際はお互い名乗らなかったが、士官学校に娘が合格したとビュコック提督のブートキャンプ修了者というつながりでマフィアの会合に参加していた当時のグリーンヒル少将から紹介された際に正式に知己を得た。

『親ばかかもしれないが、私から見ても娘は優秀だ。どうだろうか？大佐の下で鍛えてもらえないだろうか？』



お世話になったシトレー校長率いる第7艦隊の参謀長になっていたグリーンヒル中將から直々に頼まれては断れない。それに彼女は優秀で、細かい事が漏れがちな私を、何かとフォローしてくれている。「はい。エリーゼさんの事務所から将官への昇進話が無いかとまた確認が……」

「大佐でも出来過ぎなんだ。将官になる予定はしばらくないんだけどなあ」

「あの方も言い出したら聞かないようで秘書の方もお困りの様でした。爵位持ちの方々と折衝するなら旗艦にもそれにふさわしい内装が必要だとデザイナーに戦艦クラスに納まるダンスホールのプランを検討させているとか……」

「ダンスホール付きの戦艦なんて、それこそ私には似合わないよ」

「なんとなくですが、エリーゼさんの気持ちが判りますわ。大佐はちゃんとされれば見栄えも宜しいのにどこか無頓着ですから。またスカーフが……」

そう言いながら私の胸元に手を伸ばし、スカーフを整えてくれる。任官直後からやけに距離感が近くて対応に困るのだが、厚意を拒否するのも違う気がしてされるがままにしている。

ユリアンには及ばないが美味しい紅茶を淹れてくれるし、何かと業務が重なって食堂に行くのも億劫な状況ではサンドイッチを差し入れてくれる。平地に乱を起こして異動願いを出されると困るのはむしろ私だ。

スカーフを整えてもらい、自分のデスクに腰を下ろす。PCを起動しながらタブレットのスイッチも入れて各社の報道をチェックする。

バーラト系・亡命系・新亡命系の新聞社の内、比較的保守的な論調の数社と経済誌を確認するのは、父さんからの教えでもあった。各派の心情がある程度把握できるし、経済誌は損益を軸に紙面が動く。広告枠の大口顧客でもある為か、フェザーン派に甘いのがバーラト系、亡命派は中立寄りで、新亡命派は厳しい論調になる。

「大佐、紅茶を淹れて参りました」

「少尉、ありがとう。それにしてもフェザーン派は大きな決断をした

ようだね」

「各紙一面で取り上げていましたわ。論調に温度差はありましたが基本的に肯定的でした。提督からは何かお話は？」

「いや。何もなかったよ。もしこれが最高評議会主導ならドナルド議長から事前に相談位はされていると思うんだが」

「私は父や大佐を始め、マフィアの方々との付き合いがありますからフェザン派への分析はどうしても辛口になってしまいます。それを差し引いてもいつも張り付けたような微笑をしているトリユーニヒト幹事長の口元が引き攣っているような気は致しました」

少尉にそう言われてからもう一度紙面に目を向ける。確かにトリユーニヒト幹事長の口元が引き攣っているような気がした。

「では、何かあればお声がけください」

「ああ。少尉、いつもありがとうございます」

笑顔で自席に戻る少尉にお礼を伝えてから視線を戻す。一面を飾る話題は『フェザン派のカプチェランカへの入植』だ。同盟軍がフェザンへの進駐を完了して以来、現地を一番理解しているという名目を掲げ、各所に自分たちが管理すべきだとフェザン派が陳情を開始した。これに真っ先に非を唱えたのが新亡命派だった。

『果たすべき義務を逃れて権利ばかり主張するのは、民主共和制を担う市民の有り様として正しい姿とは言えない』

フェザン進駐の際に地上戦の最前線で奮戦した薔薇の騎士大隊を始め、軍への志願者も多い新亡命派は帰化政策の優等生だ。一方で持ち込んだ資産を元手に、利権確保を優先してきたフェザン派は、バーラト系からも亡命派からも発展を続ける同盟に寄生する宿り木のように思われていた。

新亡命派の貢献と対比され、再び排斥運動が動きだす。政府としても新たに帝国臣民への同化政策を進める前に、身勝手なフェザン派にお灸をすえる意味で、これと言った対策は取らなかつた。

「カプチェランカか。トーマス爺さんも自分の戦死した戦場にフェザン派が入植する未来が来るとは思わなかつただろうな」

そんな事を呟きながら少尉の入れてくれた紅茶の香りを楽しむ。

任官先が私の部下だと内示で知った少尉が、ミンツ少佐に個人的に紅茶の淹れ方のレッスンを受けていた事は、私が彼女を階級ではなく名前前で呼ぶ関係になってから知る事になる。

『お前さんには伝えておいた方が良いだろう。カプチエランカ入植は最高評議会からの圧力で憂国党に飲ませた。機密指定を付けたから詳細を知りたければ中将に昇進する事だ。一部の派閥を追放するかどうかのようなやり方は民主共和制の理念に反するのは事実だ。』

だが、その理念を利用して世論操作や不当な利益を貪る連中を無視する訳にもいかなかった。先祖の罪が子孫に及ぶのは正しい事ではない。とは言えフェザーンは同盟と帝国の間で利益を貪り過ぎた。このような形とは言え禊ぎを済ませておかないと、機密指定が解かれる50年後にとんでもない事になるだろうと判断した』

アムリツツア星系を中心に辺境星系の同化政策がスムーズに動き出したことを受けて、私は准将に昇進した。それと同時に一時帰国し、久しぶりに顔を出したマフィアの会合で、ドナルド最高評議会議長に肩を組みながらそう伝えられたのは、この日から一年後の事だった。フェザーンが行った謀略の詳細に触れられる立場になるには、更に一年の期間を必要とした。

## 第110話 和平

宇宙暦802年 帝国暦488年 9月末

惑星オーデイン マリーンドルフ伯爵邸

ラインハルト・フォン・マリーンドルフ

「婿殿も何かと気苦労が多かつただろう？ご苦労だったね」

「そのような事は……。義父上こそこの数年は何かと決断を迫られる事が多い日々だったと存じます。まだ予断を許さない政局は続くでしょう。ご自愛ください」

「そうだね。『カストロプの乱』からもう10年か……。あの乱から帝国は激動の日々だった。判断を違えていけばマリーンドルフ伯爵家も滅んでいたかもしれない。」

私は婿殿や娘のような才覚は無いと自覚していた。君たちやヴェストパーレ男爵夫人の協力が無ければとても乗り切れなかつただろう。区切りも良いし私は引退するつもりだ。これからは新しい時代が始まる。領地の事は私に任せて、二人で新たな時代に羽ばたいてくれれば何よりだ」

「國務尚書にと言うお話はやはりご辞退されるのですね。義父上の誠実なお人柄こそ、今の帝国には必要な物だとも思いますが」

「だからこそだよ。グリューネワルト伯ご夫婦と共に、君たちは全権大使の顧問としてフェザーンに赴任する。人類が外交という分野の知見を失って久しい。」

貴族社会の社交界のような感覚の者もいるようだが、あれは価値観が同じという前提が存在した。自由惑星同盟と帝国の価値観は当然異なる。だからこそ領地を彼らの価値観から見ても非のない物にしなれば、外交の場でマイナスに働くはずだ」

「そこまでお考えなら私から申し上げる事はございません。ただ、私から妻に伝えるには些か難しい気も致します。一度時間を取って頂ければと」

「そうだね。一度きちんと私からも話しておこう」

義父上の執務室を辞し、自分の執務室に向かう。男爵夫人の打診を

受けて姉上と共にヴェストパーレ領に赴いてから11年近い。思い返せば何かと事が多かったように思う。

マリーンドルフ伯爵家の一人娘であり、現在は妻でもあるヒルデガルドと出会ったのは、ヴェストパーレ領に移動してすぐの事だった。同年代とは思えぬ政局分析には驚かされた。

距離が近くなったのは接するマリーンドルフ領にカストロプ公の私兵が攻め寄せ、援軍として遅滞戦を指揮した時だろうか？それ以来、頻繁にお茶を一緒に飲むようになり、彼女は政略を、私は軍略をそれぞれ教え合う妙な関係になった。

『ミューゼル卿、ヒルダとの結婚を考えてもらえないだろうか？こうなつては門閥貴族連合に参加する事は出来ないが、政府系と近くなり過ぎるのも危険だ。あれは貴族令嬢としては変わり者だが優しい子だ。卿の軍才であの子を守つてやつて欲しい』

マリーンドルフ伯直々にそう言われては断れる話ではなかった。一般的に恋愛小説とやらで語られる様な関係ではなかったが、年頃の嫡子を娶わせる候補が他にいないのも確かだ。

『社交界では変り者とよく陰口を叩かれました。ミューゼル卿となら遠慮なく好みの話題を話せます、不束者ですがよろしくお願いします』

それからはお茶の時間だけでなく、ベッドの中でも政策談義をする日々が始まった。カストロプの乱への褒賞と言う名目でカストロプ領もマリーンドルフ伯爵家が治める事となったが、もともと重税を課され荒廃していた中、更に戦災に見舞われたカストロプ星系の統治は困難を極めた。新領地の視察を終えたマリーンドルフ伯の深刻な表情は今でも記憶に残っている。

『ミューゼル卿、気持ちは嬉しいが周囲の目も気にするようにな。政府系の目がどこにあるか分からんのでな』

『これでは褒賞ではなく罰ではないか！』そう言い放ってしまった俺をマリーンドルフ伯はそう窘めた。もっともカストロプ領の統治への協力を名目に内務省で燻っていた下級官吏の何人かを引き抜き、これが開明派との誼になるのだから世の中何がどうつながるか分から

ない。

『カストロプの乱』の戦勝を祝う名目でブラウンシュヴァイク公が主催した戦勝記念パーティーである男は暗殺された。名誉挽回の為に実行犯であるクロプシュトック公の討伐を公は願ったが、政府はこれを拒否。任命されたばかりのメルカッツ司令長官に箔を付ける意図だったのだろうが、危険を感じたブラウンシュヴァイク公は門閥貴族連合を結成し蜂起した。

アルテナ星系のガイエスブルク要塞に集結した門閥貴族連合の戦力は5個艦隊にも膨れ上がり、同盟領侵攻で7個艦隊を失っていた宇宙艦隊にとつて簡単に討伐できる勢力ではなかった。

帝都とアルテナ星系の間で小競り合いをしながら睨み合う両勢力を横目に、辺境星系を中心とした在地領主は中立を保った。マリンドルフ・ヴェストパーレ両家連合もやや政府寄りの中立を維持した。

帝都をアルテナ星系と挟む形になる両家連合には門閥貴族連合からも裏からアプローチがあった。だが、『大逆罪』『惑星への核攻撃』という大きな汚点が、中立派に門閥貴族連合へ加担する事に二の足を踏ませた。そうこうしている内に同盟が電撃的にイゼルローン回廊を掃宙・突破し、アムリッツア星系を中心に進駐を開始した。

フェザーン方面から同盟が進撃していれば、門閥貴族連合の勢力圏を盾にする事も出来たが、シャンタウ星域を抑えられた時点で帝国の国防体制は崩壊してしまう。帝都へ直行する進路と、後背地を迂回する進路の両面で戦線を維持する戦力は、現在の帝国には無かった。

お目付け役に配属されたケスラー大佐の伝手で早期に同盟に降伏したクラインゲルト子爵と連絡を取り、和平交渉の取っ掛かりを作るように命じられたのは元寵姫の弟の俺だった。

もともと難しい交渉が予想されていた。交渉が不首尾に終われば責任追及。仮に交渉が成立しても条件が厳しい物なら槍玉に挙げるつもりだったのだろう。だが、辺境星域の中立派が同盟に組した事で、中立派に向けられる視線は厳しくなっていた。両家連合の立場を守る意味でも、矢面に立つ必要があった。

『立憲君主制への移行と領土の割譲』この2点は本国も譲れないで

しよう。ただ、私個人としては150年も続いた戦争をいい加減やめる時期だとも考えています。最大限協力する事をお約束します』

帝国辺境星域の同化政策の主幹、ヤン中将が同盟側の窓口だった。第一印象は軍人と言うには細く、学者のような印象だったがその外見に反して堅い意思をもった男だった。

懸念点については、過去の歴史を踏まえながら率直にぶつけられた。その対案をヒルダだけでなくつなりのあつた開明派と煮詰め、憲法の草案と領地割譲案を何とか取りまとめた。

「ラインハルト様、おかえりさないませ」

「キルヒアイス、もうその呼び方はよせ。俺もお前も名目上は将来の伯爵様なのだからな」

「そうなると私の事をグリューネワルトと呼ぶことになります  
が……」

「なら二人だけの時は今まで通りという事にするか」

そう応じながらお互いに苦笑する。和平交渉と並行する形でヴェストバーレ男爵夫人から姉上の処遇についても提案があつた。

『アンネローゼは今後すつと独身を通すのかしら？門閥貴族連合は瓦解するにしても政府系の貴族も生き残りに必死よ？皇帝の元寵姫で資産もそれなりに持っている。そこに弟が同盟との交渉窓口となつたらおこぼれに預かろうと良からぬ連中が近づいてきそうね。貴方が信頼出来て、アンネローゼをしっかりと守ってくれる殿方はいないのかしら？』

そんな言葉から始まった候補者選びだが、キルヒアイス以外の候補者は存在しなかった。

『アンネローゼ様、あの時はまだ幼く、貴女を守る力がありませんでした。ですが今は違います。どうかジークに貴女の事を守らせていただけないでしょうか？』

話を受けて当初は困惑していた姉上も、キルヒアイスの真つ直ぐな言葉を受けて婚約を了承した。プロポーズの場において少し複雑な想いはあつたが、俺もヒルダにマリィンドルフ家と守らなければならぬ者が増えた。姉上の事はキルヒアイスが守ってくれる。そしてこ

れからも一緒に任務に当たる。それで十分だろう。

「キルヒアイス、和平条約はまとまったとは言え、門閥貴族連合との内戦処理、領土割譲の実行など、やるべきことは目白押しだ。これからも頼む」

「はい。ラインハルト様もご自愛を。ヤン中將は信頼に値する人物とは言え、同盟全体がそうとは限らないのですから」

「いつまでも年長者ぶるな。2ヶ月早く生まれただけなのだからな」

これまで何度も交わしたやり取りをしてまたお互い苦笑する。これからも似たようなやり取りをしてお互いに苦笑する事になるのだろう。

「後任の財務尚書に内定したとオイゲン・リヒター氏から連絡がありました。それと和平成立に尽力したラインハルト様を冷遇する形になってしまい、申し訳ないとも……」

「冷遇なものか。経済危機の余波も未だに残っている。戦後処理も含めれば和平を取りまとめた我々は政府中枢から距離を置いた方がよい。彼もそう言っていたしな」

「人は見たいと思うものしか見ないでしたか。確かにそうですね」

イゼルローン方面からの同盟軍の侵攻が明らかになった時、帝国政府は門閥貴族連合と和解し国難にあたる選択肢も当然存在した。『大逆罪』がそれを阻んだが、臣民たちの中には敗戦要因を貴族たちが引き起こした内乱だと考える風潮が強い。

内乱さえなければ敗戦などしなかった。そして領土割譲を含めた和平条約を取りまとめた元寵姫の弟を売国奴と呼ぶ輩も確かに存在した。これで政府中枢に席を求めれば、よからぬ結果になるのは目に見えている。

「計画破棄されたイゼルローン要塞が建設されていれば……。いや、もしの話はやめておくか。もう済んだ話だ」

門閥貴族連合に関してはアルテナ星系に集結した主力部隊は帝国軍が牽制し続ける一方で、同盟軍がその他の勢力圏の鎮圧を担当する事になった。鎮圧された勢力圏はそのまま割譲される予定だ。身柄の引き渡しにも同意が取れている。



『どんな政局であれ、内政干渉の前例を作るべきではないと私は考えています。それにお互いの価値観の尊重する前例を作る意味でも、身柄の引き渡しは必要な事でしょう。幸か不幸か、同盟内でも自国の要人が暗殺された事が記憶に新しい。本国に話を通しましょう。但し遡及法の適用だけは避けて頂きたい』

主力はアルテナ星系にいるとは言え、領地に残っている高位貴族の存在も確認されていた。懸念されたのは彼らの身柄を同盟が確保し、戦後の帝国への謀略に利用する事だった。その懸念を伝えた所、あっさりと身柄の引き渡しに同意した上で彼はそう応じた。

『遡及法ですか……。確かに帝国ではそのような前例がありますな。憲法草案にも組み込むように手配しましょう』

念のため主旨を確認しようかと相談した大審院判事のブルツクドルフはそう応じた。帝位継承争いの際や、有力な外戚の排除に遡及法を適用した過去が帝国にはあるらしい。

特定の個人を追い込むために法律を制定し、それを過去に遡って適用する。確かに忌むべき行為だ。敗戦は確かに痛い。だが、これを切っ掛けに帝国は良い方向へ進み出すようにも感じる。

『アンネローゼとヒルダがフェザンに行くのなら私も参りますわ。同盟の価値観や文化、それに芸術にも触れてみたいもの。国家間の交流の場では帝国で生まれた芸術が必ず活きるわ。これからも宜しくね』

皇室予算の削減から解隊が決まった帝国楽士団をまるごと引き抜いた男爵夫人は嬉し気にそう宣言された。俺達はアルテナ星系の封鎖に協力してくれる同盟艦隊の司令部に参事官として同行する予定だが、姉上やヒルダは辺境星系経由で一足先にフェザンへ向かう。

何かと飛び回る事になる以上、俺達は留守になる事も多い。二人の傍に男爵夫人がいてくれるなら何かと安心だ。任務を終えてフェザンに到着した際、同盟版男爵夫人のような烈女が割り当てられた大使館に出入りしている事を知るのは、もう少し先の事になる。

## 第111話 それから（最終話）

宇宙暦804年 帝国暦490年 10月末

惑星フェザン 編入政策局 局長室

ラインハルト・フォン・マリンドルフ

『第二次ティアマト会戦』の難易度設定の監修はヤン局長がされたと聞いたが？あの難易度は些か無理があるのではないかな？」

「はあ。閣下がおっしゃっておられるのはナイトメアモードの話でしよう？あれはプロ向けの難易度ですからクリアできなくてもお気にさらずとも」

「気にせずにはいられない理由があるのだ。大使館顧問のヴェストパーレ男爵夫人とエリーゼ殿が親しいのは貴官も知っているだろう？前回の会食で『軍人なのにナイトメアモードがクリア出来ないなんて』と嫌味を言われたのだ。このままでは年末の会食の場でまた嫌味を言われる事になる」

「エリーゼさんはシニアクラスで唯一のマスタークラスですから比較する方が……。それに所有しているプロチームの現役選手から細かくレクチャーを受けてもいますし」

「そう言う問題ではない。これは矜持の問題だ」

領土割譲に伴う希望者の帝国領への移動、立ち上がる編入領の統治。それを確認するような任についてからまもなく2年が経とうとしている。大使館の駐在武官長の任にありながら飛び回る日々だった我々の留守に、淑女の皮を被った悪魔が出入りしていた事を知った時はもう手遅れだった。

同盟に編入された旧帝国領内で『才能の発掘』を理由に多額の育英資金を提供してくれたエリーゼ・ターナー殿は、名目上の大使である姉上や政治顧問のヒルダをいつの間にか自分の信奉者にしてしまった。

芸術にも造詣が深く、フライングボールのプロチームまで所有している彼女と最初に意気投合したのがヴェストパーレ男爵夫人だったのも悪かった。

フェザーンの帝国大使館は女の園と言えれば聞こえは良いが、お茶の時間に重要政策が決定され、どこからともなく予算が付く異常な状況であった。成果が出ているから苦言を言う事も出来ない有様だ。

「攻略動画は参考にされましたか？丁寧な解説ならラップの物がお勧めです」

「攻略動画を見てクリアするのは貴国では邪道なのだろうか？それに動画を見たと知られたらエリーゼ殿にまた何を言われるか……」

フェザーンに赴任して様々な同盟文化に触れたが、俺とキルヒアイスの関心を引いたのは『今日から提督』シリーズだ。家庭用のPCでも参加できるが、どこから聞きつけたのか、我々が関心を持っている事を知ったエリーゼ殿は特注の対戦設備を大使館に寄贈してくれた。

もちろんそれだけで済むはずがない。言葉巧みに対戦する様に誘導され、姉上とヒルダが見ている前でスタボロにされた。

「そもそも旧式戦艦で編成されたコーゼル艦隊のあの岩のような堅さは異常だろうか？シユタイエルマルク艦隊はどう包囲しようにもすり抜けるし、艦列を維持するポイントを的確に突いてくる。他の艦隊も攻守ともにレベルが高い。あんな設定を士官学校のシミュレーターに導入すれば、勝てる候補生などいないだろう」

「コーゼル提督もシユタイエルマルク提督も同盟では人気ですからね」

「ユリアン、ナイトメアモードの『第二次ティアマト会戦』のシナリオのクリア人数は把握しているかい？」

「私の時は93番目でした。昨日の時点で138名でしたけど、もう一度やりたいとは思わないですね。ヤン提督、あのシナリオだけ、新しい試みとして疑似AIを入れてますよね？初期の攻略動画じゃ、もう参考にならないと思いますけど……」

局長の副官であるミンツ中尉が紅茶を用意しながら会話に参加した。前任は局長と結婚した事を機に退役したが、いつの間にか帝国大使館の女の園の名誉会員になっている。

「疑似AIとはどういう事なのかな？ミンツ中尉」

『『今日提』の競技人口はアマチュアを含めれば80億人近いんです

が、その対戦結果を全部収集しているんですよ。それを疑似AIに分析させて、戦況に応じて最善手を取れるように日々アップデートしているんです。ヤン局長がラップ大佐の動画を薦めたのもそれがあるからです。初期攻略で有名なワイドボーン准将の動画はもう参考になりませんかね」

「では、時間が経つほど難易度が上がる訳か……」

「そうです。その分、クリアナンバーが後ろの方が実力者と見なされますから不公平ではないですよ？」

「そうだね。親離れした子供のように、監修した私でも最新版を確実にクリアできるかは分からないからなあ」

「それは良い事を聞いた。つまりエリーゼ殿よりナンバーが後ろならば彼女に誇れると言う事だな？ならばまごまごしている訳にもいかぬ。中尉の紅茶は美味ではあるが、安易に飲み干すことを了承してもらいたい」

ミンツ中尉の紅茶はあのエリーゼ殿やヴェストバーレ男爵夫人も称賛する程の味だ。紅茶の良い香りに後ろ髪をひかれながらティーカップを傾け、局長室を辞する。ミンツ中尉と同じく局員のシエーンコップ軍曹が見送りに付き沿ってくれた。

「閣下、また『今日提』の話ですか？帝国大使館は女性ばかりが功績を上げているなんて声も漏れ聞こえています。他の事に注力された方が良いのでは？」

「シエーンコップ軍曹、貴官のフィアンセが『今日提』の名手だからそのような事が言えるのだ。持つものが持たざる者の心境を理解できるはずもない。助言には感謝するが、これ以上の提言は控えてもらいたい」

「もう……」

シエーンコップ軍曹の父親はフェザーンに駐屯している亡命子弟で編成された薔薇の騎士師団の大隊長だ。勇猛さで知られた部隊だが、幼年学校で無敗だったキルヒアイスが訓練に参加し、左腕を折られながらも師団長のリユースブルク少将から一本取った事がきっかけで交流が始まり、何かと機会があれば会食する仲だ。

大使館が女の園となり居場所が失われつつある事が、結果として同盟内部に人脈を作る切っ掛けになった。シエーンコップ家にもお邪魔した事があるし、軍曹が気安く声をかけてくるのもそれがあるからだ。だが、ヤン夫人が大使館に出入りしており、夫人と親しい彼女も当然その影響を受けている。

『戦闘なら実力行使が出来ますが、家庭ではそうもいきませんからな。娘には小官も何かと注文を付けられてげんなりしていますよ。閣下との会食なら公務とも取れますからな。帰宅が遅くなる口実としては最適です。これからも良しなに』

どんな陸戦の名手でも娘には甘いのか？それとも軍曹が口達者なのかは判断に困る。だが、少なくともエリーゼ殿の影響を受けているのは確かだ。婚約者を敵視するのはミンツ中尉に申し訳ないが、軍曹の助言は素直に聞く訳にはいかない。

それから『第二次ティアマト会戦』の攻略を進めた俺は、200番目にクリアする事に成功した。それに続く者が出なかった為に『今日提』の名手の一人として認知されることになる。

数年後から毎年開催される『銀河杯』の第一回大会に同じく帝国内で名手とされたロイエンタール准将とミッターマイヤー大佐とチームを組んで参加するのだが、それはまた別の話だ。

宇宙暦804年 帝国暦490年 11月末

惑星フェザン 編入政策局

ユリアン・ミンツ（中尉）

『ターナー元帥かい？そうだなあ。私にとっては軍人と言うより財務委員長としての印象が強いね。血縁関係はないんだが、私の父にとっては父親と兄の間のような存在だった。私にとっては祖父のような存在だったかな。』

存在感がとにかくすごかった。どちらかと言うと前に出るタイプじゃなかった私は、気後れしてしまったね。私にはまぶしすぎる人だったかな』

幼い頃に官舎が隣だった事もあり、交友が始まったヤン提督。父の

教育方針で身に着けさせられた紅茶の試飲役をする傍ら、歴史上の人物の話をよくしてくれた事は今でもよく覚えている。年齢差は14歳。多産を奨励している同盟では、家庭によっては14歳差の兄弟も存在するけどさすがに一般的じゃない。

父と言うには歳が近く、兄と言うには歳が離れている。そんな関係の実例が、ターナー元帥とヤン提督の父親のタイロンさんの関係だ。年齢差は14歳。タイロンさん自身も証券業界で成功し、ミリタリーマニアとしても有名で、語られたエピソードは多い。歴史の授業を聞きなれていた私は自然と『730年マファイア』にも関心を持った。

『お隣に入居したヤン少佐はウルヴァシーの英雄だが、それ以上にターナー元帥のお孫さんの様な方だ。父さんは元帥には大恩がある。お独りでは何かと苦勞もあるだろう。気づいたらお助けするようにな』

ヤン提督が隣に入居した事を知った父さんから真つ先にそう言われた事も記憶に残っている。当時はよくわからなかったが、成長するにつれてその言葉の意味が理解できた。父方のミンツ家は国父アーレ・ハイネセンの偉業、長征一万光年に参加した家柄だった。それを代々誇りとし子弟にもそう教育していた。

父さんもそう薫陶を受け、士官学校に入学した。ただ、任官直後にその家訓に反発する様に帝国からの亡命者だった母さんと結婚した。それに反対した父方の家族とは絶縁状態だ。

父さんと同じように帝国からの亡命者と結婚したターナー元帥は、長年勤めた財務委員長時代に同盟の高度成長期を実現させた。その恩恵は亡命者も当然預かり、経済的に豊かになった事で、陰では存在していた差別もだいぶ薄れたと聞く。父さんはその事を言っていたのだと思う。

もつとも、ミンツ家で厳しい薫陶を受けた父さんも、亡命者としての誇りを持つように教育された母さんも親としては厳しめだった。独り身で干渉もしてこず、多少の家事と紅茶を振舞うだけで様々な食材を分けてくれ、優しく色々な話をしてくれるヤン提督は、私にとつて避難所のような存在でもあった。

『730年マフィアか。今の同盟には余裕があるからね。あんな奇跡のような集団が再び現れる事はないんじゃないかな？それは悪い事ではないんだが……。どうせなら自分で調べてみたらどうだい？』

彼らが生まれた時代、同盟は多大な犠牲を払いながらも帝国の侵攻を跳ね返し戦力の回復に勤める傍ら、帝国に抗する事の出来る勢力の存在を知った亡命希望者の流入で様々な価値観がぶつかり合い、政情も決して安定してはいなかった。

そんな状況で当時は今以上に顕著に存在していた出身派閥を網羅する集団が、強い団結心の下で戦果を上げ続け、8人全員が元帥号を得る。小説の登場人物だとしても出来過ぎだ。

そして英雄としての業績だけじゃなく、人間味あふれるエピソードも多数遺してくれた。多くの同盟市民は『730年マフィア』を知る中で誰かを推すようになり、あれやこれやと議論するのもよくある光景だった。

「ユリアン？今夜はダイナーの約束があるんだから残業はやめてよね？少し出てくるわ」

「ああ。行ってらっしゃいカリン」

思考に意識を向けていた私に、婚約者で同僚のカリンが声をかけて来た。それに応じると納得したのか彼女はオフィスを出て行く。カリンとの縁もヤン提督と母親が亡命者だった事がつないだと言えるだろう。

彼女の父親のシェーンコップ大佐は亡命者だ。付き合い始める前に『訓練』と言う名目の手荒い儀式を受けさせられたけど、交際を許可してもらえたのは半分は亡命系であったことも大きいと思ってる。

「グレース・リースかあ……。…」

730年マフィアの事を調べていくと最後に行きつくのがこの名前だ。ターナー元帥暗殺の実行犯で、暗殺された可能性があるとされたウォーリック元帥とファン元帥の事件にも関与したとされる人物。

経歴上はフェザーンで生まれ、名門看護学校を卒業した時期に父親のビジネスが失敗し、母親と亡命した事になっている。だが、これは

フエザーンが用意した架空の経歴だろうと言うのが通説になっている。

詳細な調査は残念ながら行われなかった。と言うのも、地球教とフエザーンが共謀して行った謀略活動を同盟が意図的に帝国内に流布した結果、門閥貴族連合の若手が暴走し、地球に熱核兵器攻撃を實施したからだ。

地表は放射能が渦を巻き、重装備の防護服なしでは活動もままならない環境にあり、政府は人命尊重を理由に捜査を打ち切った。

『毎日昼食前の15分、彼女は涙を流していた』

彼女の資料で目を引くのは、苛烈な取り調べを受けて精神破綻し、精神病院に隔離されてからのこの記載だ。時刻に直すとおそらく11:45〜12:00の間。この時間はターナー元帥の暗殺時刻とも重なる。

精神破綻したはずの彼女はなせ涙を流していたんだろうか。そして730年マフィアの最後の一人、ローザス元帥の死を待つかのように、彼が急死した年の年末に息を引き取った。

「ユリアン、まだ終わらないの?」

「いや。丁度区切りが良い所だよ」

戻って来たカリンの声で思考から意識を戻した。シエーンコップ大佐の言じやないがカリンは可憐な見た目に反してかなりせっかちだ。待たせるのはまずい。

「それで今日はどこに行くんだい?」

「帝国亭よ。男爵夫人監修の新メニューがスタートするの。ちゃんと感想を言えるように吟味しないとね。ユリアンも協力してよね」

カリンがコートを羽織るのをエスコートしながらそんなやり取りをする。もともと帝国風が好みだったが、帝国大使館に出入りする様になつてからそれが更に強くなった気がする。

それに新メニューと同等以上に定番が好物な彼女とのディナーでは、私が定番を頼んで二人でシェアするのが慣例になりつつあった。庁舎を出ると11月と言う事もありコートを着ていても寒い。自然と手を繋いで帝国亭へ向かう。つないだ手から伝わるぬくもりが、不



思議と心地よかった。

宇宙暦788年 帝国暦479年 12月末

惑星ハイネセン 軍病院精神棟

グレース・リース

一体どれだけの期間、ここにいるのだろうか。それすらも知覚できない程、私はあの取り調べで壊されてしまった。幼少の頃から教団の孤児院で暗殺も含めた作業員となるべく育てられた私にとって、あの程度の事で情報を漏らす事などあり得なかった。

時の流れも良く分からないが、一日がまた経過した事だけはわかる。もうすぐあの時間がやってくるから。そしてあの時、作業員として磨き上げられた私の心を傷モノにされていたのだと思う。

『君には家庭を持って次世代を育んでもらいたかった。君の子なら優秀だろうし、なにより良き母に成れただろうに』

護衛官が病室から離れた。その隙について病室に入り込み暗殺するだけのタイミングでターゲットだったオレンジ色の髪をした老人はそう応じた。20歳で同盟に潜入して以来、ただ暗殺の事だけを考えて生きて来た。

でもそれに疑問を感じなかったわけじゃない。生活の中で接点のある市民たちは同盟の経済成長のお陰もあり、戦中でありながら人生を謳歌していた。

「耳を傾けてはダメ。彼はターゲットなんだから」

そんな事を呟いたかもしれない。無言でベッドに近づくが彼は微笑したまま表情を変えなかった。

『もうやるべきことは終えた。俺を暗殺しても戦況は変わらない。そんな事の為に君の人生を費やすとはな……』

あの表情は哀れみも含んでいたのだろうか？撃たれたわけでもないのに胸がズキリと痛んだ覚えがある。右ポケットに手を伸ばして忍ばせていた心臓発作誘発剤を打ち込めばそれで終わり。あの時は分からなかったが、私は動揺していたのだと思う。

右ひざに一瞬冷たさを感じた後、熱さと共に痛みが走る。反射的に

右手に持っていた注射器をターゲットに突き刺した。右膝に視線を向けるとターゲットが左手にしていた大きな指輪が押し付けられている。アクセサリーに偽装したブラスター……。単身とは言え相手も備えていた。また油断した。

『すまないが自決はさせないぞ』

これで終わった！と思った瞬間、こんなつぶやきと共に右顎に衝撃が走る。ターゲットが左手で掴んだナビガードルで顔面を殴打してきたことに今更ながら気づく。どうする？これじゃ奥歯に仕込んだ自決用のカプセルを使えない。

『ただの凶器の君には悪いが逃がすわけにもいかん』

発作が始まったこともあり苦し気ながらもターゲットはそうつぶやき私の右腕を跳ね上げながら襟を左手で掴んで巻き込んだ。こうなったら逃げられない。本来なら噛みつくべきだが顎を砕かれてはどうしようもない。

左手を使ってなんとか振りほどこうともがく。そうこうしている内にターゲットから力が抜けていくのが伝わってくるが、強く握りしめられた襟を振りほどくことができない。こうして私は駆け付けた護衛官たちに確保される。

右膝に熱さを感じた辺りから目元からも熱さを感じ始める。おそらく泣いているんだろうと自覚できたのはこのループを何度繰り返した頃だろうか？

「貴方は重要人物で、生涯をかけて暗殺する価値があった。私の人生を否定しないで！」

何度そう懇願しても彼は微笑みを浮かべた表情で温かく同じことを繰り返して述べてくる。泣きわめいても、怒鳴り散らしてもそれは変わらない。孤児だった私には両親が存在しなかった。でも彼が私に向けてくる温かな視線は父親そのものだ。

「うそよ！人生をかけて父親のような愛情を向けてくれる人を殺したなんて私は認めない！」

懇願は一昨日したし、昨日は泣きわめいた。今日は怒鳴り散らしてみたが、それでも彼は変わらず温かい視線と温かい言葉をかけてくる。

そうこうしている内に時間が過ぎたようだ。人の気配が近づいてくる。もうすぐ昼食の時間。なんとか今日も乗り越えた。

でも明日が来るのが怖い。こんな日々から早く抜け出したい。ある日、彼は何も言わずに私の頭を撫でてくれた。その日を境に地獄のループが終わった。